－茨城県土浦市－

土浦市今泉霊園拡張工事事業
地内埋蔵文化財調査報告書

根鹿北遺跡
栗山窯跡

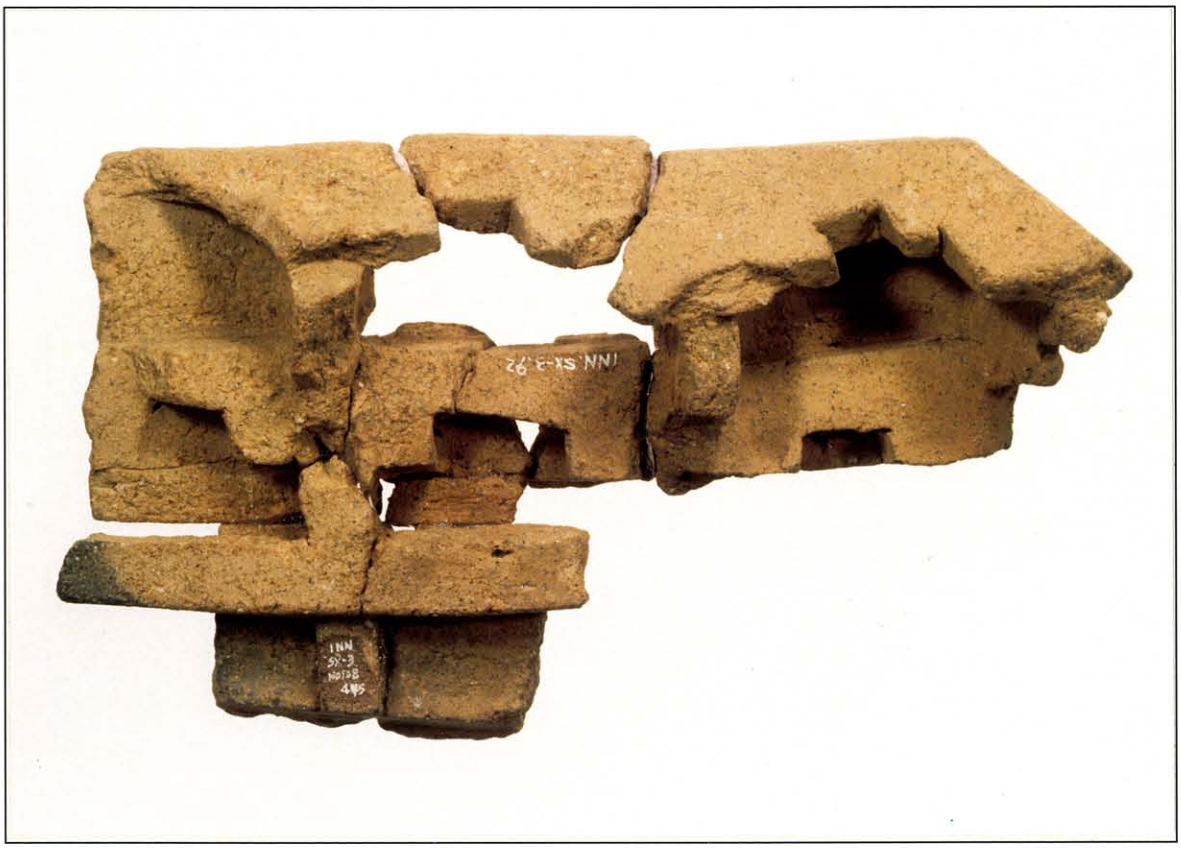
平成9年(1997)3月

土浦市
土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会

根鹿北遺跡・栗山窯跡　正誤表

・例言　4.
（誤）･･･木橋弘美･･･　　（正）･･･本橋弘美･･･
・例言　6.
（誤）･･･萩谷　悟･･･　　（正）･･･萩野谷　悟･･･
・例言　9. 調査組織　栗山窯跡
（誤）中澤達也　〃　主事　　（正）中澤達也　教育委員会文化課主事
・例言　調査作業員
（誤）（栗原窯跡）　　（正）（栗山窯跡）
・P4　第2図について別添の「周辺の遺跡位置図」に貼り替える。
・P5　30行目
（誤）･･･当初の東城寺寺院跡（No.21）･･･　（正）･･･当初の東城寺寺院跡（No.24）
・P5　32行目
（誤）･･･甲山城跡が知られている。　（正）･･･甲山城跡（No.14）が知られている。
・P146　第120図No.5の底面朱書図なし
P100　第83図粘土採掘坑No.5須恵器実測図底面を参照
・P144　第119図覆土セクション中の記号
（誤）P　　（正）S
・P226　第21図中の資料3の縦軸凡例
個数／2×2㎝
・P167遺物観察表中のNo.61の時期
（誤）前期後半　　（正）早期　田戸下層式

根鹿北遺跡航空写真



瓦　塔

栗山窯跡遺物出土状況

栗山窯跡出土遺物（蓋）

序

土浦市は霞ヶ浦や桜川の水に恵まれ、太古から人々が生活するのに適したところでありました。そのため市内には貝塚、古墳、集落跡など数多くの遺跡が存在しております。これらの遺跡は当時の様子を知る手掛かりとなることはもちろんのこと、現代の私達が豊かに生活することのできる先人の業績でもあります。

このような貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えることは私達の大切な任務であり、郷土の発展のためにも重要なことと思われます。

このたびの調査は、市営今泉霊園拡張工事事業に伴い、周知の遺跡である根鹿北遺跡・栗山窯跡の発掘調査による記録保存を目的として行われたものであります。

遺跡内からは、弥生時代から平安時代にかけての集落跡が確認され、特に弥生時代の集落と平安時代の仏教に関わる掘建柱建物跡群は貴重な調査事例といえます。

この調査によって、土浦北部の今泉地区における古代文化の究明にいささかなりとも役立てていただければ幸甚であります。

最後になりましたが、調査から報告書の発刊にあたり、土浦市や土浦市土地開発公社をはじめ、関係者の皆様方のご協力とご支援に対し、心から厚く御礼申し上げます。

平成９年３月

土浦市教育委員会
教育長　尾見彰一

例　言

1．本書は土浦市遺跡調査会が実施した土浦市大字今泉1192-1番地に所在する根鹿北遺跡と1180-1番地に所在する栗山窯跡の発掘調査報告書である。

2．調査は事業者である土浦市の行なう土浦市営今泉霊園拡張工事に伴う事前調査として実施したものである。

3．発掘調査は根鹿北遺跡が平成７年５月10日から11月７日まで、栗山窯跡が平成８年４月28日から５月10日まで実施した。出土品の整理作業及び報告書の作成は各遺跡の調査終了後平成９年３月末日まで行なった。

4．根鹿北遺跡の発掘調査は関口　満・本橋弘美が担当し、遺物の整理及び報告書の作成は関口　満・福田礼子・木橋弘美が担当した。（低湿地部分の試掘調査については塩谷　修が担当した。）

栗山窯跡の発掘調査は関口　満・吉沢　悟・日高　慎が担当し、遺物の整理及び報告書の作成は吉沢　悟（筑波大学歴史・人類学系）・日高　慎（筑波大学大学院）が担当した。全体の総括及び報告書の編集は関口が行なった。

報告書の原稿執筆分担は

第３章第３節　旧石器時代の遺物については渡辺丈彦（慶応義塾大学大学院）。

第３章第３節　瓦塔・瓦堂　第４節　考察１　池田敏宏　(財)栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター)。

第３章第４節　考察２　第11号土坑の珪藻分析については株式会社古環境研究所。

第３章第４節　低湿地遺跡部分の調査については㈱パレオ・ラボの分析資料をもとに関口・塩谷が作成した。

第４章第２節　遺構は日高　慎が担当した。

第４章第３節　遺物・第４章第４節　考察は吉沢　悟が担当した。

付編「栗山窯出土の須恵器の胎土について」は、吉沢　悟が担当した。

この他の文章については関口が担当し、福田が補佐した。

5．出土資料などの分析

・低湿地における調査指導として東京都立大学助教授　山田昌久氏にご指導・ご教示頂いた。

・低湿地試掘時の科学分析資料として以下の項目を株式会社パレオ・ラボに委託した。

１．「土浦市今泉霊園周辺の縄文時代以降の植物変遷史」吉川昌伸

２．「今泉霊園試掘調査地点より産出した大型植物化石」吉川純子

３．「今泉霊園のプラントオパール」　鈴木　茂

４．「今泉霊園試掘調査地点の放射性炭素年代測定結果」学習院大学放射性炭素測定室　木越邦彦。

・旧石器時代の遺物実測及び遺物の原稿は慶応義塾大学大学院　渡辺丈彦氏にご協力頂いた。

・墨書土器の赤外線写真は(財)茨城県教育財団・川井正一氏にご協力頂いた。

・墨書土器の判読については国立歴史民俗博物館教授　平川　南氏にご指導・ご教示頂いた。

・瓦塔・瓦堂の整理と考察については(財)栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター　池田敏宏氏にご協力頂いた。

・根鹿北遺跡出土第11号土坑の珪藻分析については㈱古環境研究所に依頼した。

・栗山窯跡出土須恵器の胎土中に含まれる雲母については筑波大学地球科学系　久田公一氏にご指導・ご教示頂いた。

6．発掘調査及び出土品の整理に関わり、次の諸氏又は諸機関のご協力・ご教示を賜った。記して誠意を表したい。（50音順　敬称略）

赤井博之、浅井哲也、石橋　充、茨城県教育委員会、茨城県県南教育事務所、海老沢稔、岡本武雄、川井正一、瓦吹堅、駒沢悦郎、㈱パレオ・ラボ、㈱古環境研究所、黒澤彰哉、金平昌子、(財)茨城県教育財団、酒井清治、佐々木義則、笹生　衛、鈴木素行、古代生産史研究会、高橋照彦、田形孝一、筑波大学、土浦市、土浦市土地開発公社、中山　晋、成島一也、(財)栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター、萩谷　悟、白田正子、土生朗治、平川　南、桃崎祐輔、山田昌久

7．遺構写真は現地調査担当者が撮影し、遺物写真は関口が担当した。

8．本報告書に関わる出土品及び記録図画・写真などは一括して上高津貝塚ふるさと歴史の広場に保管してある。

9．調査組織

根鹿北遺跡			栗山窯跡		
会　長	須田直之	文化財保護審議会会長	会　長	須田直之	文化財保護審議会会長
副会長	青木利次	土浦市教育委員会教育長	副会長	尾見彰一	土浦市教育委員会教育長
理　事	大塚　博	〃　文化財保護審議会委員	理　事	大塚　博	〃　文化財保護審議会委員

〃	廣田宣治	〃	参事兼企画課長
〃	内海崎保生	〃	土地区画整理課長
〃	雨谷　宏	〃	都市計画課参事兼建築指導課長
〃	野口幹雄	〃	都市計画課長
〃	金塚文雄	〃	耕地課長
〃	大塚重治	〃	土木課長
監　事	矢口　寛	土浦市教育委員会教育次長	
〃	飯田章二	〃	監査事務局長
幹事長	宮本　昭	土浦市教育委員会文化課長	
幹　事	矢口俊則	〃	課長補佐
〃	小貫俊男	〃	主査兼文化財係長
〃	塩谷　修	〃	主幹
〃	石川　功	〃	主幹
〃	黒澤春彦	〃	主事
〃	中澤達也	〃	主事
〃	関口　満	〃	主事
〃	橋場君男	〃	主事補
〃	宮本礼子	〃	主事補
調査員	本橋弘美	〃	文化課臨時職員
〃	富田　徹	筑波大学大学院	
調査補助員	後藤理加	〃	学生
〃	赤坂　亨	〃	〃
〃	高橋有美	〃	〃

〃	廣田宣治	〃	参事兼企画課長
〃	内海崎保生	〃	土地区画整理課長
〃	坂入　勇	〃	都市計画課参事兼建築指導課長
〃	野口幹雄	〃	都市計画課長
〃	金塚文雄	〃	耕地課長
〃	大塚重治	〃	土木課長
監　事	飯田章二	土浦市教育委員会教育次長	
〃	小野政夫	〃	監査事務局長
幹事長	宮本　昭	土浦市教育委員会文化課長	
幹　事	矢口俊則	上高津貝塚ふるさと歴史の広場副館長	
〃	小貫俊男	土浦市教育委員会主査兼文化財係長	
〃	塩谷　修	上高津貝塚ふるさと歴史の広場主幹	
〃	石川　功	〃	主幹
〃	黒澤春彦	〃	主事
〃	中澤達也	〃	主事
〃	関口　満	〃	主事
〃	橋場君男	〃	主事
〃	宮本礼子	〃	主事
調査員	吉沢　悟	筑波大学歴史・人類学系	
〃	日高　慎	〃	大学院
〃	富田　徹	〃	〃
調査補助員	木山克彦	〃	学生
〃	江田真毅	〃	〃
〃	一戸一史	〃	〃

調査作業員

（根鹿北遺跡）

赤根茂也、安達浩二、阿部英雄、飯田志満子、飯村綾子、石川さおり、石毛　勇、石浜敏子、伊藤敏子、岩瀬初代、岩田敦子、浦野博之、圓城寺守次、大塚源兵衛、大坪美知子、岡田次男、岡本武雄、小野　豊、鏡原美和子、加藤博司、神野英子、川中四郎、川原井昭彦、木村時政、久保田ゆみこ、小暮美紀、小柳道雄、近藤　綾、酒井久子、佐藤隆郎、柴ヒサ子、鈴木きぬ、鈴木玲子、田上源吾、田上よし、田村尚子、富島栄子、富島利次、中泉義明、松浦正美、宮本義雄、谷貝きぬ、矢口ヨシ子、安田昭三、安田トミエ、梁田淑子

（栗原窯跡）

赤根茂也、安達浩二、加藤博司、小柳道雄

整理作業

（根鹿北遺跡）

関口　満（土浦市教育委員会）

調査員　本橋弘美（～平成８年２月）、福田礼子、黒田友紀、鶴町明子（以上土浦市遺跡調査会調査員）、富田　徹（筑波大学大学院）、渡辺丈彦（慶応義塾大学大学院）

調査指導　池田敏宏　㈶栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター

整理作業員

天谷暎子、新井栄子、飯村洋子、石浜敏子、石山春美、岡本君子、大坪美知子、鏡原美和子、川田光子、小松崎廣子、富田シズエ、長嶺道子、浜田久美子、松浦正美、松川さち子、梁田淑子

（栗山窯跡）

調査員　吉沢　悟（筑波大学歴史・人類学系）、日高　慎（筑波大学大学院）

調査指導　川井正一　㈶茨城県教育財団

凡　例

根鹿北遺跡

1．根鹿北遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系を原点として、X＝15,863m　Y＝31,970mの交点を基準点とした。

調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を20m四方の大調査区（グリッド）に分割し、さらにこの調査区を東西及び南北に各々５等分し、４m四方の小調査区（グリッド）を設定した。

調査においては４m四方の小調査区（グリッド）を基本として使用し、大調査区には特別に名称を与えていない。調査区の名称はアルファベットと算用数字を用い、北から南へ１，２，３…とし、西から東へA，B，C…とし、A－１区、B－２区のように呼称した。

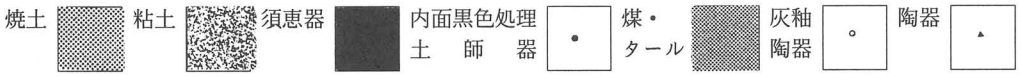
2．遺構・土層に使用した記号は次のとおりである。

遺構　竪穴住居跡……SI　土坑…SK　溝……SD　不明遺構…SX　掘立柱建物跡……SB　古墳……TM

弥生時代竪穴住居跡内　Ｐ１～Ｐ４……主柱穴　Ｐ５……入り口ピット

土層　K……撹乱　P……土器　S……石

3．遺構・遺物の実測図中の表示は以下のとおりである。



4．土層観察と遺物における色調の同定は、『新版標準土色帖』（小山正忠、竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用した。

5．本書の遺構，遺物の表示は次のとおりである。

(1)　水糸レベルは海抜高度を示す。

(2)　遺物番号は本文、挿図、写真図版とも一致する。

(3)　遺構の縮尺は基本的に１／60で、カマド・炉については１／30である。

(4)　遺物の縮尺は原則として土器が１／３、大型のものは１／４、石器・鉄器は１／２で表示した。器種や大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々にスケールで表示した。

(5)　「主軸方向」は弥生時代の竪穴住居跡の場合、東西の主柱穴間の２か所の中間地点を結んだ、軸線、平安時代の竪穴住居跡の場合は竈をとおる軸線とし、その主軸が座標軸からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。例（N－46°－W）

(6)　遺構の計測値で（　）で表現されたものは推定値である。遺物観察表中の器高欄の（　）は現存高を表し、底径欄の（　）は復元径を表す。

(7)　竪穴住居跡の１・２・３・４区の表現は、現地調査時に住居内を１／４分割して使用したもので、住居入口から見て右上を１区・右下を２区・左下を３区・左上を４区とした。

栗山窯跡

1．土層観察と遺物における色調の同定は、『新版標準土色帖』（小山正忠、竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用した。

2．本書の遺構、遺物の表示は次のとおりである。

(1)　水糸レベルは海抜高度を示す。

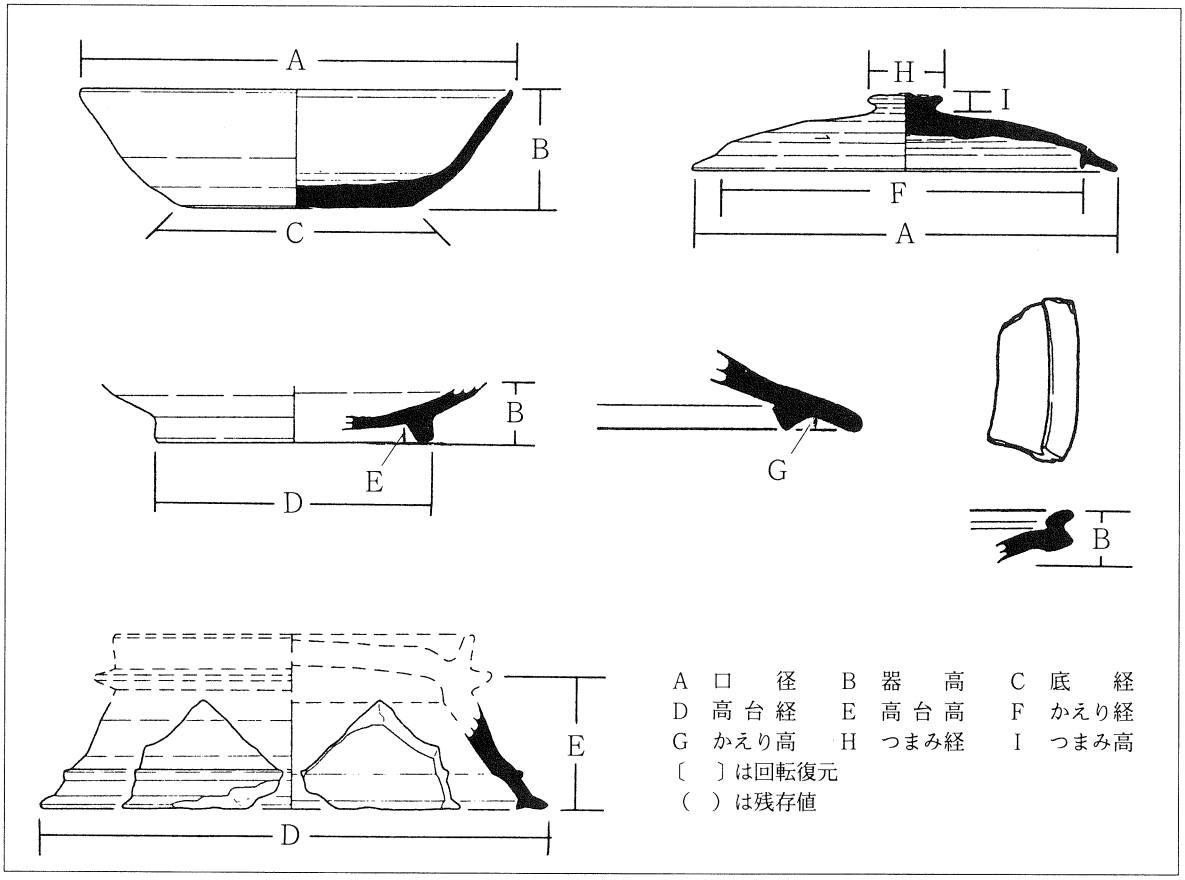
(2)　遺物番号は本文，挿図とも一致する。

(3)　遺構の縮尺は窯業跡が基本的に１／40で、灰原は１／60である。他の縮尺のものについては個々にスケールで表示した。

(4)　遺物の縮尺は原則として遺物は１／３とし、大型のものについては個々にスケールで表示した。

(5) 遺物図で断面図のみのものは、小破片である。

(6) 栗山窯跡出土遺物計測凡例



3．本報告の中では「栗山窯跡」と「栗山窯」の表現を併用している。これはタイトル等には、遺跡台帳同様の名称である「栗山窯跡」を用い、本文中では「栗山窯」を用いている。これらは同一のものを示すものである。

目　　次

口絵　　根鹿北遺跡航空写真（カラー）　瓦塔（カラー）
　　栗山窯跡遺物出土状況（カラー）　栗山窯跡出土遺物（カラー）
序
例言
凡例
目次　（図版・写真・表目次を含む）
第１章　調査経緯 …… 1
第２章　位置と環境 …… 3
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 5
第３章　根鹿北遺跡 …… 7
　第１節　遺跡の概要 …… 7
　第２節　基本層序 …… 8
　第３節　遺構と遺物 …… 9
　　1　旧石器時代 …… 9
　　2　竪穴住居跡 …… 11
　　3　土坑 …… 101
　　4　掘立柱建物跡 …… 129
　　5　古墳 …… 139
　　6　粘土採掘坑 …… 145
　　7　溝 …… 151
　　8　埋没谷 …… 155
　　9　遺構外出土遺物 …… 165
　第４節　考察 …… 175
　　1　出土瓦塔の編年的位置付け …… 175
　　2　第11号土坑の珪藻分析 …… 182
　　3　根鹿北遺跡低湿地部分調査の概要 …… 186
　第５節　調査のまとめ …… 189

第４章　栗山窯跡 …… 191
　第１節　遺跡の概要 …… 191
　第２節　遺構 …… 193
　　１）地形と立地 …… 193
　　２）窯体 …… 193
　　３）灰原 …… 198
　第３節　遺物 …… 200
　第４節　考察 …… 215
　　１）栗山窯における須恵器の製作傾向 …… 215
　　２）栗山窯と他窯の比較および帰属年代の検討 …… 219
　　－付編－栗山窯出土の須恵器の胎土について …… 225
　第５節　調査のまとめ …… 230
　写真図版

挿 図 目 次

根鹿北遺跡

第 1 図　根鹿北遺跡、根鹿北遺跡低地部、栗山窯跡調査エリア図 …… 2
第 2 図　周辺の遺跡位置図 …… 4
第 3 図　根鹿北遺跡遺構配置図 …… 6
第 4 図　基本層序 …… 8
第 5 図　旧石器時代調査区、遺物出土状況図、出土遺物実測図 …… 9
第 6 図　第 1 号住居跡実測図 …… 12
第 7 図　第 1 号住居跡出土遺物実測図 …… 13
第 8 図　第 2 号住居跡実測図 …… 14
第 9 図　第 2 号住居跡出土遺物実測図(1) …… 15
第10図　第 2 号住居跡出土遺物(2) …… 16
第11図　第 3 号住居跡実測図 …… 17
第12図　第 3 号住居跡出土遺物実測図 …… 18
第13図　第 4 号住居跡実測図・出土遺物実測図 … 19
第14図　第 5 号住居跡実測図 …… 21
第15図　第 5 号住居跡出土遺物実測図 …… 22
第16図　第 6 号住居跡実測図 …… 24
第17図　第 6 号住居跡出土遺物実測図(1) …… 25
第18図　第 6 号住居跡出土遺物実測図(2) …… 26
第19図　第 7 号住居跡実測図 …… 27
第20図　第 7 号住居跡出土遺物実測図 …… 28
第21図　第 8 号住居跡実測図・出土遺物実測図 … 29
第22図　第 9 号住居跡実測図 …… 31
第23図　第 9 号住居跡出土遺物実測図 …… 32
第24図　第10号住居跡実測図 …… 33
第25図　第10号住居跡出土遺物実測図 …… 34
第26図　第11号住居跡実測図 …… 36
第27図　第11号住居跡出土遺物実測図 …… 37
第28図　第12号住居跡実測図 …… 38
第29図　第12号住居跡出土遺物実測図 …… 39
第30図　第13号住居跡実測図 …… 40
第31図　第13号住居跡出土遺物実測図(1) …… 41
第32図　第13号住居跡出土遺物実測図(2) …… 42
第33図　第14号住居跡実測図 …… 43
第34図　第14号住居跡出土遺物実測図 …… 44
第35図　第15号住居跡実測図・出土遺物実測図 46
第36図　第16号住居跡実測図 …… 47
第37図　第16号住居跡出土遺物実測図 …… 48
第38図　第17号住居跡実測図・出土遺物実測図 49
第39図　第18号住居跡実測図 …… 51
第40図　第18号住居跡出土遺物実測図 …… 52
第41図　第19号住居跡実測図 …… 53
第42図　第19号住居跡遺物出土状況図 …… 54
第43図　第19号住居跡出土遺物実測図 …… 55
第44図　第20号住居跡実測図・出土遺物実測図 … 56
第45図　第21号住居跡実測図 …… 58
第46図　第21号住居跡出土遺物実測図 …… 59
第47図　第22号住居跡実測図・遺物出土状況図 … 60
第48図　第22号住居跡出土遺物実測図 …… 61
第49図　第23号住居跡実測図・出土遺物実測図 … 62
第50図　第24号住居跡実測図・出土遺物実測図 … 64
第51図　第25号住居跡実測図・出土遺物実測図 … 65
第52図　第26号住居跡実測図 …… 67
第53図　第26号住居跡出土遺物実測図 …… 68
第54図　第27号住居跡実測図 …… 69
第55図　第27号住居跡出土遺物実測図 …… 70
第56図　第28号住居跡実測図・出土遺物実測図 … 71
第57図　第29号住居跡実測図 …… 73
第58図　第29号住居跡出土遺物実測図 …… 74
第59図　第30号住居跡実測図 …… 75
第60図　第30号住居跡出土遺物実測図 …… 76
第61図　第31号住居跡実測図 …… 77
第62図　第31号住居跡出土遺物実測図 …… 78
第63図　第32号住居跡実測図・出土遺物実測図 … 79
第64図　第33号住居跡実測図 …… 81
第65図　第33号住居跡出土遺物実測図 …… 82
第66図　第34号住居跡実測図・出土遺物実測図 … 83
第67図　第35号住居跡遺物出土状況図 …… 84
第68図　第35号住居跡実測図 …… 85
第69図　第35号住居跡出土遺物実測図 …… 86
第70図　第36号住居跡遺物出土状況図 …… 87
第71図　第36号住居跡実測図 …… 88
第72図　第36号住居跡出土遺物実測図(1) …… 89
第73図　第36号住居跡出土遺物実測図(2) …… 90
第74図　第37号住居跡実測図 …… 91
第75図　第37号住居跡出土遺物実測図(1) …… 92
第76図　第37号住居跡出土遺物実測図(2) …… 93
第77図　第37号住居跡出土遺物実測図(3) …… 94
第78図　第38号住居跡出土遺物実測図 …… 94
第79図　第38号住居跡実測図 …… 95
第80図　第39号住居跡実測図 …… 97
第81図　第39号住居跡出土遺物実測図(1) …… 98
第82図　第39号住居跡出土遺物実測図(2) …… 99
第83図　赤彩土器・朱書土器実測図 …… 100
第84図　第 1 ・ 2 ・ 3 号土坑実測図 …… 102
第85図　第 2 号土坑出土遺物実測図 …… 103
第86図　第 3 号土坑出土遺物実測図 …… 104
第87図　第 4 号土坑実測図・出土遺物実測図 …… 105
第88図　第 5 号土坑実測図 …… 106
第89図　第 5 号土坑出土遺物実測図 …… 107
第90図　第 7 ・ 8 ・ 9 ・10号土坑実測図・出土遺物実測図 …… 108
第91図　第11・12・13・14・15・16号土坑実測図・出土遺物実測図 …… 110
第92図　第11号土坑出土遺物実測図(1) …… 111
第93図　第11号土坑出土遺物実測図(2) …… 112
第94図　第17・19・20・21号土坑実測図・出土遺物実測図 …… 114
第95図　第22・23・24・25号土坑実測図・出土遺物実測図 …… 115
第96図　第26・27・28・29・30号土坑実測図・出土遺物実測図 …… 116
第97図　第31・32・33・34・35号土坑実測図 …… 117
第98図　第36・37・38・39・40・41・42・43号土坑実測図 …… 118
第99図　第44・45・46・47・48号土坑実測図 …… 119
第100図　第38・43・44・45号土坑出土遺物実測図… 120
第101図　第49・50・51号土坑実測図・出土遺物実測図 …… 121
第102図　第52・53・54・55・56・57号土坑実測図 …… 122
第103図　第55・57号土坑出土遺物実測図 …… 124
第104図　第58・59・60・61・62号土坑実測図・出土遺物実測図 …… 125
第105図　第 1 号掘立柱建物跡実測図 …… 130
第106図　第 2 号掘立柱建物跡実測図 …… 131
第107図　第 2 号掘立柱建物跡遺物出土状況図 …… 133

第108図　第２号掘立柱建物跡出土遺物実測図(1) … 133
第109図　第２号掘立柱建物跡出土遺物実測図(2) … 134
第110図　第２号掘立柱建物跡出土遺物実測図(3) … 135
第111図　第３号掘立柱建物跡実測図・出土遺物実測図 …… 136
第112図　第４号掘立柱建物跡実測図 …… 137
第113図　掘立柱建物跡配置図 …… 138
第114図　第１号古墳出土遺物実測図 …… 139
第115図　第１号古墳実測図 …… 140
第116図　第１号古墳主体部実測図 …… 141
第117図　第２号古墳実測図 …… 142
第118図　第２号古墳主体部実測図 …… 143
第119図　第３号古墳主体部実測図 …… 144
第120図　粘土採掘坑出土遺物実測図(1) …… 145
第121図　粘土採掘坑実測図・遺物出土状況図 …… 147
第122図　粘土採掘坑出土遺物実測図(2) …… 149
第123図　粘土採掘坑出土遺物実測図(3) …… 150
第124図　第１・２号溝実測図 …… 152
第125図　第３・４・５号溝実測図・出土遺物 …… 153
第126図　北西埋没谷（Ｇ－９区）遺物出土状況図 …… 155
第127図　北西埋没谷出土遺物実測図(1) …… 156
第128図　北西埋没谷出土遺物実測図(2) …… 157
第129図　北西埋没谷出土遺物実測図(3) …… 158
第130図　南西埋没谷遺物出土状況図 …… 159
第131図　南西埋没谷出土遺物実測図(1) …… 160
第132図　南西埋没谷出土遺物実測図(2) …… 161
第133図　南西埋没谷出土遺物実測図(3) …… 162
第134図　南西埋没谷出土遺物実測図(4) …… 163
第135図　遺構外出土遺物実測図(1)　縄文時代 …… 166
第136図　遺構外出土遺物実測図(2)　縄文時代 …… 168
第137図　遺構外出土遺物実測図(3)　弥生時代以降 …… 169
第138図　遺構外出土遺物実測図(4)　土製品 …… 170
第139図　遺構外出土遺物実測図(5)　石器 …… 171
第140図　遺構外出土遺物実測図(6)　石器 …… 172
第141図　遺構外出土遺物実測図(7)　金属製品 …… 174
第142図　瓦塔部分名称説明図 …… 179
第143図　瓦塔屋蓋部編年図 …… 180
第144図　瓦塔斗栱部表現比較類例 …… 181
第145図　低湿地第21Tr 土層断面図 …… 187

栗山窯跡
第１図　窯体及び灰原実測図 …… 192
第２図　窯体平面図・断面図 …… 194
第３図　窯体内遺物出土状況図 …… 195
第４図　灰原平面図・上層出土状況 …… 196
第５図　灰原平面図・下層出土状況 …… 197
第６図　灰原断面図 …… 199
第７図　窯体内出土遺物(1) …… 202
第８図　窯体内出土遺物(2) …… 204
第９図　灰原出土遺物(1) …… 206
第10図　灰原出土遺物(2) …… 207
第11図　灰原出土遺物(3) …… 208
第12図　各器種の破片総数割合 …… 216
第13図　坏の形態分類及び分類別出土破片数の割合 …… 216
第14図　出土地点別坏の諸形態の破片数割合 …… 217
第15図　蓋の形態分類及び分類別出土破片数の割合 …… 218
第16図　出土地点別蓋の諸形態の破片数割合 …… 218
第17図　新治窯跡群における坏の変遷 …… 220
第18図　新治窯跡群における蓋の変遷 …… 221
第19図　栗山窯の年代的位置付け（参考図） …… 222
第20図　各資料の色調と焼成の相対距離 …… 227
第21図　雲母の最大幅と含有個数の比較 …… 227

表　目　次

根鹿北遺跡
表１　根鹿北遺跡竪穴住居跡一覧 …… 126
表２　根鹿北遺跡竪穴住居跡内柱穴・入り口ピット一覧 …… 126
表３　根鹿北遺跡土坑一覧 …… 127

栗山窯跡
表１　栗山窯跡出土須恵器の機種構成と総破片数 …… 200
表２　栗山窯出土遺物観察表（窯体内出土） …… 209

写真図版目次

根鹿北遺跡
ＰＬ１　根鹿北遺跡・根鹿北遺跡低湿地部分・栗山窯跡
ＰＬ２　基本層序、旧石器時代遺物出土状況、第１号住居跡、第２号住居跡・同粘土出土状況、第３号住居跡・同遺物出土状況、第４号住居跡
ＰＬ３　第５号住居跡、第６号住居跡、第７号住居跡、第８号住居跡、第９号住居跡、第10号住居跡・同遺物出土状況、第11号住居跡
ＰＬ４　第12号住居跡、第13号住居跡・同炭化物出土状況、第14号住居遺物出土状況・第14号住居跡、第15号住居跡・第16号住居跡、第17号住居跡
ＰＬ５　第18号住居跡、第19号住居跡・同遺物出土状況、第20号住居跡、第21号住居跡、第22・33・34号住居跡・第22号住居跡遺物出土状況、第23号住居跡
ＰＬ６　第24号住居跡・同遺物出土状況、第25号住居跡、第26号住居跡、第27号住居跡・同炉石出土状況、第28号住居跡、第29号住居跡
ＰＬ７　第30号住居跡・同カマド遺物出土状況、第31号住居跡、第33号住居跡、第35号住居跡・同カマド遺物出土状況、第36号住居跡・同カマド遺物出土状況
ＰＬ８　第37号住居跡、第38号住居跡・同カマド遺物出土状況、第39号住居跡・同遺物出土状況・同遺物出土状況、第２号土坑遺物出土状況、第３号土坑土層堆積状況
ＰＬ９　第５号土坑、第７号土坑、第９号土坑、第11号土坑・同土層堆積状況、第17号土坑、第21号土坑・同遺物出土状況
ＰＬ10　第27号土坑、第31号土坑、第35号土坑、第37・38号土坑、第44号土坑、第45号土坑、第47号土坑、第50号土坑
ＰＬ11　第62号土坑（火葬墓）、第１号溝、第３号溝、第５号溝、第１号掘立柱建物跡、第２号掘立柱建物・同柱痕検出状況・同柱痕
ＰＬ12　第２号掘立柱建物跡・同根石検出状況・同瓦塔と瓦堂出土状況、第３・４号掘立柱建

物、第4号掘立柱建物、粘土採掘坑土層堆積状況・同遺物出土状況、第1号古墳・同主体部
ＰＬ 13　第2号古墳・同主体部、第3号古墳・同粘土出土状況、南西埋没谷調査状況、北西埋没谷調査状況・低湿地土層・旧石器時代遺物
ＰＬ 14　第1・2・3・5・6号住居跡出土遺物
ＰＬ 15　第6・7・8・9・10号住居跡出土遺物
ＰＬ 16　第10・11・13号住居出土遺物
ＰＬ 17　第13・14・16・18・19号住居跡出土遺物
ＰＬ 18　第19・21・22号住居跡出土遺物
ＰＬ 19　第23・24・25・27・28号住居跡出土遺物
ＰＬ 20　第29・30・31号住居跡出土遺物
ＰＬ 21　第32・33・34・35号住居跡出土遺物
ＰＬ 22　第35・36号住居跡出土遺物
ＰＬ 23　第36・37号住居跡出土遺物
ＰＬ 24　第37・39号住居跡出土遺物
ＰＬ 25　第2・3・4・5号土坑出土遺物
ＰＬ 26　第11号土坑出土遺物
ＰＬ 27　第11・16・24・55・62号土坑出土遺物
ＰＬ 28　粘土採掘坑出土遺物
ＰＬ 29　北西埋没谷・南西埋没谷・遺構外出土遺物
ＰＬ 30　第2号掘立柱建物・南西埋没谷出土瓦塔・瓦堂
ＰＬ 31　第2号掘立柱建物出土壁土、第1～20号住居跡出土弥生土器、第1～20号住居跡出土弥生土器、土製品(1)紡錘車、土製品(2)その他、第1～20号住居跡出土石器、第16～37号住居跡出土石器、第2・6・29号住居跡出土石器・石製品
ＰＬ 32　土坑・遺構外出土石器、住居跡・遺構外出土石器、金属製品その他、遺構外出土縄文土器(1)、遺構外出土縄文土器(2)、遺構外出土縄文土器(3)、遺構外出土縄文土器(4)、遺構外出土縄文土器(5)
ＰＬ 33　根鹿北遺跡出土墨書土器

栗山窯跡
ＰＬ 1　栗山窯が所在する谷、根鹿北遺跡から栗山窯をのぞむ、発掘調査前、窯跡内遺物出土状況、窯体完掘状況、窯体内遺物出土状況、窯体内土層堆積状況、同土層堆積状況、同土層堆積状況、同土層堆積状況
ＰＬ 2　灰原完掘状況、灰原完掘状況、灰原土層堆積状況、灰原遺物出土状況、調査風景、調査風景、坏、　坏
ＰＬ 3　坏、灰原出土高台杯、蓋、蓋（裏側）、蓋、円面硯、高坏、土製品

第１章　調査経緯

平成４年12月１日　土浦市市民生活部環境衛生課から「市営今泉霊園拡張造成事業」にかかわる埋蔵文化財の照会が土浦市教育委員会にあり、市教委では、当事業地内には「根鹿北遺跡」（県番号5326、市番Ｃ－47）の一部がかかり、遺跡の範囲が拡大する可能性があるため埋蔵文化財確認調査の必要性について回答した。

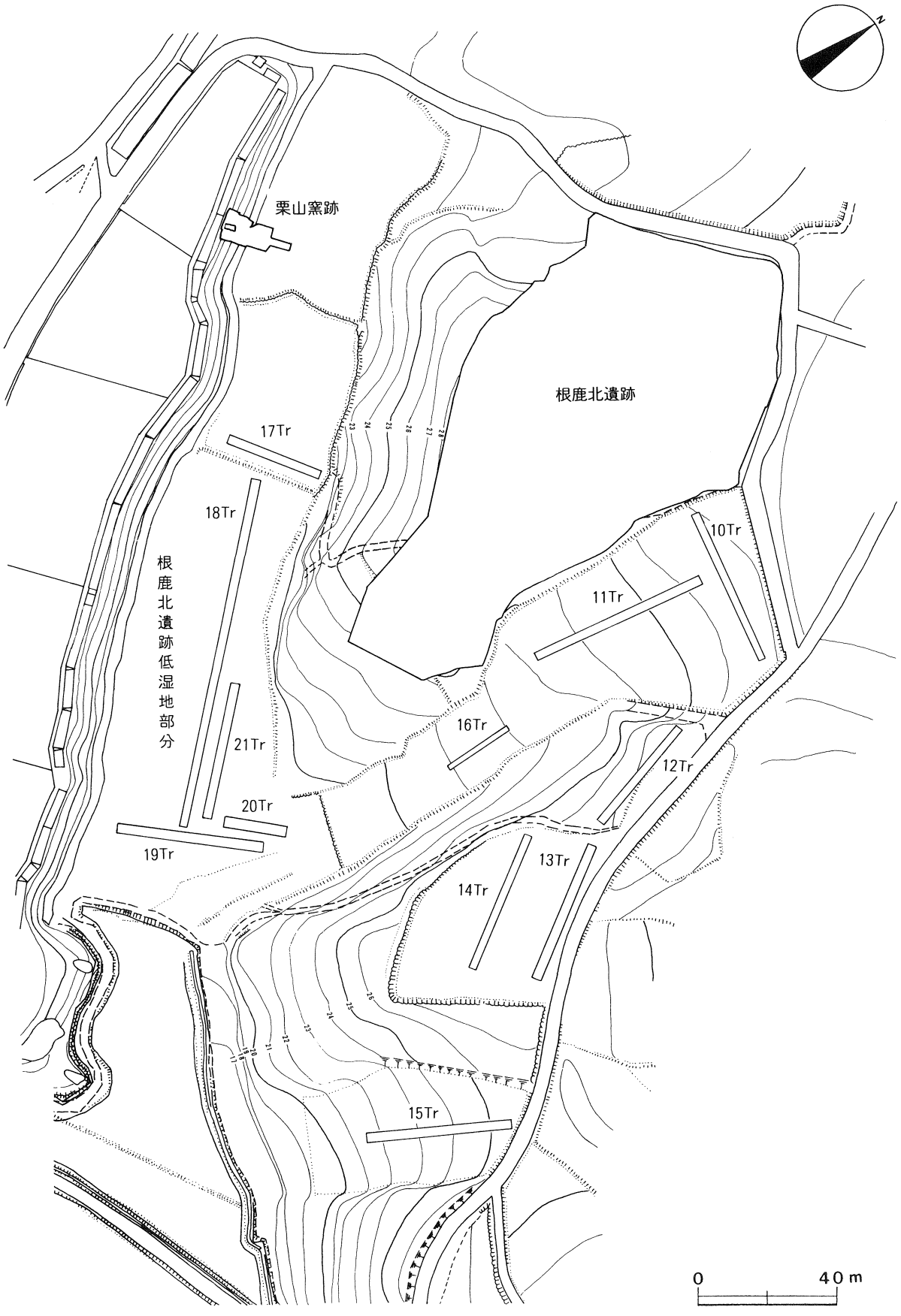
その後、平成６年５月16日に事業者である土浦市と市教委の間で事業地内の埋蔵文化財についての打合せが行われた。その中で本事業が造成工事を伴うものであるため、埋蔵文化財の現状保存は困難であることが示された。このことを受け事業地内の埋蔵文化財については発掘調査による記録保存をすることで合意した。そして事業者から平成６年度中に埋蔵文化財の確認調査を実施し、平成７年度に埋蔵文化財本調査を実施したい旨の申し出があった。この後平成６年９月30日付けで土浦市より市教委宛て「埋蔵文化財試掘調査について」の依頼があった。市教委では調査機関として土浦市遺跡調査会を紹介した。土浦市遺跡調査会では、埋蔵文化財確認調査を平成６年11月29日から12月22日までの18日間で実施した。調査の内容は事業予定地内の台地上・台地斜面部及び低湿地部分を調査対象とした。標高26ｍ以上の台地上に幅1.5ｍのトレンチを11本設定し、斜面部には計５本、低湿地部分にも計５本のトレンチを設定して調査した。（第１図参照）全部で21本設定したトレンチの内、14本のトレンチから遺構・遺物が確認された。調査結果から台地上と低湿地にも埋蔵文化財が存在することが判明した。

このような内容の調査結果が土浦市遺跡調査会から教育委員会に提出された。このことを受けて市教委では本調査対象範囲の検討を行い、次のことを土浦市に対して回答した。本調査の対象範囲は台地上の約９千㎡としたこと。低湿地部分については盛土による現状保存がなされるため本調査の対象範囲から除外すること。その後事業主体が土浦市から土浦市土地開発公社に移管されたため、公社と市教委の間で埋蔵文化財本調査についての協議が進められた。市教委では確認調査の結果をもとに根鹿北遺跡の発掘調査にかかわる見積書と工程表を提出して、平成８年度に発掘調査を実施することにした。発掘調査に先立ち教育委員会立会いのもと、現地で調査エリアの設定を行い、エリア内の表土排除を行った。発掘調査の実施は土浦市遺跡調査会に依頼し、土浦市土地開発公社との間で業務委託契約書を結び調査の実行に至った。

調査は平成７年５月10日から11月７日にわたり実施された。調査の最後には現地説明会を実施して一般市民向けに遺跡を公開した。その後、遺物等を上高津貝塚ふるさと歴史の広場に搬入して整理作業を実施した。当初の契約期間は整理作業を含めて平成８年４月30日となっていたが、遺物等の大量出土などの要因により期間の延長のための契約変更を４月末日をもっておこなった。変更後の調査期間は平成８年12月末日とした。

その後平成８年４月14日に、新たに事業地内から須恵器の窯跡が発見された。急遽土地開発公社及び土浦市と市教委の間で新発見の埋蔵文化財の取り扱いについて協議がされ、発掘調査を実施することで合意した。遺跡名については字名を採用して栗山窯跡とした。調査は事業地内が工事中ということもあり、調査期間は４月28日より５月10日にかけて実施した。

栗山窯跡の調査終了後、根鹿北遺跡と栗山窯跡ので整理作業は同時並行で進められた。



第1図　根鹿北遺跡、根鹿北遺跡低湿地部分、栗山窯跡調査エリア図

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境（第２図）

根鹿北遺跡は、土浦市大字今泉に所在し、市内でも北端部分の新治村との境界地域に所在する。

土浦市は北に新治郡千代田町、東は霞ヶ浦に突き出た新治郡霞ヶ浦町に接するとともに、南は稲敷郡阿見町と牛久市、西はつくば市と新治郡新治村に接している。

当市の地形は、市域の中央を流れ、霞ヶ浦の土浦入に注ぎ込む桜川によって形成された桜川低地と、その北東に広がる新治台地と南東に広がる筑波台地とに分けられる。

新治台地は、筑波山塊南麓から南東方向に張り出し霞ヶ浦町まで伸びる、洪積台地である。標高は筑波山塊南麓の台地上で約３０ｍを測り、霞ヶ浦町地内の台地上では約２７ｍと緩やかに南東方向に傾斜している。この台地を流れる河川は、その多くが西から東に流れる。霞ヶ浦町内を流れる菱木川や一の瀬川は霞ヶ浦の三つ又沖に向かい流れ、筑波山塊に源を発する天の川は、東流して千代田町下土田付近で恋瀬川と合流し、高浜入に注ぐ。それぞれの河川からは、台地を刻むように谷が樹枝状に入り込む。天の川の中流域でも、樹枝状に谷が刻まれると同時に小河川が同川に流入している。同流域における特徴的な樹枝状の谷の状況は、河川北岸の土浦市今泉・粟野、新治村永井地区周辺で見ることができる。同所の南岸に比べ全体的に谷の幅が狭く、幾筋も密集して北に向かい刻まれている。同谷の奥部は台地と谷部の比高差がなくなり、なだらかな起伏となる。またそのようなところに溜池が造られている。

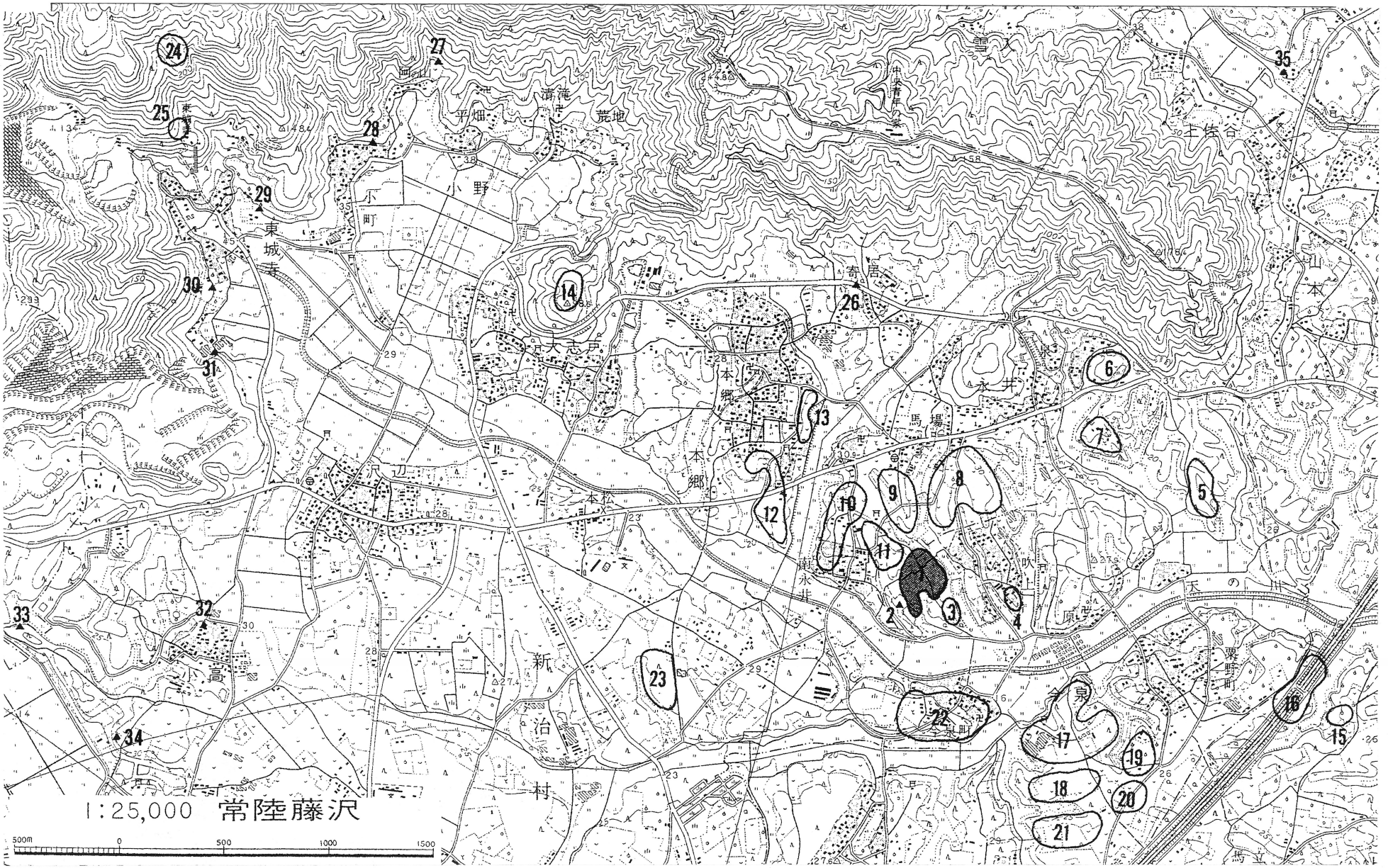
天の川の沖積低地の幅は下流域の千代田町下土田付近で約400ｍ、今泉付近で約250ｍ、新治村大志戸で同様の約250ｍである。この新治村大志戸を過ぎ東城寺や小野・沢辺付近に至ると、沖積低地がひろがり、周りが新治台地や筑波山塊の山裾により囲まれた幅１㎞を超す小さな盆地状を呈する。この盆地状の地形の筑波山塊山裾側には小河川がみられ扇状地的な地形も見られる。

天の川の上流には川底に花崗岩や片岩がみられ、場所によっては花崗岩が風化したような粗い砂が堆積している。川を下るほど石は見られなくなり、砂も細かくなる。砂の中には白雲母が含まれ、黒雲母は非常に少ない。今泉地区周辺の川底には石は見られず砂の堆積のみとなる。

土浦周辺地域の台地下における基本的な層序は、地表面下に黒色土の表土が堆積し、その下層に関東ローム層が１～1.5ｍ堆積し常総粘土層に移行する。しかしながら、今回の発掘調査で基本層序観察のため地表面下２ｍ以上にわたり深く掘ったところ、関東ローム層下から常総粘土層上にわたり粗い砂層が確認された。同層は花崗岩が風化し、長石・石英小粒の純層のような層である。土浦市内の霞ヶ浦町よりの新治台地下では確認されていない。また土浦市内の筑波台地でも確認されていない。筑波山塊周辺の台地下に存在する土層と考えられ、局地的に存在するものと考えられる。また下層の粘土層にも長石・石英小粒が含まれている。

根鹿北遺跡の谷を挟んだ既存霊園が存在する台地先端斜面には雲母片岩の巨岩が数個地面に露出し、字名も石神とよばれている。これらの巨岩は信仰の対象となっているようである。

最後に当地域の産業の特徴として、ビニールハウスによるグラジオラスなどの花卉栽培が盛んに行われ、加えて栗・梨などの果樹栽培もされている。天の川の両側に広がる低地部分では、水田耕作がなされている。



第2図　周辺の遺跡位置図

（国土地理院発行 1/25,000 に加筆）

第２節　歴史的環境（第２図）

筑波山麓を源流として流れる、天の川の上中流域にあたる土浦北部今泉・粟野地区及び新治村永井地区は県内でも有数の弥生時代の遺跡分布地域と考えられる。分布調査において弥生土器が表面採取された遺跡としては土浦地内に根鹿北遺跡（No.１）をはじめとして根鹿西遺跡（No.３）、吹上坪遺跡（No.４）などがあり、新治地内には永井飯島遺跡（No.６）、永井泉前遺跡（No.７）、永井三島前遺跡（No.８）、永井中妻遺跡（No.８）、永井談所前遺跡（No.10）、永井鹿島神社前遺跡（No.11）、本郷南前・五量遺跡（No.12）、本郷宮後遺跡（No.13）など数多い。発掘調査された例としては千代田町の上稲吉西原遺跡（No.16）、土浦市側には原田遺跡群の原田北遺跡（No.18）、原田西遺跡（No.21）、西原遺跡（No.19）、原出口遺跡（No.20）があり、新治村側には本郷原山五反田遺跡（No.23）などが存在する。

上稲吉西原遺跡は1978年に調査され、そこから出土した土器は口縁部に貼瘤が付され、刺突文が巡り、頚部下半に無文帯が存在する。器面には付加条一種（付加二条）縄文が施文される特徴を持つ土器が主体を占めた。この土器は弥生時代後期後半の霞ヶ浦西岸地域に特徴的に分布する土器として、「上稲吉式土器」という名称が与えられた。その後この種の土器は本地域の各遺跡で確認されている。

原田遺跡群は天の川を北側にのぞむ標高２３～２７ｍの台地上に立地し、遺跡群の中から弥生時代の竪穴住居跡が合計１８５軒確認された。それらの竪穴住居跡の時期の多くは後期の範疇に位置付けられ、中でも後期後半のものが多い。土器以外の遺物として、西原遺跡では「穂摘具として使用されたと思われる薄くて小形の石製品」が確認され、その材質は一般的に「雲母片岩」と呼ばれる筑波山塊で産出する石が使用されている。

古墳時代には原田遺跡群の中からまとまった集落が確認されている。時期的には古墳時代前期から中期のものである。原出口遺跡では古墳時代前期最終末の方形周溝墓が近接して８基確認された。また前方後円墳が１基検出され、墳丘裾部から周溝にかけて円筒埴輪が出土した。根鹿北遺跡に近接した場所では、現在土浦市立博物館に所蔵されている滑石製の石枕が出土したと言われている。同地区の古墳群として愛宕山古墳群（No.17）、堂原古墳群（No.５）、西田古墳群（No.15）などがある。

奈良・平安時代の集落遺跡の発掘調査例は非常に少ないが、須恵器窯跡や寺院跡、経塚群などの存在が古くから知られている。須恵器窯跡は天の川北岸の台地斜面から筑波山麓の山裾に至る中に点在し、栗山窯跡（No.２）、永井寄居窯跡（No.26）・小野八百田硲窯跡（No.27）・小野窯跡（No.28）・東城寺窯跡（No.29）・東城寺寄居窯跡（No.30）・東城寺桑木窯跡（No.31）・小高村内窯跡（No.32）・小高窯跡（No.33）、田宮窯跡（No.34）が確認され、これらを総称して新治須恵器窯址群と呼ばれている。流域は異なるがNo.35は関戸瓦窯跡である。

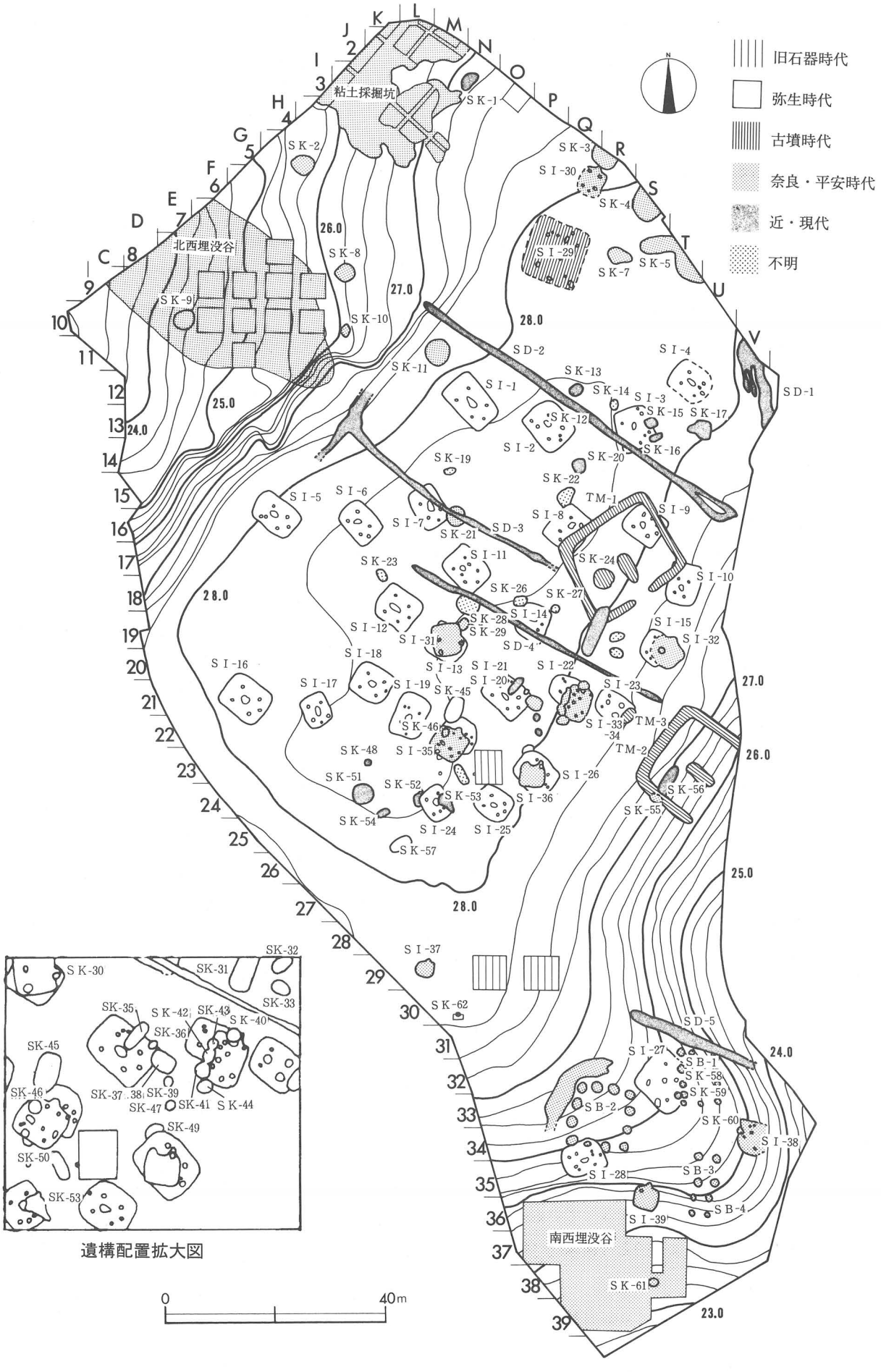
発掘調査がなされたものとして、1959（昭和25）年に高井梯三郎の率いる常総古文化研究会による小野窯跡の調査が最初である。図中にはないが、1989（平成元）年に千代田町の一丁田瓦窯跡が調査された。

古代の寺院跡としては現状の東城寺の北方の筑波山系朝望山中腹の平場（字名　堂平）に軒瓦・平瓦・丸瓦・磚を出土する礎石建物跡が存在するとされ、当初の東城寺寺院跡（No.21）と考えられている。また現在の東城寺の背後には、東城寺経塚群が存在している。

中世の城館跡として、堀が残る今泉城跡（No.22）や甲山城跡が知られている。

24

財団法人茨城県教育財団「茨城県教育財団文化財調査報告書第80集」『原田北遺跡Ⅰ・原田西遺跡』1994
〃　「茨城県教育財団文化財調査報告書第85集」『原田北遺跡Ⅱ・西原遺跡』１1995
〃　「茨城県教育財団文化財調査報告書第94集」『原出口遺跡』1996 など



第３図　根鹿北遺跡遺構配置図

第３章　根鹿北遺跡

第１節　遺跡の概要（第３図）

根鹿北遺跡は台地上及び台地斜面部の約9,000m² の部分と、確認調査時に鋤込み痕が発見された低湿地部分からなる。

まず発掘調査が実施された台地上及び台地斜面部からは、弥生時代と平安時代を中心に遺物・遺構が確認されている。

旧石器時代の遺物は、台地上南側ハードローム層中から凝灰岩や硬質頁岩を主要石材とした剥片やナイフ形石器が出土している。

縄文時代の遺構・遺物は、台地上から土坑が数基確認され、南西埋没谷から縄文時代早期後半の包含層が確認され、土器などの遺物がまとまって出土した。

弥生時代の遺構・遺物は台地上から検出された。竪穴住居跡は28軒確認され、台地上中央にまとまって展開していた。また、調査区南端の南東方向に張り出した尾根上に２軒の住居跡が確認され、このうちの１軒は一辺６ｍの大型の住居跡である。住居跡の主軸の多くは北北西を向き、その他の主軸方向は少数である。弥生時代の住居跡の中で重複するものはない。住居跡の形状は、多くが長方形で、建物の内部構造は主柱穴が四本で南東方向壁寄りに入口ピットを持つ。覆土下層に炭化材や焼土を含むものが数多く確認された。弥生時代の遺構・遺物はすべて後期後半のもので、出土している土器のほとんどは上稲吉式土器である。他の遺物として土製紡錘車や磨製石斧などの石器が出土している。

古墳時代になると竪穴住居跡１軒に古墳３基が検出された。住居跡は古墳時代中期のものであり、調査区北から検出された。古墳は方墳が２基と周溝を持たない主体部のみのものが１基検出された。

平安時代の遺構は竪穴住居跡が10軒、掘立柱建物跡が４棟、土坑が数基検出された。土坑の内の１基は火葬された人骨が遺存していた。この他調査区北隅に粘土採掘坑が検出された。住居跡は、９世紀末葉から10世紀代のものが台地中央部分に展開し、９世紀前葉～中葉のものが周辺部分に存在する。土坑は８世紀後半のものから10世紀代以降のものが存在する。調査区北側に存在する第11号土坑の底からは、科学分析の結果、淡水産珪藻が確認された。

特筆すべきは調査区南方において南東方向に張り出した尾根上に掘立柱建物跡が４棟確認され、その北側に浅い溝が巡り、その中から瓦塔・瓦堂片がまとまって出土した。掘立柱建物跡は２間×３間が１棟、３間×３間が１棟、１間×１間が２棟が存在する。それらの主軸方向はほぼ同様である。これらの掘立柱建物跡群の存在する南西側の谷部からも瓦塔片や土師器の小皿（燈明具）、「佛」と書かれた須恵器の鉄鉢形土器、鉄滓などが出土した。このことからこれらの掘立柱建物跡群は仏教に関わる施設と考えられる。

北側の緩い斜面部には粘土採掘坑が確認され、底面は粘土層を掘り込んでいた。遺物は本採掘坑が埋まる段階で投棄されている。その遺物の年代は８世紀後半期に位置付けられる。

中近世の明確な遺構は確認されていないが、土師質土器の内耳鍋や陶磁器が出土している。

低湿地部分の確認調査の結果、縄文時代の泥炭層やその上層に水田耕作によると思われる鋤込み痕が確認された。この痕跡は、出土した遺物から古墳時代頃から奈良時代頃のものと考えられるが、C^{14} 年代測定法による結果ではより古い時代の可能性も考えられる。

第2節　基本層序

調査エリアの北端近くの台地上Ｏ－３，４区に２×２ｍの基本層序のための調査区を設定して、遺構確認面から2.2m掘り下げ常総粘土層中まで及んだ。以下はその土層の観察結果である。（第４図）

第１層　褐色　赤色粒、透明な火山ガラス様のものを若干含むソフトローム。粘性強い。しまり普通。

第２層　褐色　橙色粒・白色粒・黒色粒・赤色粒を微量含む。透明な火山ガラス様のものを多く含む。ソフトローム化が一部進む。ハードローム。粘性ややあり。しまり強い。

第３層　褐色　橙色粒・白色粒・黒色粒・赤色粒を微量含む。透明な火山ガラス様のものを多く含む。ハードローム。粘性ややあり。しまり強い。

第４層　褐色　径１㎜の黒色粒・赤色粒が多量含まれる。透明な火山ガラス様のものも含まれる。ハードローム。粘性ややあり。しまり非常にあり。南関東立川ローム層中の黒色帯に対応するものか。

第５層　黄褐色　黒色粒・赤色粒を含む。ハードロームの色調が全体的に白味を増す。粘性ややあり。しまり非常にあり。

第６層　黄褐色　層の上限は鉄分の沈着。粘性ややあり。しまりあり。

第７層　にぶい黄橙色　鉄分の集中、黒色粒・赤色粒が含まれる。荒い砂と粘土により構成されているようである。粘性あり。しまりあり。

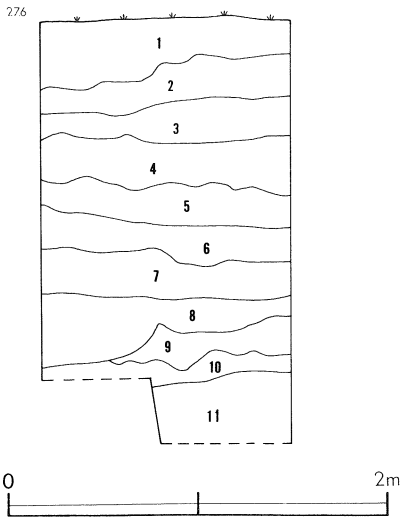
第８層　浅黄色　花崗岩の風化したような白い粗い砂で構成される。粘性はない。しまりあり。土層というよりは砂層である。

第９層　灰白色　層状の鉄分の集中が見られる。細かい砂と粘土により構成されている。粘性あり。しまりあり。

第10層　橙色　あまり砂質感はなくほとんど粘土の層。鉄分の集中部分が見られる。粘性非常にあり。しまりあり。

第11層　浅黄色　砂質粘土。粘性非常にあり。しまりあり。

以上が基本層序を観察した時の状況である。特徴的な土層として第８層があげられ、今までの土浦市内の調査においては確認されていない。常総地域一帯に必ず存在する土層ではないようで、筑波山塊近辺に存在する土層と考えられる。通常、粘性のあるローム層の下層には粘土層が存在するが本遺跡の層序では異なる。また第11層においても、粘土層の中に第８層の構成物が含まれる点で異質である。第８層は調査区内の北西・南西埋没谷付近などでは表土排除後に純層として露出していた。本土層の構成物は弥生土器や土師器等の胎土に混入する石英・長石と呼ぶものと同様と思われる。北西埋没谷付近の方が厚く堆積している。これらの層序以外にも南西埋没谷付近では、縄文時代早期の遺物を包含する赤味を帯びた褐色土層が確認された。

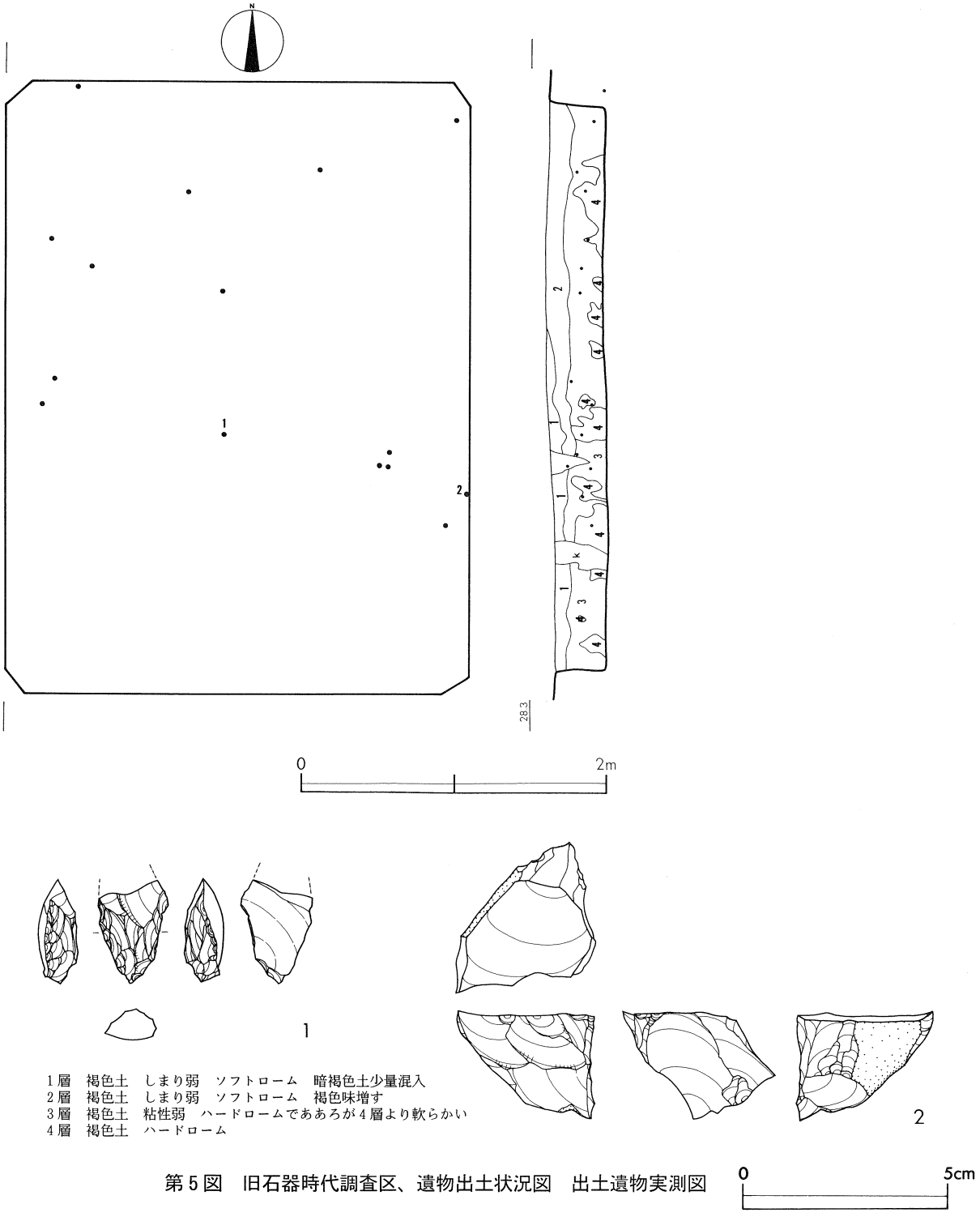


第４図　基本層序

第３節　遺構と遺物

１．旧石器時代（第５図　PL２・13）

旧石器時代の遺物の検出は住居跡調査時に、その覆土から旧石器時代の遺物と考えられる剥片などが出土したため、トレンチを設定して調査を行なった。トレンチは３ヵ所で設定し、①Ｎ－23，Ｏ－23区にかかり３×４ｍの規模、②Ｎ－29，Ｏ－29区にかかり４×４ｍの規模、③Ｐ－29区で４×４ｍの規模である。このうちＮ－23，Ｏ－23区にかかる３×４ｍの規模のトレンチから遺物が確認された。



第５図　旧石器時代調査区、遺物出土状況図　出土遺物実測図

遺物はトレンチ内の北側に寄って出土した。遺物の出土層位は第3層から出土した物がほとんどである。第3層はハードロームであるが、第4層のブロック状のハードロームと比べやや軟らかい。
標高約28.0mのトレンチ内底面近くでは遺物の出土が見られなかった。他の2ヵ所のトレンチからは遺物の出土が見られなかった。

遺物

本遺跡では、N－23, O－23区から16点の石器資料が得られた。出土層位は第3層である。その内訳は、ナイフ形石器1点、石核1点、剥片11点、砕片3点である。使用された石材は、硬質頁岩と凝灰岩の二種類である。このうち、凝灰岩製の石器資料に関しては、肉眼観察の範囲では、同一母岩であると判断されるが、接合資料は得られなかった。以下、ナイフ形石器と石核について、技術的特徴を中心に記載を行なう。両石器のその他の情報、及び剥片・砕片の情報については、観察表の記載のみにとどめる。

ナイフ形石器

基部加工ないしは二側縁加工のナイフ形石器である。尖端部分が欠損し、基部のみが遺存している。正面図上部及び中央の数枚の剥離面を除き、その他の剥離面は左右両側縁からの二次調整（Blunting）による剥離面である。尖端部分の欠損は裏面図中央からの衝撃によるものと判断される。

石核

複数の打面を有する他面体の石核である。最終の剥離は、正面図上部からの打撃によるものが卓越している。打面調整の痕跡は認められない。左側図面は、原礫面の占める割合が著しく高い為、省略した。

土浦市根鹿北遺跡　旧石器観察表

遺物番号	器　種	最大長	最大幅	最大厚	重量	残存部分	石材名	礫表面	打面形態	末端形態	図番号	備考
INN N23区7	ナイフ形石器	25	15	8	3.0	A	硬質頁岩	×	F	－	1	
INN O23区6	石　　核	50	28	21	23.2	－	凝灰岩	○	－	－	2	
INN O23区1	砕　　片	12	7	3	0.2	－	硬質頁岩	－	－	－		
INN O23区2	剥　　片	29	17	5	3.2	C	硬質頁岩	○	－	H		
INN O23区3	剥　　片	11	8	2	0.2	ABC	凝灰岩	×	P_o	H		
INN O23区4	剥　　片	32	18	8	3.9	ABC	凝灰岩	○	F	H		
INN O23区5	砕　　片	18	11	7	0.9	－	凝灰岩	－	－	－		
INN O23区7	剥　　片	14	7	4	0.3	C	凝灰岩	×	－	F		
INN N23区1	剥　　片	12	10	2	0.2	ABC	硬質頁岩	○	Pl	F		
INN N23区2	剥　　片	19	10	3	0.7	ABC	凝灰岩	×	F	H		
INN N23区3	剥　　片	16	10	4	0.6	ABC	硬質頁岩	×	P_o	H		
INN N23区4	剥　　片	24	16	7	2.0	ABC	硬質頁岩	○	Pl	F		
INN N23区5	剥　　片	12	6	1	0.1	ABC	硬質頁岩	×	Pl	H		
INN N23区6	剥　　片	17	9	2	0.2	ABC	凝灰岩	×	Pl	H		
INN N23区一括	剥　　片	31	22	9	5.4	A	凝灰岩	○	Pl	－		
INN N23区一括	砕　　片	26	20	11	3.8	－	凝灰岩	－	－	－		

単　　位：　最大長、最大幅、最大厚の単位はmm、重量の単位はgである。
残存部位：　ABCは完形、Aは末端欠損、Bは基部・末端部欠損、Cは基部欠損
礫表面　：　○有り　×無し
打面形態：　F複剥離面打面　Pl単剥離面打面　P_o点状打面　C_o礫表面打面
末端形態：　Fフェザー・エンド　Hヒンジ・フラクチャー　O_Pウートラ・パッセ

2．　竪穴住居跡

本遺跡内で竪穴住居跡は39軒確認された。時代ごとの検出状況は、弥生時代のものが28軒確認されすべて後期後半のものである。古墳時代中期のものは１軒、平安時代のものは10軒確認された。平安時代の竪穴住居跡は９世紀前葉から中葉のものが３軒と９世紀末葉のものが１軒、10世紀代のものが５軒と11世紀代のものが１軒見られた。

弥生時代後半期の竪穴住居跡は、大方２方向の主軸を持つグループに分かれる。これらの住居跡は２軒を除き、台地上の平坦部分から確認され、ほぼ今回の発掘調査区内にその広がりが収まるように考えられる。この他、南に張り出した尾根上から２軒確認され、このうちの１軒は大型の住居跡である。同時代の住居跡内の覆土下層には炭化物や焼土が検出される割合が高く、上層からはローム粒を多く含む土層が見られた。

古墳時代の竪穴住居跡は１軒のみ確認され、遺存状況は悪い。

平安時代の竪穴住居跡は10軒確認され、多くは台地上から確認された。２軒のみ南方の尾根斜面から検出された。台地上に存在するものは、９世紀末葉以降のものがほとんどである。台地周辺部にあたる粘土採掘坑や掘立柱建物跡群の近接地に９世紀前葉から中葉のものが数軒存在する。

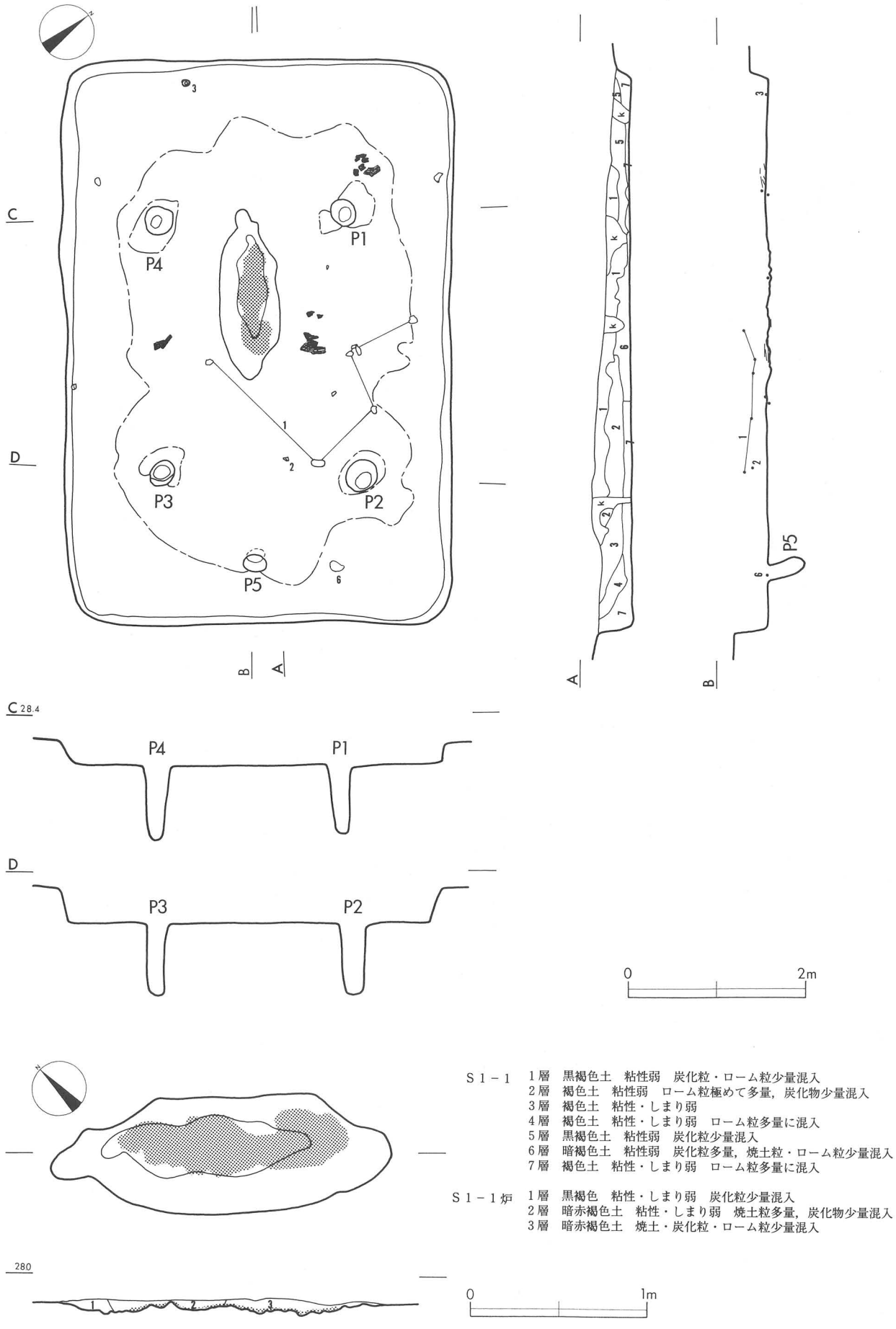
第１号住居跡〔旧第３号住居跡〕（第６図・第７図№１～６　ＰＬ２・14・31）

位置　調査区中央北寄りの、標高28.25m付近の台地上、Ｎ－12･13区にわたり確認されている。北側に第11号土坑が存在する。　**規模と平面形**　長軸6.07m、短軸4.05mの長方形を呈する。　**主軸方向**　Ｎ－45°－Ｗ。　**壁**　壁高は北北西側で20cm、南南東側で38cmを計り、外傾して立ち上がる。　**床**　全体的には平坦で、水平である。微妙に北北西壁寄りと南南東壁寄りが下がっている。硬化面の範囲は、Ｐ1～Ｐ5の若干外側までが踏み固められている。Ｐ1～Ｐ4のピットの縁辺は硬化していない。　**ピット**　Ｐ1～Ｐ5の５ヶ所確認され、Ｐ1～Ｐ4は主柱穴であり、Ｐ5は入口ピットである。Ｐ1～Ｐ4の深さは同様である。　**炉**　１ヶ所確認され、Ｐ1とＰ4の中間地点やや北北西壁寄りにあり、平面形は長軸1.85・短軸0.65mの長楕円形を呈する。床面を約５cmほど掘り込んだ地床炉である。炉床奥側の底面が良く焼け、凹凸が激しく、赤変硬化している。炉の覆土は手前側が炭化物を含む割合が多い。炉周辺の床面には炉覆土第１層の黒褐色土による汚れが見られた。　**覆土**　７層から構成され、中央部分に見られる第６層には炭化粒が多く含まれる。　**遺物**　遺構内から出土した遺物の量は少ない。№1・2を除き他のすべての遺物は床面もしくは床面近くから出土した。№1は壷形土器で覆土上層中に散って出土したものであり、投棄されたものと考えられる。№4・5は内面に条痕が見られる弥生土器破片である。№6は入口の北北東側で出土した。出土した遺物の中には第２号住居跡出土土器と接合したものがある。炭化材は板状（厚さ２～４cm）のものが見られ、壁側が中央側より高いレベルで出土している。

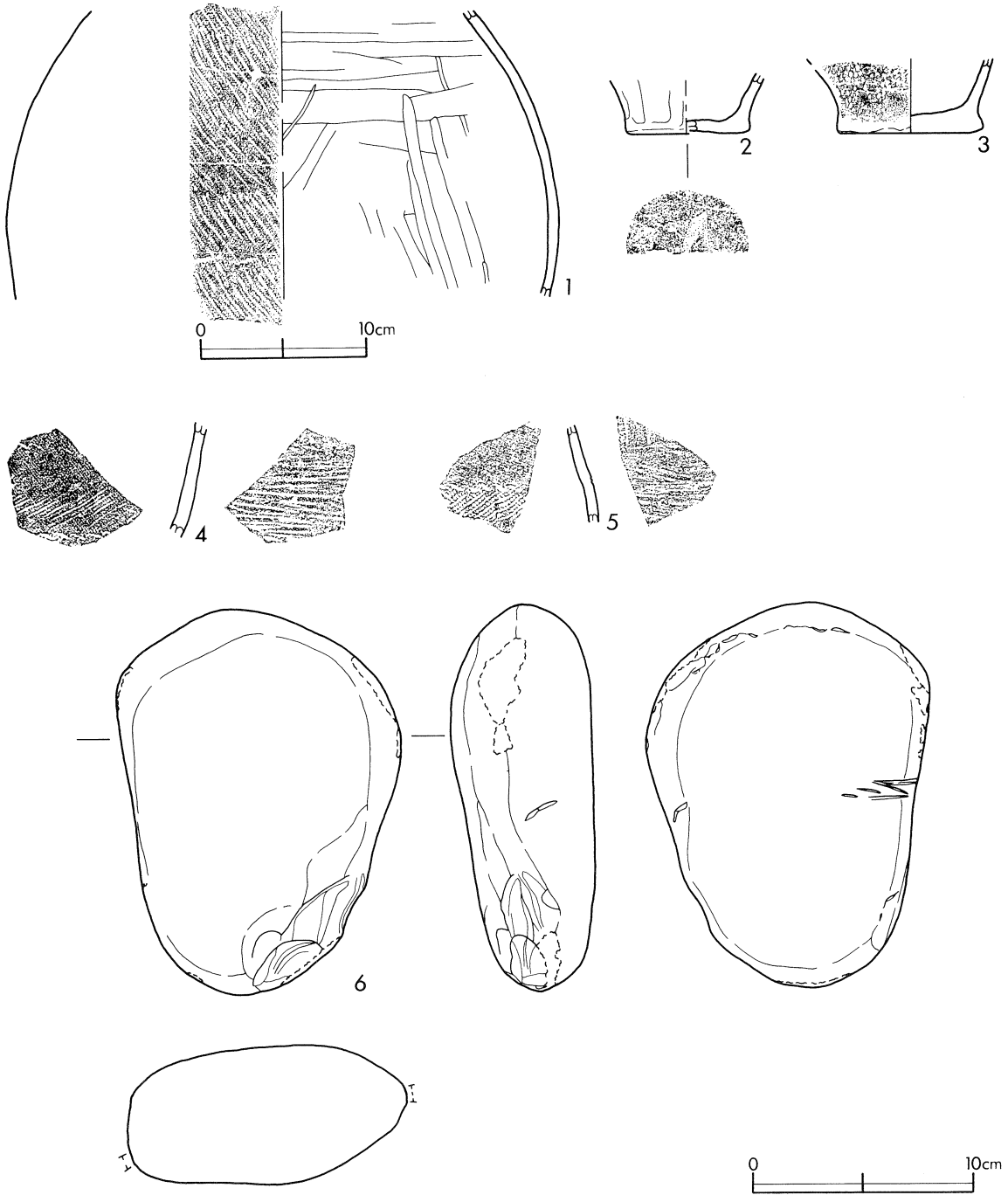
所見　本遺構は、出土遺物から弥生時代後期後半のものと思われる。炭化材が出土していることから住居廃絶後に焼失した可能性が考えられる。

第１号住居跡出土遺物

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	弥生土器	壺		(17.3)		にぶい黄橙	長石・石英	普	３０	表面に付加条RL+2L0段多条による施文 内面指先によるナデ 黒斑あり 大型の胴部片
2	弥生土器	甕		(2.4)	(5.6)	橙	長石・石英	普	5	底面に木葉痕あり。底部周縁すれる。
3	弥生土器	甕		(3.3)	6.6	橙	長石・石英	普	１０	底部接地面めくれる 輪積部で割れる 底面ナデ
6	石器	磨石類	長さ 17.4 幅 12.8 厚さ 6.5 重さ 1950 石材 フォルンフェルス						１００	3か所に敲打痕 一面に溝あり



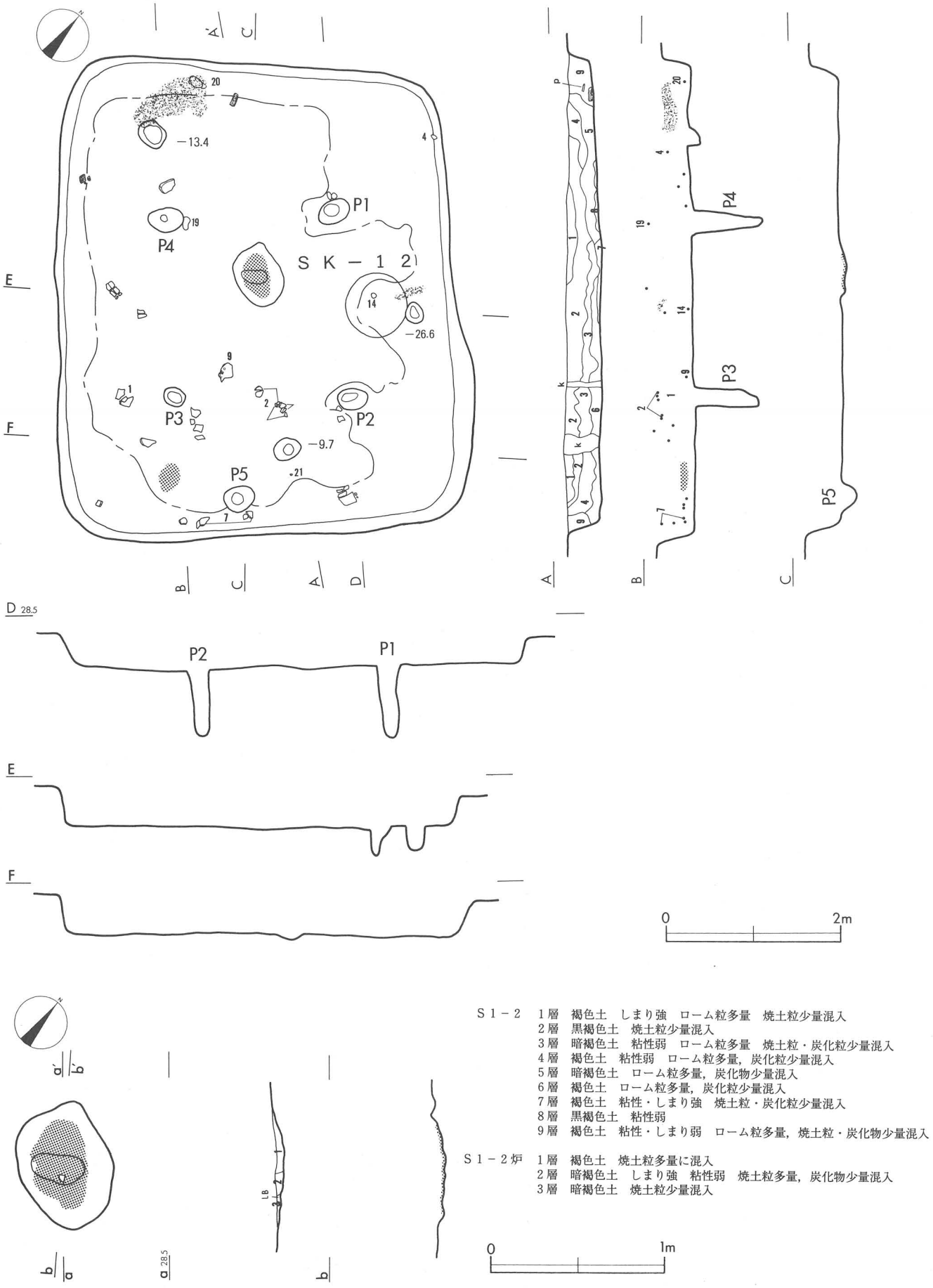
第6図　第1号住居跡実測図



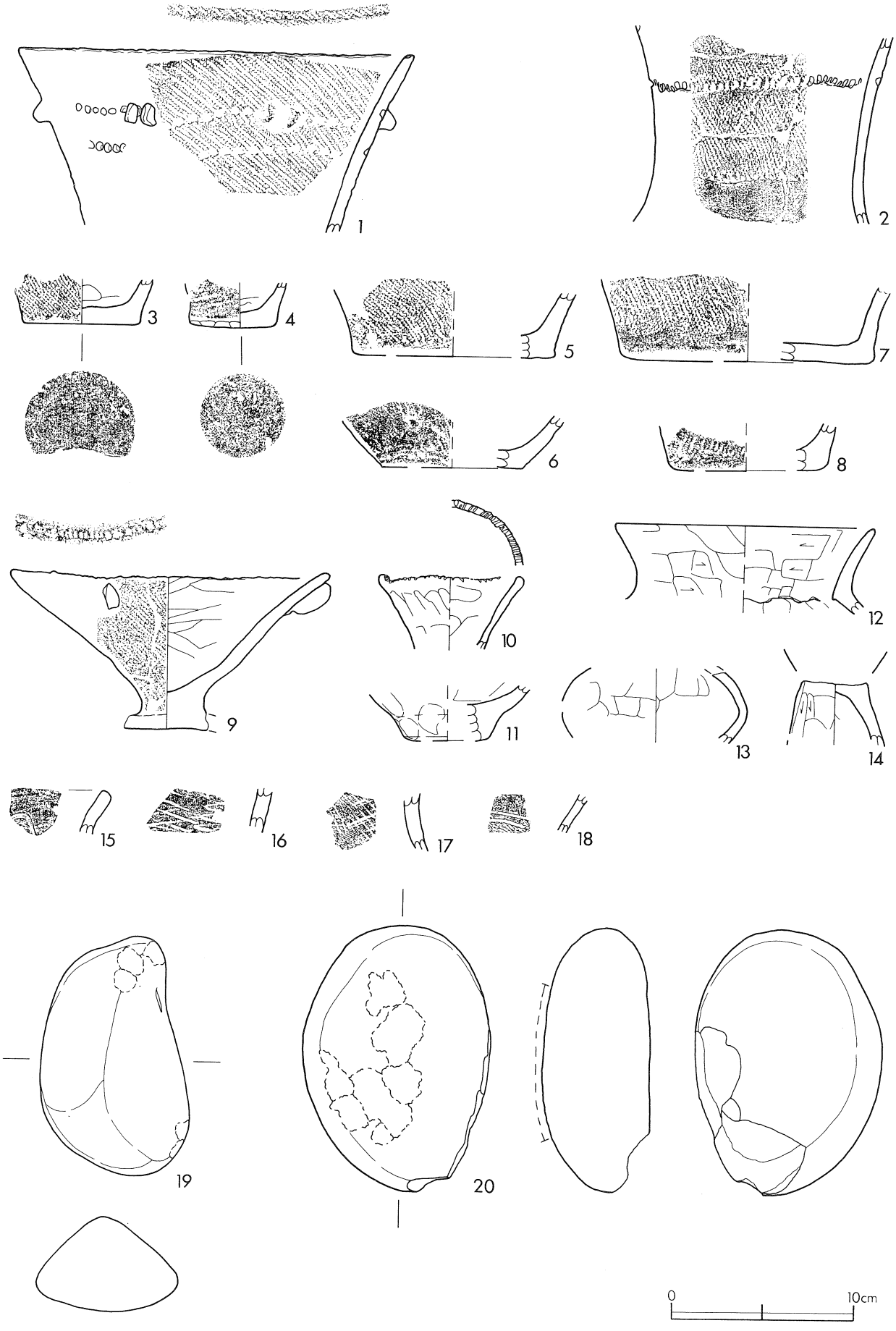
第７図　第１号住居跡出土遺物実測図

第２号住居跡〔旧第１８号住居跡〕（第８図・第９図№１～20・第10図№21　ＰＬ２・14・31）

位置　調査区中央北寄りの、標高28.25m付近の台地上、Ｐ・Ｑ－12・13区にわたり確認されている。第12号土坑と重複関係にあり、本住居跡のほうが古い。　**規模と平面形**　長軸5.27m、短軸4.37mの長方形を呈する。**主軸方向**　Ｎ－46°－Ｗ。　**壁**　壁高は北北西側で20cm、南南東側で41cmを計り、外傾して立ち上がる。**床**　全体的に平坦であるが、微妙に北北西壁部分が浅くなっている。硬化面は住居跡内の西半において壁から約20～40cmの範囲まで確認された。Ｐ１・Ｐ２の縁辺及び床面北東壁寄りは明瞭な硬化面が見られない。

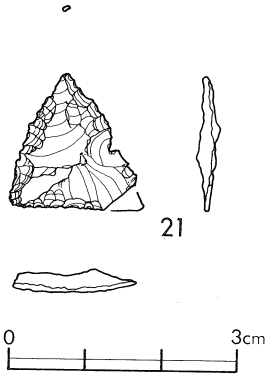


第8図　第2号住居跡実測図



第9図　第2号住居跡実測図(1)

ピット　P1～P5の５ヶ所とその他に３ヶ所確認され、P1～P４は主柱穴であり、P５は入口ピットである。その他のピットの性格は不明である。主柱穴の中でP１・P４がP２・P３の深さより深い。　**炉**　１ヶ所確認され、P1とP４を結ぶラインよりやや南南東壁寄りにあり、平面形は長軸0.72、短軸0.55mの楕円形を呈する。床面を約５cmほど掘り込んだ地床炉である。炉の奥側が焼土の混入する割合が多く、手前側は炭化物の混入する割合が多い。炉床は底面が良く焼け、凹凸が激しく、赤変硬化している。　**覆土**　９層から構成され、覆土上層の第２層は黒褐色を呈し黒味が強い。他の土層は褐色系の土層である。住居内の北北西壁寄りと第12号土坑近辺に、厚さ最大14cmの白色粘土ブロックが覆土中から出土した。また南壁近くには厚さ１～２cmの焼土が確認された。第９層からは大型の炭化物が出土している。　**遺物**　遺構内から出土した遺物の量は少ない。No.１～10は弥生土器で、No.11～14は古墳時代の土師器である。No.11～14は住居内３区から出土し、No.13は２・３・４区の覆土上層から出土した。No.14は第12号土坑内より出土している。No.９・14・20は床面近くから出土し、他の遺物は覆土上層から出土している。No.20の磨石類は白色粘土ブロックの下層より出土した。No.15～18は弥生土器片である。この他特徴的な遺物としてアプライト塊や剥片が出土している。特に住居内全体で109ｇが出土し３区から合計24ｇの剥片が出土した。この他78ｇを測るアプライト塊が出土した。出土遺物の中には第１号住居跡出土土器と接合したものがある。　**所見**　本遺構は他の住居跡に比べて覆土の焼土や炭化物の量が非常に少ない。出土遺物から弥生時代後期後半のものと思われる。



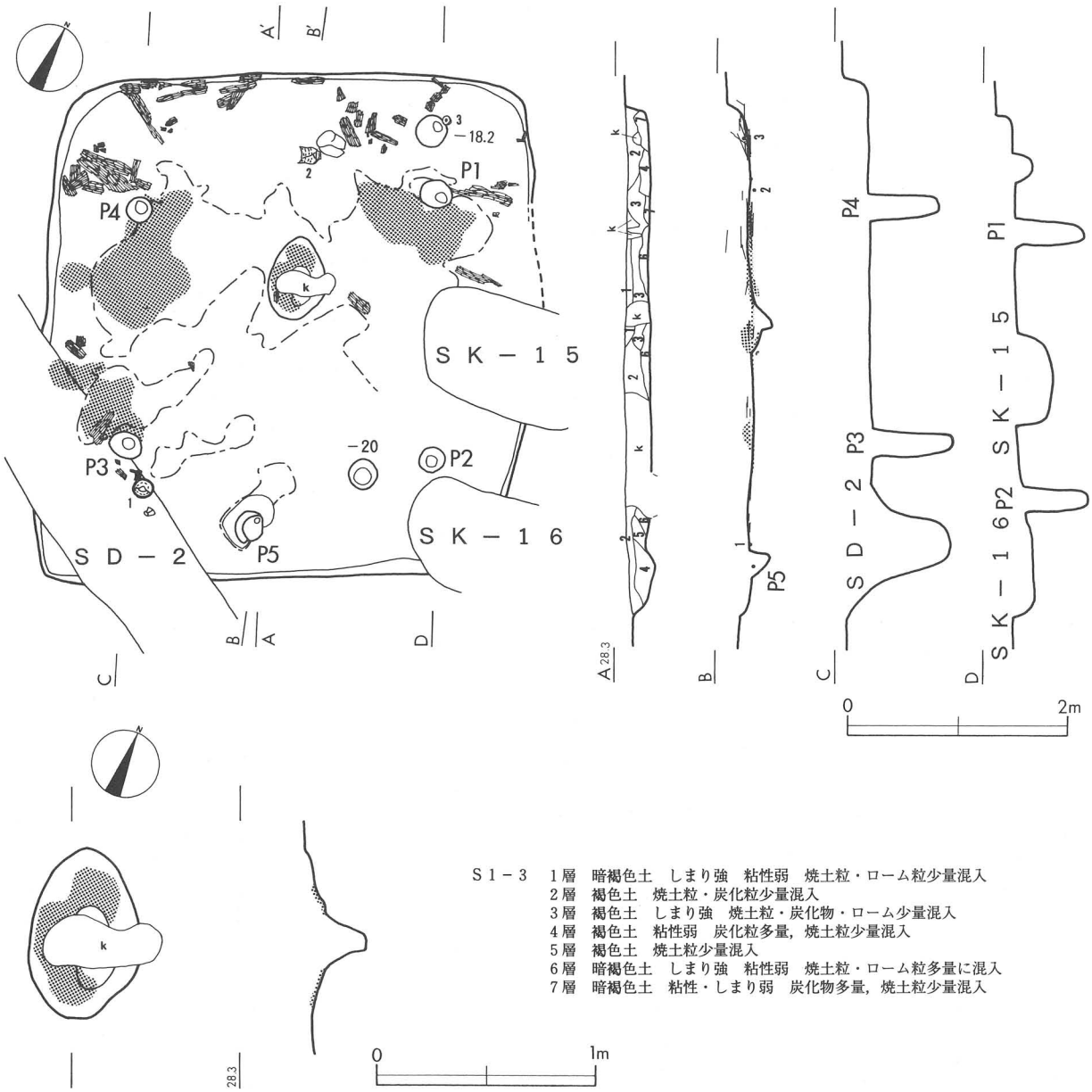
第10図
第２号住居跡出土遺物(2)

第２号住居跡出土遺物

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	弥生土器	壺	(21.6)	(9.7)		にぶい黄橙	長石・石英	良	5	口縁部に縄文原体先端による刺突列 口唇部に回転縄文施文 2個1組の貼りコブ
2	弥生土器	壺		(10.7)		橙	長石・石英	普	１０	有段の口縁部で有段部に刺突列が巡る 頸部無文帯の他は付加条1種により施文
3	弥生土器	甕		(2.5)	6.4	浅黄橙	長石・石英	普	１０	底面木葉痕 付加条１種RL+2Lによる施文 内面はナデ
4	弥生土器	小型甕		(2.5)	4.7	にぶい橙	長石・石英	不良	２０	小型の土器 内面ナデ 底部に刺圧痕 付加条1種施文
5	弥生土器	甕		(3.5)	(11.2)	にぶい黄橙	長石・石英	普	5	器面に付加条１種RL+2Lによる施文 器壁内面崩落 3区出土
6	弥生土器	甕		(2.8)	(7.8)	にぶい黄褐	長石・石英	普	5	底面からの立ち上がり緩い 付加条１種RL+2Lによる施文 4区出土
7	弥生土器	甕		(4.6)	13.9	にぶい橙	長石・石英	普	１０	器面に付加条１種施文 周縁部が擦れている
8	弥生土器	甕		(2.6)	(7.6)	橙	長石・石英	不良	5	器面に付加条１種RL+2L（0段多条）内面に付着物 底部の側縁擦れる 4区出土
9	弥生土器	高坏	17.5	8.6	(4.5)	浅黄橙	長石・石英	普	８０	口唇部に縄文原体の押圧 口縁部に8単位の貼りコブ 底部縁辺は欠損
10	弥生土器	ミニチュア土器	(8.0)	(4.0)		にぶい橙	長石・石英	普	３０	口唇部にヘラ状工具による刻み目 外面縦方向のナデ
11	土師器	甕		(3.0)	(4.8)	明黄褐	雲母細片	普	5	外面は指頭圧痕 内面ヨコナデ 底部の器厚厚い 3区出土
12	土師器	甕	(14.2)	(4.7)		にぶい赤橙	長石・石英	普	5	口縁部内外面ヘラ状工具によるヨコナデ 3区出土 頸部は「く」の字状に屈曲
13	土師器	坩		(3.8)		橙	大粒の石英	普	２０	外面ヘラ状工具によるナデ 内面に指頭圧痕 4区出土
14	土師器	高坏		(3.4)		明黄褐	赤褐色粒	普	２０	外面縦方向の削り 内面縦方向のナデ 指頭圧痕残る
19	石器	磨石類	長さ 13.1 幅 8.2 厚さ 6.0 重さ 705 石材 フォルンフェルス						１００	上端3ヶ所に敲打痕 下端2ヶ所に敲打痕
20	石器	磨石類	長さ 14.6 幅 10.4 厚さ 6.1 重さ1210 石材 石英斑岩						１００	片側平坦面に敲打痕
21	石器	石鏃	長さ 1.8 幅(1.7)厚さ 0.3 重さ(0.3) 石材 黒曜石						基部辺を欠損	三角形の無茎鏃 周辺部に押圧剥離 主要剥離面を残す

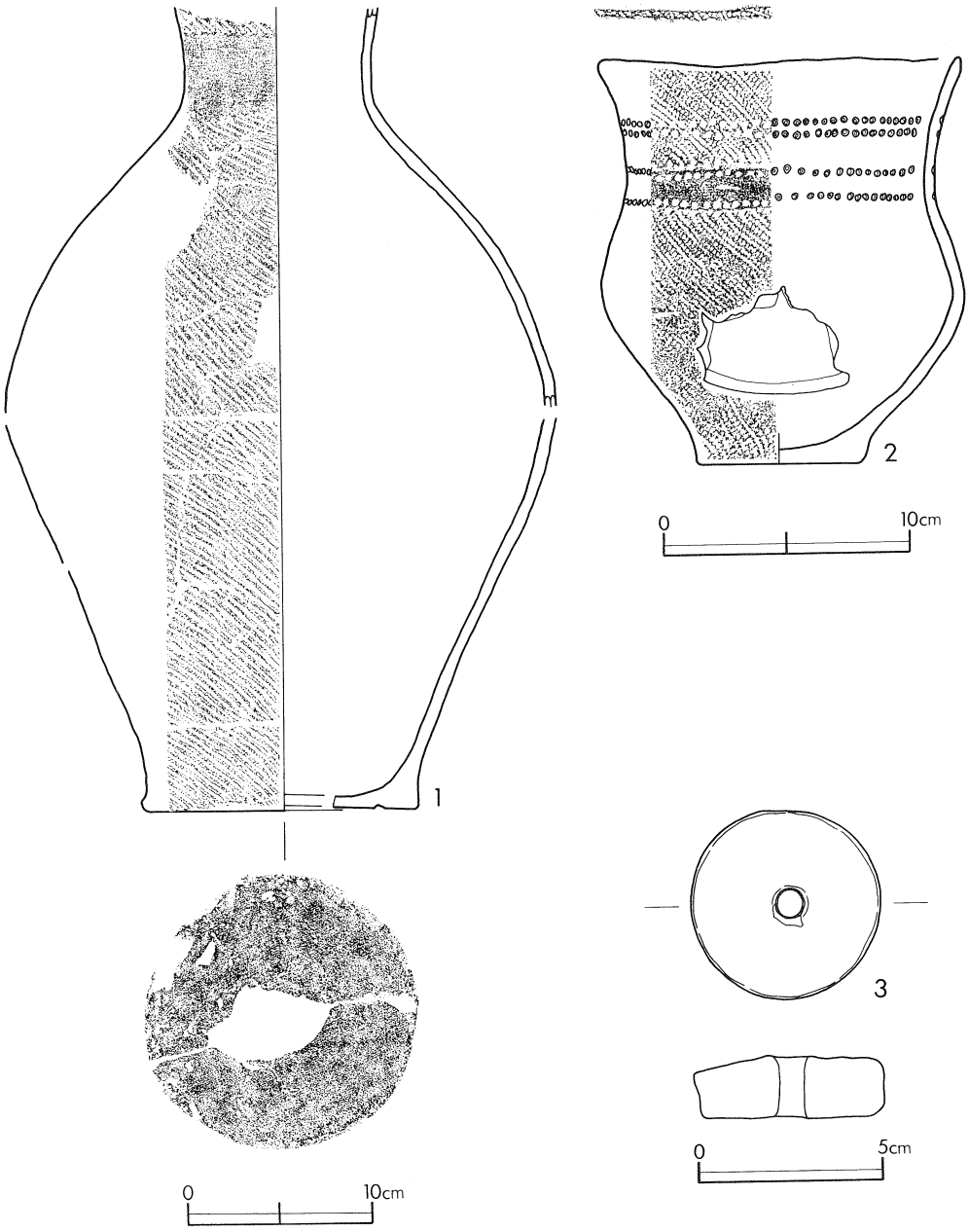
第３号住居跡〔旧第３０号住居跡〕（第11図・第12図No.１～３　ＰＬ２・14・31）

位置　調査区中央北東寄りの、標高28.25m付近の台地上、Ｒ・Ｓ－13区にわたり確認されている。住居跡の南西隅が第２号溝に切られ東壁寄りは第15・16号土坑により壊されている。　**規模と平面形**　長軸4.38m、短軸4.12mの正方形を呈する。　**主軸方向**　Ｎ－20°－Ｗ。　**壁**　壁高は20～11cmを測り、外傾して立ち上がる。　**床**　全体的に平坦であるが、所々に住居跡廃絶後の撹乱が認められた。硬化面は本来Ｐ1～Ｐ5に囲まれた範



第11図　第３号住居跡実測図

囲であると考えられるが、撹乱により明瞭に遺存していない。Ｐ1・Ｐ4・Ｐ3付近に遺存する硬化面は熱を受け赤変焼土化している部分が見られる。　**ピット**　Ｐ1～Ｐ5の５ヶ所とその他に２ヶ所確認され、Ｐ1～Ｐ4は主柱穴であり、Ｐ5は入口ピットである。その他のピットの性格は不明である。主柱穴の中でＰ1・Ｐ4は同様な深さを持つ。Ｐ1の北側には深さ18.2cmのピットがあり、Ｐ２とＰ５の間には深さ20cmのピットがある。**炉**　１ヶ所確認され、Ｐ1とＰ4を結ぶライン上中央のやや南壁寄りにあり、平面形は長軸0.75、短軸0.46mの楕円形を呈する。床面を約８cmほど掘り込んだ浅い凹みの地床炉である。炉床は底面が良く焼け、赤変硬化している。炉の中央は後世の撹乱を受けている。　**覆土**　７層から構成され、第４・６・７層中より炭化物が多く出土している。住居跡の西半部分の壁寄りには炭化材・物が多く遺存し、焼けた床と焼土の堆積が見られた。焼土の堆積した部分や焼けた硬化面の部分には炭化材・物は見られない。　**遺物**　№1はかろうじて溝の撹乱を受けていない。壷形の弥生土器で、Ｐ3の南側から割れた破片が重なるように出土し、それらを取り除くと底部が検出された。底面には外側から打ち欠いて穿孔したと思われる痕跡が見られる。№2は胴部に穿孔され



第12図　第３号住居跡出土遺物実測図

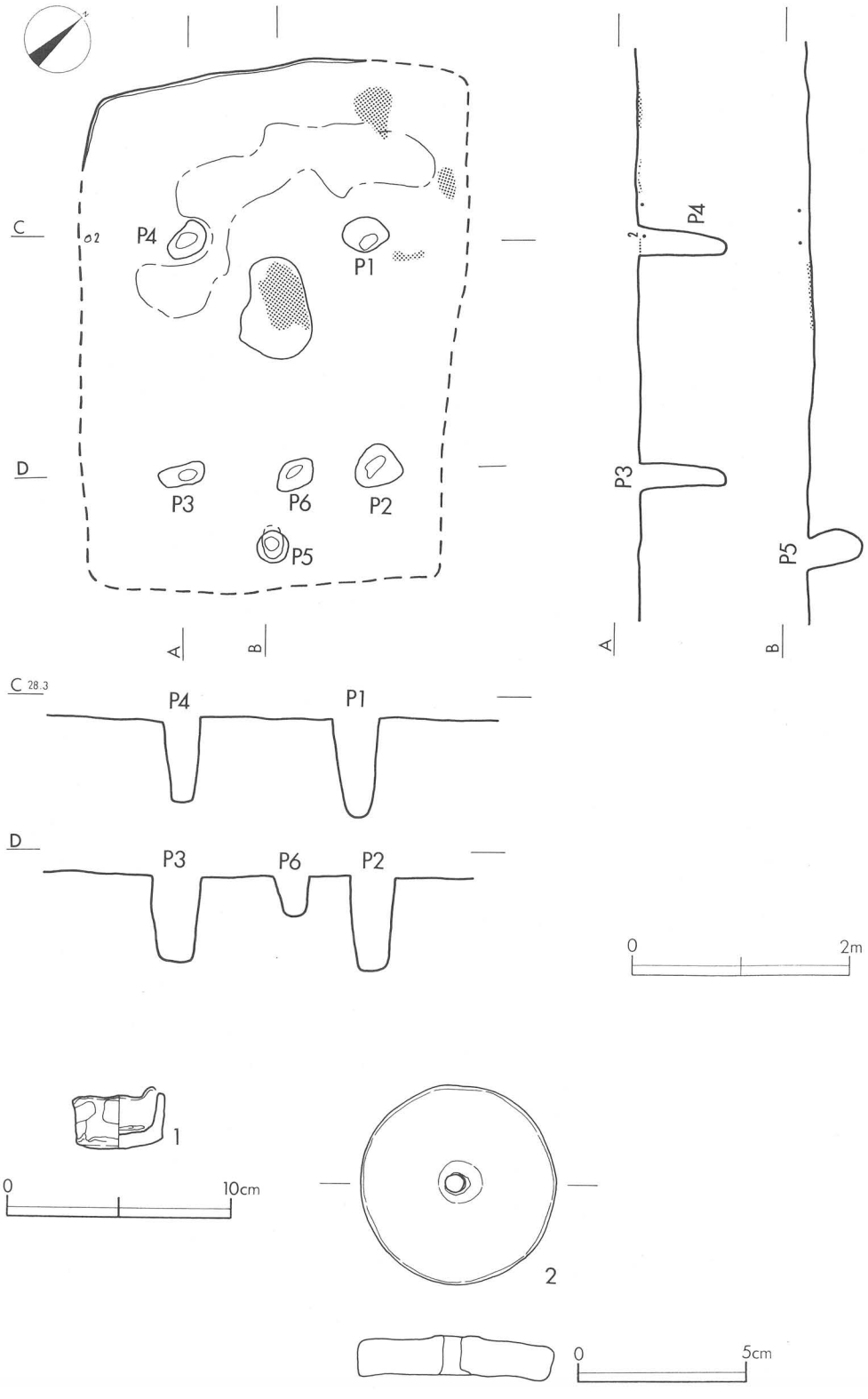
た甕形土器であり、北壁近くから横倒しの状態で割れずに出土した。Ｐ4の西側には厚さ８cmの炭化材が出土した。炭化材の出土状況は壁側が高いレベルで中央寄りが低い。　**所見**　本遺構は出土遺物から弥生時代後期後半のものと思われる。本住居跡は、床面の被熱による赤変や炭化材・物の出土状況等から住居廃絶後に廃材を焼却した可能性が考えられる。

第３号住居跡出土遺物

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	弥生土器	壺		(21.9)	14.8	橙	礫・長石	普	５５	頸部無文帯 底部に焼成後の穿孔 刺圧痕 付加条１種RL+2L縄文施文
2	弥生土器	甕	14.7	16.3	7.0	橙	細砂粒	普	９５	胴部に穿孔 頸部に刺突列 頸部無文帯以外は付加条１種 口唇部にも縄文施文 炭化物付着
3	土製品	紡錘車	上面径 5.0 下面径 5.0 厚さ 1.7 重さ 53 孔径 0.8					普	１００	断面は長方形 穿孔方向は下面から 上下両面共に丁寧なナデ調整

第４号住居跡〔旧第１７号住居跡〕（第13図　ＰＬ２・14・31）

位置　調査区中央北東寄りの、標高28.00m付近の台地上、Ｔ－11・12区にわたり確認されている。**規模と平面形**　長軸4.68m、短軸3.46mの長方形を呈する。　**主軸方向**　Ｎ－52°－Ｗ。　**壁**　壁は北西側が２～３cm



第13図　第４号住居跡実測図・出土遺物実測図

残っている程度で、他の壁は残っていない。　**床**　全体的に平坦で水平である。部分的に確認調査時に削平してしまっている。現状で確認されている硬化面は、P4の周辺とP1・P4を結ぶラインより北西側に見られた。P4の縁辺または炉の周辺は硬化していない。壁はほとんど削平されているが、床面は土層の色調の違いなどにより住居外の部分とは区別がつく。　**ピット**　P1～P6の6ヶ所確認され、P1～P4は主柱穴であり、P5は入口ピットである。P6はP2・P3のライン上のP2寄りに確認され、性格は不明である。P3の平面形は長楕円形を呈する。　**炉**　1ヶ所確認され、P1とP4を結ぶライン上中央のやや南壁寄りにあり、平面形は長軸0.90、短軸0.65mの楕円形を呈する地床炉である。炉床は底面が良く焼け、赤変硬化している。　**覆土**　北西壁近くには焼土が確認された。床面上に2～4cmの薄い焼土層がほぼ床面直上で確認された。　**遺物**　No.1はミニチュア土器でP1内の中位程度の深さから出土した。No.2の土製紡錘車は完形品で西壁際で出土している。

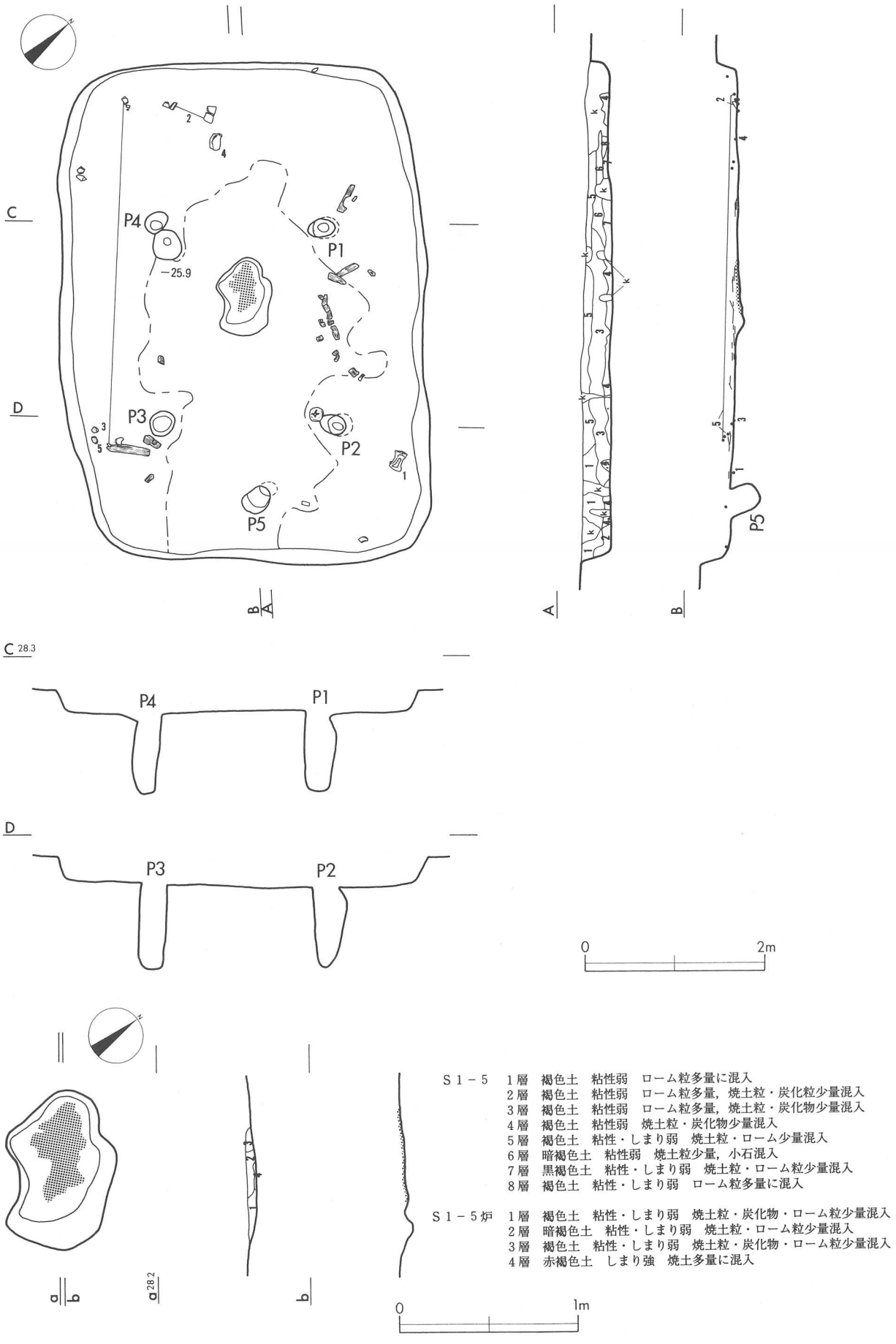
所見　本遺構は出土遺物から弥生時代後期後半のものと思われる。本住居跡は試掘時のトレンチにより壊され遺存状況は良くない。

第4号住居跡出土遺物

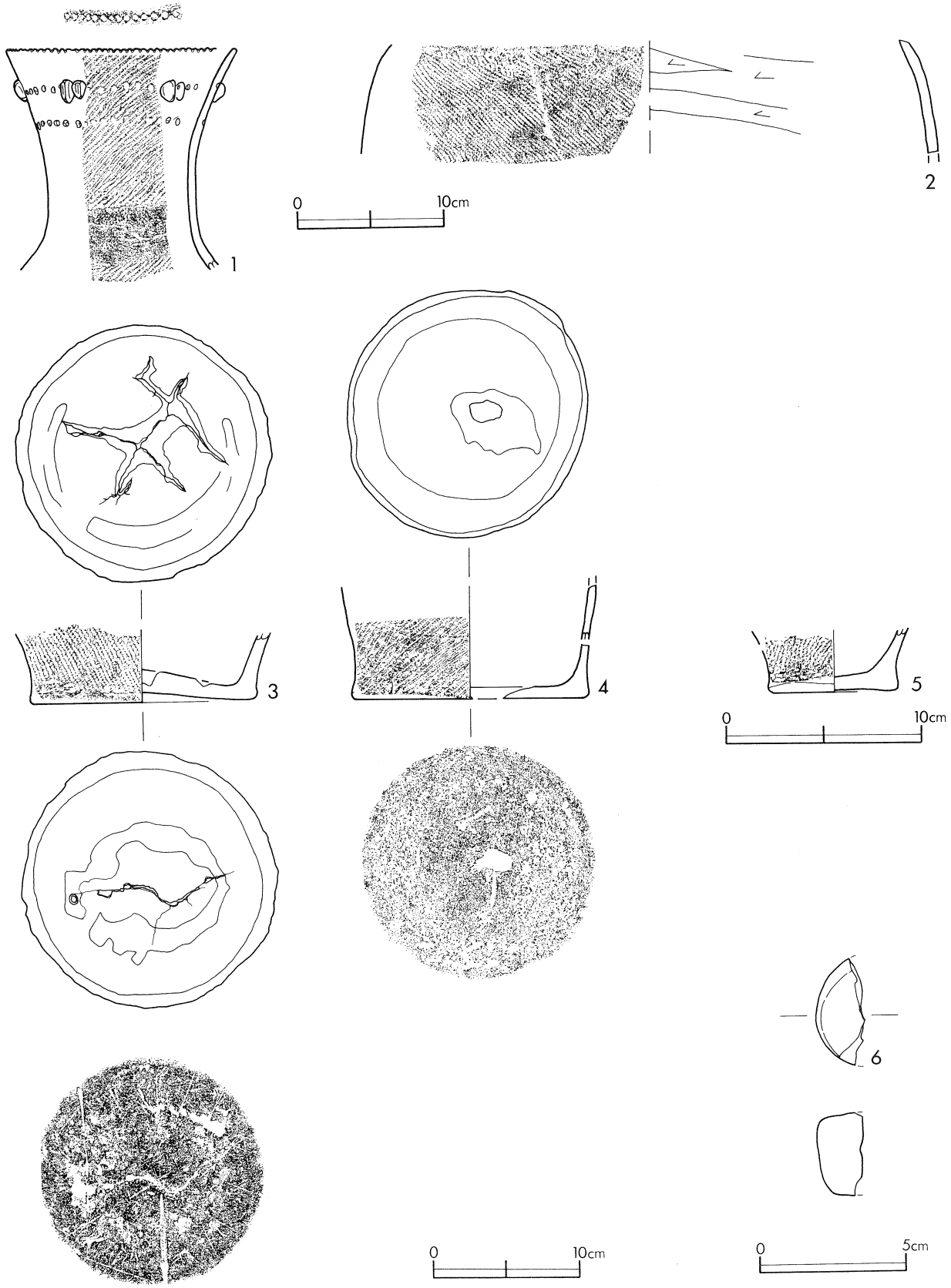
番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	弥生土器	ミニチュア	4.1	2.7	3.8	浅黄橙	長石・砾	普	80	口縁部欠損 底部は弱い丸底を呈し器壁は垂直に立ち上がる 輪積痕あり P1内出土 内面赤色
2	土製品	紡錘車	上面径 5.9 下面径 1.2 厚さ 5.6 重さ 12 孔径 0.5					普	100	平面形は円形 断面形は偏平な長方形 表面はナデ調整 穿孔方向は下面から

第5号住居跡〔旧第1号住居跡〕（第14図・第15図No.1～6・第83図　PL3・14・31）

位置　調査区中央北西寄りの、標高28.00m付近の台地縁辺、H－16区にわたり確認されている。住居跡の東側には第6号住居跡が存在する。　**規模と平面形**　長軸5.28m、短軸3.72mの長方形を呈する。　**主軸方向**　N－51°－W。　**壁**　壁高は34～23cmを測り、外傾して立ち上がる。　**床**　全体的に平坦で水平である。硬化面はP5方向からP1～P4に囲まれた範囲に伸びる。ピットの縁辺までは硬化範囲が及ばない。　**ピット**　P1～P5の5ヶ所とその他にP4に接して1ヶ所確認され、P1～P4は主柱穴であり、P5は入口ピットである。その他のピットの性格は不明である。主柱穴の中でP1・P2・P4は同様な深さを持つ。P1・P2の断面形は床面近くが抉れている。　**炉**　1ヶ所確認され、P1とP4を結ぶライン上中央のやや南壁寄りにあり、平面形は長軸0.85、短軸0.50mの不正楕円形を呈する。床面を若干掘り込んだ浅い凹みの地床炉である。炉床は底面の奥側が良く焼け、赤変硬化している。　**覆土**　6層から構成され、大まかに分けるとローム粒を比較的多く含む第1・3・5・6層と炭化物や焼土粒を多く含む第4・7・8層とローム粒を一番多く含む第2層の3つに区別できる。　**遺物**　出土遺物は皆弥生時代のもので、No.1・3・4は床面近くから出土している。No.5は北壁際の破片とP3近くの遺物が接合した。No.1は壷形土器の口縁部から頚部の個体である。No.2は大型の壷形土器の胴部で穿孔されている。No.3・4は大型の壷形土器の底部である。No.2はP2に近接して出土し、底面に木葉痕や円形の擦れた痕跡が見られ、その中央に亀裂が入る。亀裂に沿って指でナデたような赤彩がなされている。No.4は底面に布目痕が見られ、底部外面より穿孔がなされている。土製品としては紡錘車の残欠が出土している。住居跡内の東及びP3周辺の床面近くには炭化材・物が多く遺存し、住居中央部分からは見られない。特にNo.5の遺物に近接した炭化材は厚さ10cmのものである。他のものは厚さ1～3cmの板状のものがほとんどであるが中には棒状のものも存在した。炭化物の出土状態は床面近くから出土している。この他、アプライトの剥片が住居内第4層中や4区より1.8g出土している。　**所見**　本遺構は出土遺物から弥生時代後半期のものと思われる。本住居跡は土層の堆積状況や炭化材等の出土状況から住居廃絶後に廃材を焼却し燃焼途中で埋め



第14図　第5号住居跡実測図



第15図　第５号住居跡出土遺物実測図

第５号住居跡出土遺物

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	弥生土器	壺	15.8	15.3	5.7	にぶい黄橙	長石・石英	良	２０	付加条１種施文 口唇部に縄文施文 口縁部に竹管や縄による刺突列 ２個１組６単位の貼りコブ
2	弥生土器	壺		(7.7)		橙	長石・石英・雲母	良	5	輪積痕が擬口縁を呈す 器面にRLが施文 内面ヘラナデ
3	弥生土器	壺		(4.9)	15.7	明黄褐	長石・石英・雲母	良	１０	底面に焼成時の亀裂あり 亀裂上を焼成後に赤彩 木葉痕あり 底面円形に擦れる
4	弥生土器	壺		(3.6)	15.4	にぶい黄橙	長石・石英・雲母	良	１０	外面付加条１種LR+2R縄文施文 内面著しい崩落 底部に布目痕 底部外側より穿孔
5	弥生土器	甕		(3.2)	6.4	にぶい橙	長石・石英・雲母	良	１０	外面付加条１種 外面に炭化物付着
6	土製品	紡錘車	上面径(3.6)下面径(2.6)厚さ(2.8)重さ 20 孔径 0.5					普	３０	断面形は方形を呈し側面には指頭圧痕及び刷毛痕

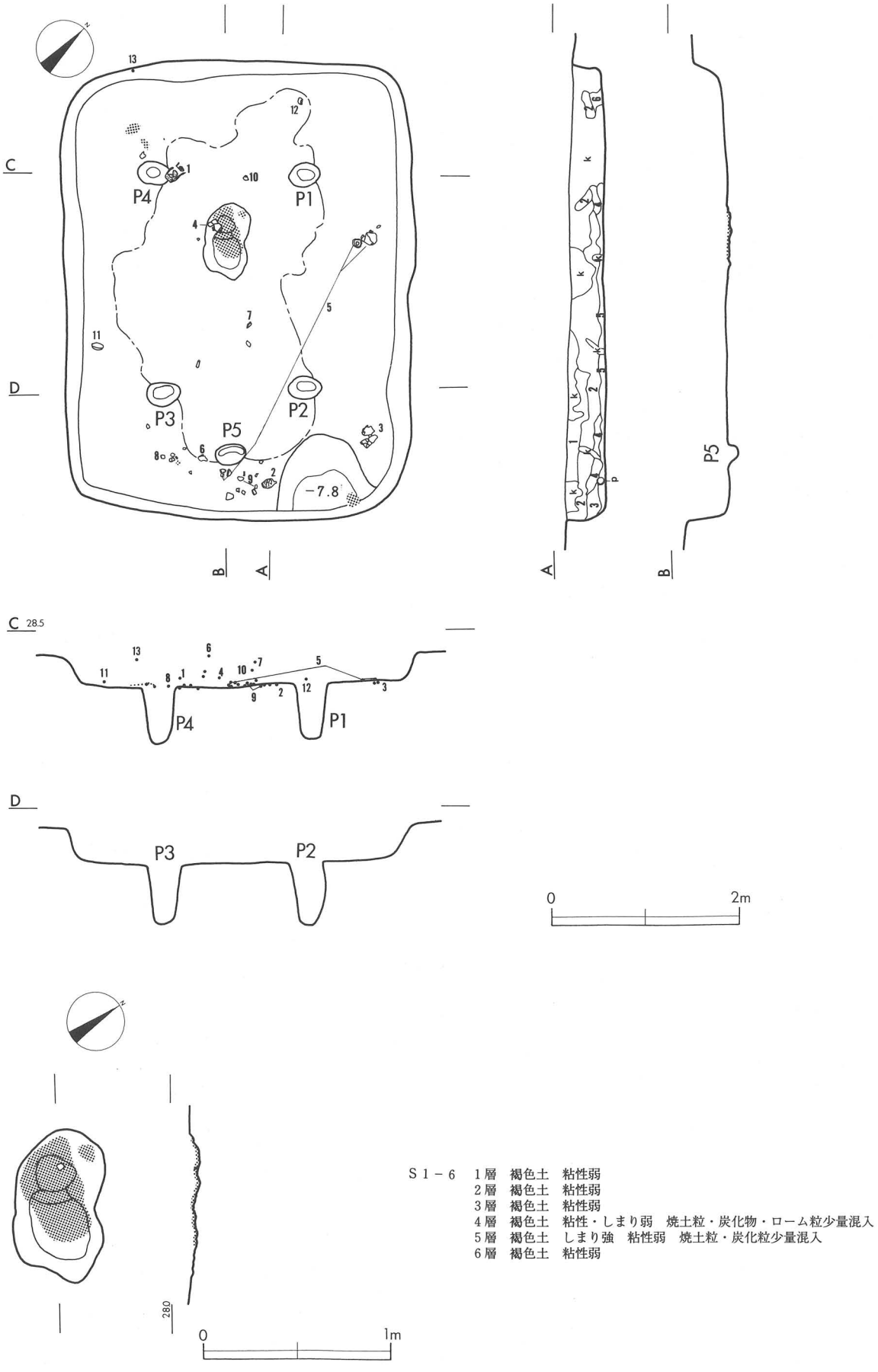
戻されたことが想定される。No.３の壺形土器底面の表現は、まるで女性の陰部をシンボリックに表徴したかのように見える。

第６号住居跡〔旧第２号住居跡〕（第16図・第17・18図No.１～13　ＰＬ３・14・15・31）

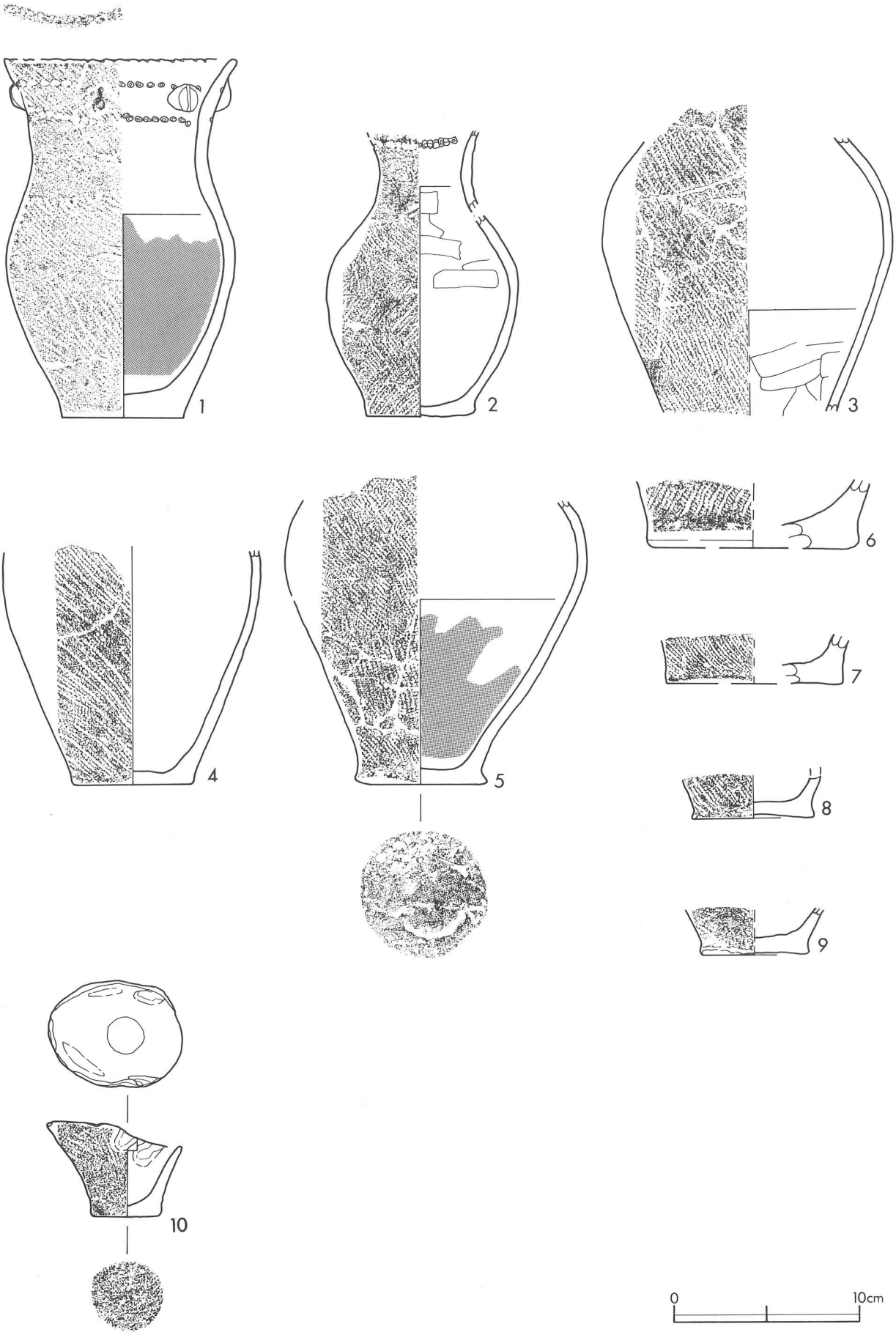
位置　調査区中央の、標高28.25m付近の台地上、Ｊ・Ｋ－16区にわたり確認されている。周辺には第５・７号住居跡、第23号土坑が存在する。　**規模と平面形**　長軸4.52m、短軸3.33mの長方形を呈する。　**主軸方向**　Ｎ－44°－Ｗ。　**壁**　壁高は45～31cmを数え南側が良く残っており、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　全体的に平坦で水平である。硬化面はＰ1～Ｐ5を取り囲む場所とＰ1の北側に張り出すように確認された。　**ピット**　Ｐ1～Ｐ5の５ヶ所の他、南壁に接して最深7.8cmの浅い落ち込みが確認され性格は不明である。Ｐ1～Ｐ4は主柱穴で、Ｐ5は入口ピットであり、浅く、底面の形状は細長い。Ｐ1～Ｐ5のピットの平面形は皆長楕円形を呈し、Ｐ1～Ｐ3の底面形は長楕円形を呈している。　**炉**　１ヶ所確認され、Ｐ1とＰ4の中間地点やや南壁寄りにあり、平面形は長軸0.74、短軸0.40mの長楕円形を呈する。床面が緩く段を持ち、約５cmほど掘り込んだ地床炉である。炉床は奥側の底面と側面が良く焼け、赤変硬化している。また炉の中からは焼成粘土塊が出土している。　**覆土**　６層から構成され、第４層に焼土粒・炭化物・粒が入り、他はローム粒が多く含まれる。住居の東西隅の床面近くからは小規模で厚さ約３cmの焼土の堆積が見られ、床面より若干浮いている。住居内の北側には底面まで達する撹乱が見られた。　**遺物**　No.１～10は弥生土器であり、No.2・3・5・8は床面近くから出土した。No.1・3・4・5・7～9は甕形土器である。No.1はＰ4にかかるように横倒しの状態で出土している。No.5は東壁際の破片とＰ5近くの破片が接合した。この中でもNo.1・5の内面には黒変している範囲がみられる。No.2・6は壷形土器であろう。No.10は注ぎ口を持つ小型の鉢形土器である。側縁部が指により押し潰されたような痕跡が残る。No.11～13は石器で、No.11・12は磨石類であり、No.13は石鏃である。No.13の石鏃は壁際の覆土上

第６号住居跡出土遺物

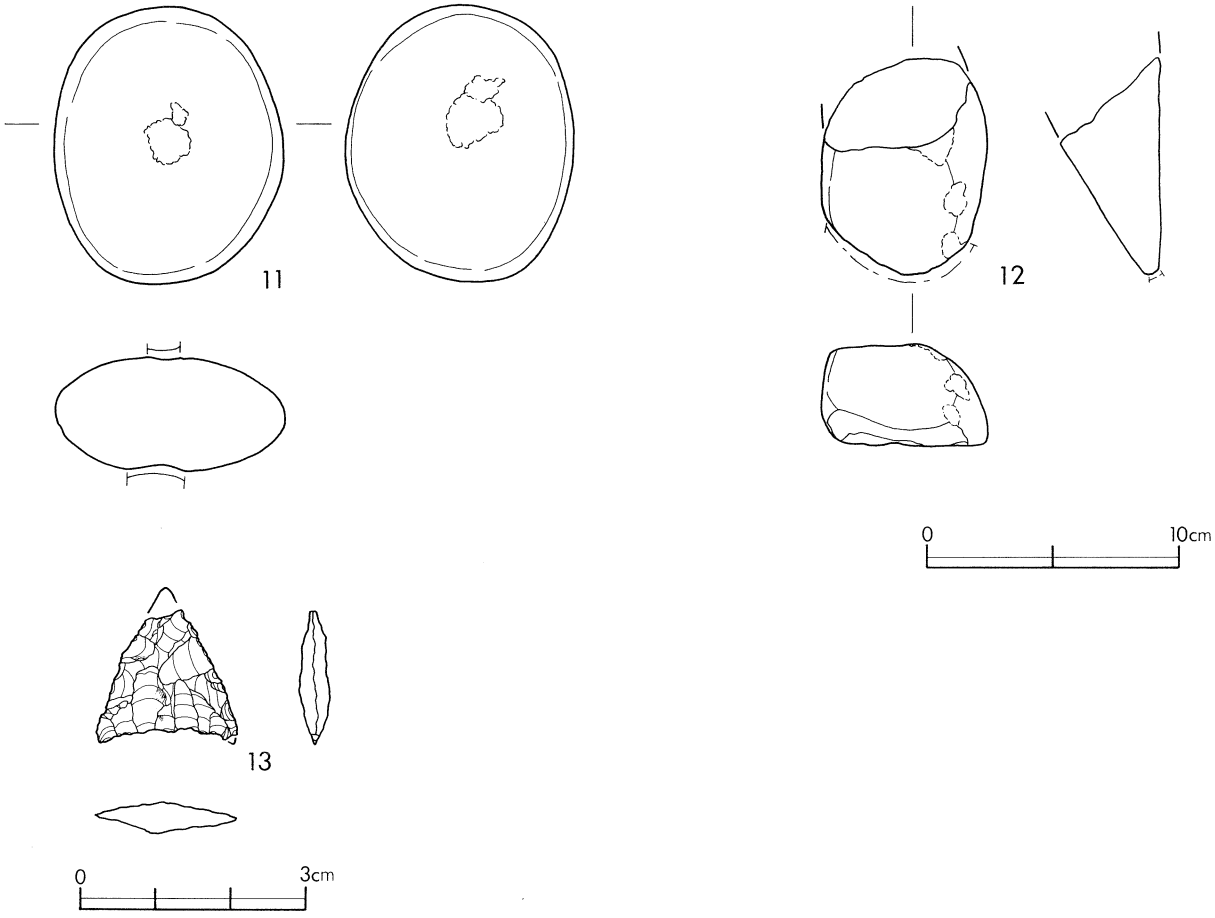
番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	弥生土器	甕	12.1	19.3	6.6	にぶい橙	長石・石英	普	８５	付加条１種RL+2Lによる施文 口縁部に刺突列 ７単位の貼りコブ 頸部無文帯 炭化物付着
2	弥生土器	小型壺		(15.4)	6.0	にぶい橙	長石・石英	普	７０	付加条１種LR+2RとRL+2Lによる羽状構成 頸部無文帯
3	弥生土器	甕		(15.2)		にぶい黄橙	長石・石英	不良	４０	付加条１種による施文 胴部上半に最大径 表面にスス付着 内面ヘラナデ
4	弥生土器	甕		(12.2)	(6.2)	にぶい褐	長石・石英	普	２０	付加条１種RL+2Lにより施文 内面底部付近に黒色の変色部分あり
5	弥生土器	甕		(15.6)	7.2	にぶい褐	長石・石英	普	４０	付加条１種により施文 底部に刷毛痕あり 器面に炭化物付着 内面に黒色の変色部分あり
6	弥生土器	壺		(3.5)	(11.6)	黄褐	長石・石英	普	5	付加条１種LR+2Rにより施文 底部周縁擦れる 木葉痕あり
7	弥生土器	甕		(2.6)	9.6	橙	長石・石英	普	5	付加条１種RL+2Rにより施文
8	弥生土器	甕		(2.2)	6.6	明黄褐	長石・石英	普	１０	付加条１種RL+2Lにより施文 輪積部分で割れる
9	弥生土器	甕		(2.4)	5.6	橙	長石・石英	不良	１０	付加条１種による施文 底部の縁辺めくれる
10	弥生土器	小型片口土器	長軸 7.3	5.1	3.6	にぶい黄橙	長石・石英	不良	１００	口縁部を左右から押し潰し、内面に指頭痕あり 底面へラ削り 付加条１種RL+2Lを施文
11	石器	磨石類	長さ 10.9 幅 9.1 厚さ 4.7 重量640 石材 石英斑岩						６６	表裏両平坦面に各１ヶ所ずつ凹みあり
12	石器	磨石類	長さ(8.5)幅 6.6 厚さ(4.0)重量248 石材 砂岩						１００	焼成を受けている 一部に敲打痕あり
13	石器	石鏃	長さ(1.8)幅 1.9 厚さ 0.4 重量0.9 石材 チャート						９５	抉りが明瞭ではなく、三角形を呈する 先端を欠損



第16図　第6号住居跡実測図



第17図　第 6 号住居跡出土遺物実測図(1)



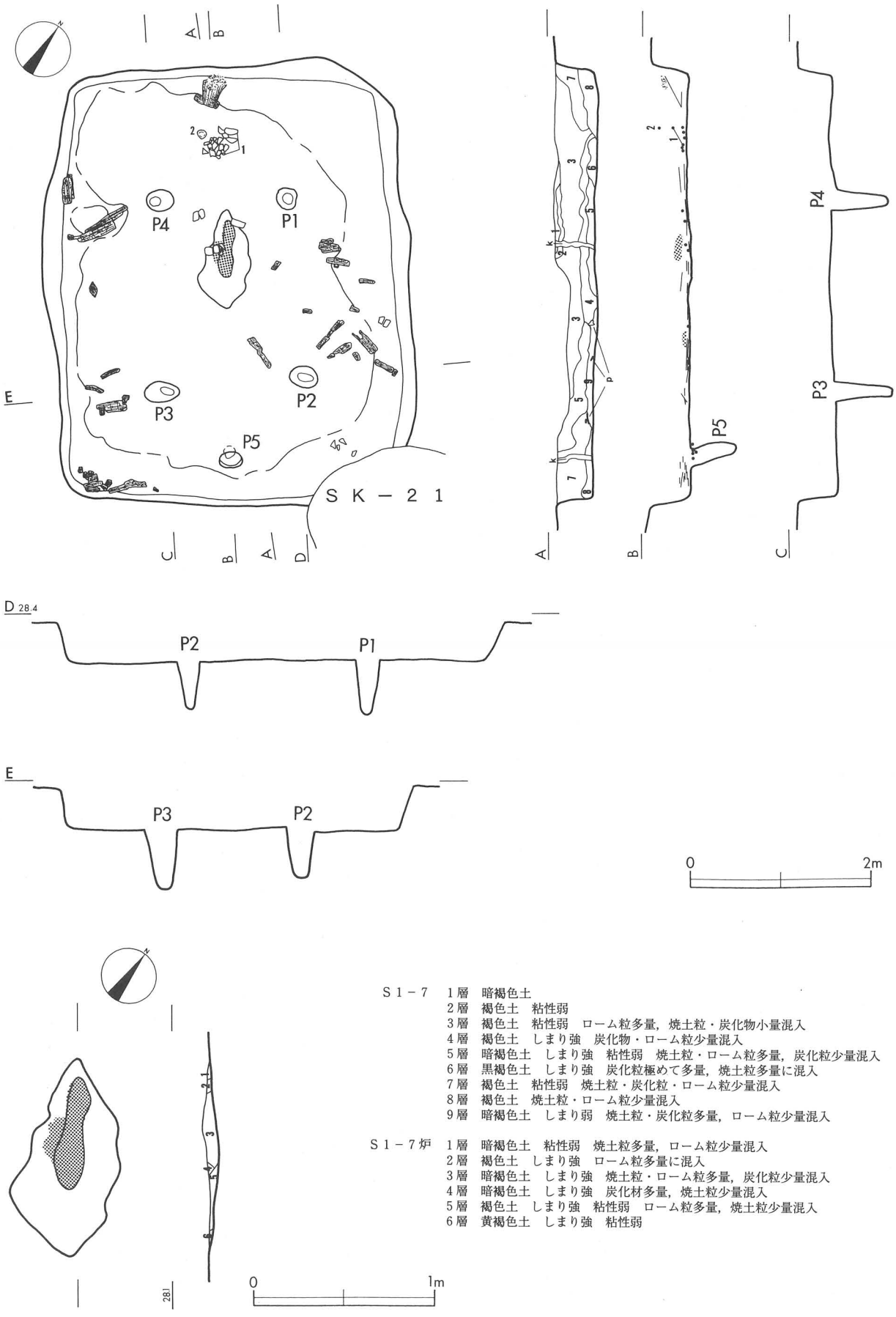
第18図　第６号住居跡出土遺物実測図(2)

層より出土しており、縄文時代の遺物の混入の可能性も考えられる。住居跡内の２区からはアプライトの剥片が14ｇ出土している。　**所見**　本遺構は出土遺物から弥生時代後期後半のものと思われる。

第７号住居跡〔旧第２４号住居跡〕（第19図・第20図№１～２　ＰＬ３・15）

位置　調査区中央の、標高28.25m付近の台地上、Ｍ－15・16区にわたり確認されている。同遺構は第21号土坑・第３号溝に切られている。周辺には第６・11号住居跡、第19号土坑が存在する。　**規模と平面形**　長軸4.56m、短軸3.58mの長方形を呈する。　**主軸方向**　Ｎ－38°－Ｗ。　**壁**　壁高は43～38cmを数え、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　全体的に平坦で、水平である。硬化面は、Ｐ1～Ｐ5に囲まれた範囲を越えて、壁近くまで踏み固められている。主柱穴Ｐ4の南西には、踏み固められた範囲が径40cm位の楕円形に独立している部分が確認された。　**ピット**　Ｐ1～Ｐ5の５ヶ所が確認された。Ｐ1～Ｐ4は主柱穴であり、Ｐ5は入口ピットで、傾斜して穿たれている。　**炉**　１ヶ所確認され、Ｐ1とＰ4の中間地点やや南壁寄りにあり、平面形は長軸1.04、短軸0.40mの不整長楕円形を呈する。床面を約５cmほど掘り込んだ地床炉である。炉の覆土は、手前側の第５・６層に炭化物・粒が多く含まれ、第３層には焼土が多い。炉床は底面奥が良く焼け、赤変硬化している。

覆土　９層から構成され、大きく分けるとローム粒を多く含む第１～４・５・７層と焼土粒と炭化物を多く含む第６・９層とに区別ができる。　**遺物**　遺物の多くは床面近くから出土している。№1・2は弥生土器であり、№１は壷形土器の口縁部から頸部の破片である。意図的に頸部から割られたようである。出土時には横倒し状



S1－7　1層　暗褐色土
2層　褐色土　粘性弱
3層　褐色土　粘性弱　ローム粒多量，焼土粒・炭化物小量混入
4層　褐色土　しまり強　炭化物・ローム粒少量混入
5層　暗褐色土　しまり強　粘性弱　焼土粒・ローム粒多量，炭化粒少量混入
6層　黒褐色土　しまり強　炭化粒極めて多量，焼土粒多量に混入
7層　褐色土　粘性弱　焼土粒・炭化粒・ローム粒少量混入
8層　褐色土　焼土粒・ローム粒少量混入
9層　暗褐色土　しまり弱　焼土粒・炭化粒多量，ローム粒少量混入

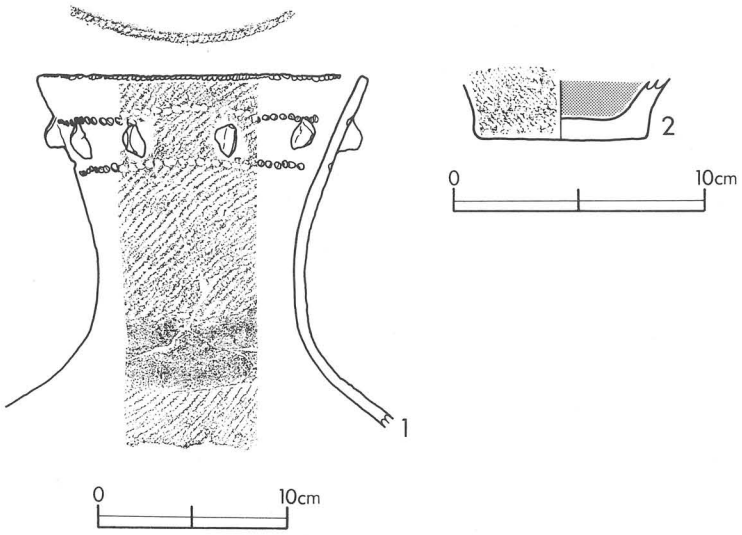
S1－7炉　1層　暗褐色土　粘性弱　焼土粒多量，ローム粒少量混入
2層　褐色土　しまり強　ローム粒多量に混入
3層　暗褐色土　しまり強　焼土粒・ローム粒多量，炭化粒少量混入
4層　暗褐色土　しまり強　炭化材多量，焼土粒少量混入
5層　褐色土　しまり強　粘性弱　ローム粒多量，焼土粒少量混入
6層　黄褐色土　しまり強　粘性弱

第19図　第7号住居跡実測図

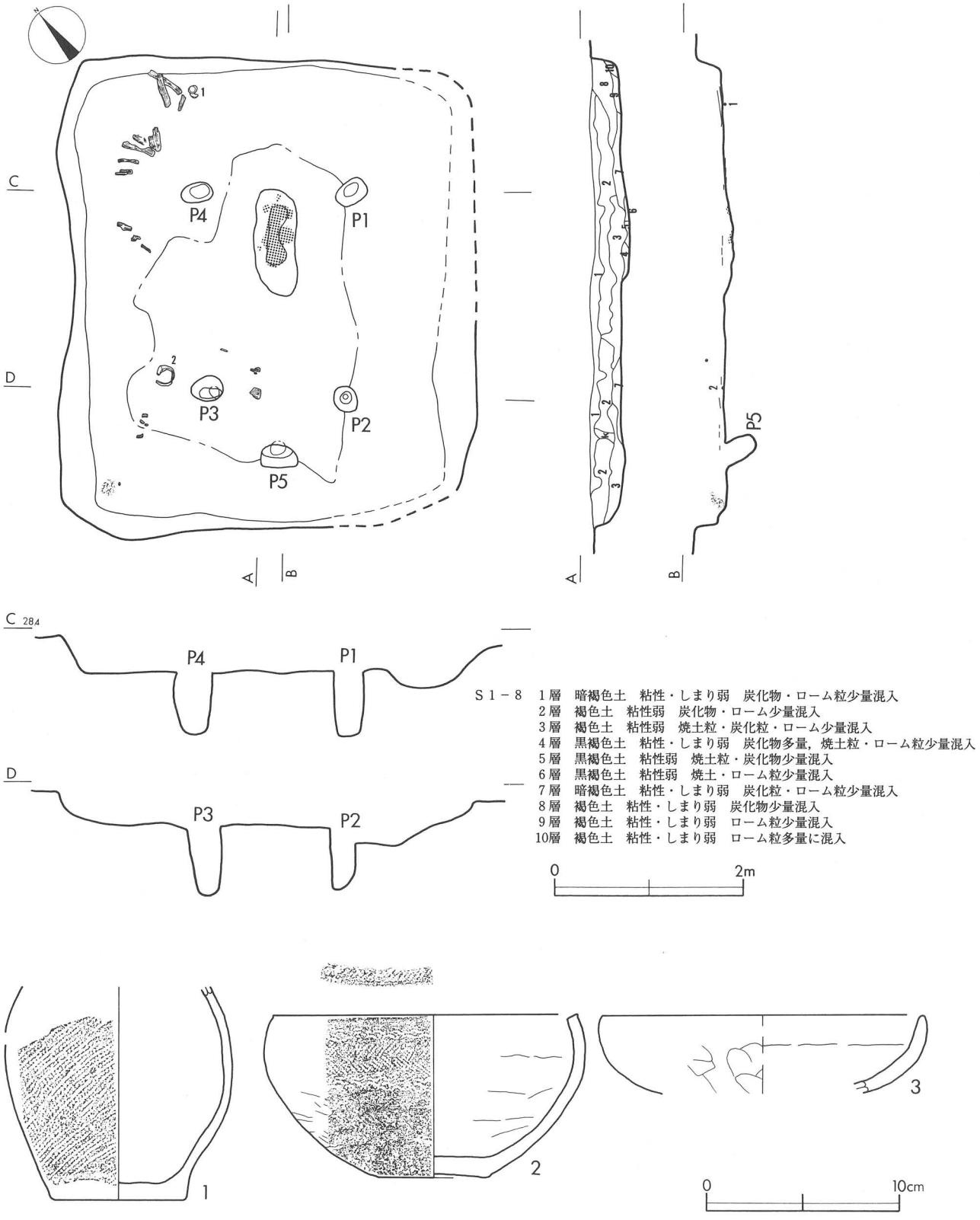
態で割れており床面近くから出土したが、その一部は覆土上層のものと接合した。№2は甕形土器の底部である。覆土上層から出土している。遺構に伴わない遺物であるが、覆土中より寛永通宝が出土した。北壁の炭化物上の粘土は厚さ２～４cmで炭化物の上に乗るように出土した。壁寄りの床面からは炭化材・物や焼土が出土し、炉から入り口周辺にかけては炭化材・物が見られない。炭化材は壁寄りから中央に向かい並行に並ぶように検出された。それぞれは傾斜した状態で出土し、若干床面より浮いている。焼土は西壁寄りに厚さ２cmの堆積を見せ、床面寄りは若干浮いている。焼土の存在する部分は炭化材・物が見られない。遺構内出土炭化物は板状のものが目立ち厚さは２～４cmのものが多く、長いものは50cmを計る。　**所見**　本遺構は出土遺物から弥生時代後期後半のものと思われる。本住居跡は炭化材・物の出土状況から住居の廃絶後に廃材の焼却をおこなった可能性が考えられ、覆土上層にローム粒を多く含む土層が存在することから、燃焼途中で埋め戻されたことが想定できよう。

第７号住居跡出土遺物

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	弥生土器	壺	17.6	(18.0)		にぶい橙	長石・石英	普	４０	口縁部に２列の刺突列 貼りコブ11単位貼り付け 器面にLR縄文施文 口唇部に縄文押圧
2	弥生土器	甕		(2.4)	6.4	にぶい橙	長石・石英	普	１０	付加条１種RL+2Lにより施文 内面に黒色の変色部分あり 底面に灰付着



第20図　第７号住居跡出土遺物実測図



第21図　第８号住居跡実測図・出土遺物実測図

第８号住居跡〔旧第１９号住居跡〕（第21図・第83図　ＰＬ３・15）

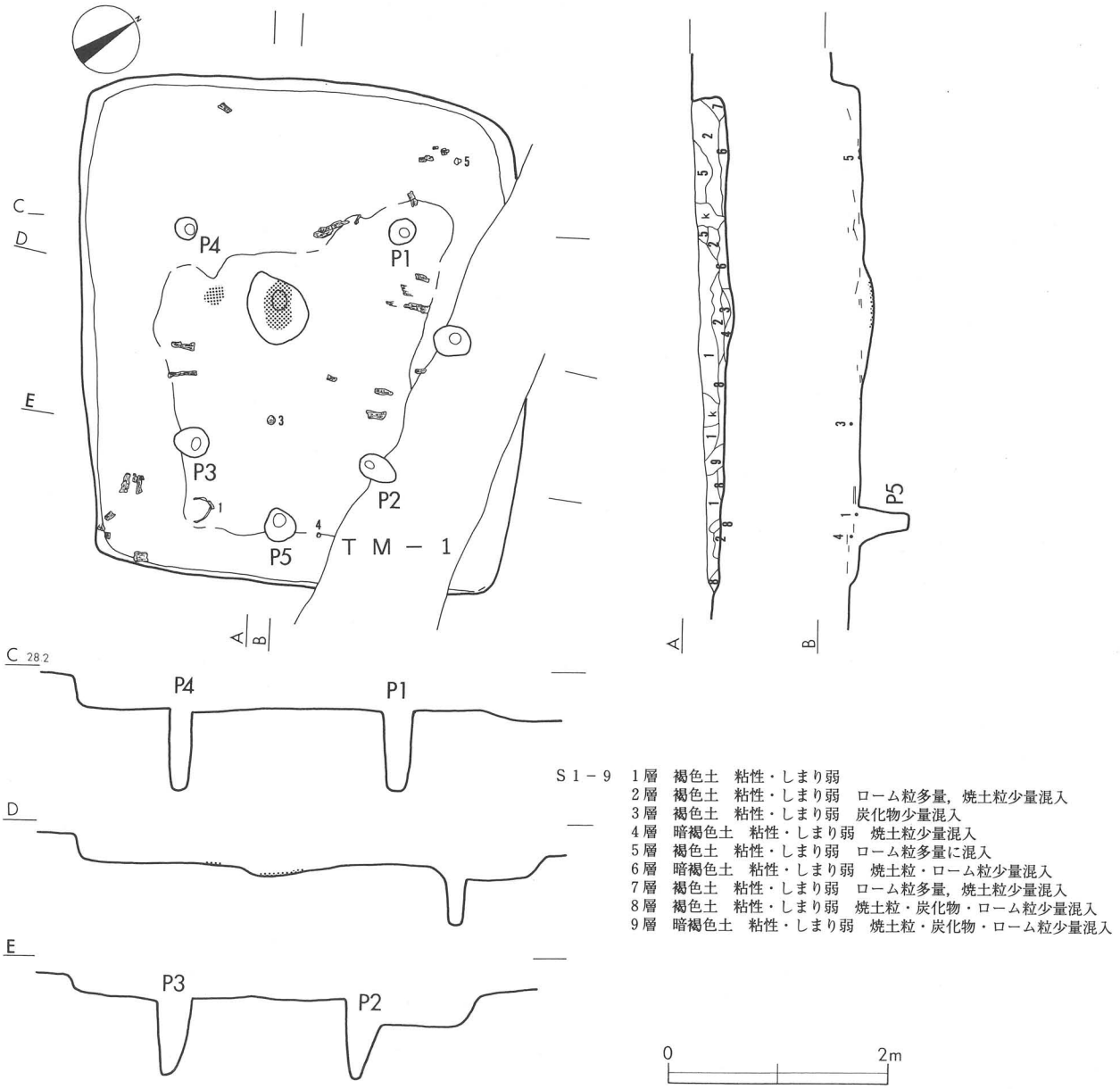
位置　調査区中央東寄りの、標高28.25m付近の台地上、Ｐ・Ｑ－16区にわたり確認されている。本遺構は第１号古墳の周溝や第22号土坑と重複している。周辺には第３号溝、第20号土坑が存在する。　**規模と平面形**　長軸4.73m、短軸3.88mの長方形を呈する。　**主軸方向**　Ｎ－41°－Ｅ。　**壁**　壁高は34～27cmを数え、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　全体的に平坦で、水平である。硬化面は、Ｐ1・Ｐ2・Ｐ4・Ｐ5を取り囲むように踏み固められ、Ｐ3の外側にも広がっている。　**ピット**　Ｐ1～Ｐ5の５ヶ所が確認された。Ｐ1～Ｐ4は主柱穴であり、Ｐ5は入口ピットである。　**炉**　１ヶ所確認され、Ｐ1とＰ4の中間地点から南壁寄りに伸びて存在し、平面形は長軸1.10、短軸0.45mの長楕円形を呈する。床面を約10cmほど掘り込んだ地床炉である。入り口側が緩い立ち上りをみせ、炉床は底面が良く焼け、凹凸が激しく、赤変硬化している。　**覆土**　10層から構成され、大きく分けてローム粒が多い第１・２・８層と焼土と炭化物が多い第３・７・９・10層及び第４～６層の炉の覆土に分けられる。西隅の粘土は径約20cm・厚さ６～８cmで床面よりやや浮いて出土した。出土した炭化物は住居の北隅にまとまって出土した。これらの炭化物は、厚さ２～３cmで長さ30～40cmの板材のようである。出土状況は住居中央に向かい放射状に並び、床面近くに壁際からゆるく下降気味に傾斜して出土している。この他、主柱穴Ｐ3の南東側からも若干出土した。　**遺物**　No.1・2は弥生土器で、No.1は甕形土器であり、北壁近くの床面から出土している。No.2は鉢形土器で、出土時には底部が欠損していた。No.3は土師器の坏で、遺構確認時に出土した。この他、住居跡内の１区よりアプライト剥片が1.8ｇ出土した。　**所見**　本遺構は出土遺物から弥生時代後期後半のものと思われる。本住居跡は廃絶後に廃材などの焼却を行なった可能性が考えられる。

第８号住居跡出土遺物

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	弥生土器	甕		(11.0)	7.3	橙	長石・石英	不良	３３	付加条１種LR+2Lにより施文 底面ナデ
2	弥生土器	鉢	12.8	7.4	5.8	にぶい赤褐	きめの細かい砂粒	普	８０	口唇部上と口縁部にLR（細）結節縄文施文 胴部下半ミガキ 縄文施文部分以外は赤彩
3	土師器	坏	13.4	(4.9)		明赤褐	赤褐色粒	良	１５	口縁部の内外面ナデ

第９号住居跡〔旧第２９号住居跡〕（第22図・第23図No.１～７　ＰＬ３・15・31）

位置　調査区中央東寄りの、標高28.00m付近の台地上、Ｓ－16区にわたり確認されている。本遺構は第１号古墳の周溝と重複している。周辺には第10号住居跡、第２号溝、第24号土坑が存在する。　**規模と平面形**　長軸4.28m、短軸3.69mの長方形を呈する。第１号古墳により北北東壁の一部と南南東壁の一部が壊されている。　**主軸方向**　Ｎ－53°－Ｗ　**壁**　壁高は30～23cmを数え、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　全体的に平坦で、水平である。硬化面は、Ｐ1～Ｐ4・Ｐ5を結ぶように踏み固められている。　**ピット**　Ｐ1～Ｐ5の５ヶ所と北東壁寄りにピットが確認された。Ｐ1～Ｐ4は主柱穴であり、Ｐ5は入口ピットである。北東壁寄りのピットは50cmの深さを持ち性格は不明である。　**炉**　１ヶ所確認され、Ｐ1とＰ4の中間地点からやや南壁寄りにあり、平面形は長軸0.60、短軸0.55mの楕円形を呈する。床面を約10cmほど掘り込んだ地床炉である。炉床は底面奥側が良く焼け、赤変硬化している。　**覆土**　９層から構成され、床面直上の土層には焼土や炭化材・物が検出され、覆土上層の土層にはローム粒が含まれる。４層は炉の覆土である。　**遺物**　No.1・4・5は床面近くから出土している。No.1～6は弥生土器であり、No.1～3は甕形土器である。No.2は小型の甕形土器であり内面に輪積み痕が残る。No.3は甕形土器の底部である。No.4は高坏形土器の脚部である。No.5は注ぎ口の付いた小型の鉢形土器であり、高坏形土器のような脚部が付くようである。No.6は櫛歯状工具による櫛描文が施文される。No.7は弥

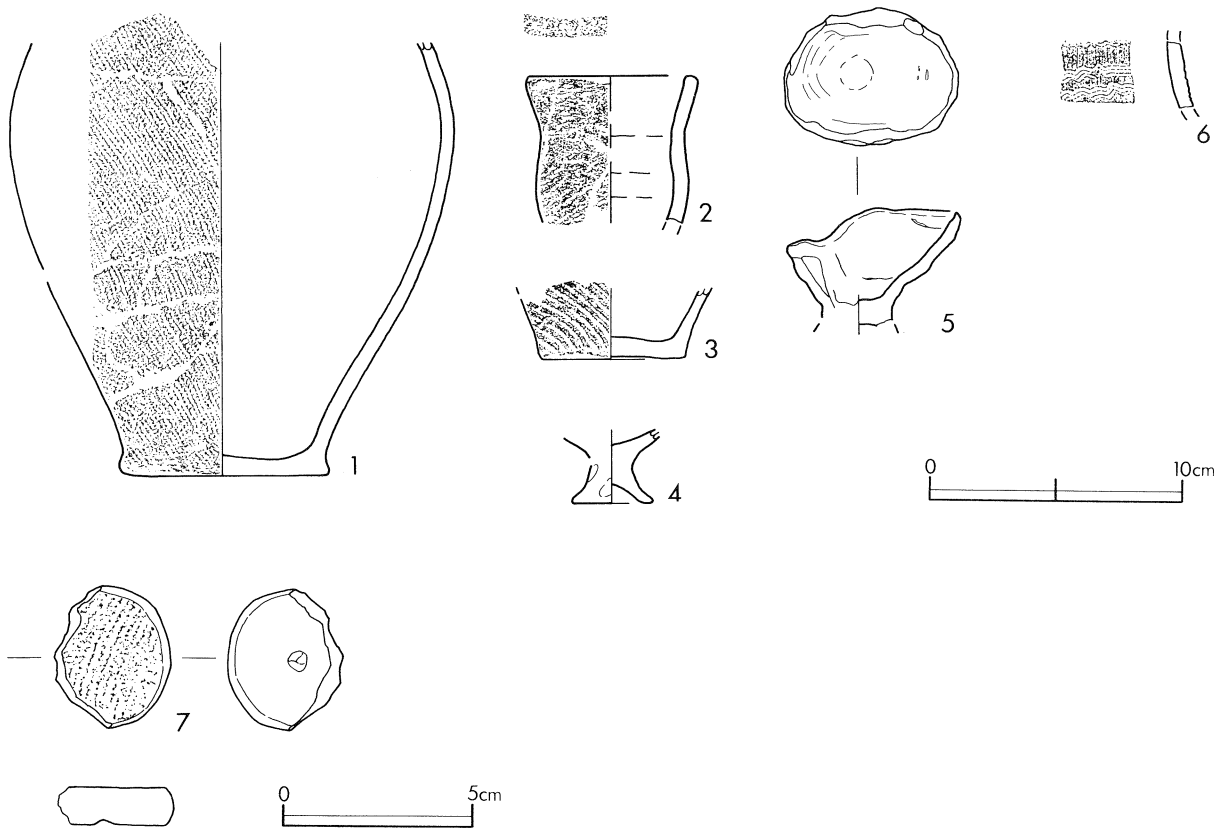


第22図　第９号住居跡実測図

第９号住居跡出土遺物

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	弥生土器	甕		(17.1)	8.3	にぶい赤褐	長石・石英	普	２５	胴部上半に最大径を持つ 付加条1種 外面に炭化物付着 内面ナデ 黒色 被熱 底面ナデ
2	弥生土器	小型甕	6.9	(5.8)		明黄褐	長石・石英	不良	２５	頸部からやや開く口縁部を持つ 撚りのほぐれた付加条１種 口唇部にも縄文施文 内面に輪積痕
3	弥生土器	甕	(2.8)	5.8		橙	長石・石英	普	１０	底部 器面に付加条１種RL+2L縄文 底面ナデ
4	弥生土器	高坏		(2.6)		橙	長石・石英	良	１０	内外面やや凹む 内外面ナデ
5	弥生土器	高坏	(4.3)			橙	長石・石英	良	６６	脚部欠損 平面楕円形 片口が付く 外面にヘラ削り 内外面に輪積痕あり 黒斑あり
7	土製品	円盤	上面径 3.6 下面径 3.4 厚さ 1.0 重さ 11 孔径 0.5					良	７０	弥生土器の胴部破片を再利用したもの 穿孔途中 周縁は擦られている

生土器片を利用した土器片製の円盤であり、縁辺を擦っている。裏面には中心部に小さな凹みが見られ、擦られることにより凹んだようである。炭化物はP1－P2ラインとP3－P4ラインに直交するように出土し、出土位置は床面直上のものもあれば、若干浮いているものもある。おおかたの傾向は壁際のものは高いレベルから出土している。炭化物の厚さは1～2cm程度のものが多い。１区からアプライトの剥片１ｇが出土した。　所

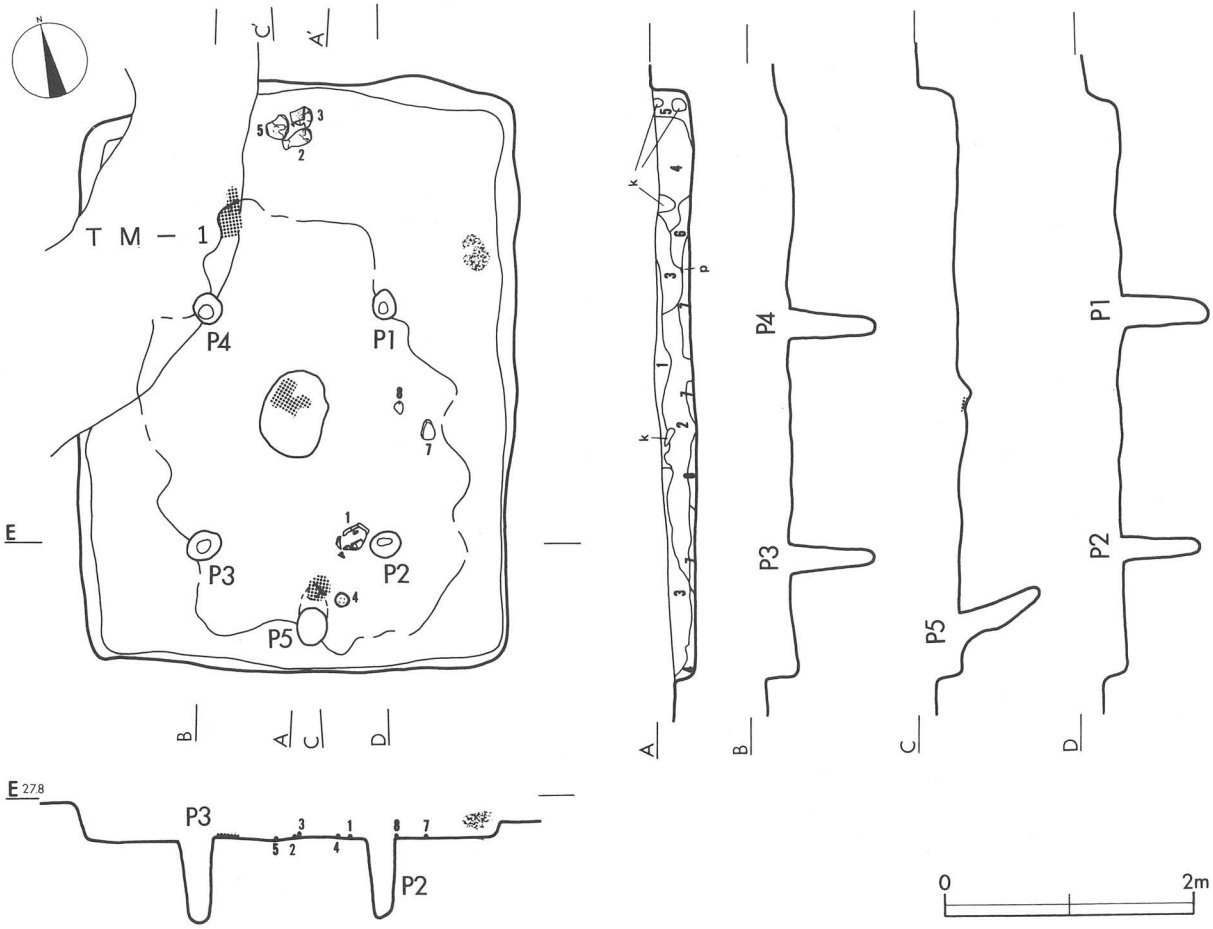


第23図　第９号住居跡出土遺物実測図

見　本遺構は出土遺物から弥生時代後期後半のものと思われる。覆土の状況から住居廃絶後に廃材を焼却した後埋め戻された可能性が考えられる。

第１０号住居跡〔旧第２３号住居跡〕（第24図・第25図№１～８　ＰＬ３・15・16・31）

位置　調査区中央東寄りの、標高27.75m付近の台地緩斜面上、Ｔ－17・18区にわたり確認されている。本遺構は第１号古墳の周溝と重複している。周辺には第15・32号住居跡が存在する。　**規模と平面形**　長軸4.59m、短軸3.77mの長方形を呈する。第１号古墳により北壁の一部と西壁の一部が壊されている。　**主軸方向**　Ｎ－16°－Ｅ　**壁**　壁高は31～21cmを数え、本遺構の存在する地形が緩斜面のため南壁の壁高が低く、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　全体的に平坦で、水平である。硬化面は、Ｐ1～Ｐ４・Ｐ5を結ぶように、その内側や一部その外側までが踏み固められている。　**ピット**　Ｐ1～Ｐ5の５ヶ所が確認された。Ｐ1～Ｐ4は主柱穴であり、Ｐ5は入口ピットである。　**炉**　１ヶ所確認され、Ｐ1とＰ4の中間地点からやや南壁寄りにあり、平面形は長軸0.7、短軸0.6mの楕円形を呈する。床面を約７cmほど掘り込んだ地床炉である。炉床は奥側が深く底面が良く焼け、赤変硬化している。　**覆土**　６層から構成され、床面直上の土層に焼土粒が多く含まれ、上層の土層にはローム粒の含まれる割合が高い。まとまった焼土や灰白色粘土が検出されている。焼土は北壁寄りとＰ5付近の床面に確認され、厚さ10cmの灰白色粘土は東壁寄りに床面より10cm浮いて出土した。　**遺物**　図示した遺物は皆床面上から出土している。№1～6 は弥生土器であり、№1 は横に倒れて出土した。№4 は甕形土器である。№2・3は倒位の状態で出土した壷形土器である。№5 は正位の状態で出土した鉢形土器である。№6



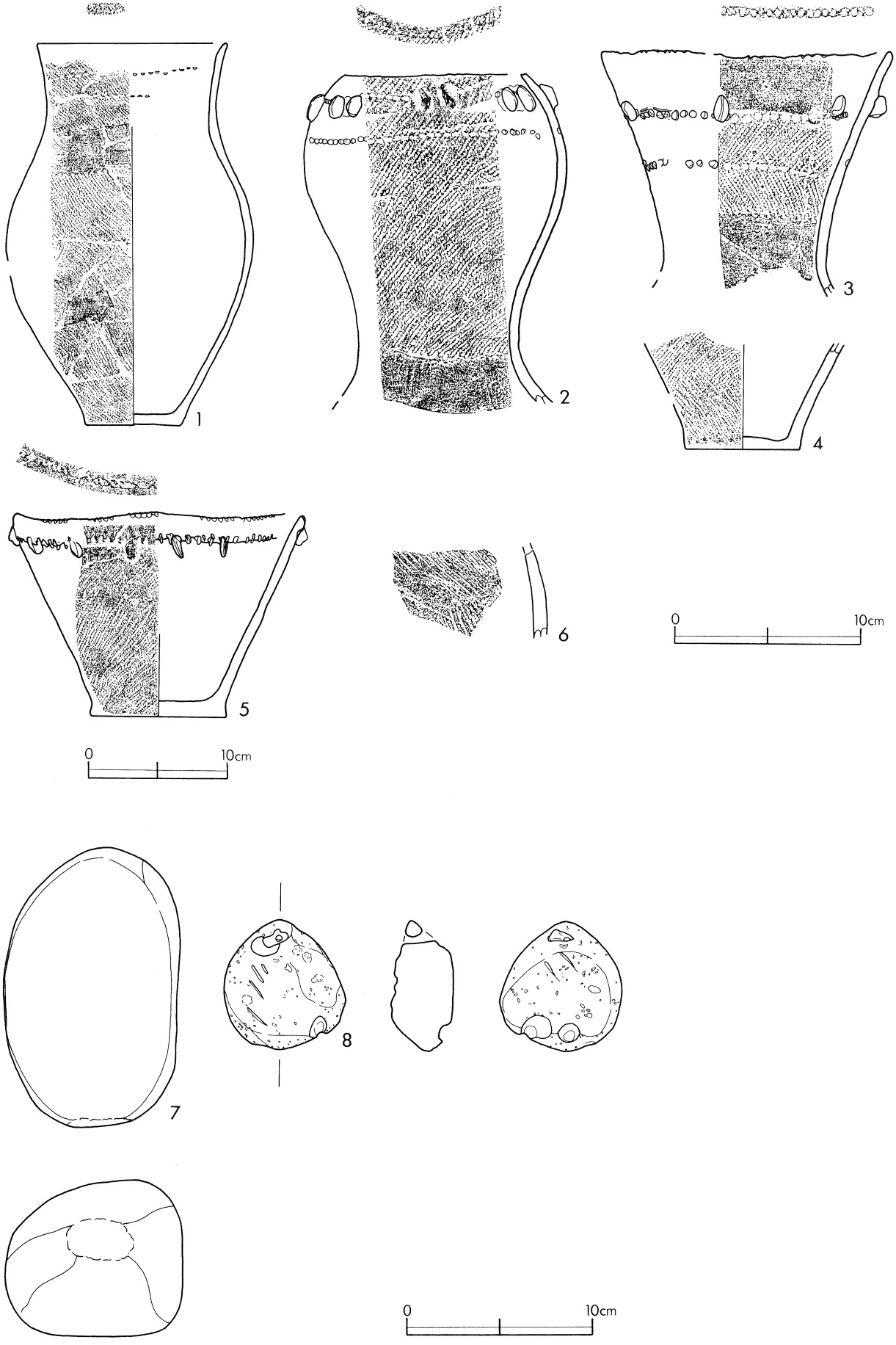
SI－10　1層　褐色土　しまり強　焼土粒少量混入
2層　褐色土　しまり強　ローム粒多量，炭化粒少量混入
3層　褐色土　しまり強　焼土粒少量混入
4層　褐色土　しまり強　粘性弱　焼土粒・ローム粒少量混入
5層　褐色土　しまり強　粘性弱　炭化粒少量混入
6層　褐色土　しまり強　焼土粒多量，ローム粒少量混入
7層　暗褐色土　しまり強　粘性弱　焼土粒・炭化粒多量，ローム粒少量混入
8層　黄褐色土　しまり極めて強　ローム粒多量に混入

第24図　第10号住居跡実測図

は弥生土器の胴部片である。No.2・3・5は北壁寄りの床面上に3個体まとまって出土した。No.6は単軸絡状体1類により施文されたものである。No.7・8は石器であり、No.7は磨石類、No.8は多孔質の軽石製浮子のようである。　**所見**　本遺構は出土遺物から弥生時代後期後半の時期のものと思われる。本住居跡内の土層の堆積状況から、住居廃絶後に後埋め戻された可能性が考えられる。

第１０号住居跡出土遺物

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	弥生土器	甕	13.4	27.8	6.8	赤褐	長石・石英・雲母	普	８０	付加条１種LR+2Lにより施文 口唇部に回転縄文 口縁部に２列の刺突 頸部無文帯
2	弥生土器	壺	9.8	(17.9)		にぶい橙	長石・石英	普	２０	付加条１種施文 口唇部にも縄文 ２個１組の粘土貼り付け８単位 ２列の刺突列 頸部無文帯
3	弥生土器	壺	15.7	(12.7)		橙	長石・石英	普	２０	外側に粘土貼り付け７単位 付加条１種による羽状縄文 口縁部に有段部 輪積痕 頸部無文帯
4	弥生土器	甕		(5.7)	6.2	にぶい橙	長石・石英	普	２０	底部 付加条１種LR+2LとRL+2Rにより羽状縄文施文
5	弥生土器	鉢	20.8	14.7	9.8	にぶい褐	長石・石英	良	６６	バケツ形を呈する 付加条１種施文 口縁部は有段をなしその下端に刺突 口唇部に縄文押圧
7	石器	磨石類	長さ 15.2 幅 9.4 厚さ 8.5 重量1840　石材 安山岩						１００	端部１ヶ所に敲打痕 同部分被熱し赤化
8	石器	浮子	長さ　6.9 幅 6.6 厚さ 3.5 重量 33.8 石材 流斑岩						１００	貫通孔あり 紐をかけた痕跡あり 磨も見られる



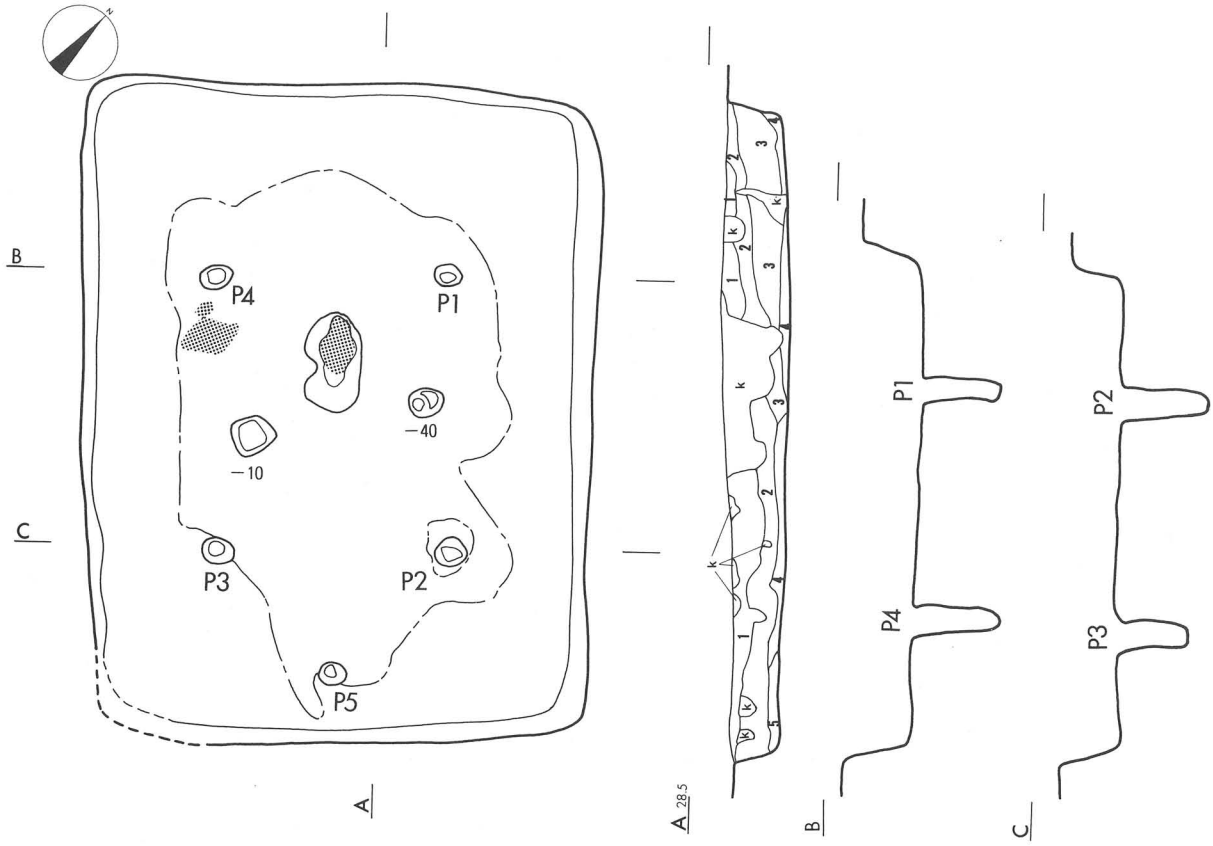
第25図　第10号住居跡出土遺物実測図

第１１号住居跡〔旧第５号住居跡〕（第26図・第27図No.１～12　ＰＬ３・16・31）

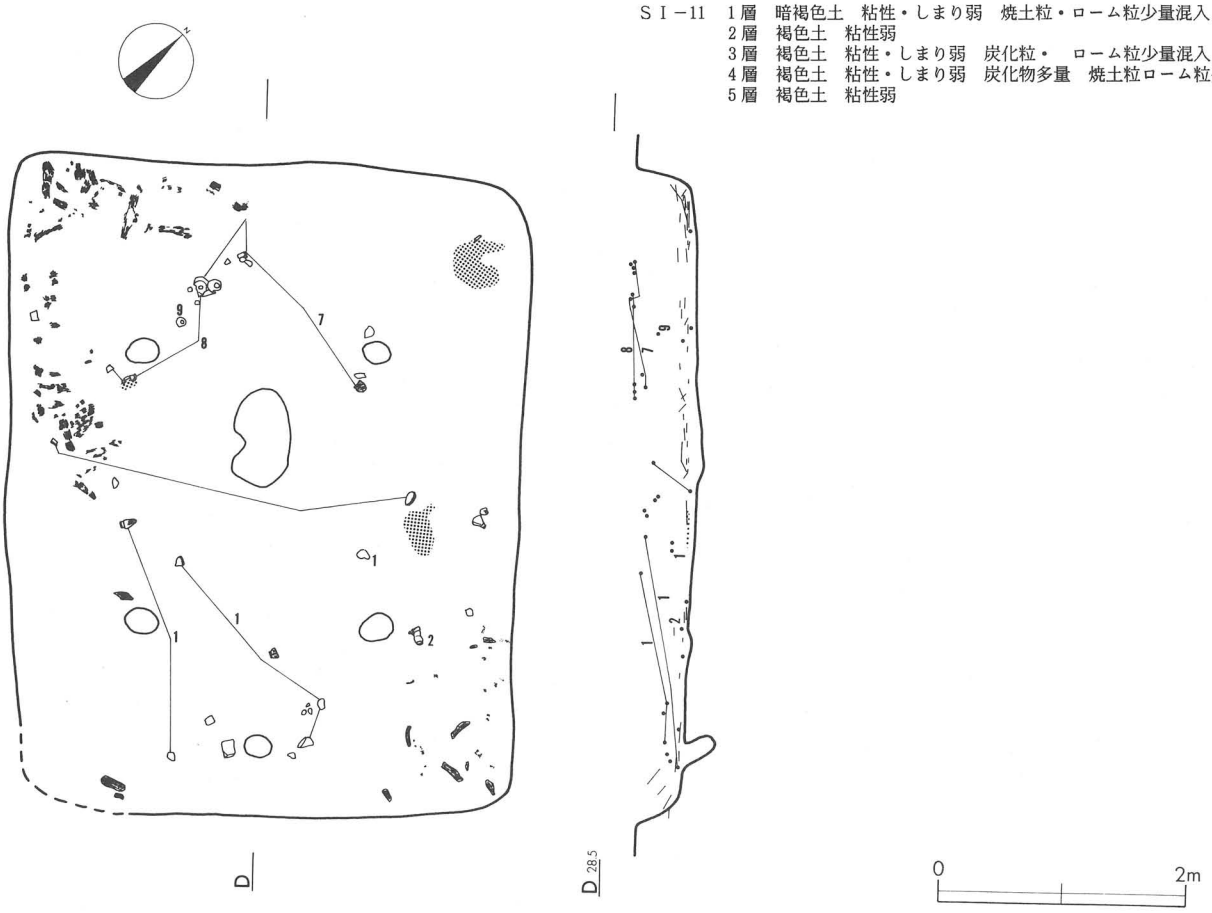
位置　調査区中央の、標高28.25m付近の台地上、Ｈ－16区にわたり確認されている。本遺構は第４号溝により切られている。周辺には第7・12号住居跡、第25・21号土坑が存在する。　**規模と平面形**　長軸5.25m、短軸3.27mの長方形を呈する。第４号溝により南東壁の隅が壊されている。　**主軸方向**　Ｎ－45°－Ｗ　**壁**　壁高は31～21cmを数え、本遺構の存在する地形が緩斜面のため南壁の壁高が低く、ほぼ垂直に立ち上がる。**床**　全体的に平坦で、水平である。硬化面はＰ1～Ｐ4・Ｐ5を結ぶように、その内側や一部その外側までが踏み固められている。Ｐ4の南側は床面が被熱し焼土化していた。　**ピット**　７ヶ所が確認され、Ｐ1～Ｐ4は主柱穴であり、Ｐ5は入口ピットである。Ｐ1とＰ2の間のピットは撹乱とした土層が床面下まで及んだ痕跡である。Ｐ3・Ｐ4の間のピットは性格不明である。　**炉**　１ヶ所確認され、Ｐ1とＰ4の中間地点からやや南壁寄りにあり、平面形は長軸0.8、短軸0.45mの楕円形を呈する。床面を約７cmほど掘り込んだ地床炉である。炉床は底面の奥側が良く焼け、赤変硬化している。入り口側が黒褐色を呈し、炭化物を多く含み、焼土粒は少ない。反対に奥側は焼土粒が多く含まれ、炭化物は少ない。　**覆土**　６層から構成され、大きく区分すると焼土・炭化物・粒を含まない第５層と焼土・炭化物・粒を多く含む第４層とそれ以外の土層に区別される。Ｐ4の近くの焼土は厚さ３cmで壁側から中央部に傾斜して出土した。セクションベルト中で撹乱とした土層の覆土中からは古墳時代中期の土師器が出土した。Ｐ1とＰ2の間のピットは撹乱が床面下まで達した痕跡である。同撹乱の土層は上層が黒褐色を呈し、焼土粒・黒褐色ブロック・炭化物を含む。下層は焼土粒・黒褐色ブロックが多少混じる。遺構としては明確さに欠けるため撹乱とした。住居内の北隅や東壁寄りに焼土がまとまって出土した。　**遺物**　No.1～5・10～12は弥生土器で、No.2・4は甕形土器であり、特にNo.2は床面近くから出土した。No.1・5は壷形土器である。No.3はミニチュア土器である。No.6～9は土師器でこの内No.7～9は住居北側の覆土上層から出土した。No.10は口唇部に刻み目を持ち器面に褶曲した沈線が引かれる。No.11は単軸絡条体１類による施文がなされる。No.12は櫛歯状工具により波状の沈線が引かれる。炭化材・物は住居内東西隅から小型のものが出土し、床面より若干浮いている。壁際の炭化材・物は傾斜して出土している。　**所見**　本遺構は出土遺物から弥生時代後期後半のものと思われる。本住居跡は土層の堆積状況から住居廃絶後に廃材の焼却をし埋め戻されたことが考えられる。

第１１号住居跡出土遺物

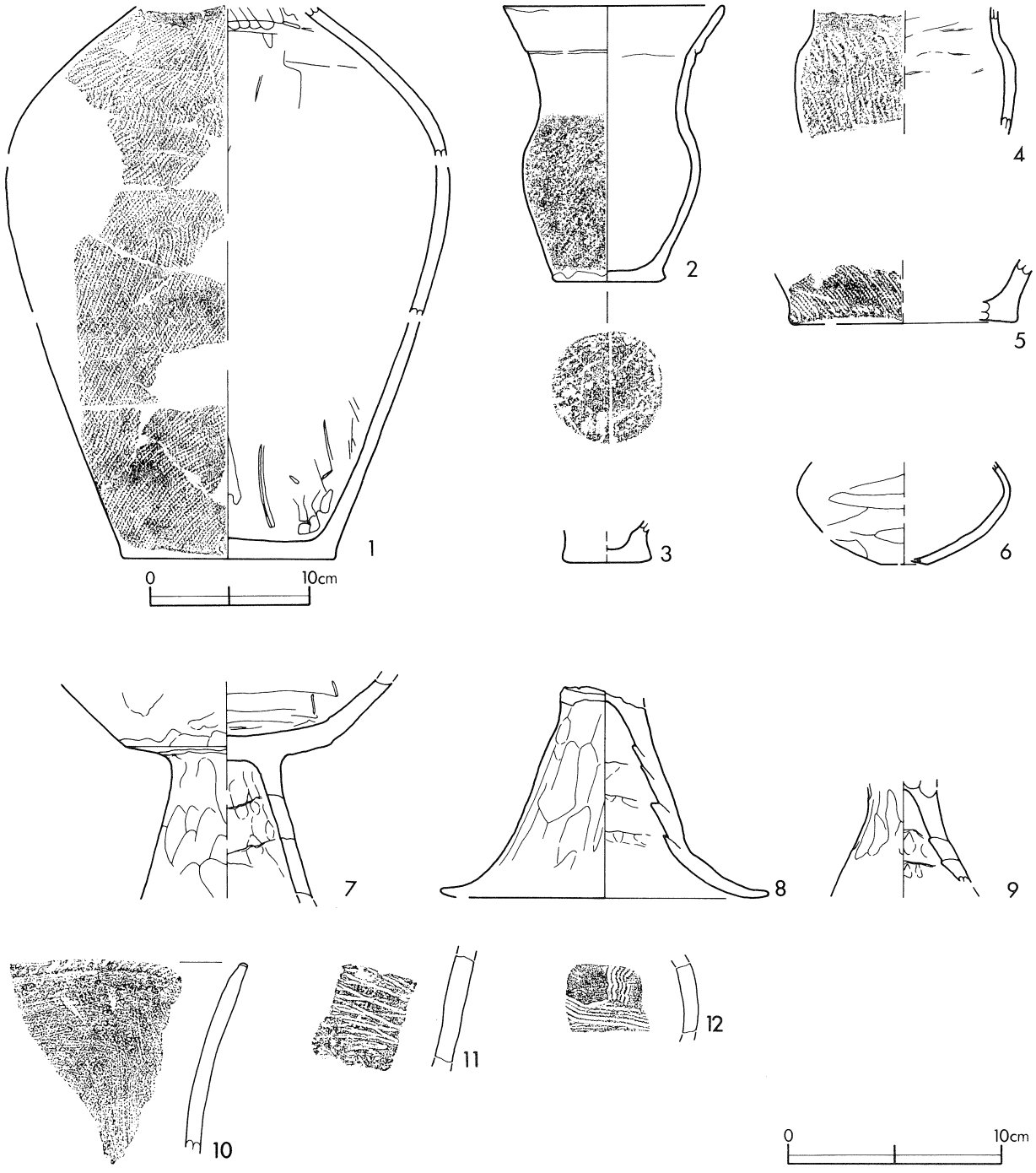
番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	弥生土器	壷		(34.9)	13.4	橙	長石・石英	普	６６	肩部が張る 付加条１種LR+2L施文 内面ヘラナデ 黒斑あり
2	弥生土器	小型甕	10.5	12.8	5.3	橙	長石・石英	普	８０	口唇部に縄文施文 底部に木葉痕 有段のある口縁部 頸部無文
3	弥生土器	ミニチュア		(1.5)	4.2	にぶい黄橙	長石・石英	普	5	甕形土器のミニチュアか 無文 底面から直立し外反する 底面ナデ
4	弥生土器	甕		(5.7)		黒褐	細砂粒	良	１５	肩部がやや張る 付加条１種RL+2Lによる施文 頸部ナデによる無文帯
5	弥生土器	壷		(2.4)	(10.6)	にぶい黄橙	長石・石英	良	5	底部片 付加条１種RL+2Lによる施文 底面から緩く開く 底面側縁が擦れる
6	土師器	坩		(4.8)	(2.0)	浅黄橙	きめ細かい・赤褐色粒	良	１０	外面ヘラ削りの後ナデ 底面はやや凹む
7	土師器	高坏		(10.0)		橙	長石・石英・赤褐色粒	良	４０	外面ヘラ削りの後ナデ 指頭痕 内面輪積痕 坏部下端に稜を持つ
8	土師器	高坏		(9.2)		橙	長石・石英・赤褐色粒	良	５０	裾部が大きく開く 内面輪積痕あり 外面ナデ
9	土師器	高坏		(5.1)		橙	長石・石英・赤褐色粒	良	３０	内面に輪積痕あり 螺旋状に巻き上げている 指頭痕あり



ＳＩ−11　1層　暗褐色土　粘性・しまり弱　焼土粒・ローム粒少量混入
2層　褐色土　粘性弱
3層　褐色土　粘性・しまり弱　炭化粒・　ローム粒少量混入
4層　褐色土　粘性・しまり弱　炭化物多量　焼土粒ローム粒少量混入
5層　褐色土　粘性弱



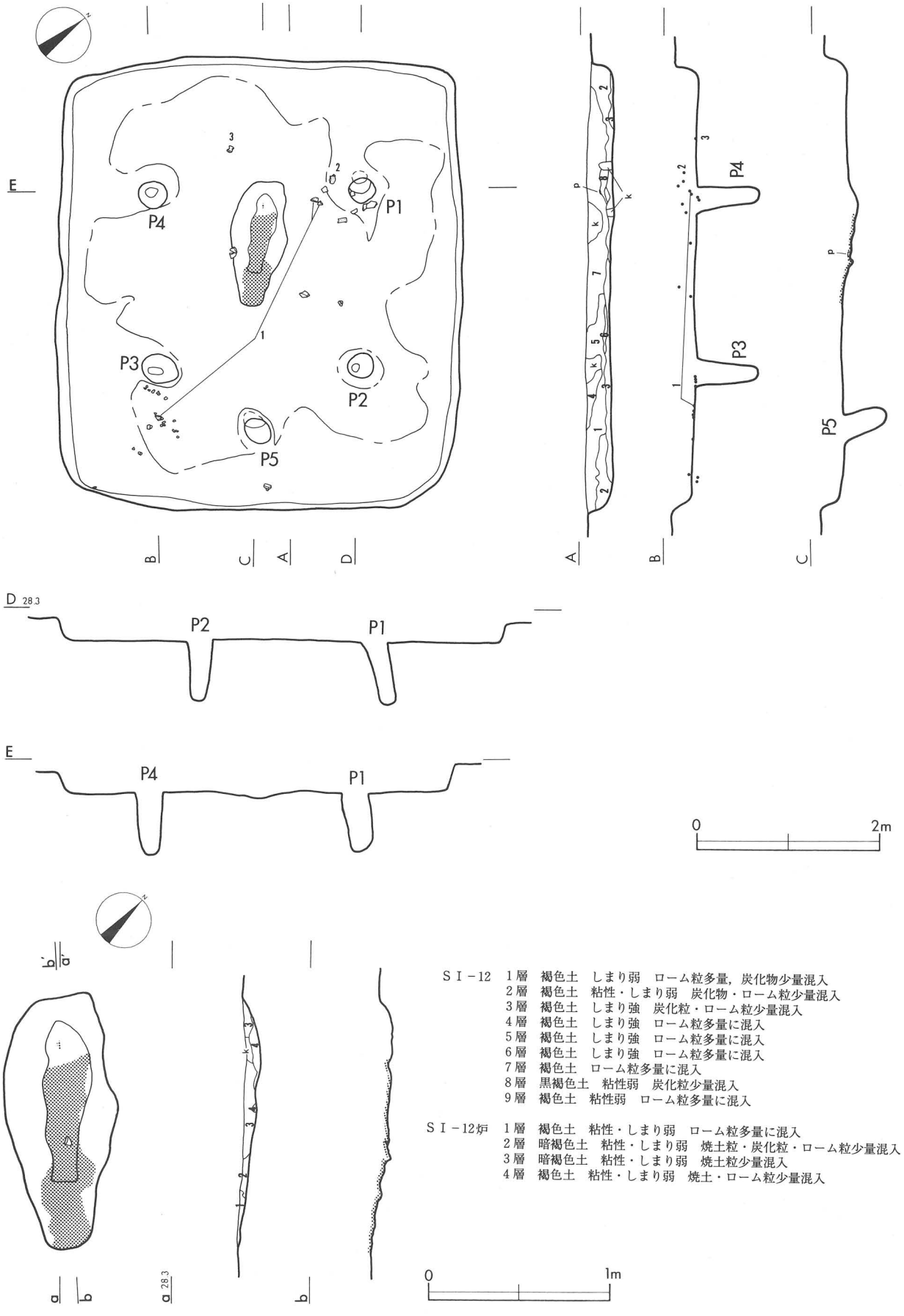
第26図　第11号住居跡実測図



第27図　第11号住居跡出土遺物実測図

第１２号住居跡〔旧第２０号住居跡〕（第28図・第29図№１～７　ＰＬ４・31）

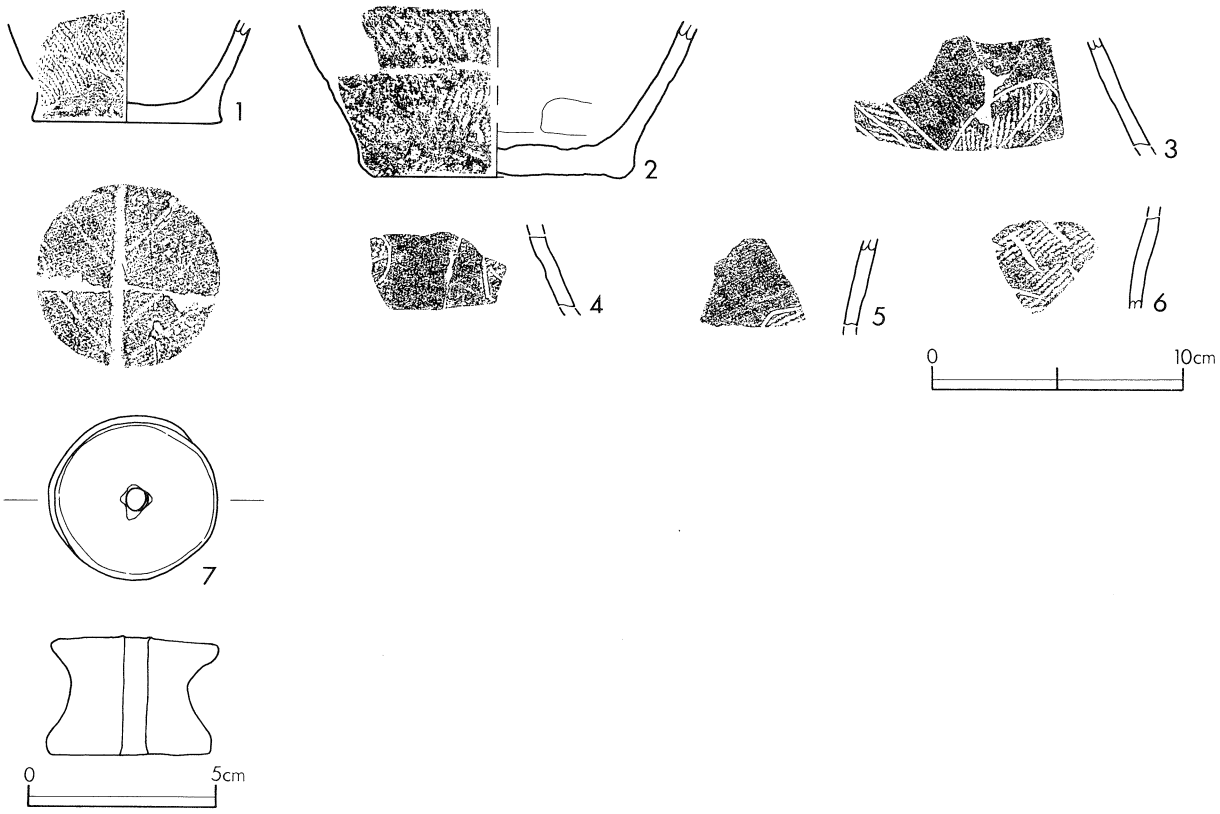
位置　調査区中央の、標高28.25m付近の台地上、Ｌ－18・19区にわたり確認されている。周辺には第６・13・18号住居跡、第23号土坑が存在する。　**規模と平面形**　長軸5.75m、短軸4.13mの長方形を呈する。　**主軸方向**　Ｎ－54°－Ｗ　**壁**　壁高は26～22cmを数え、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　全体的に平坦で、水平である。硬化面はＰ1～Ｐ4・Ｐ5の範囲を越えて壁際まで踏み固められている。柱穴や入口ピットの縁辺は硬化していない。この他、炉の東側にローム掘り残しによる径30cm・高さ５cmの高まりが確認された。　**ピット**　Ｐ１～



ＳＩ－12　1層　褐色土　しまり弱　ローム粒多量，炭化物少量混入
2層　褐色土　粘性・しまり弱　炭化物・ローム粒少量混入
3層　褐色土　しまり強　炭化粒・ローム粒少量混入
4層　褐色土　しまり強　ローム粒多量に混入
5層　褐色土　しまり強　ローム粒多量に混入
6層　褐色土　しまり強　ローム粒多量に混入
7層　褐色土　ローム粒多量に混入
8層　黒褐色土　粘性弱　炭化粒少量混入
9層　褐色土　粘性弱　ローム粒多量に混入

ＳＩ－12炉　1層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒多量に混入
2層　暗褐色土　粘性・しまり弱　焼土粒・炭化粒・ローム粒少量混入
3層　暗褐色土　粘性・しまり弱　焼土粒少量混入
4層　褐色土　粘性・しまり弱　焼土・ローム粒少量混入

第28図　第12号住居跡実測図



第29図　第12号住居跡出土遺物実測図

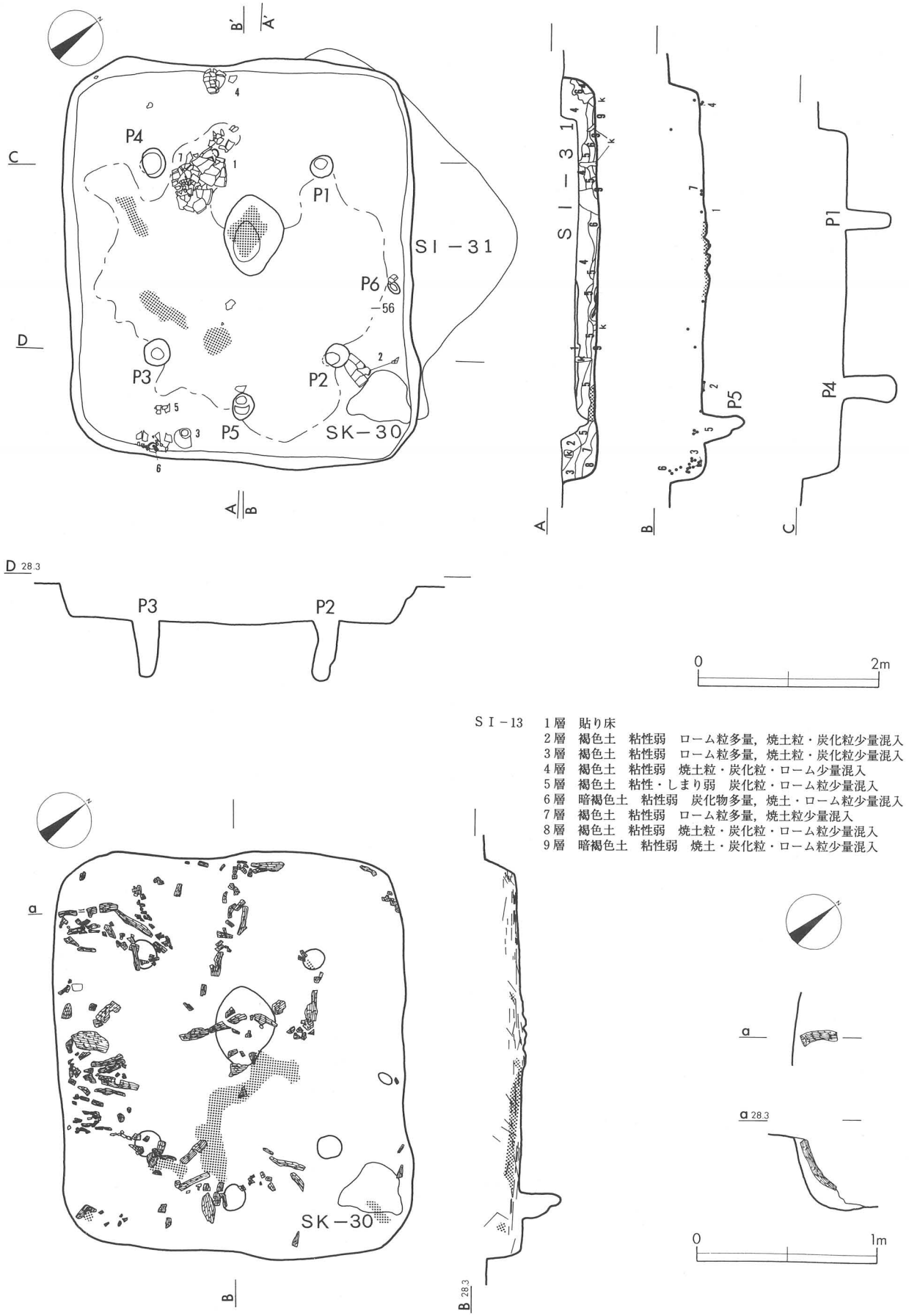
P5の5ヶ所が確認された。P1～P4は主柱穴であり、P5は入口ピットである。　**炉**　1ヶ所確認され、P1とP4の中間地点からやや南壁寄りにあり、平面形は長軸1.3、短軸0.6mの長楕円形を呈する。床面を約8cmほど掘り込んだ地床炉である。入り口側が緩く、奥側が深い。炉床は底面と手前側が良く焼け、赤変硬化している。　**覆土**　8層から構成され、床面近くの炭化物を多く含む第3層とローム粒が多く含まれるそれ以外の土層に分かれる。　**遺物**　No.1～6は弥生土器であり、No.1・2は甕形土器である。No.1の土器は離れて接合している。No.3～6は弥生土器片であり同一個体と考えられるものである。皆住居内の2区から出土し、胎土が他の土器と異なり緻密で長石や石英を含まない。これらは器面に沈線で区画した中に縄文を施文している。No.7は土製の紡錘車である。　**所見**　本遺構は出土遺物から弥生時代後期後半の時期のものと思われる。しかしながらNo.3～6の弥生土器片は弥生時代中期のものと考えられ、混入したものと思われる。

第12号住居跡出土遺

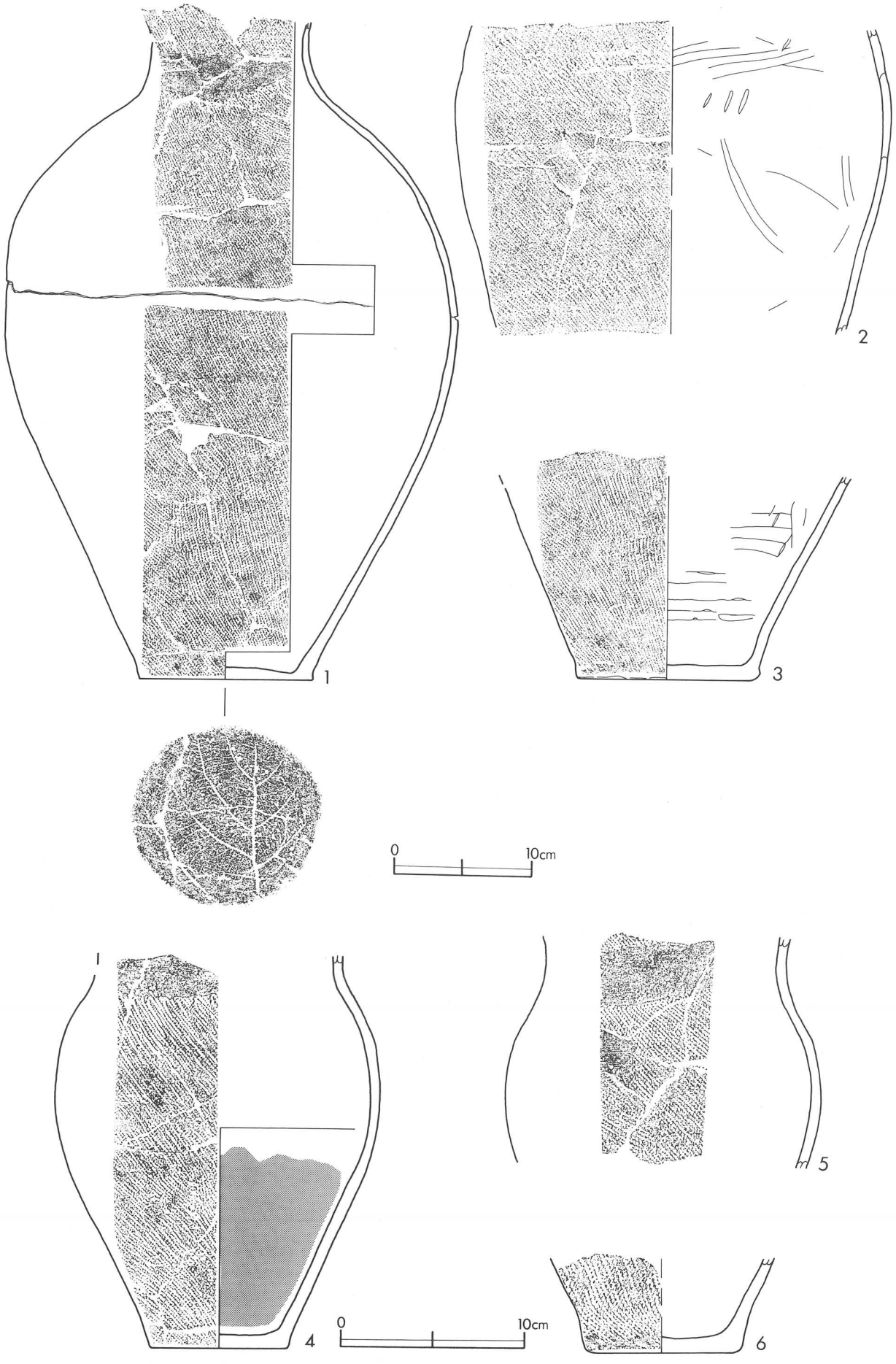
番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	弥生土器	甕	(3.1)	7.4		にぶい褐	長石・石英	普	10	付加条縄文 内面ヨコナデ 底部木葉痕
2	弥生土器	甕	(5.9)	(20.0)		にぶい黄橙	長石・石英	普	10	底部片 回転復元 内面ヨコナデ
7	土製品	紡錘車	上面径 4.5 下面径 4.3 厚さ 3.1 重さ 58 孔径0.7					普	100	断面は鼓状 器面には丁寧なナデ調整 下面より穿孔

第13号住居跡〔旧第6a号住居跡〕（第30図・第31・32図No.1～11・第83図　PL4・16・17・31）

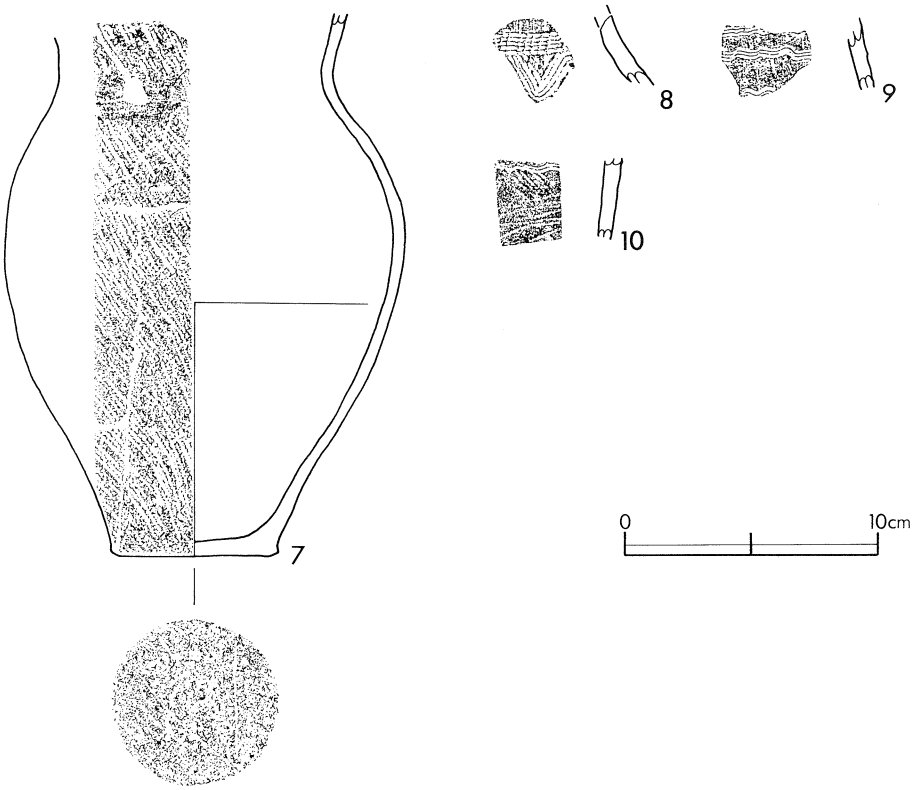
位置　調査区中央の標高28.25m付近の台地上、M－19・20区にわたり確認されている。第30・31号住居跡と重複している。周辺には第11・12・21号住居跡、第29号土坑が存在する。　**規模と平面形**　長軸4.15m、短軸



第30図　第13号住居跡実測図



第31図　第13号住居跡出土遺物実測図(1)



第32図　第13号住居跡出土遺物実測図(2)

3.59mの長方形を呈する。　**主軸方向**　N－56°－W　**壁**　壁高は38～20cmを数え、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　全体的に平坦で水平である。硬化面はP1～P4・炉・P5を取り囲むように踏み固められている。また住居内南西側に焼けた床面が数ヶ所見られた。　**ピット**　P1～P5の5ヶ所が確認された。P1～P4は主柱穴であり、P5は入口ピットである。入口ピットは底面に段差を持つ。　**炉**　1ヶ所確認され、P1とP4の中間地点よりやや南壁寄りにあり、平面形は長軸0.43、短軸0.31mの長楕円形を呈する。床面を約5cmほど掘り込んだ地床炉である。炉床は底面から北側が良く焼け、赤変硬化している。　**覆土**　9層から構成され、焼土・炭化物が多く含まれる第5・6・9層とローム粒が多く含まれる第1～4層とローム粒を多く含む第7層の3つに区別される。　**遺物**　No.1～10は弥生土器であり、No.1～3は壷形土器である。No.1の壷形土器は大型のものであり、胴部の最大径部分で意図的に水平に割られている。そして、割れ口の上には赤色の塗彩が帯状になされている。No.4～7は甕形土器である。No.1・7は床面上から細かく割れてまとまって出土した。No.4は壁に寄り掛かるように出土した。No.8～10は弥生土器片である。それぞれ櫛歯状工具により櫛描文や簾状文が施文されている。南南東壁寄りの覆土中から灰白色の粘土塊が出土した。住居内の南南西部分の床面には3ヶ所の焼土の分布が見られる。この場所からの炭化材・物の出土は見られない。炭化材・物は住居内の西側に多く分布し、

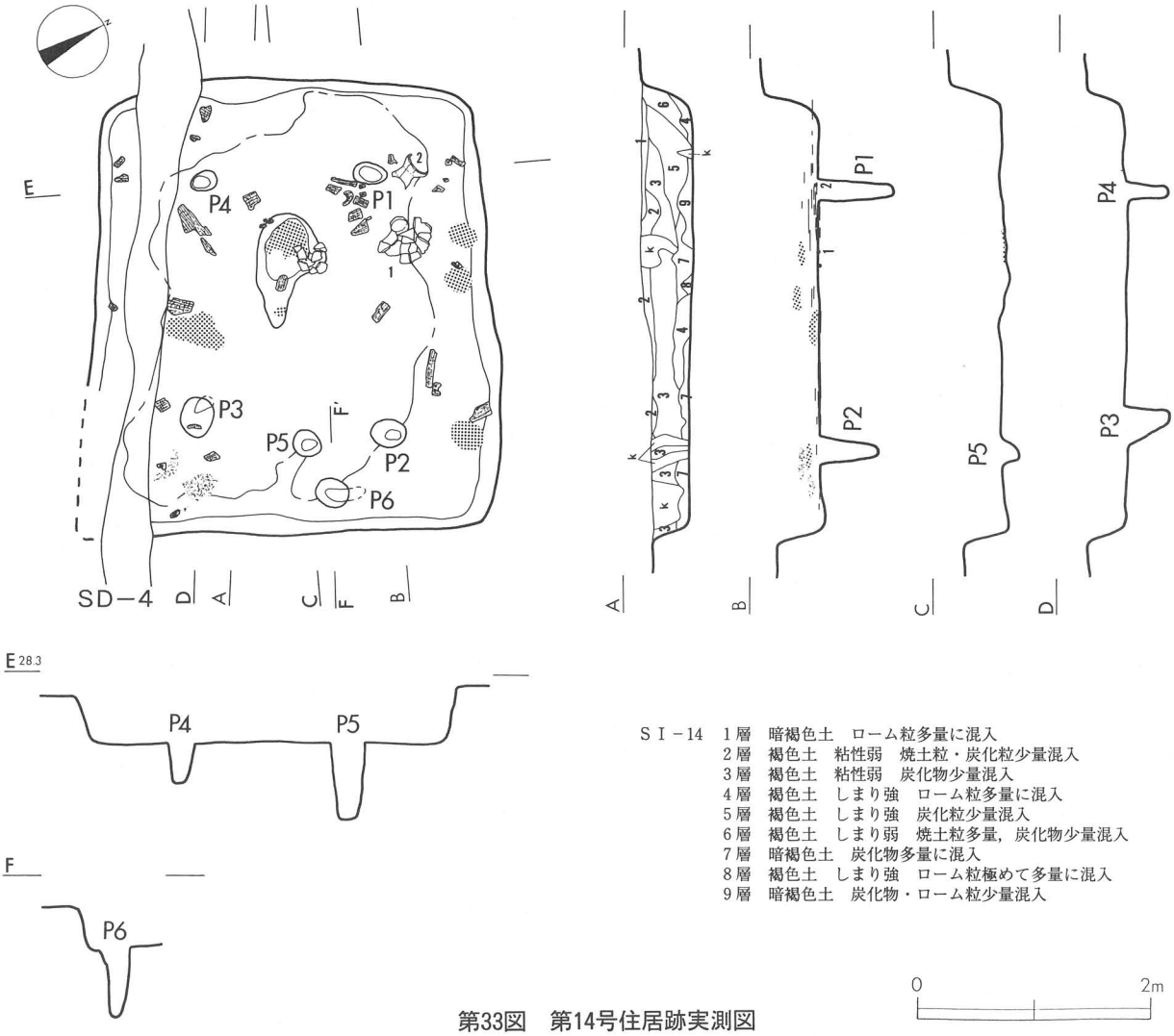
第13号住居跡出土遺物

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	弥生土器	壷		(47.4)	12.7	浅黄橙	長石・石英	普	90	付加条1種縄文施文 最大径付近を水平に打ち欠き、同所に赤彩 底面木葉痕
2	弥生土器	甕		(21.7)		橙	長石・石英	良	20	付加条1種RL+2L縄文施文 表面に輪積痕あり 内面ナデ
3	弥生土器	甕		(14.6)	13.1	橙	長石・石英	良	30	付加条1種RL+2L縄文施文 底面ナデ 内面ヘラナデ 外面に炭化物付着
4	弥生土器	甕		(21.5)	7.7	にぶい橙	長石・石英	良	80	付加条1種RL+2L縄文施文 外面炭化物付着 頸部無文帯 内面黒色の変色部分あり
5	弥生土器	甕	19.9	(5.3)		暗赤褐	長石・石英・雲母	良	10	付加条1種RL+2L縄文施文 胴部上半にスス・炭化物付着
6	弥生土器	甕		(5.1)	8.4	橙	長石・石英	良	10	付加条1種RL+2L縄文施文 底面周辺に擦れ
7	弥生土器	甕		(21.4)	6.6	にぶい褐	長石・石英	良	70	付加条1種RL+2L縄文施文 頸部無文帯 外面に炭化物・スス付着 底面に木葉痕

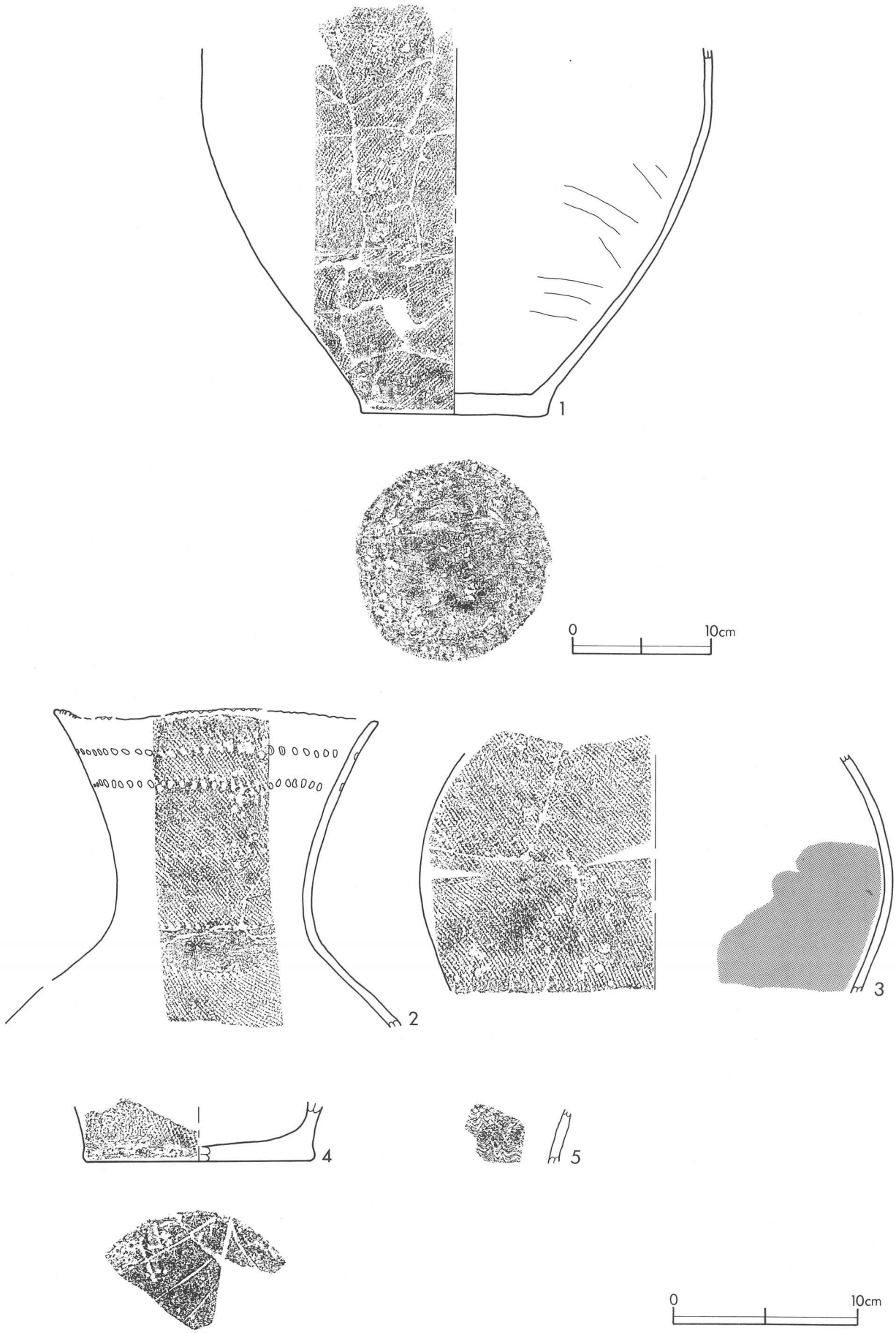
南西壁寄りのものは壁に対し垂直方向に並ぶ。出土した炭化材は断面形が丸・半円形・板状のものが見られた。これらの炭化物はP1・3・4のプラン上方から出土している。壁際の炭化物は壁に近いほど出土位置が高い傾向がある。　**所見**　出土遺物から弥生時代後期後半のものと思われる。本住居跡からは多量の炭化物や焼土が検出された。その中でも住居内の西側に炭化物が見られ、壁寄りの炭化物は壁までに間層をおいて傾斜して検出された。燃焼する段階で壁寄りの部分には一定の堆積土（７層のような土層）が存在したといえる。柱穴部分には、柱の遺存材と思われる炭化材は見られなかったことから、燃焼時には柱材が抜かれていたようである。炭化物が検出された上層にはローム粒を多く含む土層が存在し、燃焼途中で土がかけられたことが想定できる。その結果として住居構築材が蒸し焼き状態となり炭となったことが想定できる。本住居跡は廃絶後に廃材などの焼却がされ、燃焼の途中で埋め戻された可能性が考えられる。

第１４号住居跡〔旧第２１号住居跡〕（第33図・第34図№１～５　ＰＬ４・17・31）

位置　調査区中央の、標高28.25m付近の台地上中央部、Ｏ・Ｐ－19区にわたり確認されている。第４号溝に切られており、西壁の一部と東壁の一部が壊されている。周辺には第11・13号住居跡、第26・27号土坑が存在



第33図　第14号住居跡実測図



第34図　第14号住居跡出土遺物実測図

する。**規模と平面形**　長軸3.57m、短軸3.18mの長方形を呈する。　**主軸方向**　N－66°－W　**壁**　壁高は43～32cmを数え、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　全体的に平坦で、水平である。硬化面は、P1～P4・P5の外側及び北北西壁に至るまで踏み固められている。　**ピット**　P1～P6の6ヶ所が確認された。P1～P4は主柱穴であり、P5は入口ピットである。P3は外側を向いて穿たれている。P6は深さが床面から約90cmを計り、入り口に関係するものかどうかは不明である。P1～P4はやや台形に近い形に並ぶ。　**炉**　1ヶ所確認され、P1とP4の中間地点からやや東壁寄りにあり、平面形は長軸0.50、短軸0.27mの不正円形を呈する。床面を約5cmほど掘り込んだ地床炉である。炉床は底面と奥側が良く焼け、赤変硬化している。　**覆土**　9層から構成され、床面近くの土層には焼土粒や炭化物粒が多量に含まれ、上層にはロームブロックやローム粒が含まれる土層がある。焼土や粘土は床面から若干浮いて出土している。　**遺物**　No.1～5は弥生土器であり、No.1～4は壷形土器である。No.1の土器はP1の東側に潰れて出土した。No.1・2は床面上から出土している。No.5は弥生土器片であり櫛歯状工具により櫛描文が施文されている。遺構内からアプライトの剥片4gが出土した。　**所見**　出土遺物から弥生時代後期後半のものと思われる。本遺構からは炭化物や焼土などが検出されている。廃棄された住居に炭化物や焼土を投棄したというよりは、この場で燃焼した可能性が高いように考えられる。

第14号住居跡出土遺物

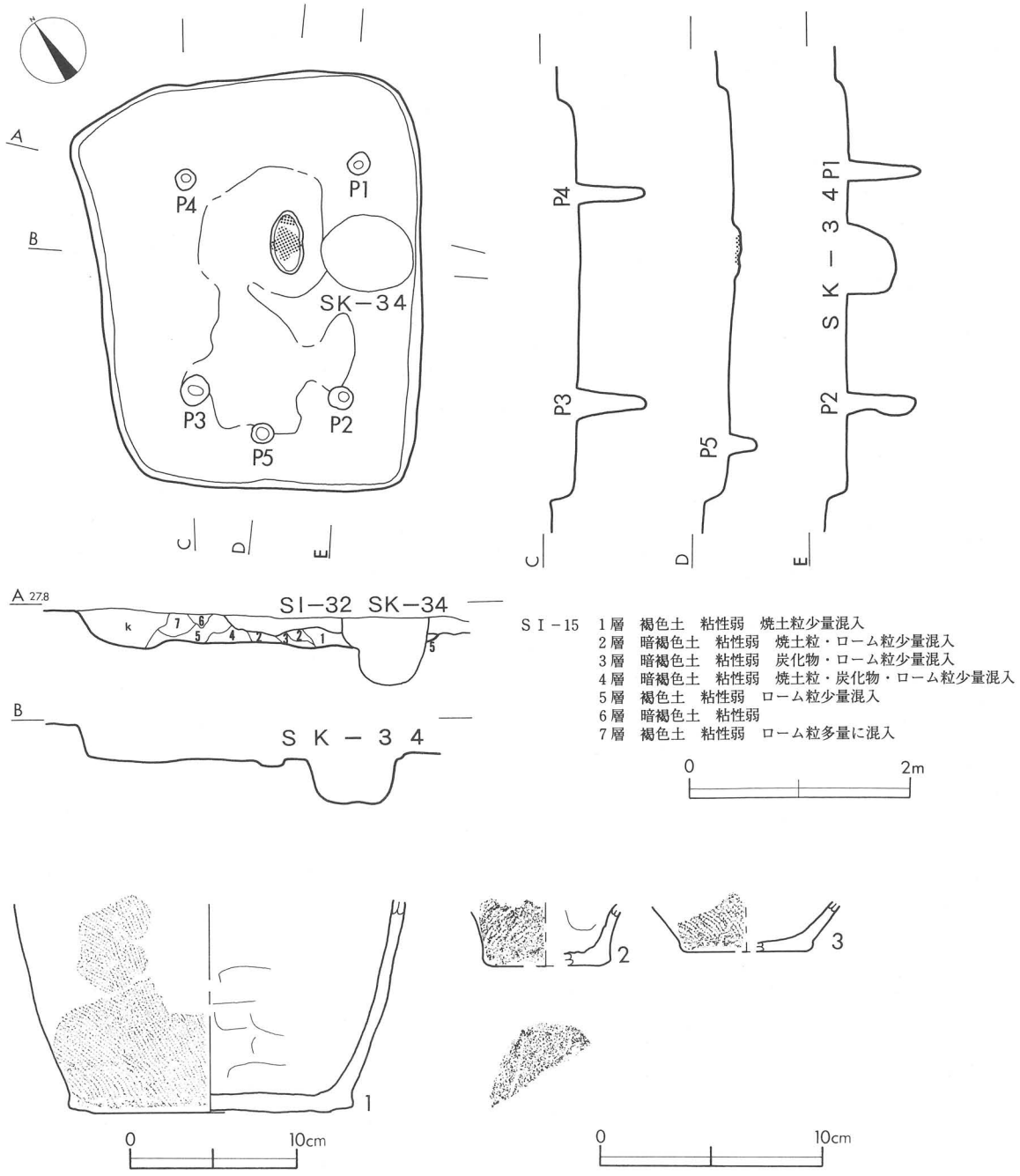
番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	弥生土器	壷		(26.4)	12.4	橙	長石・石英	普	33	付加条1種LR+2R縄文施文 底面に籾圧痕 内外面に炭化物付着 部分的に被熱 回転復元
2	弥生土器	壷	17.7	(21.7)		橙	長石・石英	不良	40	頸部で括れる 頸部無文帯あり
3	弥生土器	壷		(12.7)		橙	長石・石英	普	30	内面ヨコナデ
4	弥生土器	壷		(2.9)	12.0	橙	長石・石英	普	10	付加条1種 内面荒れ

第15号住居跡〔旧第22a号住居跡〕（第35図　PL4）

位置　調査区中央の、標高27.25m付近の台地上東側、S－19・20区にわたり確認されている。第32号住居跡や第34号土坑により切られている。周辺には第10・23号住居跡、第22・32号土坑が存在する。　**規模と平面形**　長軸3.67m、短軸2.97mの本来は長方形を呈するものと思われる。北隅は張り出したようになっているが撹乱のためである。**主軸方向**　N－38°－E　**壁**　壁高は21～11cmを数え、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　全体的に平坦で、水平である。硬化面はP1～P4・P5の内側が踏み固められている。　**ピット**　P1～P5の5ヶ所が確認された。P1～P4は主柱穴であり、P2の断面は底面近くが膨らむ。P5は入口ピットである。　**炉**　1ヶ所確認され、P1とP4の中間地点からやや南東壁寄りにあり、平面形は長軸1.1、短軸0.6mの長楕円形を呈する。床面を約4cmほど掘り込んだ地床炉である。炉床は入り口側がやや掘り込まれ、底面と奥側が良く焼け、赤変硬化している。　**覆土**　7層から構成され、第7層にはローム粒が多く含まれる。　**遺物**　No.1～3は弥生土器であり、No.1は壷形土器である。No.2・3は甕形土器である。　**所見**　出土遺物から弥生時代後期後半のものと思われる。

第15号住居跡出土遺物

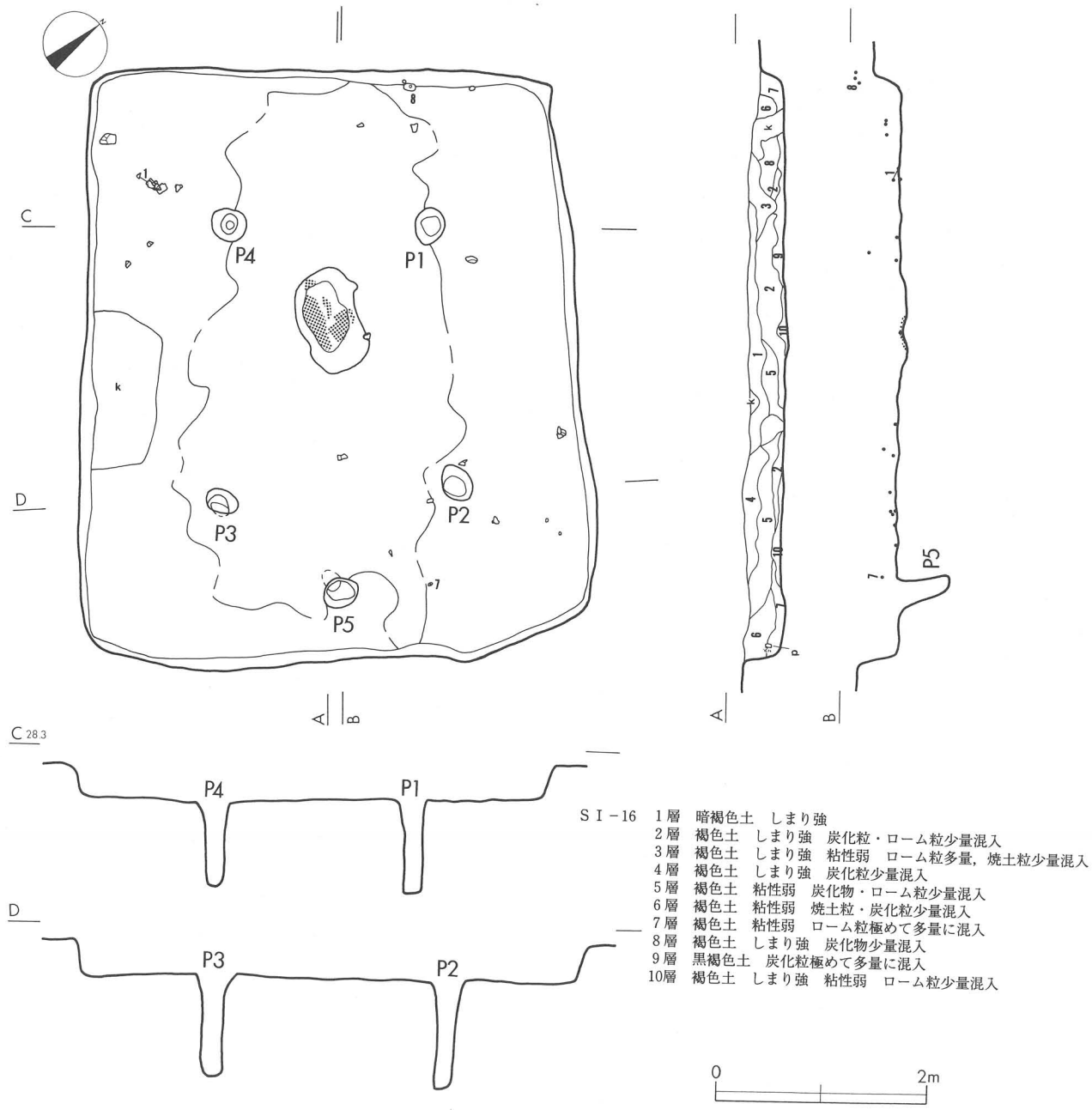
番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	弥生土器	壷		(26.4)	12.4	橙	長石・石英	普	10	内面ヨコナデ 付加条1種RL+2L
2	弥生土器	甕		(2.4)	5.5	にぶい橙	長石・石英	普	5	付加条1種 外面にスス付着 内面荒れ 底部木葉痕
3	弥生土器	甕		(2.0)	5.4	橙	長石	普	5	付加条1種 内面荒れ



第35図　第15号住居跡実測図・出土遺物実測図

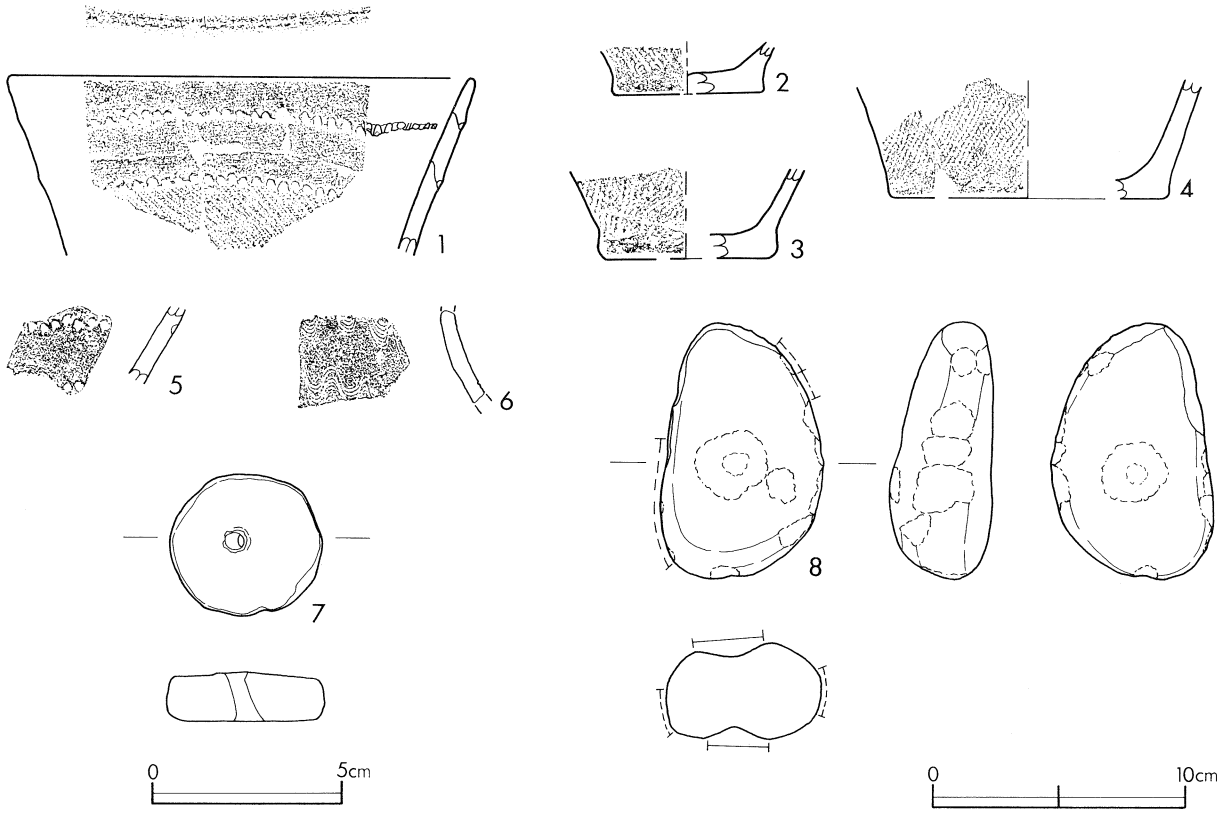
第１６号住居跡〔旧第３８号住居跡〕（第36図・第37図№１～８　ＰＬ４・17・31）

位置　調査区中央の、標高28.00m付近の台地上西側、Ｇ－21区にわたり確認されている。周辺には第17号住居跡が存在する。　**規模と平面形**　長軸（3.86m）、短軸3.29mの南南東側がやや広がる台形に近い長方形を呈する。　**主軸方向**　Ｎ－38°－Ｅ　**壁**　壁高は21～11cmを数え、南西壁は垂直に立ち上がるが北東壁は緩く立ち上がる。　**床**　全体的に平坦で、水平である。硬化面は、Ｐ１～Ｐ４・Ｐ５から北西壁にかけて踏み固めら



第36図　第16号住居跡実測図

れている。南南西の壁際に撹乱が見られた。　**ピット**　P1～P5の5ヶ所が確認された。P1～P4は主柱穴であり、P5は入口ピットである。　**炉**　1ヶ所確認され、P1とP4の中間地点からやや南東壁寄りにあり、平面形は長軸1.0、短軸0.55mの不正楕円形を呈する。床面を約10cmほど掘り込んだ地床炉である。炉床は底面の入り口側が掘り込みも深く良く焼け、赤変硬化している。　**覆土**　10層から構成され、最下層にあたる第9・10層に焼土や炭化物が多く含まれる。第7層はほぼソフトロームのような土層であるが焼土が少量含まれる。　**遺物**　No.1～6は弥生土器である。No.1は壷形土器である。No.2・3は甕形土器の底部である。No.4は壷形土器の底部である。No.5・6は弥生土器片であり、No.5には刺突文が加えられている。No.6は頸部で櫛歯状工具により櫛描文が施文されている。No.7は土製の紡錘車である。No.8は磨石類であり、遺構確認時に出土した。アプライトの剥片が2区から16.5ｇ、4区から14.5ｇ出土した。　**所見**　出土遺物の量は少なく小破片のみが



第37図　第16号住居跡出土遺物実測図

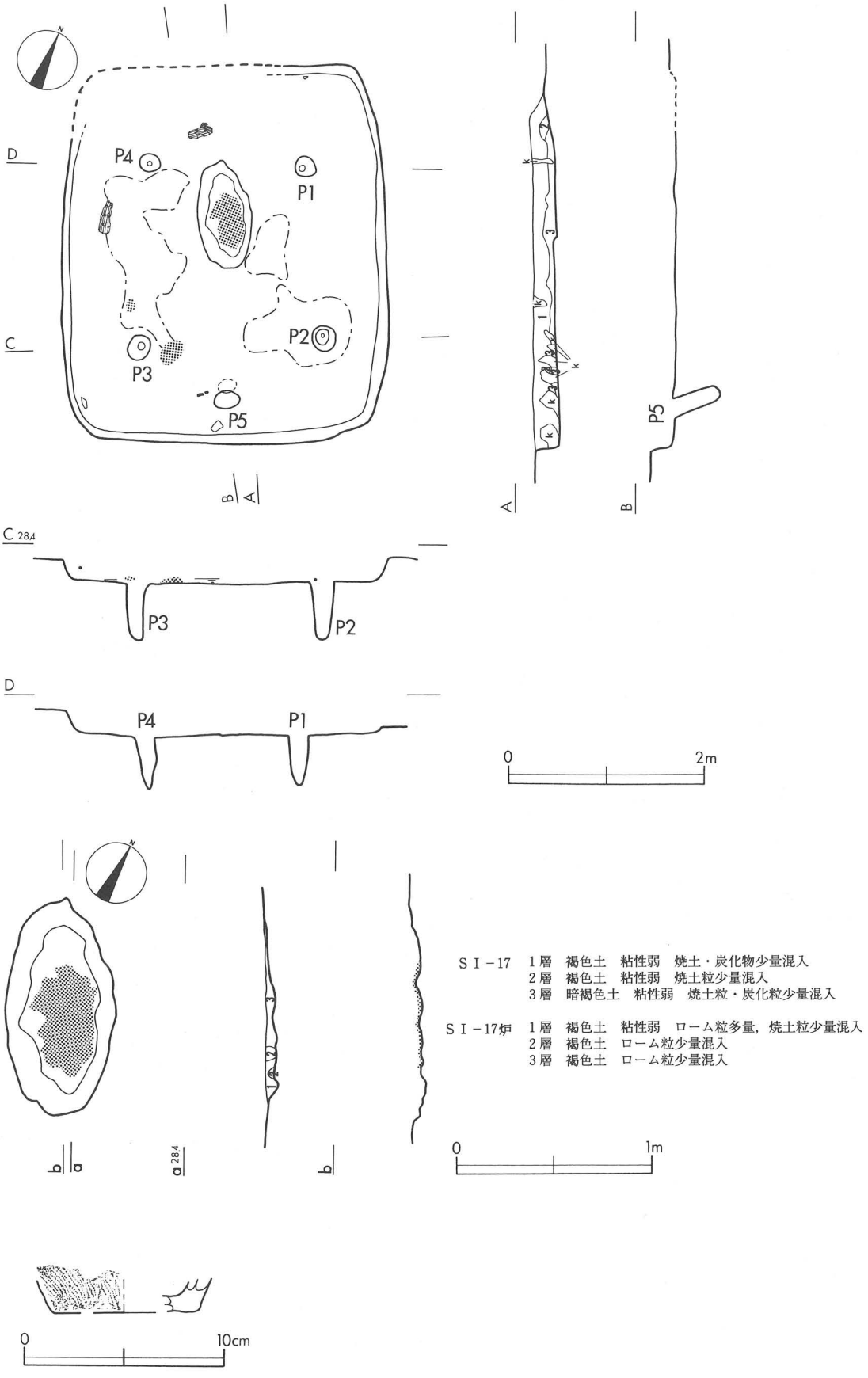
出土した。出土遺物から弥生時代後期後半のものと思われる。

第１６号住居跡出土遺物

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	弥生土器	甕	18.6	(7.0)		にぶい黄橙	長石	普	5	付加条1種RL+2L縄文施文 口唇部に回転縄文 内面ヨコナデ
2	弥生土器	甕		(1.7)	5.7	にぶい橙	長石・石英	普	5	付加条1種RL+2L縄文施文
3	弥生土器	甕		(3.5)	7.2	にぶい橙	長石	普	5	付加条1種RL+2L縄文施文 内面ヨコナデ
4	弥生土器	甕		(4.3)	11.2	にぶい黄橙	長石・石英	普	5	付加条1種RL+2L縄文施文 内面ヨコナデ
7	土製品	紡錘車	上面径 3.9 下面径 3.6 厚さ 0.9 重さ20 孔径0.4					普	１００	断面長方形 表面ナデ 穿孔方向は下面から 孔の軸が著しく傾く
8	石器	磨石類	長さ 10.1 幅 6.5 厚さ 4.1 重量34.5 石材 砂岩						１００	平坦面には1ヶ所凹み 上端に磨り面 側面と下端部に敲打痕

第１７号住居跡〔旧第２６号住居跡〕（第38図　ＰＬ４）

位置　調査区中央の、標高28.25m付近の台地上西側、Ｉ－21・22区にわたり確認されている。周辺には第16・18号住居跡が存在する。　**規模と平面形**　長軸3.51m、短軸3.07mの長方形を呈し、どちらかと言えば小型の住居跡である。　**主軸方向**　Ｎ－25°－Ｗ　**壁**　壁高は22～７cmを数え、北西角壁は試掘調査時のトレンチにより削平してしまっている。　**床**　全体的に平坦で、水平である。Ｐ２周辺、Ｐ３・Ｐ４にかけてが踏み固められている。床面が面的に硬化していないのは、土層図に見られるように撹乱の影響かも知れない。Ｐ３の周辺には焼土がみられ、Ｐ４の周辺には炭化物が出土した。　**ピット**　Ｐ1～Ｐ５の５ヶ所が確認された。Ｐ1～Ｐ４は主柱穴であり、Ｐ５は入口ピットである。　**炉**　１ヶ所確認され、Ｐ１とＰ４の中間地点からやや南東壁寄りにかけてあり、平面形は長軸1.03、短軸0.54mの長楕円形を呈する。床面を約５cmほど掘り込んだ地床炉である。炉床は入り口側が傾斜がきつく、奥側が緩い。炉床の底面が良く焼け赤変硬化している。　**覆土**　３層



第38図　第17号住居跡実測図・出土遺物実測図

から構成され、第２層には炭化物や焼土粒が含まれている。第１層は最終的に埋め戻された土層と考えられる。

遺物　出土した遺物は少なく実測可能なものは、No.1の甕形の弥生土器底部のみである。図化はしていないが住居内の南壁から大型の自然礫が出土している。またアプライトの剥片が３区から14ｇ出土している。　**所見**　出土遺物から弥生時代後期後半のものと思われる。

第１７号住居跡出土遺物

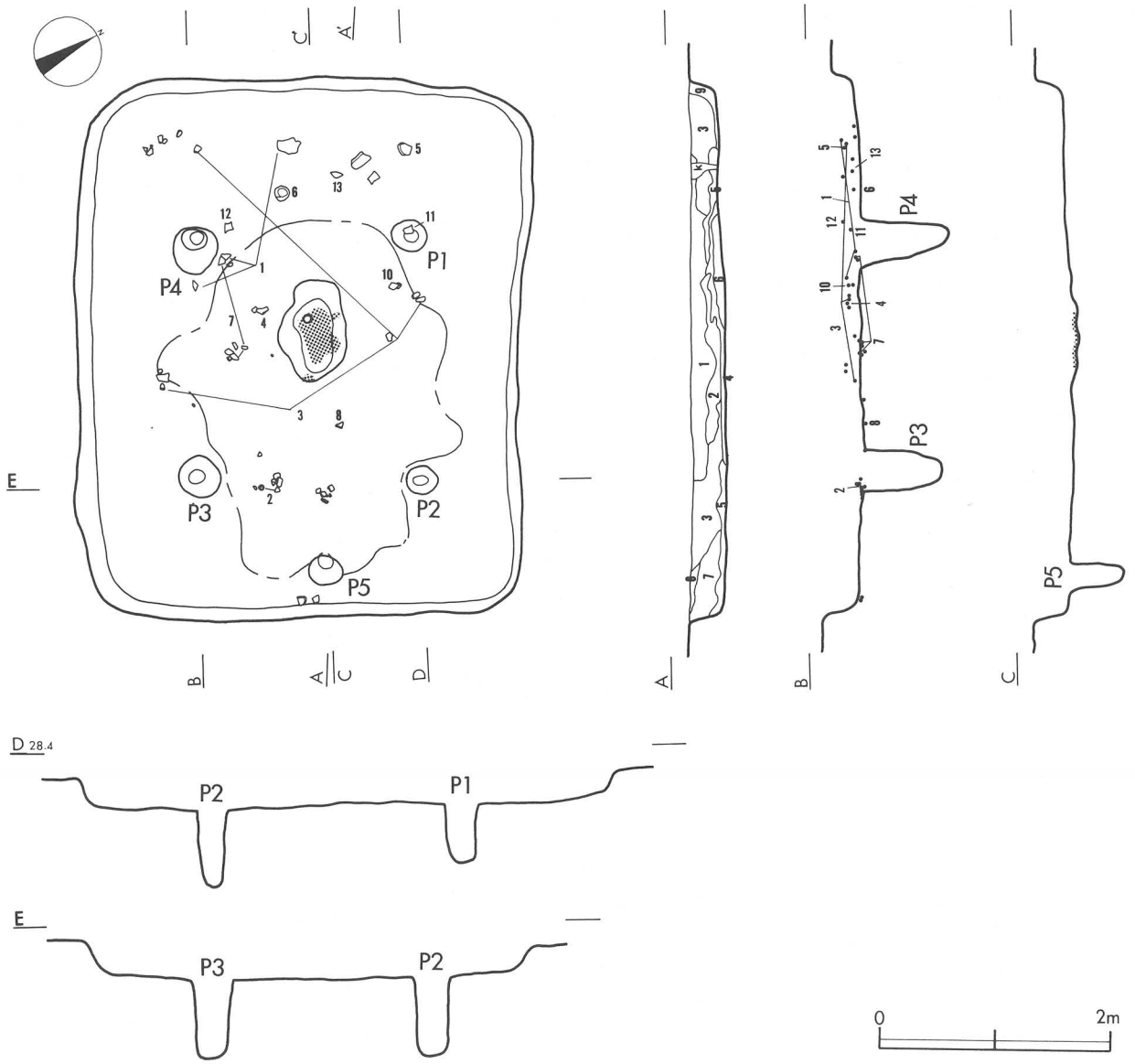
番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	弥生土器	甕	1.7	(7.0)		にぶい黄橙	長石・石英	普	5	底部片 付加条１種RL+2L縄文施文 内面ナデ 底面木葉痕 被熱

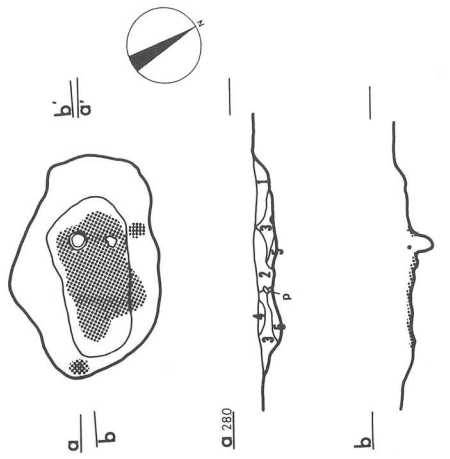
第１８号住居跡〔旧第２７号住居跡〕（第39図・第40図No.１～13・第83図　ＰＬ５・17・31）

位置　調査区中央の、標高28.25m付近の台地上、Ｋ－20・21区にわたり確認されている。周辺には第12・17・19号住居跡が存在する。　**規模と平面形**　長軸4.46m、短軸3.65mの長方形を呈する。　**主軸方向**　Ｎ－58°－Ｗ　**壁**　壁高は35～25cmを数え、緩く立ち上がる。　**床**　全体的に平坦で、水平である。硬化面は、Ｐ１～Ｐ４・Ｐ５の範囲内が踏み固められている。　**ピット**　Ｐ１～Ｐ５の５ヶ所が確認された。Ｐ１～Ｐ４は主柱穴であり、Ｐ５は入口ピットである。　**炉**　１ヶ所確認され、Ｐ１とＰ４の中間地点からやや南東壁寄りにあり、平面形は長軸0.88、短軸0.54mの不正楕円形を呈する。床面を約５cmほど掘り込んだ地床炉である。炉床は入り口側がやや深く掘り込まれている。炉床の底面が良く焼け赤変硬化している。炉の小ピット内は焼けておらず後世の影響によるものである。　**覆土**　９層から構成され、炉上の第６層は黒褐色を呈し炭化物粒を多量に含む。　**遺物**　遺物は住居内の西側から大型の弥生土器破片が出土している。西壁寄りの出土遺物と炉近辺の出土遺物が接合関係にある。西壁寄りの遺物は床から５cm浮き、炉近辺のものは床面近くから出土した。No.1～12は弥生土器であり、No.1・2・4・6・11は壷形土器である。No.3・5・7～10は甕形土器である。No.12は高坏形土器の脚部である。No.2は茨城県那珂川以北で特徴的に出土する土器の器形・施文方法を持つものである。No.13は砥石である。　**所見**　出土遺物から弥生時代後期後半のものと思われる。

第１８号住居跡出土遺物

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	弥生土器	壷		(16.2)		橙	長石・石英	普	２０	大型の胴部破片付加条１種RL+2L縄文施文 内面ヘラナデ・削り
2	弥生土器	壷		(10.0)		にぶい橙	砂粒・金雲母	普	４０	頸部無文帯を挟んで３本沈線によるスリット４単位と胴部に５単位 その間は格子目文と波状文
3	弥生土器	小型甕		(9.0)	4.8	浅黄橙	長石・石英	普	２５	付加条１種LR+2R縄文施文 底面上げ底 内面ヨコナデ
4	弥生土器	壷		(4.1)	(12.3)	浅黄橙	長石・石英	普	5	付加条１種RL+2L縄文施文 一部半置半転状態 外面ヘラ削り 内面ヘラ削り
5	弥生土器	甕		(3.0)	8.4	浅黄橙	長石・石英	普	１０	付加条１種LR+2R縄文施文 内面ナデ 底面側縁擦れ
6	弥生土器	壷		(4.0)	12.2	橙	長石・石英	不良	１０	付加条１種LR+2R縄文施文 内面荒れ 底面木葉痕 側面の一部に赤色の付着物
7	弥生土器	甕		(3.3)	(6.7)	にぶい橙	長石・石英	普	１０	付加条１種RL+2L縄文施文 内面ヘラナデ 底面木葉痕
8	弥生土器	甕		(1.7)	(6.4)	浅黄橙	長石・石英	普	5	付加条１種LR+2R縄文施文 内面ヘラナデ
9	弥生土器	甕		(2.1)	(6.2)	黄橙	長石・石英	普	5	付加条１種RL+2L縄文施文 内面ヘラナデ
10	弥生土器	甕		(2.2)	(7.0)	橙	長石・石英・雲母	普	5	付加条１種RL+2L縄文施文 内面ヘラナデ 被熱
11	弥生土器	壷		(5.8)	(15.0)	浅黄橙	長石・石英	普	5	付加条１種羽状を呈する 底面木葉痕 羽状の中央部分に沿って帯状に水平・垂直方向に赤彩
12	弥生土器	高坏		(4.4)	(5.6)	にぶい黄橙	長石・石英	普	３０	内外面ナデ
13	石器	砥石	長さ 10.1 幅 6.5 厚さ 4.1 重量34.5 石材 砂岩						部分	一面砥石 皿状 一部敲打痕あり

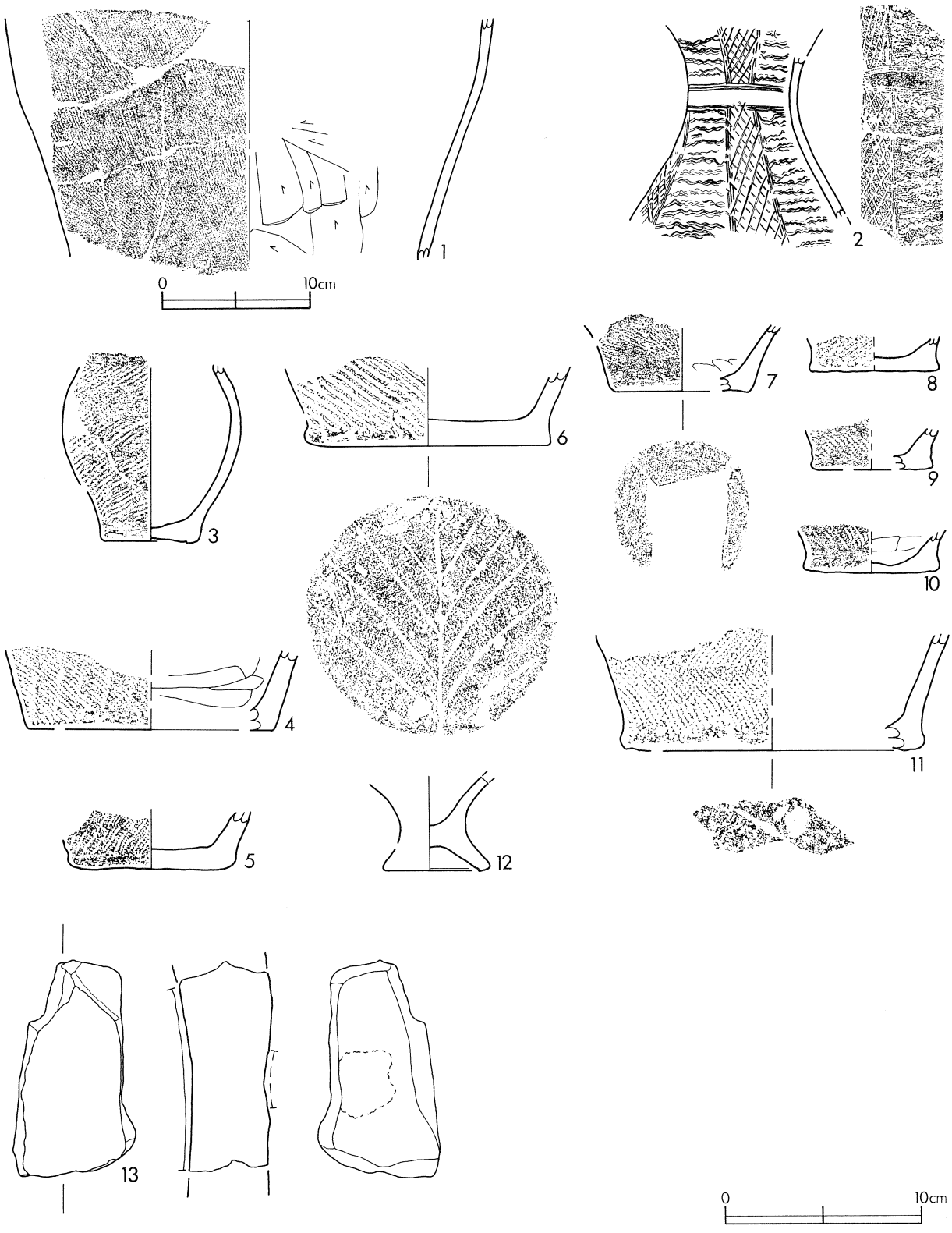




ＳＩ－18　1層　褐色土　しまり弱　焼土粒・炭化粒少量混入
2層　褐色土　しまり弱　ローム少量混入
3層　褐色土　粘性弱　ローム多量，炭化粒少量混入
4層　褐色土　しまり弱　ローム粒少量混入
5層　褐色土　しまり弱　炭化粒・ローム粒少量混入
6層　黒褐色土　炭化粒極めて多量，ローム粒少量混入
7層　褐色土　粘性弱　炭化粒少量混入
8層　黄褐色土　しまり強　ローム粒少量混入
9層　黄褐色土　粘性弱　ローム粒多量に混入

ＳＩ－18炉　1層　明褐色土　焼土粒・ローム多量，炭化物少量混入
2層　橙色土　粘性・しまり強　ローム多量，焼土・炭化物少量混入
3層　黒褐色土　しまり弱　焼土・ローム粒多量，炭化物少量混入
4層　褐色土　粘性強　焼土粒・ローム粒多量，炭化物少量混入
5層　明赤褐色土　しまり強　粘性弱　焼土・ローム粒多量，炭化物少量混入

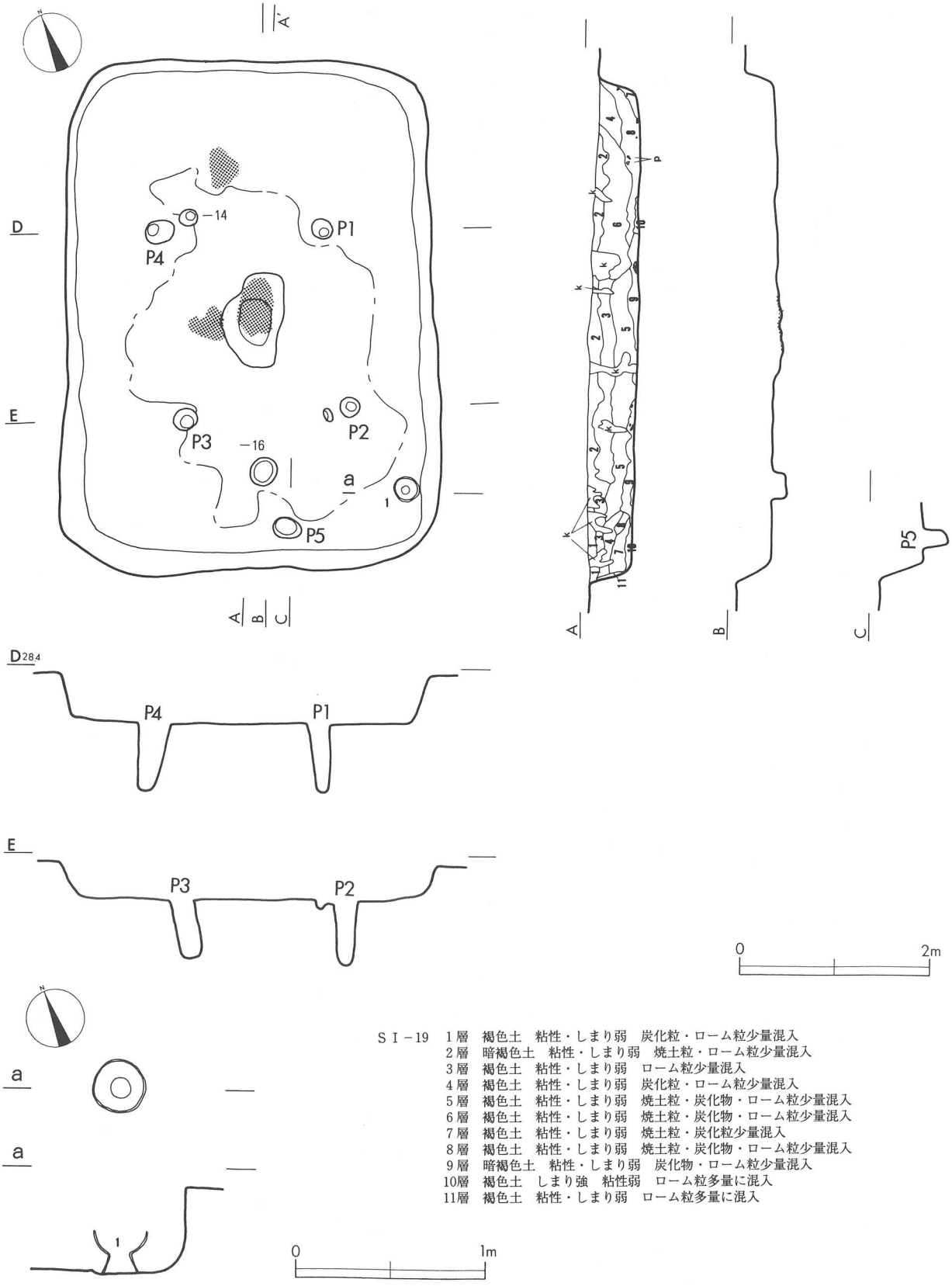
第39図　第18号住居跡実測図



第40図　第18号住居跡出土遺物実測図

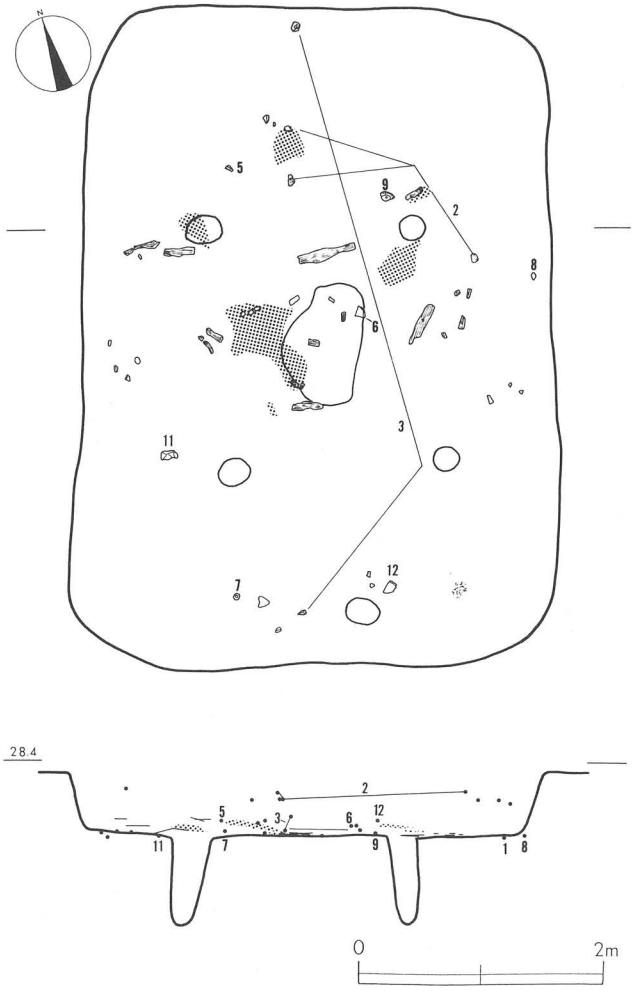
第１９号住居跡〔旧第１０号住居跡〕（第41・42図・第43図№１～12　ＰＬ５・17・18・31）

位置　調査区中央の、標高28.25m付近の台地上、Ｌ－21・22区にわたり確認されている。周辺には第18・35



SＩ－19　1層　褐色土　粘性・しまり弱　炭化粒・ローム粒少量混入
2層　暗褐色土　粘性・しまり弱　焼土粒・ローム粒少量混入
3層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒少量混入
4層　褐色土　粘性・しまり弱　炭化粒・ローム粒少量混入
5層　褐色土　粘性・しまり弱　焼土粒・炭化物・ローム粒少量混入
6層　褐色土　粘性・しまり弱　焼土粒・炭化物・ローム粒少量混入
7層　褐色土　粘性・しまり弱　焼土粒・炭化粒少量混入
8層　褐色土　粘性・しまり弱　焼土粒・炭化物・ローム粒少量混入
9層　暗褐色土　粘性・しまり弱　炭化物・ローム粒少量混入
10層　褐色土　しまり強　粘性弱　ローム粒多量に混入
11層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒多量に混入

第41図　第19号住居跡実測図

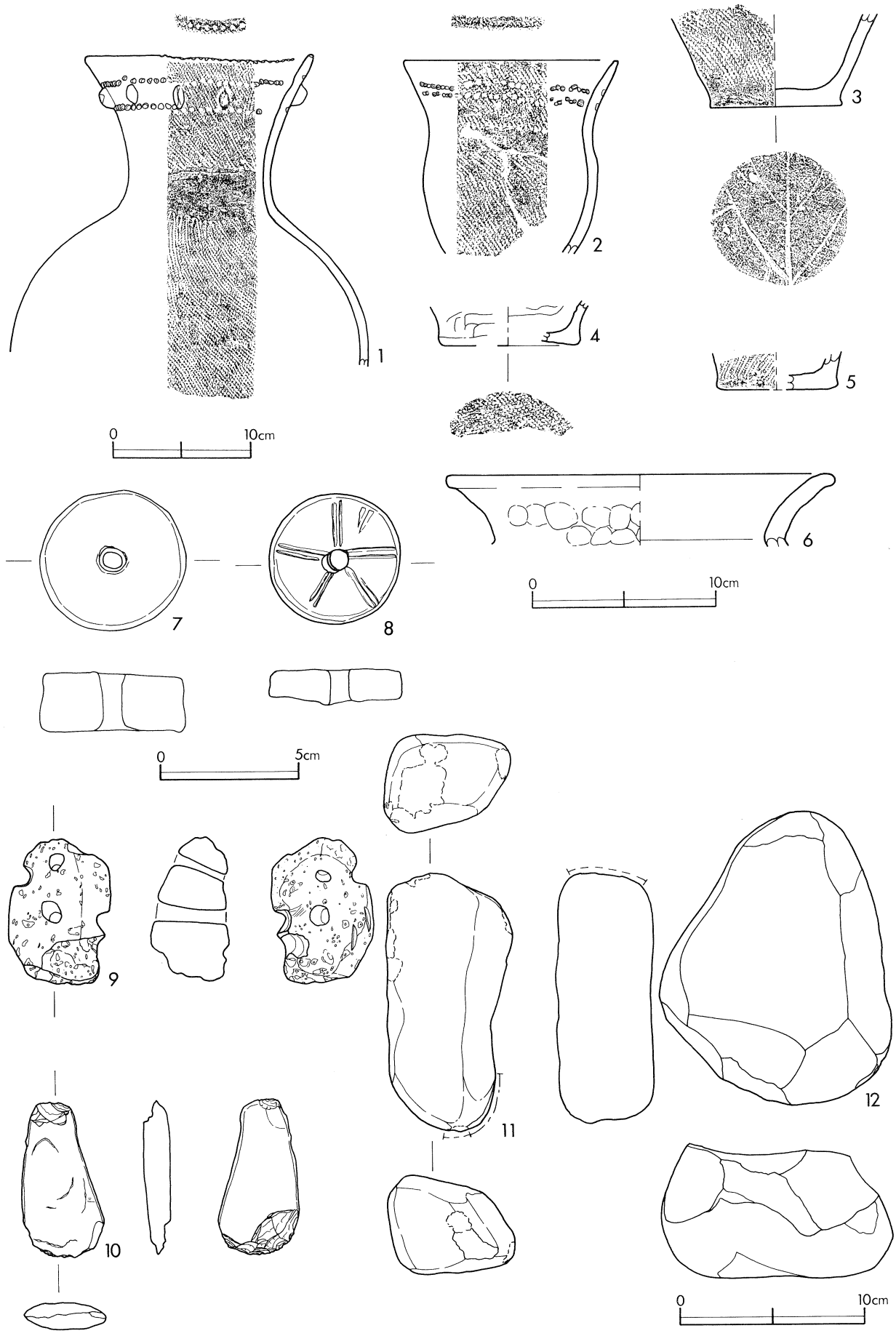


第42図　第19号住居跡出土状況図

号住居跡、第45号土坑が存在する。　**規模と平面形**　長軸4.90m、短軸3.34mの長方形を呈する。　**主軸方向**　N－13°－E　**壁**　壁高は36～30cmを数え、ほぼ垂直に立ち上がり、現状での掘り込みは深い。　**床**　全体的に平坦で、水平である。硬化面は、基本的にP1～P4・P5の範囲内が踏み固められ、P4の北側や南南東隅の床面に据え付けられたような壷形土器の方にも広がっている。炉の西側やP4の北側には床面が焼けている部分が確認された。　**ピット**　P1～P5の5ヶ所と不明ピットが3ヶ所確認された。P1～P4は主柱穴であり、P5は入口ピットである。P2とP4の近接した場所には小規模なピットが確認されたが主柱穴の補助的な機能を持つものか否かは不明である。P1～P4の配置は、P1・P2の間隔よりP3・P4の間隔のほうが広い。P3は外側を向く。　**炉**　1ヶ所確認され、丁度P1～P4に囲まれた中央部分にあり、平面形は長軸0.95、短軸0.65mの不正楕円形を呈する。床面を約10cmほど掘り込んだ地床炉である。炉床は入り口側がやや深く掘り込まれていて、奥側が緩く立ち上がる。炉床の底面から奥側の立ち上りが良く焼け、赤変硬化している。　**覆土**　11層から構成され、炉の覆土上には炭化物・粒が多く見られた。第8・9層には炭化物・粒や焼土粒が目立って含まれた。　**遺物**　遺物は住居内の中央部と入り口部に見られた。炭化物や焼土は中央部分に集まって出土した。南南東隅の床面に据え付けられたような壷形土器は逆位の状態で出土した。土器の胴部は水平に割られている。床面に置かれたというよりは床面を若干掘り凹めたところに据えているようである。この土器の西側から灰白色粘土が出土した。No.1～5は弥生土器であり、No.1は壷形土器である。No.2～3は甕形土器である。No.3の底部は北・南壁側出土のものが接合した。No.6は古墳時代中期の甕形土器の口縁部であり、覆土中の出土で、接合した同一個体は1区から出土した。No.7・8は土製の紡錘車である。No.9～12は石器であり、No.9は砥石で穿孔されている。No.10は磨製石斧、No.11は磨石類、No.12は打ち割られた石器で石核と考えられる。　**所見**　出土遺物から弥生時代後期後半のものと思われる。本住居の炭化物の出土状況は他の住居のものとは異なり中央部分から出土している。

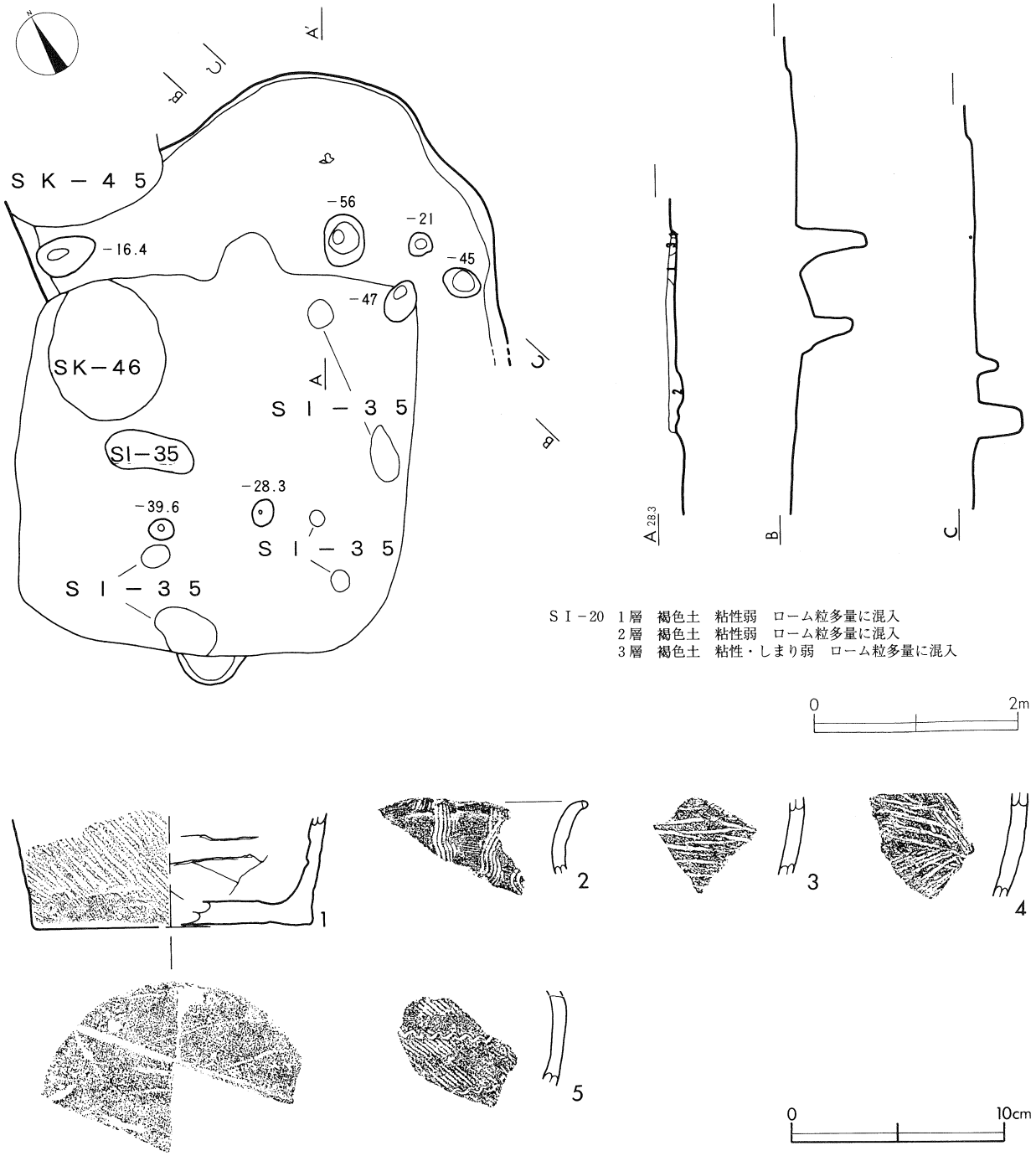
第19号住居跡出土遺物

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	弥生土器	壷	16.4	(22.7)		橙	長石・石英	普	50	付加条1種RL+2L縄文施文 頸部無文帯 口縁部内面と頸部外面に刷圧痕 口縁部に10単位の粘土貼り付け 頸部無文帯 2列の刺突列 口唇部に縄文押圧 内面ヨコナデ
2	弥生土器	小型甕	11.8	(10.4)		にぶい橙	砂粒・金雲母	普	30	付加条1種LR+2R縄文施文 口唇部に回転縄文 頸部無文帯 口縁部に2列の刺突列
3	弥生土器	甕		(4.9)	7.3	浅黄橙	長石・石英	普	5	付加条1種RL+2L縄文施文 底面木葉痕
4	弥生土器	甕		(2.1)	(7.8)	浅黄橙	長石・石英	普	5	外面ヘラナデ 内面ナデ 底面に布圧痕
5	弥生土器	甕		(2.0)	(6.6)	浅黄橙	長石・石英	普	5	付加条1種LR+2R縄文施文



第43図　第19号住居跡出土遺物実測図

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
6	土師器	甕	21.2	(3.9)		橙	長石・砂	不良	5	口縁部が緩く外反し頸部は屈曲する 外面に指頭圧痕 ヨコナデ
7	土製品	紡錘車	上面径 5.0 下面径 4.8 厚さ 2.2 重さ68 孔径0.7					普	１００	若干偏平な円形を呈し断面形は長方形 表面はナデ 下面の孔縁擦れる
8	土製品	紡錘車	上面径 4.8 下面径 4.9 厚さ 1.3 重さ34 孔径0.6					普	１００	平面形は円形を呈し断面形は長方形 表面はナデ 下面に薄く５本の平行沈線が引かれている
9	石器	砥石	長さ 7.9 幅 5.6 厚さ 4.4 重量 38.8 石材 流斑岩						１００	抉み錐状の貫通孔は２ヶ所あり 有溝
10	石器	打製石斧	長さ 8.3 幅 4.5 厚さ 1.5 重量 71.8 石材 粘板岩						９０	礫石斧 基部と側縁の一部に摩擦痕あり
11	石器	磨石類	長さ 14.5 幅 6.9 厚さ 5.4 重量 770.0 石材 礫岩						１００	両端部敲打痕 下端部磨り面
12	石器	石核	長さ 16.1 幅12.4 厚さ 7.4 重量1655.0 石材 礫岩						１００	一面だけ剥離される



第44図　第20号住居跡実測図・出土遺物実測図

第２０号住居跡〔旧第９ａ号住居跡〕（第44図　ＰＬ５・31）

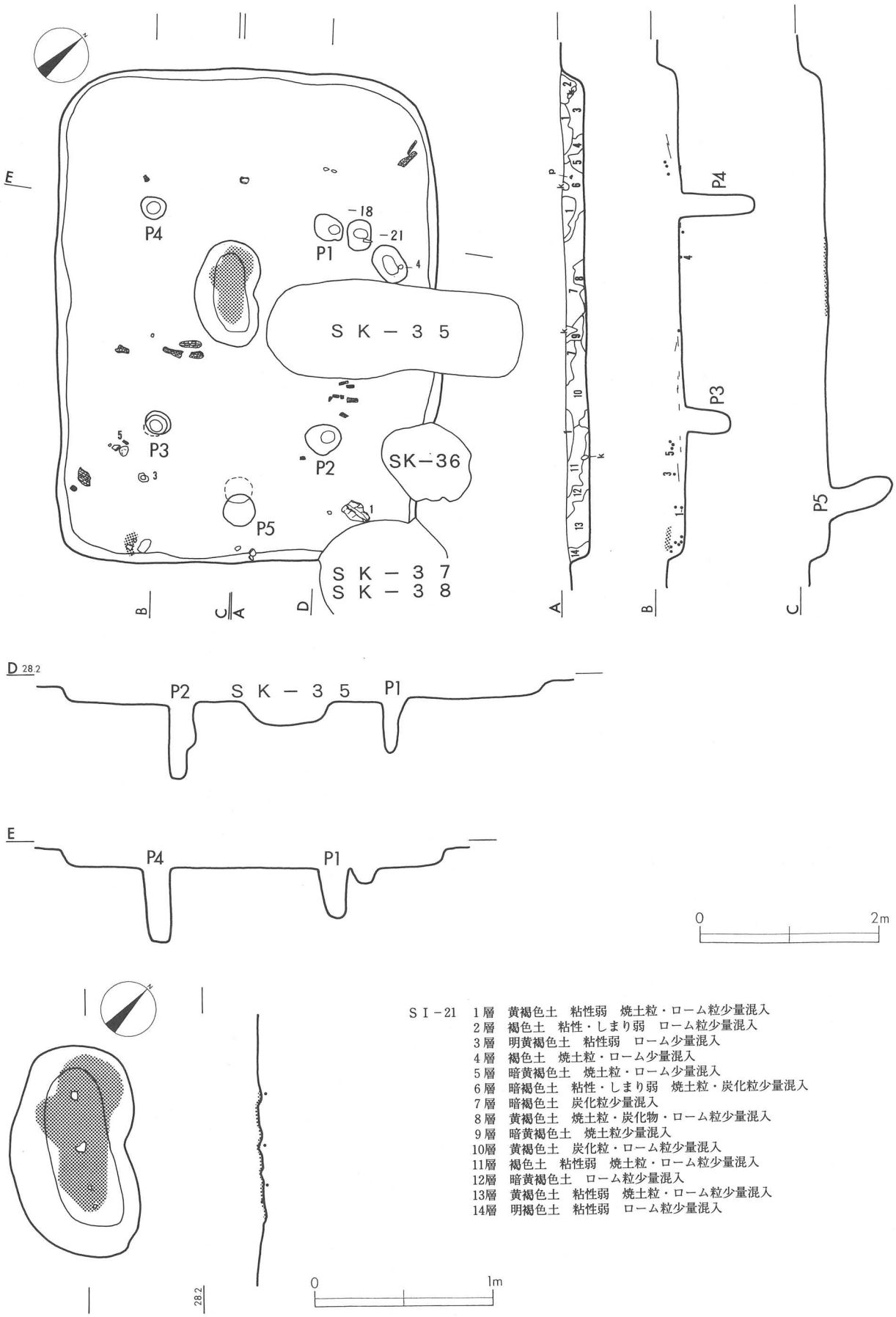
位置　調査区中央の、標高28.25ｍ付近の台地上、Ｌ・Ｍ－22・23区にわたり確認されている。第35号住居跡、第45号土坑により切られている。周辺には第19・24号住居跡、第50号土坑が存在する。　**規模と平面形**　径(4.25)ｍの不正円形を呈する。　**主軸方向**　不明　**壁**　壁高は約5cmを数え、部分的には削平されて存在しない。全体的に掘り込みは浅い。　**床**　全体的に平坦で、水平である。硬化面の範囲は確認されなかった。　**ピット**　５ヶ所に不明ピットが確認された。他の一般的な住居跡のように主柱穴が方形に並ぶことはない。一番深いものは約60cmを計り、他は深さ約50cmを計る。　**炉**　現状の遺構内からは確認されなかった。　**覆土**　当初は遺構として認識していなかったが、土器片が含まれるところから調査を開始した。３層から構成され、第２層中には焼土粒が見られた。　**遺物**　出土した遺物は少なく、No.1～5は弥生土器である。No.1は壷形土器の底部である。No.2～5は破片でNo.2は櫛歯状工具による櫛描文が施文される。No.3・4は単軸絡条体１類による施文がなされる。No.5は結節縄文が施文されている。この他遺構内からはアプライトの小剥片がまとまって出土した。遺構一括として98ｇが出土した。　**所見**　本住居跡は、出土遺物から弥生時代後期後半のものと思われる。形態も不整形で炉も確認されておらず住居跡と呼べるかどうか疑問が残る。この住居内からアプライトの小剥片がまとまって出土していることが特徴といえる。

第２０号住居跡出土遺物

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	弥生土器	壺		(5.2)	13.2	橙	長石・雲母	普	１０	付加条１種RL+2L縄文施文 直に立ち上がる 内面ヘラナデ 底面木葉痕

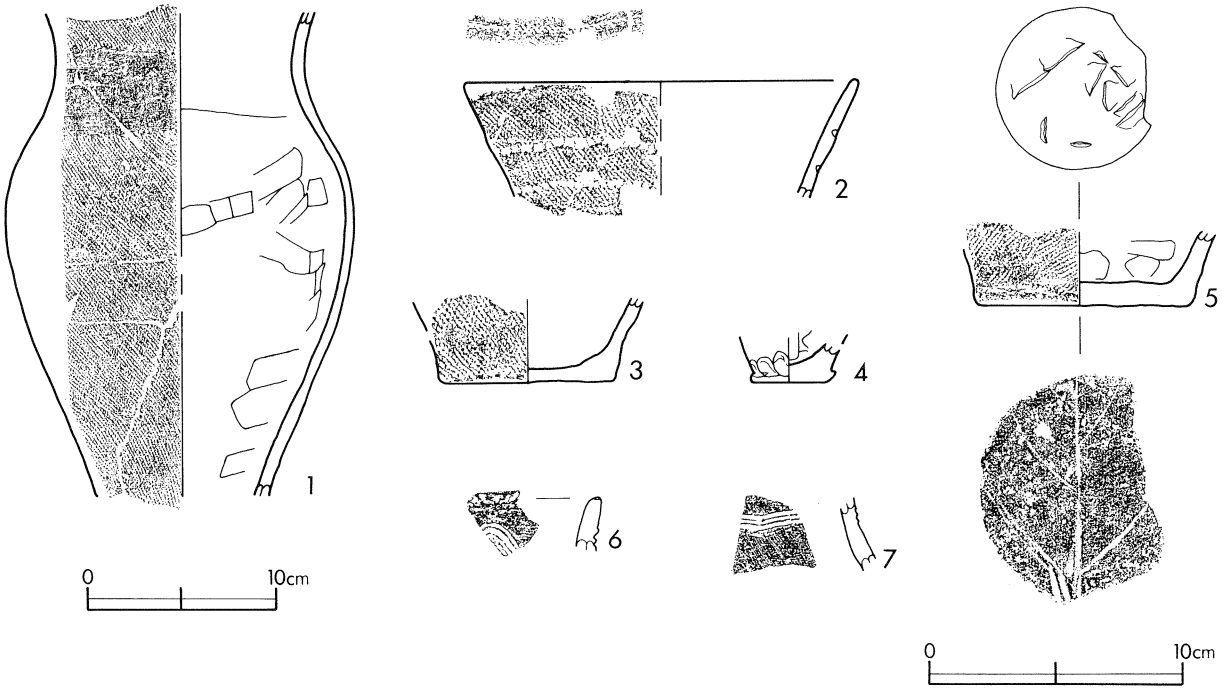
第２１号住居跡〔旧第７号住居跡〕（第45図・第46図No.１～７　ＰＬ５・18・31）

位置　調査区中央の、標高28.00m付近の台地上、Ｏ－21区にわたり確認されている。第35～38号土坑によって切られている。周辺には第22・33号住居跡、第39号土坑が存在する。　**規模と平面形**　長軸5.18m、短軸3.92mの長方形を呈する。　**主軸方向**　Ｎ－47°－Ｗ　**壁**　壁高26～22cmを数え、東北壁から東隅は土坑により壊されている。　**床**　全体的に平坦で、水平である。硬化面は全く確認されなかった。　**ピット**　Ｐ１～Ｐ5の５ヶ所の他、Ｐ1に近接して２ヶ所の不明ピットが確認された。Ｐ1～Ｐ4は主柱穴であり、住居内の配置はそれぞれ並行ではなく、やや菱形を呈する。Ｐ5は入り口ピットであり、主柱穴同様の規模を持ち傾斜している。主柱穴の中でＰ2・4が他の柱穴に比べ深い。Ｐ2の断面形は上部が膨らむ。　**炉**　１ヶ所確認され、Ｐ1とＰ4の中間地点からやや南東壁寄りにあり、平面形は長軸1.12、短軸0.66mの不正楕円形を呈する。床面を約５cmほど掘り込んだ地床炉である。入り口側がやや深く掘り込まれ、緩く立ち上がる。炉床は底面と奥壁寄りが良く焼け赤変硬化している。炉内からも弥生土器小片が出土した。　**覆土**　14層から構成され、第３層から第９層にはローム粒が多く含まれた。　**遺物**　遺物の出土傾向は、中央部分で床面近くから見られ、多くの遺物は床面から浮いて出土している。出土した遺物はNo.1～7が弥生土器である。No.1～3は甕形土器である。No.1は横倒しの状態で床面より若干浮いて出土し、底部と口縁部などが欠損している。No.2は甕形土器の口縁部破片で、横２列に刺突列が施文されている。No.4はミニチュア土器であり、不明ピットから出土した。No.5の内面にはヘラ痕が見られる。No.6・7は櫛歯状工具により櫛描文が施文される破片である。No.6は口唇部に縄文が施文された。炭化材・物の出土状況は住居内にまばらに出土しており、壁際から住居中央に向け傾斜して出土した。焼土は南隅の壁際上層から出土した。アプライト剥片は１区から2.5ｇ、遺構内一括として3.3ｇが出土し



S I − 21　1層　黄褐色土　粘性弱　焼土粒・ローム粒少量混入
2層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒少量混入
3層　明黄褐色土　粘性弱　ローム少量混入
4層　褐色土　焼土粒・ローム少量混入
5層　暗黄褐色土　焼土粒・ローム少量混入
6層　暗褐色土　粘性・しまり弱　焼土粒・炭化粒少量混入
7層　暗褐色土　炭化粒少量混入
8層　黄褐色土　焼土粒・炭化物・ローム粒少量混入
9層　暗黄褐色土　焼土粒少量混入
10層　黄褐色土　炭化粒・ローム粒少量混入
11層　褐色土　粘性弱　焼土粒・ローム粒少量混入
12層　暗黄褐色土　ローム粒少量混入
13層　黄褐色土　粘性弱　焼土粒・ローム粒少量混入
14層　明褐色土　粘性弱　ローム粒少量混入

第45図　第21号住居跡実測図



第46図　第21号住居跡出土遺物実測図

ている。絹雲母片岩が南南東壁より出土した。　**所見**　本住居跡は、出土遺物から弥生時代後期後半のものと思われる。

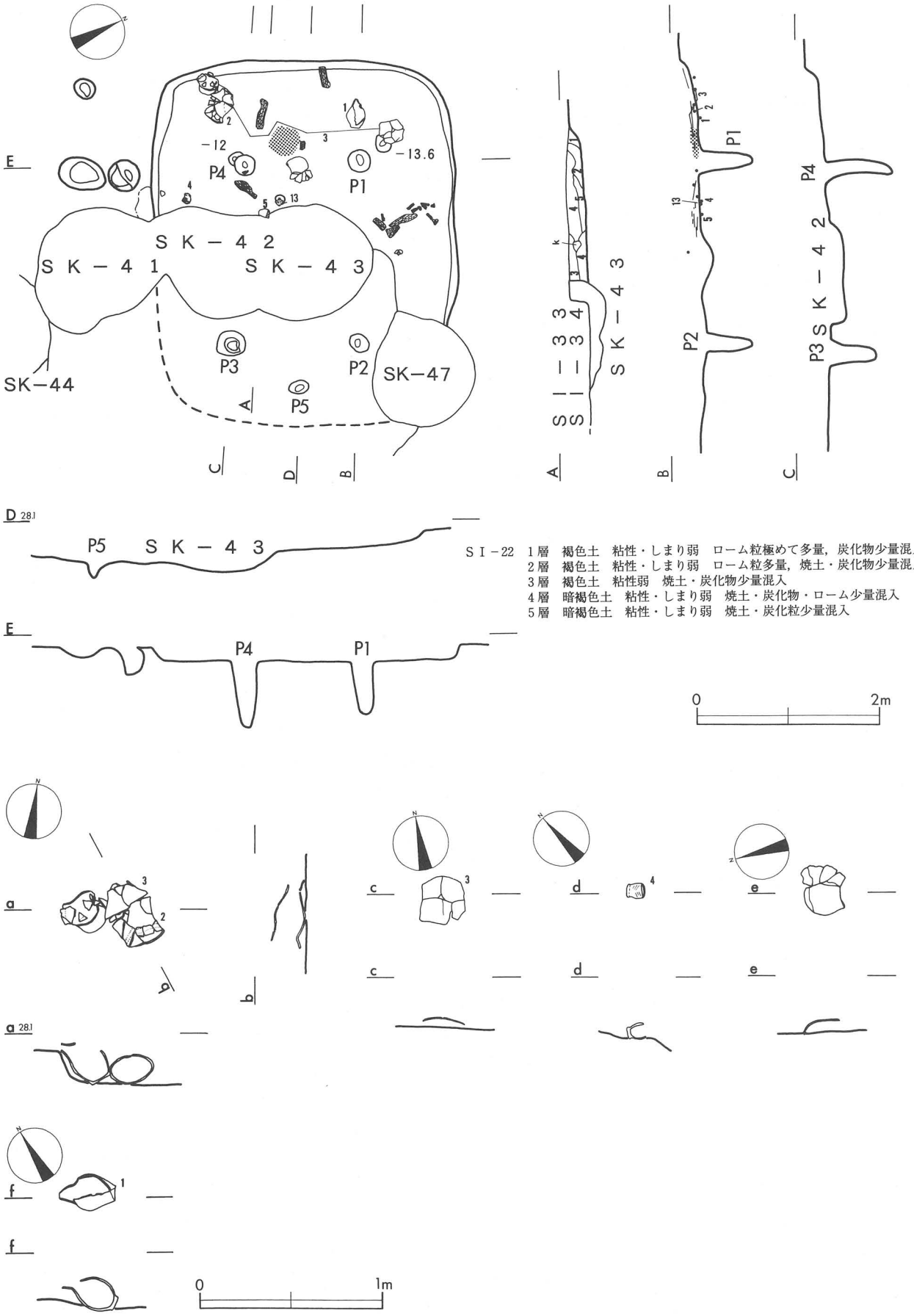
第２１号住居跡出土遺物

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	弥生土器	甕		(25.8)		にぶい橙	長石・石英	普	５０	付加条１種RL+2L縄文施文 頸部無文帯 外面にスス付着
2	弥生土器	甕	15.7	(4.7)		にぶい橙	長石・石英	不良	5	付加条１種RL+2L縄文施文 口唇部に回転縄文 頸部無文帯 口縁部に２列の刺突列
3	弥生土器	甕		(3.1)	6.8	にぶい黄橙	長石・石英	普	１０	付加条１種RL+2L縄文施文
4	弥生土器	ミニチュア		(1.8)	(3.0)	浅黄橙	長石・石英	普	３０	底部の外面に爪による刺突巡る
5	弥生土器	甕		(3.0)	(8.4)	にぶい黄橙	長石・石英	普	１０	付加条１種LR+2R縄文施文 底部内面ヘラナデ 底面木葉痕

第２２号住居跡〔旧第８ａ号住居跡〕（第47図・第48図No.１～13　ＰＬ５・18・31）

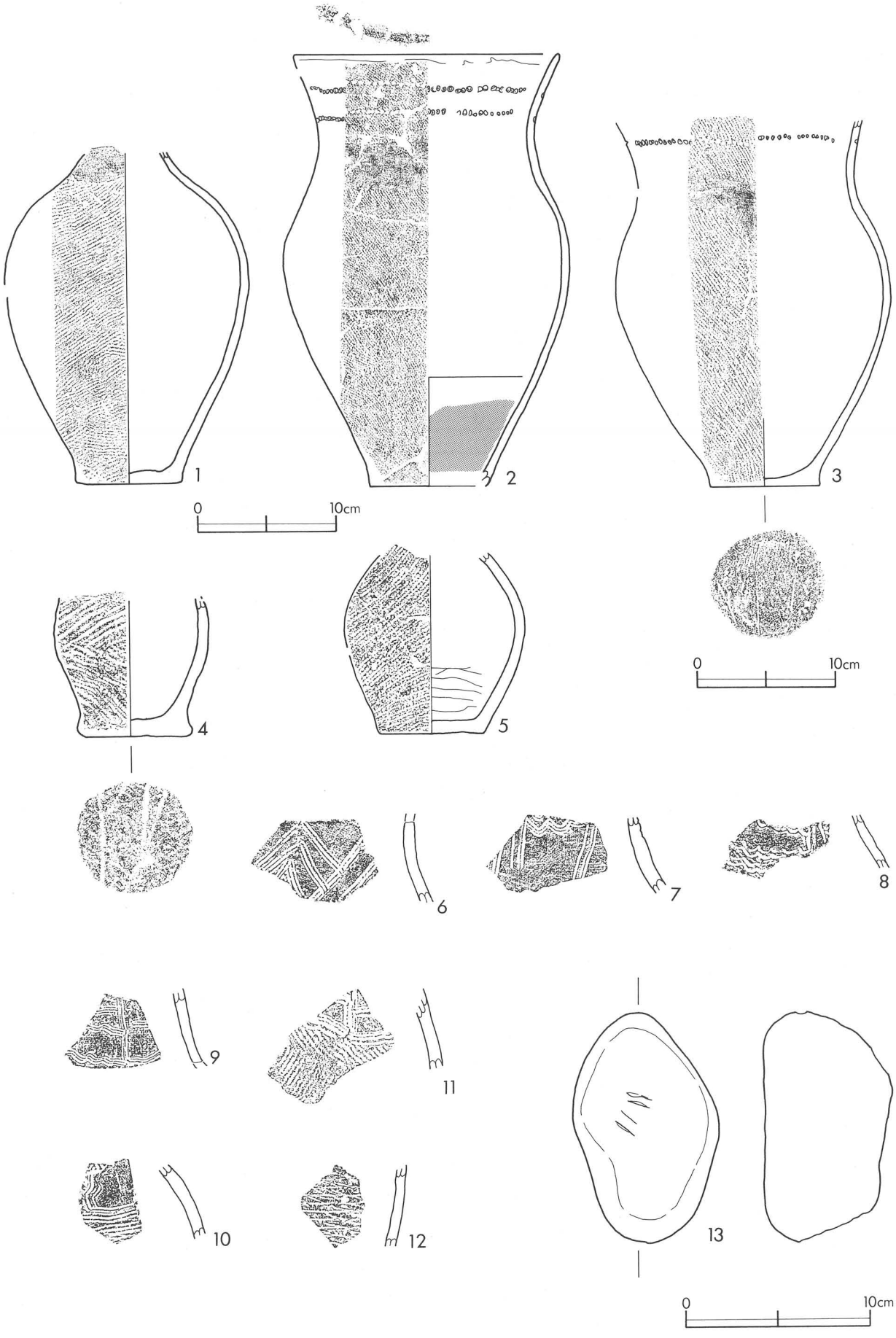
位置　調査区中央の、標高28.00m付近の台地上やや東寄り、Ｐ・Ｑ－21区にわたり確認されている。第33・34号住居跡や第41～43号土坑によって切られている。周辺には第21・23号住居跡、第４号溝が存在する。　**規模と平面形**　長軸（3.75m)、短軸3.26mの長方形を呈する。　**主軸方向**　Ｎ－61°－Ｗ　**壁**　壁高35～13cmを数え、住居の東半分は土坑や他の住居跡により壊されている。　**床**　全体的に平坦で、水平である。硬化面の範囲は確認されなかった。南壁に接した住居外に硬化した床面状の部分が見られた。　**ピット**　Ｐ1～Ｐ5の５ヶ所の他、２ヶ所の不明ピットが確認された。これらの１ヶ所はＰ1に接して深さ12cmで確認された。もう１ヶ所はＰ1の北側に深さ13cmで確認された。この他住居外の硬化面近くにピットが２基確認され、覆土からは弥生土器片が確認された。　**炉**　確認されておらず土坑等の切り合いによって壊されてしまったものであろう。

覆土　５層から構成され、第５層には焼土粒が目立って含まれた。壁際の第２層には炭化物が見られた。Ｐ1・4のの中間西側には焼土が堆積していた。　**遺物**　出土した遺物は、No.1～12が弥生土器でNo.13が石器である。No.1は壷形土器で横倒しの状態で床面上に出土した。No.2・3は甕形土器であり、No.2は横倒しで、No.３は壁



SＩ－22　1層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒極めて多量，炭化物少量混入
2層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒多量，焼土・炭化物少量混入
3層　褐色土　粘性弱　焼土・炭化物少量混入
4層　暗褐色土　粘性・しまり弱　焼土・炭化物・ローム少量混入
5層　暗褐色土　粘性・しまり弱　焼土・炭化粒少量混入

第47図　第22号住居跡実測図・遺物出土状況図

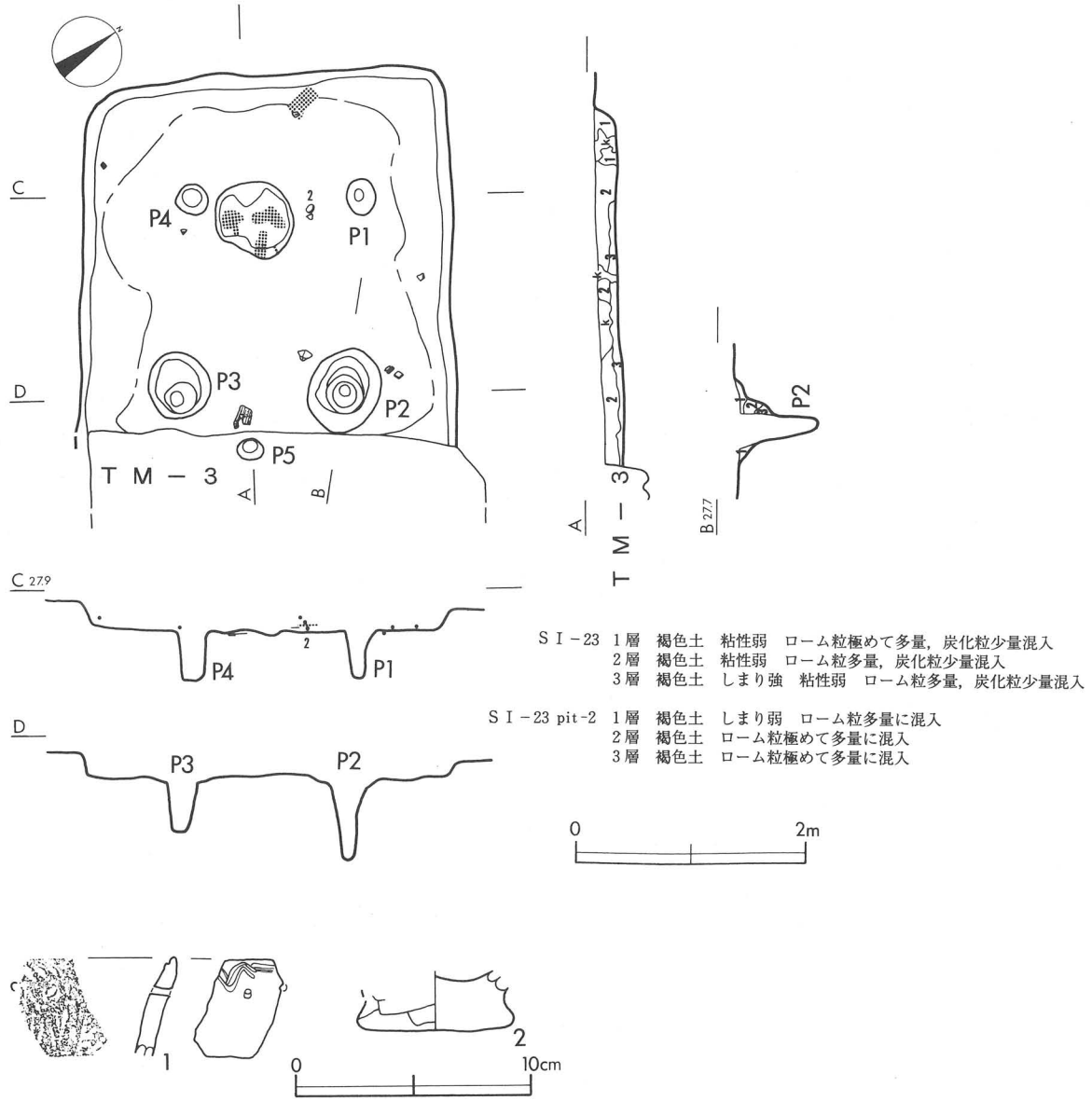


第48図　第22号住居跡出土遺物実測図

に寄りかかるように出土した。いずれも床面上から出土した。No.4・5は小型の甕形土器である。No.6～12は櫛描文が見られる破片である。炭化材・物の出土状況は、壁際が約6cm浮いた状態で、中央部分に向かって傾斜して出土した。中央部分では床面近くから出土した。不明ピットの上をNo.3の土器片が一部覆っている。この他遺構内からは炭化物や焼土が覆土中より出土した。　**所見**　本住居跡は、出土遺物から弥生時代後期後半のものと思われる。住居外の硬化面やピットが本住居に伴うものか否かは不明であるが、弥生時代に形成されたものであろう。

第22号住居跡出土遺物

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	弥生土器	壺		(23.9)	7.8	橙	長石・石英	普	40	付加条1種RL+2L縄文施文 頸部無文帯 胴部下半被熱
2	弥生土器	壺	19.0	37.6	(8.6)	にぶい橙	長石・石英	普	90	付加条1種RL+2L縄文施文 口唇部に回転縄文 口縁部に2列の円形刺突文 ススト炭化物付着
3	弥生土器	壺		(26.7)	8.0	にぶい黄橙	長石・石英	普	70	付加条1種RL+2L縄文施文 2列の円形刺突文 頸部無文帯 炭化物付着 底部木葉痕
4	弥生土器	小型甕		(7.5)	(5.6)	にぶい褐	長石・石英	普	60	付加条1種RL+2L・LR+2Rによる羽状縄文施文 櫛歯状工具 外面ススト付着 底部木葉痕
5	弥生土器	甕		(9.6)	(5.8)	にぶい黄橙	長石・石英	普	50	付加条1種LR+2R縄文施文
13	石器	砥石	長さ(12.3)幅 8.0 厚さ 7.0 重量 920.0 石材 砂岩						一部欠損	一面砥石 有溝 一部敲打痕



第49図　第23号住居跡実測図・出土遺物実測図

第２３号住居跡〔旧第２５号住居跡〕（第49図　ＰＬ５・19・31）

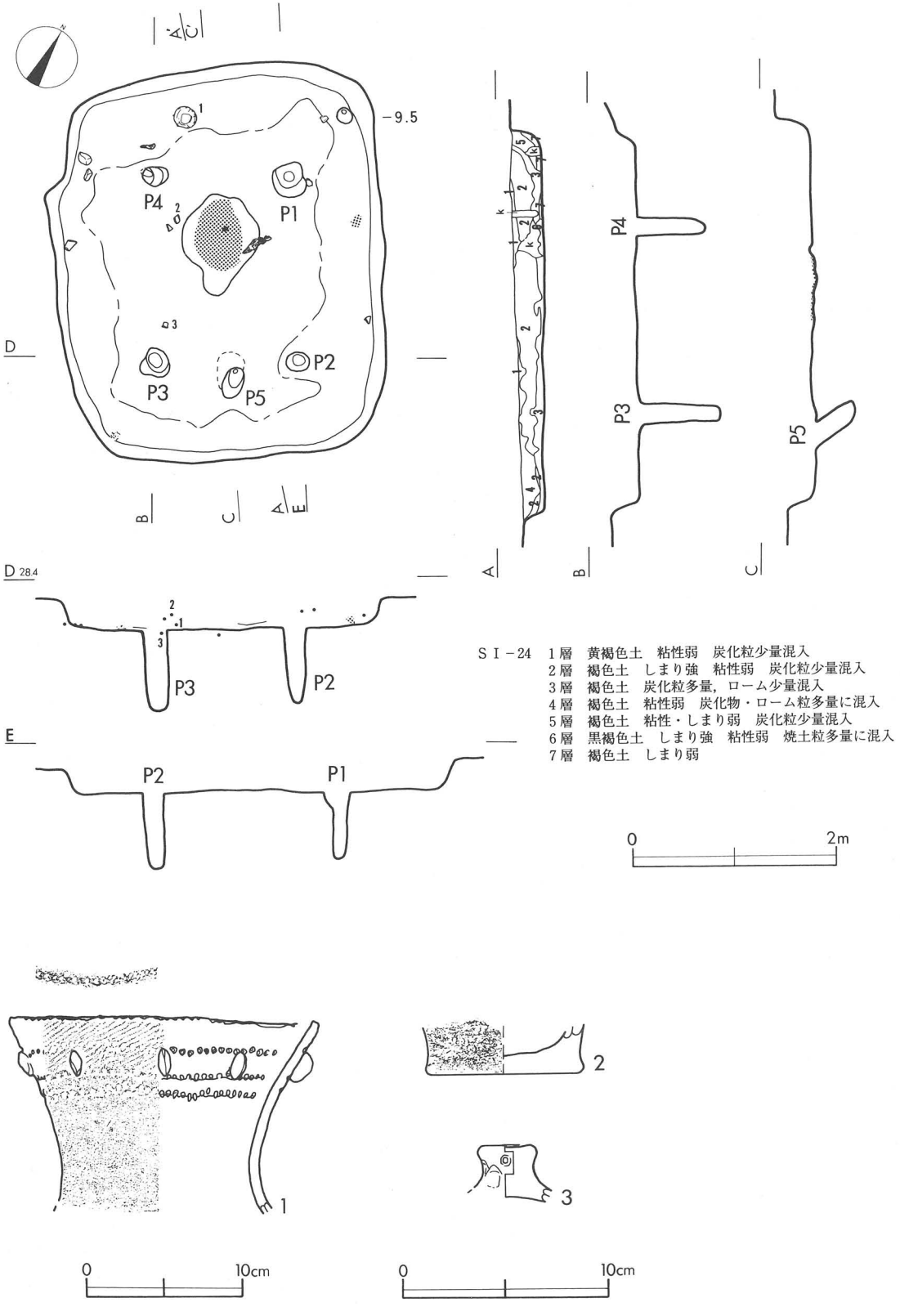
位置　調査区中央の、標高27.75m付近の台地上東寄り、Ｒ－21区にわたり確認されている。第３号古墳により壊されている。周辺には第33・34号住居跡、第４号溝が存在する。　**規模と平面形**　長軸（3.26m）、短軸3.07mの長方形を呈するものと思われる。　**主軸方向**　Ｎ－50°－Ｗ　**壁**　壁高22～28cmを数え、住居の南東半分は第３号古墳により壊されており、床面は残っていない。　**床**　全体的に平坦で、水平である。硬化面の範囲は、Ｐ1～Ｐ4の外側壁近くまで広がっている。本来Ｐ5の付近も踏み固められているものと思われる。**ピット**　Ｐ1～Ｐ4の他、Ｐ5の残欠が第３号古墳の掘り方内に確認された。Ｐ2・Ｐ3内の土層堆積状況の観察によれば、柱痕が確認された。Ｐ2・Ｐ3の掘り方は上部が浅い皿状をなす。　**炉**　１ヶ所確認されて、Ｐ1・Ｐ4の間でＰ4寄りに確認された。径が65cmで深さ２cmの不正円形を呈する。入り口側が深く奥側がやや浅い地床炉である。底面や入り口側の一部が赤変硬化している。　**覆土**　３層から構成され、第１層にはローム粒が非常に多く含まれている。第３層の中には炭化物が含まれる。上層に撹乱が見られた。　**遺物**　出土した遺物は少なく、小破片が８点出土した。住居内の中央部分出土のものは床面近くから出土し、壁寄りのものは浮いて出土した。No.1・2は弥生土器で、No.1は口縁部に櫛描文が見られ穿孔されている。No.2は底が厚い底部である。この他遺構内からは炭化物や焼土が覆土中より出土した。　**所見**　本住居跡は、出土遺物から弥生時代後期後半のものと思われる。

第２３号住居跡出土遺物

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
2	弥生土器	甕		（1.8）	6.6	浅黄橙	礫	普	１０	厚手の底部 表面ヘラ削りがなされる

第２４号住居跡〔旧第１２号住居跡〕（第50図　ＰＬ６・19）

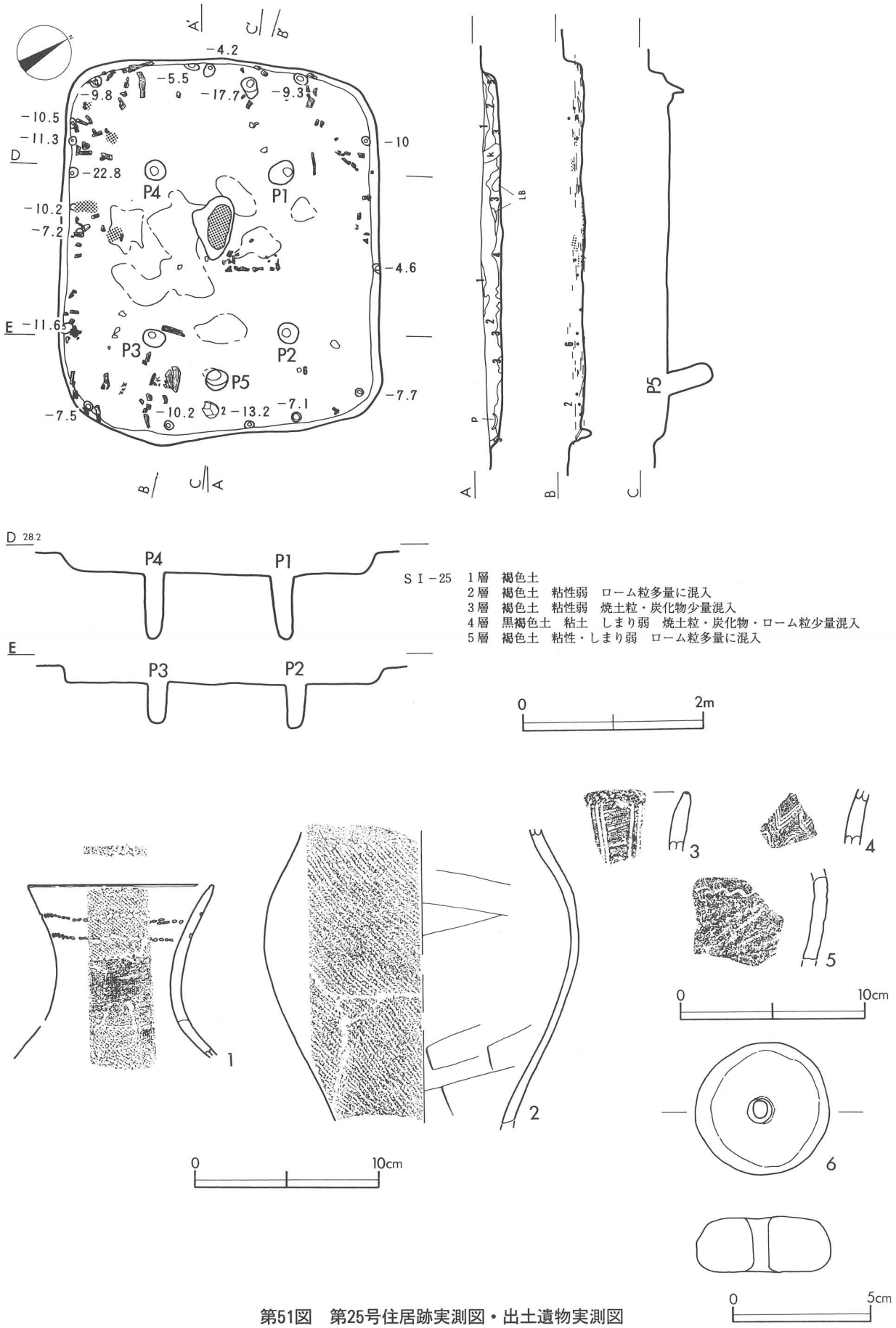
位置　調査区中央の、標高28.25m付近の台地上やや南寄り、Ｍ－24区にわたり確認されている。第52・53号土坑により壊されている。周辺には第50・54・57土坑が存在する。　**規模と平面形**　長軸3.58m、短軸2.98mのやや小型の長方形を呈する。　**主軸方向**　Ｎ－30°－Ｗ　**壁**　壁高33～27cmを数え、住居西隅は第52号土坑により壊され、北東壁の一部は第53号土坑により壊されている。　**床**　全体的に平坦で、水平である。硬化面の範囲は、Ｐ1・Ｐ3～Ｐ5の外側まで及び西壁や北壁際まで広がっている。　**ピット**　Ｐ1～Ｐ5が確認され、Ｐ1～Ｐ4は主柱穴であり、Ｐ5は入り口ピットである。住居内北隅にも１ヶ所小さなピットが確認され、深さは9.5cmを計る。　**炉**　１ヶ所。Ｐ1・Ｐ4の中間地点からやや入り口寄りに確認された。長軸が1.00m、短軸0.72mの不正楕円形を呈し、床面を５cmほど掘り込んだ地床炉である。特に入り口側に細長く伸び、底面と奥側が一部が赤変硬化している。　**覆土**　７層から構成され、第３・５～７層とそれ以外の土層は炭化物粒や焼土粒が含まれる点で区別される。先の土層は壁際から底面近くに見られた。　**遺物**　出土した遺物は少なく、No.1～3は弥生土器で、No.1は壺形土器の口縁部から頸部の個体である。本住居内から胴部は出土していない。北西壁際の床面近くに伏せた状態で出土した。No.3は蓋形土器のつまみ部分であり、真横に貫通孔が穿たれている。住居内西隅からは礫が出土している。　**所見**　本住居跡は、出土遺物から弥生時代後期後半のものと思われる。



第50図　第24号住居跡実測図・出土遺物実測図

第２４号住居跡出土遺物

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	弥生土器	壺	19.9	(12.4)		橙	長石・雲母	普	２０	有段口縁 付加条１種LR+2R施文 口唇部押圧縄文 縄文原体による刺突列 9単位の貼付
2	弥生土器	甕		(2.3)	(7.7)	橙	砂粒	不良	5	付加条１種LR+2Lまたは2l 縄文施文 被熱
3	弥生土器	蓋		(2.2)		にぶい橙	砂粒	普	5	把手部分 外面に指頭痕 つまみ部分には水平方向に穿孔されている



第51図　第25号住居跡実測図・出土遺物実測図

第２５号住居跡〔旧第１１号住居跡〕（第51図　ＰＬ６・19・31）

位置　調査区中央の、標高28.00m付近の台地上やや南寄りに、Ｎ・Ｏ－24区から確認されている。周辺には旧石器時代調査トレンチや第26・36号住居跡が存在する。　**規模と平面形**　長軸3.98m、短軸3.33mの長方形を呈する。　**主軸方向**　Ｎ－57°－Ｗ　**壁**　壁高は22～15cmを数え、床面から緩く立ち上がる。　**床**　全体的に平坦で、水平である。踏み固められた範囲は独立して島状になり、特に炉の周辺からＰ3・Ｐ4で広がっている。　**ピット**　Ｐ1～Ｐ5が確認され、Ｐ1～Ｐ4は主柱穴であり、Ｐ5は入り口ピットである。この他、壁際を全周するように、間隔をおいて小ピットが18ヶ所確認された。入り口と奥側の壁には５本ずつ確認され、南西壁には６本、北東壁には２本確認された。小ピットの深さは７～10cmぐらいのものが多い。本来柱の機能を持っていたものか、または壁の防護のためなのかは不明である。　**炉**　１ヶ所。Ｐ1・Ｐ4の中間地点からやや入り口寄りに確認された。長軸が0.70m、短軸0.46mの不正楕円形を呈し、床面を５cmほど掘り込んだ地床炉であり、南西方向に張り出している。底面と奥側が一部が赤変硬化している。　**覆土**　５層から構成され、大きく上層の第２層と底面上の第３・４層に区別される。これらの土層は焼土や炭化物の量により区別した。

遺物　出土した遺物は少なく、No.1～6は弥生時代の遺物である。No.1は壺形土器の胴部を欠損したものである。No.2は甕形土器の胴部片である。No.3～5は破片で、No.3は口唇部に縄文が施文されており、縦に平行沈線が引かれる。No.4は櫛描文が施文され、No.5には結節縄文が施文されている。No.6は土製の紡錘車である。遺構内からは炭化物や焼土が床面から覆土中層にかけて出土した。　**所見**　本住居跡は、出土遺物や形態的特徴から弥生時代後期後半のものと思われる。また壁際を中心に炭化材が多く見られ、住居廃絶後に廃材の焼却がなされ、その後埋め戻されているものと考えられる。

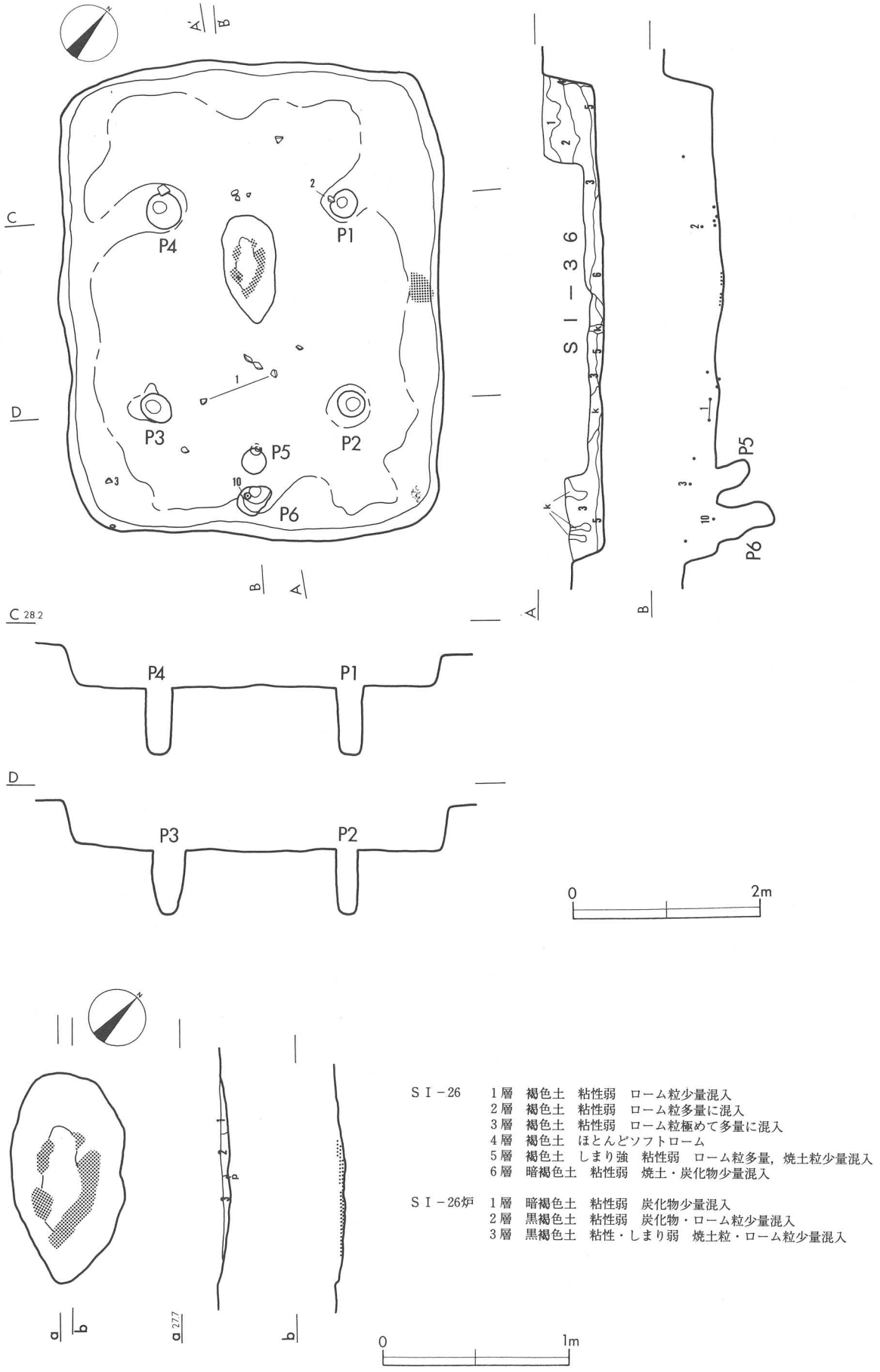
第２５号住居跡出土遺物

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	弥生土器	壺	10.2	(9.3)		にぶい橙	長石・石英	普	３０	口唇部に回転縄文 付加条１種RL+2L縄文施文 頸部無文帯 2条の刺突列
2	弥生土器	甕		(15.9)		にぶい橙	長石・石英	普	４０	付加条１種RL+2L縄文施文 外面内面にスス付着 内面ヨコナデ
6	土製品	紡錘車	上面径 4.1 下面径 4.2 厚さ 2.0 重さ52 孔径0.6					不良	１００	表面は軽いナデ 穿孔は一方向から

第２６号住居跡〔旧第２８ａ号住居跡〕（第52図・第53図No.１～10　ＰＬ６・31）

位置　調査区中央の、標高28.00m付近の台地上やや南寄りに、Ｐ－23・24区から確認されている。本住居跡内にすっぽり入るように第36号住居跡が存在する。また住居跡北隅には第49号土坑があり、本住居跡と切り合い関係にあり、本住居跡が古い。周辺には旧石器時代調査トレンチや第25号住居跡、第40号土坑が存在する。

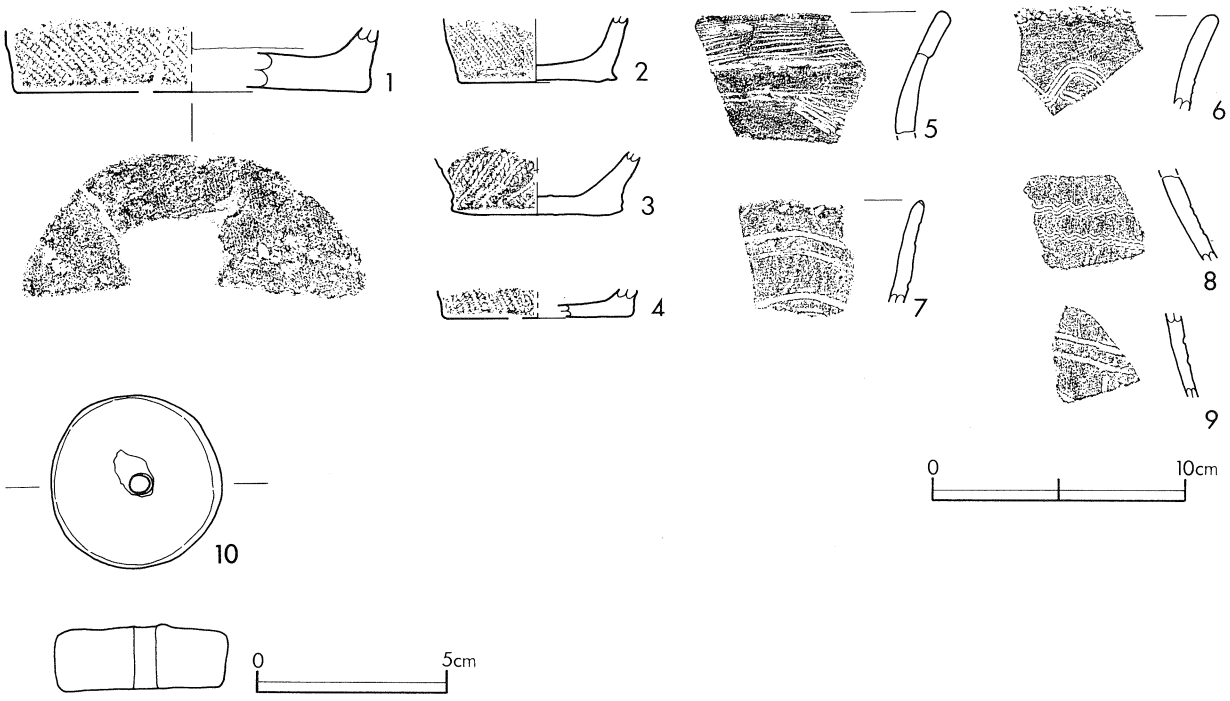
規模と平面形　長軸4.78m、短軸3.74mの長方形を呈する。　**主軸方向**　Ｎ－40°－Ｗ　**壁**　壁高は50～37cmを数え、遺存状況は良好といえる。　**床**　全体的に平坦で、水平である。硬化面の範囲は、Ｐ1～Ｐ5の外側まで及び、壁際まで広がる。しかしながらＰ1・Ｐ4部分は外側から抉り込むように硬化しておらず、Ｐ2・Ｐ3の縁辺も硬化していない。　**ピット**　Ｐ1～Ｐ6が確認され、Ｐ1～Ｐ4は主柱穴であり、Ｐ5・6は同様な角度で穿たれている。両方とも入り口ピットと考えられる。片方のピットの上面が踏み固められていた形跡はなく、同時に存在したものと思われる。深さはＰ6が深い。　**炉**　１ヶ所。Ｐ1・Ｐ4の中間地点からやや入り口寄りに確認された。長軸が1.14m、短軸0.54mの不正楕円形を呈し、床面を５cmほど掘り込んだ地床炉であり、南東方向が船形に尖る。底面の中央部分は焼けておらず周縁部分が赤変硬化している。炉の北側の周辺は微妙に凹んでいる　**覆土**　６層から構成され、第1～3層にはローム粒が目立ち第５・６層は焼土粒と炭化物粒が含



ＳＩ－26　1層　褐色土　粘性弱　ローム粒少量混入
2層　褐色土　粘性弱　ローム粒多量に混入
3層　褐色土　粘性弱　ローム粒極めて多量に混入
4層　褐色土　ほとんどソフトローム
5層　褐色土　しまり強　粘性弱　ローム粒多量，焼土粒少量混入
6層　暗褐色土　粘性弱　焼土・炭化物少量混入

ＳＩ－26炉　1層　暗褐色土　粘性弱　炭化物少量混入
2層　黒褐色土　粘性弱　炭化物・ローム粒少量混入
3層　黒褐色土　粘性・しまり弱　焼土粒・ローム粒少量混入

第52図　第26号住居跡実測図



第53図　第26号住居跡出土遺物実測図

まれる割合が高い。覆土は各層がほぼ水平に堆積している。　**遺物**　遺物のほとんどは第５・６層上面位から出土し、ほとんどのものは小型破片のみの出土である。No.１～10は弥生時代の遺物である。No.1は壷形土器の底部破片であり、No.２～４は甕形土器の底部片である。No.５～９は破片で、No.5は口縁部に輪積による複合口縁をなし、単軸絡条体１類による施文が見られる。No.6は櫛描文が施文され口唇部には縄文が施文されている。No.7・9には平行沈線文が施文されている。No.8には櫛描文が施文されている。No.10は土製の紡錘車であり、Ｐ６上から出土した。遺構内の北東壁から東隅には厚さ２cmの焼土や粘土が床面上約10cm浮いて確認された。

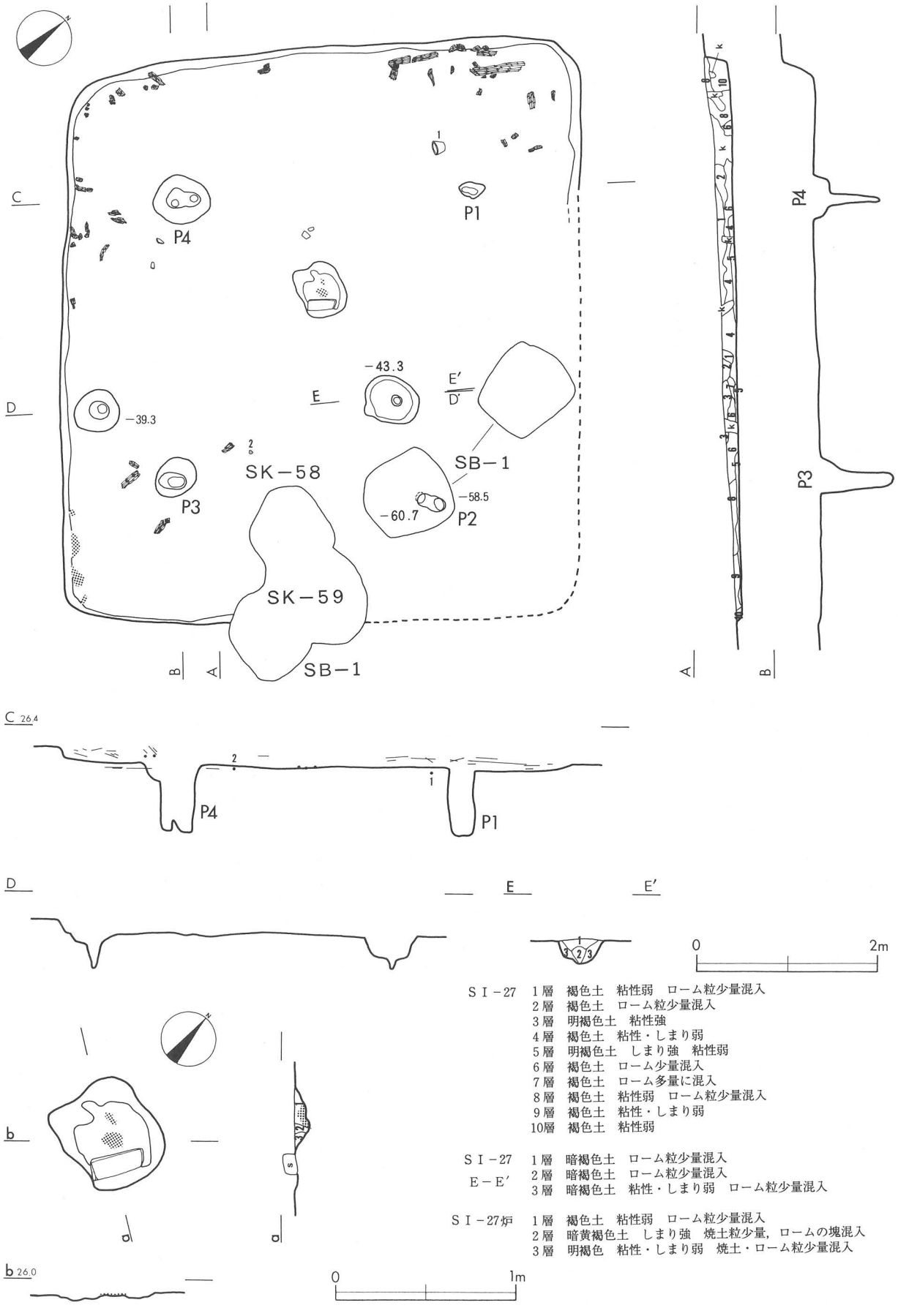
所見　本住居跡は、出土遺物から弥生時代後期後半のものと思われる。土層の堆積状況から本住居跡は廃棄後に埋め戻されているものと考えられる。

第２６号住居跡出土遺物

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	弥生土器	壺		(2.5)	13.8	橙	長石・砂粒	普	5	付加条１種RL+2L縄文施文 内面ヘラナデ 底部に木葉痕
2	弥生土器	甕		(2.6)	3.2	浅黄橙	長石・砂粒	普	１０	胴部下位削りの後付加条１種RL+2L縄文施文
3	弥生土器	甕		(2.2)	6.8	橙	長石・砂粒	普	5	付加条１種RL+2L縄文施文
4	弥生土器	甕		(1.1)	7.2	浅黄橙	長石・砂粒	普	5	付加条１種RL+2L縄文施文
10	土製品	紡錘車	上面径 4.6 下面径 4.4 厚さ 1.7　重さ42 孔径0.6					不良	１００	断面形は長方形 下側面ともに表は丁寧なナデ 穿孔方向は下面から

第２７号住居跡〔旧第３４号住居跡〕（第54図・第55図No.１～３　ＰＬ６・19・31）

位置　調査区南方の、標高26.25mから25.75m付近の張り出した尾根上に、Ｓ・Ｔ－32区から確認されている。第１号掘立柱建物跡、第58・59号土坑と切り合い関係にあり、本住居跡が古い。周辺には第５号溝や第２号掘立柱建物跡が存在する。　**規模と平面形**　住居跡の東方は斜面のため削平され残っていない。規模は長軸5.88m、短軸5.42mの方形を呈し、大型の住居跡である。　**主軸方向**　Ｎ－51°－Ｗ　**壁**　壁高は17～０cmを数え、東方隅は斜面のため削平されている。　**床**　北西－南東方向では緩い傾斜を示す。南西－北東方向ではほぼ平

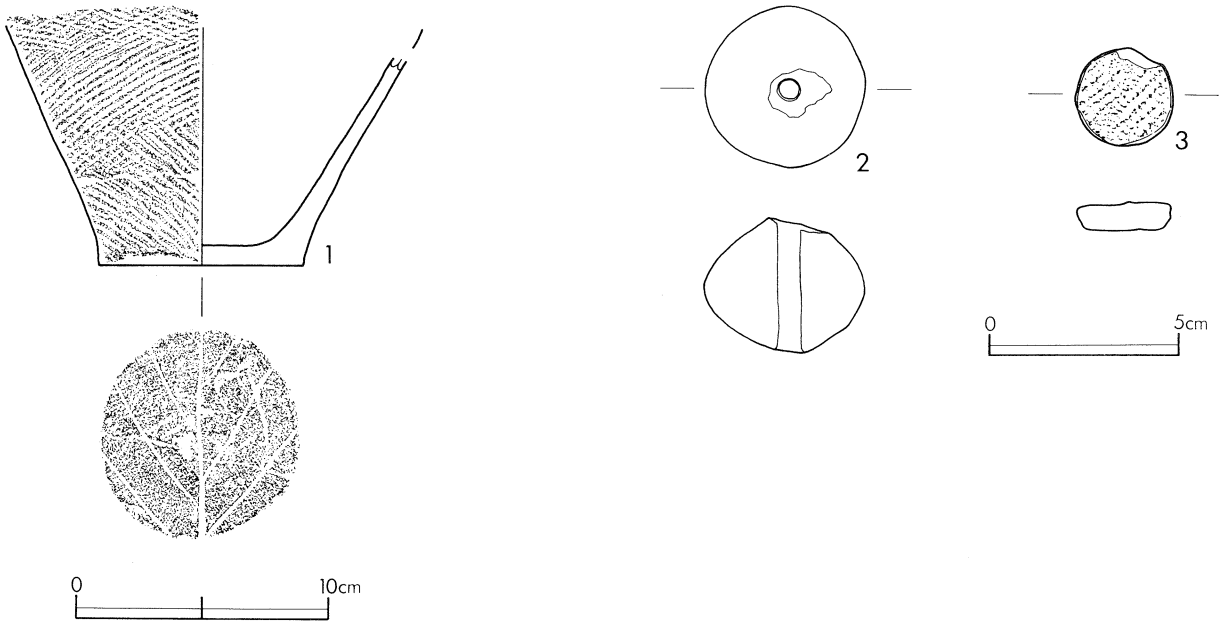


ＳＩ－27　1層　褐色土　粘性弱　ローム粒少量混入
2層　褐色土　ローム粒少量混入
3層　明褐色土　粘性強
4層　褐色土　粘性・しまり弱
5層　明褐色土　しまり強　粘性弱
6層　褐色土　ローム少量混入
7層　褐色土　ローム多量に混入
8層　褐色土　粘性弱　ローム粒少量混入
9層　褐色土　粘性・しまり弱
10層　褐色土　粘性弱

ＳＩ－27　1層　暗褐色土　ローム粒少量混入
Ｅ－Ｅ′　2層　暗褐色土　ローム粒少量混入
3層　暗褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒少量混入

ＳＩ－27炉　1層　褐色土　粘性弱　ローム粒少量混入
2層　暗黄褐色土　しまり強　焼土粒少量，ロームの塊混入
3層　明褐色　粘性・しまり弱　焼土・ローム粒少量混入

第54図　第27号住居跡実測図

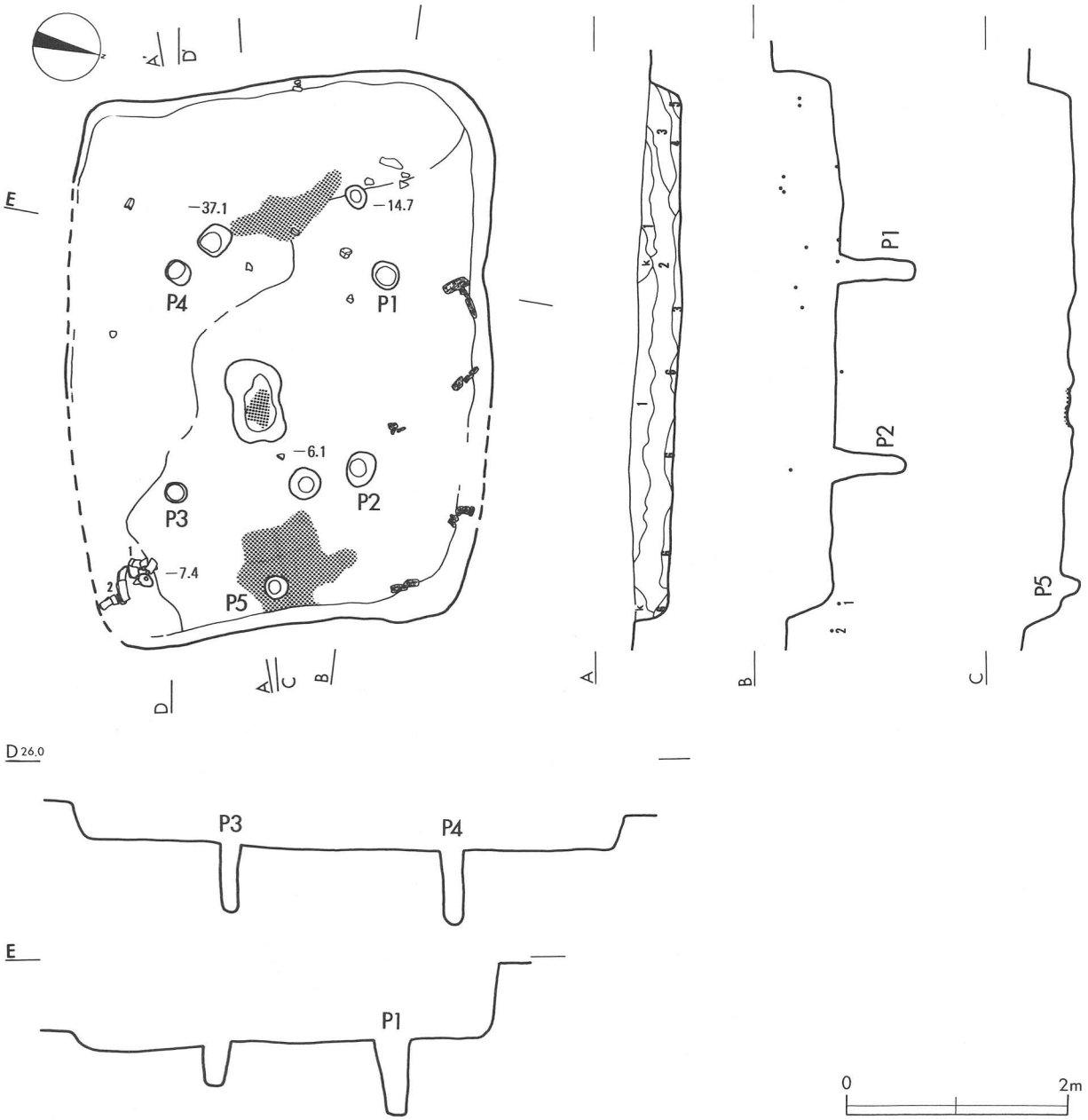


第55図　第27号住居跡出土遺物実測図

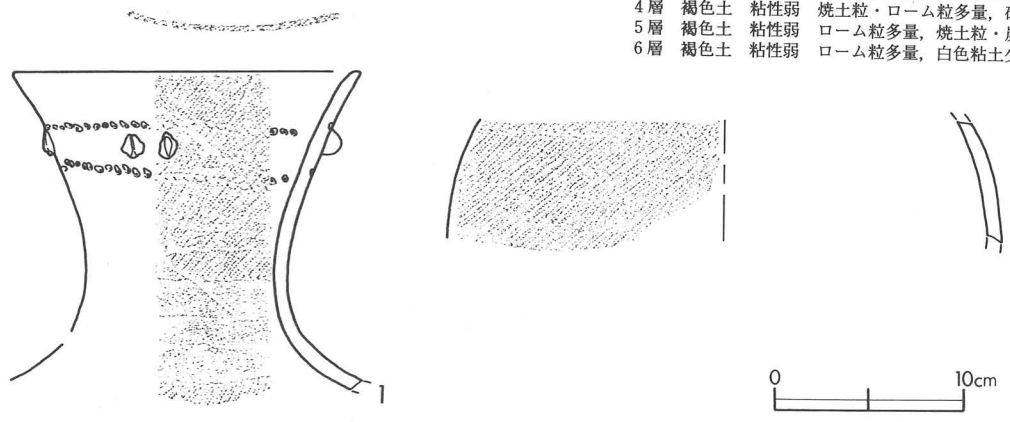
坦で、水平である。硬化面の範囲は確認できない。　**ピット**　P1～P4とその他に2ヶ所確認された。P1～P4は主柱穴と考えられる。P2は第1号掘立柱建物跡のピット底面で確認された。P1～P4の底面は横長い楕円形を呈し、P2・P4の底面には明瞭に凹みが2ヶ所確認されている。P1の調査時の観察結果によれば、柱穴は二本の新旧関係のある掘り方が存在していた。同柱穴の北東側のものは貼床下に確認された。P1～P4の深さは同程度のものである。入り口ピットは第1号掘立柱建物跡、第58・59号土坑により壊されてしまったものと思われる。その他の2ヶ所のピットは覆土がボソボソしていて、柱穴の覆土とは異なる。　**炉**　1ヶ所。P1・P4の中間地点からやや入り口側に寄り確認された。径が約0.60mの不正円形を呈し、入り口側に面して直方体の焼けた花崗岩が出土し、炉と一体となって機能した炉石と考えられる。炉の覆土はほとんどなく、炉の土層断面図は炉床断ち割り状態といえる。花崗岩の下は焼けておらず、北西側のみ焼けている。　**覆土**　10層から構成され、ローム粒を多量に含む土層が床面近くまであり、それらを取り除くと炭化物混じりの薄い土層が床面を覆っていた。　**遺物**　出土した遺物は小型破片のみの出土である。No.1～3は弥生時代の遺物である。No.1は甕形土器の底部破片であり、倒れて出土した。No.2は紡錘車であり床面から出土した。No.3は土器片を再利用した円盤であり、縁辺を丁寧に擦り磨いている。遺構内の西隅から北隅にかけて、壁寄りに炭化材・物が床面から2～5cm位浮いて出土した。これらは焼土・炭化物・粒混じりの土層から出土した。炭化材は丸棒状のものも見られた。　**所見**　本住居跡は遺跡内の弥生時代の住居跡の中で最大規模のものである。台地上の住居跡群の存在する場所から離れている。柱は4本共に外側から内側の位置に建て替えられている可能性が考えられる。出土遺物から弥生時代後期後半のものと思われる。また本住居跡は住居廃絶後に廃材の焼却が行われているものと考えられる。

第27号住居跡出土遺物

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	弥生土器	甕		(8.2)	8.0	橙	長石・石英	普	30	内外面に若干スス 付加条RL+2LとLR+2Rによる羽状構成 底面木葉痕
2	土製品	紡錘車	上面径4.3 下面径4.3 孔径0.6 最大厚3.0　重量54g					普	100	断面は紡錘形 表面は丁寧なナデ 穿孔方向は下面から
3	土製品	円盤	上面径2.5 下面径2.0 最大厚0.8　重量 5.0g					普	100	土器片を打ち欠いて円形に調整し再利用 上面に縄文 縁辺が擦られる



SI−28　1層　暗褐色土　粘性弱　ローム粒少量混入
2層　明褐色土　しまり強　粘性弱　砂質粘土混入
3層　褐色土　粘性弱　ローム粒多量，炭化物少量，砂粒混入
4層　褐色土　粘性弱　焼土粒・ローム粒多量，砂粒混入
5層　褐色土　粘性弱　ローム粒多量，焼土粒・炭化物少量混入
6層　褐色土　粘性弱　ローム粒多量，白色粘土少量混入



第56図　第28号住居跡実測図・出土遺物実測図

第２８号住居跡〔旧第３７号住居跡〕（第56図　ＰＬ６・19）

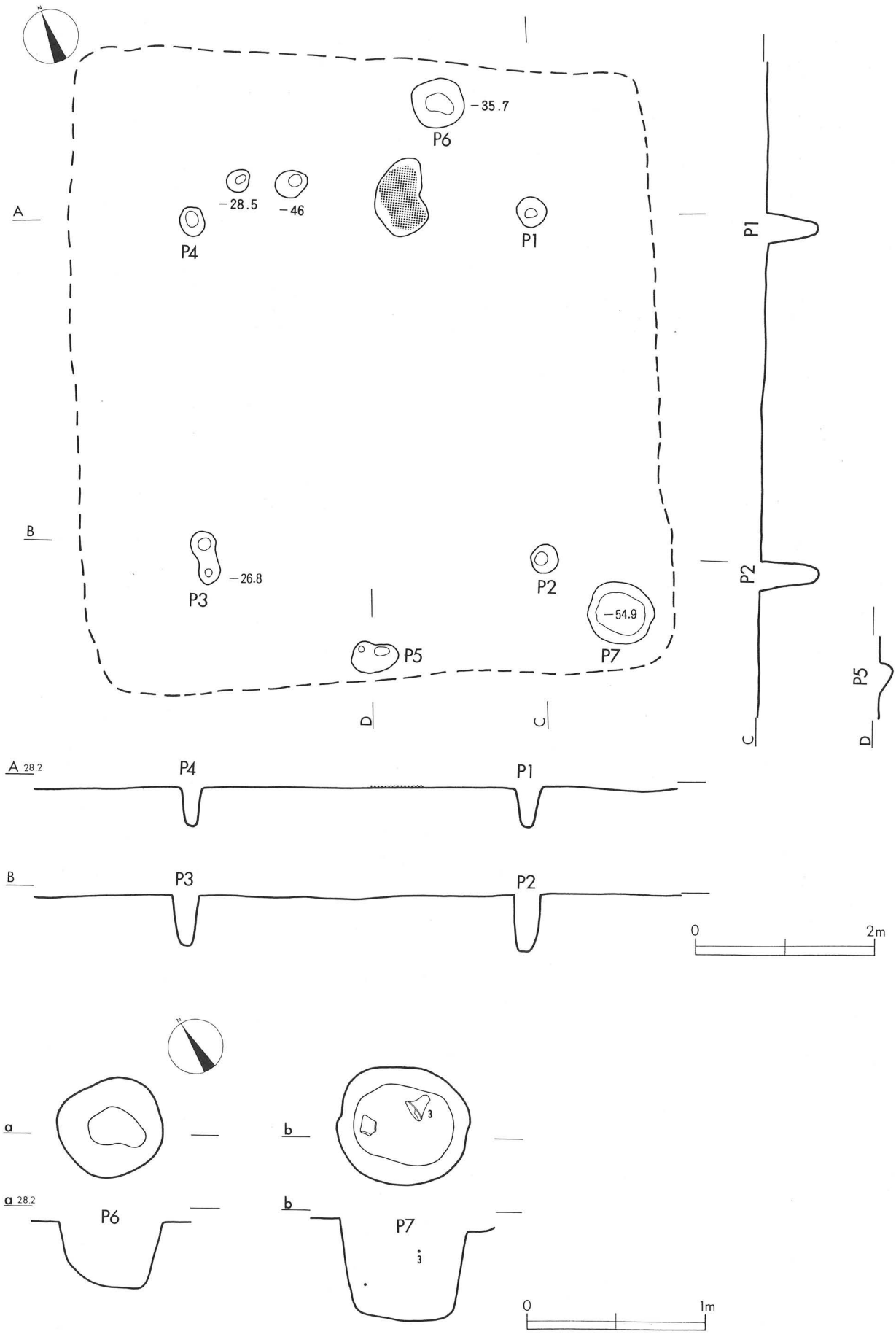
位置　調査区南方の、標高26.00mから25.50m付近の張り出した尾根上に、Ｑ－34・35区から確認されている。第２号掘立柱建物跡と切り合い関係にあり、本住居跡が古い。周辺には第39号住居跡が存在する。　**規模と平面形**　本住居跡の南壁は斜面のため不明瞭である。規模は長軸4.69m、短軸3.55mの長方形を呈する。　**主軸方向**　Ｎ－102°－Ｗ　**壁**　壁高は44～32cmを数え、北壁の一部は第２号掘立柱建物跡により壊されている。また南壁は覆土と地山との区別がしがたいため、掘り過ぎている部分がある。傾斜地のため北壁は遺存状況がよい。北壁の下位レベルには、基本層序で見られた砂粒を多量に含む層がみられた。　**床**　東西方向では平坦で水平となっている。南北方向では南側に掘り過ぎてしまっている。本来は水平に作られているものと思われる。硬化面の範囲は、台地上の住居跡内のように明瞭ではない。床面のＰ1とＰ3を結ぶあたりにかけて砂粒を多量に含む層を掘り込み床としている。　**ピット**　Ｐ1～Ｐ5とその他３ヶ所に確認された。Ｐ1～Ｐ4は主柱穴であり、Ｐ5は入り口ピットである。他の３ヶ所のピットは性格が不明である。　**炉**　１ヶ所。Ｐ1～Ｐ4の中央部分に確認された。長軸が0.74m、短軸0.46mの不正楕円形を呈し、床面を６cm掘り込んだ地床炉である。炉の底面が赤色硬化している。　**覆土**　６層から構成され、第３・４層には炭化物・焼土粒が含まれる。各土層の中には地山を構成する砂や長石が混じる。　**遺物**　出土した遺物は小型破片が多い。その中でNo.1・2のような大型の土器片も出土した。No.1は壷形土器の口縁部である。No.2は壷形土器の胴部破片である。遺構内の北東壁際から炭化物が壁に寄り沿うように出土した。これらは皆床面から約10cm浮いている。Ｐ1・Ｐ4の西側やＰ5周辺に焼土が確認された。　**所見**　本住居跡は、出土遺物から弥生時代後期後半のものと思われる。また本住居跡は焼却後に埋め戻されているものと考えられる。

第２８号住居跡出土遺物

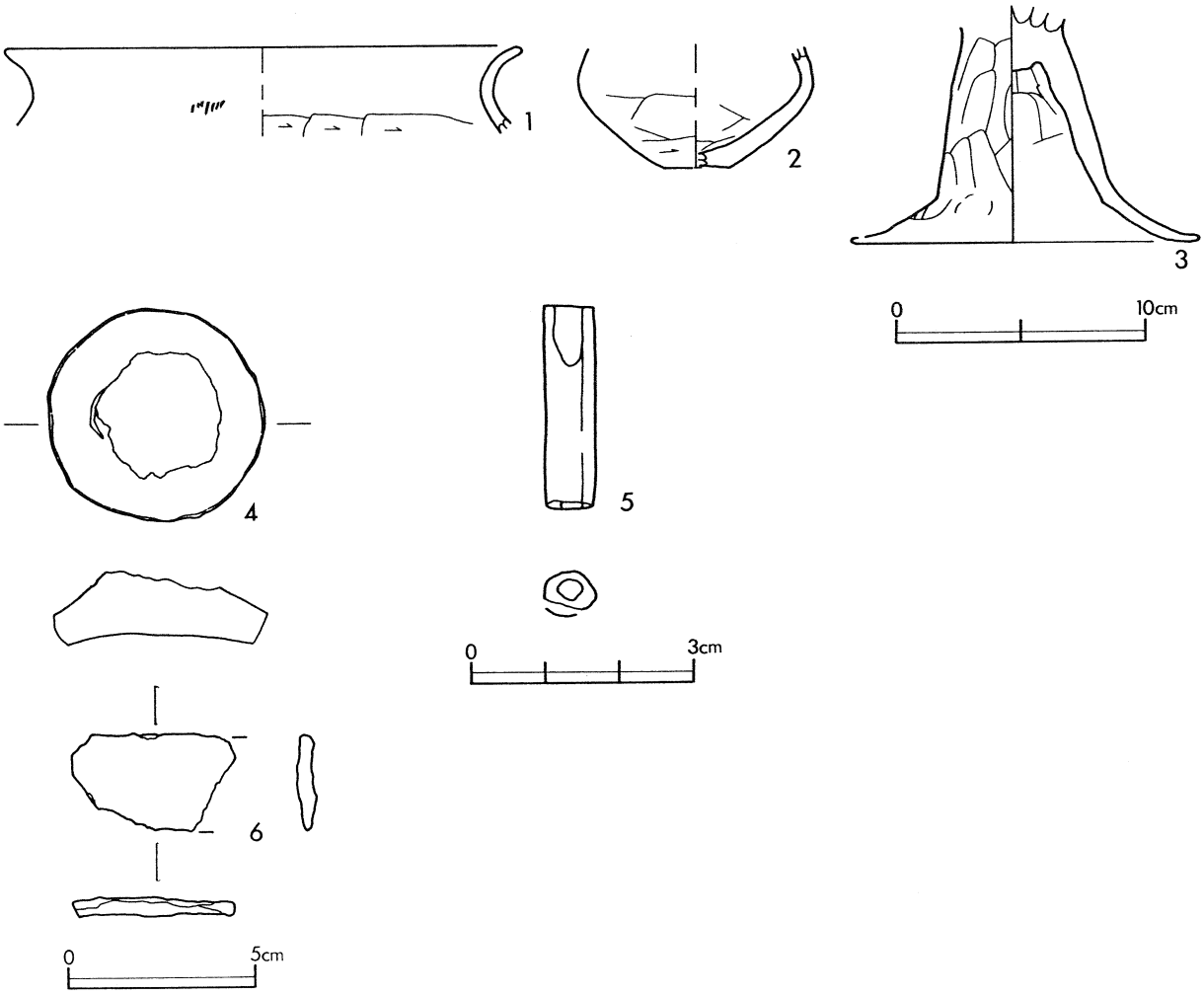
番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	弥生土器	壷	18.5	(16.4)		橙	長石・砂	普	３０	口唇部に縄文 口縁部に２組６単位の粘土貼り付け 付加条１種 内面横ナデ
2	弥生土器	壷		(6.4)		橙	長石・砂	良	１０	縄文原体による２列の刺突列 粘土貼付２組ずつ６単位 口唇部に回転縄文付加条１種LR+2L

第２９号住居跡〔旧第１６号住居跡〕（第57図・第58図No.１～６　ＰＬ６・20・31・32）

位置　調査区北方の、標高28.00m付近の台地上東寄りに、Ｐ・Ｑ－8区から確認されている。周辺には第30号住居跡、第66土坑が存在する。　**規模と平面形**　住居跡は確認時に壁がすべて削平されており、床面の土と地山の土との違いにより平面形を想定した。規模は長軸（7.00）m、短軸（6.38）mのほぼ正方形を呈する。**主軸方向**　Ｎ－30°－Ｗ　**壁**　壁高は部分的に数cmを数えるばかり、すべて削平されていると言ってよい。**床**　ほぼ平坦で水平となっている。硬化面の範囲は確認できなかった。　**ピット**　ピットは８ヶ所確認され、Ｐ１～Ｐ４は主柱穴と考えられ、Ｐ５は入り口ピットであろう。Ｐ６・７は貯蔵穴と考えられる。Ｐ６は炉の北側にあり平面形が円形で深さ約35cmを計る。Ｐ7は平面形が円形で壁が底面から垂直に立ち上がり、深さは55cmを計る。Ｐ３は２つのピットが付いた状態にあり、南側の小ピットは26cmを計る。同様な深さのピットはＰ４の東側にあり28.5cmを測る。Ｐ１～Ｐ４の深さはいずれも40cmを越える。　**炉**　１ヶ所。Ｐ１とＰ４を結ぶ線上Ｐ1寄りに確認された。長軸が0.84m、短軸0.50mの不正楕円形を呈し、炉の底面が赤色硬化している。ほとんど掘り込みはない。　**覆土**　削平を受け覆土はない。　**遺物**　遺物はＰ７の覆土上層からNo.３の土師器高坏の脚部が出土した。No.１は土師器甕口縁部であり、割れてＰ６から出土した。No.４は高坏坏部底面を円盤状に丁寧に割ったものである。その他の出土品は小破片である。No.５は滑石製の管玉であり、中心からず



第57図　第29号住居跡実測図



第58図　第29号住居跡出土遺物実測図

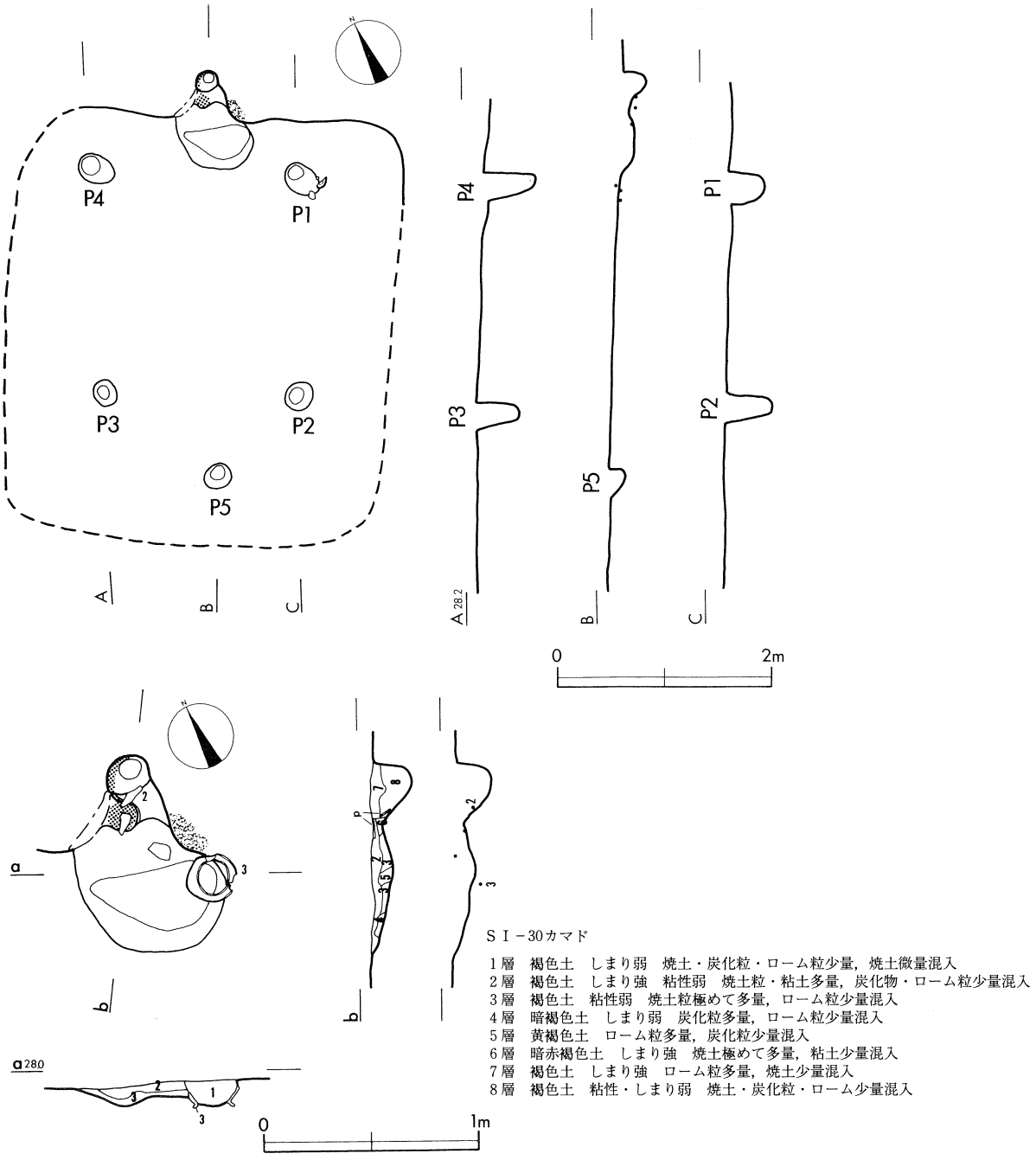
れて穿孔されている。№6は半月形をした鉄製の穂摘具の破片である。　**所見**　本住居跡は、出土遺物から古墳時代中期のものと思われる。

第29号住居跡出土遺物

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	土師器	甕	21.6	(3.5)		にぶい赤褐	長石・石英・赤色粒	普	10	外面ナデ・ミガキ 内面横ナデ 頸部削り
2	土師器	坩		(4.7)	(2.7)	橙	石英細片・雲母	普	10	外面ヘラ削り 内面ヘラナデ 胴部に最大径 底面が小さい
3	土師器	高坏	脚部径(8.8)裾部径14.0			にぶい黄橙	石英細片・雲母	普	40	外面縦方向のナデ 裾部外面横ナデ 内面上部削り・下部横ナデ 裾部が急激に開く
4	土製品	不明	長5.6 幅5.8 厚さ1.6 重量46.0g					普	100	高坏の坏部と脚部の接合部
5	石製品	管玉	長5.6 幅0.7 厚さ(0.5) 重量1.4g 石材 滑石						60	縦に半分 片側から穿孔
6	鉄製品	穂摘具	長(2.6) 幅(4.3) 厚さ(0.5) 重量7.5g						30	半月形を呈する穂摘具の端部

第30号住居跡〔旧第15号住居跡〕（第59図・第60図№1～5　PL7・20）

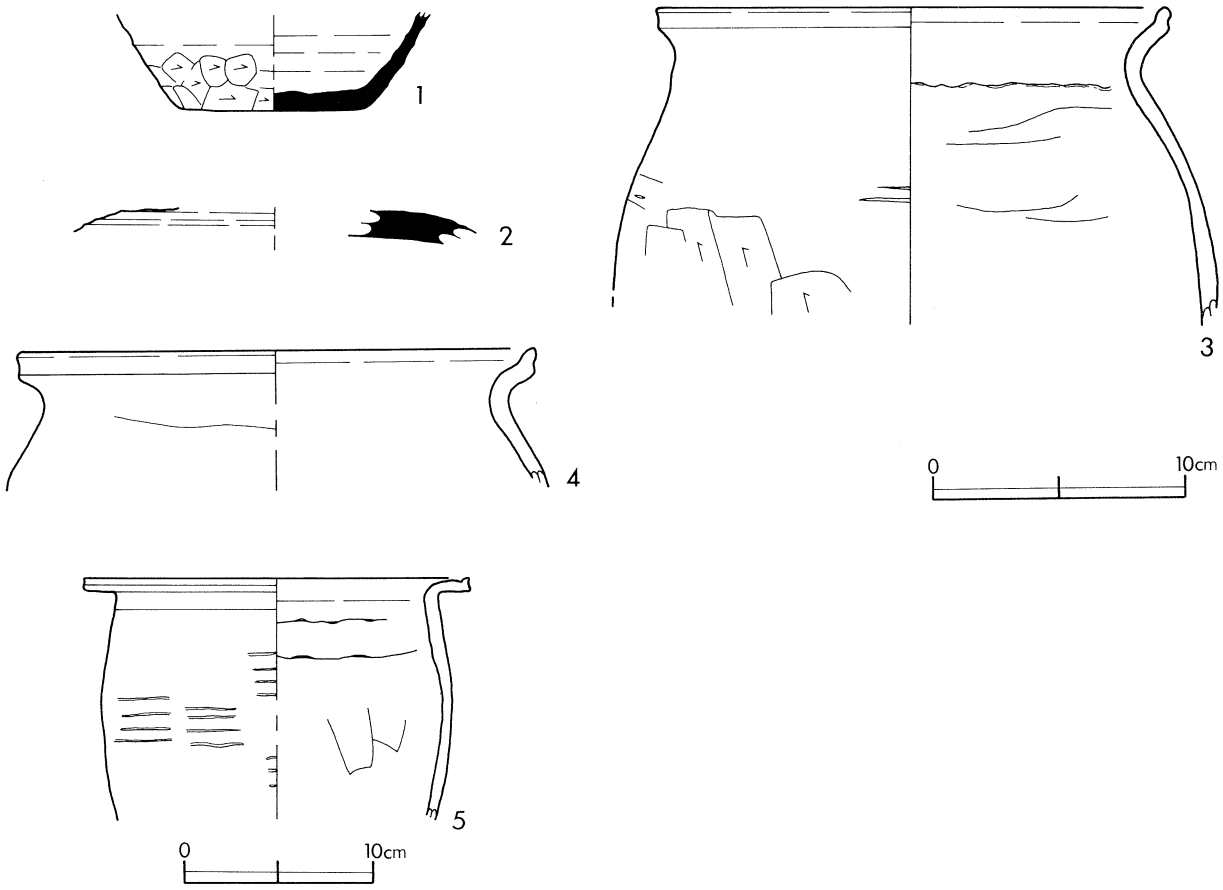
位置　調査区北方の、標高28.00m付近の台地上東寄りに、Q－6区から確認されている。周辺には第29号住居跡、第3号土坑が存在する。　**規模と平面形**　住居跡は確認時に壁や一部床面までもが削平されており、残存している床面の土と地山の土との微妙な違いや柱穴の並びなどにより平面形を想定した。規模は長軸（3.90）m、短軸（3.50）mのほぼ長方形を呈し、北側の壁中央にカマドが作られている。　**主軸方向**　N－24°－W



第59図　第30号住居跡実測図

壁　壁はすべて削平されていると言ってよい。　**床**　ほぼ平坦でカマド焚き口側に緩く下がっている。硬化面の範囲は確認できなかった。　**ピット**　ピットは５ヶ所確認され、Ｐ1～Ｐ4は主柱穴と考えられる。Ｐ1・Ｐ4は北壁寄りに寄っている。Ｐ５は入り口に関わる柱穴であろうか。　**カマド**　北壁中央に壁外約50cm掘り込み、壁の一部に構築の際使われた白色砂質粘土が残るが、袖部は遺存しない。規模は長さ0.90m、幅0.70mである。煙道部は緩やかな傾斜で立上り、先端はカマドの覆土堆積後に掘り込まれ、小穴があいている。火床部には焼土が多量に見られ、床面から約８cm掘り込まれ、皿状をなす。火床部の東側にはNo.3の土師器甕の口縁部分が逆位で埋め込まれ、袖部の補強材として再利用されたものと考えられる。　**覆土**　削平により覆土なし。

遺物　遺物はNo.1～5の遺物が出土した。No.1・2はカマド内から出土したもので、No.1は須恵器坏、No.2は須恵



第60図　第30号住居跡出土遺物実測図

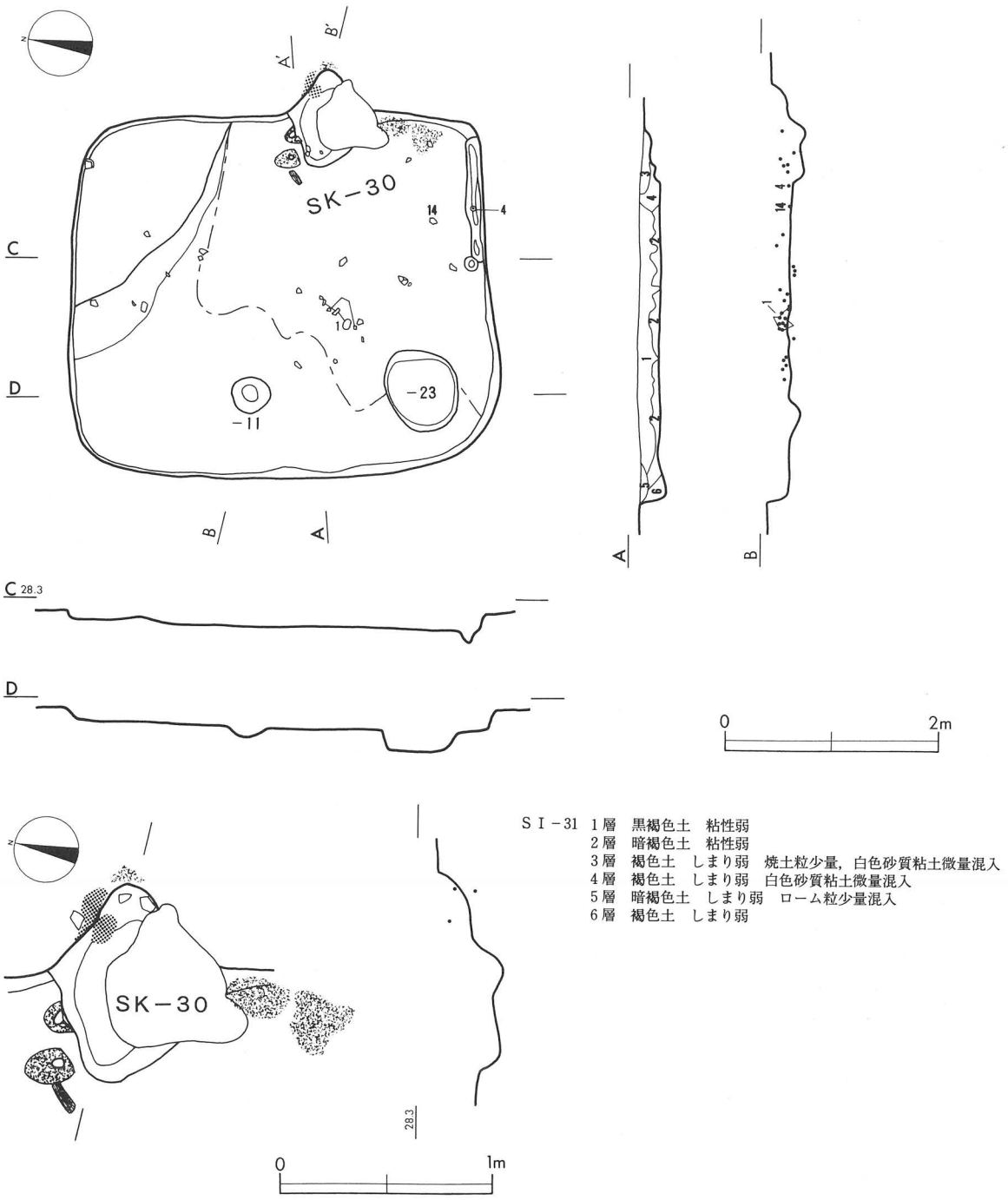
器蓋か。この他No.３～５は土師器甕であり、No.3がカマド袖部の補強材とされたものである。この他弥生土器破片数点出土しているが混入したものと考えられる。　**所見**　本住居跡はNo.１の特徴、またはNo.2の存在から平安時代でも９世紀前葉から中葉のものと思われる。

第３０号住居跡出土遺物

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	須恵器	坏		(3.8)	7.2	にぶい黄褐	長石・砂	普	４０	体部下端手持ちヘラ削り 底面一方向手持ちヘラ削り カマド出土
2	須恵器	蓋		(0.9)		灰黄	雲母	良	３０	カマド出土
3	土師器	甕	20.2	(11.7)		にぶい橙	長石・砂	普	４０	胴部下半ヘラ削り 口縁部ナデ 口縁部をつまみ上げる
4	土師器	甕	20.4	(5.5)		橙	長石・砂	普	１０	口縁部内外面ナデ 口縁部をつまみ上げる
5	土師器	甕	20.4	(12.8)		橙	長石・砂	普	２０	頸部はナデ 外面水平なタタキ痕 口唇部屈曲して張り出す

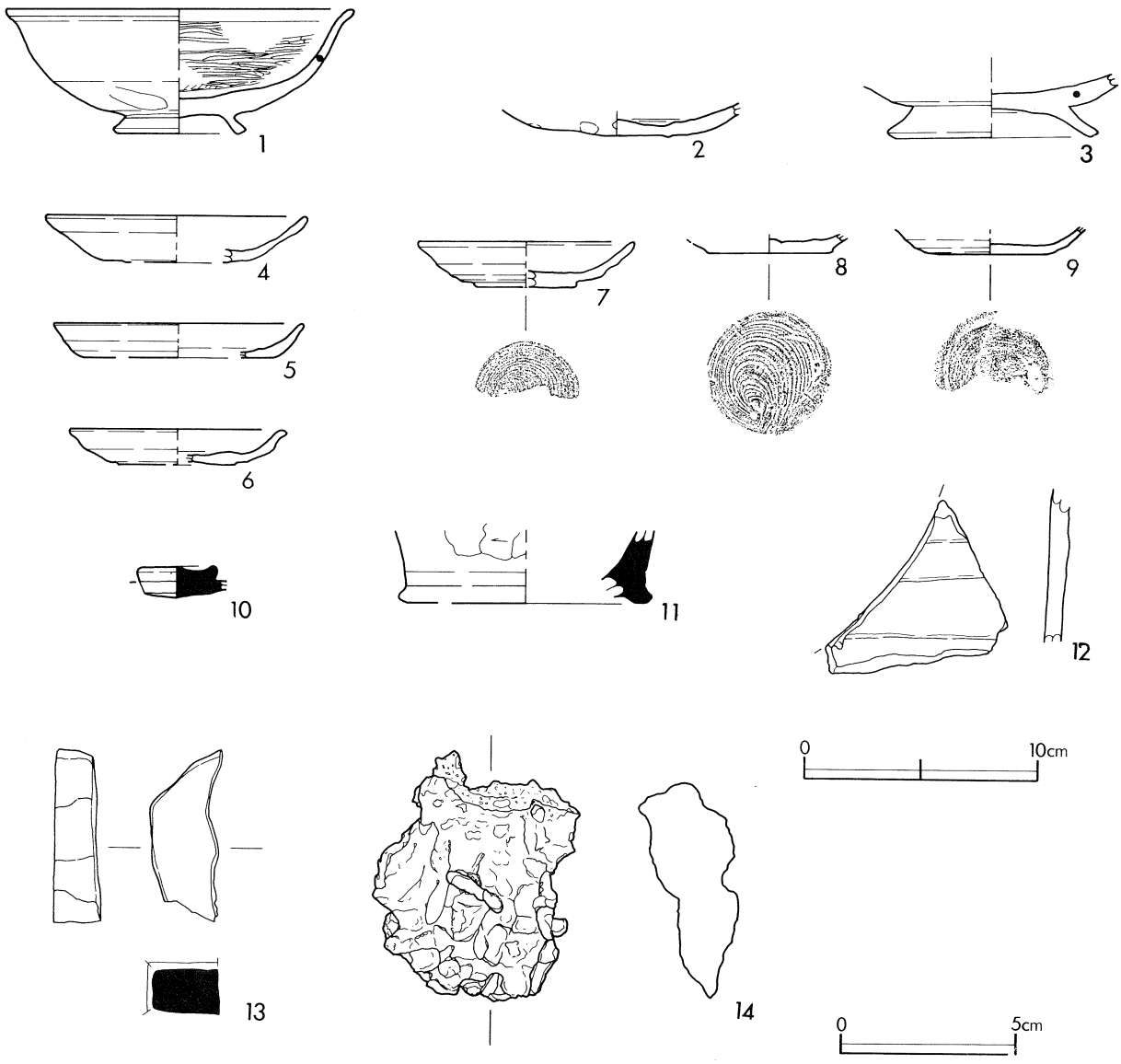
第３１号住居跡〔旧第６ｂ号住居跡〕（第61図・第62図No.１～14　ＰＬ７・20・32）

位置　調査区中央の、標高28.25m付近の台地上に、Ｍ－19区から確認されている。本遺構は第13号住居跡や第30号住居跡と重複関係にある。周辺には第12号住居跡、第28・29号土坑が存在する。　**規模と平面形**　規模は長軸3.78m、短軸3.22mの横長のほぼ長方形を呈し、東壁やや南寄りにカマドが作られている。　**主軸方向**　Ｎ－81°－Ｅ　　**壁**　壁高は22～16cmである。　**床**　大部分はほぼ平坦であるが、北東隅部分は平坦な高まりとなっている。硬化面の範囲は、カマド周辺から住居内の南側にかけて確認できた。床は、前掲の平坦な高まり部分以外は貼り床により構築されている。南壁の一部には約５cmの深さの壁溝が確認され、深さは４cmを計る。　**ピット**　ピットは２ヶ所確認されたが性格不明なピットといえる。いずれも西壁寄りに確認され、北寄りのものは円形で深さ11cmを計る。他方は円形で深さ23cmを計る。これらは遺構の重複とも考えられる



第61図　第31号住居跡実測図

が、いずれも遺構確認時の精査では確認しえなかったものである。　**カマド**　東壁やや南寄りに壁外約50cm掘り込み、灰白色砂質粘土により構築された袖部が焚口部北側に一部残っている。また南側の同粘土は壊された残滓である。カマドの南側は第30号土坑により壊されている。規模は長さ0.90m、幅約（0.70）mであろう。煙道部は緩やかな傾斜で立上り、先端部には焼土が見られた。火床部には焼土が見られ、床面から約10cm掘り込まれ、皿状をなす。　**覆土**　6層から構成され、第1・2層が大半を占める。第3・4層にはカマド構築用粘土が混じり込む。　**遺物**　遺物はNo.1～14の遺物が出土した。No.1～12は土師器である。No.2は坏底部でありやや丸底である。No.1・3は内面黒色処理された高台坏である。No.1は住居中央付近に割れて出土した。No.12は輪積痕をナデて段を作り、一部は焼成前に弧状に鋭利な道具で切られている。器種は不明である。No.4



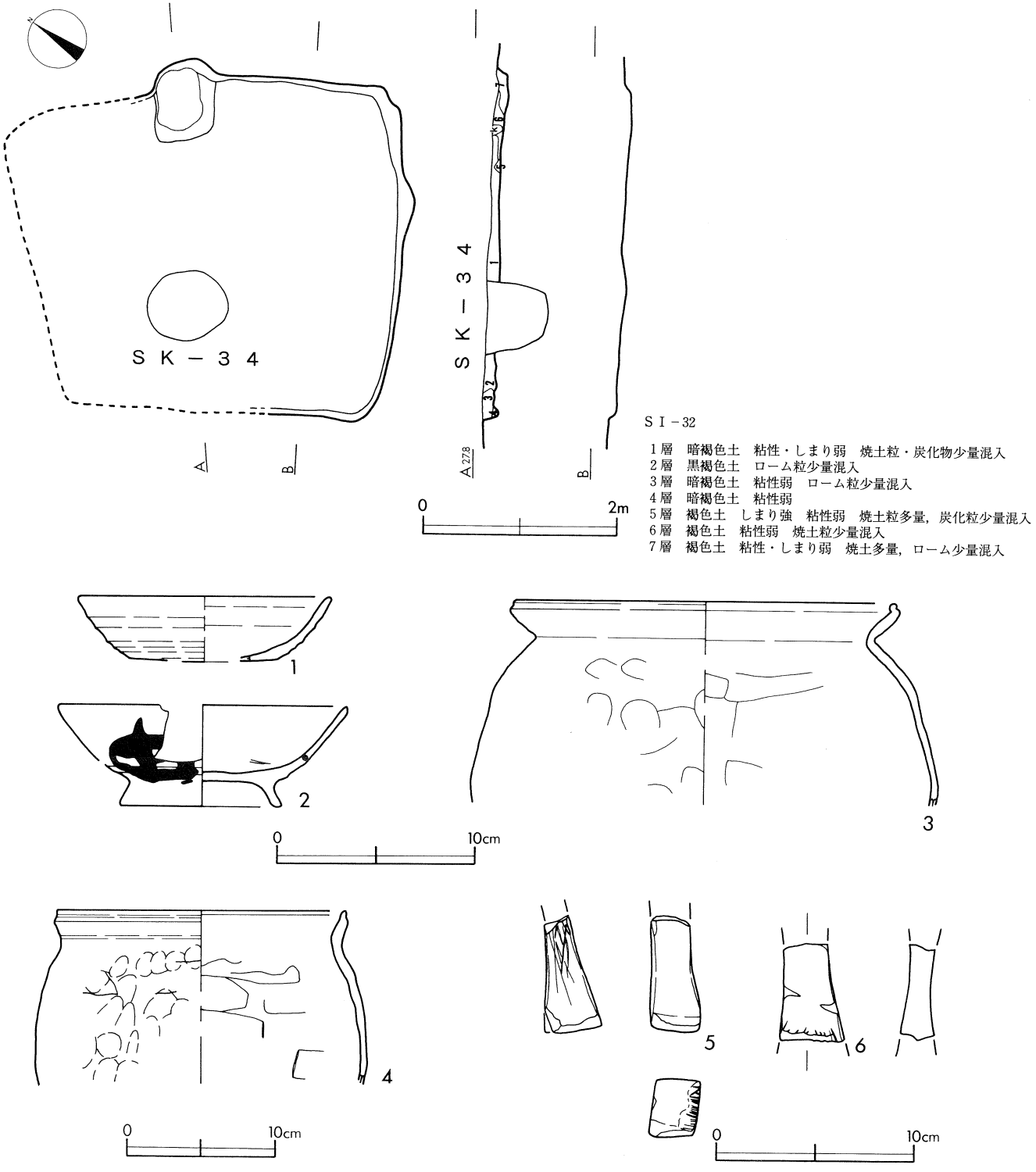
第62図　第31号住居跡出土遺物実測図

～9は土師器の小皿で、硬化した床面の範囲内から出土している。この他№13は須恵器大甕の破片を再利用した転用砥石であり、№14は椀形鉄滓であり、床面から出土している。　**所見**　本住居跡は、内面黒色処理された高台坏の高台部分の形態や土師器小皿の出現などから、平安時代の中でも11世紀代のものと思われる。本遺跡内の平安時代の住居跡の中でも、土師器小皿を出土したのは本住居跡のみである。

第３１号住居跡出土遺物

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	土師器	高台坏	15.0	5.3	高台5.7	にぶい褐	金雲母	良	４０	内面黒色処理 内面ミガキ 口唇部やや外反 底面回転糸切りの後、高台を取り付け
2	土師器	坏		(1.1)	6.0	にぶい黄褐	長石・石英・雲母	普	３０	やや丸底 底面回転ヘラ切りの後ナデ 外面指頭痕
3	土師器	高台坏		(2.3)	高台9.0	橙	長石・石英	普	１０	内面黒色処理 「ハ」の字状に開く高台
4	土師器	小皿	(11.4)	1.9	(6.8)	橙	長石・石英・雲母	普	３０	ロクロ成形 底部から緩やかに直線的に立ち上がる
5	土師器	小皿	(10.8)	1.5	(8.8)	橙	長石・石英・雲母	普	２０	ロクロ成形 底面ナデ 口縁部が直線的に立ち上がる 口径に比べて底径大きい
6	土師器	小皿	(9.4)	1.6	(5.6)	橙	長石・石英・雲母	普	６０	ロクロ成形 底面回転ヘラ切り痕 胎土緻密 底面に藁のような圧痕あり
7	土師器	小皿	(8.8)	2.0	(4.5)	にぶい褐	砂粒	普	３０	ロクロ成形 底面回転糸切り 底部が高台状にやや高くなる
8	土師器	小皿		0.9	5.4	にぶい褐	砂粒・緻密	普	４０	ロクロ成形 底面回転糸切り 底部に厚みを持ち 高台状にやや高くなる
9	土師器	小皿		0.9	(5.4)	橙	長石・雲母	普	４０	ロクロ成形 底面回転糸切り
10	須恵器	蓋		(1.3)		灰	長石・石英	良	5	偏平なボタン状のつまみ

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
11	須恵器	壺		(3.1)	10.9	灰オリーブ	長石・石英・小石	普	5	体部下端手持ちヘラ削り 底部に高台を付付けた後ナデ
12	土師器	不明		(6.7)		橙	長石・石英・雲母	普	5	輪積痕あり ヘラ状工具により斜めに切り込み
13	須恵器	砥石	長(4.9)幅(1.8)厚さ(1.3)重量(16.1)					良	5 0	須恵器大甕の破片を打ち欠き再利用 内面を砥石として使用 著しく磨滅
14	鉄滓	椀形鉄滓	長(7.2)幅(6.0)厚さ(2.9)重量(92.0)						不明	椀形鉄滓



第63図　第32号住居跡実測地・出土遺物実測図

第３２号住居跡〔旧第２２ｂ号住居跡〕（第63図　ＰＬ21・33）

位置　調査区中央の、標高27.75m付近の台地上東寄りに、Ｔ－19・20区から確認されている。本遺構は第15号住居跡や第34号土坑と重複関係にある。周辺には第10号住居跡、第32・33号土坑が存在する。　**規模と平面形**　規模は長軸（3.86）m、短軸3.29mの横長のほぼ方形を呈し、北東壁中央にカマドが作られている。　**主軸方向**　Ｎ－52°－Ｅ　**壁**　壁高は12～５cmである。北壁から西壁にかけては、弥生時代の住居跡覆土を壁としているせいか、不明瞭といえる。　**床**　大部分はほぼ平坦である。硬化面の範囲は確認できなかった。壁溝も確認されなかった。　**ピット**　ピットは確認されていない。　**カマド**　北東壁の中央に壁外約25cmの掘り込みを持つが全体的に遺存状況は悪く、袖部は遺存していない。規模は長さ0.82m、幅約0.52mである。火床部には焼土が見られ、床面から少し掘り込まれ、皿状をなす。　**覆土**　７層から構成され、第７層はカマドの覆土で、他は住居覆土である。　**遺物**　遺物はNo.１～６の遺物が出土した。No.１～４は土師器である。No.１はロクロにより整形されている。No.2は内面黒色処理された高台坏で外面に「由」という墨書がされている。No.５・６は同一個体と考えられる砥石であり、両端が太く中央部が細い。断面は方形を呈し、それぞれの面が使用されている。　**所見**　本住居跡は第15号住居跡よりも新しく、第34号土坑よりは古い重複関係にある。内面黒色処理された高台坏の高台部分の形態や土師器坏の形態的特徴から、本住居跡の時期は平安時代の中でも10世紀代のものと思われる。

第３２号住居跡出土遺物

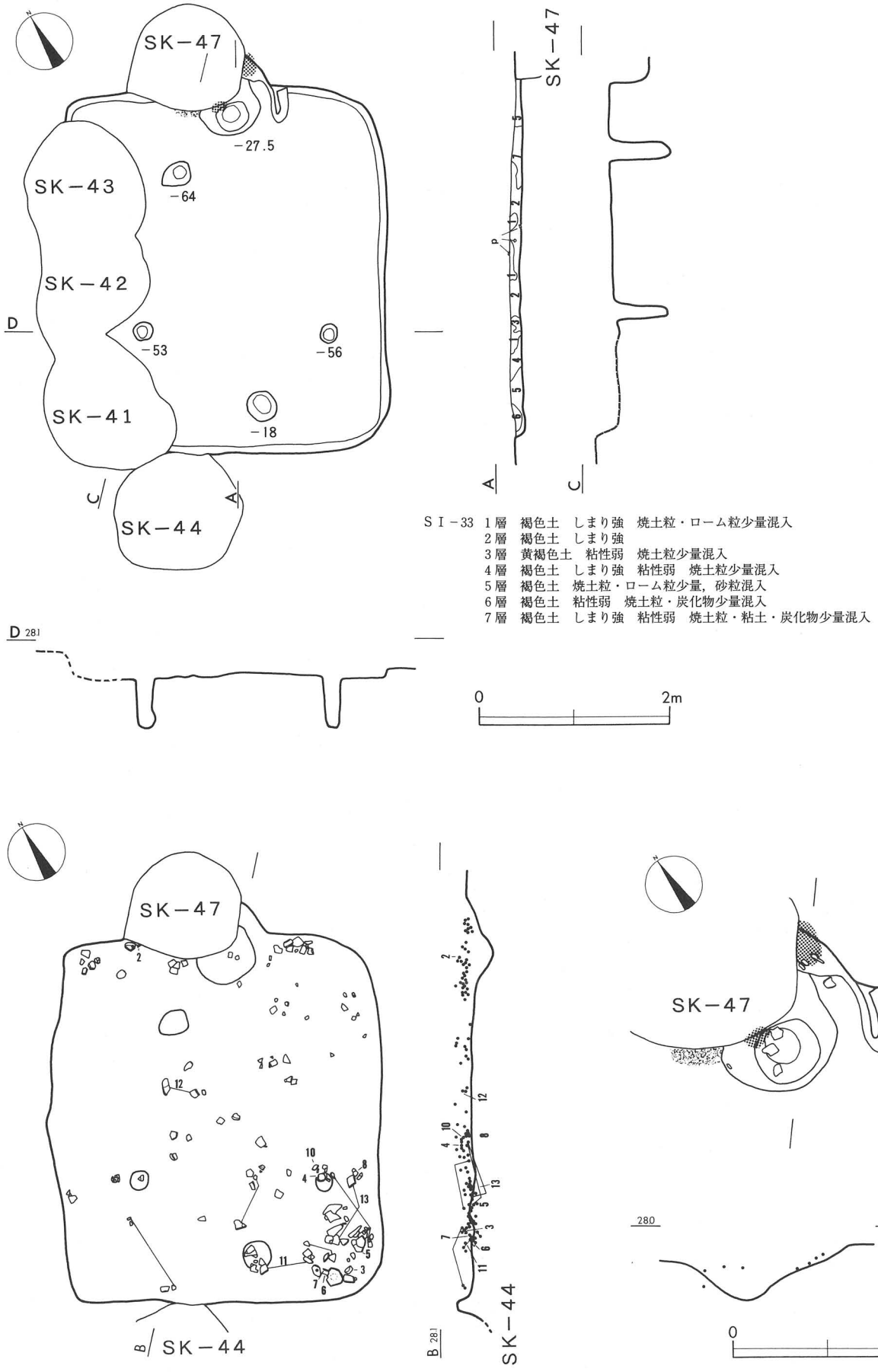
番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	土師器	坏	(12.8)	3.2	7.5	浅黄橙	長石・石英・雲母	普	５０	体部下端手持ちヘラ削り 底面手持ちヘラ削り
2	土師器	高台坏	(15.4)	5.1	8.0	にぶい橙	雲母	良	５０	内面黒色処理 内面ミガキ 外面に墨書「由」
3	土師器	甕	(19.6)	(9.2)		橙	長石・石英	良	５	頸部が「く」の字に括れる 口唇部内傾する 内外面横ナデ 外面に指頭痕あり
4	土師器	甕	(19.6)	(6.8)		にぶい橙	長石・石英	普	５	頸部の屈曲弱い 外面に指頭痕あり 口縁部から口唇部横ナデ 内面ヘラナデ
5	石製品	砥石	長(5.9)幅(2.6)厚さ(2.9)重量 44.6　石材 凝灰岩						一部欠損	５面砥面 有溝
6	石製品	砥石	長(4.9)幅 3.3 厚さ(2.8)重量 31.1　石材 凝灰岩						上下端欠	４面砥石 有溝

第３３号住居跡〔旧第８ｂ号住居跡〕（第64図・第65図No.１～13　ＰＬ７・21）

位置　調査区中央の、標高28.00m付近の台地上東寄りに、Ｑ－21区から確認されている。本遺構は第22号住居跡や第42～44・47号土坑と重複関係にある。また当住居跡の床面が上下２枚確認されたため下の床面を第34号住居跡とした。周辺には第21号住居跡、第39・40号土坑が存在する。　**規模と平面形**　規模は長軸3.67m、

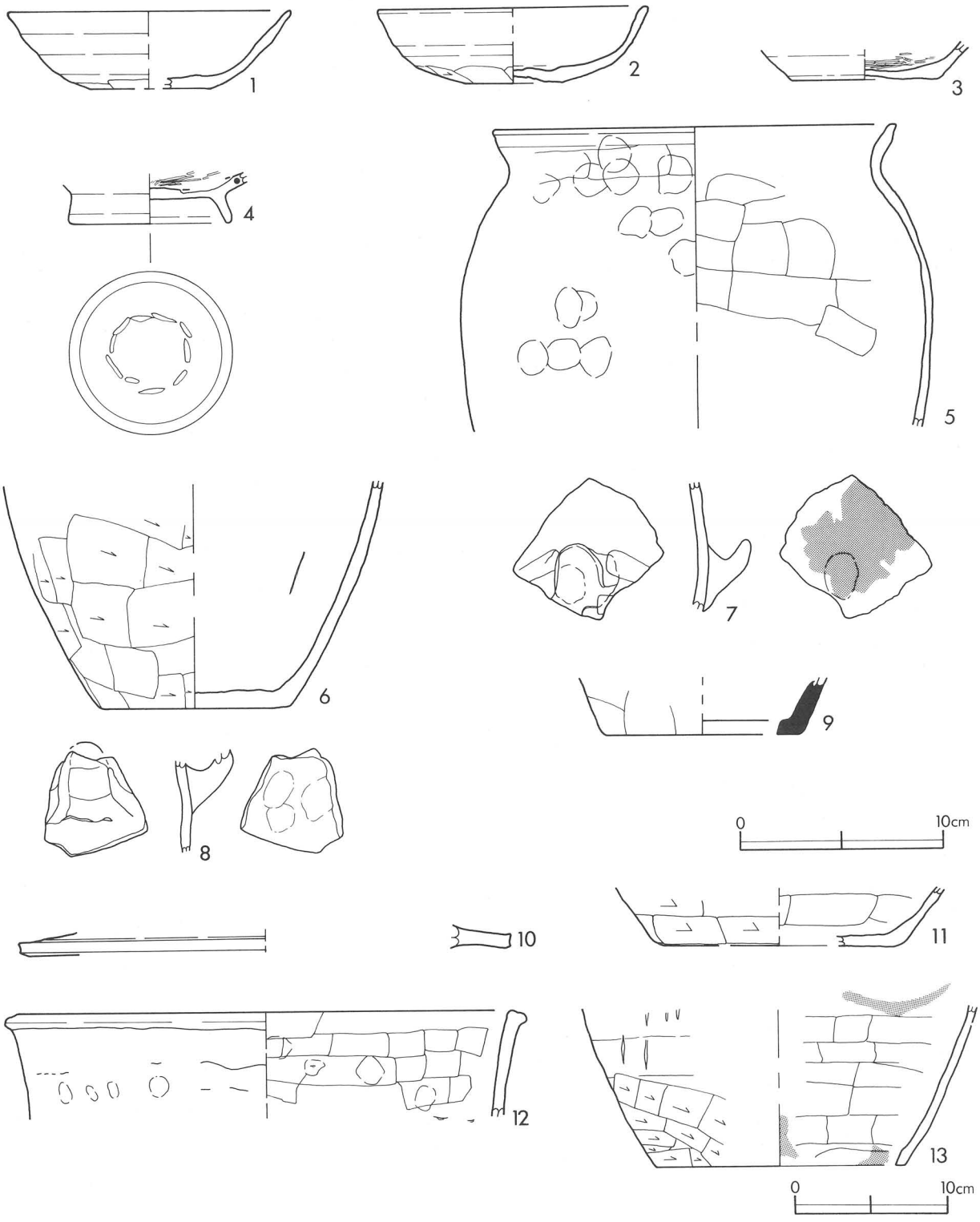
第３３号住居跡出土遺物

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	土師器	坏	(14.0)	3.8	(5.8)	にぶい黄橙	長石・石英	普	２５	底面一方向の手持ちヘラ削り・底部下端手持ちヘラ削り 被熱している
2	土師器	坏	(13.0)	3.7	(4.8)	橙	長石・石英・雲母	普	４０	底面回転ヘラ切り・底部下端幅広く手持ちヘラ削り 底径小さい
3	土師器	坏		(1.6)	7.6	にぶい橙	長石・石英	普	２０	底面回転ヘラ切りの後ナデ 底部内面ミガキ
4	土師器	高台付坏		(2.1)	4.0	浅黄橙	長石・石英・雲母	普	２０	内面黒色処理 内面ミガキ 底面に高台貼り付け時の爪の痕跡
5	土師器	甕	(20.0)	(14.9)		にぶい褐	長石・石英	普	２０	頸部が緩く括れ口唇部が外側に捲れる 外面ナデ 指頭圧痕 スス付着 内面ヘラナデ
6	土師器	甕		(11.0)	9.6	橙	長石・石英	良	３０	胴部下半側面ヘラ削り 底面砂目痕 内面指頭痕・ヘラナデ 被熱 No.５の口縁部と同一個体か
7	土師器	甑		(7.0)		にぶい橙	長石・石英・赤色粒	普	５	舌状の把手 外側に指頭痕・ナデ 内側指頭痕 スス付着
8	土師器	甑		(5.1)		にぶい橙	長石・石英・赤色粒	普	５	舌状の把手 内外に指頭痕 No.７と同一個体か
9	須恵器	甑		(2.8)	(9.6)	灰オリーブ	長石・雲母	普	５	底面５孔式の甑か SI-34No.２甑把手と同一個体か
10	土師器	羽釜		(1.5)		にぶい黄橙	長石・石英	不良	５	羽釜の鍔部分 外面ナデ
11	土師器	鉢		(3.8)	15.0	にぶい黄橙	長石・石英	普	５	底径の大きな鉢か 体部下端ヘラ削り 底部・内外面ヘラナデ
12	土師器	甑	(34.6)	(7.0)		にぶい褐	長石・石英	普	１０	口縁部が直口し口唇部に厚みを持つ 外面横ナデ 内面ヘラナデ
13	土師器	甑		(10.3)	(16.6)	橙	長石・石英・雲母	普	１０	底面５孔式の甑か 胴部下位にヘラ削り 内面にヘラナデ スス付着



SＩ－33　1層　褐色土　しまり強　焼土粒・ローム粒少量混入
2層　褐色土　しまり強
3層　黄褐色土　粘性弱　焼土粒少量混入
4層　褐色土　しまり強　粘性弱　焼土粒少量混入
5層　褐色土　焼土粒・ローム粒少量，砂粒混入
6層　褐色土　粘性弱　焼土粒・炭化物少量混入
7層　褐色土　しまり強　粘性弱　焼土粒・粘土・炭化物少量混入

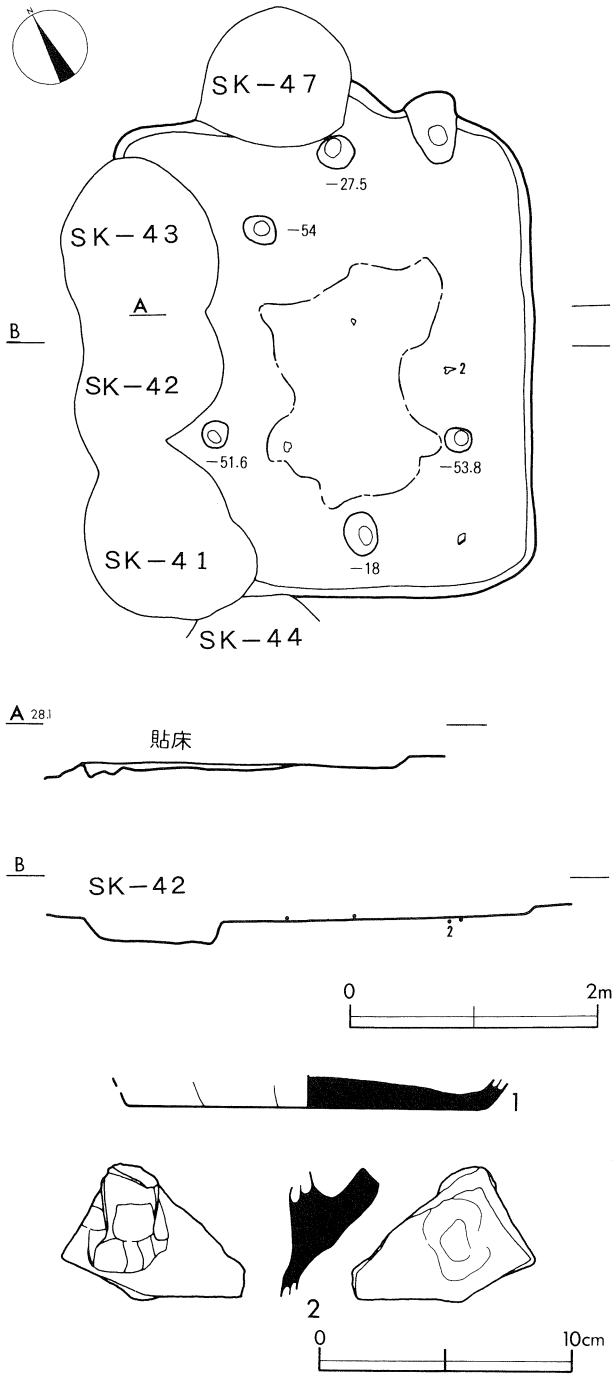
第64図　第33号住居跡実測図



第65図　第33号住居跡出土遺物実測図

短軸（3.21）mのほぼ方形を呈し、北北東壁中央にカマドが作られている。　**主軸方向**　N－29°－E　**壁**　壁高は28～12cmである。西壁や南壁の一部は土坑により壊されている。**床**　大部分はほぼ平坦である。床面は踏み固められていた。壁溝は確認されなかった。　**ピット**　ピットは5ヶ所確認されている。それぞれ住居内における位置などから考え、主柱穴の可能性も考えられる。　**カマド**　カマドの大半は土坑により壊され袖

部も片側のみ残存する。カマドの遺存部分が北北東壁の中央から壁外に約30cmの掘り込みを持つ。全体の長さは本来（1.0）m位あったものと思われ、幅は約（1.0）mであろう。焚口部分は床面より約20cm掘り込まれ、その中に小さなピットが確認された。奥壁には焼土が見られた。　**覆土**　6層から構成され、ほとんどは褐色土により構成され全体的に焼土・炭化物・粒が含まれる。　**遺物**　遺物は小破片が床面全体に見られ、中でも住居の南隅付近にまとまって出土している。No.1～13の遺物は皆土師器でNo.1～3は土師器坏であり、それぞれロクロ成形され、No.2は底部側縁が手持ちヘラ削りされる。No.4は内面黒色処理された高台坏で、底部に高台部の接合痕が残る。No.5・6は甕である。No.7・8は甑の把手である。No.10は羽釜の鍔部分である。No.11は底径が大きく胴部の開きが大きな鉢であろう。No.12・13は甑である。　**所見**　内面黒色処理された高台坏の形態や土師器坏の形態的特徴などから、本住居跡の時期は平安時代の中でも10世紀代のものと思われる。



第66図　第34号住居跡実測図・出土遺物実測図

第34号住居跡〔旧第8c号住居跡〕（第66図　PL5・21）

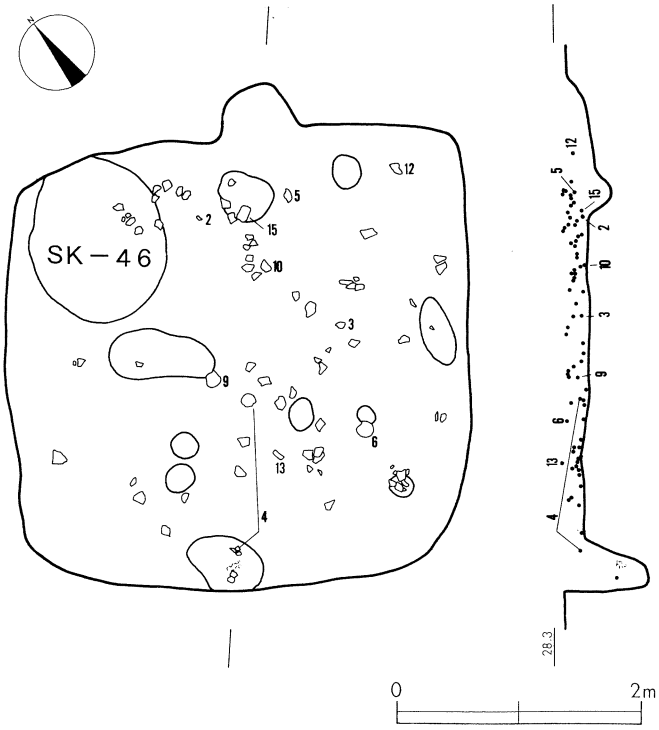
位置　本遺構は第33号住居跡内の床面下に確認されたもので、平面形は同住居と同様であるが第34号住居跡とした。　**規模と平面形**　第33号住居跡と同様と考えられる。　**主軸方向**　N－29°－E　**壁**　壁高は第33号住居跡より若干深い。　**床**　大部分はほぼ平坦であるが西側に緩く傾斜している。硬化面は、特にピットに囲まれた内側が明瞭に踏み固められていた。壁溝は確認されなかった。　**ピット**　ピットは5ヶ所確認されている。第33号住居跡と同様なものであり本住居使用時に柱として機能した可能性の方が高い。　**カマド**　第33号住居跡と同様な場所には明瞭な焚口部分は見られなくなる。　**覆土**　褐色土　**遺物**　遺物は小破片が少数床面上に見られる。No.1・2の遺物は皆須恵器で、No.1は底径が大きな鉢であり、No.2は甑の把手である。　**所見**　本住居跡は、ほぼ第33号住居跡と同様な平安時代の中でも10世紀代のものと思われる。

第３４号住居跡出土遺物

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	須恵器	鉢		(1.1)	14.6	灰黄	長石・砂	普	１０	底径が大きく外面ヘラ削り 底面砂目痕 内面ナデ
2	須恵器	甕		(5.3)		暗灰	長石・雲母	普	5	粗い作りの把手 指頭圧痕 ヘラナデ SI-33No.9と同一個体か

第３５号住居跡〔旧第９ｂ号住居跡〕（第67・68図・第69図№１～15　ＰＬ７・21・22）

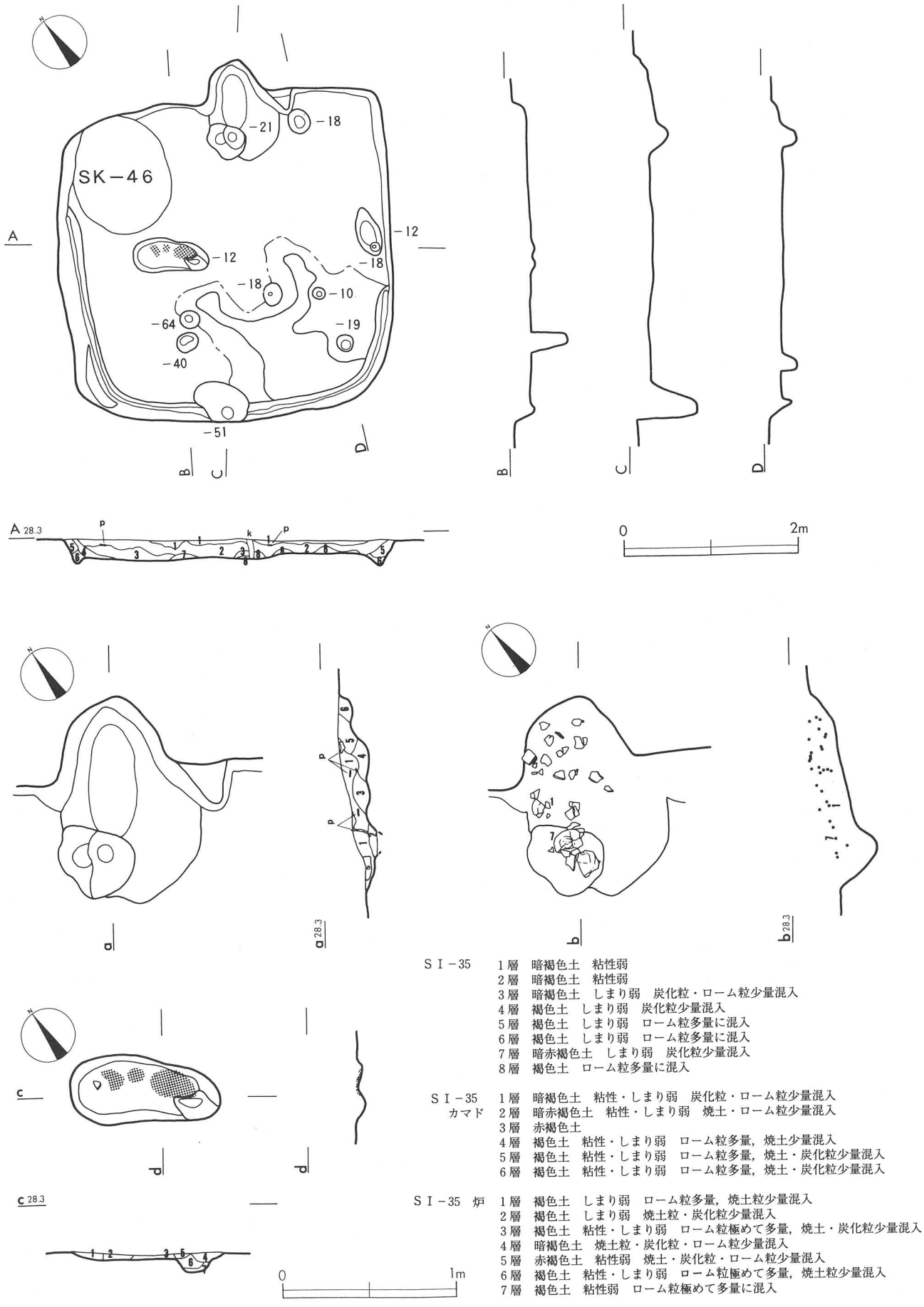
位置　調査区中央の、標高28.25m付近の台地上に、Ｍ－22・23区から確認されている。本遺構は第20号住居跡や第46号土坑と重複関係にある。周辺には第19号住居跡、第45号土坑が存在する。　**規模と平面形**　規模は長軸3.46m、短軸3.46mの正方形を呈し、北北東壁中央にカマドが作られている。　**主軸方向**　Ｎ－36°－Ｅ　**壁**　壁高は19～13cmである。北壁隅の一部は土坑により壊されている。　**床**　大部分はほぼ平坦である。南側の床面は踏み固められ硬化した高まりが南隅から伸びている。壁溝は西壁際から南壁際に確認され、５～10cmを計る。　**ピット**　ピットは住居内に９ヶ所確認されている。それぞれ住居内における位置などから考え、主柱穴とは考えがたい。それぞれの深さは10～19cmで中には64cmや40cmのものもある。南南西壁中央にあるピットは入り口に関わるものかも知れない。　**炉**　長軸82cm、短軸40cmの楕円形のものが住居内の西側に確認された。掘り込みの深さは約５cm程度であるが、南南東端には小ピットがあり深さ10cmを測る。炉床は部分的に焼けて赤変硬化している。炉内から土師器甕破片が出土した。　**カマド**　北北東壁の中央に壁外約40cmの掘り込みを持ち、全体の長さは1.2mで、幅は約80cmである。焚口部は床面より約15cm掘り込まれ、その中に小さなピットが確認された。袖部は明瞭に遺存し



第67図　第35号住居跡遺物出土状況図

第３５号住居跡出土遺物

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	土師器	坏	(12.1)	4.2	(3.4)	明赤褐	長石・石英・雲母	普	５０	底部から緩く立ち上がる 底面回転ヘラ切り痕 外面内面横ナデ 被熱し赤変
2	土師器	坏	(13.4)	3.8	(8.0)	にぶい黄橙	長石・石英・雲母	普	３０	底面は回転ヘラ切りの後ナデ 外面内面横ナデ
3	土師器	坏	(17.4)	6.0	(7.4)	にぶい橙	長石・石英・雲母	普	４０	口唇部やや外反 底面回転ヘラ削り 体部下端手持ちヘラ削り 内面黒色処理・ヘラミガキ
4	土師器	高台坏	15.2	(5.9)	8.6	にぶい橙	長石・石英・雲母	普	７０	口唇部やや外反 内面黒色処理・ヘラミガキ 底面回転ヘラ切り 爪圧痕
5	土師器	高台坏		(2.0)	(10.2)	橙	長石・石英・雲母	普	１０	「ハ」の字状に開く高台 底面凹む 内面黒色処理・ミガキ 底面回転ヘラ削り
6	土師器	高台坏		(2.2)	8.6	にぶい橙	長石・石英・雲母	普	２０	内外面ナデ 底面回転ヘラ切りの後回転ヘラ削りか
7	土師器	高台坏	15.3	(4.1)		にぶい橙	長石・石英・雲母	普	８０	口唇部やや外反 内面黒色処理・ミガキ 底面回転ヘラ削り 器壁荒れる
8	須恵器	甕	19.9	(5.3)		灰	長石・石英・雲母	良	5	内面に稜を持ち口唇部をつまみ上げる 内外面横ナデ
9	土師器	甕		(2.6)	5.9	明褐	長石・石英	普	１０	外面ヘラ削り 内ヘラナデ 底面に繊維状の圧痕あり
10	土師器	鉢又は甑		(7.7)		橙	長石・石英・雲母	普	5	内外面横ナデ 口唇部厚みを持ち上端に平坦面を持つ 一部把手貼り付状の痕跡
11	土師器	土製カマド		(5.7)		にぶい橙	長石・石英・雲母	普	5	土製カマドの焚き口部分 設置面に平坦面を持つ 外内面ヘラナデ 被熱は受けていない
12	土師器	土製カマド		(10.9)		にぶい黄橙	長石・石英・雲母	普	１０	土製カマドの袖部 袖部でやや開く 胴部外面はヘラ削り 器面が粗い 内面に輪積痕あり
13	土師器	羽釜		(3.1)		にぶい橙	石英	普	5	羽釜の鍔部分 内外面横ナデ 突帯上に平坦面を持つ
15	土師器	土製カマド	長(13.8)幅(6.8)厚さ(1.0)			にぶい黄褐	長石・石英・雲母	普	１０	土製カマドの焚き口部分で、粘土帯により突帯を作りだす №12と同一個体か 被熱している

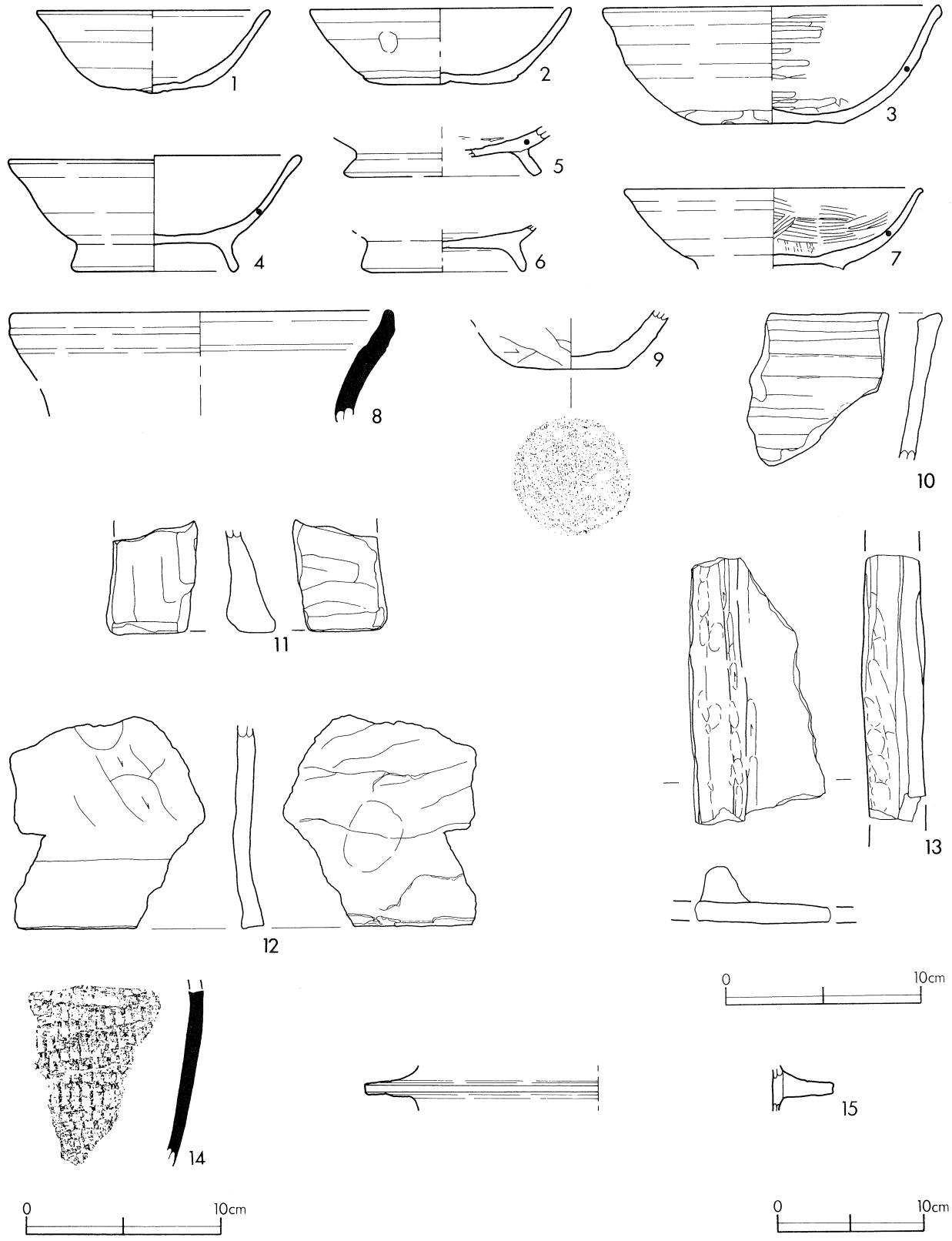


ＳＩ－35　1層　暗褐色土　粘性弱
2層　暗褐色土　粘性弱
3層　暗褐色土　しまり弱　炭化粒・ローム粒少量混入
4層　褐色土　しまり弱　炭化粒少量混入
5層　褐色土　しまり弱　ローム粒多量に混入
6層　褐色土　しまり弱　ローム粒多量に混入
7層　暗赤褐色土　しまり弱　炭化粒少量混入
8層　褐色土　ローム粒多量に混入

ＳＩ－35　1層　暗褐色土　粘性・しまり弱　炭化粒・ローム粒少量混入
カマド　2層　暗赤褐色土　粘性・しまり弱　焼土・ローム粒少量混入
3層　赤褐色土
4層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒多量，焼土少量混入
5層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒多量，焼土・炭化粒少量混入
6層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒多量，焼土・炭化粒少量混入

ＳＩ－35　炉　1層　褐色土　しまり弱　ローム粒多量，焼土粒少量混入
2層　褐色土　しまり弱　焼土粒・炭化粒少量混入
3層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒極めて多量，焼土・炭化粒少量混入
4層　暗褐色土　焼土粒・炭化粒・ローム粒少量混入
5層　赤褐色土　粘性弱　焼土・炭化粒・ローム粒少量混入
6層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒極めて多量，焼土粒少量混入
7層　褐色土　粘性弱　ローム粒極めて多量に混入

第68図　第35号住居跡実測図

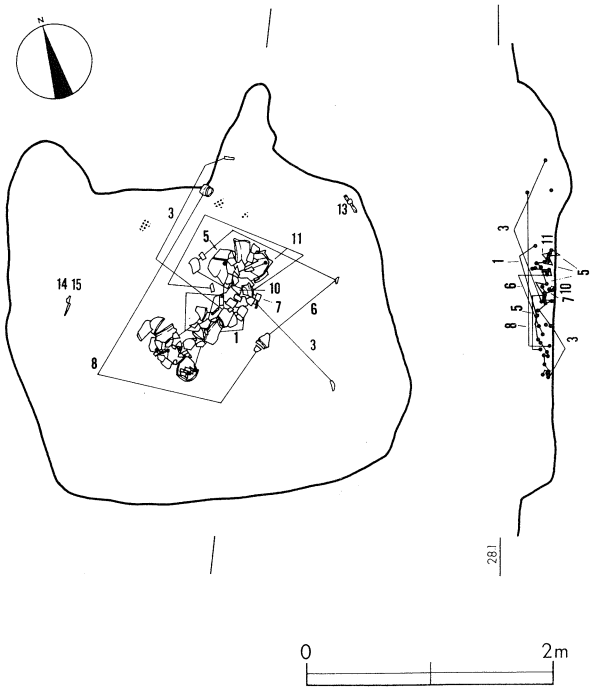


第69図　第35号住居跡出土遺物実測図

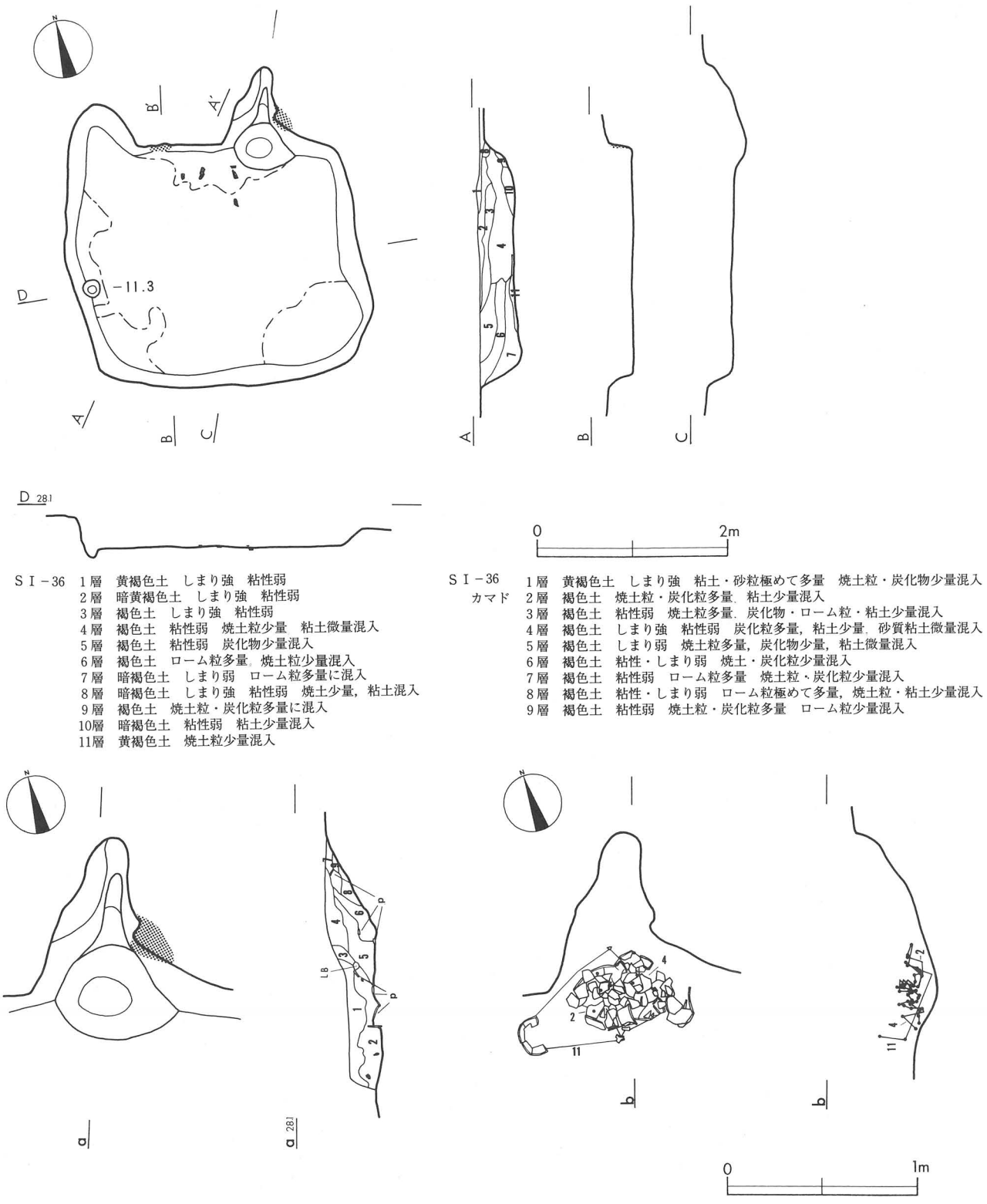
ておらず、一部残るのみ。カマド内の覆土中から小破片の土器が出土した。　**覆土**　8層から構成され、ほとんどは暗褐色土になる。壁際に褐色土が存在する。第8層は炉上の焼土粒が混入する土層である。　**遺物**　遺物は土師器が主体を占め、No.1～3は土師器坏である。No.4～7は高台坏である。この内No.3～5・No.7は内面黒色処理されている。No.8は須恵器甕の口縁部である。No.9は巻き上げ成形による鉢か。No.10は土師器の甑もしくは鉢である。No.14は須恵器の甑であろう。No.11・12・15は土製カマドで、No.11・13は焚口部、No.12は裾部である。No.12・13は同一個体と思われ、被熱を受けたせいか器面が粗い。No.15は羽釜の鍔部分である。No.1・7はカマド内から出土した。この他図示はしていないが灰釉陶器の長頸瓶の破片が出土している。　**所見**　内面黒色処理された高台坏の特徴や土師器坏の形態などから、本住居跡の時期は平安時代の中でも10世紀代のものと思われる。

第36号住居跡〔旧第28b号住居跡〕（第70・71図・第72・73図No.1～15　PL7・22・23・31・32）

位置　調査区中央の、標高28.00m付近の台地上に、P－23区から確認されている。本遺構は第26号住居跡や第49号土坑と重複関係にある。周辺には第25号住居跡、第40号土坑が存在する。　**規模と平面形**　規模は長軸4.78m、短軸3.74mの方形を呈し、北壁東寄りにカマドが作られている。　**主軸方向**　N－6°－W　**壁**　壁高は32～19cmである。北西隅には張出しがあり、住居外を約50cm掘り込んでいる。この張出し部分の覆土は住居跡のものと変化は見られなかった。　**床**　大部分は平坦でほぼ全面にわたり硬化面が見られ、北西隅の張出し底面も硬化していた。南東隅の床面は踏み固められていない。壁溝は確認されていない。　**ピット**　ピットは住居内西壁中央に1ヶ所確認され、深さは11cmを計る。住居内における位置などから考え、柱穴とは考えがたい。　**カマド**　北壁の東よりに壁外約80cmの掘り込みを持ち、全体の長さは1.1mで、幅は約80cmである。焚口部は床面より約10cm掘り込まれ、皿状を呈している。カマド焚口部からは複数個体の土師器甕が細かく割れながら横位に連なる状態で出土し、本来は焚口天井部の補強材として使用されたものと考えられる。カマドの奥壁は被熱し赤変した部分も見られた。　**覆土**　10層から構成される。第1・2層は黄褐色系の色調を帯び、その下層の第4層は第5～7層を掘り込む様に観察された。　**遺物**　遺物はカマド部分と住居中央からまとまって出土している。遺物は土師器が主体を占め、No.1～6・10は土師器甕である。甕の中には、No.5のようにやや胴が張るものや、No.6・10のような小型のものもある。No.11は須恵器の短頸壺である。No.12は焼きの悪い須恵器甑である。この他鉄製品としてNo.14・15の刀子や不明鉄製品が出土している。この他カマド西側の壁に若干の間層を挟んで、焼けたスサ入りの壁土様のものが出土した。No.2・4はカマドの補強材とされたようである。



第70図　第36号住居跡遺物出土状況図

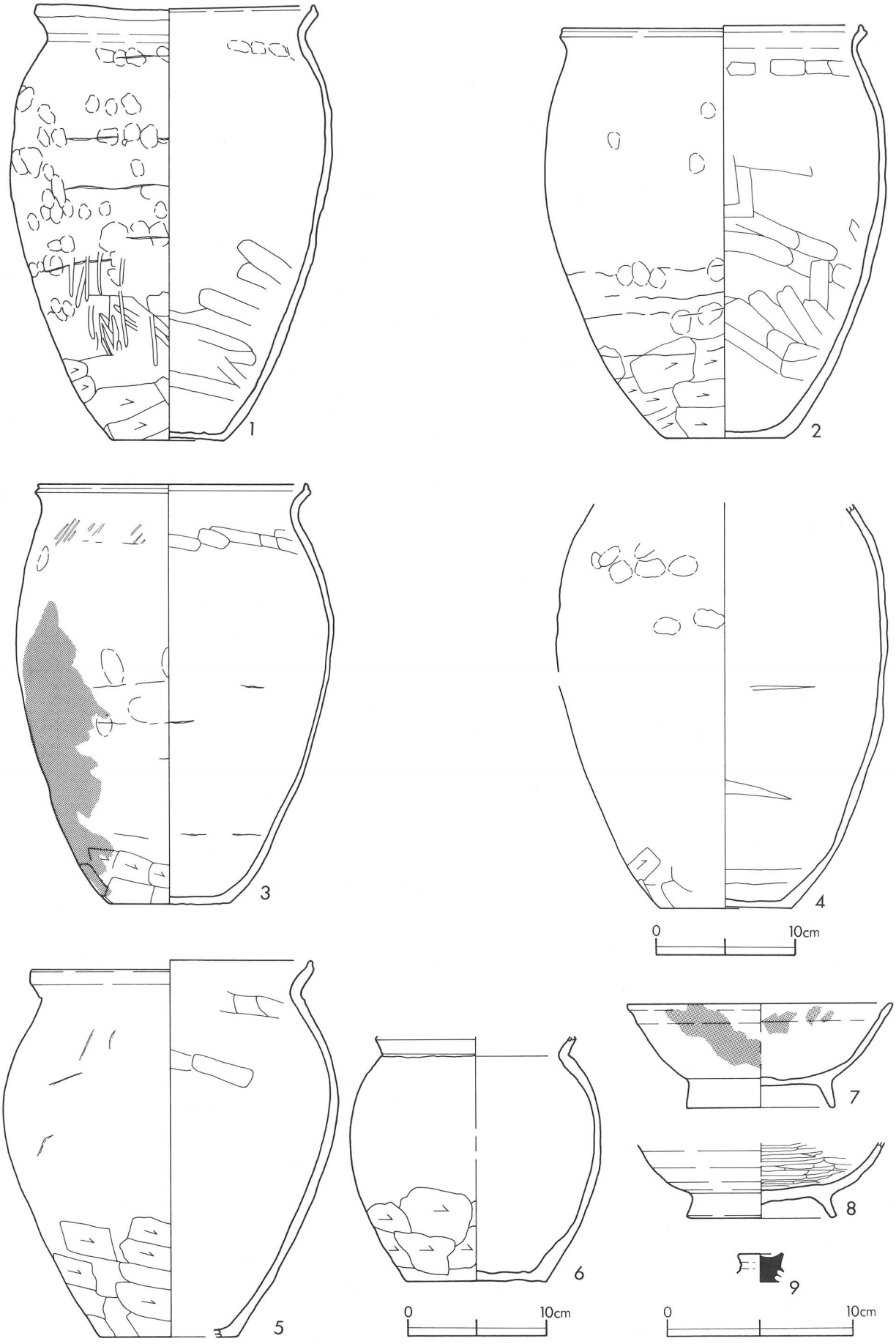


ＳＩ－36　1層　黄褐色土　しまり強　粘性弱
2層　暗黄褐色土　しまり強　粘性弱
3層　褐色土　しまり強　粘性弱
4層　褐色土　粘性弱　焼土粒少量　粘土微量混入
5層　褐色土　粘性弱　炭化物少量混入
6層　褐色土　ローム粒多量，焼土粒少量混入
7層　暗褐色土　しまり弱　ローム粒多量に混入
8層　暗褐色土　しまり強　粘性弱　焼土少量，粘土混入
9層　褐色土　焼土粒・炭化粒多量に混入
10層　暗褐色土　粘性弱　粘土少量混入
11層　黄褐色土　焼土粒少量混入

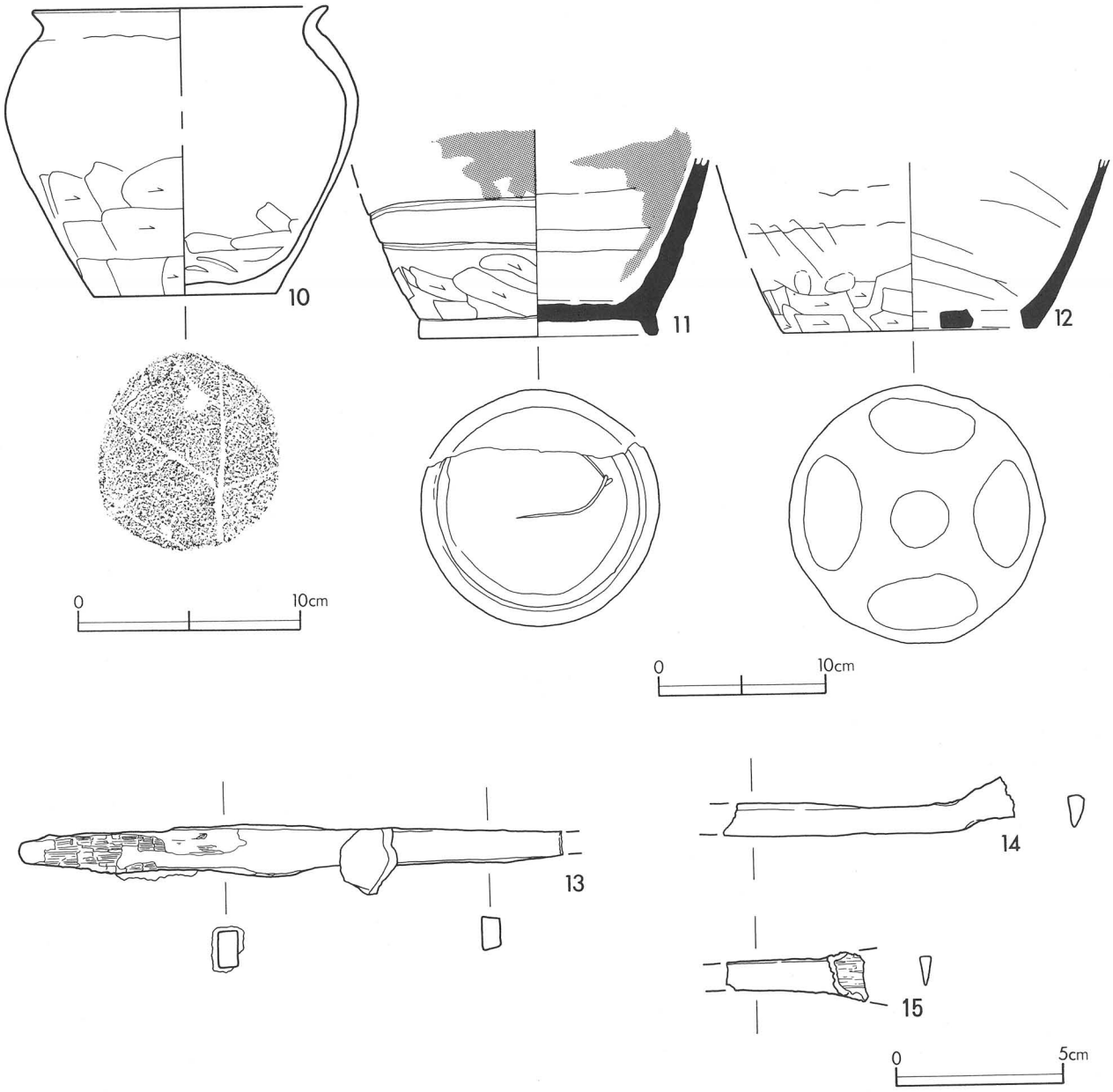
ＳＩ－36　1層　黄褐色土　しまり強　粘土・砂粒極めて多量　焼土粒・炭化物少量混入
カマド　2層　褐色土　焼土粒・炭化粒多量．粘土少量混入
3層　褐色土　粘性弱　焼土粒多量．炭化物・ローム粒・粘土少量混入
4層　褐色土　しまり強　粘性弱　炭化粒多量，粘土少量．砂質粘土微量混入
5層　褐色土　しまり弱　焼土粒多量，炭化物少量，粘土微量混入
6層　褐色土　粘性・しまり弱　焼土・炭化粒少量混入
7層　褐色土　粘性弱　ローム粒多量　焼土粒・炭化粒少量混入
8層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒極めて多量，焼土粒・粘土少量混入
9層　褐色土　粘性弱　焼土粒・炭化粒多量　ローム粒少量混入

第71図　第36号住居跡実測図

所見　土師器高台坏の特徴や土師器坏の形態などから、本住居跡の時期は平安時代の中でも10世紀代のものと思われる。また住居内覆土中の第４層が第５～７層を掘り込む様に観察されたこと、覆土中の南東隅から馬耳形突起の付いた宝篋印塔の蓋部分が出土していることから、中世の遺構により住居覆土が撹乱を受け壁が壊されている可能性も考えられる。



第72図　第36号住居跡出土遺物実測図(1)



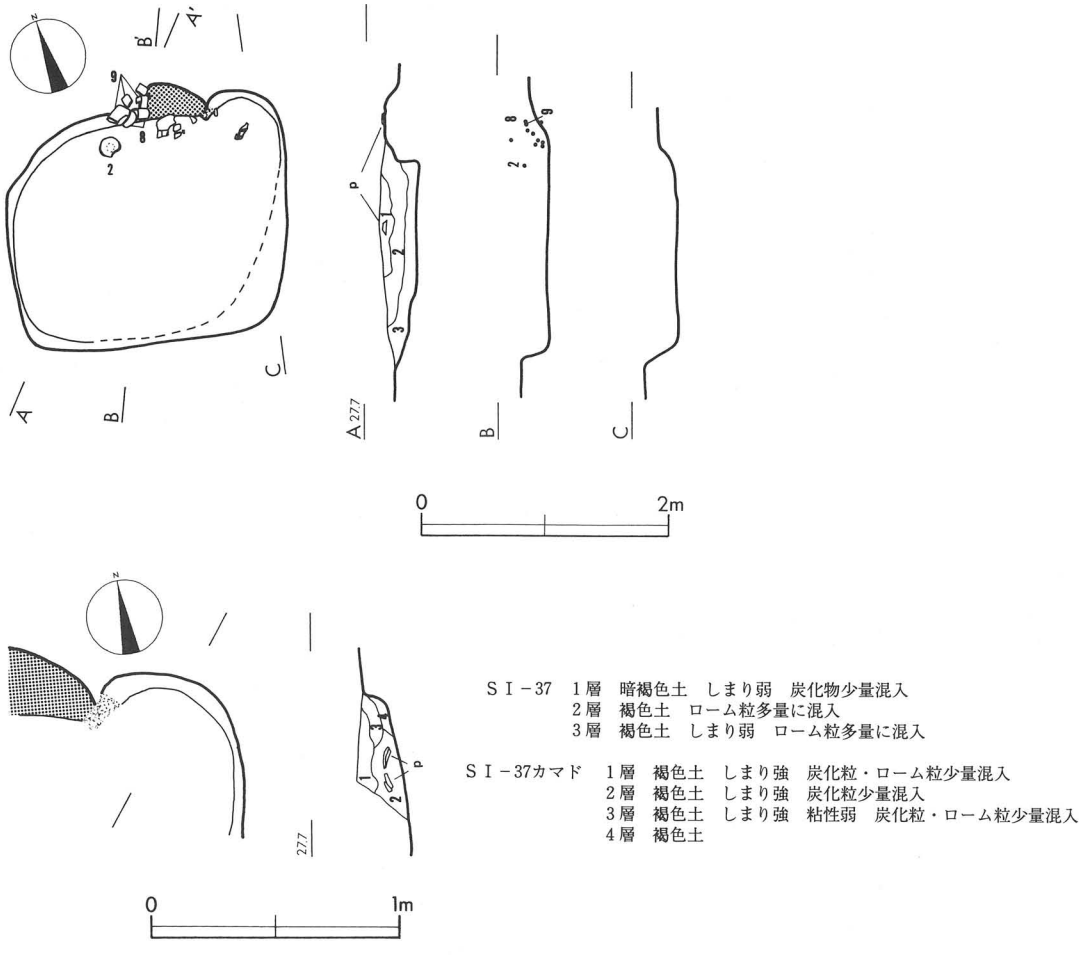
第73図　第36号住居跡出土遺物実測図(2)

第３６号住居跡出土遺物

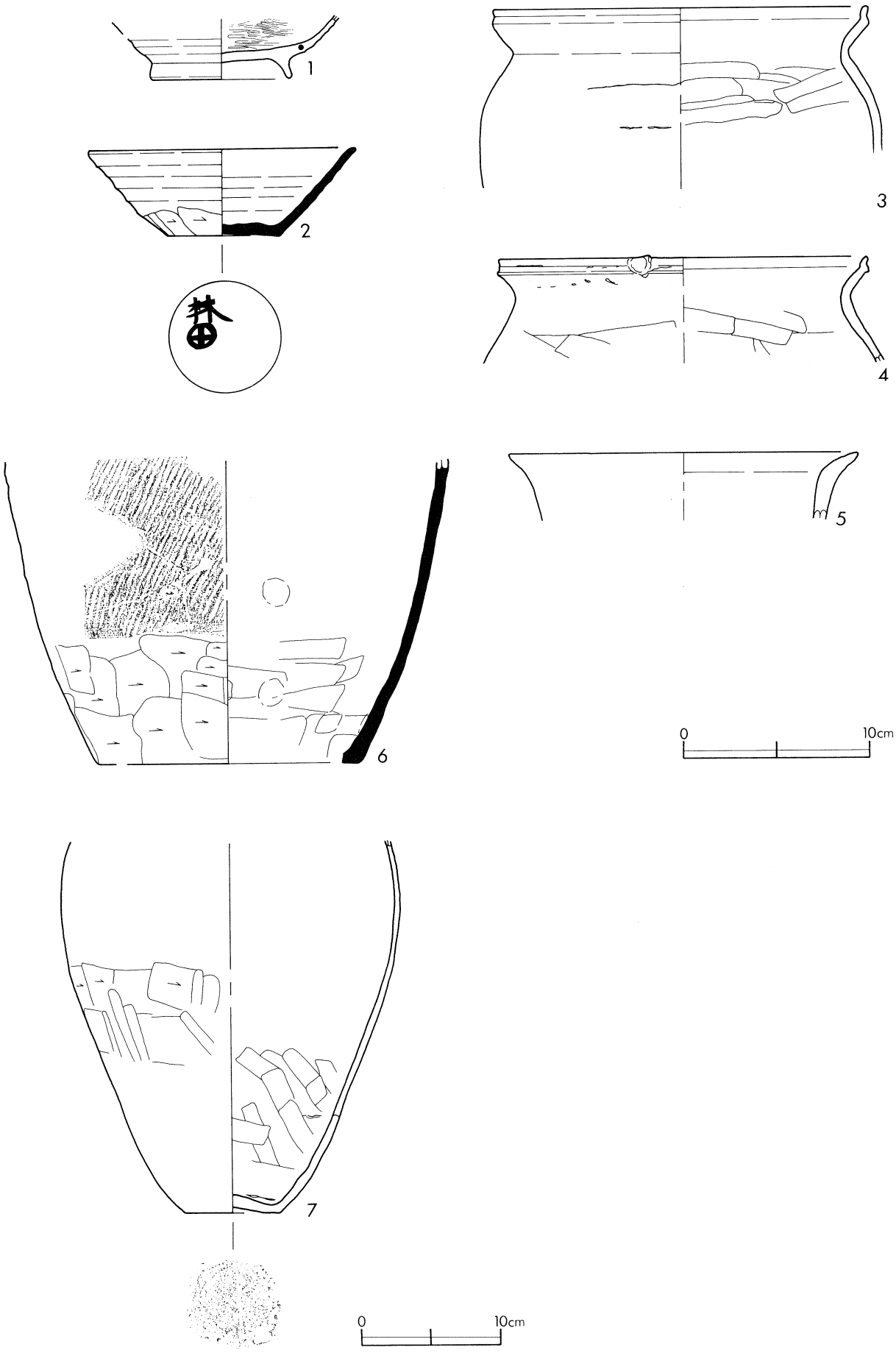
番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	出土状況・その他
1	土師器	甕	20.3	31.6	7.9	橙	長石・石英・赤色粒	普	７０	口縁部緩く括れ、口唇部内傾 胴部指頭痕 胴部下半ヘラ削り・ミガキ 底面砂目痕 粘土付着
2	土師器	甕	22.2	24.9	9.0	橙	長石・石英・雲母	普	８０	口縁部緩く括れる 胴部に指頭痕 底部側縁ヘラ削り・ナデ 底面砂目痕 胴部に粘土付着
3	土師器	甕	19.3	30.4	8.7	にぶい橙	長石・石英・雲母	普	６０	口縁部緩く括れる 胴部に指頭痕 底部側縁ヘラ削り 胴部に粘土付着 スス付着 底面砂目痕
4	土師器	甕		(29.3)	9.4	橙	長石・石英・雲母	普	６０	口縁部欠損 胴部下半ヘラ削り 胴部に粘土付着 内面横ナデ 底面砂目痕
5	土師器	甕	20.4	27.4	9.9	橙	長石・石英・雲母	普	９０	口縁部緩く括れる 胴部の上位が張る 胴部下半ヘラ削り 底面欠損 胴部に粘土付着 外面被熱
6	土師器	小型甕		(12.7)	10.2	橙	長石・石英・雲母	普	５０	口唇部欠損 頸部が屈曲 胴部球形 胴部下半ヘラ削り 口径に対し底径大きい 底面砂目痕
7	土師器	高台坏	(14.4)	6.1	8.0	橙	長石・石英・雲母	不良	６０	口唇部やや外反 内面黒色処理・ミガキ 底面回転ヘラ切り 外面にタール付着
8	土師器	高台坏		(4.1)	8.0	にぶい褐	長石・雲母	不良	５０	内面黒色処理・ミガキ 底面回転ヘラ切りの後ナデ
9	須恵器	蓋		(1.0)		灰	長石・石英	普	5	蓋のつまみ ボタン状を呈する 中央がやや凹む 外面ナデ つまみ径2.4cm
10	土師器	小型甕	(8.9)	8.6	5.5	にぶい褐	長石・石英	普	６０	胴部上半に最大径を持つ 口縁部括れ、外反 胴部下半はヘラ削り 内面ヘラナデ 底面木葉痕
11	須恵器	短頸壺		(6.2)	7.2	灰	長石・小石	良	６０	高台が付く 高台の先端は丸みを持つ 胴部に３つの筋が付けられる 内面スス付着
12	須恵器	甑		(5.0)	7.6	にぶい黄橙	長石・石英・雲母	不良	４０	甑の胴下半部 底面は中央に円形1孔、周辺に楕円４孔の５孔式 櫛ヘラにより開けられる
13	鉄製品	不明	長さ(16.3) 幅1.3 厚さ0.6 重量 41.4						一部欠損	刀子に類似したの形態を持つが断面が長方形を呈する 刃部はない 一部木質部が遺存
14	鉄製品	刀子	長さ(8.7) 幅0.8 厚さ0.5 重量(10.3)						一部欠損	先端の尖る刃部を持つ
15	鉄製品	刀子	長さ(4.2) 幅1.4 厚さ0.4 重量(4.5)						一部欠損	先端の尖る刃部を持つ 一部木質部が遺存

第３７号住居跡〔旧第１４号住居跡〕（第74図・第75～77図№１～13　ＰＬ８・23・24・31～33）

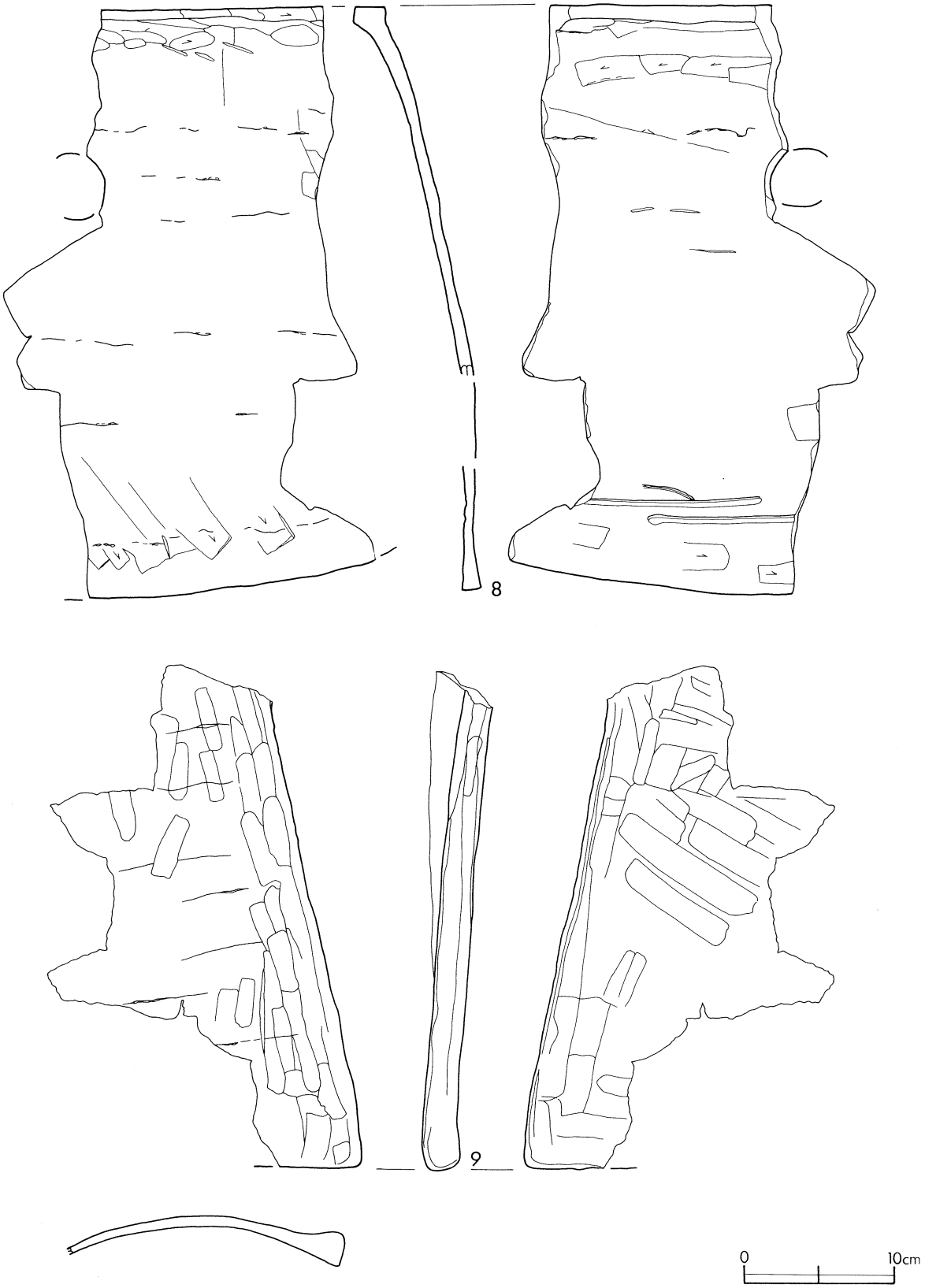
位置　調査区南寄りの、標高27.75m付近の台地上に、Ｍ－29区から確認されている。台地上の遺構分布と南南東に張り出した尾根上部分の遺構分布とのすき間にある。周辺には旧石器時代調査区や第62号土坑の火葬墓が存在する。　**規模と平面形**　規模は長軸2.06m、短軸1.71mの小規模なもので不整方形を呈し、北壁中央外側部分に半円形の焼土の広がりが見られた。住居内の北東隅にはカマドらしい掘り込みが確認された。　**主軸方向**　Ｎ－17°－Ｅ　**壁**　壁高は22～17cmである。部分的に覆土と地山の土が明瞭に区別できず掘り過ぎてしまったところもある。　**床**　大部分はほぼ平坦であるが、硬化面の範囲は確認されなかった。壁溝も確認されていない。　**ピット**　ピットは確認されていない。　**炉**　北壁中央外側の焼土の広がりについて、カマドとするのには掘り込みが浅くカマド構築粘土が全く混じらない。焼土についてはカマド内で見られる焼土とも異なる。　**カマド**　住居の東隅で見つかり、壁外に若干の掘り込みがあり、砂質粘土による袖部らしいものが片側のみ出土した。焚口部は床面を掘り込んでおらず、火床面らしい部分はない。　**覆土**　３層から構成され、第１層のみが暗褐色を呈する。他の土層はソフトロームに近い土層であるが黒褐色土粒を含む。　**遺物**　遺物は壁外の焼土の広がりが確認された部分より、№8・9の土製カマドが割れて出土した。いずれも大型の破片でまとまって出土した。他の遺物はカマド焚口部や住居中央部分上層からまとまって出土した。№1は内面黒色処理された高台坏で、№2は底面に「林田」と墨書された須恵器坏である。№3・4・7は土師器甕であり、№5・6



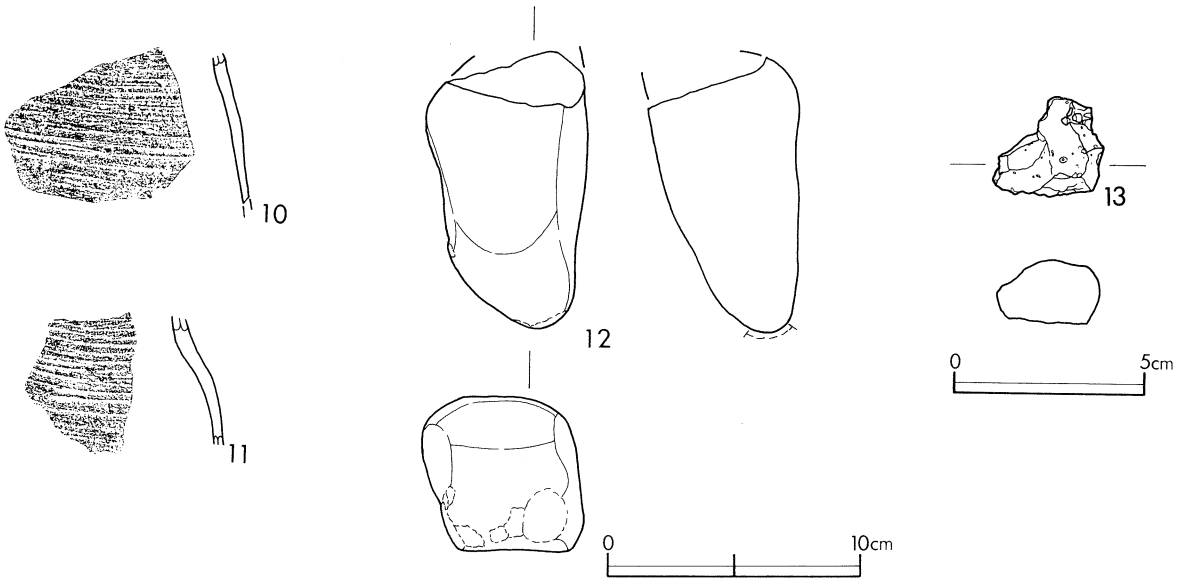
第74図　第37号住居跡実測図



第75図　第37号住居跡出土遺物実測図(1)



第76図　第37号住居跡出土遺物実測図(2)



第77図　第37号住居跡出土遺物実測図(3)

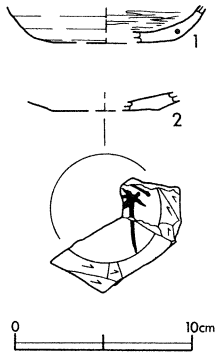
は甑である。No.10・11は土師器甕の破片で、叩き目が残る。No.12は磨石類、No.13は鉄滓というよりは鉄塊系遺物であり重みがある。　**所見**　須恵器坏の形態的特徴や内面黒色処理された高台坏の形態などから、本住居跡の時期は平安時代の中でも９世紀末葉のものと思われる。

第３７号住居跡出土遺物

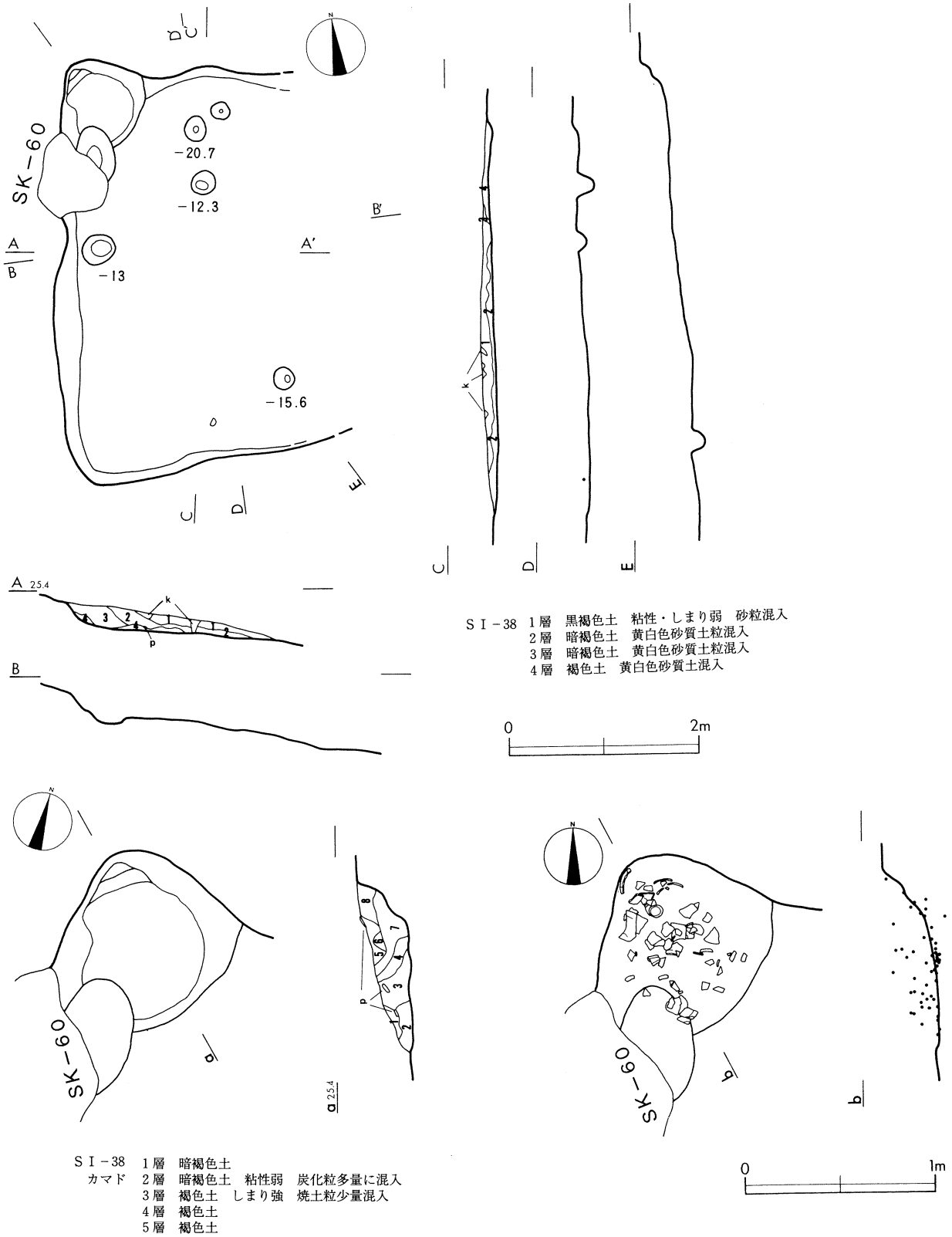
番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	出 土 状 況 ・ そ の 他
1	土師器	高台坏		(3.2)	7.7	橙	長石・石英・雲母	良	３０	内面黒色処理・ヘラミガキ 底面は回転ヘラ切りの後、高台と接合
2	須恵器	坏	14.4	6.1	6.0	橙	長石・石英・雲母	不良	９０	体部直線的に開く 体部下端手持ちヘラ削り 底面３方向の手持ちヘラ削り 底面に墨書「林田」
3	土師器	甕	(20.2)	(9.7)		橙	長石・石英・雲母	良	１０	頸部が括れ口唇部つまみ上げ 外面輪積痕 スス付着 内面ヘラナデ
4	土師器	甕	19.8	(6.5)		にぶい黄橙	長石・石英	良	5	頸部が括れ口唇部つまみ上げ 口唇部は粘土紐の貼付による
5	土師器	鉢	(19.8)	(3.5)		にぶい橙	長石・石英	良	5	頸部で緩く外反し、口唇部は舌状をなす 内面ヘラナデ・黒色
6	須恵器	甑		(16.2)	(14.3)	にぶい褐	長石・雲母・赤色粒	不良	３０	底面が多孔式の甑 外面斜め方向の平行タタキ目 胴部下半ヘラ削り 内面に当て具痕
7	土師器	甕		(22.0)	6.8	橙	長石・雲母・赤色粒	不良	４０	胴部下半をヘラ削りした後ヘラナデ 内面ヘラナデ 輪積痕 底部木葉痕
8	土師器	土製カマド	(21.8)	(39.9)		にぶい橙	長石・石英	良	４０	袖部から煙出し部へほぼ直立 袖部接地面平坦 煙出し部上面砂目痕・側縁ヘラ削り 胴部に穿孔
9	土師器	土製カマド		(33.8)		にぶい橙	長石・石英	良	３０	焚き口部分緩直立し厚み増す 胴部湾曲 外面輪積痕・ヘラナデ 内側ヘラ削り・ヘラナデ
12	石器	磨石類	長さ(10.8) 幅(6.5) 厚さ(6.1)重量550 石材 閃緑岩						一部欠損	下端部４ケ所敲打痕あり
13	鉄塊系遺物		長　2.6 幅 3.0 厚さ 1.6 重量 21.5						一部欠損	

第３８号住居跡〔旧第３５号住居跡〕（第79図・第78図No.１～２　ＰＬ８・33）

位置　調査区南方の、標高25.00m付近の斜面地である、Ｖ－33・34区から確認されている。本遺構は第60号土坑と重複関係にある。周辺には第１・３号掘立柱建物跡が存在する。　**規模と平面形**　一辺約４ｍの方形を呈するものと思われ、北西隅にカマドが作られている。　**主軸方向**　Ｎ－85°－Ｗ　**壁**　壁高は西側で約10cmであり、東側の壁は遺存していない。　**床**　緩く傾斜して東側に下がっている。床面は部分的に硬化面が確認された。壁溝は確認されていない。　**ピット**　ピットは住居内に５ヶ所確認されたが、いずれも主柱穴とは考えがたい。　**カマド**　北西隅に住居の隅を利用して主軸90cmの掘り込みを持ち、幅は約100cmである。焚口部は床面より数cm掘り込まれ、皿状を呈している。カマドの袖部は遺存していない。



第78図　第38号住居跡出土遺物実測図



SＩ－38　1層　黒褐色土　粘性・しまり弱　砂粒混入
　　2層　暗褐色土　黄白色砂質土粒混入
　　3層　暗褐色土　黄白色砂質土粒混入
　　4層　褐色土　黄白色砂質土混入

SＩ－38　1層　暗褐色土
カマド　2層　暗褐色土　粘性弱　炭化粒多量に混入
　　3層　褐色土　しまり強　焼土粒少量混入
　　4層　褐色土
　　5層　褐色土
　　6層　褐色土　粘性弱　焼土粒・炭化粒少量，白黄色粘土・砂粒混入
　　7層　暗褐色土　炭化粒少量混入
　　8層　褐色土　しまり強　粘性弱　焼土粒・炭化粒少量混入

第79図　第38号住居跡実測図

覆土　4層から構成され、各土層には地山の砂が混入している。　**遺物**　遺物はカマドから小破片が出土したが、実測に耐え得るものは少ない。No.1・2は土師器坏で、No.1は内面黒色処理のされている坏である。No.2は墨書土器で底面に部分的ではあるが「禾」？が書かれている。　**所見**　本住居跡の時期は平安時代9世紀中葉のものと思われる。

第38号住居跡出土遺物

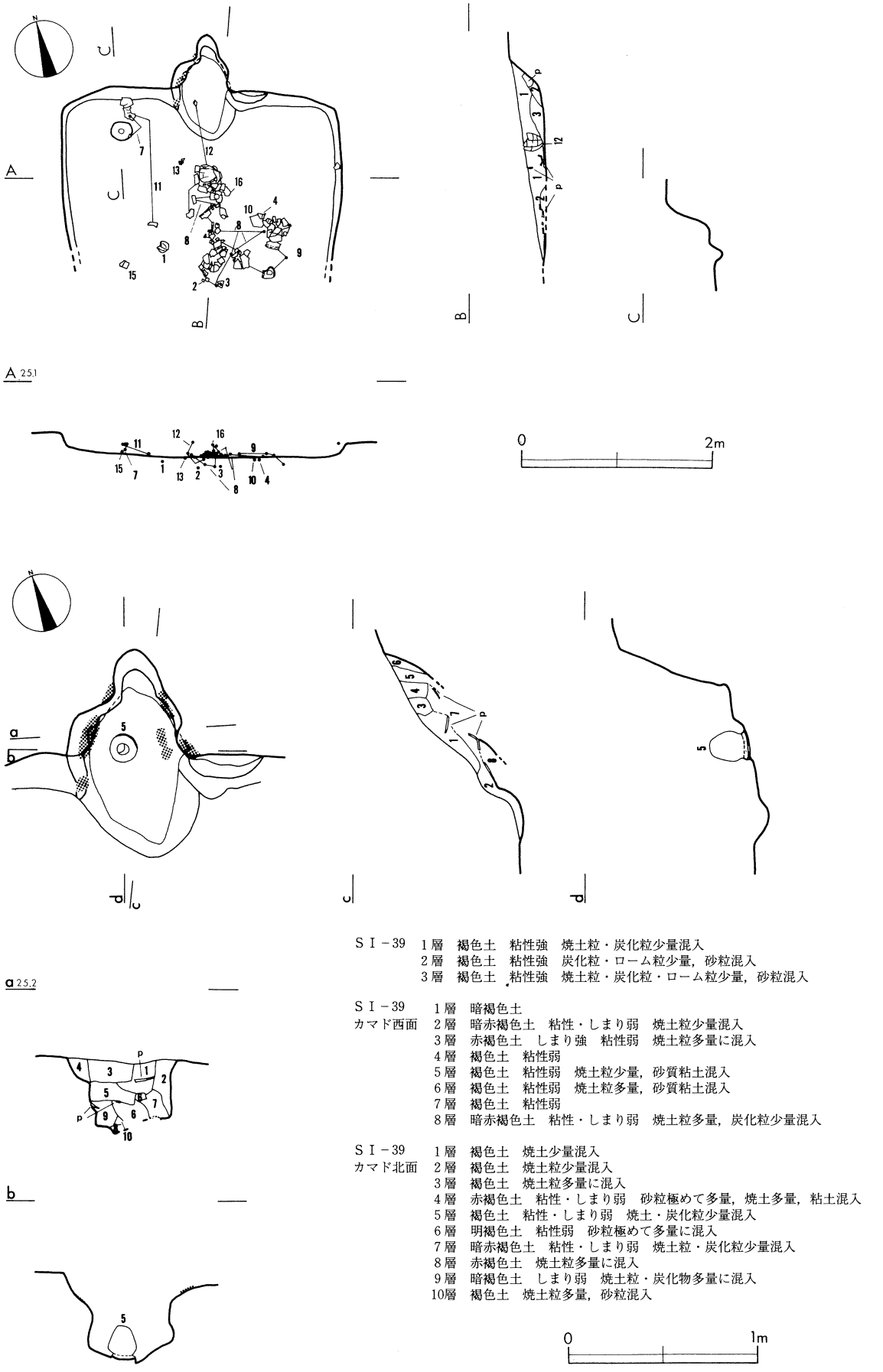
番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	出土状況・その他
1	土師器	坏		(2.0)	(7.2)	明褐	石英・雲母	良	20	内面黒色処理・ヘラミガキ 回転ヘラ切りの後底面2方向手持ちヘラ削り
2	土師器	坏		(0.5)	(6.0)	にぶい橙	石英・雲母	普	10	体部下端手持ちヘラ削り 底面手持ちヘラ削り 底面に墨書「禾」?

第39号住居跡〔旧第36号住居跡〕（第80図・第81・82図No.1～17　PL8・24・31）

位置　調査区南方の、標高24.50m付近の斜面部に、S－35・36区から確認されている。周辺には第28号住居跡、第3号掘立柱建物跡が存在する。　**規模と平面形**　規模は一辺約3mの方形を呈するものと考えられ、北壁中央にカマドが作られている。住居跡は傾斜地に存在するため南壁は遺存していない。　**主軸方向**　N－16°－E　**壁**　壁高は北側で60cmを測る。　**床**　大部分はほぼ平坦であるが南側に緩く傾斜して下がっている。床面は全面にわたり硬化していた。壁溝は確認されていない。　**ピット**　ピットは住居内に北壁寄りに1ヶ所確認され、円形で深さは約11cmを計る。同ピットは柱穴か否か不明である。住居壁の外側にも柱穴らしいものは確認されなかった。　**カマド**　北壁の中央に壁外約60cmの掘り込みを持ち、全体の長さは1.1mで、幅は約70cmである。焚口部は床面より約6cm掘り込まれ、皿状を呈している。袖部は遺存していない。カマドの奥壁は被熱し赤変した部分も見られた。火床部のやや上方には、土師器小型甕を逆さにし、支脚の代わりにしたものが出土した。甕の内部には砂質粘土が充填されていた。　**覆土**　3層から構成され、いずれも褐色土を呈する。それぞれの土層に地山の砂が混入している。　**遺物**　多くの遺物は床面近くかやや浮いて出土している。遺物はNo.1～No.3の須恵器坏やNo.7の須恵器蓋が出土した。住居内から出土した他の須恵器は坏・高台坏・蓋・鉢・鉄鉢形土器破片が出土している。土師器ではNo.4～6・8～12の甕が出土している。No.12の甕の胴部には墨書で「丈部真麿」とその下に判読不明な数文字が書かれている。この甕は住居内の中央部から逆位で割れながらも形を残して出土した。カマド内の小破片と接合している。No.7の須恵器蓋は内側に墨痕が残り転用硯と

第39号住居跡出土遺物

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特徴・その他
1	須恵器	杯	(12.9)	4.7	8.0	褐灰	長石・石英・雲母	良	70	底面4方向の手持ちヘラ削り 体部下端手持ちヘラ削り 内面ヒダスキ 器高が高い
2	須恵器	杯	(10.1)	3.6	(5.3)	褐灰	長石・石英・雲母	普	40	底面一方向の手持ちヘラ削り 体下端ヘラ削り 内面重ね焼きの痕跡
3	須恵器	杯		(1.7)	6.0	褐灰	長石・石英・雲母	普	20	底面回転ヘラ切り・一方向の手持ちヘラ削り 体部下端手持ちヘラ削り 外面ヒダスキ
4	土師器	小型甕	(12.6)	(4.9)		浅黄橙	長石・石英	普	10	頸部が括れ、口唇部が丸みを持つ 口縁部から頸部までナデ
5	土師器	小型甕	15.9	17.4	6.9	橙	長石・石英・雲母	良	95	頸部が括れ口縁部が張り出す 底部一部欠損 胴部下半横方向の削り 底部木葉痕 転用支脚
6	土師器	小型甕	(14.6)	(5.0)		浅黄橙	長石・石英・雲母	普	10	口縁部から頸部横ナデ 頸部が屈曲し、口唇部をつまみ上げる
7	須恵器	蓋	(15.0)	(2.1)		黄灰	長石・石英・雲母	良	40	つまみが欠損 縁辺に返りが付く 外面体部途中まで回転ヘラ削り 内面墨付着 転用硯
8	土師器	甕	20.4	32.7	7.4	橙	長石・石英	普	60	頸部下に最大径を持つ 口縁部から頸部横ナデ 胴部下半横方向の削り 底面砂目痕
9	土師器	甕	(21.2)	32.6	8.0	橙	長石・石英・雲母	普	50	胴部上半に最大径 胴部中央から下端にかけ縦方向の磨き 内面ヘラナデ 輪積痕有 底面砂目痕
10	土師器	甕	(25.2)	(9.4)		明黄褐	長石・石英・雲母	良	10	頸部の屈曲大きく、口縁部が水平に張り出す 口唇部外傾する 胴部に丸みを持つ器形?
11	土師器	甕	(17.8)	(18.6)		にぶい橙	長石・石英・雲母	普	30	頸部の括れが緩い 口唇部外側に摘れる 胴部下半削りの後、縦方向のミガキ 内面指頭痕
12	土師器	甕	19.2	(31.8)		にぶい橙	長石・石英	普	80	底部欠損 頸部下に最大径を持つ 胴部下半ヘラ削り 胴部に墨書「丈部真麿［ ］」と墨痕あり
13	土製品	瓦塔	(6.1)	(4.3)	(0.9)	浅黄橙	石英	やや軟		土師質 瓦塔の宝珠・竜車部 内面に径1cmの穴があく 破面の四方に水煙装着のための凹み
14	土製品	瓦塔	(5.4)	(3.0)	0.8	浅黄橙	石英	やや軟		土師質 瓦塔水煙の一部 No.13の下部 四方の水煙を押さえる部分
15	土製品	瓦塔	(8.3)	(6.6)	1.5	にぶい橙	小礫・雲母			初重以外の壁部分
16	土製品	不明	最大長(9.3) 最大幅(7.1) 最大厚さ 0.6 重量(49.5) 橙						一部欠損	土師器甕胴部片を再利用し一部に抉りがある
17	土製品	不明	最大長 4.6 最大幅 6.0 最大厚さ 0.6 重量 21.9 にぶい橙						100	土師器甕胴部片を再利用し一部に抉りがある

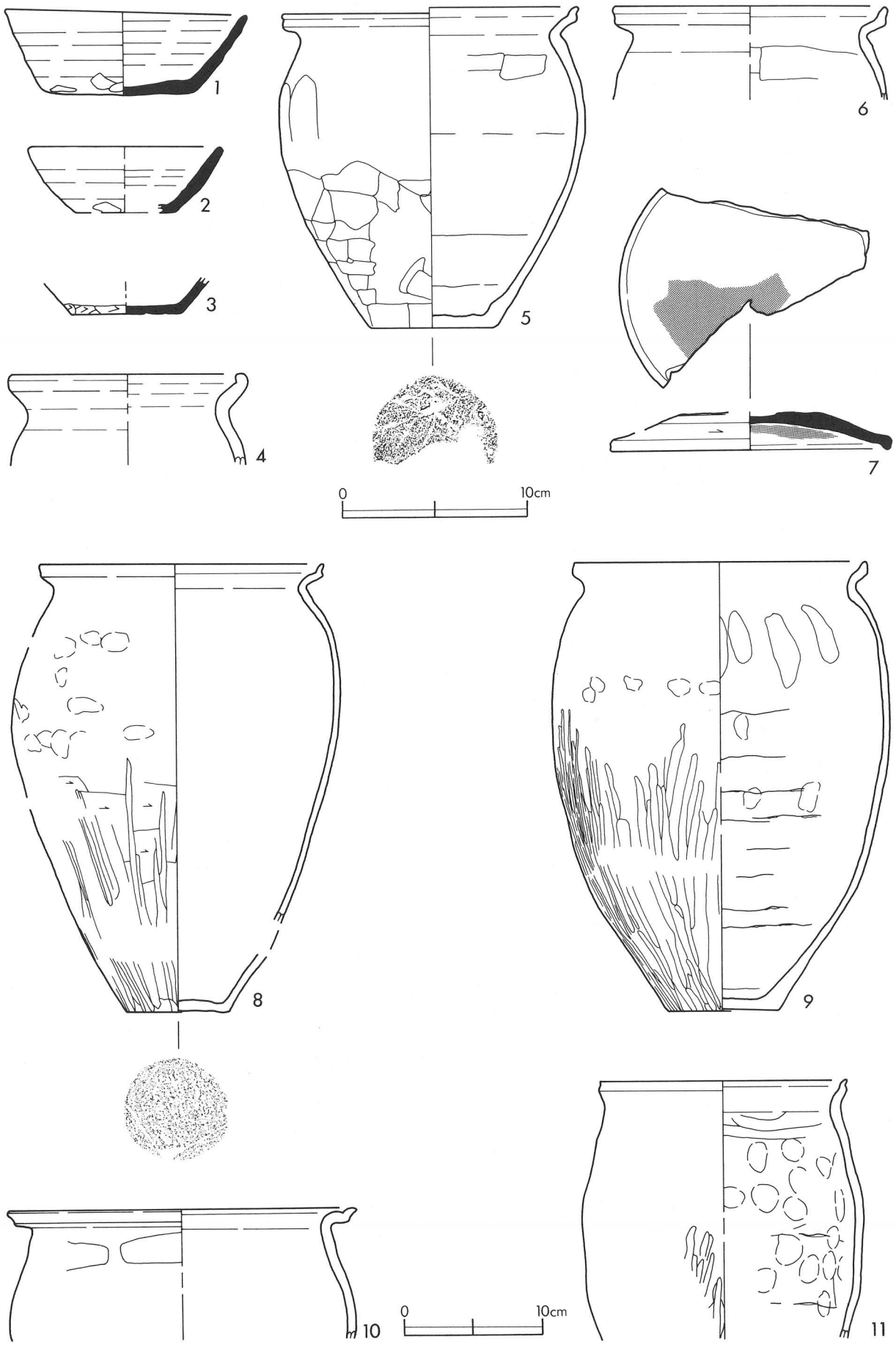


ＳＩ－39　1層　褐色土　粘性強　焼土粒・炭化粒少量混入
　　2層　褐色土　粘性強　炭化粒・ローム粒少量，砂粒混入
　　3層　褐色土　粘性強　焼土粒・炭化粒・ローム粒少量，砂粒混入

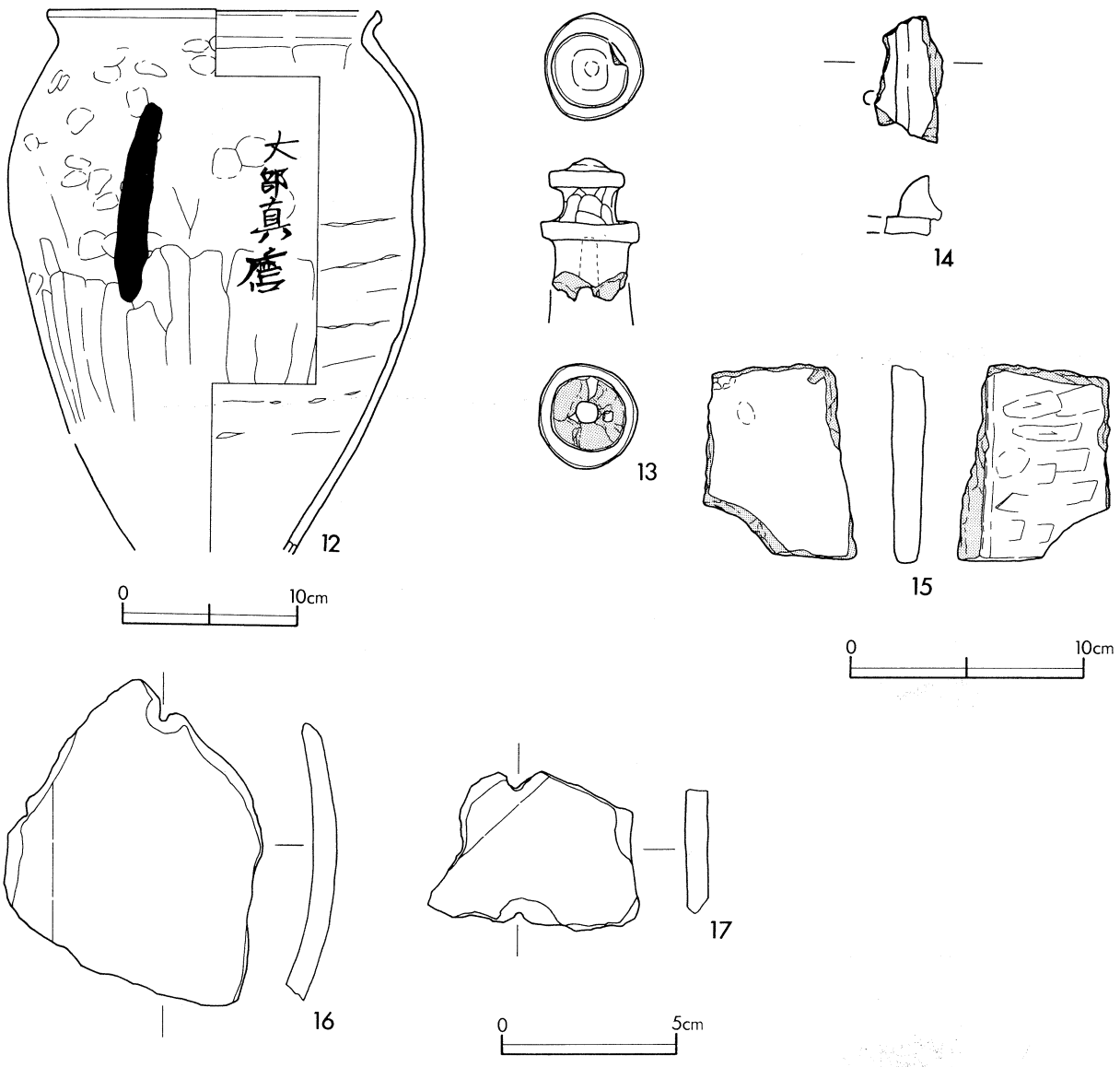
ＳＩ－39　1層　暗褐色土
カマド西面　2層　暗赤褐色土　粘性・しまり弱　焼土粒少量混入
　　3層　赤褐色土　しまり強　粘性弱　焼土粒多量に混入
　　4層　褐色土　粘性弱
　　5層　褐色土　粘性弱　焼土粒少量，砂質粘土混入
　　6層　褐色土　粘性弱　焼土粒多量，砂質粘土混入
　　7層　褐色土　粘性弱
　　8層　暗赤褐色土　粘性・しまり弱　焼土粒多量，炭化粒少量混入

ＳＩ－39　1層　褐色土　焼土少量混入
カマド北面　2層　褐色土　焼土粒少量混入
　　3層　褐色土　焼土粒多量に混入
　　4層　赤褐色土　粘性・しまり弱　砂粒極めて多量，焼土多量，粘土混入
　　5層　褐色土　粘性・しまり弱　焼土・炭化粒少量混入
　　6層　明褐色土　粘性弱　砂粒極めて多量に混入
　　7層　暗赤褐色土　粘性・しまり弱　焼土粒・炭化粒少量混入
　　8層　赤褐色土　焼土粒多量に混入
　　9層　暗褐色土　しまり弱　焼土粒・炭化物多量に混入
　　10層　褐色土　焼土粒多量，砂粒混入

第80図　第39号住居跡実測図

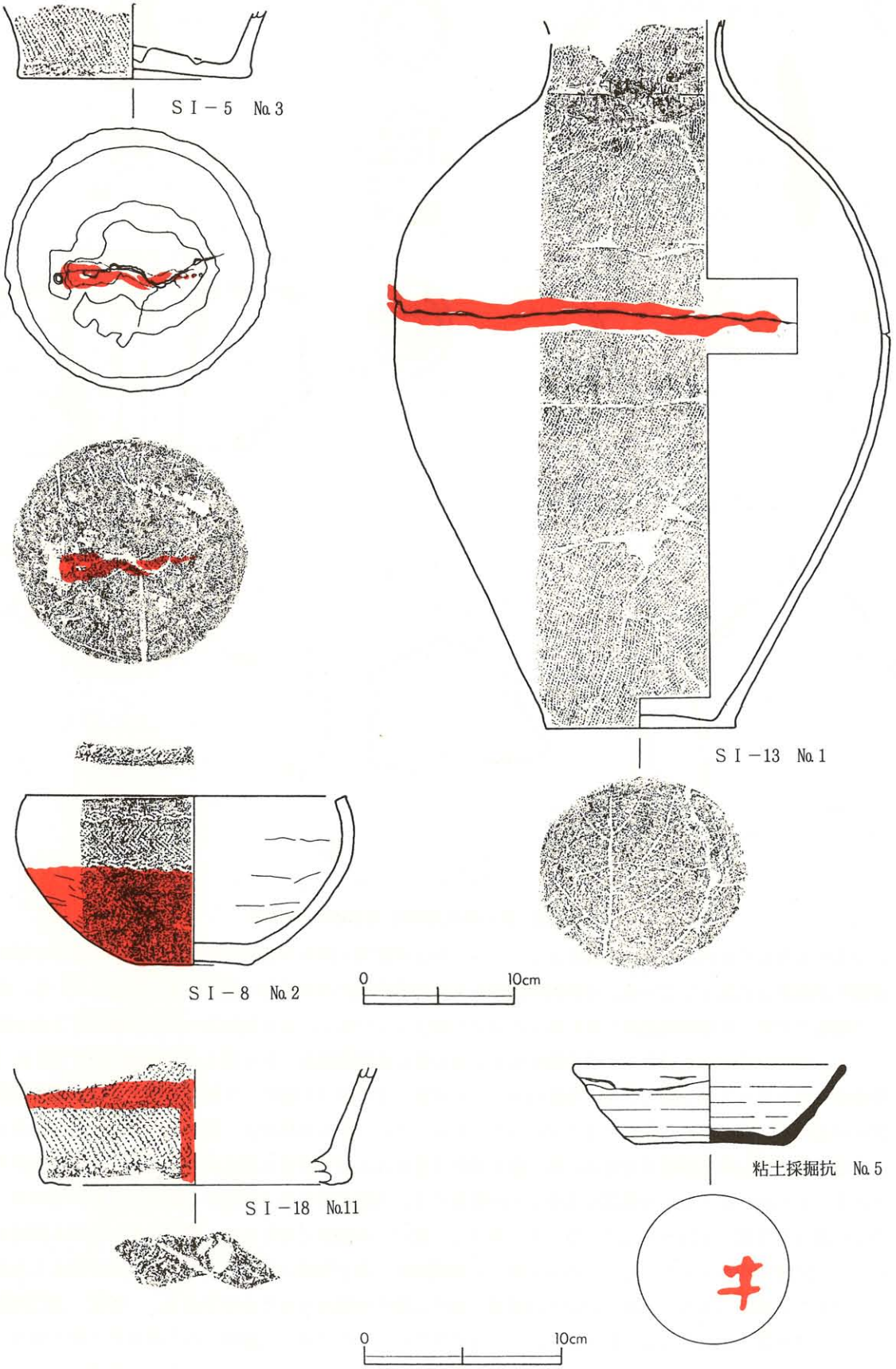


第81図　第39号住居跡出土遺物実測図(1)



第82図　第39号住居跡出土遺物実測図(2)

して使われたものと考えられる。図示はしていないが住居跡内1区から須恵器鉄鉢形土器の口縁部小破片や胴部破片が合計3点出土している。この内の胴部片1点は被熱のためか表面・断面ともに赤化している。出土した土師器の中で、内面黒色処理された坏などは全く出土していない。この他No.13～15の瓦塔破片3点が出土している。No.13は住居内のほとんどの遺物を取り上げた後に住居床面近くから出土した相輪部破片である。宝珠、龍車が一体となって作られている。整形はロクロナデ後、宝珠部分下端にヘラ削りを施す。龍車部分下端は水煙部分となる。龍車部分下端部に十字状の凹みがあることから本瓦塔水煙は、龍車にはめ込むものであったことがわかる。No.14は水煙部分である。粘土版水煙がT字状または十字状に組み合わされていたことを示す資料である。粘土版に穿たれた水煙透し孔が1ヶ所残存する。水煙を押さえ込む破片と接合したものである。これらは住居内の3区と4区から出土している。No.15は二重以上の軸部と考えられ、端部は折れ曲がる痕跡が見られる。2区覆土中から出土した。これらは胎土の雰囲気から第2号掘立柱建物跡の西側の溝で出土したものと同一のものと考えられる。No.16・17は土師器甕の破片に抉りが加えられたものである。　**所見**　本住居跡から出土した須恵器の鉄鉢形土器の胴部破片2点は南西埋没谷出土の「佛」と墨書された鉄鉢形土器と接合した。本住居跡は瓦塔相輪部分の出土から掘立柱建物跡群との関連や、鉄鉢形土器の出土から南西埋没谷との関連がうかがわれる。本住居の時期は出土した遺物から、平安時代9世前葉から中葉のものと考えられる。



第83図　赤彩土器・朱書土器実測図

3．土坑

土坑は全部で60基確認されている。これらのものの中には同様な形態や同様な時期のものが存在する。そのため、その特徴的なものについて述べることにする。その他については一覧表にまとめ実測図を掲載する。

第２号土坑（旧第６２号土坑）（第84図・第85図No.１～３　ＰＬ８・24）

位置　調査区北方、標高25.50mの常総粘土層が遺構確認面となる緩斜面地で、Ｉ－５・６区から確認された。**規模と平面形**　長径が2.25m、短径が1.15mの楕円形を呈する。深さは底面まで完掘していないため不明。**長軸方向**　Ｎ－63°－Ｗ　**壁面**　粘土層を掘り込み、外傾しながら開く。　**底面**　完掘していないため不明。**覆土**　粘性の強い暗褐色土層が堆積していた。　**遺物**　遺物は土坑が一定埋まった段階で投棄されたものと考えられる。ほぼ完形に近い土師器甕が３個体寄り添うように出土した。No.１は胴が張り、口縁部の屈曲が激しい特徴を持つ甕である。　**所見**　遺物から奈良・平安時代のものと考えられる。

第２号土坑出土遺物

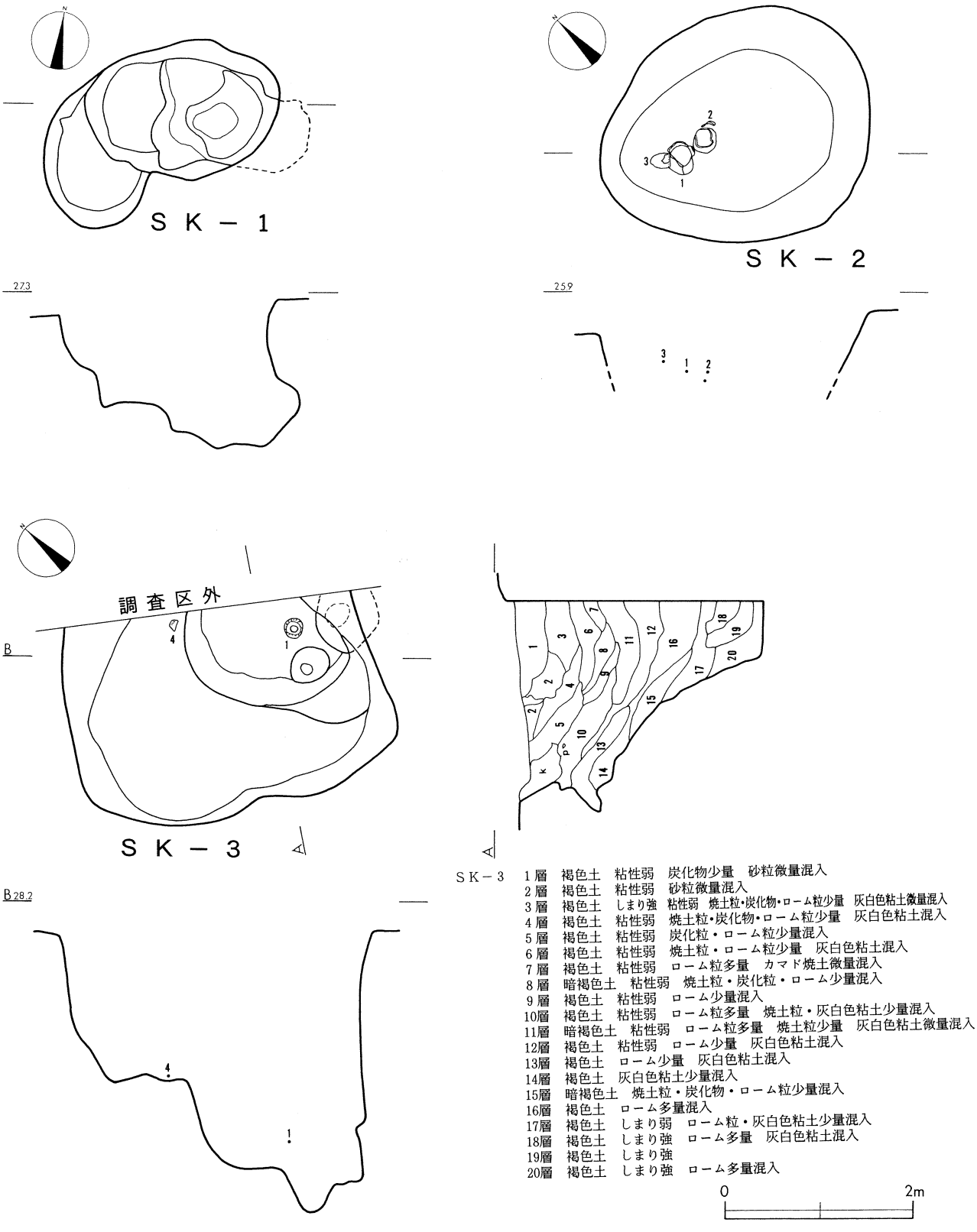
番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	土師器	甕	23.7	31.3	9.2	にぶい褐	長石・石英	不良	９０	口縁部が水平に張り出し、胴部中央が張る 胴下半縦のヘラミガキ 内面ヘラナデ 底面木葉痕
2	土師器	甕		(25.0)	9.4	にぶい褐	長石・石英	不良	３０	胴部上半に最大径を持つ 外面胴下半ヘラミガキ 内面ナデ 底面木葉痕
3	土師器	小型甕	15.9	18.4	6.4	にぶい褐	長石・石英・赤褐粒	普	９７	頸部緩く括れ 外面胴部下半ヘラ削り 内面ナデ

第３号土坑（旧第４６号土坑）（第84図・第86図No.１～15　ＰＬ８・25・31）

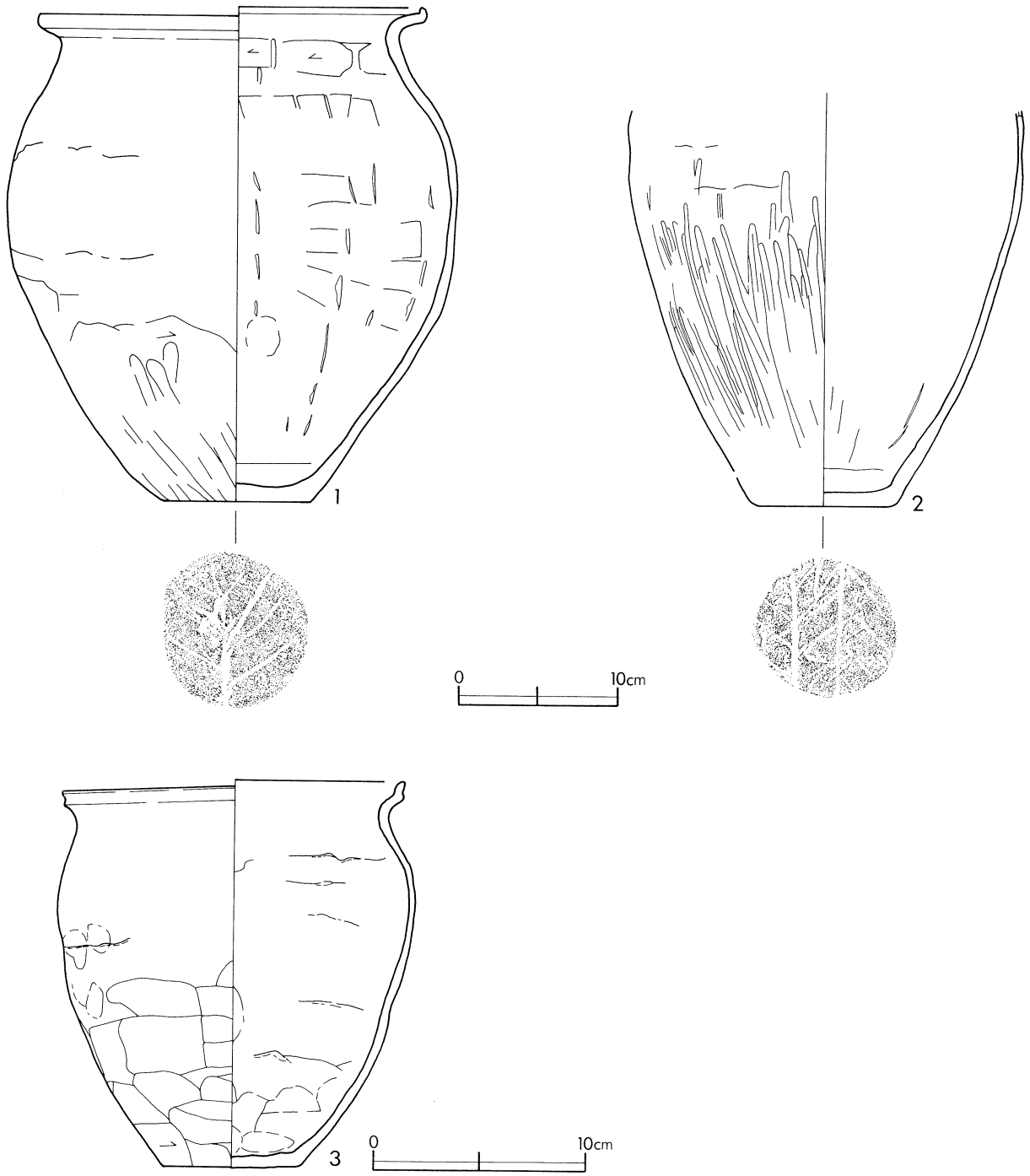
位置　調査区北方のエリア境界、標高28.00mの台地上で、Ｑ・Ｒ－５区から確認された。　**規模と平面形**　完掘には至っていないため平面形の全容は不明であるが、現状で長径が2.91m、短径が（2.2）ｍの不整円形を呈する。深さは最深部まで約３ｍを測る。　**長軸方向**　不明　**壁面**　粘土層を掘り込み、壁面は外傾しながら開く。途中に二段にわたりテラス状の段差がある。　**底面**　最深部は狭く、立っているのがやっとの状態であり、地下水がしみ出した。　**覆土**　覆土中の第４・９・10～12層中には焼土粒が含まれ、下層の堆積状況とやや異なる。他の多くの土層中には灰白色粘土粒が含まれる。　**遺物**　遺物は古墳時代中期の土師器と平安時代の土師器・須恵器などが出土している。遺物は最深部近くからはNo.１の土師器壺の口縁部が出土し、上段のテラスからはNo.４の椀形土器が出土した。奈良・平安時代の遺物のほとんどは上層から出土し、No.１・４が出土した土層からは平安時代の遺物は出土していない。　**所見**　最深部から古墳時代中期の土器が出土しており、上層からは奈良・平安時代の遺物が出土している。この土坑は覆土に焼土が含まれる部位までと、その下層で遺構の重複関係が存在するのものと思われる。

第３号土坑出土遺物

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	土師器	壺	19.0	(5.8)		灰褐	長石・石英・赤色粒	普	２０	口縁部が有段口縁をなし頸部が屈曲する 有段部には指頭痕残る 内外面ナデ
2	土師器	坩		(4.3)		にぶい褐	長石・石英・雲母	普	１０	外面ヘラ削りの後ナデ・ミガキ 内面輪積痕 No.3と同一個体
3	土師器	坩		(5.0)		にぶい褐	長石・石英・雲母	普	２０	胴部潰れた球形 外面ヘラ削りの後ナデ・ミガキ 内面輪積痕・指頭痕 No.2と同一個体
4	土師器	椀	(13.1)	(6.7)	(5.8)	灰黄褐	石英粒・雲母	普	５０	口唇部外反 外面口縁下に輪積痕・ナデ痕 内面口縁下に指頭痕・縦位のヘラナデ 底面ヘラ削り
5	土師器	坩	(13.0)	(4.3)		にぶい褐	長石・石英粒・雲母	普	１０	頸部から直線的に開く口縁部 口唇部外側に捲れる 外面ナデ・ミガキ No.2・3と同一個体
6	土師器	高坏		(6.0)	11.7	橙	石英粒	普	４０	脚部据が屈曲して広がる 外面指頭痕 外面縦位のミガキ 内面輪積み痕・指頭痕
7	土師器	甕		(22.0)	11.4	橙	長石・石英・雲母	普	３０	胴部上半に最大径をもつ 外面ヘラミガキ 内面ヘラナデ 底面木葉痕
8	土師器	甕	(20.2)	(12.5)		にぶい橙	長石・石英・雲母	普	２０	頸部が緩く括れ、口唇部が立つ 外面指頭による整形 内面ヘラナデ
9	土師器	甕	(19.6)	(12.5)		橙	長石・石英・雲母	普	２０	頸部が緩く括れ、口唇部が立つ 外面指頭痕・ナデ 内面ヘラ痕・ナデ
10	須恵器	甕	(22.0)	(5.5)		灰	長石・石英	良	5	外反する口縁部 外面ナデ 口唇部下有段部あり 内面ナデ 口唇部に縄文圧痕
11	土師器	高台坏		(3.2)	(9.0)	にぶい橙	長石・石英・雲母	普	３０	体部に稜を持つ 内面黒色処理・ミガキ 底面回転ヘラ切り
12	須恵器	高台坏		(2.2)	8.6	暗灰黄	長石・雲母	普	４０	底面回転ヘラ削り
13	須恵器	坏		(4.3)	(9.0)	褐灰	長石・石英・雲母	普	３０	底面一方向の手持ちヘラ削り 体部下端は擦れていて不明 底径がやや大きい
14	須恵器	蓋		(1.0)		灰黄	長石・石英・赤色粒	良	２０	上面に稜を持つ 上面に「＋」のヘラ描き有
15	石製品		長さ(8.1) 幅 5.6 厚さ(5.9) 重量(318)　石材 凝灰岩						一部欠損	4面が面取りされ、丁寧に磨かれている 13層出土



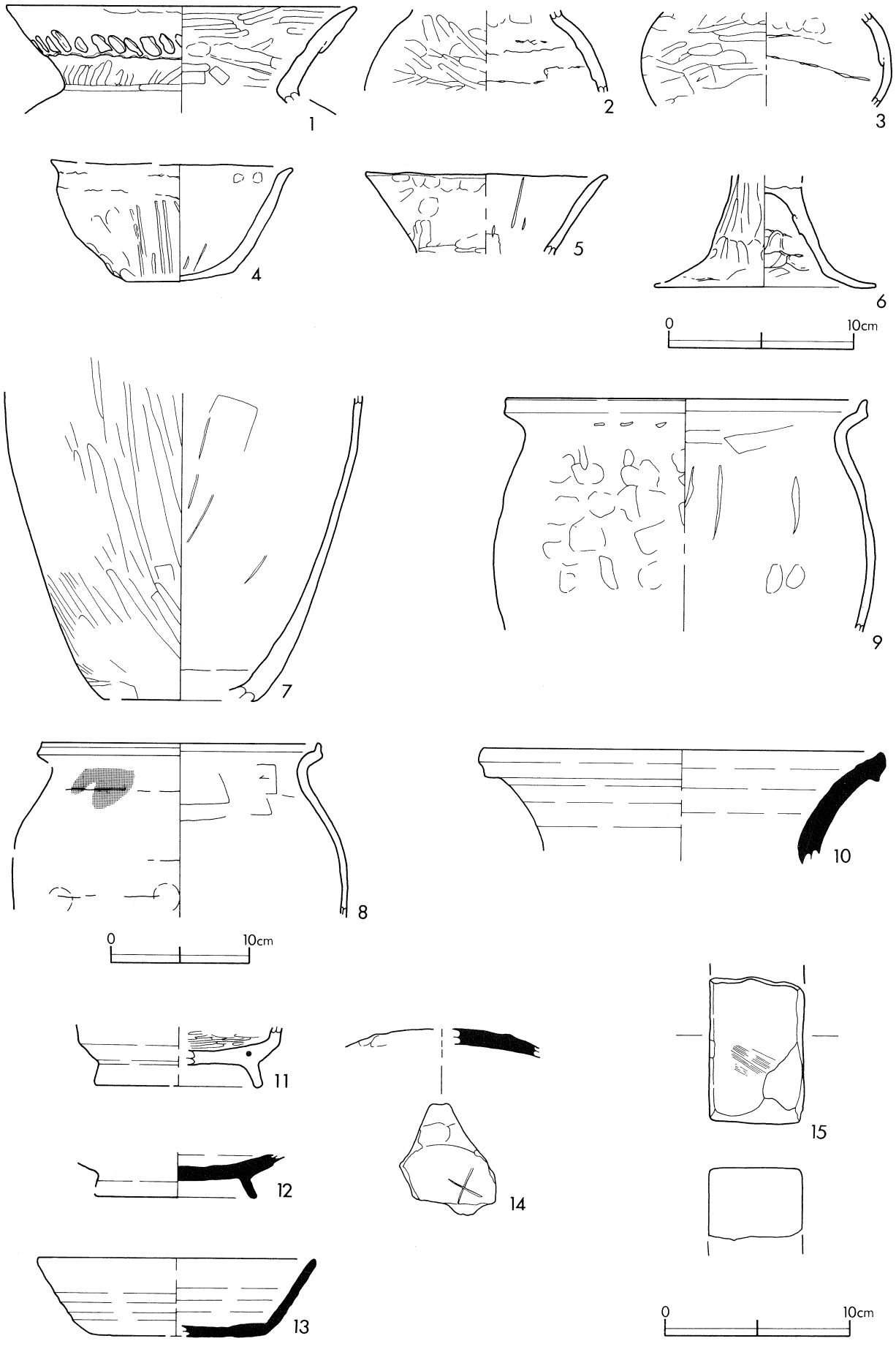
第84図 第１・２・３号土坑実測図



第85図　第２号土坑出土遺物実測図

第４号土坑（旧第５３号土坑）（第87図　ＰＬ25）

位置　調査区北方のエリア境界、標高28.00mの台地上で、Ｓ－６・７区から確認された。　**規模と平面形**　完掘には至っていないため平面形の全容は不明であるが、現状で長径が4.00mを越え、短径が3.5mの楕円形を呈する。深さは最深部まで約３mを越える。　**長軸方向**　Ｎ－16°－Ｅ　**壁面**　常総粘土層を掘り込み、壁面は上部がほぼ垂直に立上り、下部はオーバーハングしている。　**底面**　最深部は完掘には至っていないが、丸底を呈するようである。　**覆土**　上層は暗褐色土であるが、下層は粘質の褐色土が堆積していた。　**遺物**　遺物は上層から土師器・須恵器の破片が出土した。下層からの遺物は少ないが、底面から約30cm浮いて№３の須

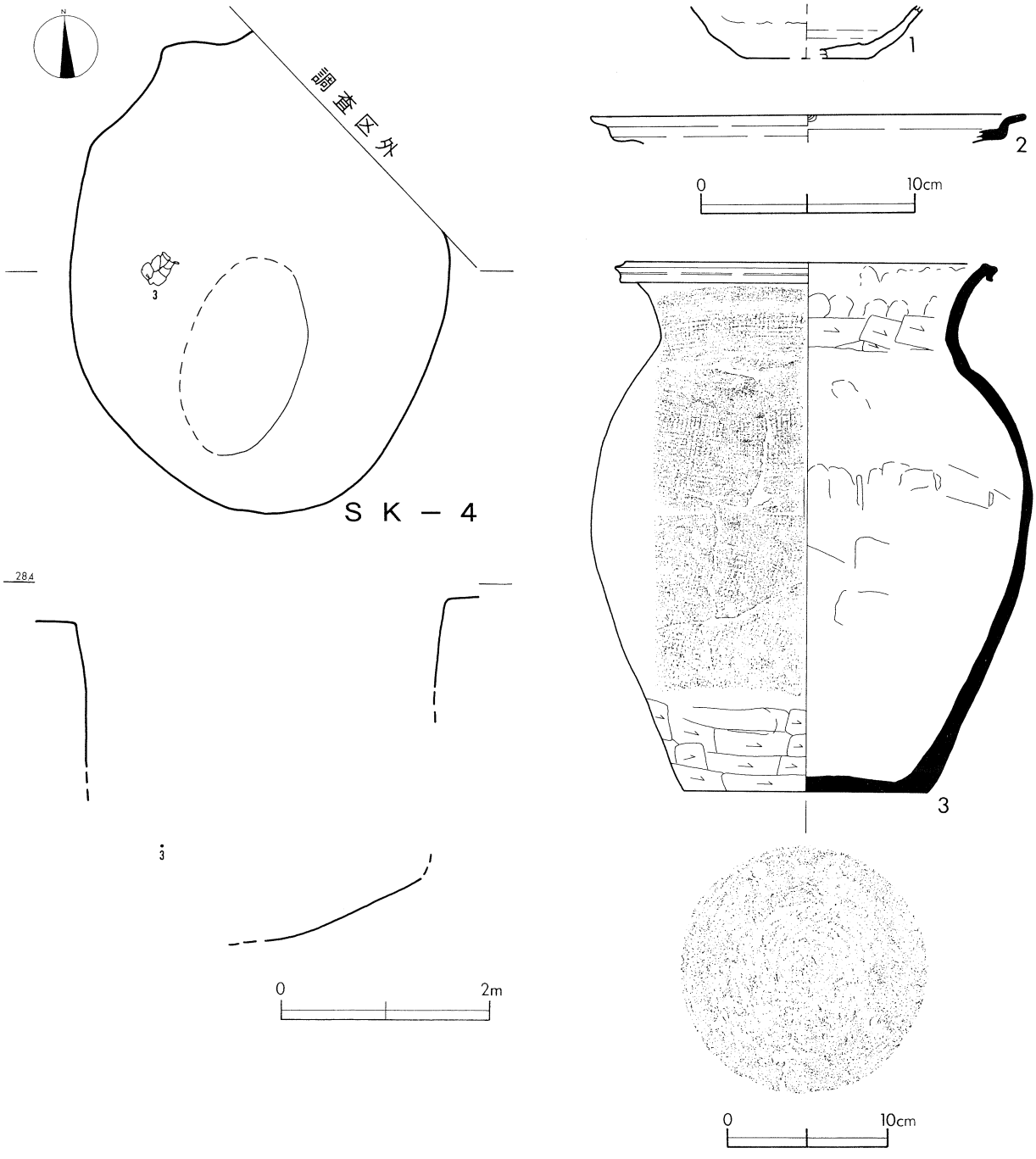


第86図　第３号土坑出土遺物実測図

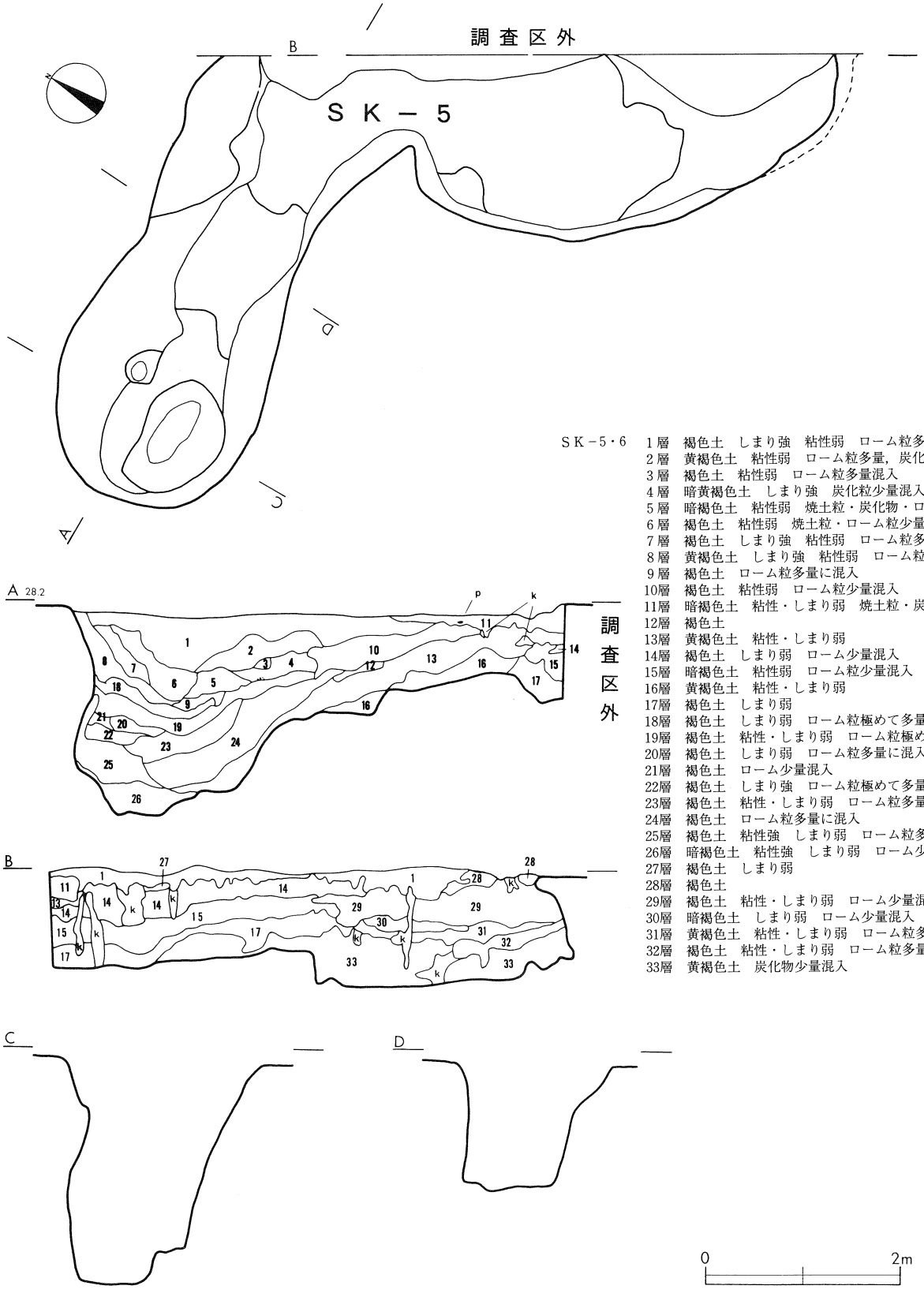
恵器甕が割れながらもほぼ完形で出土した。　**所見**　この土坑自体は奈良・平安時代のものと位置付けたい。

第４号土坑出土遺物

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	土師器	坏		(2.3)	6.0	橙	長石・石英・雲母	良	２０	内面一部黒色処理か 内外面ナデ
2	須恵器	甕？	(20.4)	(1.3)		にぶい黄橙	長石・雲母	不良	5	土師器甕のような口縁部のつくりに類似するが口唇部の外傾が大きい 器厚も薄い
3	須恵器	甕	22.3	33.1	15.2	にぶい赤褐	長石・石英・雲母	不良	９０	胴部上位に最大径を持つ頸部から胴部にかけ格子目のタタキ痕 底部側縁ヘラ削り 底面に圧痕



第87図　第４号土坑実測図・出土遺物実測図



SK－5・6

1層　褐色土　しまり強　粘性弱　ローム粒多量，焼土粒・炭化物少量混入
2層　黄褐色土　粘性弱　ローム粒多量，炭化粒少量混入
3層　褐色土　粘性弱　ローム粒多量混入
4層　暗黄褐色土　しまり強　炭化粒少量混入
5層　暗褐色土　粘性弱　焼土粒・炭化物・ローム粒少量混入
6層　褐色土　粘性弱　焼土粒・ローム粒少量混入
7層　褐色土　しまり強　粘性弱　ローム粒多量，炭化粒少量混入
8層　黄褐色土　しまり強　粘性弱　ローム粒極めて多量，炭化粒少量混入
9層　褐色土　ローム粒多量に混入
10層　褐色土　粘性弱　ローム粒少量混入
11層　暗褐色土　粘性・しまり弱　焼土粒・炭化粒少量混入
12層　褐色土
13層　黄褐色土　粘性・しまり弱
14層　褐色土　しまり弱　ローム少量混入
15層　暗褐色土　粘性弱　ローム粒少量混入
16層　黄褐色土　粘性・しまり弱
17層　褐色土　しまり弱
18層　褐色土　しまり弱　ローム粒極めて多量に混入
19層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒極めて多量に混入
20層　褐色土　しまり弱　ローム粒多量に混入
21層　褐色土　ローム少量混入
22層　褐色土　しまり強　ローム粒極めて多量に混入
23層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒多量に混入
24層　褐色土　ローム粒多量に混入
25層　褐色土　粘性強　しまり弱　ローム粒多量に混入
26層　暗褐色土　粘性強　しまり弱　ローム少量混入
27層　褐色土　しまり弱
28層　褐色土
29層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム少量混入
30層　暗褐色土　しまり弱　ローム少量混入
31層　黄褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒多量に混入
32層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒多量に混入
33層　黄褐色土　炭化物少量混入

第88図　第５・６号土坑実測図

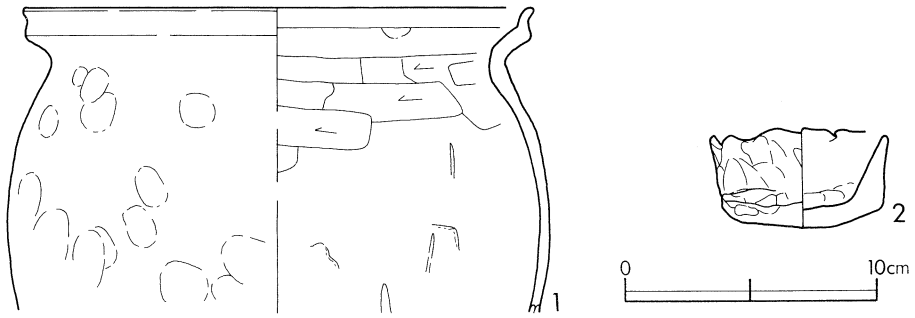
第５号土坑（旧第５２・５４号土坑）（第88図・第89図№１～２　ＰＬ９）

位置　調査区北方のエリア境界、標高28.00mの台地上で、Ｓ・Ｔ－８、Ｔ－９区から確認された。　**規模と**

平面形　二つの土坑により構成されるように見えるが、重複関係は見られず一つの遺構とした。完掘には至っていないため平面形の全容は不明であるが、現状では「く」の字に折れ曲がる形態を持つ。東西方向に主軸を持つ部分は東から西方向にスロープ状に落ち、関東ローム層を掘り抜いて白色の粗い砂層の最深部に至る。最深部は確認面から約２ｍを測る。北西・南東方向に主軸を持つ部分はハードローム層を底面とする。　**主軸方向**　前者はＮ－90°－Ｅで後者は不明である。　**壁面**　前者は底面より緩く開き、一部抉れている。後者はほぼ直に立ち上がる。　**底面**　前者の最深部は丸く狭い平坦面を持ち、後者はほぼ平坦である。　**覆土**　前者の土層の第１・２・４～６層には焼土・炭化物・粒を含む。底面近くには粘土や粗い砂粒を含む。　**遺物**　遺物は前者のスロープ部分から№２の手捏ね土器が出土した。　**所見**　この土坑自体は平安時代のものと位置付けたい。

第５号土坑出土遺物

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	土師器	甕	20.2	(12.1)		橙	長石・石英・雲母	普	３０	頸部緩く括れ、口唇部やや外傾して立つ 外面指頭痕・ナデ 頸部内面ヘラ痕・横ナデ
2	土師器	手捏ね土器	6.7	3.9	6.1	にぶい褐	長石・石英・赤色粒	良	１００	丸い偏平な粘土に粘土帯を１帯付けて成形 口縁部が部分的に撓れる 内外面に指頭痕



第89図　第５号土坑出土遺物実測図

第７号土坑（旧第５５号土坑）（第90図　ＰＬ９・31）

位置　調査区北方のエリア境界、標高28.00mの台地上で、Ｒ－8区から確認された。　**規模と平面形**　長径2.2m、短径1.33mの楕円形を呈する。底面が東側からスロープ状に傾斜し、急激に落ち込む。非常に狭い底面で丸底を呈する。最深部までの深さは2.26mである。　**主軸方向**　Ｎ－87°－Ｗ　**壁面**　東側は緩く落ち、西側は急激に落ちる。　**底面**　非常に狭く人が入って立つのがやっとの丸底。　**覆土**　上層に焼土・炭化物・粒が含まれる。　**遺物**　覆土中より胴部に穴の開いた土師器甕が出土した。　**所見**　この土坑自体は平安時代のものと考えられる。

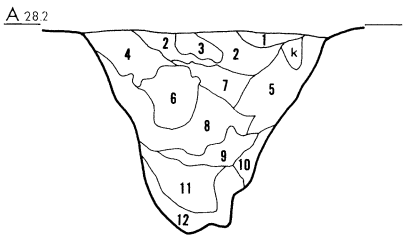
第７号土坑出土遺物

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	土師器	甕		(25.2)		にぶい橙	長石・石英	普	３０	外面に平行なタタキ痕 頸部指頭痕 胴部下半削り 内面輪積痕

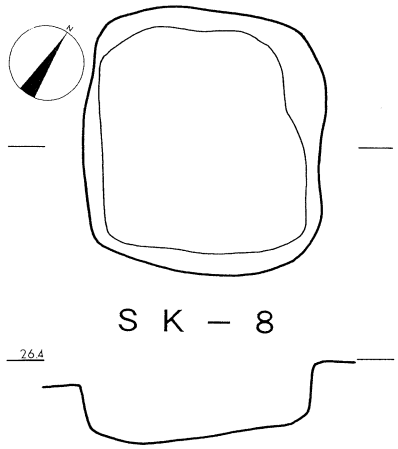
第９号土坑（旧第６６号土坑）（第90図　ＰＬ９・31）

位置　調査区北方の、標高24.25mの斜面地で、Ｅ－10区から確認された。　**規模と平面形**　長径1.8m、短径1.48mの楕円形を呈する。最深部までの深さは1.81mである。　**主軸方向**　Ｎ－12°－Ｅ　**壁面**　壁は急激に立ち上がる。掘り込みは粘土層を掘り込んでいる。　**底面**　全体に平坦であるが東側の壁際に小ピットがある。

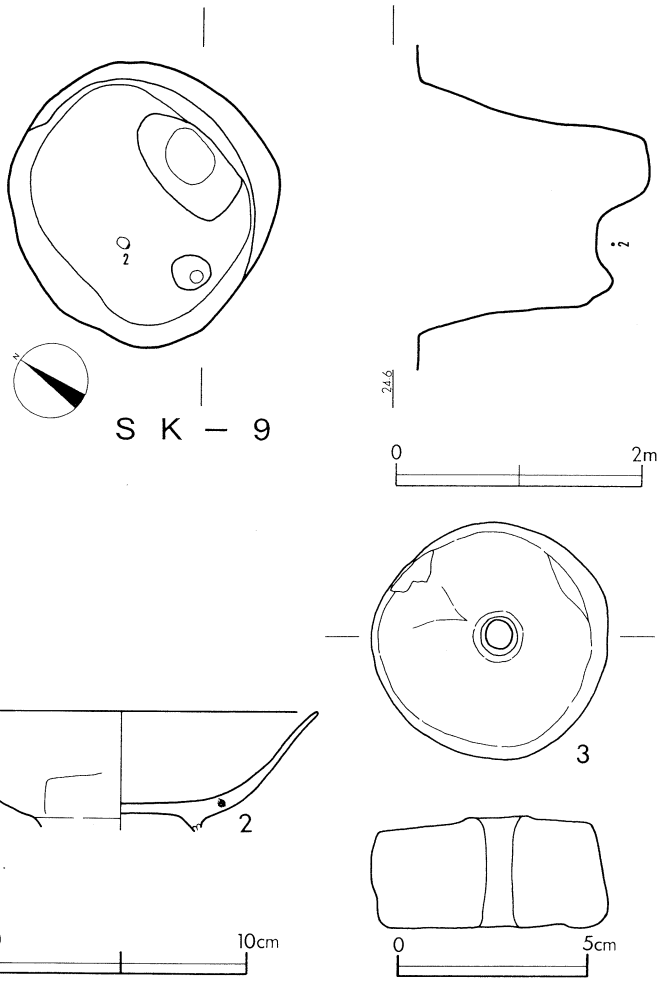
SK－7



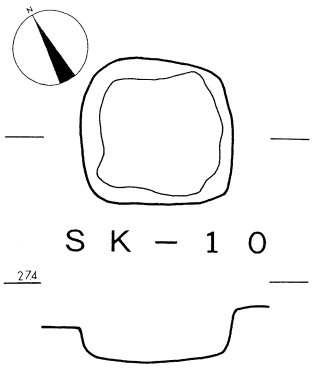
SK－7　1層　褐色土　しまり強　粘性弱　ローム粒少量混入
2層　褐色土　しまり強　粘性弱　ローム粒多量,焼土粒少量混入
3層　褐色土　ローム粒多量に混入
4層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒多量に混入
5層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒多量に混入
6層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒少量混入
7層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒多量に混入
8層　褐色土　粘性弱　ローム粒多量に混入
9層　褐色土　粘性弱　ローム粒多量に混入
10層　褐色土　ローム極めて多量に混入
11層　褐色土　ローム多量に混入



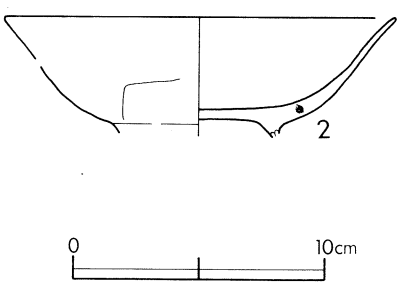
SK－8



SK－9



SK－10



第90図　第７・８・９・10号土坑実測図・出土遺物実測図

覆土　粘性の強い褐色土が堆積していた。　**遺物**　覆土中よりNo.３の紡錘車が出土し、No.２は伏せた状態で出土した土師器高台坏である。　**所見**　この土坑自体は平安時代のものと考えられる。

第９号土坑出土遺物

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
2	土師器	高台付坏	(15.5)	(4.7)		橙	長石・石英・雲母	不良	６０	内面黒色処理 器壁被熱し荒れる
3	土製品	紡錘車	上面径5.8 下面径6.1 最大厚2.8 重量129.3					普	１００	偏平な長方形の断面形を持ち、表面ナデ調整 穿孔方向は下面から

第１１号土坑（旧第６号不明遺構）（第91図・第92・93図No.１～19　ＰＬ９・26・27・32）

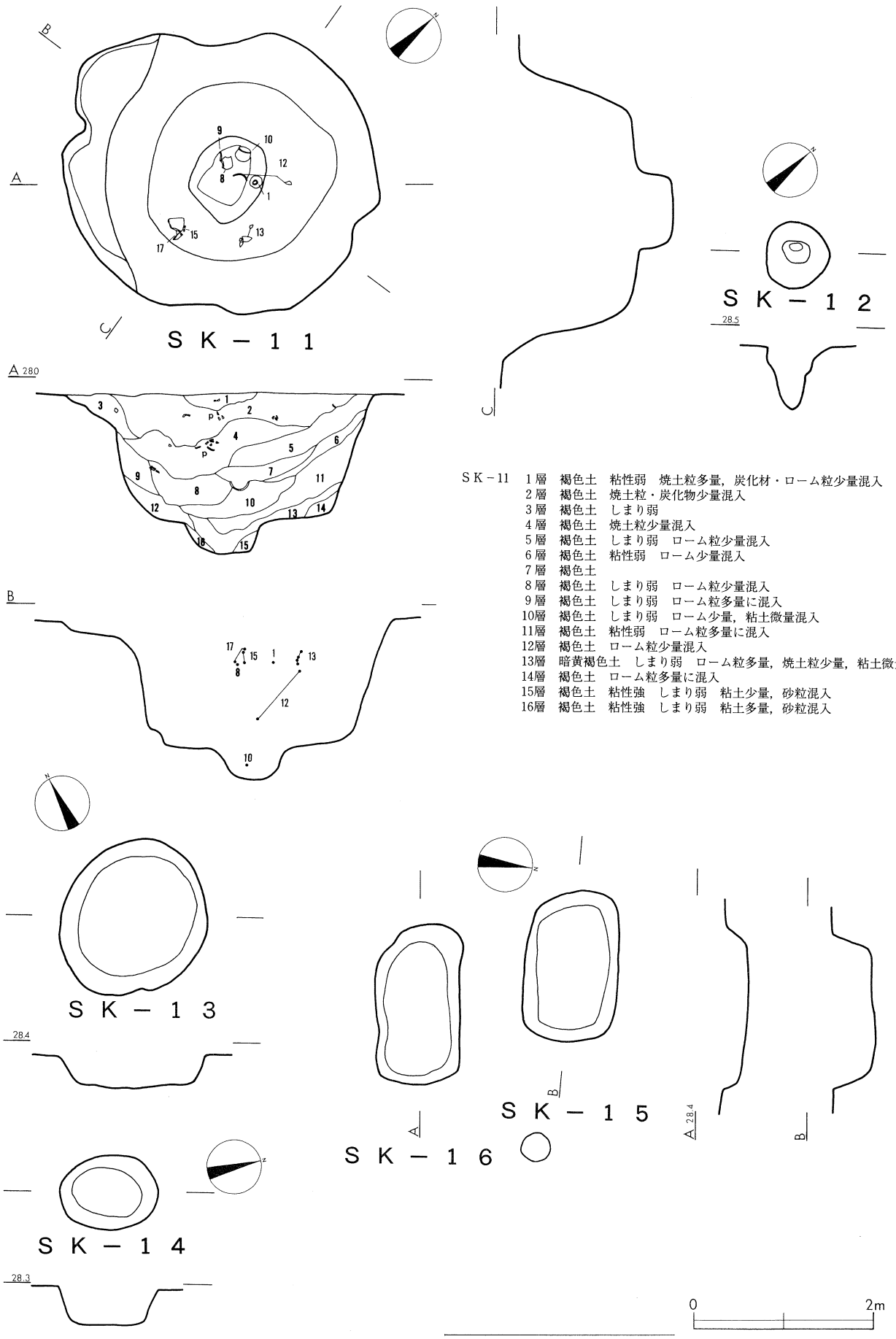
位置　調査区北方の、標高28.25mの台地と斜面地の変換点で、Ｌ，Ｍ－11区から確認された。　**規模と平面形**　平面形は直径約2.9mの円形を呈し、底径は約2.0mの円形を呈する。底面には楕円形の小ピットが存在する。底面までの深さ1.47mで最深部までは1.77mである。　**主軸方向**　小ピットの主軸で底面のＮ－24°－Ｗ　**壁面**　壁は急激に立ち上がる。掘り込みはほとんど関東ローム層中で終わる。　**底面**　全体に平坦であるが中央に長径90cm、短径75cm、深さ30cmの小ピットがある。　**覆土**　上層ほど焼土粒が含まれ下層ほどローム粒が多く含まれる。　**遺物**　覆土上層の第１～４層中より多量の土器等の遺物が出土した。No.10の土師器甕のみ底面中央の小ピットから出土した。　**所見**　この土坑自体は８世紀後半期のものと位置付られる。No.10の土師器甕を除き他の遺物は、本遺構が埋まりつつある段階で大量に投棄されたものと思われる。本遺構底面の小ピット底面近くの土層をサンプリングし珪藻分析を行なったところ、淡水産珪藻化石が確認された。（第４章　考察　第11号土坑の珪藻分析　参照）

第１１号土坑出土遺物

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	須恵器	坏	13.8	4.4	7.0	明黄褐	長石・雲母・赤色粒	普	１００	口縁部楕円形 口唇部肥厚し外反 体部下端手持ちヘラ削り 底面回転ヘラ切り・手持ちヘラ削り
2	須恵器	坏	14.0	4.4	8.3	灰	長石	良	９５	口唇部微妙に外反 底面回転ヘラ切り・２方向の手持ちヘラ切り 体部下端手持ちヘラ削り
3	須恵器	坏	12.9	4.3	7.2	灰	長石	良	９０	口縁部下やや凹む 体部下端手持ちヘラ削り 底面多方向手持ちヘラ削り 外面にヒダスキ
4	須恵器	坏	14.2	4.4	8.0	灰	長石・石英	良	９０	口唇部下からやや開く 体部下端回転ヘラ削り 底面回転ヘラ切り・回転ヘラ削り
5	須恵器	高台盤		(3.5)	11.0	黄灰	長石・雲母	不良	７０	口縁部が屈曲して立ち上がる 底面不明瞭ながら回転ヘラ削り 内面中央凹む
6	須恵器	高台盤		(3.0)	13.6	黄灰	長石・雲母	普	７０	口縁部屈曲する 底面高台取り付け前に回転ヘラ削り・高台の内外に痕跡 高台「ハ」の状に開く
7	須恵器	壺		(6.3)	8.6	灰黄	長石・黒色粒	良	４０	厚手の底部 底面回転ヘラ切りか 底面と外面に不明瞭ながら自然釉付着
8	須恵器	長頸壺		(17.6)	10.0	黄灰	長石・雲母	普	８０	球形の胴部に頸部とややいびつな高台が付く 胴部下半手持ちヘラ削り 底面砂目痕
9	土師器	甕	(20.0)	29.3	8.9	にぶい橙	長石・石英	良	８０	頸部の括れが明瞭ではなく、寸胴 外面頸部横ナデ 胴部下半・底面ヘラ削り 底部内面輪積痕
10	土師器	小型甕	17.0	19.2	8.4	橙	長石・石英・雲母	普	１００	肩部に最大径を持つ 口縁部はぼ水平に張り出し、口唇部立つ 胴部下半ヘラ削り 底面木葉痕
11	土師器	甕		(23.8)	7.3	にぶい橙	長石・石英	普	６０	非常に薄手の器厚 胴部下半ヘラ削りの後ナデ 内面輪積痕 外面粘土付着 底面木葉痕
12	土師器	小型甕		(15.8)	7.6	にぶい黄橙	長石・石英・雲母	普	５０	やや球形の胴部 外面ヘラミガキ 内面ヘラナデ 底面木葉痕 スス付着
13	土師器	甕		(17.2)		にぶい橙	長石・石英	不良	４０	底面欠損 外面胴部下半ヘラ削り 内面ヘラナデ・輪積痕
14	土師器	甕	(20.5)	(9.9)		にぶい黄橙	長石・石英・雲母	普	３０	頸部緩く括れる 口唇部立ち上がる 外面指頭痕 内面ヘラナデ スス付着 No.11と同一個体か
15	土師器	小型鉢	(20.3)	15.1	8.7	橙	長石・石英	良	６０	頸部直下に胴部最大径を持ち口径はそれを上回る 胴部下半ヘラ削り 底面木葉痕 ２段回成形
16	土師器	鉢	(27.3)	15.5	10.0	にぶい橙	長石・石英	普	６０	胴部最大径より口径の方が大きい 頸部の屈曲が強い 胴部下半ヘラ削り 底面木葉痕
17	土師器	甑	30.5	29.6	11.9	にぶい橙	長石・石英・雲母	良	８０	1孔式の底部 口縁部が水平に外反 外面底部側縁ヘラ削り・縦方向のナデ 内面ヘラ痕・輪積痕
18	土師器	甑	30.9	28.5	14.6	浅黄橙	長石・石英	普	８０	口縁部径が器形の最大径 1孔式の底部 口縁部が水平に外反 外面胴部下半ヘラ削り
19	須恵器	甑		(19.5)	15.0	にぶい黄橙	長石・石英・雲母	不良	６０	5孔式の底面の作り 外面に平行タタキ目・一巡する横位の沈線3条 胴部下半ヘラ削り 当具痕

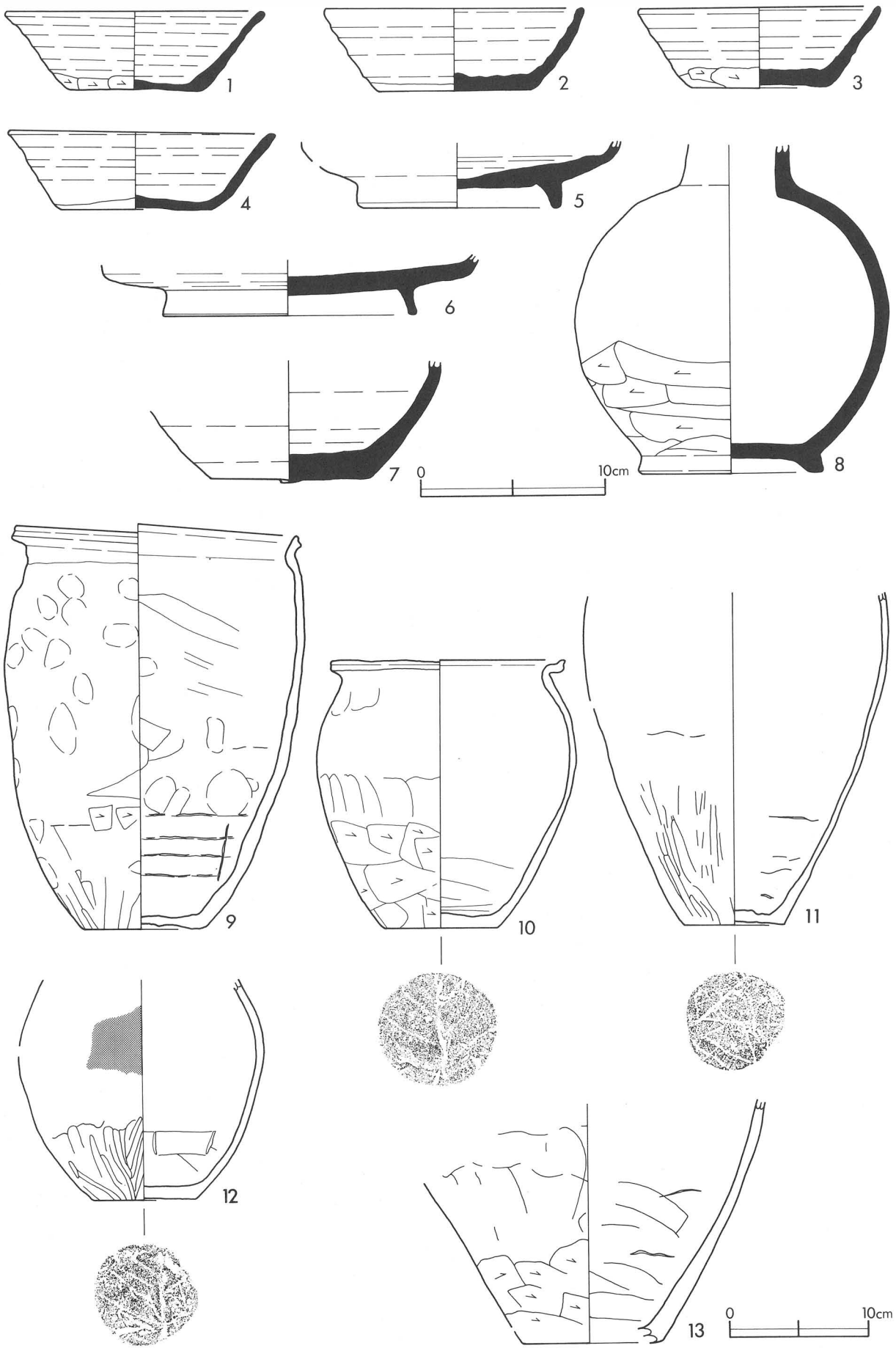
第２１号土坑（旧第３５号土坑）（第94図　ＰＬ９）

位置　調査区中央の、標高28.25mの台地上で、Ｍ－16区から確認された。第７号住居跡や第３号溝と重複関係にある。　**規模と平面形**　平面形は長軸1.55m、短軸1.43mの隅丸方形を呈する。底面までの深さ1.07mである。　**主軸方向**　Ｎ－59°－Ｗ　**壁面**　壁は直に立ち上り開く。　**底面**　全体に平坦であるが中央に長径90cm、短径75cm、深さ30cmの小ピットがある。　**覆土**　褐色土で占められている。黒褐色土粒がそれぞれの層

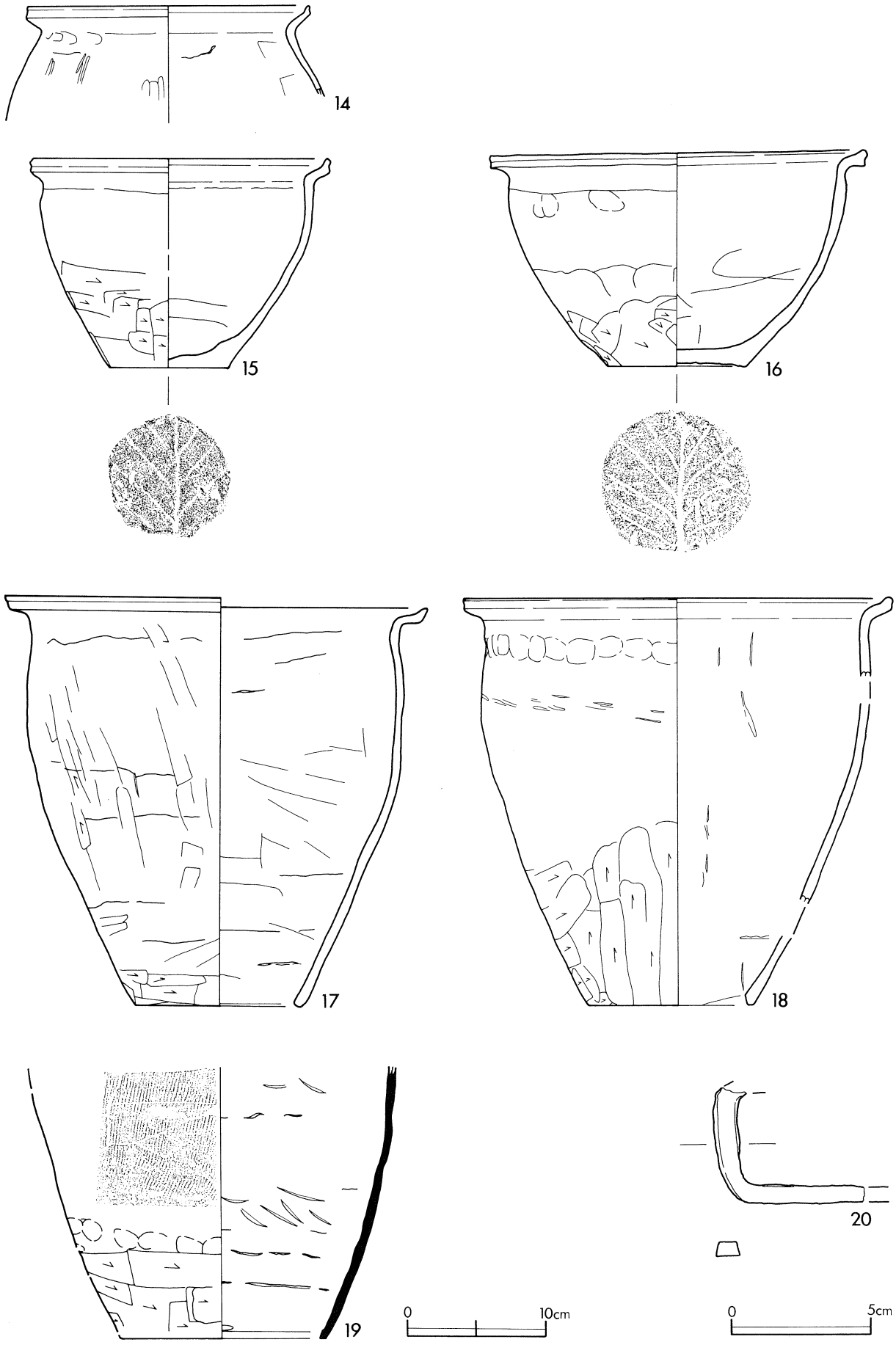


SK－11　1層　褐色土　粘性弱　焼土粒多量，炭化材・ローム粒少量混入
2層　褐色土　焼土粒・炭化物少量混入
3層　褐色土　しまり弱
4層　褐色土　焼土粒少量混入
5層　褐色土　しまり弱　ローム粒少量混入
6層　褐色土　粘性弱　ローム少量混入
7層　褐色土
8層　褐色土　しまり弱　ローム粒少量混入
9層　褐色土　しまり弱　ローム粒多量に混入
10層　褐色土　しまり弱　ローム少量，粘土微量混入
11層　褐色土　粘性弱　ローム粒多量に混入
12層　褐色土　ローム粒少量混入
13層　暗黄褐色土　しまり弱　ローム粒多量，焼土粒少量，粘土微量混入
14層　褐色土　ローム粒多量に混入
15層　褐色土　粘性強　しまり弱　粘土少量，砂粒混入
16層　褐色土　粘性強　しまり弱　粘土多量，砂粒混入

第91図　第11・12・13・14・15・16号土坑実測図・出土遺物実測図



第92図　第11号土坑出土遺物実測図(1)



第93図　第11号土坑出土遺物実測図(2)

に混入する　**遺物**　覆土の２層下位から４層直上の位置に牛または馬の顎骨が出土した。一部頭骨の痕跡らしき骨粉も見られた。顎骨は南北方向に沿って、水平に逆位の状態で出土した。顎骨には上下の臼歯が並び、前歯は上顎の先端にのみ存在した。他の部位の骨は出土していない。このほか土師器・須恵器の小片が出土した。

所見　この土坑自体は奈良・平安時代のものと考えられる。

第２４号土坑（旧５６号土坑）（第95図　ＰＬ27）

位置　調査区中央の、標高28.25mの台地上で、Ｒ－17・18区の第１号古墳の主体部西側から確認された。**規模と平面形**　平面形は長径2.4m、短径2.2mの円形を呈する。底面までの深さ0.16mである。　**主軸方向**　計測不可　**壁面**　緩く立ち上がる。　**底面**　全体に平坦である。　**覆土**　褐色土である。　**遺物**　覆土中から土師器高坏の坏部が小破片に割れて出土した。接合の結果は坏部がほぼ完形近くまで復元できた。　**所見**　この土坑は出土した遺物より古墳時代中期のものと考えられる。

第２４号土坑出土遺物

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	土師器	高坏	20.7	(8.9)		橙	長石・赤色粒	普	６０	坏部底面から湾曲して外傾し口縁部でより開く 脚部欠損 内外面ナデ

第２７号土坑（旧第４３号土坑）（第96図　ＰＬ10）

位置　調査区中央の、標高28.25mの台地上で、Ｐ－18区から確認される。　**規模と平面形**　平面形は直径1.1mの円形を呈する。底面までの深さ0.53mである。　**主軸方向**　計測不可　**壁面**　北壁と南壁が緩くオーバーハングして立ち上がる。　**底面**　全体に平坦である。　**覆土**　焼土・炭化物・粒が混入する。　**遺物**　覆土中から土師器や須恵器の小片が出土している。　**所見**　この土坑は出土した遺物より平安時代のものと考えられる。

第２８号土坑出土遺物

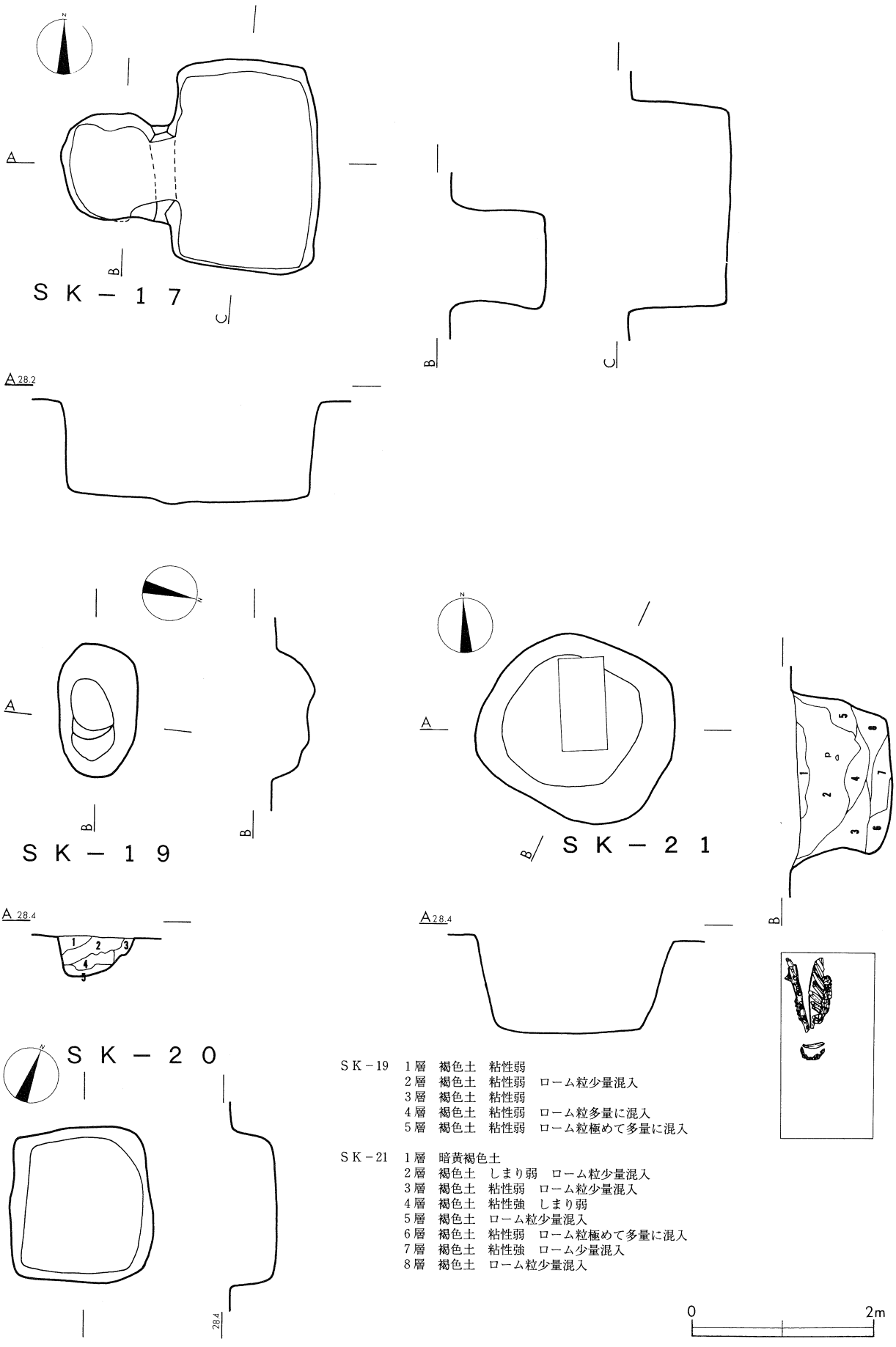
番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	土師器	高台坏		(3.3)	(7.4)	にぶい黄褐	長石・石英・雲母	良	１０	内面黒色処理され、ヘラ磨き 側面に墨書あり 判読不明

第３５号土坑（旧第８号土坑）（第97図　ＰＬ10）

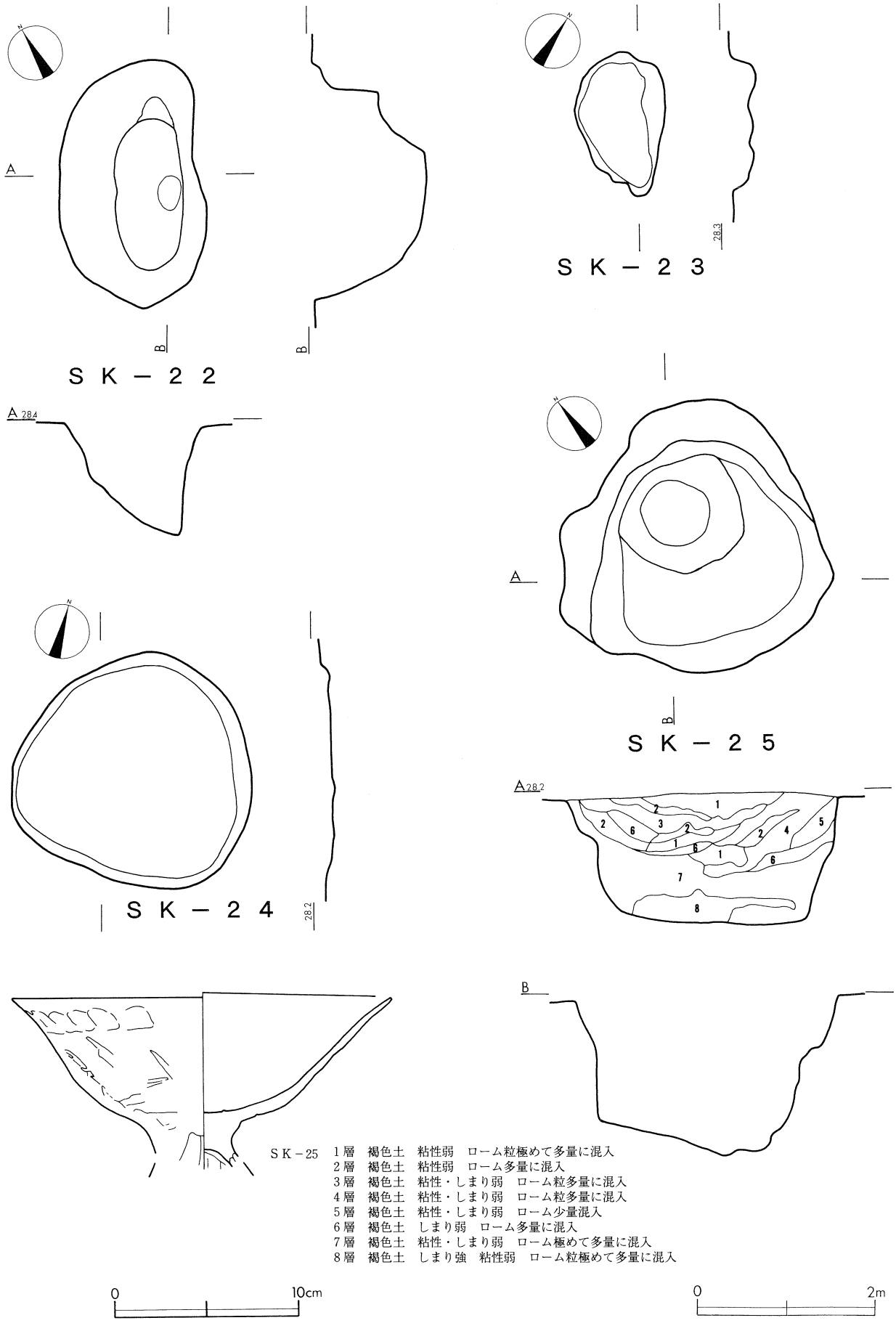
位置　調査区中央の、標高28.00mの台地上で、Ｏ－20・21区の第21号住居跡と重複関係にある。　**規模と平面形**　平面形は長軸2.4m、短軸0.59mの長方形を呈する。底面までの深さ0.43mである。　**主軸方向**　Ｎ－42°－Ｅ　**壁面**　緩く立ち上がる。一部被熱し焼土化している。　**底面**　全体に平坦である。　**覆土**　ローム粒混じりのサラサラした土層であり、底面上に部分的に焼土が堆積している。　**遺物**　底面から一部炭化した木が腐らず遺存していた。　**所見**　この土坑は近現代のものと位置付けられる。土坑の中で木を燃やしたものか。

第４３号土坑（旧第３１号土坑）（第98図・第100図№２）

位置　調査区中央の、標高28.00mの台地上で、Ｑ－21区から確認される。　**規模と平面形**　平面形は直径0.9mの円形を呈する。底面までの深さ0.24mである。　**主軸方向**　計測不可　**壁面**　緩く立ち上がる。　**底面**　全体に平坦である。　**覆土**　焼土・炭化物・粒が混入する。　**遺物**　覆土中から土師器、須恵器の小破片に混じり灰釉陶器輪花皿の破片が出土した。　**所見**　この土坑自体は出土した遺物より平安時代のものと考えられる。また平安時代10世紀代の住居跡を掘り込んでいるため、10世紀以降の土坑と考えられる。

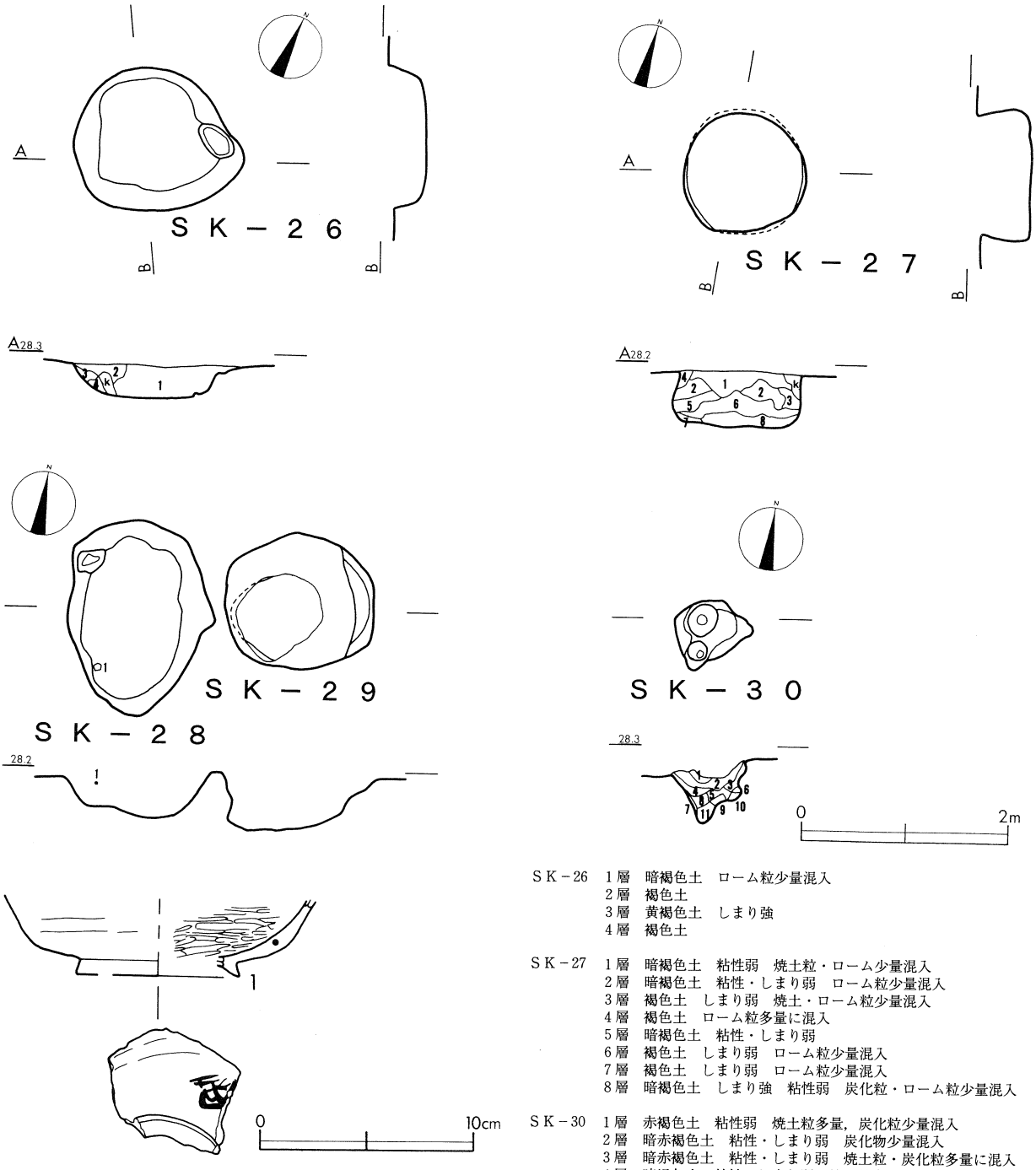


第94図　第17・19・20・21号土坑実測図・出土遺物実測図



SK－25
1層　褐色土　粘性弱　ローム粒極めて多量に混入
2層　褐色土　粘性弱　ローム多量に混入
3層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒多量に混入
4層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒多量に混入
5層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム少量混入
6層　褐色土　しまり弱　ローム多量に混入
7層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム極めて多量に混入
8層　褐色土　しまり強　粘性弱　ローム粒極めて多量に混入

第95図　第22・23・24・25号土坑実測図・出土遺物実測図



SK－26　1層　暗褐色土　ローム粒少量混入
2層　褐色土
3層　黄褐色土　しまり強
4層　褐色土

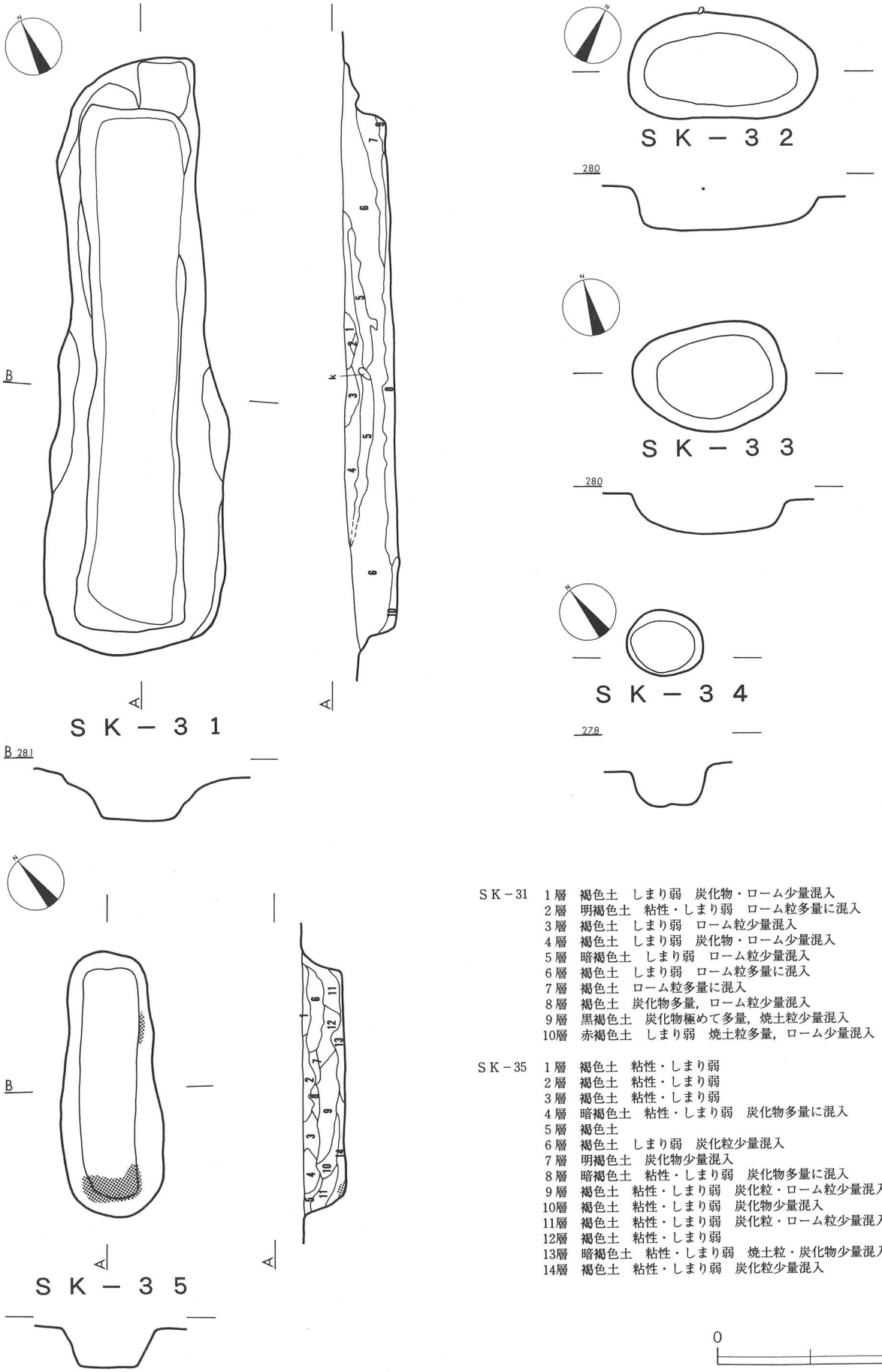
SK－27　1層　暗褐色土　粘性弱　焼土粒・ローム少量混入
2層　暗褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒少量混入
3層　褐色土　しまり弱　焼土・ローム粒少量混入
4層　褐色土　ローム粒多量に混入
5層　暗褐色土　粘性・しまり弱
6層　褐色土　しまり弱　ローム粒少量混入
7層　褐色土　しまり弱　ローム粒少量混入
8層　暗褐色土　しまり強　粘性弱　炭化粒・ローム粒少量混入

SK－30　1層　赤褐色土　粘性弱　焼土粒多量，炭化粒少量混入
2層　暗赤褐色土　粘性・しまり弱　炭化物少量混入
3層　暗赤褐色土　粘性・しまり弱　焼土粒・炭化粒多量に混入
4層　暗褐色土　粘性・しまり弱　焼土粒多量に混入
5層　赤褐色土　粘性弱　炭化粒少量混入
6層　暗赤灰色土　粘性・しまり弱　炭化粒多量に混入
7層　褐色土　ローム粒多量に混入
8層　暗褐色土　粘性弱　炭化粒多量に混入
9層　黒褐色土　粘性弱　炭化物多量，ローム粒少量混入
10層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒少量混入
11層　褐色土　粘性強　炭化粒・ローム粒多量に混入

第96図　第26・27・28・29・30号土坑実測図・出土遺物実測図

第３７・３８号土坑出土遺物

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	弥生土器	甕		(2.8)	7.0	にぶい黄橙	長石・石英	良	１０	輪積み接合部で欠損 外面付加条１種RL+LL 底面ナデ

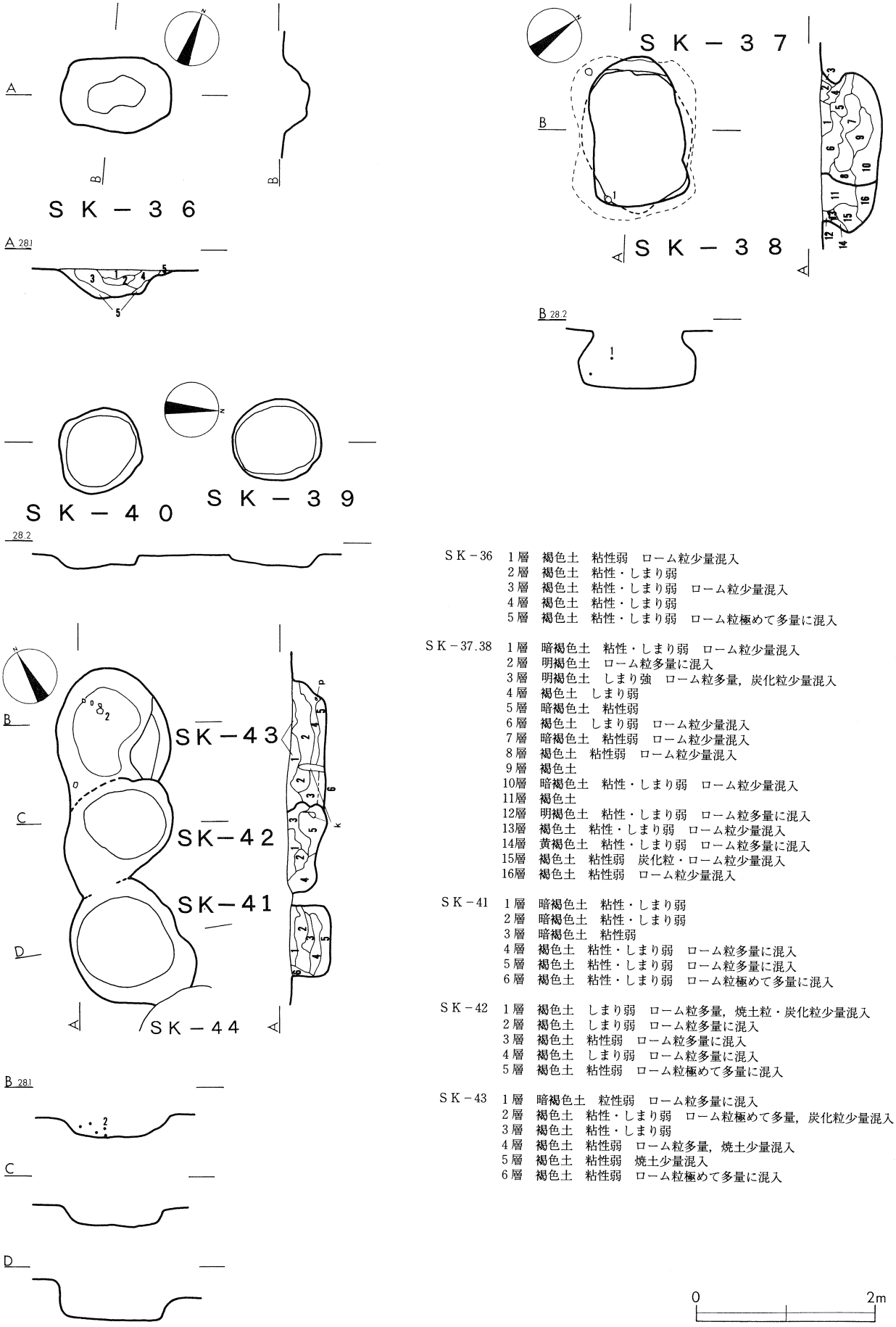


SK－31
1層　褐色土　しまり弱　炭化物・ローム少量混入
2層　明褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒多量に混入
3層　褐色土　しまり弱　ローム粒少量混入
4層　褐色土　しまり弱　炭化物・ローム少量混入
5層　暗褐色土　しまり弱　ローム粒少量混入
6層　褐色土　しまり弱　ローム粒多量に混入
7層　褐色土　ローム粒多量に混入
8層　褐色土　炭化物多量，ローム粒少量混入
9層　黒褐色土　炭化物極めて多量，焼土粒少量混入
10層　赤褐色土　しまり弱　焼土粒多量，ローム少量混入

SK－35
1層　褐色土　粘性・しまり弱
2層　褐色土　粘性・しまり弱
3層　褐色土　粘性・しまり弱
4層　暗褐色土　粘性・しまり弱　炭化物多量に混入
5層　褐色土
6層　褐色土　しまり弱　炭化粒少量混入
7層　明褐色土　炭化物少量混入
8層　暗褐色土　粘性・しまり弱　炭化物多量に混入
9層　褐色土　粘性・しまり弱　炭化粒・ローム粒少量混入
10層　褐色土　粘性・しまり弱　炭化物少量混入
11層　褐色土　粘性・しまり弱　炭化粒・ローム粒少量混入
12層　褐色土　粘性・しまり弱
13層　暗褐色土　粘性・しまり弱　焼土粒・炭化物少量混入
14層　褐色土　粘性・しまり弱　炭化粒少量混入

0　2m

第97図　第31・32・33・34・35号土坑実測図



SK－36
1層　褐色土　粘性弱　ローム粒少量混入
2層　褐色土　粘性・しまり弱
3層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒少量混入
4層　褐色土　粘性・しまり弱
5層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒極めて多量に混入

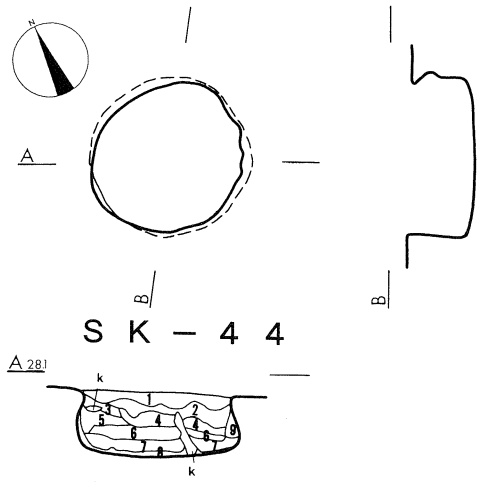
SK－37.38
1層　暗褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒少量混入
2層　明褐色土　ローム粒多量に混入
3層　明褐色土　しまり強　ローム粒多量，炭化粒少量混入
4層　褐色土　しまり弱
5層　暗褐色土　粘性弱
6層　褐色土　しまり弱　ローム粒少量混入
7層　暗褐色土　粘性弱　ローム粒少量混入
8層　褐色土　粘性弱　ローム粒少量混入
9層　褐色土
10層　暗褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒少量混入
11層　褐色土
12層　明褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒多量に混入
13層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒少量混入
14層　黄褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒多量に混入
15層　褐色土　粘性弱　炭化粒・ローム粒少量混入
16層　褐色土　粘性弱　ローム粒少量混入

SK－41
1層　暗褐色土　粘性・しまり弱
2層　暗褐色土　粘性・しまり弱
3層　暗褐色土　粘性弱
4層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒多量に混入
5層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒多量に混入
6層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒極めて多量に混入

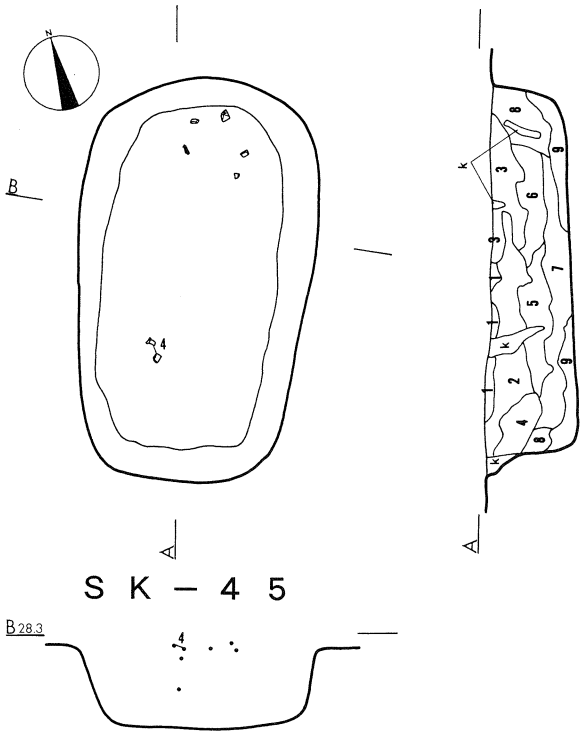
SK－42
1層　褐色土　しまり弱　ローム粒多量，焼土粒・炭化粒少量混入
2層　褐色土　しまり弱　ローム粒多量に混入
3層　褐色土　粘性弱　ローム粒多量に混入
4層　褐色土　しまり弱　ローム粒多量に混入
5層　褐色土　粘性弱　ローム粒極めて多量に混入

SK－43
1層　暗褐色土　粒性弱　ローム粒多量に混入
2層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒極めて多量，炭化粒少量混入
3層　褐色土　粘性・しまり弱
4層　褐色土　粘性弱　ローム粒多量，焼土少量混入
5層　褐色土　粘性弱　焼土少量混入
6層　褐色土　粘性弱　ローム粒極めて多量に混入

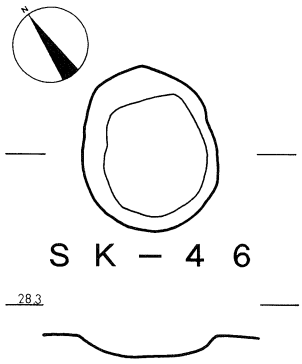
第98図　第36・37・38・39・40・41・42・43号土坑実測図

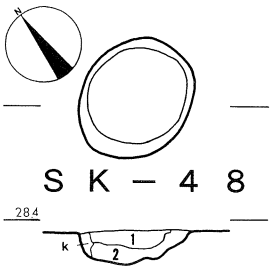


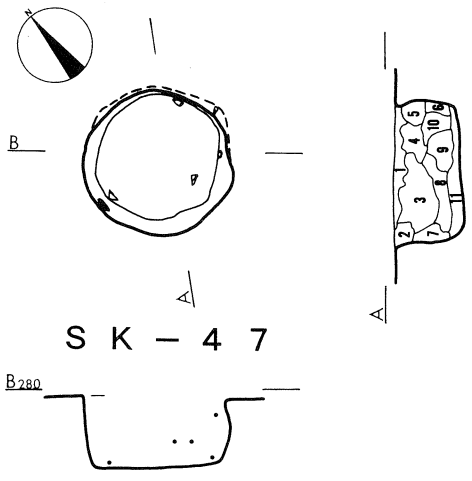
SK－44　1層　褐色土　粘性弱　ローム少量混入
2層　褐色土
3層　褐色土　しまり弱　焼土粒・炭化粒少量混入
4層　褐色土　粘性弱　ローム極めて多量，炭化粒少量混入
5層　暗褐色土　焼土粒・ローム粒少量混入
6層　褐色土　粘性弱　ローム極めて多量，焼土粒少量混入
7層　褐色土　しまり強　ローム粒多量，焼土粒・炭化粒少量混入
8層　褐色土　しまり強　ローム多量に混入
9層　褐色土　粘性・しまり弱　焼土粒・炭化粒・ローム粒少量混入



SK－45　1層　黒褐色土　粘性・しまり弱
2層　黒褐色土　粘性・しまり弱
3層　暗褐色土　粘性・しまり弱
4層　暗褐色土　粘性・しまり弱
5層　暗褐色土　粘性・しまり弱
6層　褐色土　しまり強　ローム粒多量に混入
7層　褐色土　粘性強　しまり弱　ローム粒極めて多量に混入
8層　褐色土　粘性強　しまり弱　ローム粒極めて多量に混入
9層　褐色土　粘性強　ローム粒極めて多量に混入



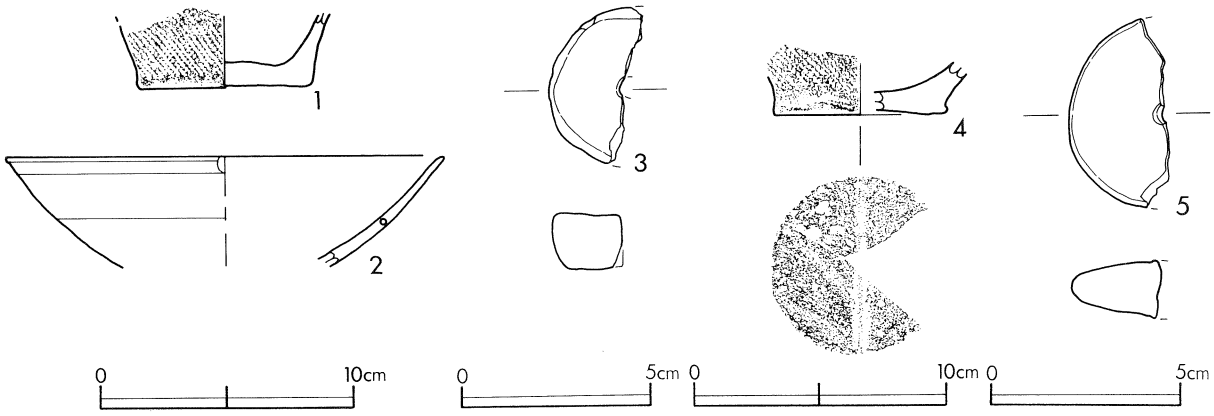




SK－47　1層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒多量，焼土粒・炭化物少量混入
2層　暗褐色土　しまり弱　ローム粒少量混入
3層　褐色土　粘性弱　ローム少量混入
4層　暗褐色土　ローム少量混入
5層　暗褐色土　しまり弱
6層　褐色土　ローム粒多量に混入
7層　褐色土　焼土粒少量混入
8層　暗褐色土　しまり弱
9層　褐色土　しまり弱　ローム粒多量　焼土粒少量混入
10層　褐色土　粘性弱　ローム粒多量に混入
11層　褐色土　しまり弱　ローム粒多量に混入
SK－20
SK－48　1層　褐色土　粘性弱　ローム粒多量に混入
2層　褐色土　粘性弱　ローム粒多量に混入

0　2m

第99図　第44・45・46・47・48号土坑実測図



第100図　第38・43・44・45号土坑出土遺物実測図

第４３号土坑出土遺物

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
2	灰釉陶器	輪花皿	(17.4)	(4.4)		淡黄	緻密	良	２０	ロクロナデの痕跡明瞭 口唇部の一部が凹む 内外面全体に施釉

第４４号土坑出土遺物

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
3	土製品	紡錘車	長(4.1) 幅(1.8) 厚さ(1.5)重量(14.0) g					普	５０	偏平な長方形の断面を呈する

第４５号土坑（旧第５号土坑）（第99図・第100図№４・５　ＰＬ10・31）

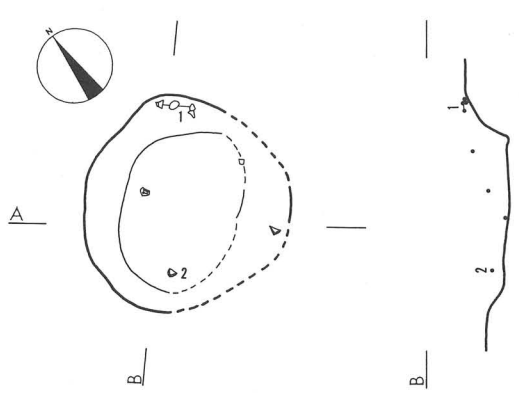
位置　調査区中央の、標高28.25mの台地上で、Ｍ－21・22区から確認される。　**規模と平面形**　平面形は長軸2.73m、短軸1.37mの長方形を呈する。底面までの深さ0.70mである。　**主軸方向**　Ｎ－18°－Ｅ　**壁面**　やや開きぎみで、直に立ち上がる。　**底面**　全体に平坦である。　**覆土**　遺構内の覆土上層は、当遺跡内での弥生時代竪穴住居跡覆土上層や古墳時代の遺構覆土上層のような黒褐色土に近い土色を持つ。　**遺物**　覆土中から弥生土器、縄文土器の破片が出土した。　**所見**　この土坑は弥生時代の竪穴住居跡を掘り込んでいるが、覆土の状況や出土した遺物より弥生時代から古墳時代のものと考えられる。

第４５号土坑出土遺物

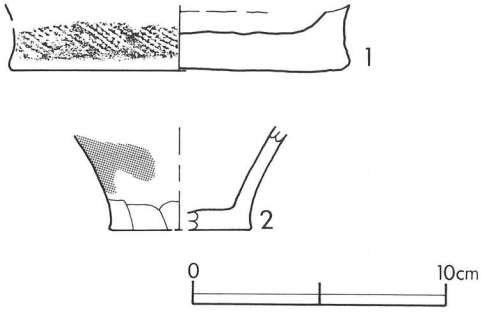
番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
4	弥生土器	甕		(1.6)	6.7	にぶい黄橙	長石・石英	普	１０	外面付加条１種RL+LL縄文施文 底面木葉痕
5	土製品	紡錘車	長(5.0) 幅(2.7) 厚さ(1.5)重量(14.0) g					普	５０	断面形は紡錘形を呈する

第４７号土坑（旧第４号土坑）（第99図　ＰＬ10）

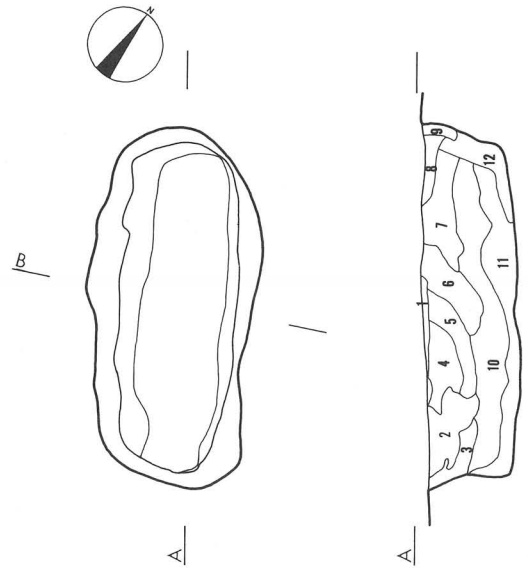
位置　調査区中央の、標高28.00mの台地上で、Ｐ－22区から確認される。　**規模と平面形**　平面形は直径0.8mの円形を呈する。底面までの深さ0.55mである。　**主軸方向**　計測不可　**壁面**　北北東側が緩くオーバーハングして直に立ち上がる。　**底面**　全体に平坦である。　**覆土**　焼土・炭化物・粒や第４・５層にはカマド構築粘土が混入する。　**遺物**　覆土中から土師器、須恵器の小破片が出土した。　**所見**　この土坑自体は出土した遺物より平安時代のものと考えられる。また平安時代10世紀の住居跡のカマドを掘り込んでいるため住居の遺物が入り込んだ可能性もあるが、10世紀以降の土坑と考えられる。



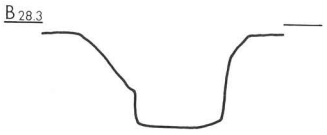
SK－49

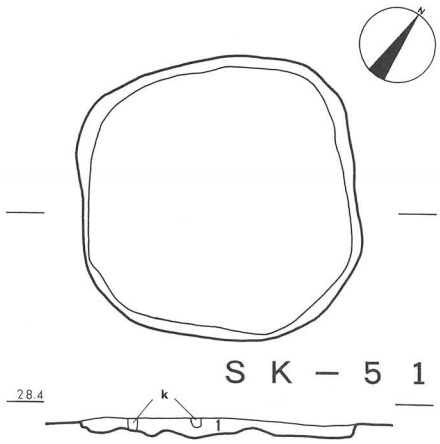


SK－49　1層　褐色土　ローム粒多量に混入
2層　褐色土　しまり弱　ローム粒多量に混入
3層　褐色土　しまり強　ローム粒多量に混入



SK－50



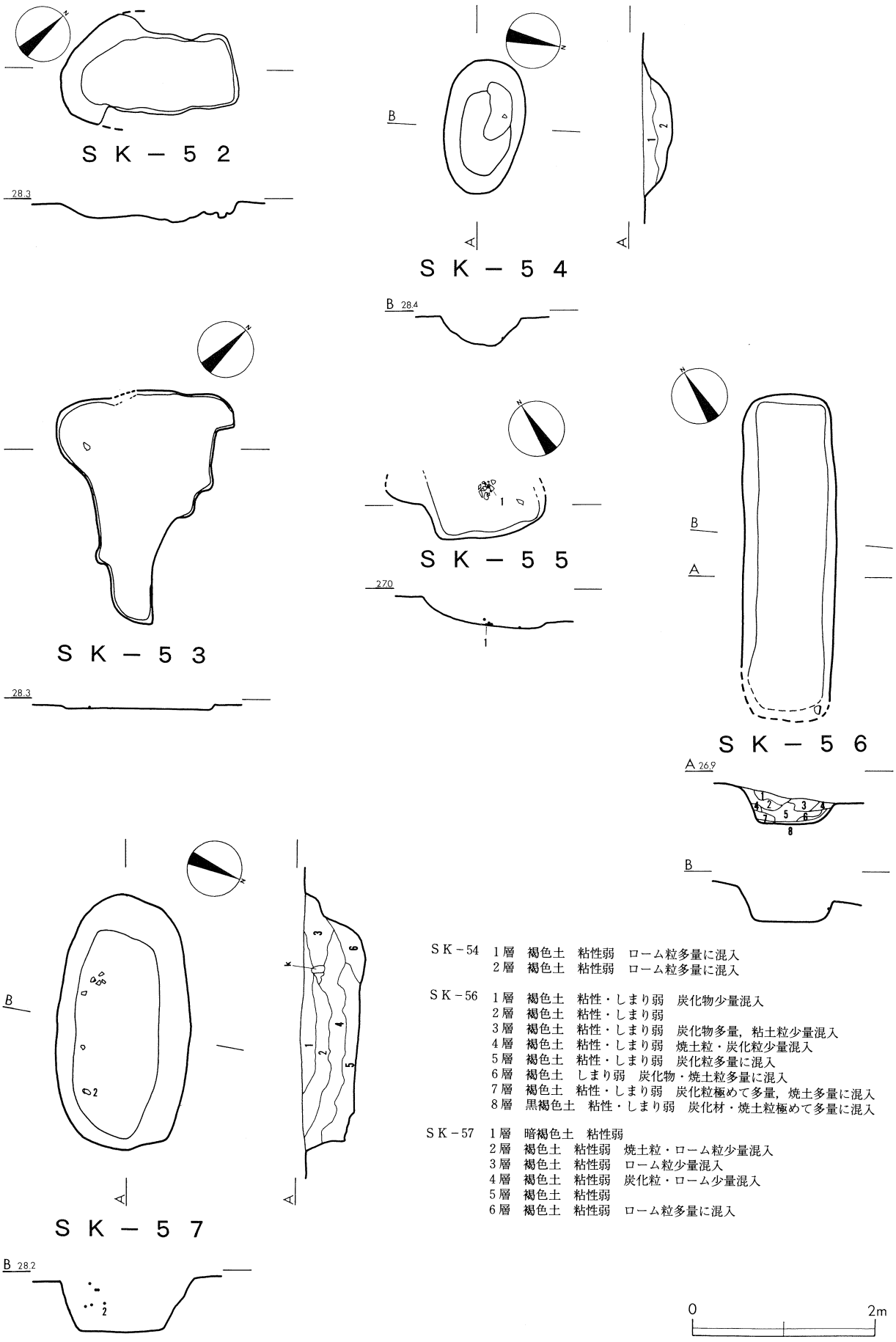


SK－51

SK－50　1層　暗褐色土　粘性弱　焼土粒少量混入
2層　暗褐色土　しまり弱　焼土粒・炭化粒・ローム粒少量混入
3層　褐色土　ローム粒多量に混入
4層　褐色土　しまり弱　炭化粒・ローム粒少量混入
5層　褐色土　炭化粒少量混入
6層　褐色土　焼土粒少量混入
7層　暗褐色土
8層　褐色土　炭化粒・ローム粒多量に混入
9層　明褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒多量に混入
10層　褐色土　粘性強　しまり弱　ローム粒多量に混入
11層　暗褐色土　しまり弱　ローム粒少量混入

SK－51　1層　褐色土　ローム粒多量，焼土粒少量混入

第101図　第49・50・51号土坑実測図・出土遺物実測図



SK－54　1層　褐色土　粘性弱　ローム粒多量に混入
　　2層　褐色土　粘性弱　ローム粒多量に混入

SK－56　1層　褐色土　粘性・しまり弱　炭化物少量混入
　　2層　褐色土　粘性・しまり弱
　　3層　褐色土　粘性・しまり弱　炭化物多量，粘土粒少量混入
　　4層　褐色土　粘性・しまり弱　焼土粒・炭化粒少量混入
　　5層　褐色土　粘性・しまり弱　炭化粒多量に混入
　　6層　褐色土　しまり弱　炭化物・焼土粒多量に混入
　　7層　褐色土　粘性・しまり弱　炭化粒極めて多量，焼土多量に混入
　　8層　黒褐色土　粘性・しまり弱　炭化材・焼土粒極めて多量に混入

SK－57　1層　暗褐色土　粘性弱
　　2層　褐色土　粘性弱　焼土粒・ローム粒少量混入
　　3層　褐色土　粘性弱　ローム粒少量混入
　　4層　褐色土　粘性弱　炭化粒・ローム少量混入
　　5層　褐色土　粘性弱
　　6層　褐色土　粘性弱　ローム粒多量に混入

第102図　第52・53・54・55・56・57号土坑実測図

第４９号土坑（旧第３４号土坑）（第101図）

位置　調査区中央の、標高28.00mの台地上で、Ｏ・Ｐ－23区から確認される。第26号住居跡と重複関係にあり本遺構が住居を掘り込んでいる。　**規模と平面形**　平面形は長径1.32m、短径0.8mの楕円形を呈する。底面までの深さは最深で0.36mである。　**主軸方向**　計測不可　**壁面**　底面から外反して立ち上がる。　**底面**　全体に平坦である。　**覆土**　褐色土で構成される。　**遺物**　覆土中から弥生土器片が出土した。　**所見**　この土坑は、覆土の状況や出土した遺物より、弥生時代のものと考えられる。

第４９号土坑出土遺物

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	弥生土器	壺		(2.6)	(13.1)	にぶい橙	長石・石英	普	１０	外面付加条LR+LL縄文施文 底面木葉痕
2	弥生土器	甕		(3.7)	(5.6)	にぶい黄橙	長石・石英	良	１０	薄手 底部から開く 無文 底面木葉痕 スス付着

第５０号土坑（旧第１２号土坑）（第101図　ＰＬ10）

位置　調査区中央の、標高28.25mの台地上で、Ｎ－23区から確認される。　**規模と平面形**　平面形は長軸2.47m、短軸0.65mの楕円形を呈する。底面までの深さは0.74mである。　**主軸方向**　Ｎ－30°－Ｗ　**壁面**　東壁はほぼ直に立ち上がるが、西壁は途中から開く。　**底面**　全体に平坦である。　**覆土**　褐色土と暗褐色土によりなる。　**遺物**　覆土中から弥生土器と縄文土器の小破片が出土した。　**所見**　この土坑の覆土は、弥生時代以降のものとは異なることと、形態等から縄文時代の可能性が考えられる。

第５５号土坑（旧第１８号土坑）（第102図・第103図№１　ＰＬ27）

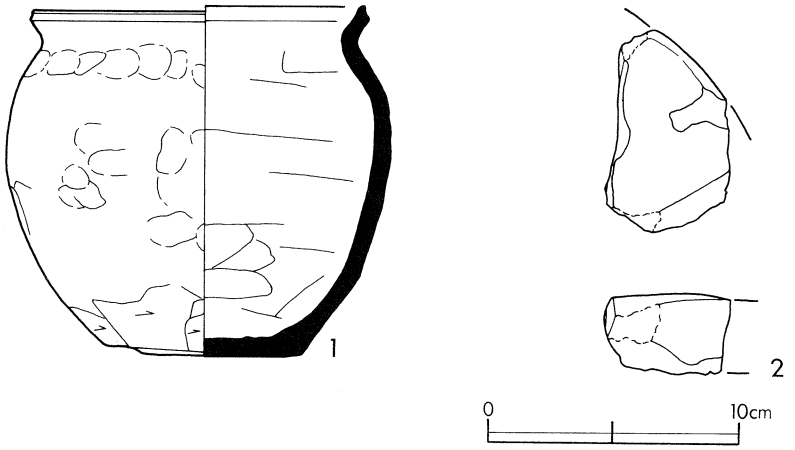
位置　調査区東部の、標高27.00mの斜面地で、Ｓ－24区から確認される。第３号古墳の周溝と重複関係にあり、周溝を一部掘り込んでいる。　**規模と平面形**　遺構の全容は不明であるが、平面形は一辺１m位の方形を呈するものか。、深さは最深で0.34mである。　**主軸方向**　計測不明　**壁面**　西壁は緩く立ち上がる。　**底面**　全体に平坦である。　**覆土**　不明　**遺物**　底面近くから土師器甕の製作技法と同様の須恵器甕が、割れて出土した。接合後ほぼ完形に復元された。骨片等は出土していない。　**所見**　この土坑は、出土遺物より平安時代のものと考えられる。

第５５号土坑出土遺物

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	須恵器	甕	12.9	13.9	7.7	灰黄	長石・石英・雲母	普	９０	土師器小形甕の製作技法を持ち胴部球形 底面回転ヘラ切りの後砂目 外面胴部下半ヘラ削り

第５７号土坑（旧第１９号土坑）（第102図・第103図№２　ＰＬ32）

位置　調査区中央部の、標高27.00mの斜面地で、Ｌ－25区から確認される。　**規模と平面形**　平面形長径2.26m、短径0.88mの楕円形を呈する。深さは0.59mである。　**主軸方向**　Ｎ－72°－Ｅ　**壁面**　西壁以外は底面から直に開くように立ち上がる。　**底面**　全体に平坦である。　**覆土**　遺構内の覆土上層は、当遺跡内での弥生時代竪穴住居跡覆土上層や古墳時代の遺構覆土上層のような黒褐色土に近い土色を持つ。　**遺物**　覆土中から弥生土器や縄文土器の破片や石器が出土した。　**所見**　この土坑は覆土の状況等から、弥生時代から古墳時代のものと考えられる。



第103図　第55・57号土坑出土遺物実測図

第５７号土坑出土遺物

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
2	石器	磨石類	長さ(8.0) 幅 4.9 厚さ(3.2) 重量(147)						欠損品	両端部に敲打痕あり

第５８号土坑（旧第１号土坑）（第104図）

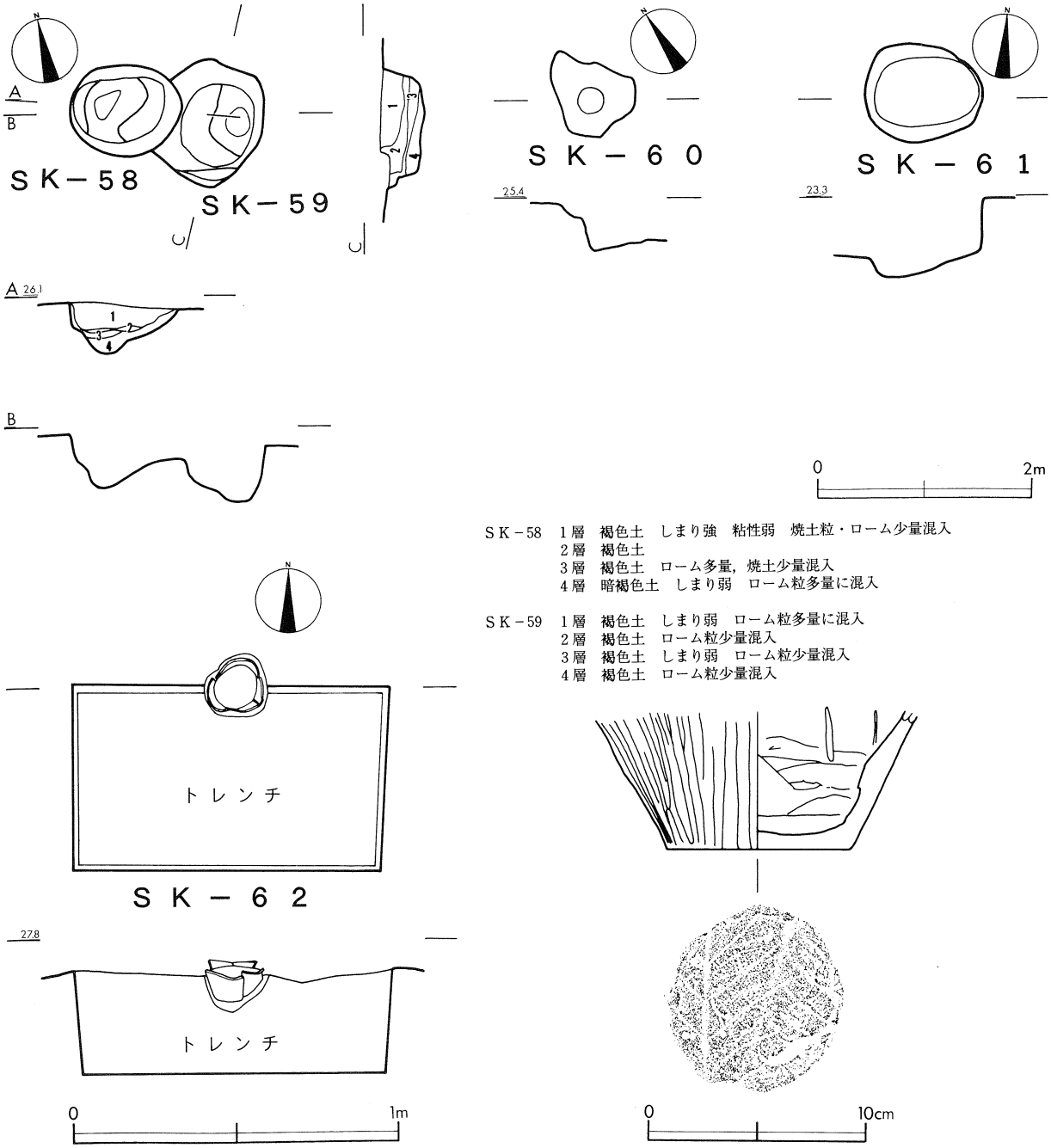
位置　調査区南端部の、標高26.00mの尾根上斜面地で、Ｔ－33区から確認される。第59号土坑と重複関係にあり、本遺構が新しい。　**規模と平面形**　平面形長径1.02m、短径0.84mの楕円形を呈する。深さは0.50mである。　**主軸方向**　Ｎ－83°－Ｗ　**壁面**　東壁は底面から緩く開くように立ち上がる。　**底面**　底面の中央に小ピットがある。　**覆土**　第３層には目立ってロームブロックが含まれる。　**遺物**　覆土中から土師器や須恵器の小破片が出土した。　**所見**　この土坑は覆土の状況等から、平安時代のものと考えられる。掘立柱建物跡の柱穴に類似する。

第５９号土坑（旧第２号土坑）（第104図）

位置　調査区南端部の、標高26.00mの尾根上斜面地で、Ｔ－33区から確認される。第５８号土坑や第１号掘立柱建物跡の柱穴と重複関係にあり、本遺構が柱穴より古い。　**規模と平面形**　平面形は直径約１mの円形を呈する。深さは最深部で0.64mである。　**主軸方向**　計測不可　**壁面**　西壁は緩く立上り、東壁は底面より直に立ち上がる。　**底面**　一段のテラス状の部分があり、東側がより掘り込まれている。　**覆土**　第４層には白色粘土粒が含まれる。　**遺物**　覆土中からは土師器や須恵器の小破片が出土した。　**所見**　この土坑は覆土の状況等から、平安時代のものと考えられ、掘立柱建物跡の柱穴に類似する。

第６２号土坑（旧火葬墓１）　（第104図　ＰＬ11・27）

位置　調査区南部の、標高27.75mの台地上で、Ｍ－30区から確認される。　**規模と平面形**　表土排除時に蔵骨器の大半は失われてしまった。現状で直径約0.20mの円形を呈する。深さは最深部で0.11mである。　**主軸方向**　計測不可　**壁面**　土坑の壁は蔵骨器の大きさ同様のものである　**底面**　平坦な部分はなく、丸底。　**覆土**　褐色土　**遺物**　蔵骨器は土師器の甕を使用して、この中に細かい火葬骨が納められていた。甕の中の火葬骨にはあまり土は混じり込んでおらず、当初は蓋がしてあった可能性が考えられる。　**所見**　出土した土師器



SK－58　1層　褐色土　しまり強　粘性弱　焼土粒・ローム少量混入
　　2層　褐色土
　　3層　褐色土　ローム多量，焼土少量混入
　　4層　暗褐色土　しまり弱　ローム粒多量に混入

SK－59　1層　褐色土　しまり弱　ローム粒多量に混入
　　2層　褐色土　ローム粒少量混入
　　3層　褐色土　しまり弱　ローム粒少量混入
　　4層　褐色土　ローム粒少量混入

第104図　第58・59・60・61・62号土坑実測図・出土遺物実測図

甕から、平安時代のものと考えられる。

第６２号土坑出土遺物

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	土師器	甕		(6.1)	8.4	にぶい黄橙	長石・石英・雲母	普	30	火葬骨納器 底部のみ遺存 縦位ヘラミガキ 底面木葉痕 底部とそれ以上を時間をおいて成形

表1　竪穴住居跡一覧

遺構番号	旧遺構番号	位地（グリット区）	主軸方向	平面形	規模（m）（長軸×短軸）	最大深さ（m）	炉	カマド	所属時代	図版・写真No.
ＳＩ－１	ＳＩ－３	Ｎ－12・13	N-45°-W	長方形	6.07×4.05	38～20	有り		弥生時代	第６図・PL２
2	18	Ｐ・Ｑ－16	N-46°-W	長方形	5.27×4.37	41～33	有り		弥生時代	第８図・PL２
3	30	Ｒ・Ｓ－13	N-20°-W	長方形	4.38×4.12	20～11	有り		弥生時代	第11図・PL２
4	14	Ｔ－11・12	N-52°-W	長方形	4.68×3.46	計測不可	有り		弥生時代	第13図・PL２
5	1	Ｈ－16	N-51°-W	長方形	5.28×3.72	34～23	有り		弥生時代	第14図・PL３
6	2	Ｊ・Ｋ－16	N-44°-W	長方形	4.52×3.33	45～31	有り		弥生時代	第16図・PL３
7	24	Ｍ－15・16	N-38°-W	長方形	4.56×3.58	43～38	有り		弥生時代	第19図・PL３
8	19	Ｐ・Ｑ－16	N-41°-E	長方形	4.73×3.88	34～27	有り		弥生時代	第21図・PL３
9	29	Ｓ－16	N-53°-W	長方形	4.28×3.69	30～23	有り		弥生時代	第22図・PL３
10	23	Ｔ－17・18	N-16°-E	長方形	4.59×3.77	31～21	有り		弥生時代	第24図・PL３
11	5	Ｎ－17	N-45°-W	長方形	5.0 ×3.82	48～37	有り		弥生時代	第26図・PL３
12	20	Ｌ－18・19	N-54°-W	長方形	4.75×4.13	26～22	有り		弥生時代	第28図・PL４
13	6a	Ｍ－19・20	N-56°-W	長方形	4.15×3.59	38～29	有り		弥生時代	第30図・PL４
14	21	Ｏ・Ｐ－19	N-66°-W	長方形	3.57×3.18	43～32	有り		弥生時代	第33図・PL４
15	22a	Ｓ－19・20	N-38°-E	長方形	3.67×2.97	21～11	有り		弥生時代	第35図・PL４
16	38	Ｇ－21	N-51°-W	長方形	5.4 ×4.6	38～26	有り		弥生時代	第36図・PL４
17	26	Ｉ－21・22	N-25°-W	長方形	3.51×3.07	22～ 7	有り		弥生時代	第38図・PL４
18	27	Ｋ－20・21	N-58°-W	長方形	4.46×3.65	35～25	有り		弥生時代	第39図・PL５
19	10	Ｌ－21・22	N-13°-E	長方形	4.9 ×3.43	36～30	有り		弥生時代	第41図・PL５
20	9a	Ｍ・Ｎ－22	N-36°-E	正方形	3.46×3.46	36～30	有り		弥生時代	第44図・PL５
21	7	Ｏ－21	N-47°-W	長方形	5.18×3.92	26～22	有り		弥生時代	第45図・PL５
22	8a	Ｐ・Ｑ－21	N-61°-W	長方形	(3.75)×3.26	35～13	有り		弥生時代	第47図・PL５
23	25	Ｒ－21	N-50°-W	長方形	(3.26)×3.07	22～18	有り		弥生時代	第49図・PL５
24	12	Ｍ－24	N-30°-W	長方形	3.58×2.98	33～27	有り		弥生時代	第50図・PL６
25	11	Ｎ・Ｏ－24	N-57°-W	長方形	3.98×3.33	22～15	有り		弥生時代	第51図・PL６
26	28a	Ｐ－23・24	N-40°-W	長方形	4.78×3.74	50～37	有り		弥生時代	第52図・PL６
27	34	Ｓ・Ｔ－32	N-51°-W	長方形	5.88×5.42	17～ 7	有り		弥生時代	第54図・PL６
28	37	Ｑ－34・35	N-102°-W	長方形	4.69×3.55	44～32	有り		弥生時代	第56図・PL６
29	16	Ｐ・Ｑ－8	N-30°-E	正方形	(7.0 ×6.38)	計測不可	有り		古墳時代	第57図・PL６
30	15	Ｑ－8	N-24°-E	長方形	(3.91×3.53)	計測不可		有り	平安時代	第59図・PL７
31	6b	Ｍ－19		長方形	3.78×3.22	22～16		有り	平安時代	第61図・PL７
32	22b	Ｔ－19・20	N-53°-E	長方形	(3.86)×3.29	12～ 5		有り	平安時代	第63図
33	8b	Ｑ－21	N-29°-E	長方形	3.67×(3.21)	28～12		有り	平安時代	第65図・PL７
34	8c	Ｑ－21	N-29°-E	長方形	3.67×(3.23)	10～ 6		有り	平安時代	第66図・PL５
35	9b	Ｍ－22・23	N-36°-E	正方形	3.46×3.46	19～13	有り	有り	平安時代	第67図・PL７
36	28b	Ｐ－23	N- 6°-W	正方形	2.68×2.44	32～19		有り	平安時代	第70図・PL７
37	14	Ｍ－29	N-17°-E	長方形	2.06×1.71	22～17	有り	有り	平安時代	第74図・PL８
38	35	Ｖ－33	N-85°-W	方形	3.85×計測不可	計測不可		有り	平安時代	第78図・PL８
39	36	Ｓ－35・36	N-16°-E	方形	3.67×計測不可	21～15		有り	平安時代	第80図・PL８

表2　竪穴住居跡内柱穴・入り口ピット一覧

住居番号	主柱穴の深さ（最大cm）				主柱穴の平面規模（最大径cm）				主柱穴の位置（m）壁からの距離				P5入り口ピット		
	P１	P２	P３	P４	P１	P２	P３	P４	P１	P２	P３	P４	深さ(cm)	角度(°)	距離(cm)
1	76	77	79	81	31	36	31	33	上1.72右1.17	右0.96下1.54	下1.68左1.06	左1.05上1.78	33	68	73
2	85	76	74	80	38	35	26	39	上1.60右1.32	右1.40下1.54	下1.65左1.30	左1.20上1.80	19	70	42
3	62	59	71	62	30	24	30	23	上1.07右0.80	右0.74下1.01	下1.30左0.84	左0.79上1.15	19	45	52
4	81	87	78	76	41	44	42	39	上1.65(右0.90)	(右0.60下1.05)	(下1.04左0.95)	(左0.95上1.04)	49	70	40
5	86	87	93	86	30	29	28	27	上1.77右1.07	右1.03下1.50	下1.50左1.00	左1.03上1.75	33	68	80
6	58	66	63	59	33	36	36	34	上1.16右1.13	右1.08下1.38	下1.28左1.02	左0.97上1.12	12	57	73
7	60	52	64	61	25	32	38	31	上1.47右1.18	右1.18(下1.35)	下1.20左1.15	左1.20上1.40	49	72	60
8	71	70	77	64	34	30	33	32	(上1.03右1.28)	(右1.35下1.35)	下1.42左1.54	左1.40上1.38	34	66	84
9	72	72	70	74	26	36	31	22	上1.24(右1.03)	(右1.42下1.15)	下1.15左0.96	左0.99上1.35	45	70	55
10	68	63	68	68	24	25	29	24	上1.17右1.04	右0.95下1.03	下0.96左0.96	(左0.97上1.17)	63	69	62

住居番号	主中穴の深さ(最大cm)				主柱穴の平面規模(最大径cm)				主柱穴の位置(m)壁からの距離				P5入り口ピット		
	P1	P2	P3	P4	P1	P2	P3	P4	P1	P2	P3	P4	深さ(cm)	角度(°)	距離(cm)
11	64	70	59	71	23	26	26	27	上1.20右1.50	右1.07下1.48	下1.53左1.02	左1.06上1.53	27	62	55
12	62	66	69	66	29	29	42	31	上1.35右1.06	右1.11下1.52	下1.47左1.06	左0.99上 −	42	71	95
13	49	65	62	59	26	28	29	32	上1.09右0.96	右0.94下1.15	下1.12左0.91	左0.94上1.11	44	72	66
14	65	50	38	36	28	29	35	22	上0.75右0.90	右0.90下0.78	下1.05左0.97	左0.87上0.80	16	54	75
15	65	62	63	62	22	22	28	20	上0.80右0.55	右0.66下0.85	下0.87左0.76	左0.96上0.85	26	80	47
16	86	100	95	77	37	38	31	34	上1.45右1.29	右1.29下1.60	下1.55左1.28	左1.28上1.42	50	69	77
17	51	58	57	53	23	26	27	22	上1.03右0.80	右0.66下1.00	下0.95左0.77	左0.81上0.95	47	69	60
18	51	66	69	78	32	27	37	41	上1.35右1.00	右0.87下1.14	下1.25左1.02	左1.02上1.36	47	79	45
19	72	66	61	70	22	21	26	30	上1.76右1.08	右0.81下1.61	下1.52左1.25	左0.87上1.73	27	84	100 40
20	−	−	−	−	−	−	−	−	上 − 右 −	右 − 下 −	下 − 左 −	左 − 上 −	−	−	−
21	55	84	61	82	36	39	30	28	上1.67右1.12	(右1.09)右1.35	下1.48左1.02	左1.02上1.49	69	70	80
22	59	50	51	74	26	24	34	24	上1.06右1.02	(右0.93下0.89)	(下0.78左0.77)	左1.01上1.06	18	68	42
23	41	73	48	42	32	72	56	28	上1.07右0.80	右0.94下 −	下 − 左0.85	左0.93上1.00	37	90	−
24	64	74	78	66	35	23	29	25	上1.09右0.84	右0.84下0.90	下0.99左0.85	左0.79上0.87	39	62	95
25	70	49	47	71	31	24	24	23	上1.10右0.99	右1.00下1.06	下1.17左1.01	左0.99上1.20	49	73	65
26	72	69	68	70	30	30	34	37	上1.45右1.05	右0.49下1.38	下1.30左0.88	左1.00上1.48	36.6	72.7	92 48
27	72	−	78	75	28	−	49	62	上1.66右1.20	(右1.50下1.25)	下1.50下1.35	左1.17左1.55	18	75	−
28	66	66	63	62	27	32	20	25	上1.84右0.85	右1.13下1.38	下1.38左0.86	左0.95上1.52	−	−	33
29	57	65	56	48	33	32	57	35	(上1.53右1.33)	(右1.40下1.24)	(下1.70左1.35)	(左2.40上1.40) (左1.84)	15	37	30
30	34	44	40	48	53	30	26	35	上 − 右 −	右 − 下 −	下 − 左 −	左 − 上 −	16	49	−
31	−	−	−	−	−	−	−	−	− −	− −	− −	− −	−	−	−
32	−	−	−	−	−	−	−	−	− −	− −	− −	− −	−	−	−
33	−	−	−	−	−	−	−	−	− −	− −	− −	− −	−	−	−
34	−	−	−	−	−	−	−	−	− −	− −	− −	− −	−	−	−
35	−	−	−	−	−	−	−	−	− −	− −	− −	− −	−	−	−
36	−	−	−	−	−	−	−	−	− −	− −	− −	− −	−	−	−
37	−	−	−	−	−	−	−	−	− −	− −	− −	− −	−	−	−
38	−	−	−	−	−	−	−	−	− −	− −	− −	− −	−	−	−
39	−	−	−	−	−	−	−	−	− −	− −	− −	− −	−	−	−

表3　土坑一覧

遺構番号	旧遺構番号	位地(グリット区)	主軸方向	平面形	規模(m)(長軸×短軸)	最大深さ(m)	重複関係	所属時代	図版・写真No.
SK−1	SK−61	N−3		不整形	2.25×1.15	152		近現代か	第84図
2	62	I−5・6	N-63°-W	楕円形	2.25×1.58	(76)		奈良・平安時代	第84図・PL8
3	46	Q・R−5		不整形	2.91×計測不可	290	遺構内の上下で複数時期の遺物出土	古墳時代中期・奈良・平安時代	第84図・PL8
4	53	S−6・7		不整形	計測不可×3.88	318		奈良・平安時代	第87図
5	52	S−8		楕円形	計測不可×1.01	228	SK5・6で切り合いなし	平安時代	第88図・PL9
6	54	5と同一のため(欠番)							
7	55	R−8	N-87°-W	楕円形	2.2 ×1.33	196		平安時代	第90図・PL9
8	63	J−9	N-33°-W	隅丸方形	1.74×1.60	66		近現代か	
9	66	E−10	N-12°-E	隅丸方形	1.80×1.48	181		平安時代	第90図・PL9
10	64	J−10	N-34°-E	隅丸方形	0.98×0.91	43		不明	
11	SX− 6	L・M−11		円形	3.53×2.85	177		奈良時代	第91図・PL9
12	SK−32	P−13		円形	0.60×0.60	65	SI-2	不明	第91図

遺構番号	旧遺構番号	位地(グリット区)	主軸方向	平面形	規模(m)(長径×短径)	最大深さ(m)	重複関係	所属時代	図版・写真No.
13	44	Q－12		楕円形	1.39×1.20	39		不明	第91図
14	57	R－12	N-22°-E	楕円形	0.74×0.51	44		不明	第91図
15	48	S－13	N-86°-E	長方形	1.35×0.76	48	SI-3	近現代か	第91図
16	49	S－13	N-82°-E	長方形	1.45×0.70	28	SI-3	不明	第91図
17	50	T・U－13	N- 3°-E	方形と長方形	2.75×2.25	110	17・18を一緒にした	中近世	第94図・PL9
18	51	SK－17と同一のため（欠番）							
19	40	M－14	N-77°-E	楕円形	0.99×0.43	45		不明	第94図
20	47	Q－14	N-20°-E	方形	1.47×1.24	52		近現代か	第94図
21	35	M－16	N-59°-W	隅丸方形	1.55×1.43	107	SI-7 SD-3	奈良・平安時代	第94図・PL9
22	68	P・Q－15	N-31°-E	楕円形	1.90×0.72	122	SI-8	不明	第95図
23	70	K－17	N-59°-W	不整形	1.48×0.68	31		不明	第95図
24	56	R－17・18		円形	2.41×2.24	16		古墳時代	第95図
25	27	N－18	N-23°-E	不整形	2.12×2.02	173	SD-4 樹木伐痕跡	近現代か	第95図
26	26	O－18		不整形	1.22×1.00	36	SK-54	不明	第96図
27	43	P－18		円形	1.11×1.07	53		平安時代	第96図・PL10
28	59	N－19		楕円形	1.24×0.82	55		平安時代	第96図
29	60	N－19	N- 6°-W	不整形	1.5 ×0.92	44	SI-31	平安時代	第96図
30	6	M－20		不整形	0.74×0.55	60	SK-30	不明	第96図
31	31	Q・R－19	N-27°-E	長方形	5.34×0.75	60	TM-1	近現代	第97図・PL10
32	67	R－19	N-65°-E	楕円形	1.62×0.74	48		不明	第97図
33	69	R－20	N-81°-W	楕円形	1.19×0.83	44		不明	第97図
34	58	S－19・20		楕円形	0.68×0.54	42	SI-32	不明	第97図
35	8	O－20・21	N-42°-E	長方形	2.40×0.59	43	SI-21	近現代	第97図・PL10
36	11	O・P－21	N-72°-E	楕円形	0.64×0.26	28	SI-21	不明	第98図
37	14	P－21	N-55°-E	円形	0.87×計測不可	63	SI-21	平安時代	第98図・PL10
38	15	P－21	N-55°-E	円形	0.87×計測不可	63	SI-21	平安時代	第98図・PL10
39	17	P－22		円形	0.84×0.72	15		不明	第98図
40	40	Q－21		円形	1.03×0.96	60	SI-22・23	不明	第98図
41	29	Q－21		円形	1.07×0.95	45	SI-33・34 SK-44	平安時代	第98図
42	30	Q－21		円形	0.90×0.74	24	SI-33・34 SK-44	平安時代	第98図
43	31	Q－21		円形	0.99×0.89	24	SI-33・34 SK-44	平安時代	第98図
44	9	P・Q－22		円形	1.20×1.20	54	SI-33・34	平安時代	第99図・PL10
45	5	M－20・21	N-18°-E	長方形	2.73×1.37	69	SI-20	弥生～古墳	第99図・PL10
46	23	M－22	N-30°-E	楕円形	0.98×0.79	19	SI-35	不明	第99図
47	16	P－22		円形	0.87×0.74	16		平安時代	第99図・PL10
48	20	K－23	N-72°-E	円形	0.83×0.75	28		不明	第99図
49	34	O・P－23		円形	1.32×0.80	36	SI-26	弥生時代	第101図
50	12	N－23	N-30°-W	長楕円形	2.47×0.65	74		縄文時代	第101図・PL10
51	22	K－24	N-35°-W	円形	2.30×2.02	14		不明	第101図
52	13	L－24	N-43°-E	不整形	1.60×0.80	23	SI-24	不明	第102図
53	7	M－24	N-48°-W	不整形	2.40×1.60	7	SI-24	不明	第102図
54	21	K－24		楕円形	0.91×0.53	32		不明	第102図
55	18	S－24		不整形	1.08×計測不可	34	TM-2	平安時代	第102図
56	3	T－23・24	N-30°-E	長方形	3.30×0.71	39	TM-2	近現代	第102図
57	19	L－25	N-72°-E	長楕円形	2.26×0.88	59		弥生～古墳時代	第102図
58	1	T－33	N-83°-W	楕円形	1.02×0.84	32	SI-27 SB-1	平安時代	第104図
59	2	T－33	N-40°-E	楕円形	1.11×0.98	64	SI-27 SB-1	平安時代	第104図
60	10	V－34		不整形	0.24×0.23	43	SI-38	不明	第104図
61	45	S－38		楕円形	0.95×0.63	43		不明	第104図
62	火葬墓1	M－30		円形	0.21×0.19	11		平安時代	第104図・PL11

4．掘立柱建物跡

掘立建柱建物跡は全体で4棟確認されている。それぞれ調査エリア南方の南東方向に張り出した尾根上に検出された。それぞれ主軸方向がほぼ一致して構築されていることから、同時期に存在したものと考えらる。第2号掘立柱建物跡の北側には溝が存在し、これらの掘立柱建物跡群と他を区別しているようである。

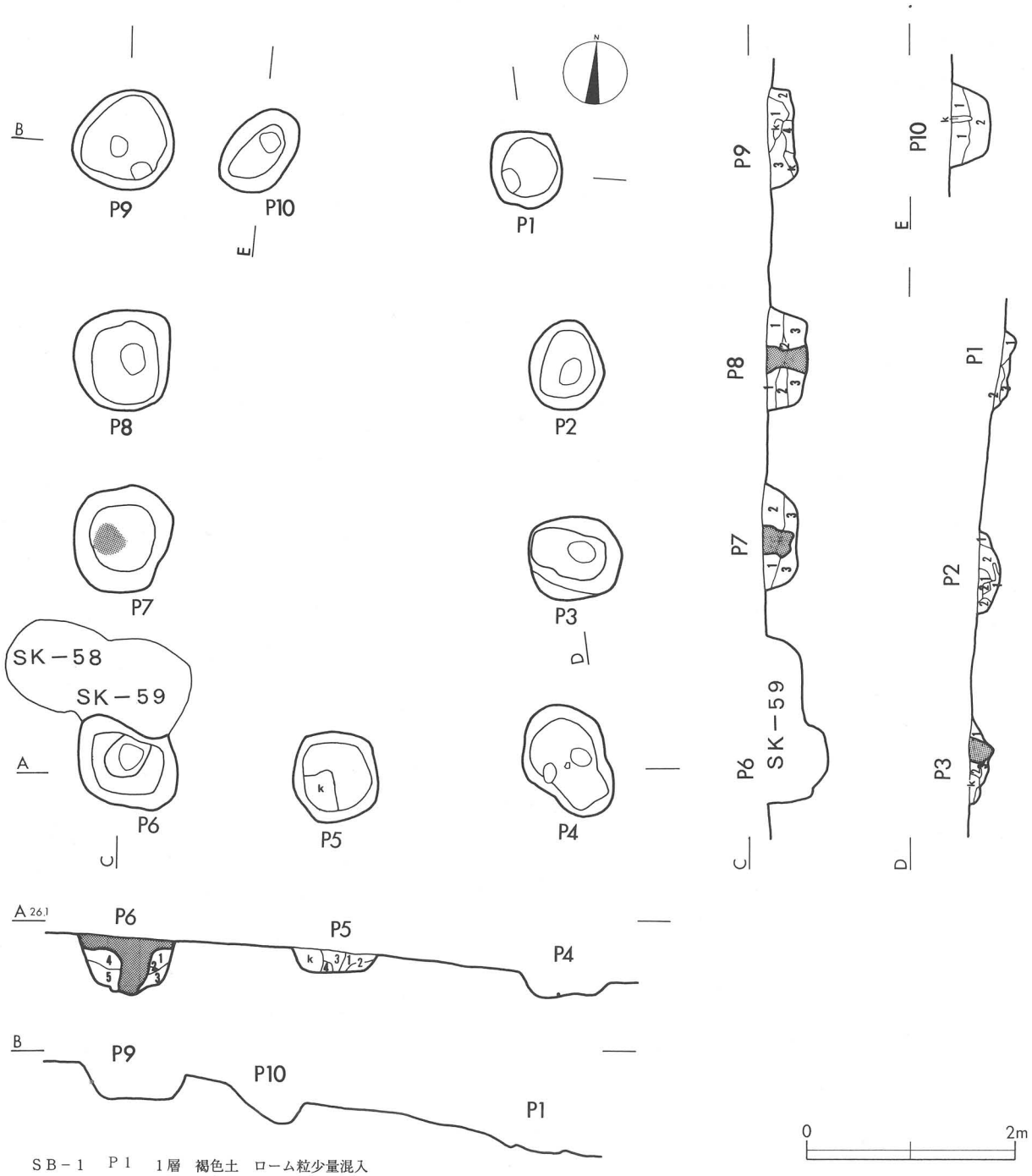
第1号掘立柱建物跡（旧第1号掘立柱建物跡）（第105図　PL11）

位置　調査区の南方、南東方向に張り出した尾根上で、建物の一部は標高26.00mから25.00mの傾斜約10°の斜面に立地する。調査区はT－31区他にあたる。柱穴中のP6は第59号土坑と重複関係にあり、第59号土坑の方が新しい。　**規模と平面形**　P1～P10の10本の柱穴から構成され、P1とP10は柱穴の全体の並びや深さからすると逸脱するものである。建物の形態は長方形を呈する。長辺は6.5mで短辺が5.0mである。**主軸方向**　N－5°－W　**柱間構造**　桁行3間×梁行2間　**柱間寸法**　桁行P1から1.9→1.7→1.9m。梁行P4から2.3→1.9m。桁行P6から2.0→1.7→2.0m。梁行P9から1.4→2.5mである。　**覆土**　柱穴の柱痕はP3・6・7・8に確認された。柱痕の確認された柱穴の土層では、柱痕の両側にはほぼ水平に土層の堆積が見られた。　**遺物**　実測に耐えうるものはなく土器小片のみの出土である。　**所見**　本建物の使用時期は他の遺構の配置関係から平安時代9世紀前葉から中葉のものと考えられる。

第2号掘立建柱建物跡（旧第3号掘立柱建物跡建物）（第107図・第108～110図№1～17　PL11・30・31）

位置　調査区の南方、南東方向に張り出した尾根上で、標高26.75mから25.75mの傾斜地に立地する。調査区はQ－33区他にあたる。柱穴中のP6は第28号住居跡と重複関係にあり、弥生時代のものであり古い。　**規模と平面形**　P1～P12の12本の柱穴から構成され、建物の各辺はP1～P4は7.1m、P4～P7は7.5m、P7～P10は7.2m、P10～P1は7.0mであり南側に面した一辺が他の長さより長くなる台形状を呈する。この掘立柱建物の北西側には浅い溝が確認された。P10のところで東方向と南方向に曲がっている。本来はもう少し東、南に展開するものと思われる。　**主軸方向**　N－6°－E　**柱間構造**　桁行3間×梁行3間　**柱間寸法**　P1から2.0→2.0→2.1m。P4から1.9→2.4→2.3m。桁行P7から2.0→2.1→2.1→2.1m。P10から2.1→1.8→2.1mである。P5－P6とP6－P7の間口が他のものに比べて広くなっている。　**柱穴**　各柱穴の平面形は、方形を呈するものもあれば円形を呈するものもあり、それぞれの1辺または直径が1mを超す。深さは、この遺構の立地が傾斜地であるため掘り方底面の標高で表現すると、建物の四辺の中でP1－P10は底面の標高がそれぞれほぼ25.5mを示す。P7－P10は4本の柱穴底面が南から北に徐々に高くなっている。P7－P10の高低差は20cmである。P4－P7ではP4・P7が同様なレベルを示しP5・P6が同様のレベルを示す。P1－P4はP1を除き南側の柱から北方向へ徐々に掘り方底面の深さが高くなっている。P2－P4で20cmの高低差がある。柱痕は全部の柱穴から確認され、柱痕の平面形は直径20～30cmの円形のものと、長径40・短径30cmの楕円形のものなどが見られる。柱痕の平面形が大きいものは建物南側の柱穴に目立つ。土層断面図中で柱痕が底面まで達するものはP5のみで他のものは達していない。柱穴の底面に柱穴の根当たり痕らしいものは見られなかった。柱痕底面のレベルは浅いもので25.9mで深いものでは25.2mまで達している。多くの柱痕は底面が25.6～25.7mまでのものである。柱痕の確認された柱穴の土層では、柱痕の両側にはほぼ水平に土層の堆積が見られた。P6・8・10の柱痕の覆土上層からは、焼けたスサ入り粘土の壁土塊や炭化物が出土した。壁土塊は被熱を受けたらしく赤化していた。またP8の底面中央からは花崗岩が2個出土した。

溝　溝底面は平坦で、幅は最大で2.6mを測り、狭いところでは1.5mを示す。溝の深さは標高の高いところ



SB－1　P1　1層　褐色土　ローム粒少量混入
2層　褐色土　しまり弱
3層　褐色土　しまり弱　灰白色粘土混入

P2　1層　褐色土　ローム粒少量混入
2層　褐色土　しまり弱

P3　1層　褐色土　しまり弱　ローム粒多量に混入
2層　暗黄褐色土　粘性強　しまり弱
3層　暗褐色土　粘性弱

P5　1層　褐色土　ローム粒少量混入
2層　褐色土　ローム多量に混入
3層　褐色土　しまり弱　ローム少量混入
4層　褐色土　しまり弱　ローム少量混入

P6　1層　褐色土　ローム多量,灰白色粘土少量混入
2層　褐色土　灰白色粘土ブロック混入
3層　褐色土　ローム多量に混入
4層　暗褐色土　しまり弱　ローム粒少量混入
5層　褐色土　ローム多量に混入

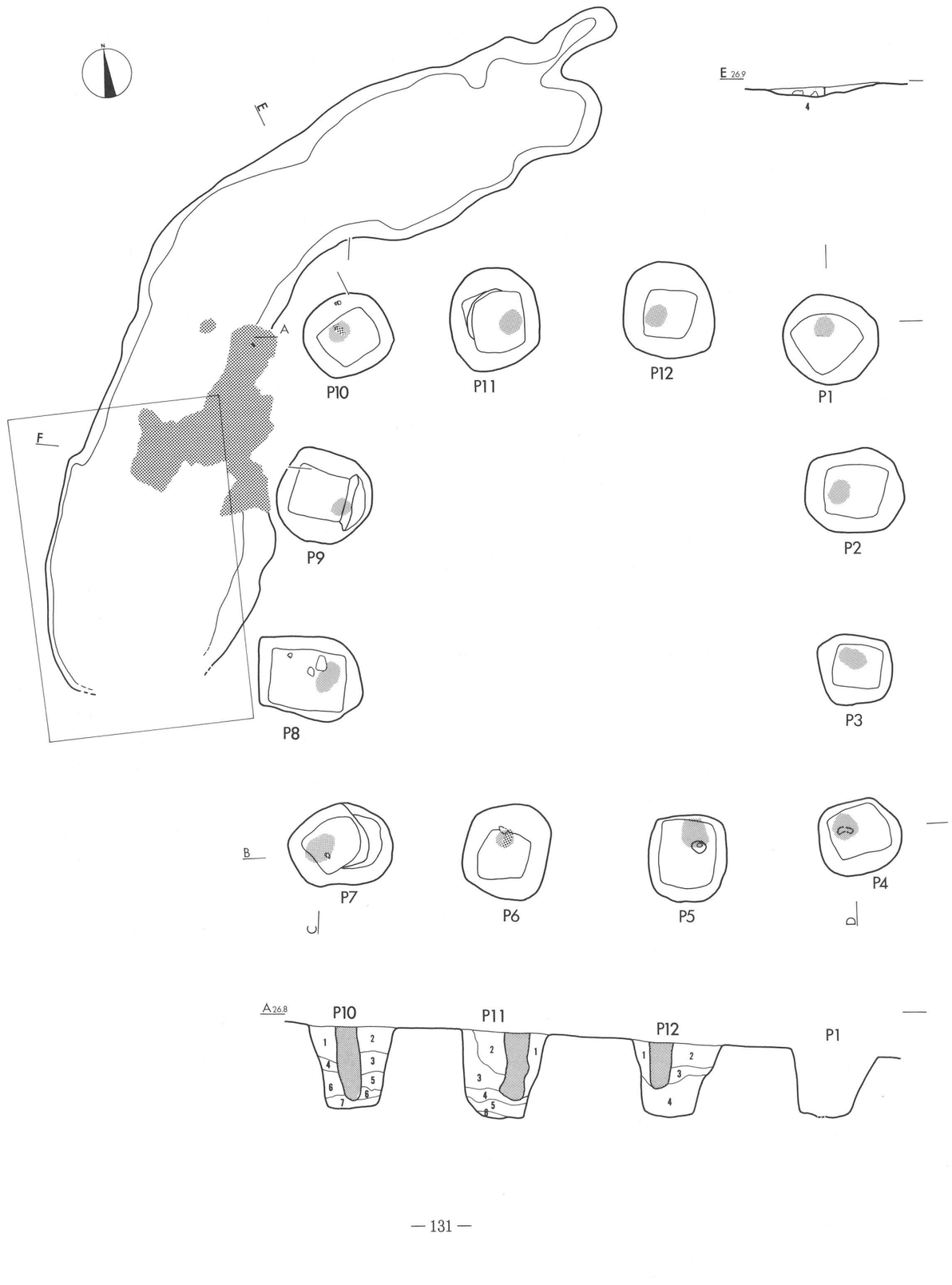
P7　1層　褐色土　ローム粒少量混入
2層　褐色土　しまり弱　ローム粒少量混入
3層　褐色土　ローム粒少量混入

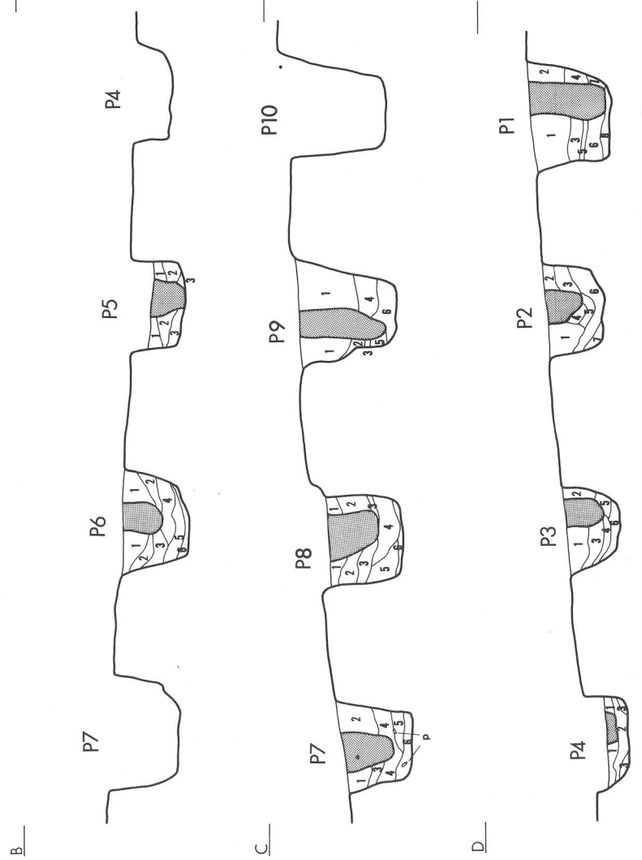
P8　1層　褐色土　ローム粒少量混入
2層　褐色土　ローム粒少量混入
3層　褐色土　ローム粒少量混入

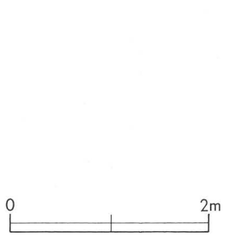
P9　1層　褐色土　しまり弱　ローム粒少量混入
2層　褐色土
3層　褐色土　しまり弱　ローム粒少量混入
4層　褐色土　しまり弱
5層　褐色土　しまり弱　ローム粒少量混入

P10　1層　褐色土　しまり弱　ローム粒少量混入
2層　明褐色土　粘性弱　黄白色砂質土混入

第105図　第１号掘立柱建物跡実測図







SX－3　1層　暗褐色土　焼土粒多量，炭化物・ローム粒少量混入
SB－2　2層　赤褐色土　焼土粒多量に混入
3層　褐色土　焼土粒多量に混入
4層　褐色土　しまり弱　ローム粒多量に混入
5層　褐色土　しまり弱　ローム粒多量に混入

SB－3，P1　1層　褐色土　ローム少量混入
SB－2　2層　褐色土　粘性弱
3層　褐色土　ローム・黄白色砂質土少量混入
4層　褐色土　粘性弱　ローム少量混入
5層　黄褐色土　しまり強　黄白色砂質土混入
6層　褐色土　ローム粒・黄白色砂質土少量混入
7層　褐色土　粘性・しまり弱
8層　褐色土　しまり強　黄白色砂質土混入

P2　1層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒少量混入
2層　褐色土　ローム粒少量混入
3層　黄褐色土　粘性強
4層　褐色土　粘性・しまり弱
5層　黄褐色土　粘性弱　ローム粒少量混入
6層　黄褐色土　しまり弱
7層　黄褐色土　粘性弱　ローム粒少量混入

P3　1層　褐色土
2層　黄褐色土　粘性弱
3層　黄褐色土　粘性弱　ローム粒少量混入
4層　黄褐色土　しまり強　黄灰白砂質土混入
5層　褐色土
6層　褐色土　粘性・しまり強　黄白色砂質土多量に混入

P4　1層　褐色土　粘性・しまり弱
2層　明褐色土　しまり強　ローム・黄白色砂質土混入
3層　褐色土　ローム粒少量混入

P5　1層　褐色土
2層　褐色土　黄白色砂質土混入
3層　褐色土　粘性強　しまり弱　黄白色砂質土混入

P6　1層　褐色土　炭化粒混入
2層　褐色土　しまり弱　黄白色砂質土混入
3層　褐色土　黄白色砂質土混入
4層　褐色土
5層　褐色土　しまり強　黄白色砂質土混入
6層　褐色土　しまり極めて強　粘性強　炭化物少量，黄白色砂質土混入

P7　1層　褐色土　しまり強　黄白色砂質土多量に混入
2層　褐色土　粘性弱　黄白色砂質土少量混入
3層　黄褐色土　しまり強　ローム粒少量混入
4層　褐色土
5層　褐色土　しまり強
6層　褐色土　粘性強　しまり弱　黄白色砂質土混入

P8　1層　褐色土　粘性・しまり弱　焼土粒・ローム粒少量混入
2層　褐色土　粘性弱　ローム粒少量，黄白色砂質土混入
3層　褐色土　黄白色砂質土多量に混入
4層　褐色土　黄白色砂質土少量混入
5層　褐色土　粘性弱　黄白色砂質土混入
6層　褐色土　粘性強　しまり弱　黄白色砂質土混入

P9　1層　明褐色土　粘性弱　ローム粒・黄白色砂質土少量混入
2層　褐色土　ローム粒少量，黄白色砂質土混入
3層　黄褐色土　しまり強　黄白色砂質土混入
4層　褐色土　粘性弱　ローム少量，黄白色砂質土混入
5層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒少量混入
6層　褐色土　粘性強　しまり弱　黄白色砂質土混入

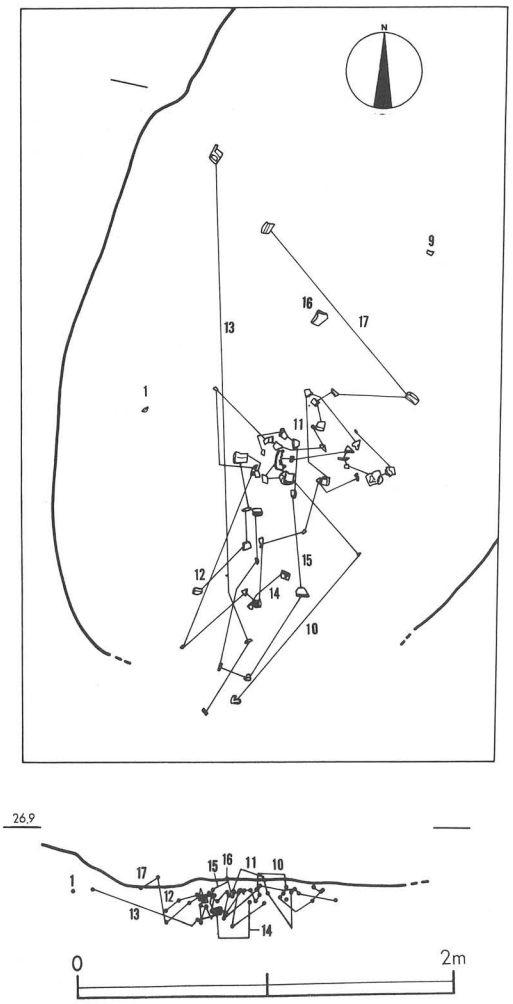
P10　1層　明褐色土　しまり強　黄白色砂質土混入
2層　褐色土　粘性弱
3層　褐色土　しまり強　ローム粒少量混入
4層　褐色土　粘性・しまり弱
5層　褐色土　ローム粒少量混入
6層　明褐色土　しまり弱　ローム少量，黄白色砂質土微量混入
7層　褐色土　しまり強　黄白色砂質土混入

P11　1層　黄褐色土　粘性弱　ローム少量，黄白色砂質土混入
2層　褐色土
3層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒少量混入
4層　黄褐色土　ローム粒多量に混入
5層　褐色土　ローム少量混入
6層　褐色土　粘性強　ローム粒少量，黄白色砂質土混入

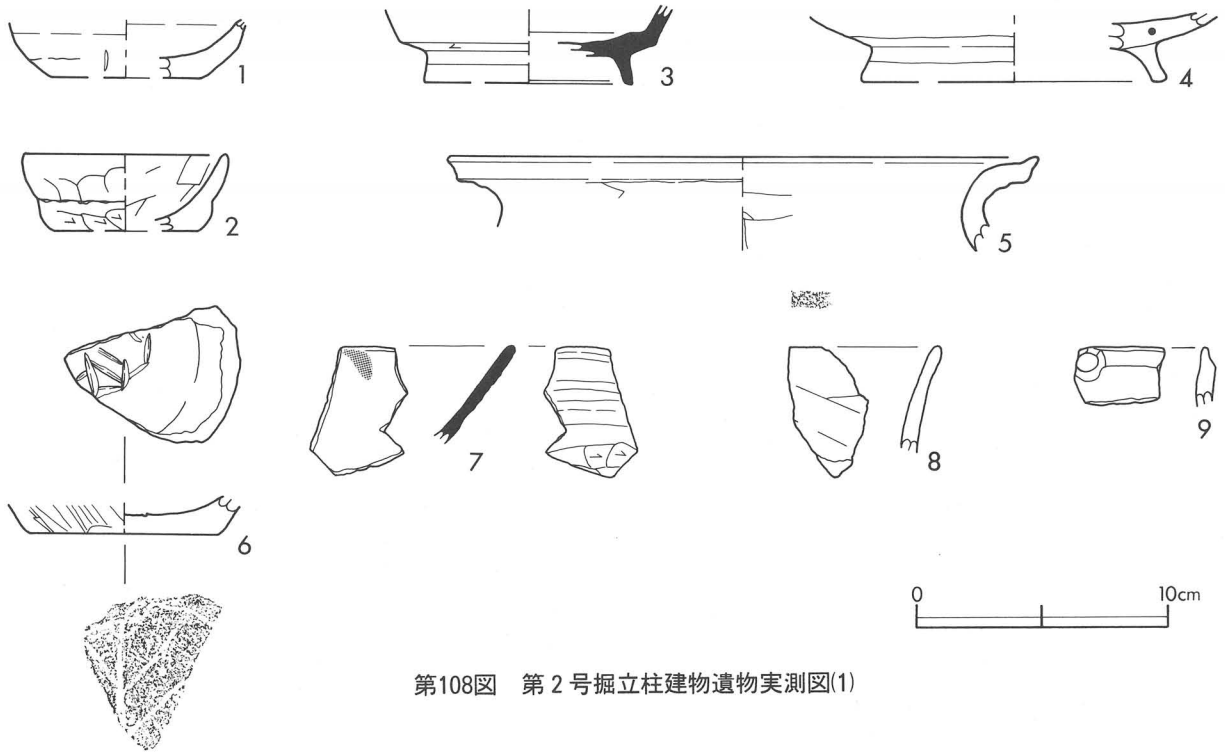
P12　1層　褐色土　粘性・しまり弱
2層　黄褐色土　黄灰色砂質土混入
3層　黄褐色土　黄灰色砂質土混入
4層　褐色土　しまり強　ローム粒多量，黄灰色砂質土混入

第106図　第２号掘立柱建物跡実測図

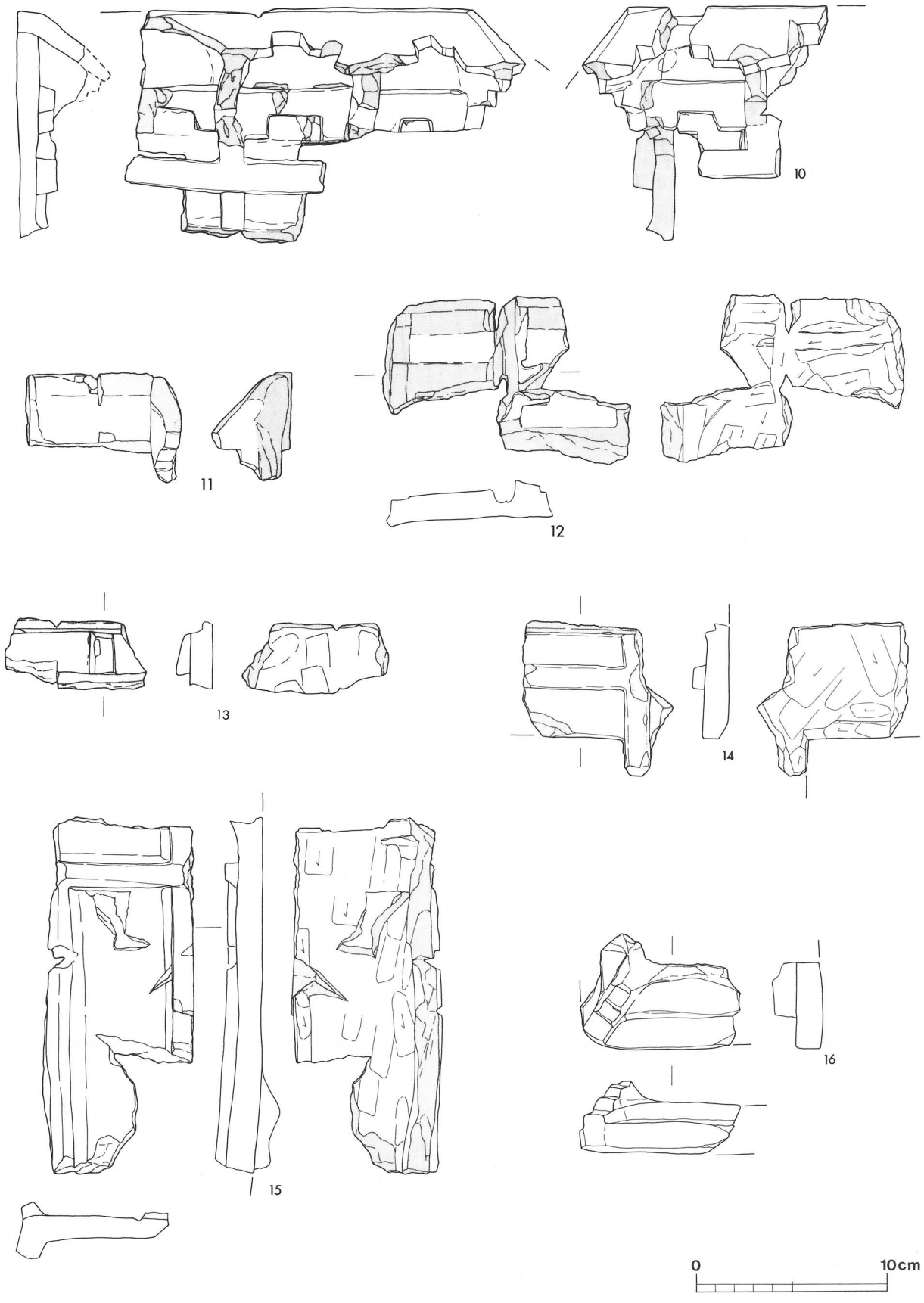
ほど壁の遺存状況が良く15cmを測る。標高が低くなる南側ほど壁の立ち上りもほとんどなくなり消滅する。溝の形状は、本建物跡の西側の柱の並びと平行し、北側の柱の並びとは平行にならず北側に開いている。P9・P10の近接地からは、やや風化し、焼けたスサ入り粘土の壁土塊が面的に検出された。厚さは4cmほどあり、この壁土の底面は還元状態になり黒くなっていた。　**遺物**　遺物は掘立柱建物跡の柱穴や溝から出土している。No.4はP5から出土し、No.5はP6から出土したものである。No.3・7は第28号住居跡4区から出土したものであるが、本建物跡と重複関係にあるため、本建物跡所属の遺物とした。他の遺物は溝から出土したものである。No.1・2は溝から出土した土師器小皿である。No.6・9は土師器甕破片である。No.8は弥生土器である。溝の南方からは瓦塔・瓦堂の小破片がまとまって出土した。これらは瓦塔・瓦堂初重軸部の破片である。溝から出土した瓦塔・瓦堂破片総数は98点であり、半数はそれぞれ接合関係にあり、接合していない資料は45点である。このうち8点を図化した。胎土は、いずれも粗砂粒主体で、雲母粒子・石英粒子・長石粒子を含む。焼成は酸化焔焼成で、やや軟質である。色調は、にぶい黄橙色～橙色である。No.10～12は、斗栱部破片である。No.10は、詳細な斗栱部表



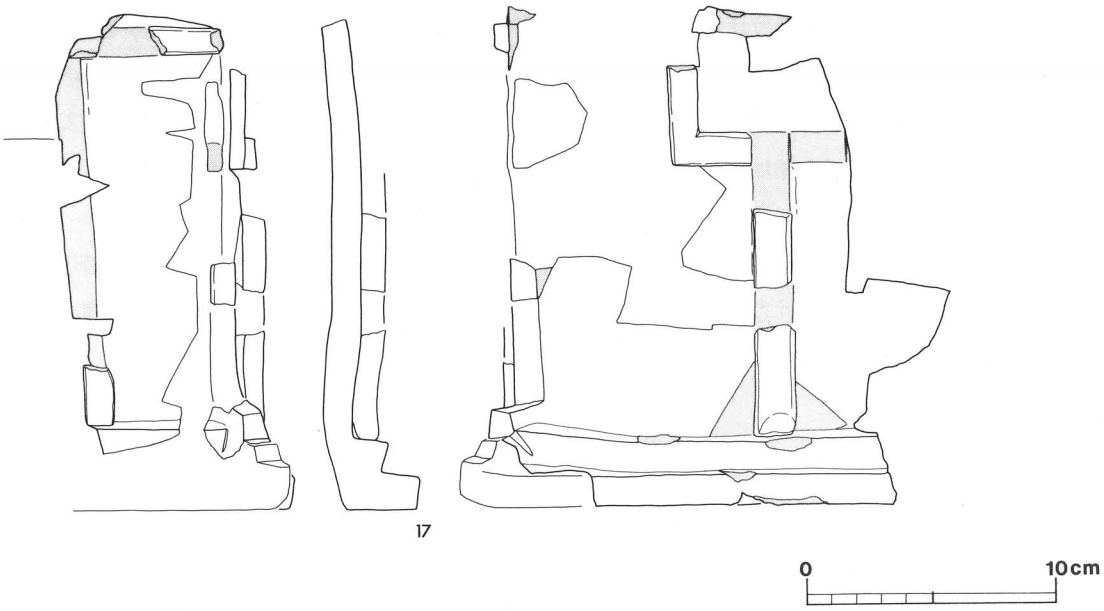
第107図　第2号掘立柱建物跡遺物出土状況図



第108図　第2号掘立柱建物遺物実測図(1)



第109図　第２号掘立柱建物遺物実測図(2)



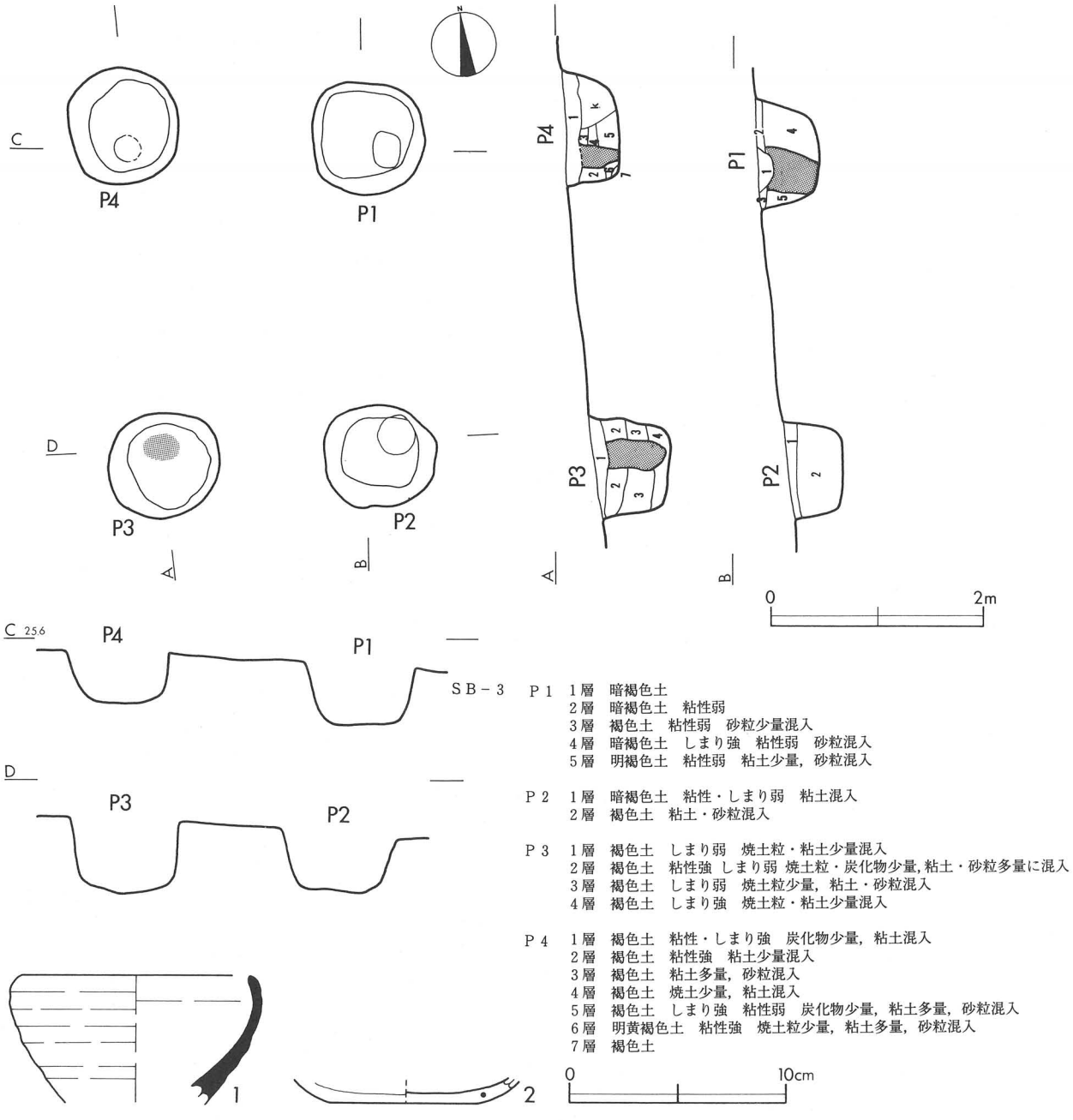
第110図　第２号掘立柱建物遺物実測図(3)

現が施されていることより初重軸部と考えられる。以下に、その特徴を記す。（ｉ）逆凸字形表現の抽象化が進んだ壁付き三斗と横架材状の斗栱粘土帯（通肘木に当たる）が配されている。大斗表現が本来ある箇所は欠損しており不明である。（ii）持ち送りは、通肘木状斗栱粘土帯上～壁付き三斗にかけての位置に付けられ、軸部上端からの斜め張り出しと接する。持ち送りは、２段に板材を刻み出している。なお、持ち送り部分が粘土帯の凹み（第109図 No.12）にはめ込まれている。（iii）斜め張り出し先端に、手先三斗を逆凸字状に切り出し表現している。No.13は横架材状の粘土帯脇に持ち送り状の突起が表されている。No.14は、初重軸部入口部分破片と思われる。入口部分の端部は、ヘラ状工具による丁寧なナデ調整が施されている。縦方向には入口部柱を表現した粘土帯が、また横方向には長押状の横架材粘土帯が配されている。壁内面は、ヘラ削り調整がなされる。No.15・16は初軸部・基壇部分破片である。No.15は台輪を表す横方向の粘土帯、入口部分柱を表わす縦方向の粘土帯を残している。またＬ字状に曲がる隅棟部分外面に隅柱を表す縦方向の粘土帯が貼り付けられている。No.16は軸部上端が欠損しているが、Ｌ字状に曲がる隅部分外面に、隅柱痕跡がある。No.17は（ｉ）桁行に

第２号掘建柱建物跡

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	土師器	小皿		(2.1)	(5.8)	橙	長石・石英	良	４０	底面から緩く立ち上がる 口唇部をナデながらつまみ上げる 外面に輪積痕あり 内外面ナデ
2	土師器	小皿	(8.2)	3.0	(6.0)	にぶい褐	長石・石英・雲母	良	３０	器面に輪積痕を明瞭に残す 底部側縁ヘラ削り 内面ヘラナデ 底面ヘラ削り
3	須恵器	高台坏		(2.9)	(8.3)	灰	長石・赤色粒	良	２０	やや直立した高台が付される 坏部に明瞭な稜を持ち体部立ち上がる
4	土師器	高台坏		(2.7)	(12.2)	にぶい黄橙	長石・石英・雲母	普	２０	ロクロ成形 高台が「ハ」の字状に開く 内面黒色処理・ヘラミガキ
5	土師器	甕	(23.6)	(3.7)		橙	長石・石英	良	5	口縁部湾曲して外反し、口唇部外傾する 外面輪積痕残る 内面ナデ
6	土師器	甕		(2.1)	(7.7)	橙	長石・石英	普	5	外面ヘラミガキ 内面ヘラ痕 底面木葉痕
7	須恵器	坏		(3.8)		灰	長石	普	１０	体部下端手持ちヘラ削り 口縁部内面にタール付着
8	弥生土器	甕		(4.3)		黒褐	砂粒	普	5	直立する口縁部 横ナデ 口唇部に回転縄文施文
9	土師器	甕		(2.2)		にぶい黄褐	長石・石英	普	2	口唇部粘土紐の継ぎ目 外面横ナデ 内面横ナデ
番号	種類	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	色調	胎　土	焼成	残存部位	特　徴　・　そ　の　他
10	土製品	瓦塔	(12.2)	(21.1)	1.2	橙	長石・石英・赤色粒	普	初軸部	斗栱部分 裏面輪積痕 15破片接合
11	土製品	瓦塔	(5.7)	(8.2)	1.3	にぶい橙	長石・石英・赤色粒	普	初軸部	斗栱部分 3破片接合
12	土製品	瓦塔	(8.9)	(12.4)	1.4	にぶい黄橙	長石・石英・赤色粒	普	初軸部	斗栱部分 裏面輪積痕 3破片接合
13	土製品	瓦塔	(8.4)	(7.9)	1.3	にぶい橙	長石・石英・赤色粒	普	初軸部	斗栱部分 裏面輪積痕 2破片接合
14	土製品	瓦塔	(3.6)	(7.6)	1.2	にぶい黄橙	長石・石英・赤色粒	普	初軸部	壁体入り口部分 裏面輪積痕
15	土製品	瓦塔	(9.9)	(14.0)	1.3	にぶい黄橙	長石・石英・赤色粒	普	初軸部	壁体入り口部分 裏面輪積痕 11破片接合
16	土製品	瓦堂	(18.6)	(7.9)	1.6	明黄褐	長石・石英・赤色粒	普	初軸部	基壇部分 2段の基壇 器面荒れる
17	土製品	瓦堂	(18.6)	(20.0)	1.2	にぶい橙	長石・石英・赤色粒	普	初軸部	壁体入り口部分 2間×3間の作り 入り口側の柱間約5cm 他方の柱間約10cm 34破片接合

台輪を表す粘土帯剥離、入口部分柱を縦方向の粘土帯剥離痕、隅柱を表す縦方向の粘土帯剥離がある点、(ii)梁間側は入口部分がなく壁面中央柱が㔾字状に分岐し台輪に達している点、(iii)埼玉県東山遺跡瓦堂・千葉県谷津遺跡瓦堂の初重部分梁間表現に類似している点から、瓦堂初重部・基壇部破片として考えている。　**所見**　本建物跡と溝は、同様な焼けたスサ入り粘土の壁土塊が出土しているため同時期に存在したものと思われる。この掘立柱建物の壁にはスサ入りの壁土が使用されていた可能性が高いといえる。溝は、第2号掘立柱建物跡の西・北側に位置し、同建物跡に付随した施設と考えられる。第39号住居跡の床面近くや南西埋没谷からも同一の瓦塔の破片と考えられるものが出土している。本建物跡の時期は出土した瓦塔や南西埋没谷出土の遺物と同様な平安時代9世紀前葉から中葉のものと考えられる。



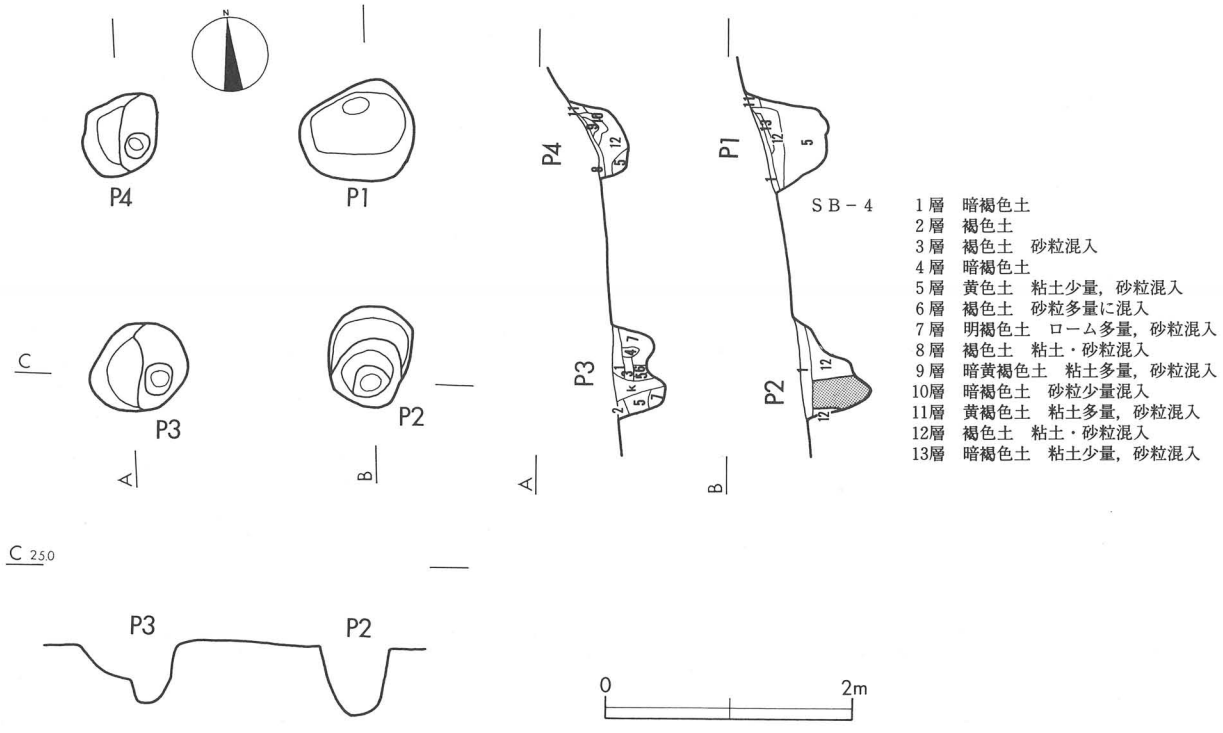
第111図　第3号掘立柱建物跡実測図・出土遺物実測図

第３号掘立柱建物跡（旧第２号掘立柱建物跡）（第111図　ＰＬ12）

位置　調査区の南方、南東方向に張り出した尾根の先端で、標高25.5mから25mの傾斜地に立地する。調査区はＵ－34・35区他にあたる。近接して第４号掘立柱建物跡が存在する。確認面の傾斜は南北・東西方向に５°である。　**規模と平面形**　Ｐ１～Ｐ４の４本の柱穴から構成され、建物の各辺はＰ１－Ｐ２は3.9m、Ｐ２－Ｐ３は3.0m、Ｐ３－Ｐ４は4.2m、Ｐ４－Ｐ１は3.2mであり南北方向に長い長方形を呈する。　**主軸方向**　Ｎ－２°－Ｅ　**柱間構造**　桁行１間×梁行１間　**柱間寸法**　Ｐ１からＰ２の順序で2.7→2.2→2.7→2.4mである。Ｐ１－Ｐ２とＰ３－Ｐ４の間口は同一である。　**柱穴**　各柱穴の平面形は、皆直径１mの円形を呈する。深さは、この遺構の立地が傾斜地であるため掘り方底面の標高で表現すると、Ｐ１は24.81m・Ｐ２は24.56m・Ｐ３は24.57m・Ｐ４は25.02mである。Ｐ１・Ｐ４に比べＰ２・Ｐ３は深く掘り込まれている。柱穴が掘り込まれた地山は砂層である。柱痕は全部の柱穴から確認され、柱痕の平面形は直径20～30cmの円形のものと、長径35・短径25cmの楕円形のものなどが見られる。土層断面図中で柱痕が底面まで達するものはＰ１・Ｐ４である。柱痕の確認された柱穴の土層は、柱痕の両側にほぼ水平に土層の堆積が見られた。　**遺物**　掘立柱建物跡から出土したものでNo.１は須恵器の鉄鉢形土器である。No.２は内面黒色処理された土師器坏底部で、南西埋没谷出土のものと接合した。　**所見**　本建物は、他の掘立建柱建物跡群と同様な主軸方向を持つため使用された時期は、平安時代９世紀前葉から中葉のものと考えられる。

第３号掘建柱建物跡

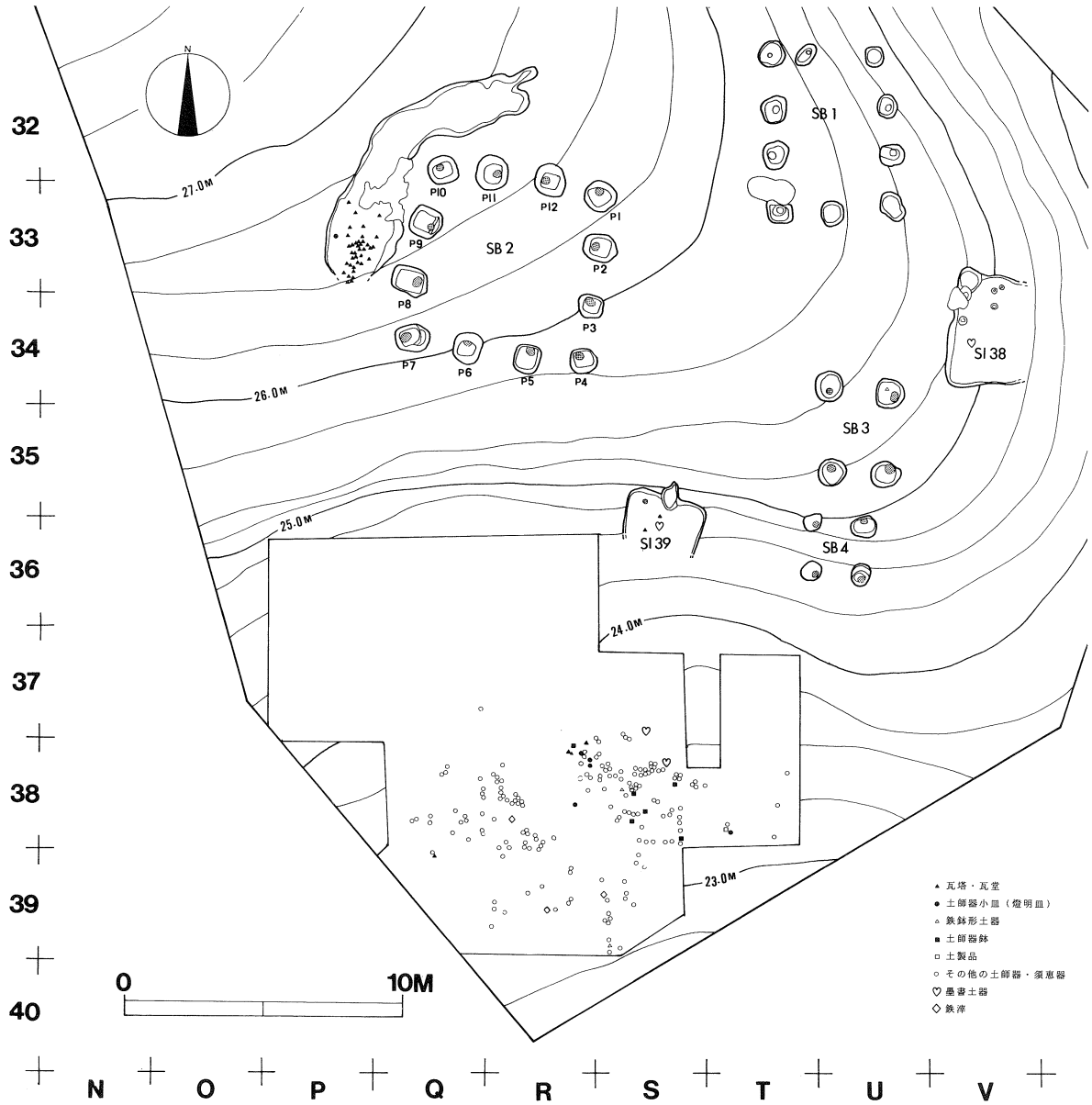
番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	須恵器	鉄鉢	(11.0)	(5.9)		黄灰	砠	良	２０	口唇部やや厚み増す 口唇部内湾 底部に近いほど器厚増す P1出土
2	土師器	坏		(1.0)	(7.0)	橙	砠・砾・雲母	普	２０	内面黒色処理・ミガキ 底面回転ヘラ切り・削り P2とQ-36区出土土器が接合



第112図　第４号掘立柱建物跡遺物実測図

第４号掘立柱建物跡（旧第４号掘立柱建物跡）（第112図　ＰＬ12）

位置　調査区の南方、南東方向に張り出した尾根の先端で、標高25mから24.25mの傾斜が若干緩くなる変換点にあたる。調査区はＵ－36区他にあたる。近接して第３号掘立柱建物跡が存在する。確認面の傾斜は変換点前が35°で変換点後は約10°である。　**規模と平面形**　Ｐ１～Ｐ４の４本の柱穴から構成され、建物の各辺はＰ１－Ｐ２は2.6m、Ｐ２－Ｐ３は2.5m、Ｐ３－Ｐ４は2.5m、Ｐ４－Ｐ１は2.5mでありほぼ正方形を呈する。**主軸方向**　Ｎ－３°－Ｅ　**柱間構造**　桁行１間×梁行１間　**柱間寸法**　Ｐ１からＰ２の順序で（2.2）→1.7→1.8→1.8mである。Ｐ２－Ｐ３とＰ３－Ｐ４の間口は同様である．　**柱穴**　各柱穴の平面形は、皆直径80～70cmの円形を呈する。深さは、この遺構の立地が傾斜地であるため掘り方底面の標高で表現すると、Ｐ１は23.16m・Ｐ２は22.83m・Ｐ３は22.93m・Ｐ４は23.23mである。Ｐ１・Ｐ４に比べＰ２・Ｐ３は深く掘り込まれている。柱穴が掘り込まれた地山は砂層である。柱穴の柱痕はＰ２のみから確認されたが、それぞれの掘り方底面には柱の痕跡と考えられる凹みが確認された。　**遺物**　小破片のみである。　**所見**　本建物は、他の掘立柱建物跡群と同様な主軸方向を持つため使用された時期は、平安時代９世紀前葉から中葉のものと考えられる。



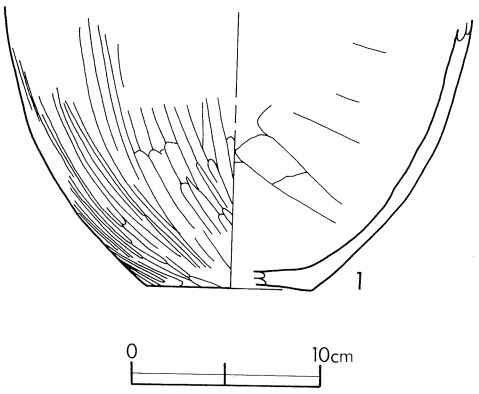
第113図　掘立柱建物跡配置図

5．古墳（ＴＭ）

古墳は全部で３基確認されている。３基のうち２基は周溝を持つものであるが、１基は周溝を持たず埋葬施設のみのものである。本来的に言えば周溝を持たないものを古墳と呼ぶかどうかという問題があるが、ここでは表記上古墳として表現している。またこの周溝を持たない埋葬施設を主体部と呼ぶことには疑問があるので埋葬施設として表現する。検出された位置は３基のうち２基は台地上、他の１基は台地斜面から確認された。

第１号古墳（旧第１号古墳）（第114～116図・第114図№１　ＰＬ12）

位置　本古墳は標高28.0m前後の緩い傾斜地に存在する。　**周溝**　周溝の各辺の長さはそれぞれ異なり、北辺約12m、東辺10m、南辺13m、西辺11mであり、不整方形を呈する。周溝の断面は鍋底状を呈し、幅は約１ｍである。　**主体部**　主体部は周溝区画内の中央やや南寄りに設けられている。主体部の主軸はＷ－37°－Ｎで周溝の主軸はＷ－29°－Ｎと異なり、ずれる。周溝の南側には掘り残されたブリッジが存在し、その中央部分は周溝の主軸ライン上にある。主体部の長軸は現状で3.5mを測り、短軸は約１mを測る。主体部の構造は、板状の絹雲母片岩を組み合わせた横穴式の構造が想定される。後世の改変により埋葬施設を構成する石材は皆抜き取られており、その痕跡のみが残る。　**遺物**　遺物は主体部からは見られず、北側の周溝中細かく割れ、覆土上層から土師器甕が出土した。この個体は口縁部付近の破片はなく、皆胴部以下の破片である。



第114図　第１号古墳出土遺物実測図

第１号古墳

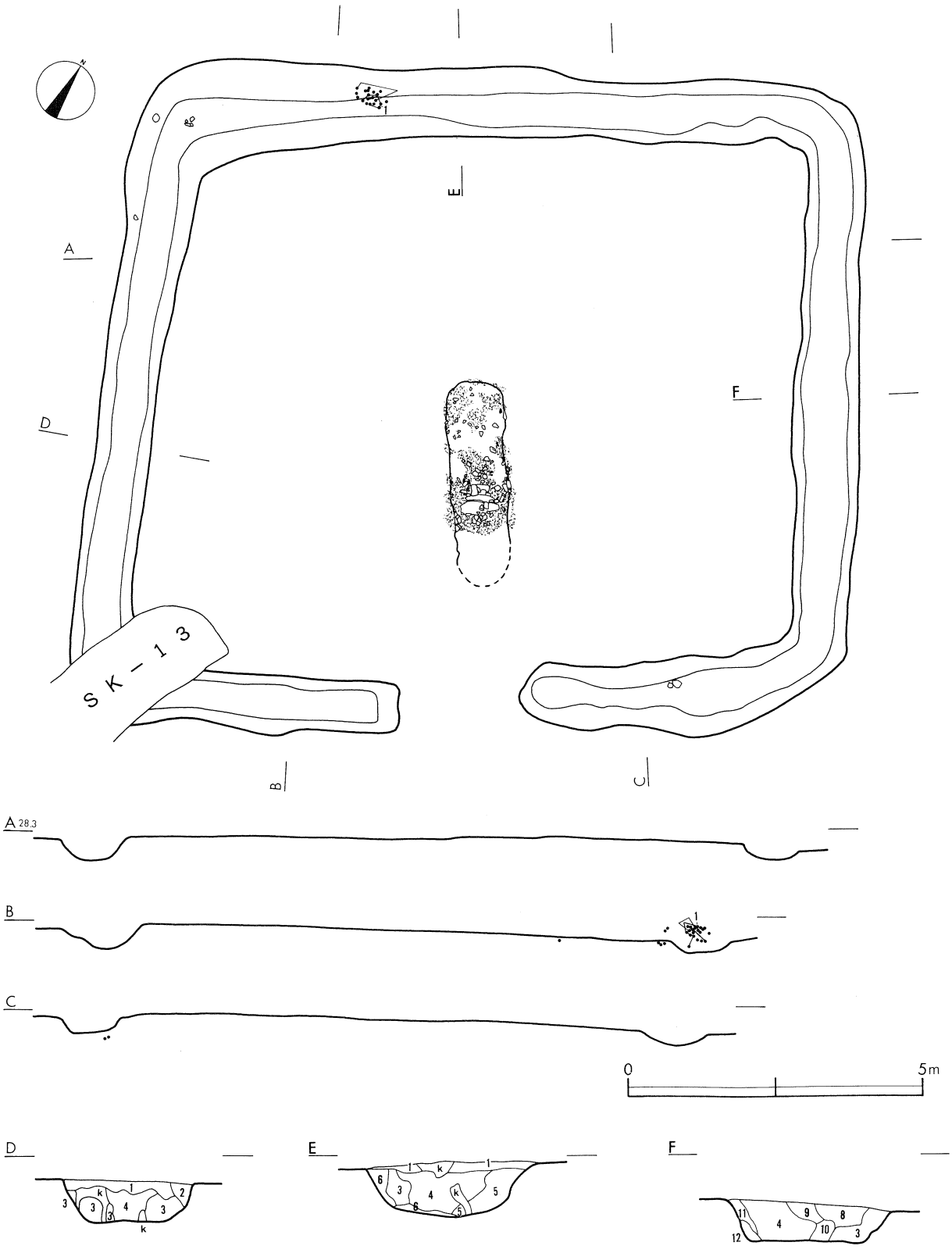
番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	土師器	甕		(14.5)	8.8	にぶい黄橙	長石・石英	良	３０	底部から丸みを持って立ち上がる 胴部・底面ヘラミガキ 内面ヘラナデ

第２号古墳（旧第２号古墳）（第117～118図　ＰＬ13）

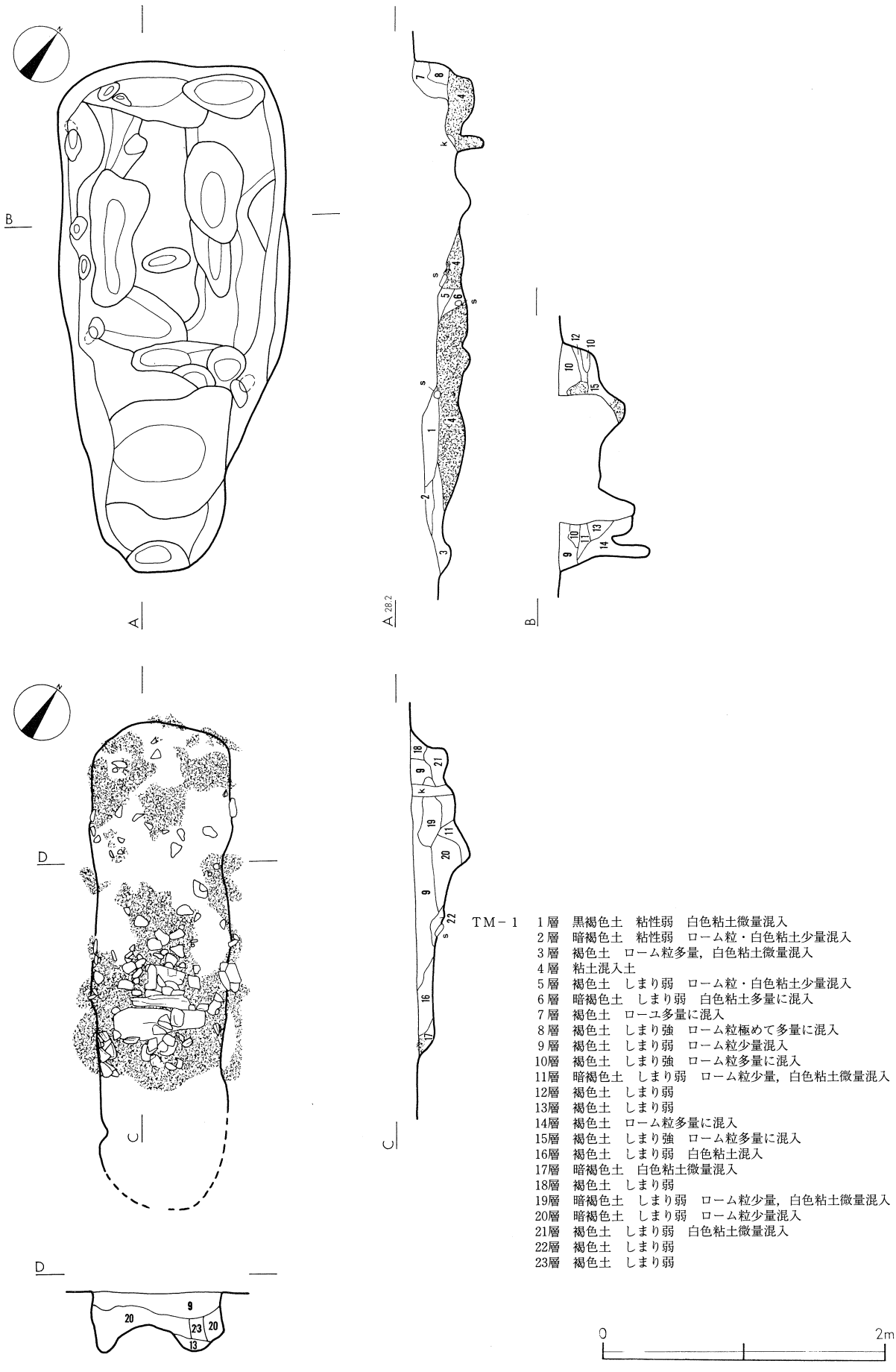
位置　本古墳は標高26.0mの傾斜地に存在する。　**周溝**　周溝は方形を意識したものと思われるが、南側の一辺は斜面最低位のためか現状では遺存しない。周溝の深さは北側の一辺が一番深く、東西周溝の底面は傾斜し徐々に浅くなる。北北西辺の長さは10.8mを測る。　**主体部**　主体部の主軸はＷ－50°－Ｎで周溝の主軸はＷ－57°－Ｎと異なり、ずれる。主体部の長軸は現状で３ｍを測り、短軸は約２ｍを測る。主体部の構造は南南東に開口し、板状の絹雲母片岩を組み合わせた横穴式の構造が想定される。後世の改変により石室を構成する石材は皆抜き取られており、その痕跡と埋葬施設の床面に敷き詰められた同片岩の割石のみが残る。　**遺物**　遺物は主体部・周溝いずれからも見られなかった。

第３号古墳（旧第３号古墳）（第119図　ＰＬ13）

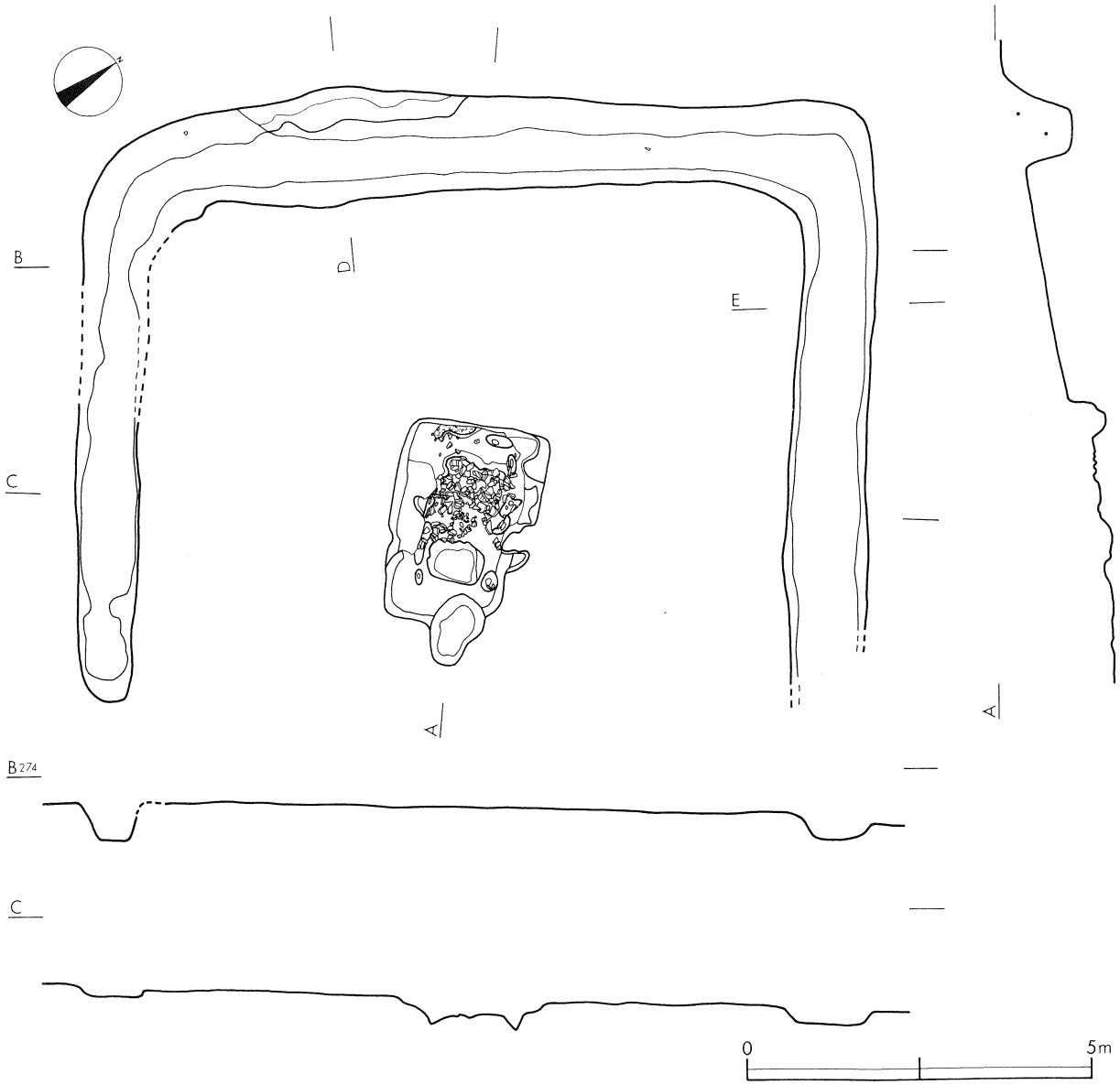
位置　第３号古墳としたものは埋葬施設のみが確認されたものである。位置的に第１・２号古墳の一部とは考え難いため独立したものとして扱うことにした。第２号古墳の北西方向約６ｍのところに位置し、周溝は存在しない。　**主体部**　この埋葬施設の構造は、3.3m×2.1mの長方形の掘り方とその内側2.2m×1.0mの埋葬施設を持つ。この施設の底面には壁溝が巡り、その壁の四隅には約50cm間隔で灰白色粘土が見られた。この埋葬施設には、本来絹雲母片岩の板石を並べた構造を持つものと考えられる。先の粘土は板石と板石との間を埋め

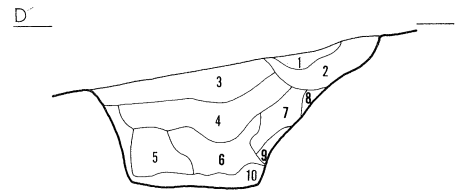


第115図　第１号古墳実測図



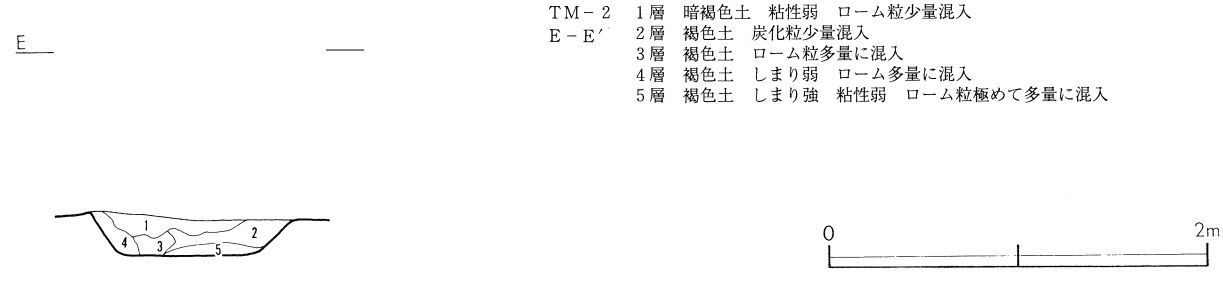
第116図　第１号古墳主体部実測図



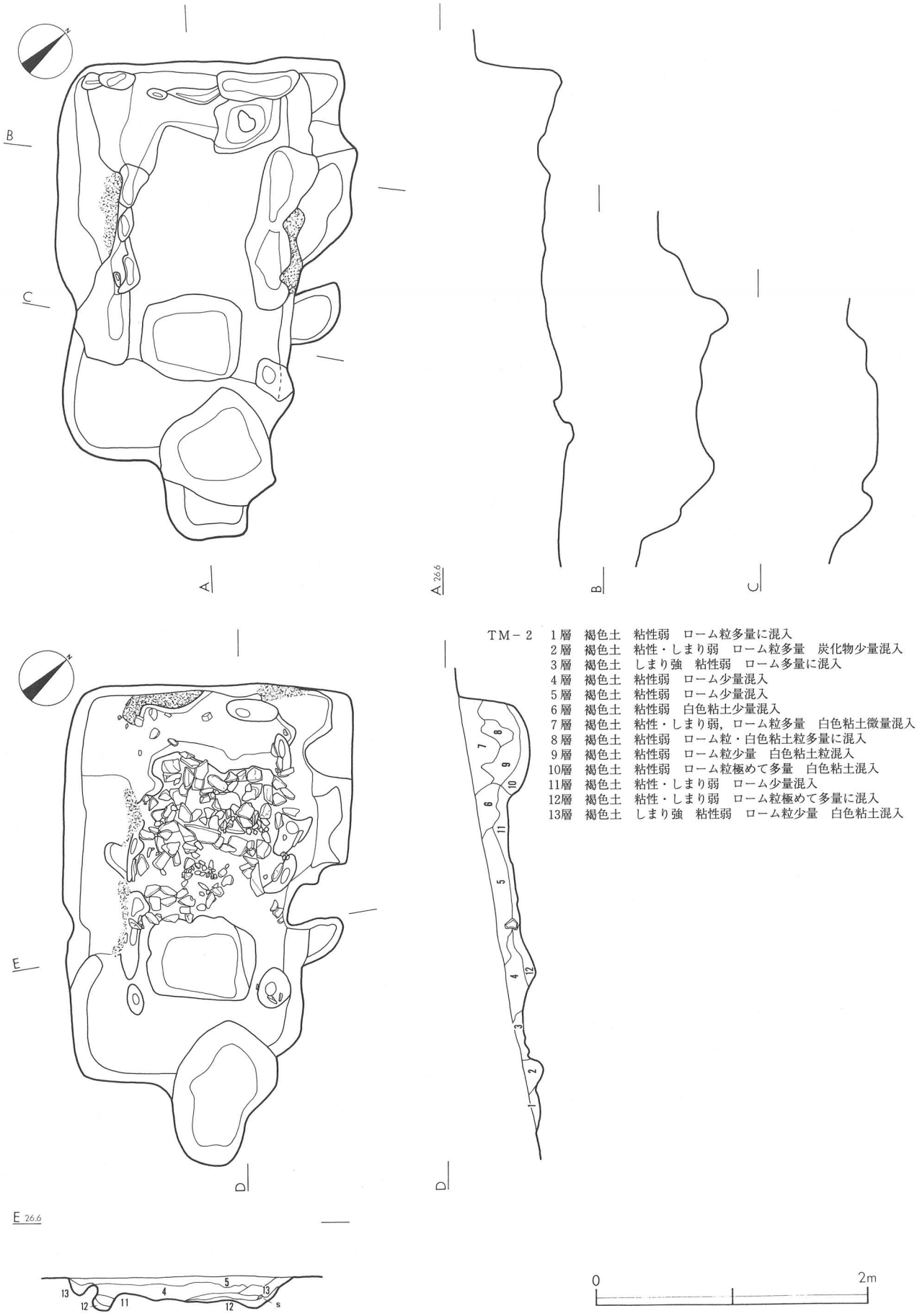


TM－2　1層　褐色土　粘性弱　炭化粒多量に混入
D－D′　2層　褐色土　ローム粒多量　焼土粒少量混入
3層　暗黄褐色土　しまり強　ローム粒多量　焼土粒炭化粒少量混入
4層　褐色土　焼土粒・ローム粒少量混入
5層　褐色土　ローム粒多量，焼土粒・炭化物少量混入
6層　褐色土　しまり弱，炭化粒・ローム粒少量混入
7層　褐色土　粘性弱　焼土粒・炭化物・ローム粒少量混入
8層　黄褐色土　ローム粒多量　炭化粒少量混入
9層　黄褐色土　ローム粒多量　炭化粒少量混入
10層　褐色土　しまり強　ローム粒極めて多量　炭化粒少量混入

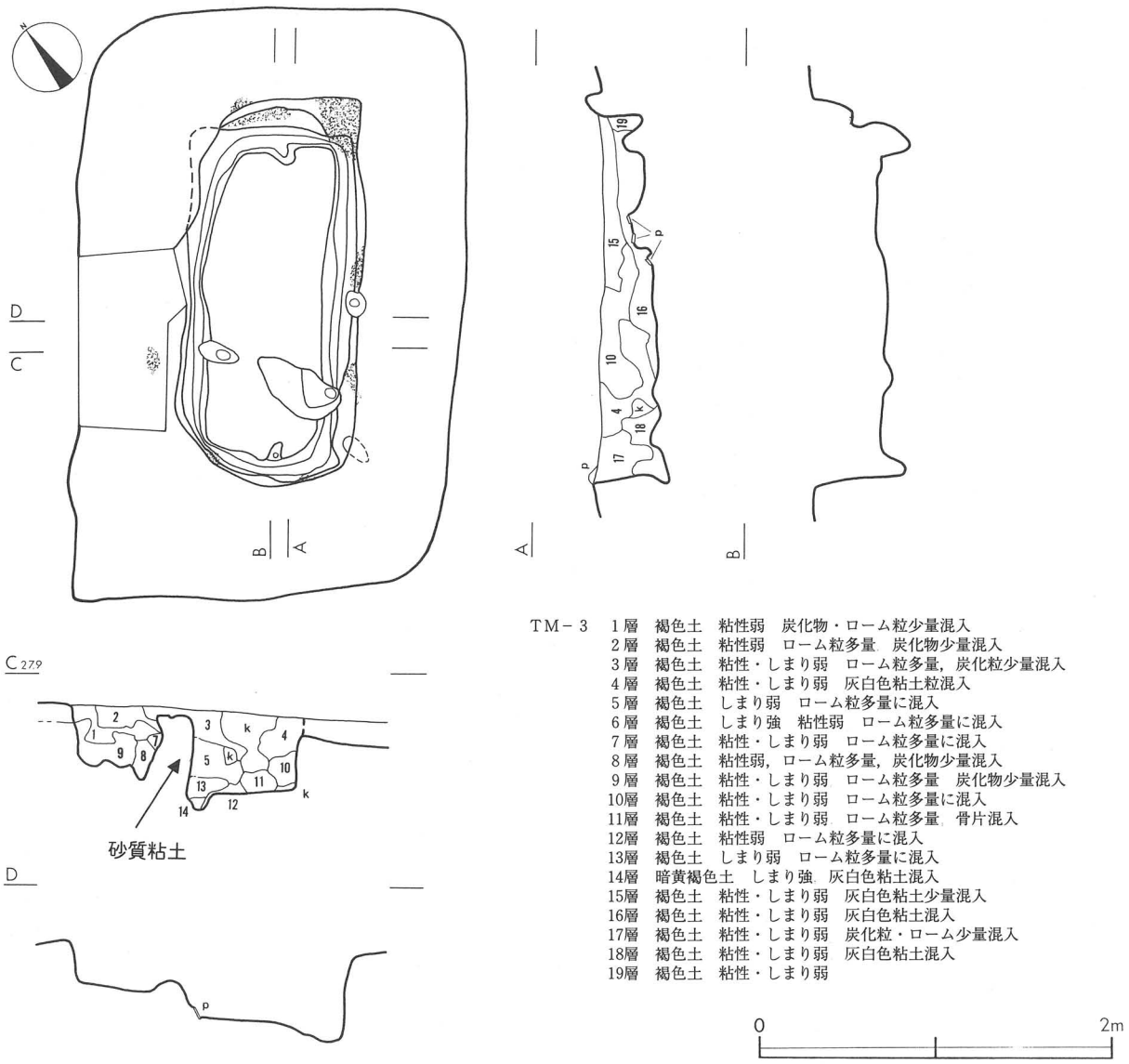
TM－2　1層　暗褐色土　粘性弱　ローム粒少量混入
E－E′　2層　褐色土　炭化粒少量混入
3層　褐色土　ローム粒多量に混入
4層　褐色土　しまり弱　ローム多量に混入
5層　褐色土　しまり強　粘性弱　ローム粒極めて多量に混入



第117図　第２号古墳実測図



第118図　第２号古墳主体部実測図



第119図　第３号古墳主体部実測図

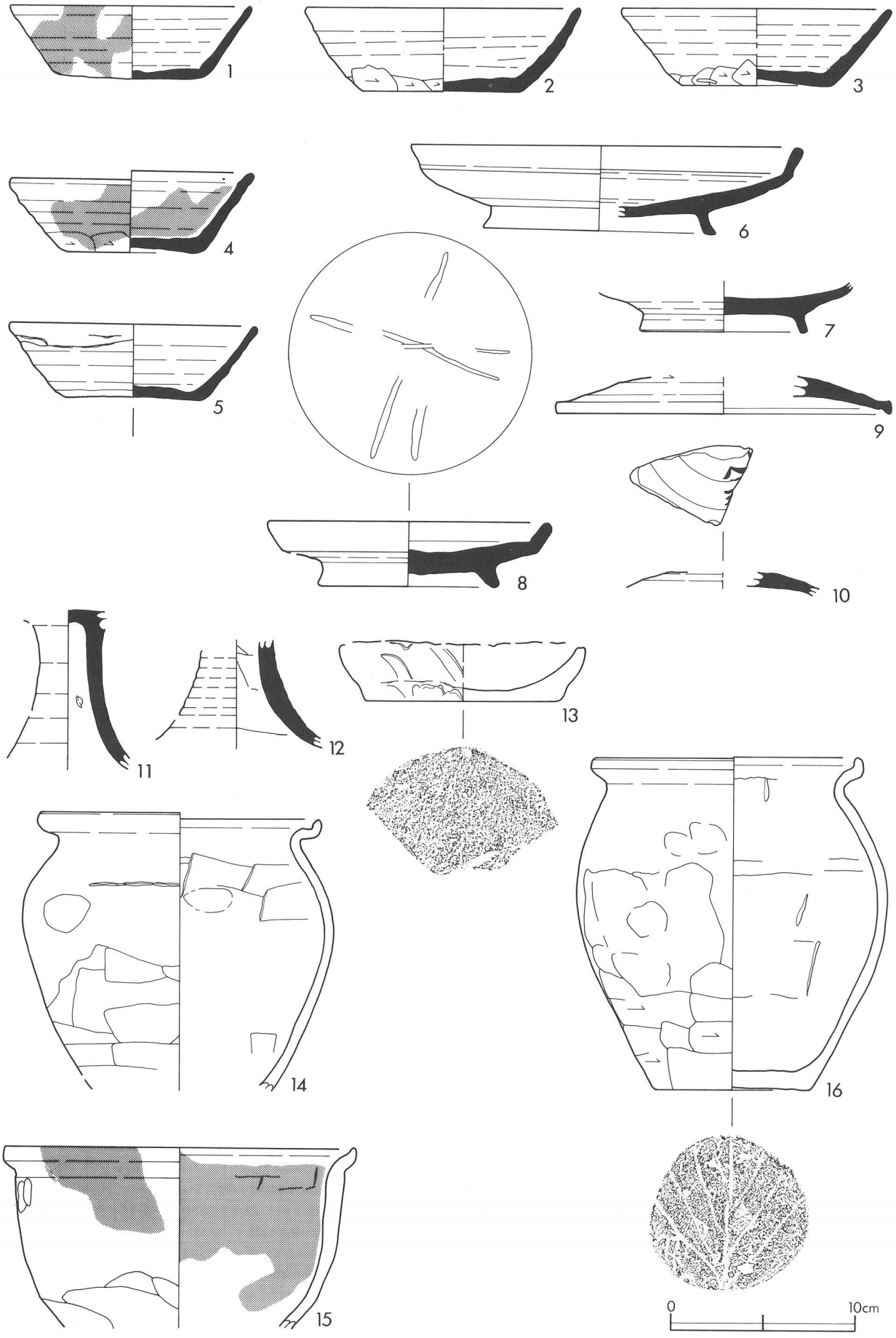
る粘土と考えられる。埋葬施設と外側の掘り方の間には非常にしまりのある砂質粘土が存在する。　**遺物**　覆土には北東方向から下降して流れ込むように、片岩片を含む土層が堆積していた。また南側の底面近くには、人骨の頭部片や歯が出土した。この覆土を採取してフルイがけを行ってみたが、骨片以外のものは確認されなかった。

6．粘土採掘坑（旧第７号不明遺構）（第83図・第121図・第120・122・123図№１～29　ＰＬ12・28・31）

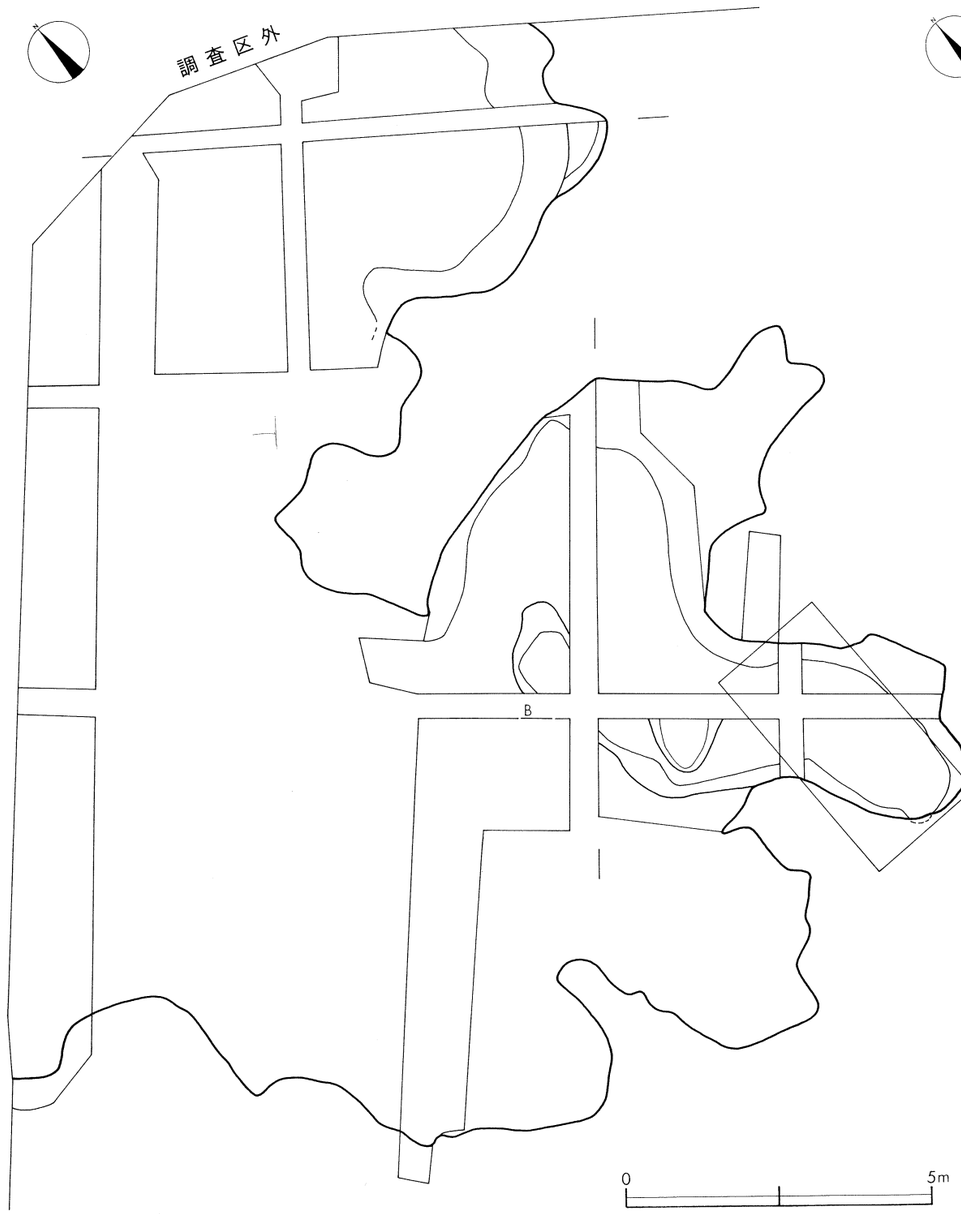
位置　調査区の北端部分の緩傾斜地で、Ｊ－２～５区、Ｋ－１～５区からエリア外にかけて確認された。完掘には至っていない。　**規模と平面形**　確認された部分で最大幅17m、長さ15m、最深部で約２ｍを測る。平面形は樹木の枝のようになり末端に行くほど狭くなっている。　**掘り込み方向**　基本的に北西方向から南東方向に掘り進んだようである。これは言い替えれば、斜面地の低位部分から高位に向け掘り込んでいると言える。**壁面**　ほぼ垂直の部分もあれば緩く立ち上がる部分も見られる。逆にオーバーハングしたところやトンネル状に掘り込まれた部分も見られた。　**底面**　ほぼ平坦である。　**覆土**　土層の特徴は、北西－南東方向の土層の堆積状況が北西から南東へ下降する傾向が見られた。また大まかには灰白色粘土を多量に含む土層とほとんど含まない土層が繰り返し堆積している。粘土をほとんど含まない土層に遺物が含まれている。北東－南西方向の土層の堆積状況では末端に向かって下降して堆積している。枝のようになったそれぞれの掘り込みは土層の堆積状況から重複関係が見られる。　**遺物**　採掘坑の最南東端部分から大量の完形に近い土器が出土した。いずれも上層から出土した。これらの土器はほぼ同様なレベルから、様々な方向を向いて出土した。この部分からの土器の出土は細かい破片は少なく、大型のものが多い。土器の器種では土師器の甕が多く、胴部が張り底部にかけて縦にヘラミガキがなされるものがほとんどである。これらの甕は煮炊きに使用された痕跡があまりない。他の場所で出土した土器は粘土が混じらない土層から出土し、小破片が多い。須恵器坏の中には№５のように底部外面に朱書がなされたり、№10のように墨書がなされるものもある。また№17の胴部には「奉」とヘラ書きされている。　**所見**　出土した遺物から本遺構は、奈良時代８世紀後半頃に採掘を停止した粘土採掘坑であろう。

粘土採掘坑

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	須恵器	坏	13.0	4.0	8.0	灰白	長石・雲母・黒色粒	不良	９０	体部直線的に立ち上がる 底面回転ヘラ切りの後手持ちヘラ削り 体部下端ヘラ削り 煤付着
2	須恵器	坏	(15.1)	4.5	(8.6)	褐灰	長石・石英・黒色粒	普	５０	底面回転ヘラ切りの後手持ちヘラ削り 体部下端手持ちヘラ削り やや丸味を持ち立ち上がる
3	須恵器	坏	(14.6)	4.2	(8.0)	灰	長石・石英・その他	良	５０	口縁部楕円形に歪む 体部直線的に立ち上がる 底面と体部下端手持ちヘラ削り
4	須恵器	坏	13.4	4.4	7.8	にぶい黄橙	長石・雲母	不良	１００	体部直線的 底面回転ヘラ切りの後手持ちヘラ削り 体部下端手持ちヘラ削り 煤付着
5	須恵器	坏	13.4	4.1	7.5	灰黄	長石・雲母	普	１００	輪積痕あり 底部側縁ヘラ削り 底面回転ヘラ切り・回転ヘラ削り 底面朱書「キ」?
6	須恵器	高台盤	21.4	4.8	12.4	淡黄	長石・雲母	不良	８０	口縁部屈曲 口唇肥厚 底部やや丸底 底面高台の内外に回転ヘラ削り 高台「ハ」の字状に開く
7	須恵器	高台盤		(2.5)	9.0	褐灰	長石・黒色粒	普	６０	口縁部急激に立ち上がる 底面回転ヘラ削りの後高台取り付け時にナデ
8	須恵器	高台盤	(15.1)	3.6	9.9	褐灰	長石・石英	普	７０	口縁部屈曲 底部と高台が器厚厚手 底面回転ヘラ切り 内外面十字のヒダスキ
9	須恵器	蓋	(18.3)	(2.0)		灰白	長石・雲母	普	３０	蓋表面のつまみ周辺にナデや手持ちヘラ削りの痕跡 縁辺部に返りが付く
10	須恵器	蓋		(0.8)		にぶい橙	長石・雲母	普	5	つまみ取り付け部分破片 体部に回転ヘラ削り 蓋上面に墨書「 」判読不明
11	須恵器	高坏		(7.2)		灰	長石・雲母	不良	４０	径が細い脚部から裾部に向け開く 内面刷痕あり 内面ナデ
12	須恵器	高坏		(5.3)		灰	長石	良	３０	径が細い脚部から裾部に向け大きく開く 内面ナデ
13	土師器	鉢	(13.4)	2.9	(10.5)	橙	長石・石英・雲母	普	４０	口縁部つまみ上げた雑な作り 外内面ナデ 外面指頭痕あり 底面木葉痕・擦痕
14	土師器	小型甕	15.3	(14.5)		にぶい橙	長石・石英・雲母	普	９０	口縁部水平に屈曲 口唇部立つ 外面頸部ナデ 胴部下半ヘラ削り 内面ナデ・ヘラ痕
15	土師器	鉢	(19.0)	(9.8)		にぶい橙	長石・石英	普	４０	口縁部やや外傾する 口縁部に器形の最大径 胴部下半ヘラ削り 外面にタール状の付着物
16	土師器	小型甕	21.4	4.8	8.8	にぶい橙	長石・石英・雲母	普	９５	胴部上半に最大径 外面胴部下半ヘラ削り 指頭痕あり 底部木葉痕 内面付着物
17	土師器	小型甕	23.4	33.8	8.7	褐	長石・石英・雲母	良	９５	肩部の張りが強い 器厚が厚手 胴部にヘラ描き「奉」 胴部下半ヘラミガキ 底部木葉痕
18	土師器	甕	23.1	22.1	7.5	にぶい黄橙	長石・石英・雲母	良	９５	口縁部屈曲 肩部の張りが強い胴部下半ヘラ削りの後ヘラミガキ 底面木葉痕 器厚が厚手
19	土師器	甕	11.8	(28.5)		にぶい橙	長石・石英・雲母	良	９０	底面のみが欠損 胴部丸味を持つ 甑に転用か 外面口縁部横ナデ 底部木葉痕 器厚が厚手
20	土師器	甕	21.1	33.8	8.0	にぶい橙	長石・石英・雲母	良	６５	口縁部歪む 胴部丸味を持つ 胴部下半ヘラミガキ 指頭痕 輪積痕 底部木葉痕
21	土師器	甕	19.5	30.1	7.6	浅黄橙	長石・石英・雲母	良	８０	やや肩部が張る 外面胴部下半ヘラミガキ 内面ヘラナデ・輪積痕・当具痕残る 底部木葉痕
22	土師器	甕	22.4	(24.5)		にぶい橙	長石・石英・雲母	良	６０	頸部緩く湾曲 口唇部立つ 外面胴部下半ヘラミガキ 内面ヘラナデ 胴部に黒斑 器厚厚手
23	土師器	甕	20.6	(30.5)		橙	長石・石英・雲母	良	８０	底面欠損 甑転用か 頸部屈曲 外面胴部下半ヘラ削りの後ヘラミガキ 内面ヘラナデ 器厚厚手
24	土師器	甕	21.8	(30.9)		橙	長石・石英・雲母	良	８０	口唇部端内傾 外面胴部下半ヘラ削りの後ヘラミガキ 内面ヘラナデ 輪積痕 器厚が厚手
25	土師器	甑	21.8	28.0		にぶい黄橙	長石・石英・雲母	良	６６	1孔式の底部 底面口唇部上に最大径を持ち頸部括れない 外面胴部下半ヘラ削り 内面ヘラナデ
26	須恵器	鉢	(35.2)	(18.2)		灰	長石・雲母	普	４０	底部から直線的に開く 外面タタキ目 胴部下半ヘラ削り 内面ヘラナデ・当具痕残る
27	須恵器	大甕		(9.2)		灰	長石・黒色粒	普	5	外面同心円タタキ目 内面ヘラナデ・当具痕残る
28	土製品	紡錘車	長さ(4.0) 幅(4.5) 厚さ(0.6)孔径(0.6)重量14.0ｇ					普	１００	断面形台形 ヘラ削りの後ナデ調整 穿孔方向は下面から
29	土製品	土製円盤	長さ(4.3) 幅(4.3) 厚さ(0.6)重量20.4ｇ					普	１００	土師器甕胴部片を打ち欠いて再利用

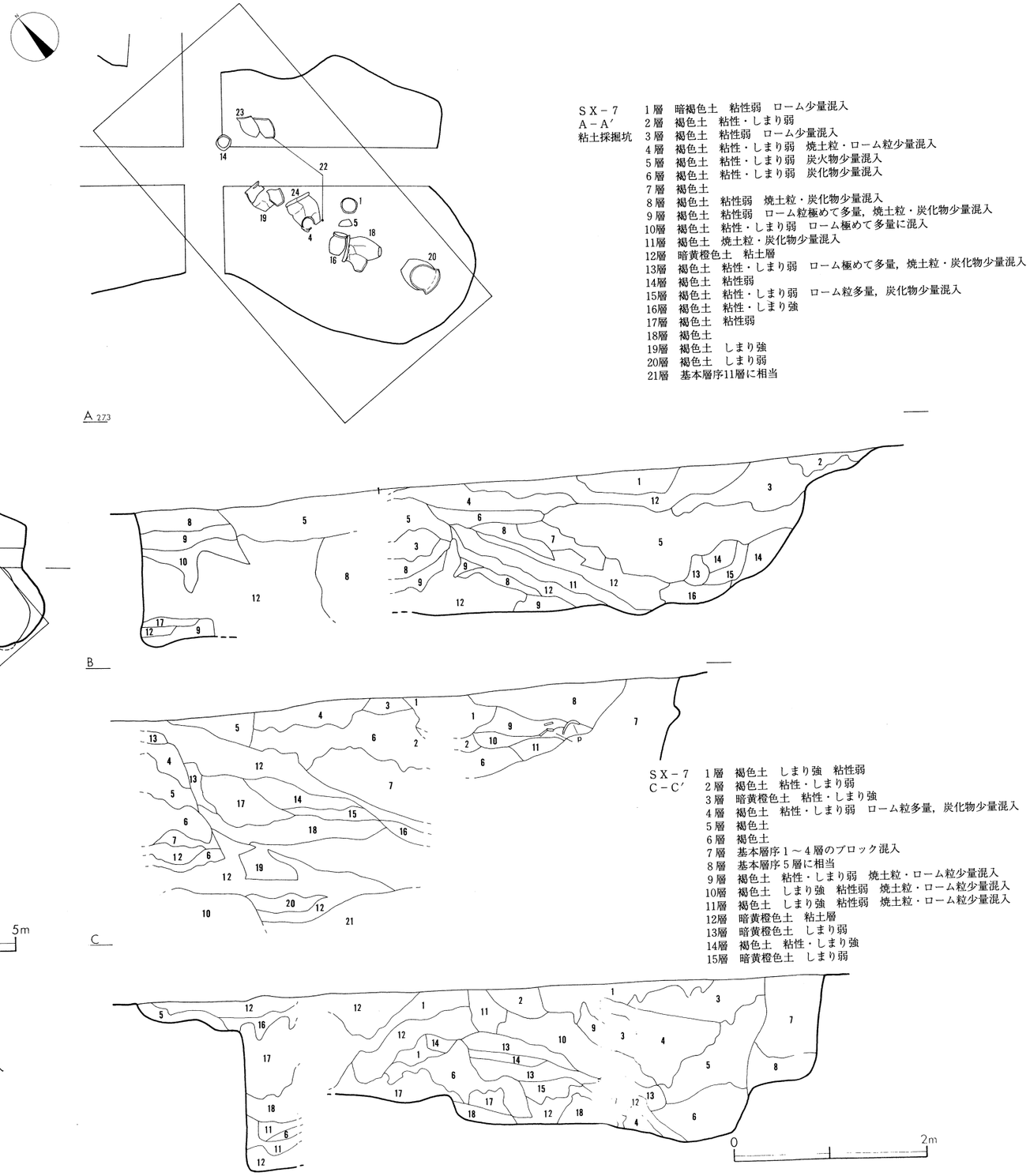


第120図　粘土採掘坑出土遺物実測図(1)



粘土採掘坑
B－B′
C－C′

1層　褐色土　しまり弱
2層　暗褐色土　粘性弱　ローム少量混入
3層　褐色土
4層　褐色土　粘性弱
5層　褐色土　粘性弱
6層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム極めて多量に混入
7層　褐色土　しまり極めて強　粘性弱　炭化粒・ローム極めて多量に混入
8層　褐色土　しまり強　粘性弱
9層　基本層序6層に相当
10層　基本層序7層に相当
11層　褐色土　しまり強　粘性弱
12層　暗黄橙色土　粘土層
13層　基本層序1層のブロック混入
14層　基本層序2．3．4，5層のブロック混入
15層　基本層序2，3，4層の小ブロック混入
16層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム極めて多量，焼土粒・炭化物少量混入
17層　基本層序5層



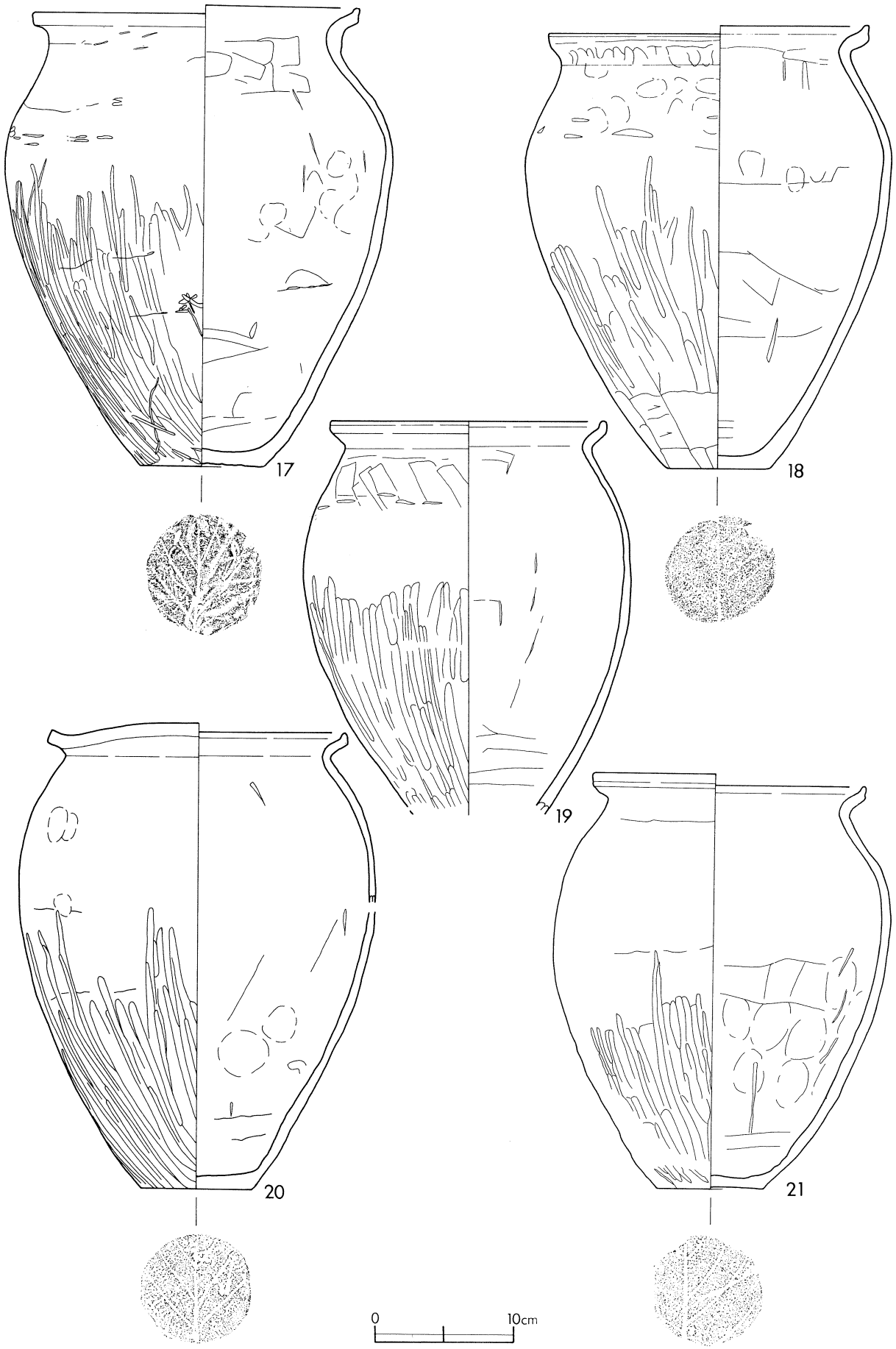
SX－7
A－A′
粘土採掘坑

1層　暗褐色土　粘性弱　ローム少量混入
2層　褐色土　粘性・しまり弱
3層　褐色土　粘性弱　ローム少量混入
4層　褐色土　粘性・しまり弱　焼土粒・ローム粒少量混入
5層　褐色土　粘性・しまり弱　炭火物少量混入
6層　褐色土　粘性・しまり弱　炭化物少量混入
7層　褐色土
8層　褐色土　粘性弱　焼土粒・炭化物少量混入
9層　褐色土　粘性弱　ローム粒極めて多量，焼土粒・炭化物少量混入
10層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム極めて多量に混入
11層　褐色土　焼土粒・炭化物少量混入
12層　暗黄橙色土　粘土層
13層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム極めて多量，焼土粒・炭化物少量混入
14層　褐色土　粘性弱
15層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒多量，炭化物少量混入
16層　褐色土　粘性・しまり強
17層　褐色土　粘性弱
18層　褐色土
19層　褐色土　しまり強
20層　褐色土　しまり弱
21層　基本層序11層に相当

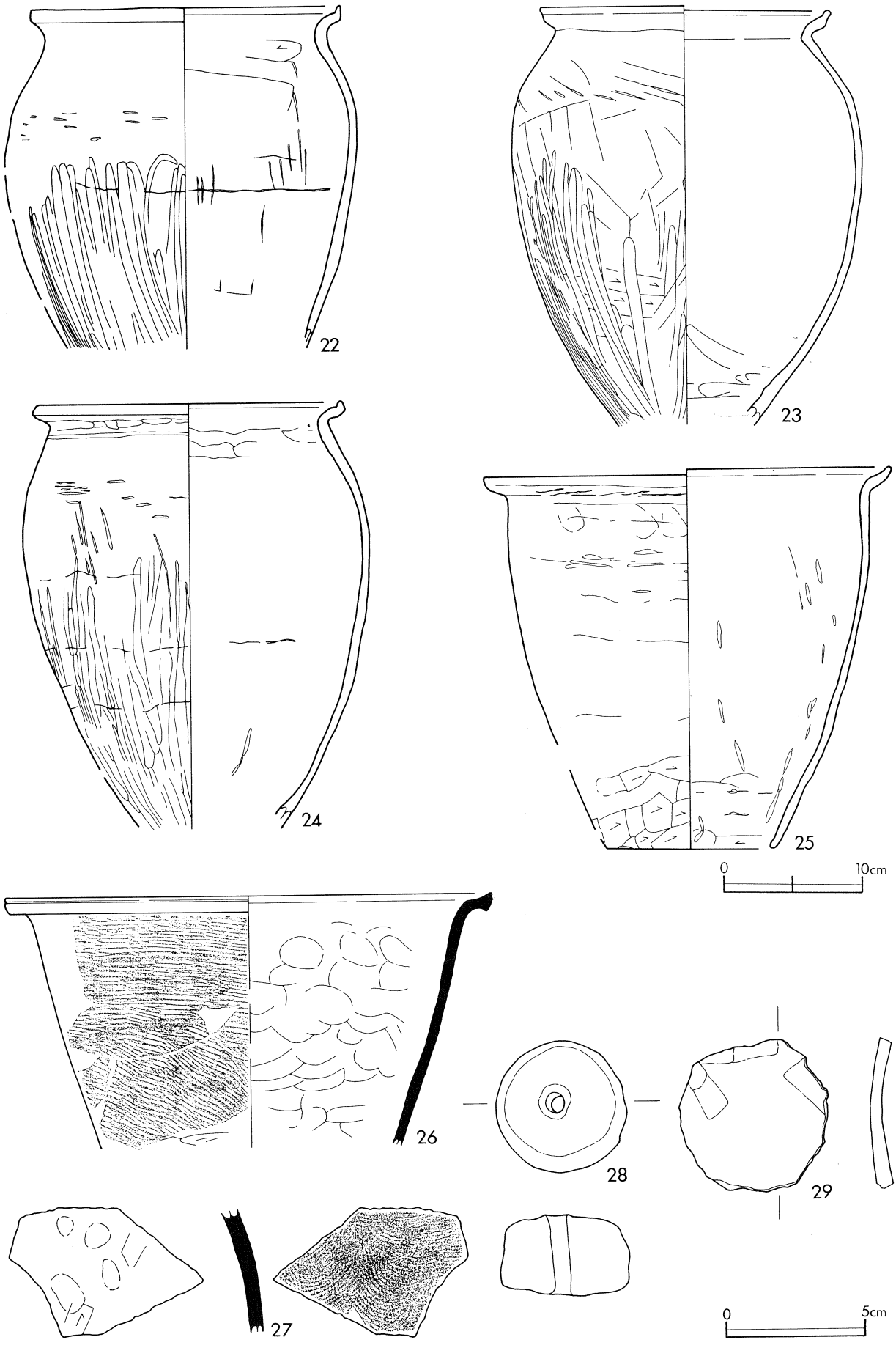
SX－7
C－C′

1層　褐色土　しまり強　粘性弱
2層　褐色土　粘性・しまり弱
3層　暗黄橙色土　粘性・しまり強
4層　褐色土　粘性・しまり弱　ローム粒多量，炭化物少量混入
5層　褐色土
6層　褐色土
7層　基本層序1～4層のブロック混入
8層　基本層序5層に相当
9層　褐色土　粘性・しまり弱　焼土粒・ローム粒少量混入
10層　褐色土　しまり強　粘性弱　焼土粒・ローム粒少量混入
11層　褐色土　しまり強　粘性弱　焼土粒・ローム粒少量混入
12層　暗黄橙色土　粘土層
13層　暗黄橙色土　しまり弱
14層　褐色土　粘性・しまり強
15層　暗黄橙色土　しまり弱

第121図　粘土採掘坑実測図・遺物出土状況図



第122図　粘土採掘坑出土遺物実測図(2)



第123図　粘土採掘坑出土遺物実測図(3)

7．溝（ＳＤ）

溝は全体で５条確認されている。いずれも出土した遺物から判断すれば、近世以降のものである。

第１号溝（旧第５・６・７号溝）（第124図　ＰＬ11）

位置　調査区の東端、台地上のＶ－11・12区にわたり、調査エリアに接して確認された。調査当時は３条の溝として記録したが、一連のものとして表記は第１号溝とした。　**規模**　幅１m弱のものが３条見られる。それぞれの壁が３条島状に残る。　**断面形**　底面は皿状を呈す。　**主軸方向**　Ｎ－９°－Ｗ　**覆土**　覆土中にビニールハウス用のビニールが含まれていた。　**遺物**　ビニール　**所見**　本溝の時期は出土した遺物から現代のものと言える。

第２号溝（旧第１号溝）（第124図）

位置　調査区中央、台地上のＬ－10～Ｖ－16区にわたり確認された。第３号住居跡と重複関係にあり第２号溝が新しい。　**規模**　長さ43m、幅0.8m、深さ0.45～0.20mのものである。南東端は二又になりまた連結している。　**断面形**　壁は底面からきつく立上り、その後緩く「ハ」の字状にひらく。　**主軸方向**　Ｎ－57°－Ｗ　**覆土**　しまりのないボソボソの褐色土がほとんどをしめる。　**遺物**　弥生土器片・土師質土器の内耳鍋・ガラスのビン・金属製のハーモニカが出土した。　**所見**　本溝の時期は出土した遺物から現代のものと言える。植林した際の根切り溝とも考えられるが不明である。

第３号溝（旧第２号溝）（第125図　ＰＬ11）

位置　調査区中央、台地上のＪ－12～Ｐ－17区にわたり確認された。第７号住居跡や第２１号土坑と重複関係にあり第３号溝が新しい。　**規模**　長さ29.5m、幅１m、深さ0.5mものである。南北西端は「Ｔ」字形を呈する。　**断面形**　壁の立上りはほとんどなく底面は平坦。　**主軸方向**　Ｎ－54°－Ｗ　**遺物**　弥生土器などが出土した。　**所見**　本溝は第35号土坑と重複関係にあり、本溝の方が新しく、明瞭に区別できた。よって本溝は中世以降のものである。

第４号溝（旧第３号溝）（第125図）

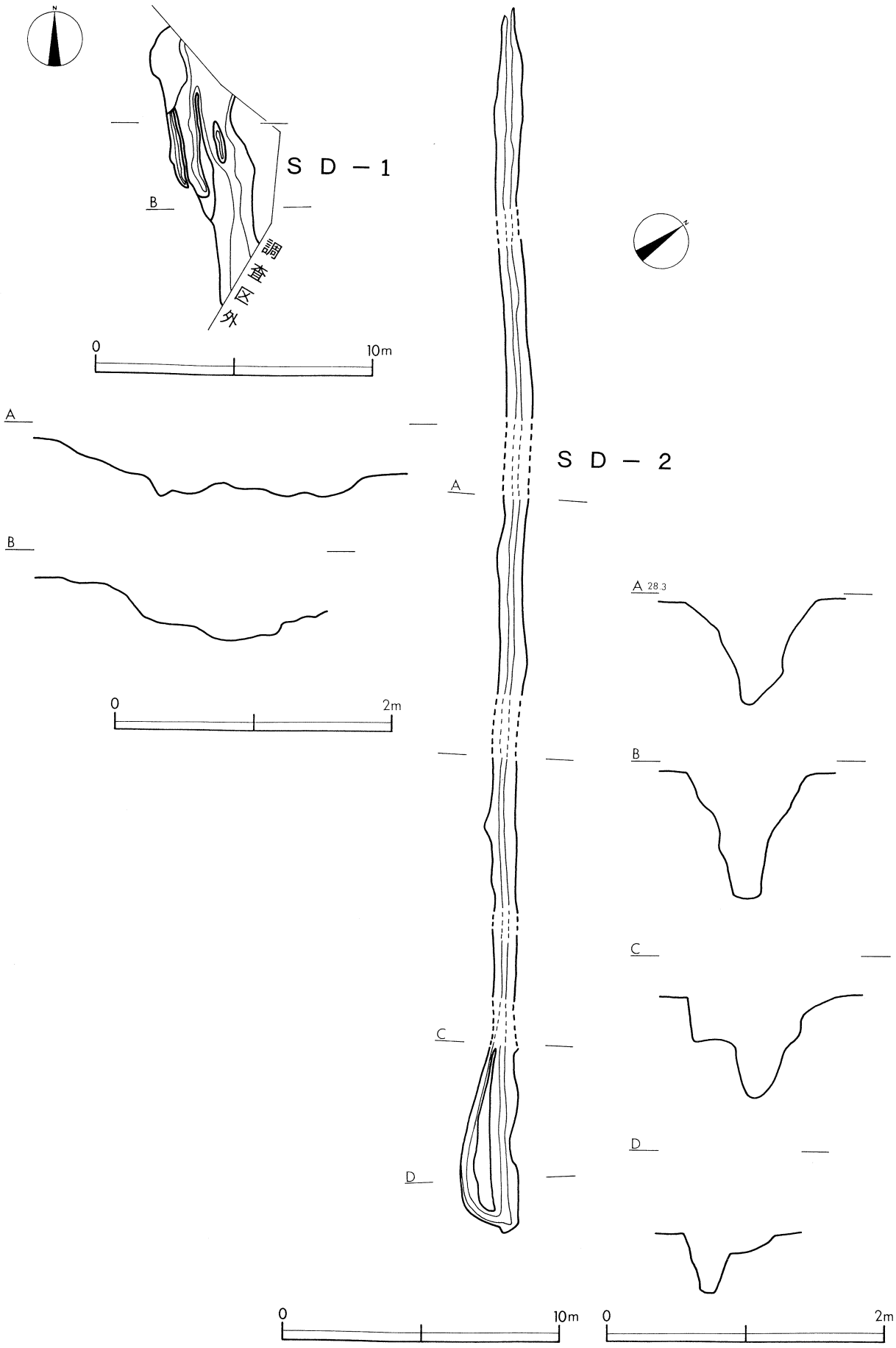
位置　調査区中央、台地上のＬ－17～Ｓ－21区にわたり確認された。第11・14号住居跡や第25号土坑と重複関係にあり第４号溝が新しい。　**規模**　長さ35.3m、幅0.5～0.7m、深さ0.55mのものである。　**断面形**　壁はほぼ垂直に落ち底面は狭い。　**主軸方向**　Ｎ－62°－Ｗ　**覆土**　しまりのないボソボソした褐色土がほとんどをしめ、第２号溝の覆土に類似する。　**遺物**　弥生土器・土師質土器の内耳鍋・陶器などが出土した。　**所見**　本溝から内耳鍋・陶器が出土しているが、第２号溝と同様な方向・掘り方・覆土を持つため、現代のものと考えられる。

第５号溝（旧第４号不明遺構）（第125図　ＰＬ11・32）

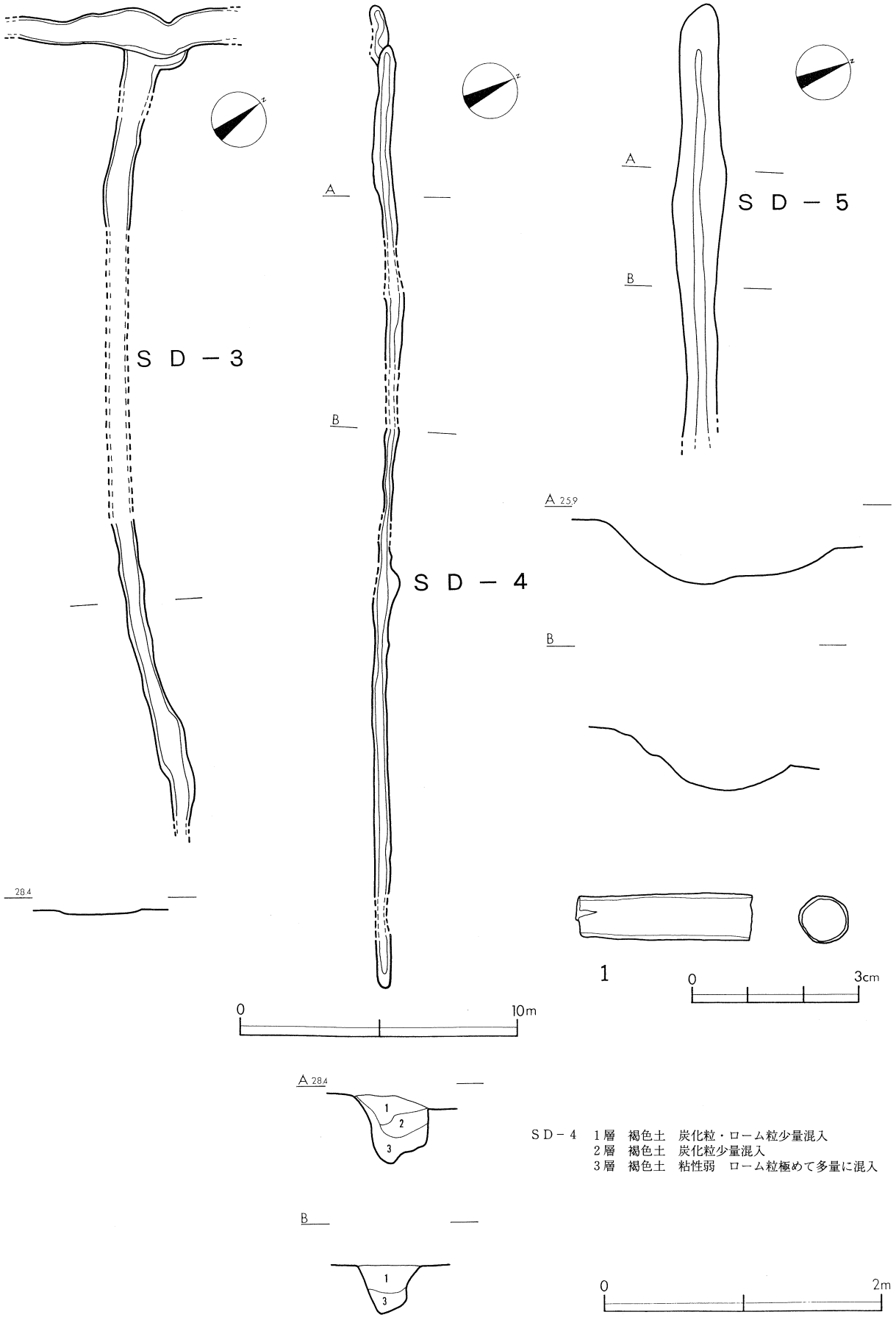
位置　調査区南方、標高26.5mから24.25mの斜面地のＳ－30～Ｖ－32区にわたり確認された。南方には第１号掘建柱建物跡が存在する。　**規模**　長さ15.5m、幅1.8m、深さ0.48mのものである。本溝の底面は南東に向いて緩く傾斜し、南東端は自然消滅する。　**断面形**　壁の立ち上りが緩い皿状を呈する。　**主軸方向**　Ｎ－68°－Ｗ　**覆土**　砂質粘土が混じる。　**遺物**　キセルの雁首が出土した。　**所見**　出土した遺物から近世以降のものと考えられる。底面の状況や傾斜の様子から道として使われたものと思われる。

第５号溝

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	真鍮製品	キセル	長さ 3.2　幅 0.9　厚さ 0.5　重量 3.0ｇ						８０	



第124図　第１・２号溝実測図



第125図　第３・４・５号溝実測図・出土遺物

根鹿北遺跡現地説明会

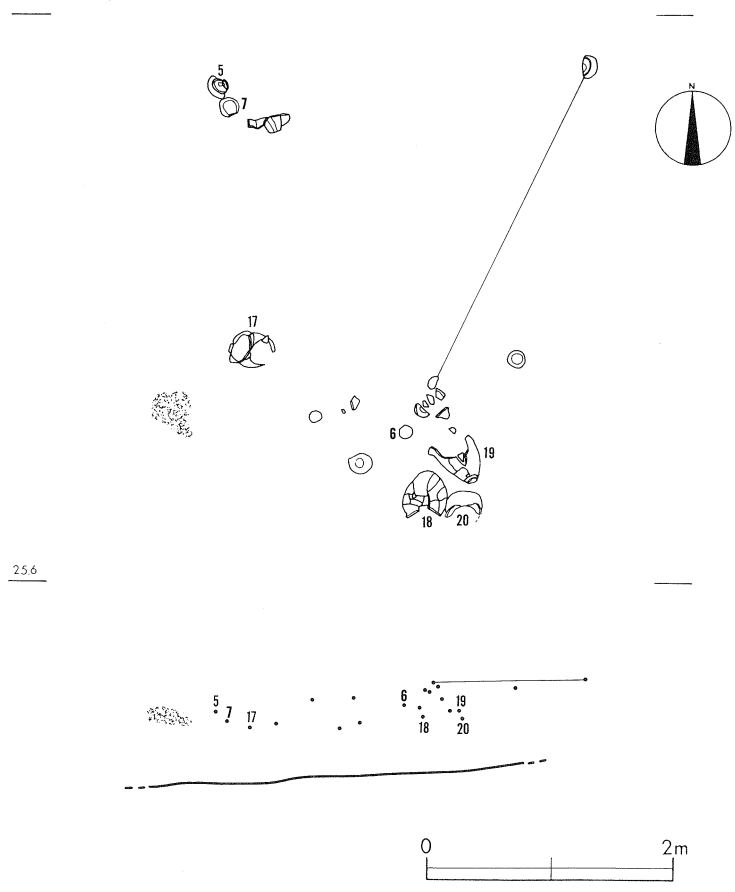
根鹿北遺跡現地説明会

8．埋没谷

埋没谷としたものは遺跡エリア内の北西端と南端に存在する。北西端に存在するものを北西埋没谷、南端に存在するものを南西埋没谷と呼称した。いずれも土層中に遺物を包含している。掘り下げは幅１mの区画に沿って土層ベルトを残し、地山面の検出を行った。北西埋没谷についてはその一部を掘り下げたに過ぎない。どちらの埋没谷も地山面でまで掘り下げをおこなった。

北西埋没谷（第126～129図　ＰＬ13・29～31）

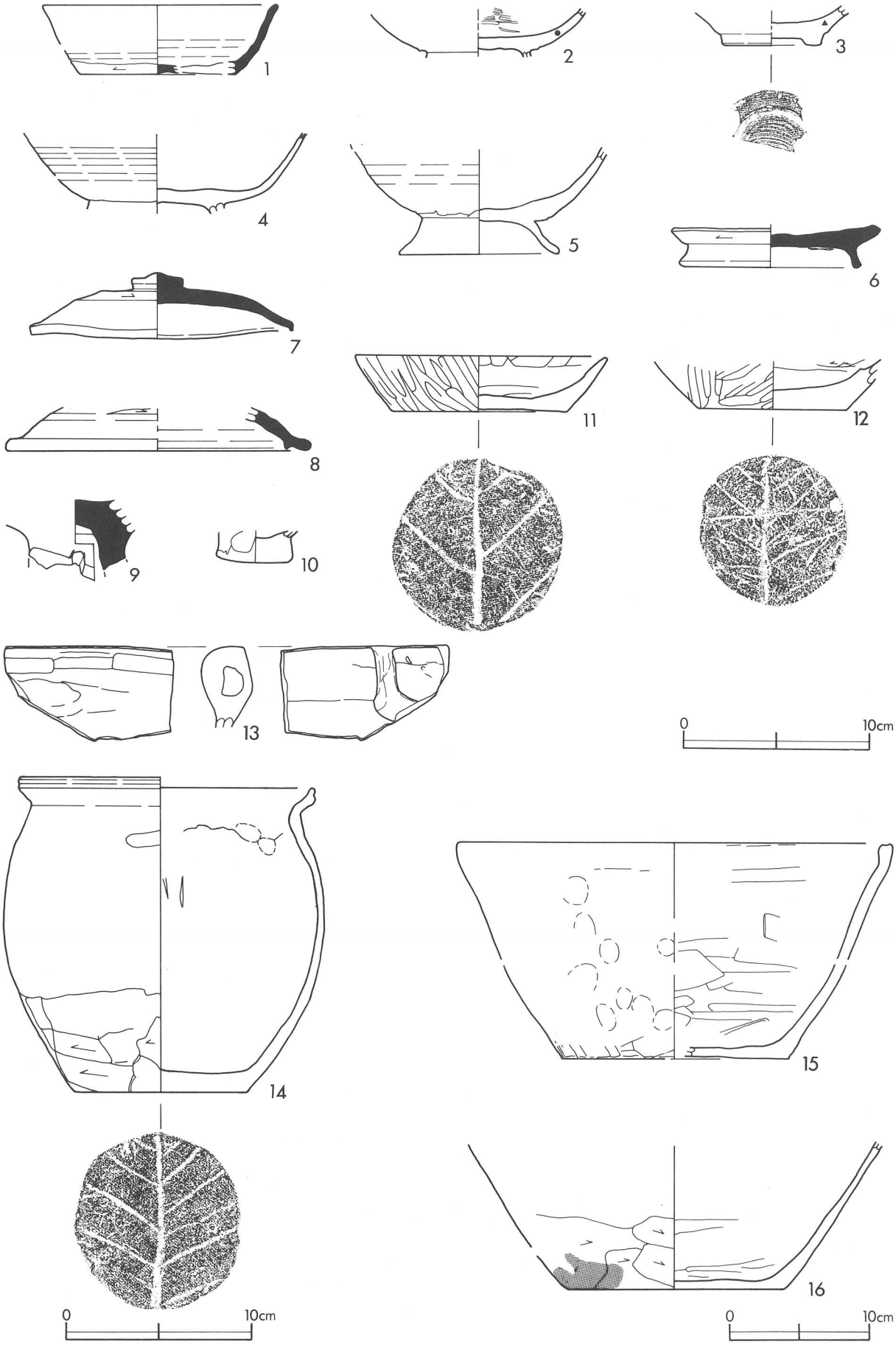
位置　本埋没谷は調査エリア北側の傾斜地に位置している。　**状況**　台地縁辺から北西方向に向かって谷が存在する。同所の遺構確認面は灰白色粘土層上面とした。　**覆土**　埋没谷部分のみ暗褐色の土層が堆積しており、北西方向に傾斜して堆積している。時間的な制限もあり全体を調査するには至らなかった。調査においては埋没谷のプラン内でも遺物の散布の見られるところを中心に掘り下げを行った。その中で濃密な遺物の出土の見られた箇所はＧ－９区であった。遺物は上層の暗褐色土層に含まれていた。　**底面**　底面は灰白色粘土層からなり、北西方向に緩く傾斜している。　**遺物**　遺物は奈良・平安時代の土師器・須恵器、中世の内耳鍋や陶器が出土した。この中でも奈良・平安時代の土師器甕はＧ－９区内南側に完形に近いものがまとまって出



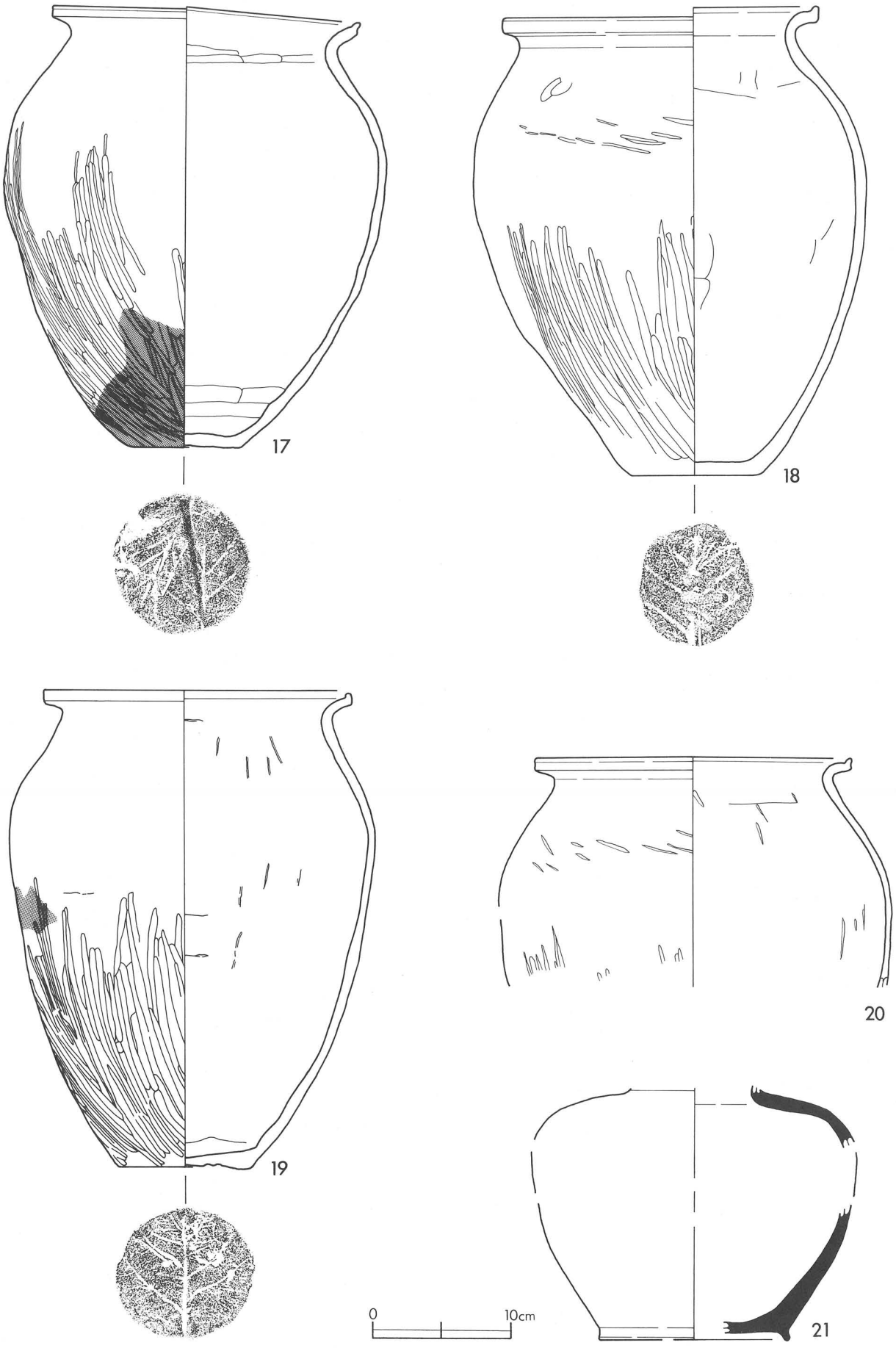
第126図　北西埋没谷（Ｇ－９区）遺物出土状況図

北西埋没谷

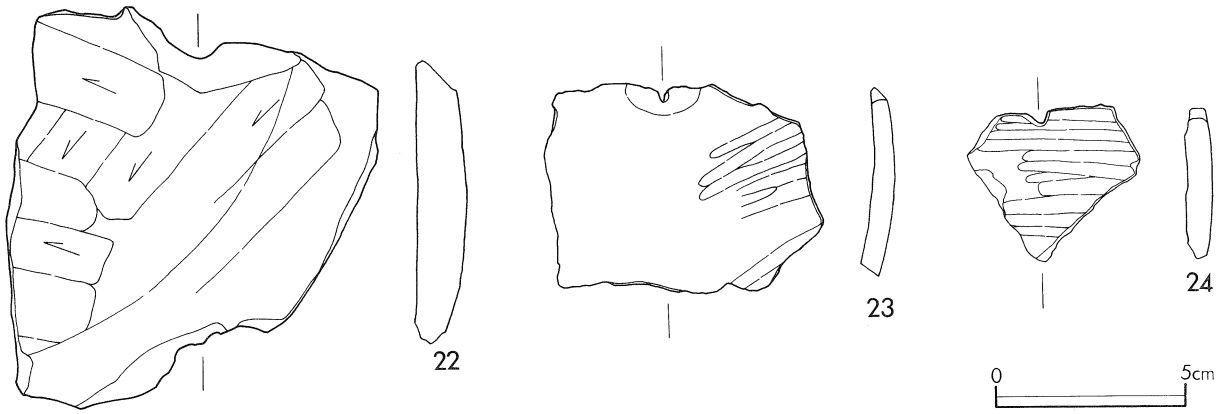
番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	須恵器	坏	(12.7)	3.7	(8.4)	黄灰	長石・雲母・黒色粒	良	３０	器厚薄手 底部側縁回転ヘラ削り 底面回転ヘラ切り・ヘラ削り
2	土師器	高台坏		(2.3)	(5.5)	浅黄橙	石英・雲母	不良	３０	底面に高台取り付け用の沈線３条 内面黒色処理・ヘラミガキ 底面回転ヘラ切り
3	陶器	碗		(1.7)	5.4	淡黄	緻密	良	５	底部に幅広の低い高台付 内側に透明な釉がかかる 底面回転糸切り痕
4	土師器	高台坏		(4.1)		にぶい橙	長石・石英・雲母	不良	４０	底部側面丸みを持って立ち上がる 底面回転ヘラ切り
5	土師器	高台坏		(5.4)	8.6	にぶい橙	長石・石英・雲母	普	７０	足高の高台 底部側縁ヘラ削り 底部中央からずれて高台接合
6	須恵器	高台坏		(2.3)	9.6	褐灰	雲母	普	３０	体部を打ち欠き円形に整形 底面 転用硯の可能性あるが墨痕なし
7	須恵器	蓋	14.1	3.5		灰	長石	良	９５	中央部分は回転ヘラ削り ボタン状のつまみが中央に付く 縁辺に返りが付く 内面ナデ
8	須恵器	蓋	(16.4)	(2.2)		にぶい黄橙	長石・石英・雲母	良	５	内面に返りが付く 口唇部は肥厚する 外面ヘラ削り
9	須恵器	高坏		(3.1)		灰	石英・長石	普	１０	脚部にヘラ切りによる透し孔三孔 脚部内面はナデ
10	弥生土器	ミニチュア		(1.7)	2.0	黄橙	石英・長石	普	２０	器厚の厚い底部 外内面ナデ
11	土師器	甕		3.0	9.4	橙	石英・長石	普	１０	接合部で破損 ヘラ削りされた擬口縁見られる 外面ヘラミガキ 内面ヘラナデ 底面木葉痕
12	土師器	甕		(2.5)	8.0	にぶい黄橙	石英・長石	普	１０	接合部で破損 ヘラ削りされた擬口縁見られる 外面ヘラミガキ 内面横ナデ 底部木葉痕
13	土師質土器	内耳土器		(5.1)		にぶい橙	赤色粒・雲母	良	５	口縁部内傾 体部は外傾して立上る 口唇部上面は平坦 把手は粘土紐により内側につく
14	土師器	小型甕	15.9	16.9	9.4	にぶい橙	長石・石英・雲母	普	８０	丸みのある胴部 口縁部は緩くくびれる 胴部下半ヘラ削り・ナデ 内面横ナデ 底部木葉痕
15	土師質土器	内耳土器	23.6	(9.5)	8.2	褐灰	金雲母	良	２０	口縁部内傾 体部は外傾して立上る 口唇部上面は平坦 内外面ナデ 底面板目 外面炭化物付着



第127図　北西埋没谷出土遺物実測図(1)



第128図　北西埋没谷出土遺物実測図(2)



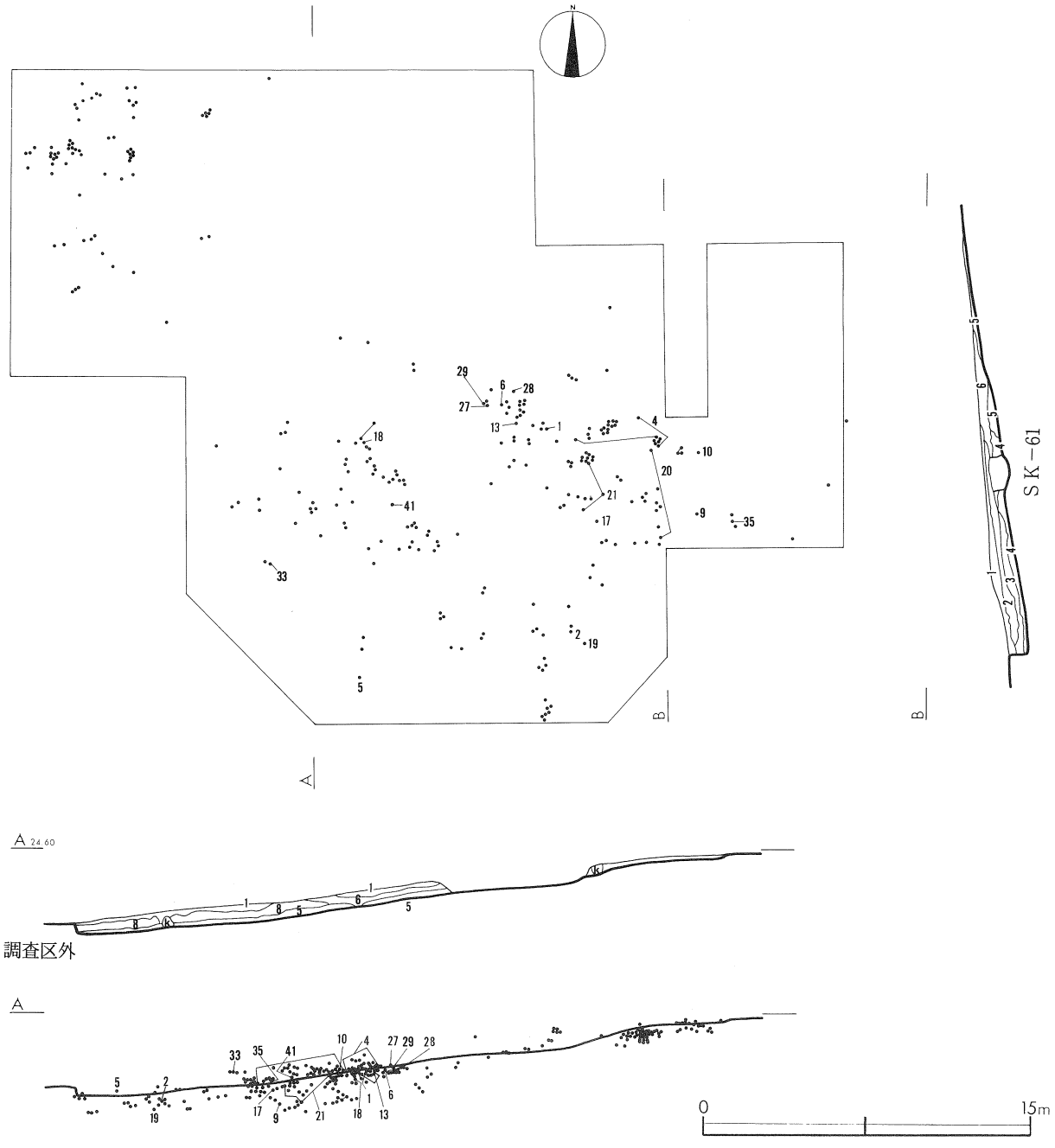
第129図　北西埋没谷出土遺物実測図(3)

土している。　**所見**　本埋没谷の時期は奈良時代８世紀前半から中世15世紀位までの遺物が包含されている。その中でも多く包含されているのは奈良時代のものである。

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
16	土師器	鉢		(10.3)	16.0	橙	長石・石英・雲母	不良	３０	大きめの底部で直線的に開く 外面ヘラ削り・炭化物付着 底面ヘラ削り 内面横ナデ 被熱
17	土師器	甕	21.9	32.0	8.2	にぶい橙	長石・石英・雲母	良	８０	外面ヘラミガキ 頸部ナデ 黒斑あり 底部木葉痕
18	土師器	甕	22.9	33.9	9.6	にぶい橙	長石・石英・雲母	普	９０	頸部湾曲し水平に外反 口縁部頸部ナデ 胴部下半ヘラミガキ 内面ヘラナデ 底面木葉痕
19	土師器	甕	22.0	34.8	5.6	にぶい橙	長石・石英・雲母	普	８０	頸部湾曲し口唇部立つ 外面ヘラミガキ 内面ヘラナデ 底面木葉痕
20	土師器	甕	23.0	(16.5)		にぶい橙	長石・石英・雲母	良	４０	頸部湾曲し水平に外反 肩部が張り、ヘラによる痕跡あり 胴部ヘラミガキ 内面ナデ
21	須恵器	短頸壺		(18.3)	(13.6)	灰黄	長石・黒色粒	良	３０	肩部が張り 外面肩部や底部内面に自然釉がかかる 非常に焼しまっている
22	土製品	不明	長さ 10.6	幅 9.9	厚さ1.3	重量113.4ｇ		不良	ほぼ完形	須恵器片 外面ヘラ削り 内面ナデ
23	土製品	不明	長さ 5.6	幅 7.3	厚さ0.6	重量 34.9ｇ		普	６６	土師器片 内側から穿孔した痕跡あり
24	土製品	不明	長さ 4.5	幅 3.8	厚さ0.7	重量 12.3ｇ		普	６６	土師器甕胴部片を再利用 刻み目がある

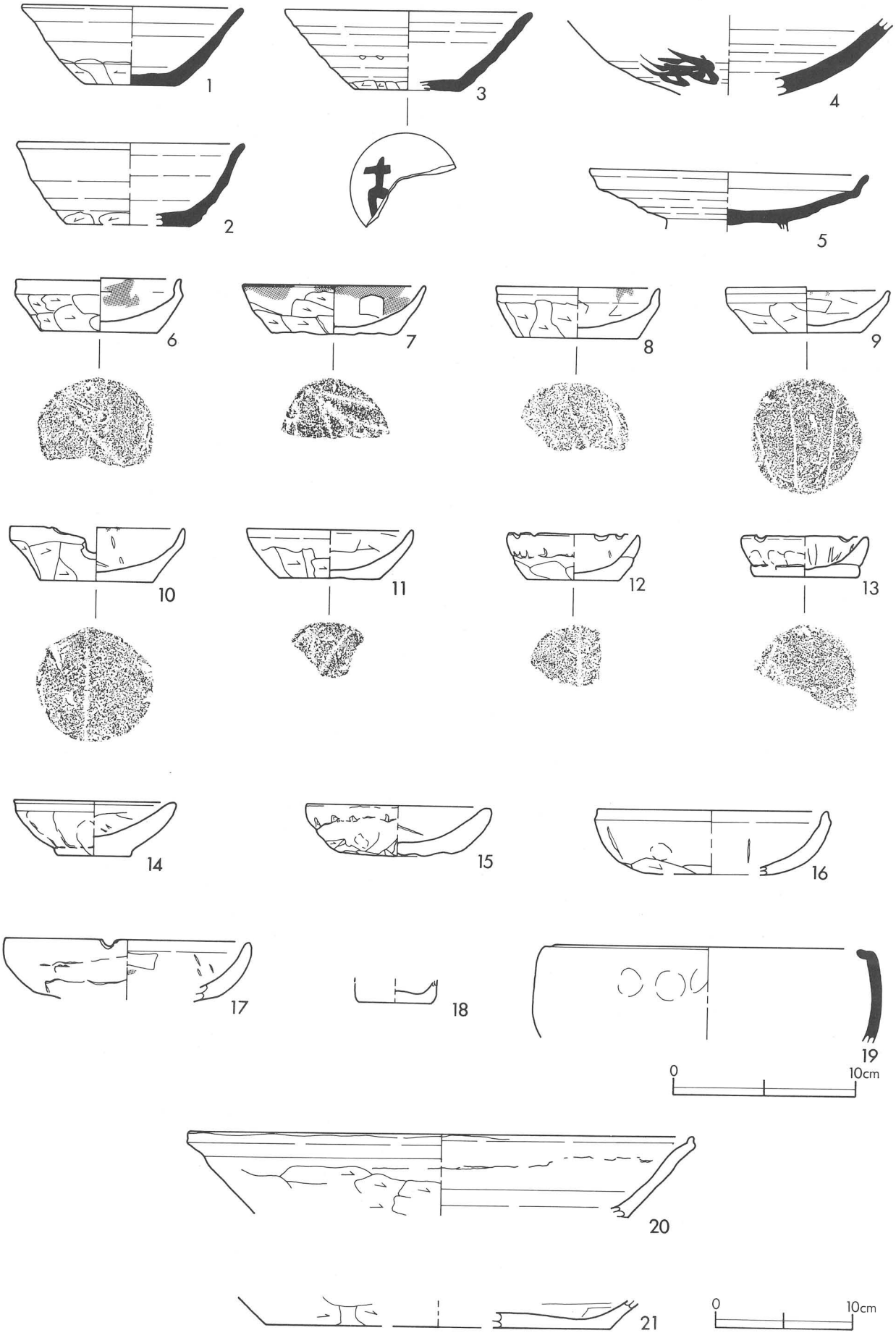
南西埋没谷（第130～134図　ＰＬ13・29～33）

位置　本埋没谷は調査エリア南端部分で調査区はＰ－36・37区、Ｑ－36～40区、Ｒ－36～40区、Ｓ－37～40区、Ｔ－37～40区にあたる。　**状況**　北側の尾根上には掘立柱建物跡群が存在し、掘立柱建物跡群から出土した遺物と埋没谷出土の出土遺物に関連性がうかがわれ、その南西側に存在するので南西埋没谷と呼称した。この谷は南方向に向いて開いている。天の川から入り込む谷津に直接接続するわけではなく、谷というよりはむしろ、台地末端の凹地といった方がよい地形である。台地上の標高25m付近から落ち込み、傾斜している。調査区内の谷最低位は標高約22mを示す。標高25m付近には急激な傾斜変換点があり、過去に削平を受けたものと思われる。　**覆土**　埋没谷覆土は８層から構成され、焼土粒や炭化物が含まれる褐色土層の第１層が最上層に存在し、その下層に調査区東側で第２・３層と続き、西側では第８・５層と続く。第２層は第８層よりも新しく、第３層は第８層よりも古い堆積状況を示している。第４層は暗赤褐色土で、調査区内北西部分の縄文時代早期の遺物が包含されていた土層と類似した土層である。　**底面**　谷は南に向かって深さを増し、埋没土を取り除くと地山は暗褐色の粘土層となっていた。　**遺物**　遺物は平安時代のものがほとんどで、Ｐ～Ｔ－38・39区を中心に東側では第１層から第３層中にかけて遺物が見られた。西側では第１・８層から遺物が出土した。縄文時代の遺物はＰ－36・37区から出土した。遺物は掘立柱建物跡群出土の遺物と関連を持つようで、特に瓦塔や土師器小皿や鉄鉢形土器は両者から出土している。土師器小皿はＲ・Ｓ－38区を中心にまとまって出土し、いずれも破片である。各区ごとの出土点数はＰ－34区１点、Ｑ－38区５点、Ｑ－39区１点、Ｒ－38区１点、Ｒ－39区３点、Ｓ－37区１点、Ｓ－38区10点、Ｔ－38区４点である。他にNo.３・４の墨書土器やNo.４・19の須恵器鉄鉢形土器が出土している。No.20は鉢形土器である。この他に鉄滓が出土している。出土遺物で一番多い遺物

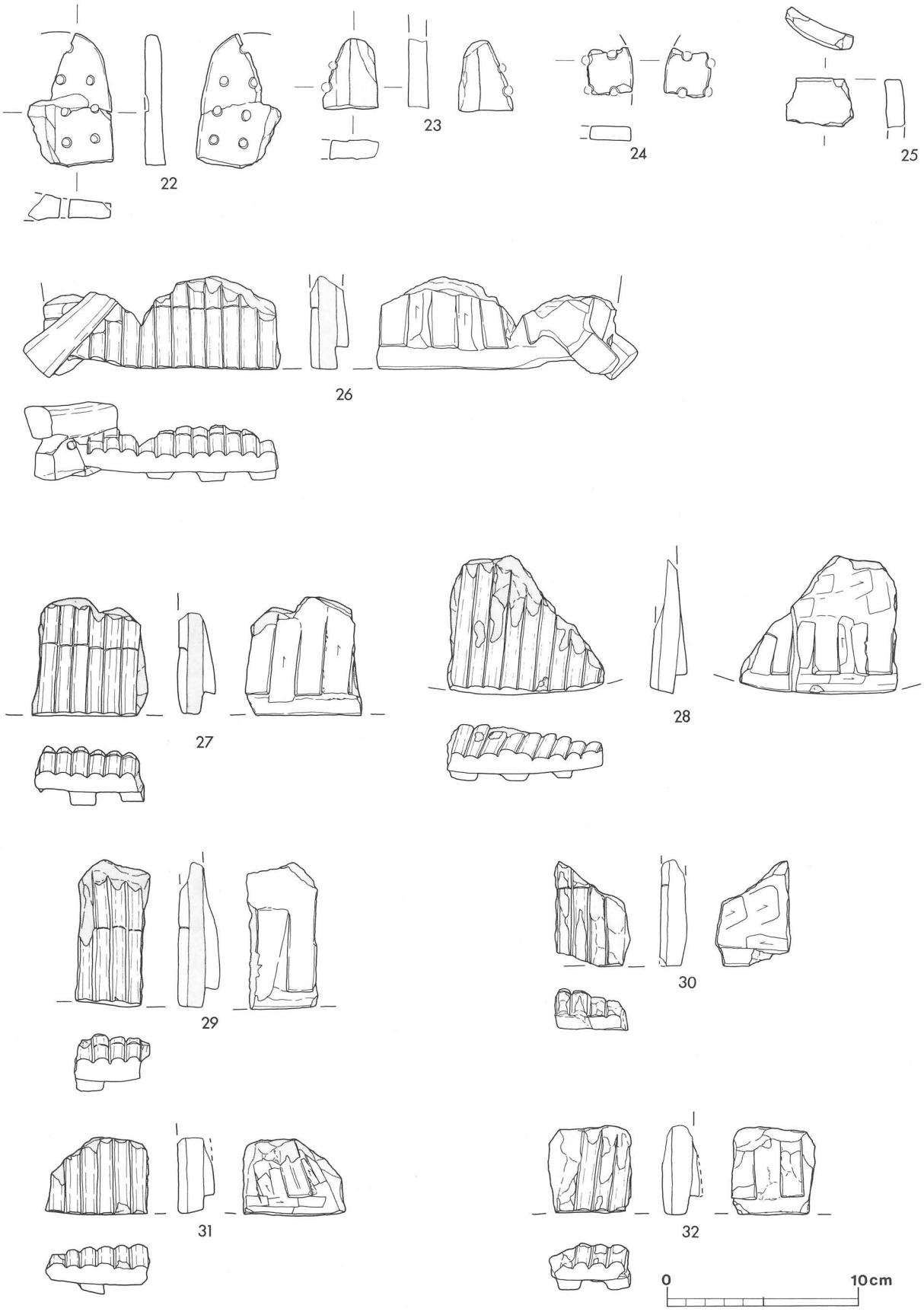


南西埋没谷（S－37区、38区、39区）
1層　褐色土　粘性弱　炭化物・ローム粒少量混入
2層　暗褐色土　粘性弱
3層　暗褐色土　粘性弱
4層　暗赤褐色土　しまり強
5層　暗褐色土　粘性弱
6層　暗褐色土
7層　暗褐色土　しまり強

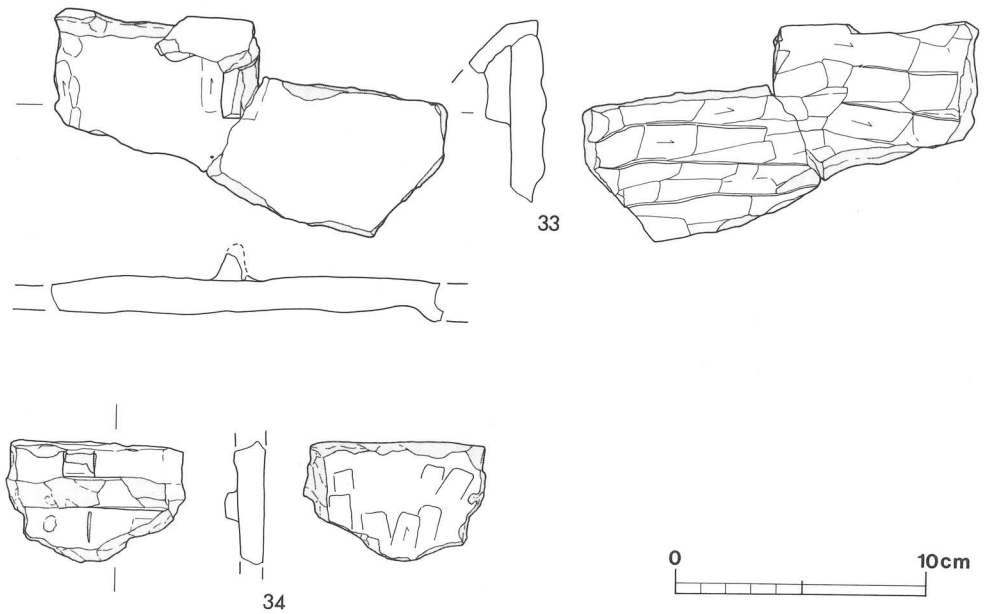
第130図　南北西埋没谷遺物出土状況



第131図　南西埋没谷出土遺物実測図(1)



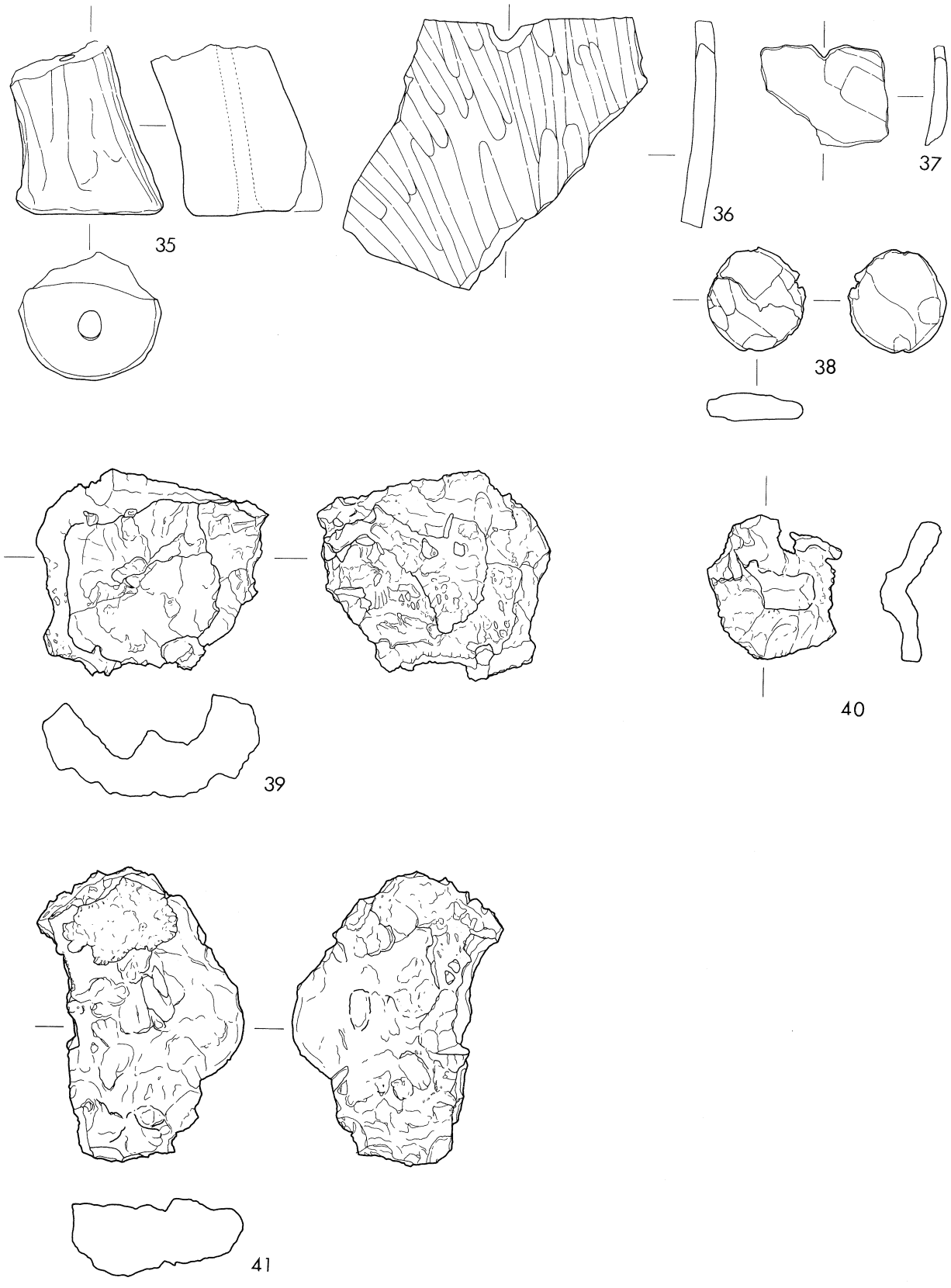
第132図　南西埋没谷出土遺物実測図(2)



第133図　南西埋没谷出土遺物実測図(3)

は土師器甕の破片であった。

埋没谷から出土した瓦塔破片総数は32点である。このうち13点を図化した。胎土は、いずれも粗砂粒主体で、雲母粒子・石英粒子・長石粒子を含む。焼成は酸化焔焼成で、やや軟質である。色調は、にぶい黄橙色を呈する。No.22～25は、相輪部破片である。No.22～24は水煙部分で、No.22が最も遺存率が良い。厚さ約1.2cmの釣り鐘状粘土板に直径0.5cm程の竹管状工具を７ヶ所穿ち、水煙透かしを表現している。No.23には剥離痕がある。この粘土板水煙が組み合わされていたことを示す資料である（註１）。No.25 は九輪部分の破片と思われる。No.26～32は、屋蓋部破片である。屋根は幅0.7cm、深さ約0.4cmの幅狭の竹管状工具によるナデ調整で丸瓦のみを表現している。瓦の継ぎ目は、丸瓦表現後、工具押し引きによる結節を軒先先端から4.8cmの位置に一節のみ施すことで表現している。軒裏の垂木は、一軒のみを表現している。垂木部分に垂木横幅設定のためのヘラ状工具沈線を引いた後、垂木と垂木の間（垂木間隔は約1.4cm）を深目にヘラ削りを施し垂木を掘り出している。垂木長は約4.2cm、垂木幅は約1.5cmである。No.26は隅棟周辺の破片である。隅棟の断面形状は、やや台形である。隅垂木は二軒構成である。隅地垂木長2.1cm、隅飛檐垂木長2.0cm以上、隅垂木幅1.7cmである。No.26は色調が黒褐色であるが、屋蓋部表現手法、焼成・胎土は他の瓦塔破片と異なる点はない。No.33・34は、斗栱部破片である。（ｉ）柱の表現が全く見られない点、（ii）壁付き三斗が省略されている点、（iii）壁面から持ち送り部分のみが作り出されている点から、二重以上の上部破片であると思われる。壁内面は、やや粗いヘラ削り調整がなされる。No.12は、縦・横に幅1.0cm、高さ0.6cmの「斗栱粘土帯」（註２）および斗栱粘土帯剥離痕が見られる。壁内面はヘラ削り調整されている。　**所見**　本埋没谷から瓦塔・土師器小皿・鉄鉢形土器などが出土した。これらの遺物の出土位置は遺物分布の中でも掘立柱建物跡群や第39号住居跡の存在する側に多く出土し、関連性が考えられる。特に鉄鉢形土器は第39号住居跡出土のものと接合している。実測図としては図示し得ていないが、本埋没谷出土の遺物の中には、少数ながら内面黒色処理された土師器坏や皿なども出土している。本埋没谷出土遺物の時期については、遺構の性格上から限定された一時期の遺物のみが出土しているわけではなく、複数時期にわたる遺物が混入しているとも言える。しかしながら図示した遺物の大半は同様な場所から出土しており、平安時代９世紀前葉から中葉のものと考えられる。



第134図　南西埋没谷出土遺物実測図(4)

（註）

（註１）　木造建築物の水煙が、通常４枚組であること、第39号住居跡出土相輪部・宝珠龍車部分破片下端に十字の切り込みがあることから、本遺跡出土瓦塔の粘土板水煙は、４枚一組であったと想定したい。

（註２）「斗栱粘土帯」概念は（高崎1989）論文による。

高崎光司1989「瓦塔小考」『考古学雑誌』７４－３　日本考古学会

南西埋没谷

番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	須恵器	坏	(12.2)	4.3	(5.4)	灰黄褐	長石・黒色粒	良	３０	口縁部やや括れ外傾 体部下端手持ちヘラ削り 底面回転ヘラ切り・手持ちヘラ削り
2	須恵器	坏	(12.6)	4.4	(7.0)	灰	長石・黒色粒	普	３０	口縁部やや外傾 体部やや丸みを持つ 底面手持ちヘラ削り 体部下端手持ちヘラ削り
3	須恵器	坏	(13.6)	4.3	(5.8)	灰	長石・黒色粒	良	３０	底部から緩く直線的に開く 底面回転ヘラ切り・ナデ体部下端 ヘラ削り 底面に墨書判読不明
4	須恵器	鉄鉢		(3.9)		にぶい黄橙	長石・雲母	普	２０	丸底の体部を持ち、口縁部は内湾すると考えられる 側面ナデ 内面黒色 胴部に墨書横位「佛」
5	須恵器	高台盤	(15.2)	(3.3)	(6.6)	灰黄褐	長石・石英	不良	５０	口縁部屈曲し口唇部肥厚 底面回転ヘラ切り
6	土師器	小皿	(9.1)	(3.0)	6.4	にぶい橙	長石・石英	良	７０	口縁部つまみ上げ 外面に輪積痕 胴部横位ヘラ削り 内面ナデ 内面にタール付着 底面木葉痕
7	土師器	小皿	(10.0)	2.7	(6.6)	にぶい橙	長石・石英	良	５０	口縁部開く 外面口縁部ナデ 胴部横位ヘラ削り 内外面タール付着 底面木葉痕
8	土師器	小皿	(9.0)	2.7	(6.8)	橙	長石・石英・雲母	良	４０	口縁部つまみ上げ 外面口縁部ナデ 胴部横位ヘラ削り タール付着 底面木葉痕
9	土師器	小皿	9.1	2.5	6.2	にぶい橙	長石・石英	良	８０	口縁部つまみ上げ 外面に輪積痕 外面口縁部ナデ 胴部横位ヘラ削り タール付着 底面木葉痕
10	土師器	小皿	(9.4)	2.9	5.6	にぶい黄橙	長石・石英	良	６６	口縁部つまみ上げ 外面に輪積痕 外面口縁部ナデ 胴部横位ヘラ削り タール付着 底面木葉痕
11	土師器	小皿	9.0	2.7	(5.6)	浅黄橙	長石・石英・雲母	良	２０	外面に輪積痕 外面口縁部ナデ 胴部横位ヘラ削り タール付着 底面木葉痕
12	土師器	小皿	(4.1)	2.5	(5.0)	橙	長石・石英・雲母	不良	２０	外面輪積痕 胴部横位ヘラ削り 内面ヘラナデ 底面木葉痕
13	土師器	小皿	(6.8)	2.2	(5.6)	にぶい黄橙	長石・石英・雲母	不良	５０	外面指頭痕 輪積痕 内面ヘラナデ 底面木葉痕
14	土師器	小皿	(8.8)	3.0	(2.0)	にぶい黄橙	長石・石英・雲母	良	４０	底部から直線的に開く 底面高台状に高い 口縁部ナデ 外面指頭痕 底面回転ヘラ切り
15	土師器	小皿	(10.0)	2.8	(6.7)	にぶい黄橙	長石・石英	良	２５	外面口縁部ナデ 輪積痕 内面ヘラナデ 底部ヘラ削り
16	土師器	小皿	(12.4)	3.5	(7.2)	橙	長石・石英・雲母	普	３０	底部から湾曲して立ち上がる 口縁部つまみ上げ・ナデ 外面胴部下半ヘラ削り 内面ヘラナデ
17	土師器	小皿	(13.4)	(3.5)	(9.2)	橙	長石・石英・雲母	不良	２０	口縁部やや立ち上がる 外面口縁部ナデ 外面輪積痕 内面ナデ タール付着
18	弥生土器	ミニチュア		(1.3)	4.0	にぶい橙	長石・石英・雲母	不良	３０	底部から直線的に立ち上がる 内外面ナデ調整
19	須恵器	鉄鉢	(16.2)	(5.1)		オリーブ灰	長石・石英	良	２０	ロクロ成形 胴部緩く内湾して立上り口縁部で内側に屈曲する 外面指頭痕 内面横ナデ
20	土師器	浅鉢	(37.0)	(5.9)	(18.8)	にぶい橙	長石・石英・赤色粒	良	１０	洗面器状の形態 胴部はヘラ削りがされ、口縁部はやや外傾しその先端がつまみ上げられる
21	土師器	浅鉢		(1.9)	(25.4)	にぶい橙	長石・石英・赤色粒	良	１０	外面ヘラ削り 底面の縁に径１cmの孔が開く可能性がある 底面一方向に繊維状の圧痕 内面ナデ
番号	種類	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	色調	胎　土	焼成	残存部位	特　徴　・　そ　の　他
22	土製品	瓦塔	(6.9)	(4.5)	1.0	にぶい黄橙	長石・石英	普	相輪部	水煙部分 ヘラにより先端が丸味を持ち下端は直線的に成形 径５mmほどの工具により7ヶ所穿孔
23	土製品	瓦塔	(3.7)	(2.9)	1.0	黒褐	長石・石英	普	相輪部	№22同様の水煙部分 軸を粘土で作るようで、同部品に挟み込んだ痕跡が残る
24	土製品	瓦塔	(2.5)	(2.5)	0.7	にぶい黄橙	長石・石英	普	相輪部	水煙部分 径５mmほどの工具による穿孔
25	土製品	瓦塔	(2.5)	(3.5)	0.9	にぶい黄橙	長石・石英	普	相輪部	伏鉢部分 推定径3.6cm 上面ヘラ削りがされ平坦
26	土製品	瓦塔	(5.3)	(13.5)	1.4	黒褐	長石・石英・赤色粒	普	屋蓋部	隅棟部分 隅棟下に風鐸を吊す貫通孔 丸瓦0.8cm 瓦の間隔0.1cm 垂木幅約1.2cm
27	土製品	瓦塔	(6.1)	(6.1)	1.4	にぶい黄橙	長石・石英・赤色粒	普	屋蓋部	丸瓦は半截竹管状工具による 丸瓦の幅0.8cm間隔約0.1cm 垂木幅約1.3～1.5cm
28	土製品	瓦塔	(7.2)	(8.2)	1.3	黒褐	長石・石英・赤色粒	普	屋蓋部	屋蓋部前面はヘラ削り 丸瓦幅0.8cm 瓦の間隔0.1cm 垂木幅約0.9～1.5cm
29	土製品	瓦塔	(7.6)	(3.7)	1.4	にぶい黄橙	長石・石英	普	屋蓋部	屋蓋部でも隅棟近く 丸瓦幅0.7cm 瓦の間隔0.2cm 垂木幅約1.6cm 垂木削り出し
30	土製品	瓦塔	(5.5)	(4.0)	1.4	褐灰	長石・石英	普	屋蓋部	丸瓦幅0.7cm 瓦の間隔0.1cm 垂木表現なし 本来は粘土を貼り付けヘラで削る
31	土製品	瓦塔	(4.0)	(5.3)	1.4	黒	長石・石英	普	屋蓋部	丸瓦幅0.8cm 瓦の間隔0.1cm 垂木幅約1.3cm 垂木削り出し
32	土製品	瓦塔	(4.6)	(4.2)	1.5	にぶい橙	長石・石英	普	屋蓋部	丸瓦幅0.7cm 瓦の間隔0.1cm 垂木幅約1.4cm 垂木削り出し
33	土製品	瓦塔	(8.9)	(15.6)	1.4	橙	石英	普	軸部	二輪部以上の軸部分 壁体中央上端に１ヶ所粘土貼り付け斗栱表現 裏面輪積痕・ヘラ削り
34	土製品	瓦塔	(4.9)	(7.2)	1.0	にぶい橙	石英・小礫	普	軸部	斗栱部分 粘土帯貼り付け、ヘラ削りによる組物表現 裏面ヘラ削り
35	土製品	不明	長さ(5.9) 幅(5.2) 底径4.9 孔径0.4～0.9 重量(133.2) g							縦方向のナデ 何物かの脚部か「ハ」の字状に開く 貫通孔あり
36	土製品	不明	長さ(6.3) 幅(10.3) 厚さ0.7 重量(74.0) g							土師器甕片を再利用 抉り１ヶ所
37	土製品	不明	長さ(3.4) 幅(4.4) 厚さ0.6 重量(8.5) g							土師器甕片を再利用 抉り１ヶ所
38	土製品	円盤	長さ 3.3 幅 3.3 厚さ0.9 重量(9.8) g							偏平に潰した粘土塊
39	鉄製品	鉄滓	長さ 7.0 幅 8.0 厚さ3.5 重量 23.8 g							椀形鉄滓 表面平滑 裏面鍛冶炉壁付着痕
40	鉄製品	鉄滓	長さ 4.9 幅 4.5 厚さ2.1 重量 31.0 g							椀形鉄滓 偏平
41	鉄製品	鉄滓	長さ 10.0 幅 7.3 厚さ2.7 重量206.0 g							椀形鉄滓 表面やや滑らか 裏面鍛冶炉壁付着痕

9．遺構外出土遺物（第135～141図　ＰＬ29・32）

本遺跡内出土遺物の中で明確な遺構に伴わないものや、遺物の所属時期とは異なる時代の遺構から出土したものを遺構外出土遺物として取り扱う。遺物は以下のものが出土している。

1縄文土器（Ⅰ早期後半から末葉　Ⅱ前期前半　Ⅲ前期後半　Ⅳ前期末葉から中期初頭　Ⅴ中期前半）

2弥生土器

3埴輪

4土師器・須恵器

5土製品

6石器・石製品

7金属製品

以下は各遺物の特徴などについて述べる。

1　縄文土器（第135・136図）

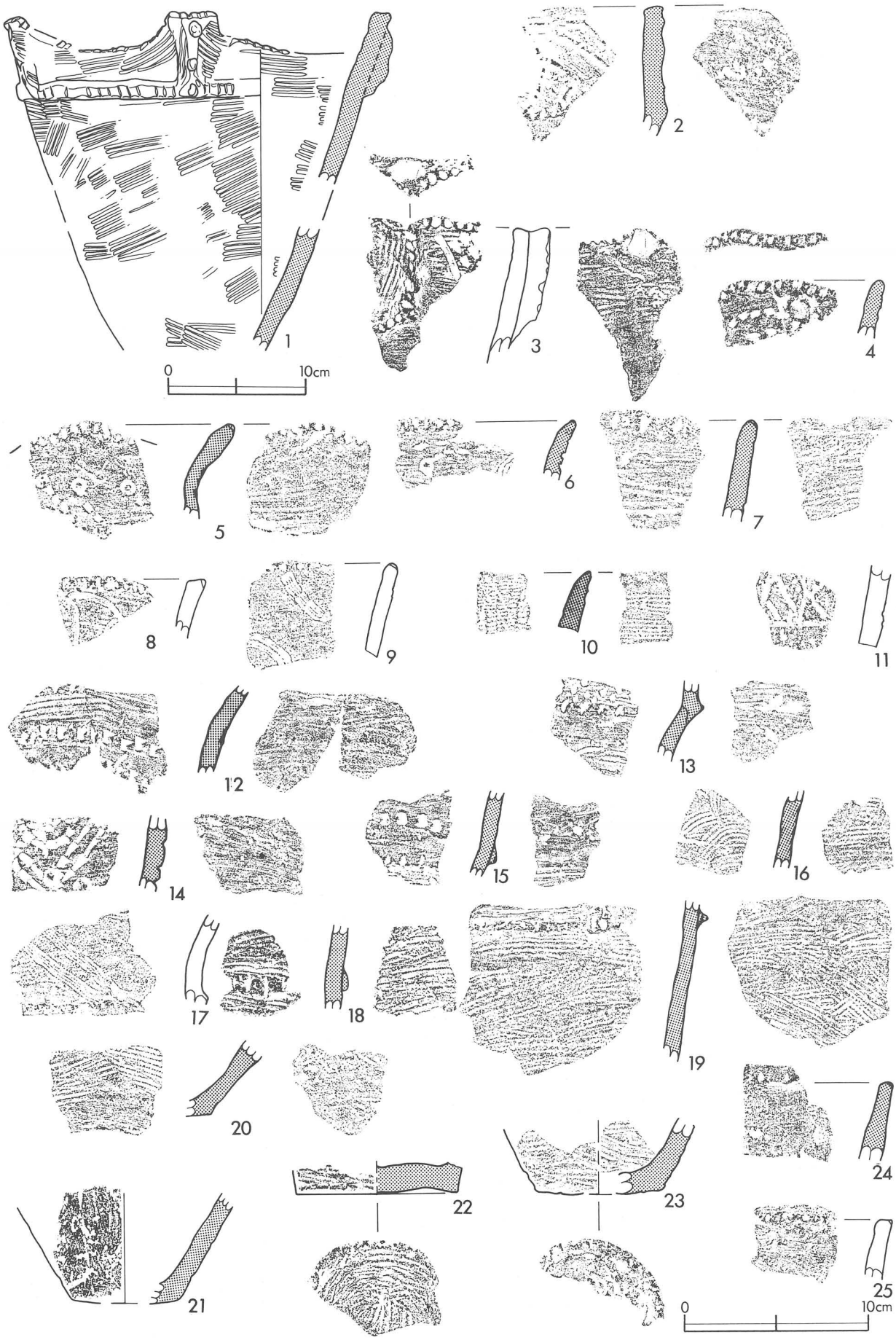
縄文土器は、縄文時代早期後半から早期末葉のものと、前期前半のものが全体の中で主体を占める。この他若干前期末葉から中期初頭のものや中期前半のものも出土している。

Ⅰ早期後半から末葉

早期後半から末葉の土器は、調査区南側の台地縁辺から南西埋没谷への傾斜地（Ｐ－35～37区）からまとまって出土している。本地区掘削時の土層の堆積状況は、最上層に約30cmの厚さで褐色土が堆積し、平安時代と縄文時代の遺物が混入して出土した。その下層にはやや赤味を帯びた褐色土層が約30cmの厚さで堆積していた。この土層の中に早期後半から末葉の土器が多く包含されていた。またこの下層には暗褐色土層が堆積して

遺構外縄文土器

番号	器種	部位	法量(cm)	器厚(cm)	器形と文様の特徴・その他	胎土	色調	時期	備考
1	深鉢	口～胴部	口径28.4 残高24.5	1.3	4単位波状縁 刻文を有する隆帯による区画文内を貝殻条痕で充填 表裏とも胴下半まで施文	繊維	にぶい橙	早期後半	Ｐ－36
2	深鉢	口		1.2	平縁 口唇部角頭状 直立 微隆起線文による曲線文	繊維・砂粒	橙	早期後半	南西埋没谷
3	深鉢	口		0.9	平縁 口唇部刻文 刻文を持つ隆帯による区画文内を条痕で充填 連続する斜位刺突 沈線文		にぶい橙	早期後半	Ｐ－37
4	深鉢	口		0.9	波状縁 口唇部丸棒状工具で刺突 垂下貼付文に押圧 刺突列による曲線文	繊維	橙	早期後半	Ｐ－35
5	深鉢	口		1.0	波頂部 口唇部刻文 表裏横位条痕文とナデ 円形竹管文 斜行する刺突	繊維	明褐	早期後半	Ｑ－36
6	深鉢	口		0.8	平縁 外折 口唇部刻文 地文表裏横位条痕文 刺突列 沈線文 円形竹管文	繊維	にぶい橙	早期後半	南西埋没谷
7	深鉢	口		1.1	平縁 口唇部丸棒状 表裏横位条痕文 口唇部に刻文	繊維	橙	早期後半	ＳＫ－57
8	深鉢	口		0.8	平縁 口唇部角頭状で刻文を有する 横位条痕文とナデ 沈線文	繊維・長石	にぶい橙	早期後半	Ｐ－37
9	深鉢	口		0.8	平縁 口唇部丸棒状で刻文 板状の工具で押し引き曲線文		にぶい橙	早期末葉	台地南
10	深鉢	口		1.1	平縁 口唇部先尖状 外反 口唇部・表面単軸絡条体による押圧 裏面横位条痕文	繊維	橙	早期末葉	Ｐ－34
11	深鉢	胴		1.1	格子目状沈線文 円形刺突文	繊維・雲母	橙	早期後半	Ｓ－39
12	深鉢	胴		1.0	横位条痕文上に半截竹管状工具による刺突文	繊維	褐	早期後半	Ｐ－35
13	深鉢	胴		0.7	屈曲部 表裏横位条痕文 屈曲上に刻文列 上方刺突 下方沈線文	繊維	橙	早期後半	Ｐ－37
14	深鉢	胴		1.1	円形刺突文 押し引き沈線による直線文 裏面ナデ	繊維	にぶい橙	早期後半	
15	深鉢	胴		0.8	表裏横位条痕文 半截竹管状工具による刺突	繊維	にぶい橙	早期後半	Ｐ－35
16	深鉢	胴		0.8	表面は曲線的な貝殻条痕文 裏面横位条痕文	繊維	明赤褐	早期後半	Ｒ－36
17	深鉢	胴		0.9	頸部に刻文を有する隆帯文 板状工具で押し引き斜行文		にぶい橙	早期末葉	表
18	深鉢	胴		1.0	表裏横位条痕文 刻文を有する隆帯文が横位に巡る	繊維	橙	早期末葉	ＳＩ－20
19	深鉢	胴		0.9	表裏条痕文 刻文を有する断面三角形の微隆起線文 盲孔を有する縦位貼付文	繊維	にぶい黄橙	早期末葉	Ｐ－35
20	深鉢	底		1.1	表裏横位条痕文	繊維・雲母	にぶい橙	早期後半	Ｐ－37
21	深鉢	底	底径6.0	1.0	表面縦位条痕文施文後磨り消しか	繊維	橙	早期後半	ＳＩ－39
22	深鉢	底	底径8.8	0.8	表面横位条痕文 底面にも条痕	繊維・長石	にぶい橙	早期後半	Ｐ－35
23	深鉢	底	底径6.8	1.1	表裏横位条痕文 底面端部に刻文	繊維	にぶい橙	早期後半	南西埋没谷
24	深鉢	口		1.2	平縁 口唇部丸棒状で刻文 ナデ	繊維	にぶい橙	早期末葉	南西埋没谷
25	深鉢	口		0.9	平縁 口唇部角頭状で刻文 ナデ	雲母	橙	早期末葉	南西埋没谷



第135図　遺構外出土遺物実測図(1)　縄文時代

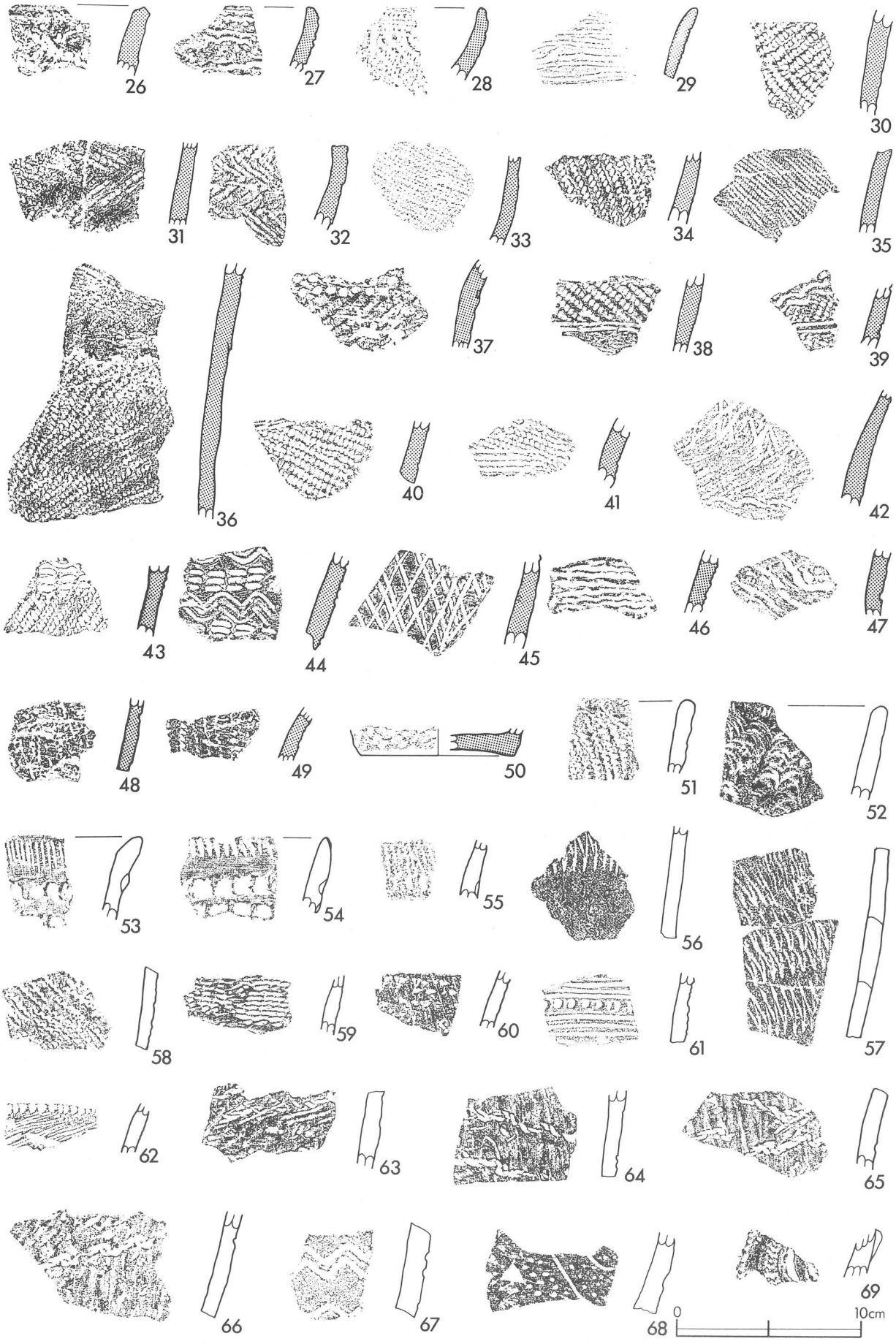
番号	器種	部位	法量(cm)	器厚(cm)	器形と文様の特徴・その他	胎土	色調	時期	備考
26	深鉢	口		1.1	平縁 地文L単軸絡条体第1類	繊維	明赤褐	前期前半	SI－11
27	深鉢	口		0.7	平縁 地文0段多条単節LR 半截竹管状工具によるコンパス文	繊維	にぶい橙	前期前半	SI－11
28	深鉢	口		1.0	平縁 口唇下平行沈線内半截竹管状工具による爪形文2条 地文異条か	繊維	にぶい黄褐	前期前半	斜面
29	深鉢	口		0.8	平縁 口唇部丸棒状 外反 平行沈線文	繊維	橙	前期前半	SK－6
30	深鉢	胴		1.0	単節LRと単節RLによる羽状縄文	繊維	にぶい黄橙	前期前半	SI－25
31	深鉢	胴		0.9	単節LRと単節RLによる羽状縄文	繊維	橙	前期前半	SI－11
32	深鉢	胴		0.9	無節Lr と無節Rℓによる羽状縄文	繊維	にぶい橙	前期前半	SI－11
33	深鉢	胴		0.8	単節RL+ℓの付加条縄文	繊維	橙	前期前半	SK－21
34	深鉢	胴		0.9	単節RL	繊維	橙	前期前半	SI－6
35	深鉢	胴		0.8	0段多条単節LR	繊維	にぶい褐	前期前半	SI－11
36	深鉢	胴		1.0	地文単節RL 半截竹管状工具によるコンパス文	繊維	橙	前期前半	SI－11
37	深鉢	胴		0.9	地文無節Rℓ 頸部に円形竹管文による二重の刺突列が巡る	繊維	橙	前期前半	表面炭化物付着 SK－38
38	深鉢	胴		0.9	地文単節RL 半截竹管状工具による横位区画文 区画内磨り消し	繊維	橙	前期前半	SI－33
39	深鉢	胴		1.0	地文0段多条単節LR 半截竹管状工具によるコンパス文	繊維	にぶい橙	前期前半	SI－11
40	深鉢	胴		1.0	地文単節RL 半截竹管状工具による有節沈線の区画文	繊維	にぶい橙	前期前半	SI－24
41	深鉢	胴		1.1	単節RL+ℓの付加条縄文 横位沈線文	繊維	橙	前期前半	TM
42	深鉢	胴		1.0	地文Lr 結節 沈線よる格子目文	繊維	にぶい黄橙	前期前半	台地西
43	深鉢	胴		1.1	地文0段多条単節LR コンパス文 横位短沈線文	繊維	明黄褐	前期前半	SK－54
44	深鉢	胴		1.0	3条の平行する短沈線文 その間波状文	繊維	橙	前期前半	SI－11
45	深鉢	胴		1.0	斜沈線による格子目文 左上・右下→右上・左下	繊維	にぶい橙	前期前半	SI－6
46	深鉢	胴		1.0	半截竹管状工具による集合したコンパス文	繊維	黄橙	前期前半	SI－29
47	深鉢	胴		1.0	コンパス文	繊維・石英	灰黄褐	前期前半	台地東
48	深鉢	胴		0.8	アナダラ属系貝類貝殻腹縁押圧	繊維	橙	前期前半	SI－11
49	深鉢	胴		0.9	アナダラ属系貝類貝殻腹縁押圧 口唇部にも施文	繊維	橙	前期前半	SI－11
50	深鉢	底	底径8.4	0.7	単節RL 底面4㎜程上げ底状 底面縄文施文後磨り消し	繊維・石英	橙	前期前半	H－9
51	深鉢	口		0.9	平縁 口唇部丸棒状 アナダラ属系貝類貝殻腹縁押圧		にぶい黄橙	前期後半	H－9 SD－5
52	深鉢	口		1.0	波状口縁 ハマグリ系貝類による波状文?	長石・石英	にぶい褐	前期後半	SI－37
53	深鉢	口		1.0	平縁 口唇部丸棒状 外反 細い短沈線垂下 凹凸文		にぶい橙	前期後半	南西埋没谷
54	深鉢	口		0.9	平縁 口唇部先尖状で長い刻文連続 凹凸文		橙	前期後半	R－39
55	深鉢	胴		0.8	アナダラ属系貝類貝殻腹縁押圧 貝による刺突	長石	明赤褐	前期後半	R－39
56	深鉢	胴		0.8	ハマグリ系貝類腹縁による波状文		橙	前期後半	SI－11
57	深鉢	胴		1.0	ハマグリ系貝類腹縁による波状文		橙	前期後半	SI－11
58	深鉢	胴		0.6	アナダラ属系貝類貝殻腹縁押圧		にぶい黄橙	前期後半	南西埋没谷
59	深鉢	胴		0.8	アナダラ属系貝類貝殻腹縁による横位押し引き文		橙	前期後半	SI－28
60	深鉢	胴		0.8	貝殻腹縁文 三角文		にぶい黄	前期後半	SI－16
61	深鉢	胴		0.8	平行沈線文 刺突文		橙	前期後半	表土
62	深鉢	胴		0.8	地文斜行条線文 横位刺突連続 直線的な波線文		橙	前期後半	南西埋没谷
63	深鉢	胴		1.0	S字状結節押圧?	石英	橙	前期末葉	SI－28
64	深鉢	胴		0.8	S字状結節押圧?		橙	前期末葉	SI－1
65	深鉢	胴		1.0	S字状結節押圧?		橙	前期末葉	南西埋没谷
66	深鉢	胴		0.9	S字状結節押圧?		橙	前期末葉	南西埋没谷
67	深鉢	胴		1.2	鋸歯状文	長石・石英	橙	前期末葉	台地西
68	深鉢	胴		1.0	曲線的沈線文 円形刺突文 三角彫刻文	砂粒	橙	前期末葉	SI－37
69	深鉢	胴		1.1	曲線的な隆帯文 これに沿って角押文・沈線文	雲母	暗赤褐	中期前半	SK－30

いたが遺物は含んでいない。P－36区中の掘り下げ時に、やや赤味を帯びた褐色土層中から径約30cmで厚さ5cmの焼土の堆積が見られ、No.1の復元された土器はこの焼土の近接地から出土した。

本時期のほとんどの土器は繊維を含み、表裏面に貝殻条痕文が施文されている。例外としてNo.2・9・10・11・24・25がある。No.10は軸に細い縄を密に巻いた単軸絡条体により側面圧痕や条痕が施文される。No.2・11の土器は鵜ヶ島台式土器に類する特徴を持つ。No.9・10・17・18・24・25は早期末葉の特徴を持つ土器である。この他は茅山下層式土器の特徴を持つ土器である。

Ⅱ前期前半

縄文時代前期前半の土器は台地上の第11号住居跡覆土中やその周辺から出土した。本来は同時期の遺構が存在した可能性が考えられる。



第136図　遺構外出土遺物実測図(2)　縄文時代

No.26～50は前期前半黒浜式土器の特徴を持つものである。すべて繊維を含む。ほとんどのものは地文に縄文を施文しているが、No.44～49は地文に縄文が施文されておらず、沈線文や貝殻文が施文される。

Ⅲ前期後半・Ⅳ前期末葉から中期初頭

前期後半から前期末葉そして中期初頭の土器は南西埋没谷を中心に出土している。

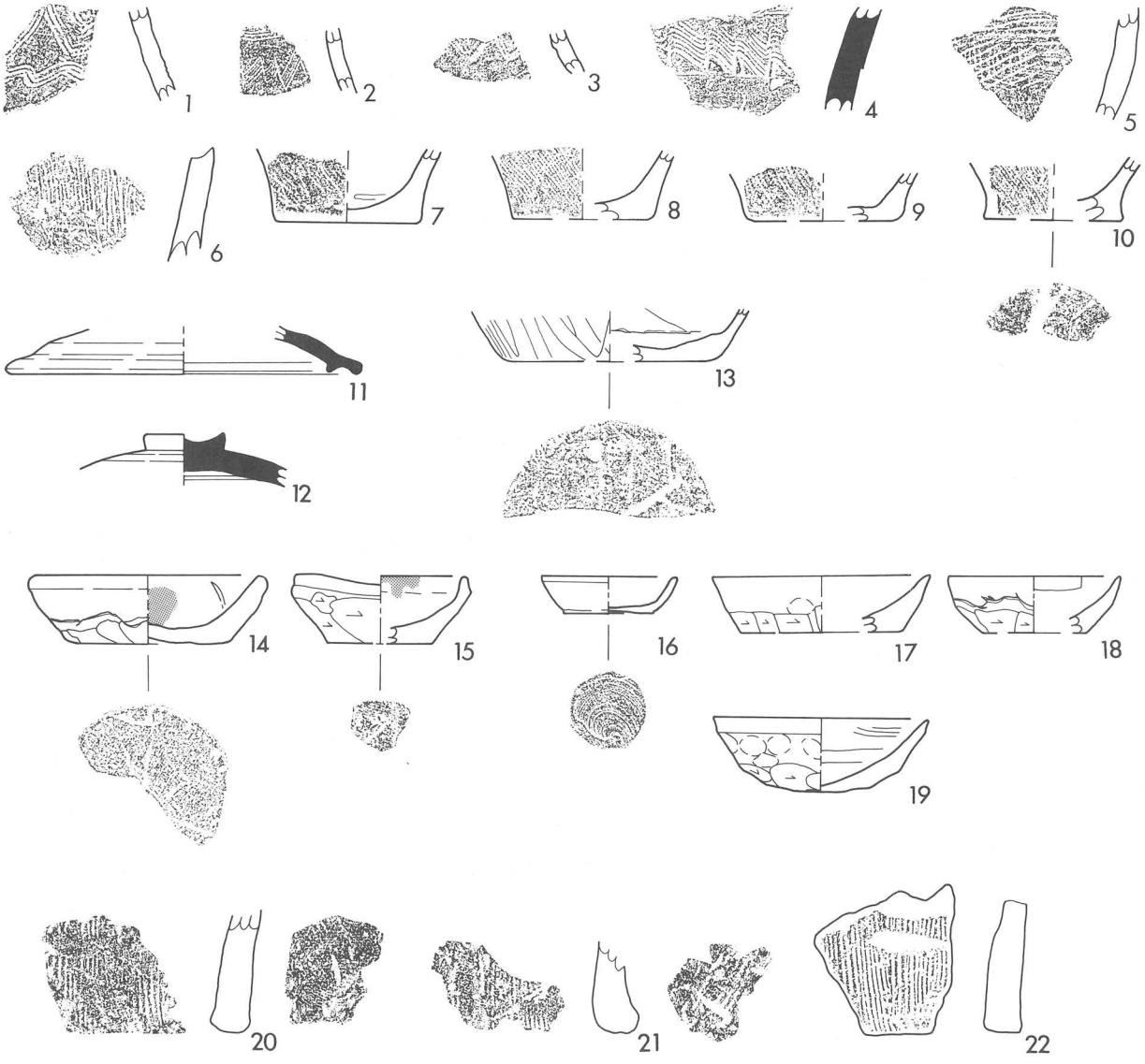
No.51～62は前期後半の浮島式・興津式土器に相当するものと考えられる。No.63～66はS字状結節文が施文される前期末葉から中期初頭の土器である。No.67・68は他地域で主体を占める土器で、No.67は東北地方南部の大木5式的な特徴を持つ土器で、No.68は十三菩提式的な特徴を持つ土器である。

Ⅴ中期前半

本土器の出土量は少ないが同一遺構から同時期のものと考えられる土器片錘が出土している。

2　**弥生土器**（第137図No.1～3・5～10）

本土器は調査区内の台地上や斜面部から出土したものである。No.1～3は櫛描文が施文されている。No.5は単軸絡条体1類Rによる施文がなされる。軸に巻かれた縄は条間が開いている。No.6は縦方向に集合した沈線



第137図　遺構外出土遺物実測図(3)　弥生時代以降

0　10cm

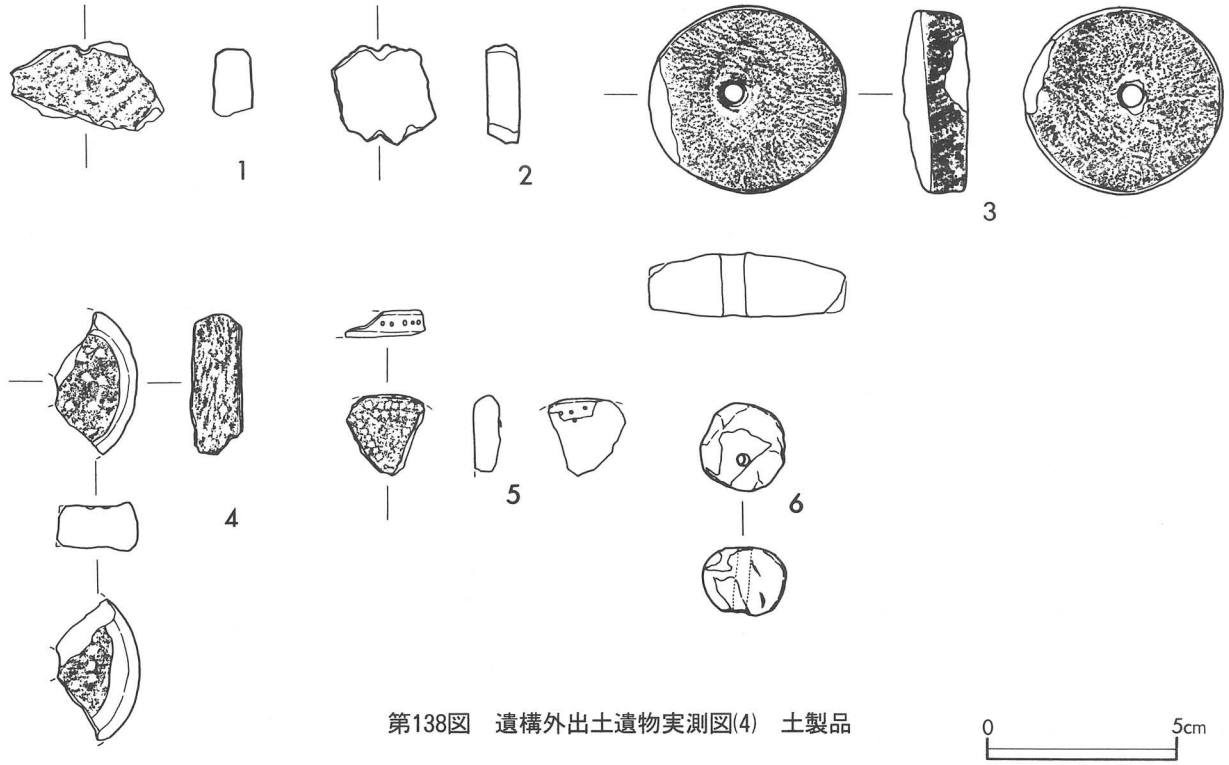
が引かれている。No.７～10は甕の底部である。いずれも弥生時代後期後半のものと思われる。

遺構外出土遺物

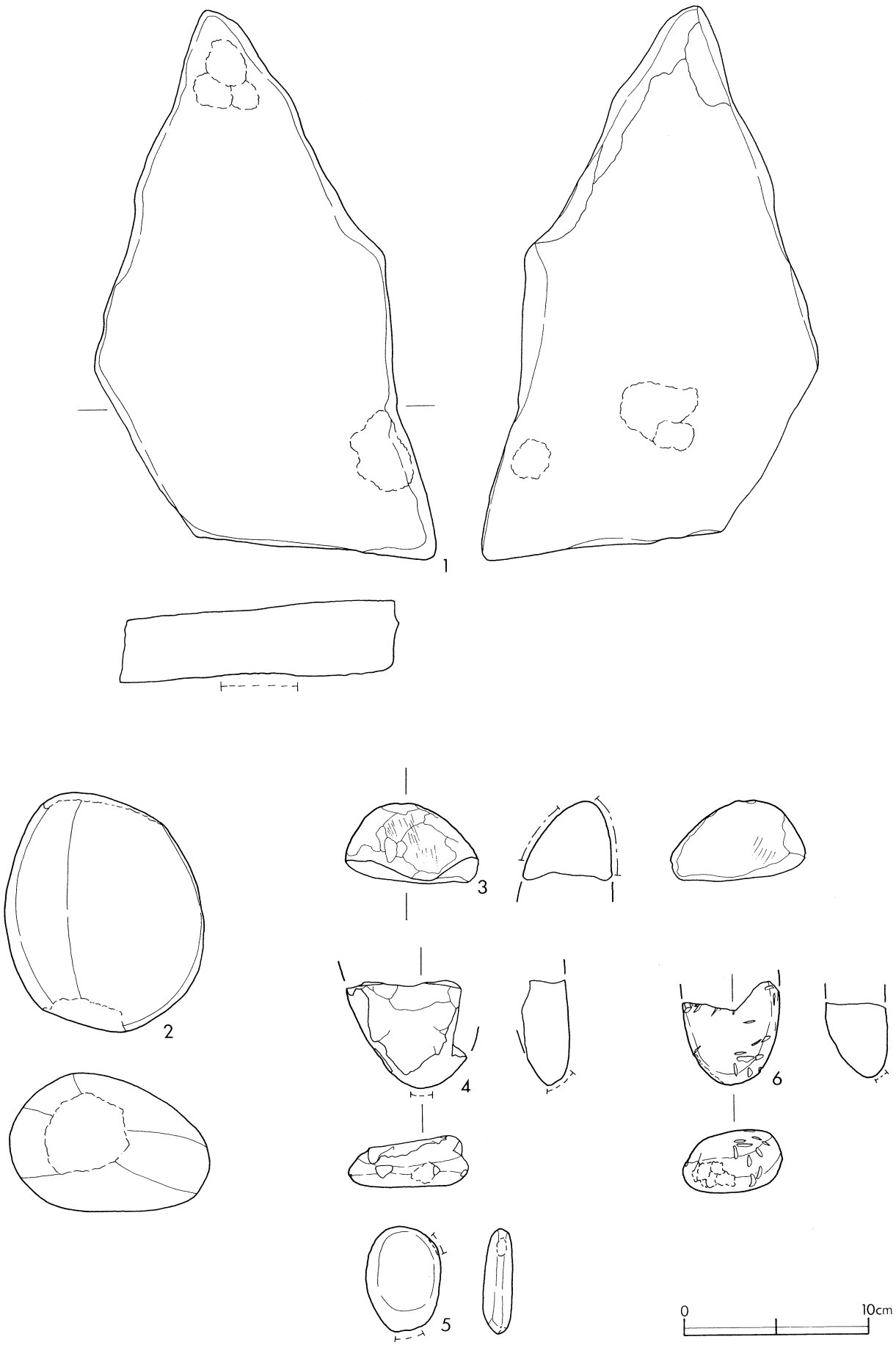
番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎　土	焼成	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他	
1	弥生土器	壺		(3.5)		灰褐		普	小片	櫛描き 波状文	表採取
2	弥生土器	壺		(2.8)		にぶい橙	長石・石英	普	小片	櫛描き 波状文	S-38区
3	弥生土器	壺		(1.7)		にぶい橙	長石・石英	普	小片	櫛描き 波状文	S-38区
4	須恵器	甕		(4.4)		暗灰黄	長石	普	小片	櫛描き 波状文	H-10区
5	弥生土器	甕		(4.7)		にぶい黄橙		普	小片		N-29区
6	弥生土器	甕		(4.2)		にぶい黄橙		普	小片	単軸絡条体1類	SI-31
7	弥生土器	甕		(3.1)	6.2	にぶい黄橙		普	５０		
8	弥生土器	甕		(2.9)	6.0	にぶい黄橙	石英	普	２５	底部立上り 付加条１種	
9	弥生土器	甕		(2.0)	6.4	橙	長石	普	２５	付加条１種RL+2L	
10	弥生土器	甕		(2.7)	6.0	灰黄褐		普	３３	付加条１種LR+2R 内面ナデ 底面木葉痕	
11	須恵器	蓋	15.2	(2.0)		灰	長石	良	１６	ロクロ成形 口縁部内側に返りが付き、口縁部が肥厚する	SI-21
12	須恵器	蓋		(1.5)		灰		良	１２	ロクロ成形	台地西
13	土師器	甕		(2.1)	9.4	にぶい橙		普	５０	外面縦ミガキ 内面横ナデ 底面木葉痕	
14	土師器	小皿	10.0	2.9	6.8	橙		普	５０	外面輪積痕 下半ヘラ削り 底面木葉痕 内面ナデ 炭化物付着	南西埋没谷
15	土師器	小皿	10.0	2.9	6.8	浅黄褐		普	１６	口縁部ナデ 下半ヘラ削り 底面木葉痕 内面ナデ 炭化物付着	南西埋没谷
16	土師質土器カワラケ	小皿	5.8	1.6	3.8	にぶい橙		普	５０	ロクロ成形 底面糸切り痕	台地上
17	土師質土器カワラケ	小皿	9.2	2.4	6.8	にぶい橙		普	５０	外面輪積痕 下半ヘラ削り 底面木葉痕 内面ナデ	南西埋没谷
18	土師質土器カワラケ	小皿	7.4	2.3	4.5	にぶい橙		普	３３	外面輪積痕 下半ヘラ削り 内面ナデ	南西埋没谷
19	土師質土器カワラケ	小皿	9.0	3.1	1.9	にぶい黄橙	雲母	普	２５	外面指頭痕 輪積痕 下半ヘラ削り 内面ナデ	南西埋没谷
20	埴輪			(5.1)	1.4	橙	雲母	普	小片	縦方向に刷毛目 基底部	南西埋没谷
21	埴輪			(4.6)	1.3	橙	雲母	普	小片	縦方向に刷毛目 口縁部か	台地上
22	埴輪			(4.6)	1.3	橙	雲母	普	小片	縦方向に刷毛目 基底部	TM-1

3　埴輪（第137図No.20～22）

No.22は第１号古墳の周溝から出土したものであるが、同古墳に伴うものとは考えられず遺構外として扱う。No.20は南西埋没谷から出土したものである。いずれも表面に縦方向の刷毛目が施文されている。No.21のみはやや外傾した口縁部の可能性が考えられる。調査エリア外の北側には石枕を出土したとされる古墳が存在したらしいことが伝わっており、近接地に埴輪を持つ古墳が存在した可能性が考えられる。



第138図　遺構外出土遺物実測図(4)　土製品



第139図　遺構外出土遺物実測図(5)　石器

第140図　遺構外出土遺物実測図(6)　石器

4　土師器・須恵器・カワラケ（第137図No.4・11～19）

No.11は弥生時代の第21号住居跡から出土したもので、混入したものと考えられる。No.4は櫛描き波状文が施文された須恵器大甕の破片である。この他にも図示していないが第1号古墳の周溝覆土最上層から須恵器大甕の変形した胴部破片が出土している。No.11・12は須恵器蓋の破片である。

No.14・15・17～19は南西埋没谷の調査初期段階に出土したものである。本来は南西埋没谷の欄で扱うべきものである。いずれも土師器の小皿であり、底面に木葉痕が残り灯明具として使用された可能性が高い。

No.16は台地上一括資料のカワラケで中世以降のものである。

5　土製品（第138図No.1～6）

No.1・2は縄文時代中期前半の土器を再利用して作った土器片錘である。

No.3～5は後世の遺構から出土した弥生時代の土製紡錘車である。No.3は表裏面と側面に先端の鋭いヘラ状工具で刺突を加えている。No.4・5には細い丸棒状工具による刺突文が加えられている。No.6は小型の土玉である。

遺構外土製品

番号	種類	長さ(cm)	幅(cm)	器厚(cm)	重量(g)	色調	胎　土	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	土器片錘	2.1	4.1	1.0	8.2	褐　灰	雲母	3 0	単節LR縄文施文 縄文土器片再利用　縄文時代 SK-30
2	土器片錘	2.6	2.5	0.9	6.8	にぶい橙		1 0 0	SK-30
3	紡 錘 車	4.9	5.2	1.7	43.7	橙	長石・石英	一部欠損	断面レンズ状に膨らむ 全面に爪形の刺突文 片側より穿孔 孔径0.6cm 弥生時代 SI-37
4	紡 錘 車	3.7	2.1	1.3	10.0	淡　黄		3 0	表裏面刺突 側面爪形の刺突文　〃　TM-2
5	紡 錘 車	2.0	2.1	0.7	3.0	にぶい黄橙		2 5	中央の孔を中心に放射状に円形刺突文　〃　SI-35
6	土　玉	2.3	2.5	1.8	9.5	にぶい黄橙		一部欠損	荒いナデ　不明　台地上

6　石器・石製品（第139・140図No.1～15）

No.1・3は調査区南方の南西埋没谷近接のP－36区から縄文時代の遺物と一緒に同一土層から出土したものである。同所からは縄文時代早期後半から早期末葉の土器が出土しており、同一時期のものと考えられる。

No.2は第1号古墳の周溝から出土したもので、同所は弥生時代の竪穴住居跡である第10号住居跡と重複しており、本来は弥生時代の石器の可能性が考えられる。

No.7～12は砥石であり、いずれも遺構外から出土したものである。材質は凝灰岩を使用したものが目立つ。

No.13は打製石器で、14は磨製石器である穂摘具の可能性が考えらる。

No.15は平安時代の竪穴住居跡である第36号住居跡から出土した宝篋印塔の笠部分で、馬耳形突起が付き、階

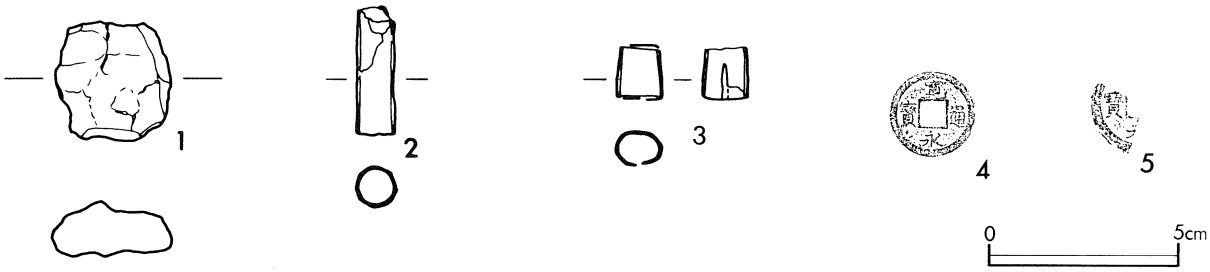
遺構外石器

番号	種類	長さ(cm)	幅(cm)	器厚(cm)	重量(g)	色調	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他
1	台　石	29.9	(18.2)	4.6	(3160)	花 崗 岩	一部欠損	両平坦面に敲打痕　P-35
2	磨 石 類	13.1	10.7	7.5	1440	砂　岩	1 0 0	両端部に各1ヶ所敲打痕　TM-1
3	磨 石 類	(4.4)	(7.7)	(4.8)	(175)	砂　岩	5 0	平坦面2面に磨り面、擦痕、風化著しい　P-35
4	磨 石 類	(5.7)	(6.5)	2.7	(127)	フォルンフェルス	5 0	下端部1ヶ所に敲打痕　台地上北西
5	磨 石 類	5.6	4.2	1.5	50.6	砂　岩	1 0 0	片側縁・下端部に各1ヶ所敲打痕　表採
6	磨 石 類	(5.5)	5.3	3.4	(104.1)	凝 灰 岩	5 0	下端部敲打痕 有溝　SD-2
7	砥　石	(5.9)	4.5	1.1	(42.9)	泥　岩	上端一部欠損	5面砥石 有溝　不明
8	砥　石	(6.1)	(3.3)	1.6	(41.2)	凝 灰 岩	一部欠損	3面砥石　TM1 周辺
9	砥　石	(5.3)	2.2	0.8	(12.7)	凝 灰 岩	一部欠損	3面砥石 線条痕を切って溝を作る　SI-21周辺
10	砥　石	(8.2)	2.9	1.2	(41.6)	凝 灰 岩	両端部欠損	4面砥石 このうち3面に切り出し痕　SI-21 〃
11	砥　石	(4.0)	(4.3)	1.3	(36.8)	凝 灰 岩	一部欠損	3面砥石 太い溝は切り出し痕　SI-5 周辺
12	砥　石	(6.5)	5.5	3.1	(20.3)	凝 灰 岩	上端一部欠損	5面砥石 うち2面に切り出し痕　南西埋没
13	打製石器	(7.3)	(4.7)	(1.6)	(50.6)	黒雲母片岩	5 0	分厚形 穂摘具か?　台地北西
14	磨製石器	11.0	4.9	2.0	116.1	砂　岩	一部欠損	礫面を残す 穂摘具か?　台地西
15	宝篋印塔	(14.5)	(20.2)	(14.5)	(4280)	花 崗 岩	一部欠損	馬耳状突起　SI-36

段状の表現がある。

7　金属製品（第141図No.１～５　ＰＬ32）

No.１は鉄塊系遺物と考えられるものである。No.２・３はキセルの金具と考えられる。No.２は雁首と思われ、No.３は不明である。No.３は第２号住居跡覆土から出土したものである。いずれも緑青を吹いている。No.４・５は寛永通寶である。No.４は第７号住居跡の遺構確認時に出土したものである。No.５はＯ－12区から出土したものである。



第141図　遺構外出土遺物実測図(7)　金属製品

遺構外金属製品

番号	種類	長さ(cm)	幅(cm)	器厚(cm)	重量(g)	残存率(%)	特　徴　・　そ　の　他	
1	鉄　　滓	3.2	3.2	2.5	23.0	一　　部		SK-24
2	キセル雁首	(3.4)	1.1	0.5	(3.0)	一部欠損	端部が潰れている	南斜面
3	キセル雁首	(1.4)	1.3	0.9	(1.8)	一部欠損	切り込み	SI-2
4	古　　銭	2.2	0.7		2.2	１００	「寛永通寶」	SI-7
5	古　　銭	1.8	1.2		(0.9)	２５	「寛永通寶」	O-12

第4節　考　察

1．根鹿北遺跡出土瓦塔の年代的位置付け

（財）栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター　池田敏宏

はじめに

瓦塔は、各部材（屋蓋部や軸部など）ごとに製作・組み立てられることで、「小建築」としての機能を有する（註1）。それゆえ、瓦塔を年代的に位置付けていく場合、各部材のセット関係で年代を論じていくことが望まれる。ここ近年、他の考古資料に比べて型式論的検討が立ち遅れている瓦塔研究においても、ようやく部材単位に型式論的検討がなされるようになってきた。関東・東海・北陸3地方の瓦塔斗栱部編年が高崎光司氏により示されている（高崎1989）。また善端　直氏は北陸地方出土瓦塔の屋蓋部編年を（善端1994）、出河祐典氏は信州地方出土瓦塔の屋蓋部編年を出されている（出河1995）。筆者においても、これまでに関東地方出土瓦塔屋蓋部表現の形態分類と変遷過程の解明を試みた報告・論考を公表してきている（池田1994・1995・1996A・1996B）。

本稿では、根鹿北遺跡瓦塔の年代的位置付けを行なうに際し、筆者先稿（瓦塔屋蓋部編年）と高崎論文（瓦塔斗栱部編年）のクロスチェック作業を試みてみたい。

1．根鹿北遺跡瓦塔の特徴

本文中で事実記載を行なっているが、根鹿北遺跡瓦塔の特徴を再度記述すると次のとおりである。

（a）屋蓋部（第132図）

屋根瓦表現

幅0.7cm、深さ0.4cmの竹管状工具によるナデ調整で丸瓦のみを表現している。瓦の継ぎ目は、丸瓦表現後、工具押し引きによる結節を軒先先端寄り一節にのみ施すことで表現している。つまり根鹿北遺跡瓦塔は、先稿（池田1995）で言う**幅狭工具押し引きA手法**を採用していることになる。

軒裏垂木表現

軒裏の垂木の表現は、一軒のみを表現している。垂木部分に垂木横幅設定のためのヘラ削り工具沈線を引いた後、これに基づき垂木と垂木の間を深めにヘラ削りすることによって表している。つまり根鹿北遺跡瓦塔は、先稿（池田1995）で言う**ヘラ削り出しC1手法**を採用していることになる。

（b）斗栱部（第109・110図）

i）逆凸字形表現の抽象化が進んだ壁付き三斗と横架材状斗栱粘土帯（通肘木にあたる）が配されている。大斗表現が本来ある箇所は欠損しており、不明である。

ii）持ち送りは、横架材状斗栱粘土帯（通肘木）上に付けられ軸部上端からの斜め張り出しと接する。なお、持ち送りは、2段に板材を刻み出している。

iii）手先三斗は、斜め張り出し先端を逆凸字状に切り出し表現している。

iv）二重以上では、壁付き三斗が省略され、壁面から持ち送り部分のみが作り出される。なお横架材状斗栱粘土帯などによる柱の表現は全くない。

2．根鹿北遺跡瓦塔の年代的位置付け

（ａ）根鹿北遺跡瓦塔の屋蓋部表現手法を前稿類型（池田1996Ｂ。本書第142・143図）に照らし合わせてみると、以下のようにまとめることができる。

ｉ）屋根瓦表現に**幅狭工具押し引きＡ手法**を採用している。

ii）軒裏垂木表現に**ヘラ削り出しＣ２手法**を採用している。

iii）前稿で筆者は、**瓦表現に幅狭工具押し引きＡ手法を、垂木表現にヘラ削り出しＣ２手法**を採用している瓦塔屋蓋部を上西原類型として設定した。根鹿北遺跡瓦塔は、上記（ｉ）・（ii）より**上西原類型に比定できる。**

（ｂ）根鹿北遺跡瓦塔の斗栱部表現について高崎氏の斗栱部編年（高崎1989）を参考に、その位置付けを行なってみたい。なお本稿では、根鹿北遺跡瓦塔斗栱部との比較類例（型式論的検討ならびに暦年代的位置付けを行なう上で良好な資料）として、東山遺跡瓦塔、上西原遺跡瓦塔、柳原Ａ遺跡瓦塔、谷津遺跡瓦塔を取り上げ、比較・検討してみたい。（第144図）

ｉ）逆凸字形表現の抽象化が進んだ壁付き三斗と横架材状斗栱粘土帯が配される点、東山遺跡瓦塔、上西原遺跡瓦塔、柳原Ａ遺跡瓦塔、谷津遺跡瓦塔に見受けるこができる。

ii）持ち送りが横架材状斗栱粘土帯上につけられ、軸部上端からの斜め張り出しと接する点、ならびに持ち送りに２段の刻み出しが配されている点、東山遺跡瓦塔、上西原遺跡瓦塔、柳原Ａ遺跡瓦塔に見受けることができる。

iii）斜め張り出し先端に、手先三斗を逆凸字状に切り出し表現している点、上西原遺跡瓦塔、柳原Ａ遺跡瓦塔に見受けることができる。

iv）二重以上では、柱の表現が全く見られない点、壁付き三斗が省略されている点、壁面から持ち送り部分のみが作り出されている点、東山遺跡瓦塔、上西原遺跡瓦塔に見受けることができる。

v）上記（ｉ）～（iv）の検証の結果、根鹿北遺跡瓦塔斗栱部表現は、上西原遺跡瓦塔斗栱部表現に最も近いと言えよう。

（ｃ）根鹿北遺跡瓦塔に共伴する土器（暦年代比定が比較的安定している須恵器を中心に）の年代観をもとに、根鹿北遺跡瓦塔の年代的位置付けを行なってみたい。

ｉ）根鹿北遺跡では、第39号住居跡、第２号掘立柱建物跡、南西埋没谷で瓦塔と須恵器・土師器が共伴している（本書第81・109・131図）。瓦塔と共伴した須恵器のほとんどが、胎土に雲母粒子を多量に含むことから新治窯跡群産須恵器と考えられる。瓦塔共伴須恵器は、口径14cm、底径７cmと口径・底径比が１／２である点、底部調整手法が回転ヘラ切り後、多方向手持ちヘラ削り、または回転ヘラ切り未調整である点、体部下端１／４近く手持ちヘラ削りが施されている点から、新治窯跡群坏ＡＩ５類＝９世紀第２～第３四半期に比定できる。（註２）。第39号住居跡出土瓦塔・相輪部破片は覆土中より出土しており「流入」と認定できる。また、南西埋没谷から出土した瓦塔・土器は、共に谷上部からの「流入」と判断できる（註３）。しかし、ここでは根鹿北遺跡瓦塔の年代的位置付けを行なうための参考資料としたい。

ii）根鹿北遺跡瓦塔屋蓋部が、上西原類型瓦塔に比定できることは前述したとおりである。筆者の瓦塔屋蓋部編年では、上西原類型瓦塔は９世紀中葉を中心とした時期に位置付けられることは、前稿（池田1996Ｂ）検証により明らかである。（本書第143図）

ⅲ）根鹿北遺跡瓦塔斗栱部が、上西原遺跡瓦塔斗栱部に最も近いことは前述したとおりである。高崎光司氏の瓦塔斗栱部編年によれば、上西原遺跡瓦塔は関東三期（９世紀前半代）に位置付けることができる瓦塔で、「９世紀後半代に下がることはない」とのことである（高崎1989。本書第144図）。

ⅳ）上記（ⅰ）～（ⅲ）の検証より、根鹿北遺跡瓦塔は、９世紀中葉頃に位置付けることができよう。

ま と め

根鹿北遺跡瓦塔の位置付けについて整理すると、次のようにまとめられる。

① 根鹿北遺跡瓦塔屋蓋部表現は、上西原類型瓦塔に比定できる。

② 根鹿北遺跡瓦塔斗栱部表現は、西原遺跡瓦塔斗栱部表現に近い。

③ 根鹿北遺跡瓦塔は、屋蓋部編年（池田1996Ｂ）ならびに斗栱部編年（高崎1989）より、９世紀中葉頃に位置付けることができる。またこの結果、根鹿北遺跡瓦塔では、屋蓋部編年と斗栱部編年とが対応できることが明らかとなった。

註

註１　「小建築」概念は、（松本1983）論文、（坪井ほか1984）文献による。

註２　（赤井・佐々木1996）論文、（赤井1997）文献、ならびに赤井博之氏のご教示をもとに筆者が位置付けをおこなった。なお（赤井・佐々木1996）論文で言う坏ＡⅠ５類は、（赤井1997）文献の東城寺寄居前Ｂ段階～小野１号窯跡段階のことを示すこと、赤井氏よりご教示を得た。

註３　（塚本・池田1994）文献138ページに記した「遺棄」・「廃棄」・「流入」概念に基づき、筆者が認定を行なった。

参考文献

相京邦彦ほか　1986『大北遺跡・谷津遺跡・瓜作遺跡・池田古墳群』（財）千葉県文化財センター

松田　猛ほか　1986『上西原・向原・谷津遺跡』群馬県教育委員会

高崎光司　1989「瓦塔小考」『考古学雑誌』74－３　日本考古学会

渡辺　一ほか　1991『埼玉県比企郡鳩山窯跡群Ⅲ』鳩山窯跡群調査会・鳩山町教育委員会

今泉泰之ほか　1993『埼玉県児玉郡美里町東山遺跡出土瓦塔・瓦堂解体修理報告書』埼玉県教育委員会・埼玉県立歴史資料館

池田敏宏　1994『北武蔵における瓦塔の変遷過程－屋蓋部表現の変化を中心として－』土曜考古学研究会1994年５月例会レジュメ（一部改訂して法政考古学会1994年７月例会レジュメ）

1995「瓦塔屋蓋部表現手法の検討－埼玉県児玉郡堂平遺跡採集瓦塔をめぐって－」『土曜考古』第19号　土曜考古学会

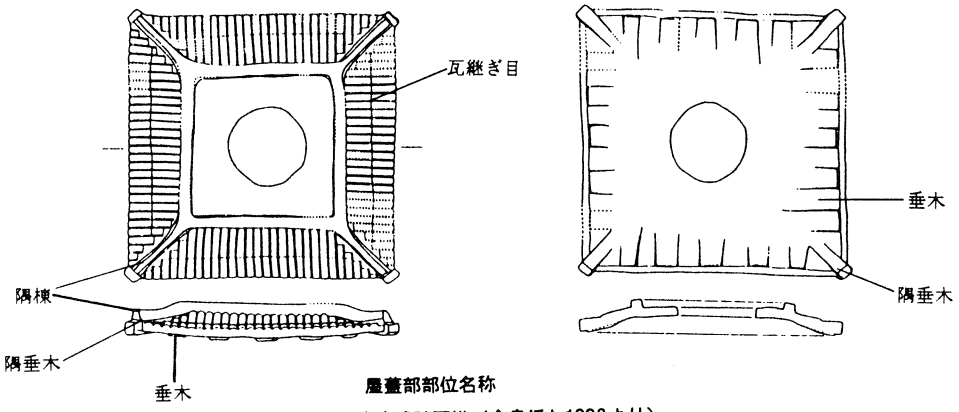
1996Ａ「第４章考察　第２節八幡根東遺跡出土瓦塔の位置付け」『八幡根遺跡』栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団

1996Ｂ「瓦塔屋蓋部編年試論－北武蔵６～８類瓦塔、類似資料を中心として－」『土曜考古』第20号　土曜考古学会

善端　直　1994「北陸の古代瓦塔」『文化財学論叢』奈良大学

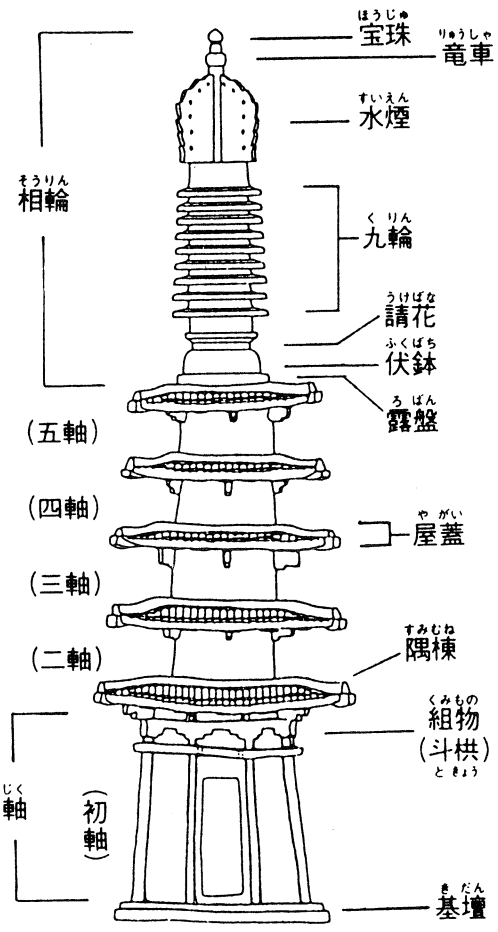
塚本師也・池田敏宏　1994『鶴田中原遺跡』栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団

出河祐典　1995「信濃の瓦塔再考－近年の出土事例を中心にして－」『信濃』47－4　信濃史学会
赤井博之・佐々木義則　1996「新治窯跡群産須恵器坏ＡＩ類の変化－消費地の様相－」『婆良岐考古』第18号　婆良岐考古同人会
赤井博之　1997「茨城県下律令制変質期の須恵器の系譜」『古代生産史研究会 '97シンポジュウム　東国の須恵器－関東地方における歴史時代須恵器の系譜－』古代生産史研究会



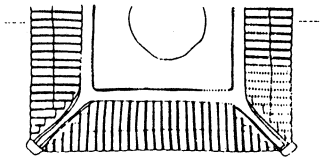
屋蓋部部位名称

（例）東山遺跡瓦塔（今泉ほか1993より）



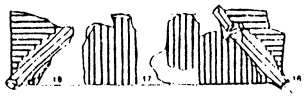
部位名称図（駒宮・栗岡1994より）

（例）東山遺跡瓦塔



幅狭工具押し引きＡ手法

（例）東山遺跡瓦塔（今泉ほか1993より）

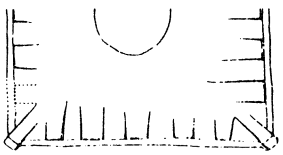


幅狭工具押し引きＢ手法

（例）柳原Ａ遺跡瓦塔（渡辺ほか1991より）

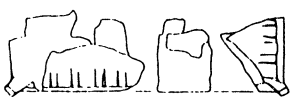
幅狭工具押し引きＣ手法

（例）東郷台遺跡瓦塔（光江1986より）



へラ削り出しＣ1手法

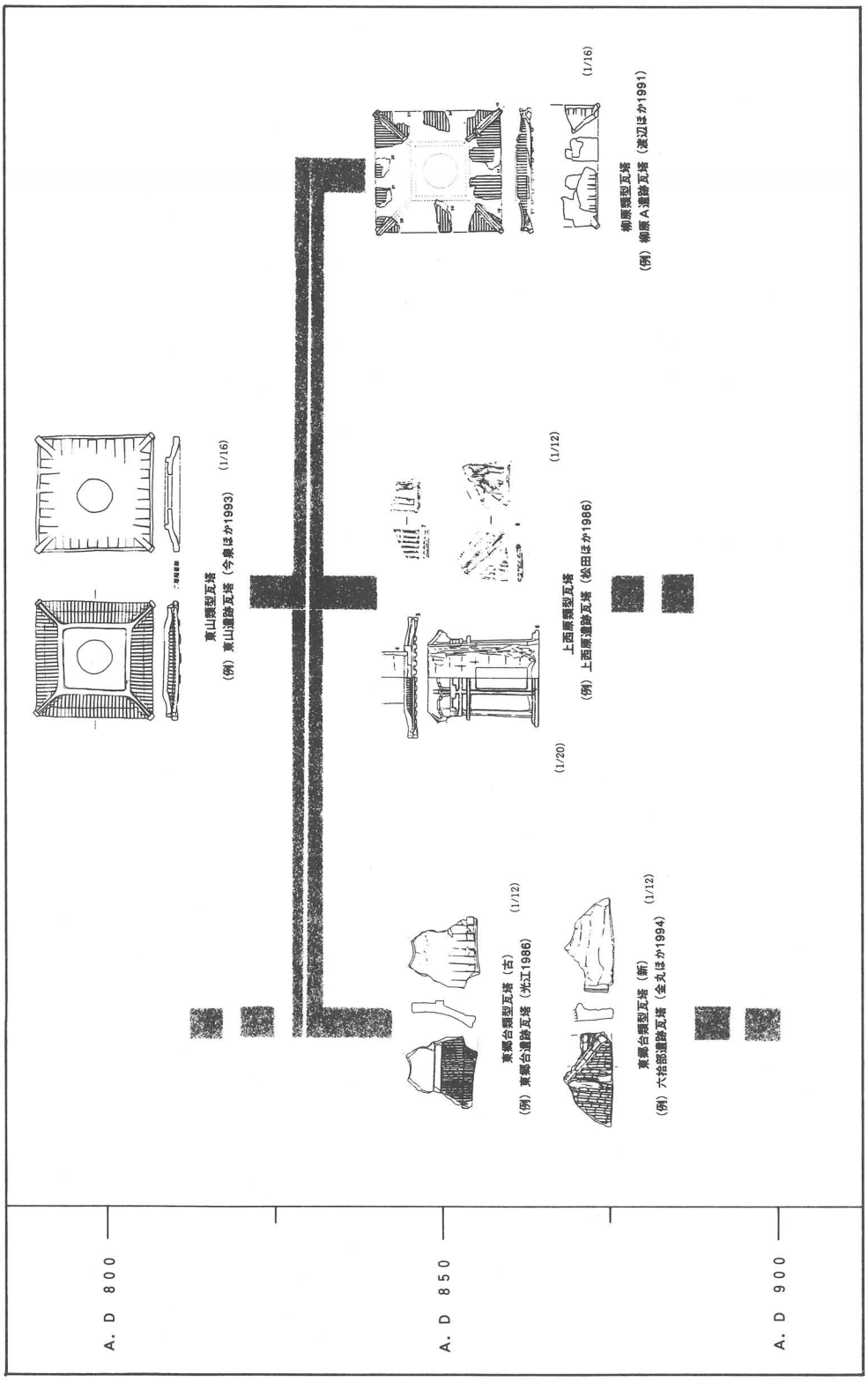
（例）東山遺跡瓦塔（今泉ほか1993より）



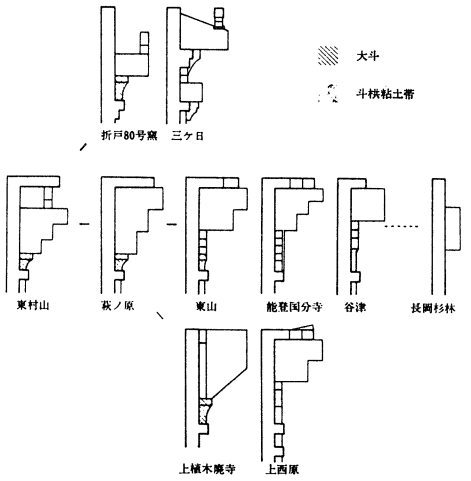
へラ削り出しＣ2手法

（例）柳原Ａ遺跡瓦塔（渡辺ほか1991より）

第142図　瓦塔部分名称説明図（池田1996Bより）



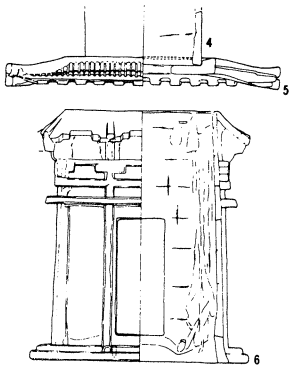
第143図　瓦塔屋蓋部編年図（9世紀代　池田 1996Bより）



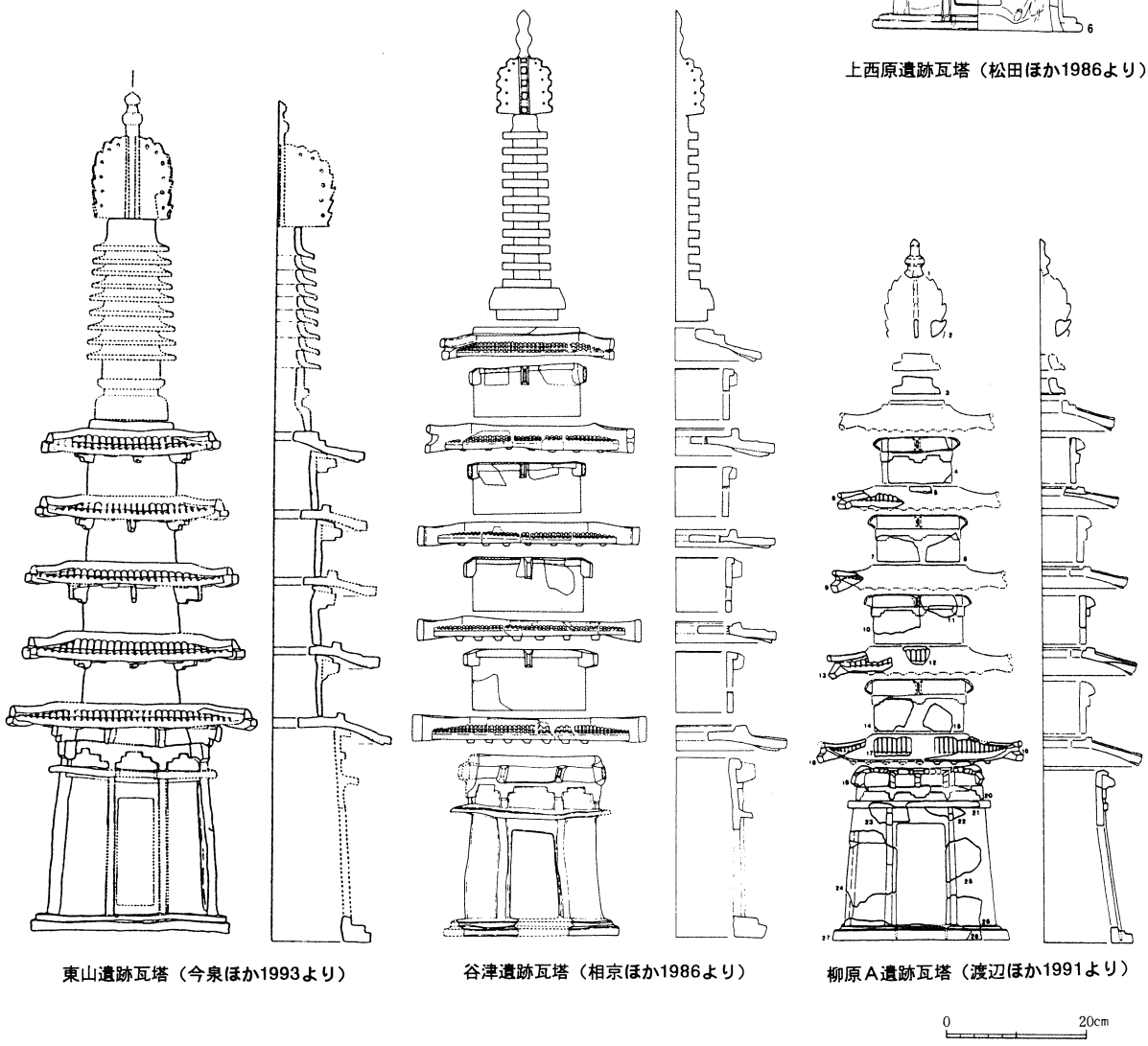
模式図による斗栱部の変化（高崎1989より）

AD	750	800	850	900
関東	長熊廃寺	上植木廃寺　上野国分寺・上西原・小丸山		
	伝ミツサワ　東村山	新沼窯　勝呂廃寺　東山		
		萩の原　六枚部（板作り）谷津		六枚部（粗作り）
東海	勝川　折戸80号窯　三ケ日			真福寺東谷
北陸	福山窯	高瀬		長岡杉林
	柳田シャコデ廃寺　能登国分寺（円・方）		池崎窯	

瓦塔斗栱部編年（高崎1989より）



上西原遺跡瓦塔（松田ほか1986より）



東山遺跡瓦塔（今泉ほか1993より）

谷津遺跡瓦塔（相京ほか1986より）

柳原A遺跡瓦塔（渡辺ほか1991より）

0　20cm

第144図　瓦塔斗栱部表現比較類例

2．第11号土坑の珪藻分析

株式会社　古環境研究所

1．はじめに

珪藻は、10～500μmほどの珪酸質殻を持つ単細胞藻類で、殻の形やこれに刻まれた模様などから多くの珪藻種が調べられている。また、現在の生態から特定環境を指標する珪藻種群も設定されている（小杉，1988；安藤，1990）。一般的に、珪藻の成育域は海水域から淡水域まで広範囲に及び、中には河川や沼地などの水成環境以外の陸地においてもわずかな水分が供給される環境、例えばコケの表面や湿った岩石の表面などで成育する珪藻種（陸生珪藻）も知られている。こうした珪藻種あるいは珪藻群集の性質を利用して、過去の堆積物中の珪藻化石の解析から、堆積物の堆積環境について知ることが可能である。

ここでは、奈良・平安時代の氷室とされる土坑内覆土中の珪藻化石を調べ、池などから氷が採取されたか否かを検討した。

2．試料と処理方法

分析試料は、氷室と思われる第11号土坑底面の小ピット中の土を用いた。

これらの試料は、以下の方法処理し、珪藻用プレパラートを作成した。

1）試料から湿潤重量約1ｇ程度を取り出し、計量した後ビーカーに移し、蒸溜水を加えた後、懸濁液を回収する。放置後上澄み液を除去し、30%過酸化水素を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行なう。

2）反応終了後水を加え、1時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を上澄み液が透明になるまで繰り返す（7回程度）。

3）ビーカーに残った残渣は、遠心管に細粒分のみ回収する。

4）マイクロピペットを用い、遠心管から適量を取り、カバーガラスに滴下し乾燥させる。乾燥後は、マウントメディア（封入剤）で封入しプレパラートを作成する。

作成したプレパラートを光学顕微鏡下600～1000倍（油浸）で観察し、珪藻種を調べた。なお、珪藻化石が少ないためプレパラート全面を検鏡した。

3．珪藻化石の環境指標種群について

ここでは、淡水珪藻のみが検出された。珪藻化石の環境指標種群は、安藤（1990）が設定した環境指標種群に基づいた。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、淡水種は広布種として扱った。また、破片のため属レベルで同定した分類群は、その種群を不明として扱った。以下に、安藤（1990）が設定した淡水域における環境指標種群の概要を示す。

〔上流性河川指標種群（Ｊ）〕：上流部の渓谷部に集中して出現する種群である。

〔中～下流性河川指標種群（Ｋ）〕：中～下流部、すなわち河川沿いに河成段丘、扇状地及び自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。

〔最下流性河川指標種群（Ｌ）〕：最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群である。

〔湖沼浮遊生指標種群（M)〕：水深が約1.5m以上で、水性植物は岸では見られるが、水底には生育していない湖沼である。

〔湖沼沼沢湿地指標種群（N)〕：水深が１m内外で、一面に植物が繁殖しているところ、および湿地である。

〔沼沢湿地付着性指標種群（O)〕：沼沢ならびに、前述した湿地で付着の状態で優勢な出現が見られる種群である。

〔高層湿原指標種群（P)〕：ミズゴケを主とした植物群落及び泥炭層の発達が見られる場所に出現する群落である。

〔陸域指標種群（Q)〕：上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している群種である（陸生珪藻と呼ばれている)。

4．珪藻化石群集と堆積環境

分析の結果、氷室と思われる土坑覆土からは、沼沢湿地付着生指標種群の Pinnularia viridis、陸域指標種群の Pinnularia borealis や Hantzschia amphioxys、広い範囲に生息する広布種の Rhopalodia gibberula や Synedra unla などの淡水生の珪藻化石が検出された。いずれも少量であり、試料１g あたりの珪藻殻数は3.71 $\times 10^3$個程度と低い値である。このような珪藻化石群集からは、ジメジメとした沼沢湿地環境が想定される。

引用文献

安藤一男（1990)「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42-2,p.73-88.

小杉正人（1988)「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『第四紀紀研究』27(1),p.1-20.

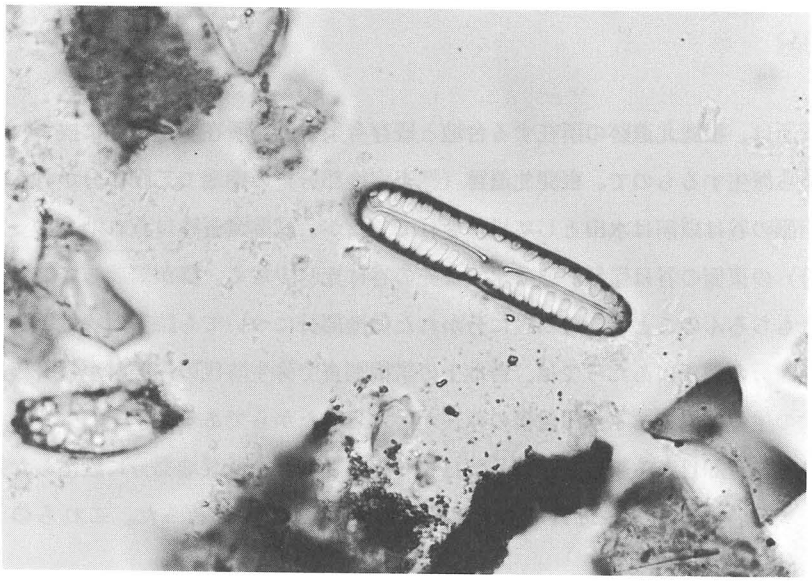
表1．珪藻化石産出地

（種群は、主に安藤（1990）が設定した環境指標種群による）

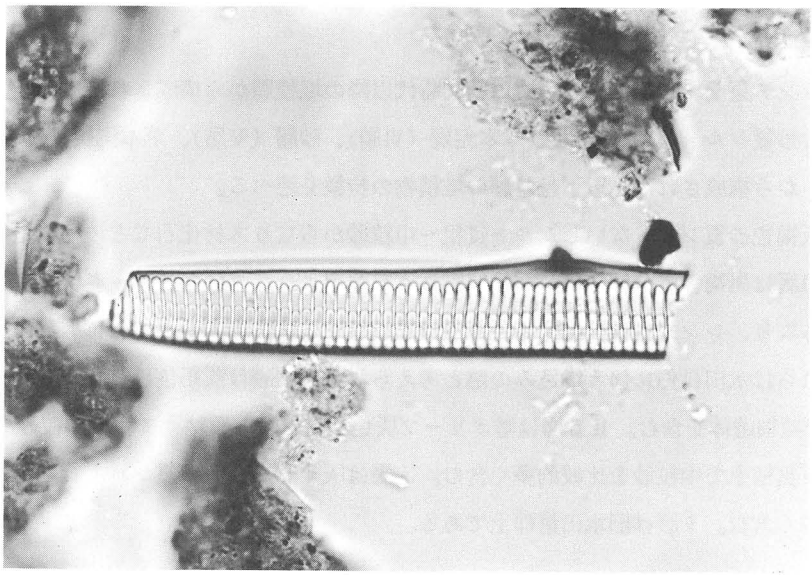
分類群	群種	
Eunotia spp.	?	1
Hantzschia amphioxys	Q	1
Pinnularia borcalis	Q	1
P. viridis	O	3
P. spp.	?	5
Rhopalodia gibberula	W	2
Synedra ulna	W	1
S. spp.	?	1
沼沢湿地付着生（O）		3
陸域（Q）		2
広布（W）		3
不明（?）		7
珪藻殻数		15

図版．珪藻化石顕微鏡写真（スケール；22.95mm→17μm）

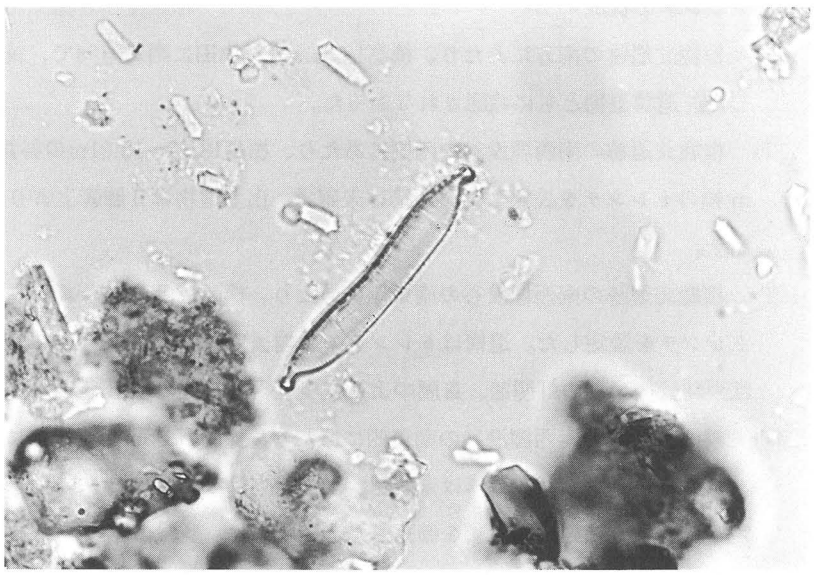
No.	分類群
1．	Pinnularia borealis
2．	Pinnularia viridis
3．	Hantzschis amphioxys



1



2



3

3．根鹿北遺跡低湿地部分調査の概要

1．調査状況（第1図）

根鹿北遺跡低湿地部分と呼ぶ箇所は、根鹿北遺跡の所在する台地と既存今泉霊園が所在する台地に挟まれた谷部分である。この谷は天の川から派生するもので、根鹿北遺跡（調査実施部分）の南端で二股に分かれる。根鹿北遺跡（調査実施部分）の西側の谷は以前は水田として耕作されていたが、試掘調査時は荒れ地となっていた。根鹿北遺跡（調査実施部分）の東側の谷は傾斜が急で水気は先の谷に比べ少なく、篠が繁茂していた。

試掘調査時においては台地上はもちろんのこと、この二股に分かれた低地部分についても調査対象地としてトレンチを設定した。この低湿地部分の調査にあたっては、台地上の試掘調査で弥生時代の住居跡が数軒確認されており、低湿地部分に同時代の生産の場である水田遺構の存在が考えられたからである。

低湿地部分の試掘調査は平成6年11月29日から平成6年12月22日まで実施された。低湿地部分に設定したトレンチは合計5本である。トレンチの名称は17Tr～21Trとした。調査は重機を使用して行った。これらのトレンチの深さは最深2mまで及んだ。

2．基本層序（第145図）

本土層は第19トレンチ東壁のものである。概ね縄文時代以降の堆積層から構成され、堆積物は大きくは下位より木材化石を含む砂質シルト（Ⅶ層）、及び木本泥炭（Ⅵ層）、砂層（Ⅴ層）、草本泥炭（Ⅳ層）、砂質シルト質粘土（Ⅰ～Ⅲ層）から構成される。以下は各層の堆積物の特徴を述べる。

最下位のⅦ層は灰褐色砂質シルトないしシルト質粗～中粒砂からなり木材化石などの植物遺体を比較的多く含む。その上位のⅥ層は黒褐色未分解ないし弱分解質木本質泥炭よりなり砂がブロック状に混じる。Ⅴ層は灰色粗～極粗粒砂からなり、レンズ状に分布する。Ⅳ層は黒褐色未分解質草本泥炭で、Ⅲ層との境は波状ないし不定型を示し、これらは水田耕作に伴う鋤込みの跡と考えられる。Ⅲ層は灰褐色砂質シルト質粘土よりなり、3～5mmの細礫や植物遺体を含む。Ⅱb層は暗オリーブ灰色砂質シルト質粘土で粗～中粒砂を多く、Ⅱa層は灰褐色砂質シルト質粘土で中粒砂を比較的多く含む。Ⅰ層は灰オリーブ色砂質シルト質粘土からなり、Ⅱ層と同様に中砂粒を多く含む。Ⅰ層は旧水田耕作土である。

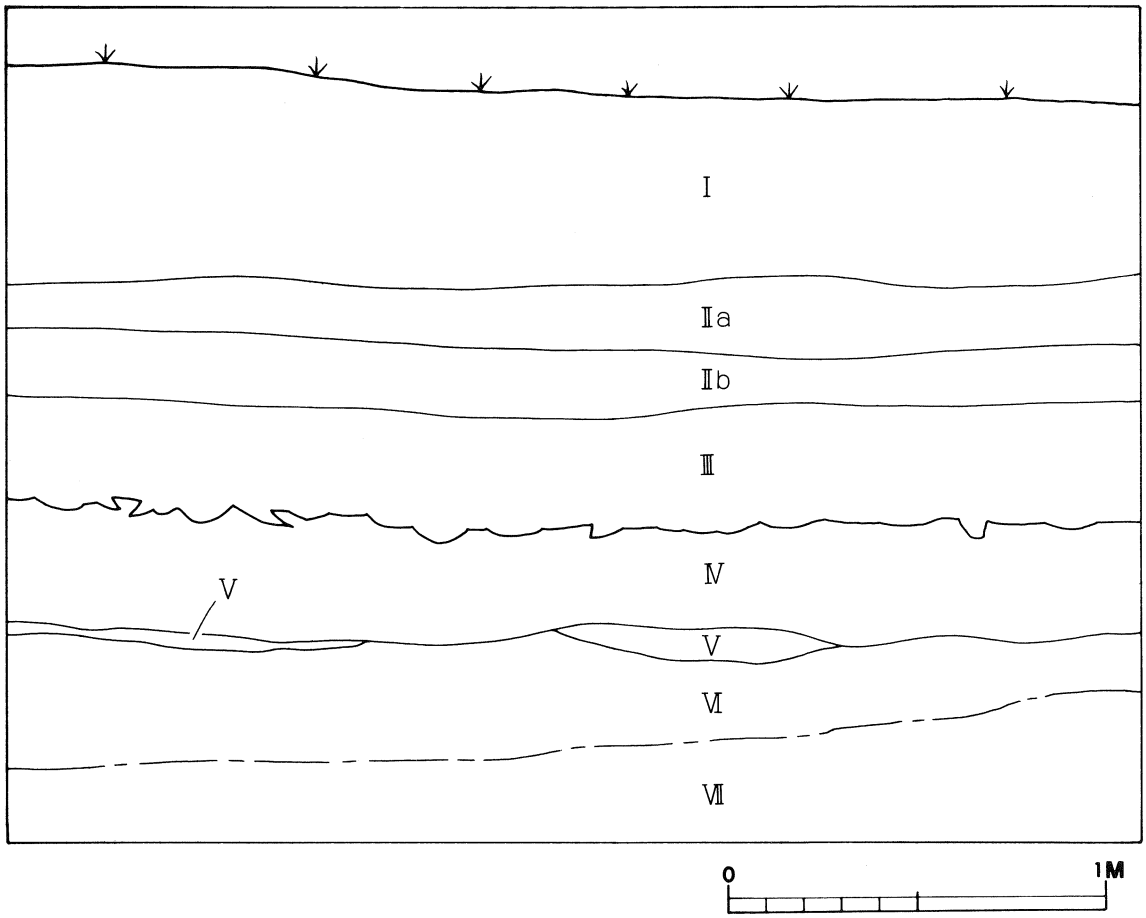
3．各トレンチの状況

17Tr　根鹿北遺跡の南方にあたり、標高18.31mの谷津田に南北方向で、長さ26×幅2mのトレンチを設定した。遺構遺物ともに確認されなかった。

18Tr　根鹿北遺跡の南西埋没谷の南側にあたり、標高18.73～18.21mの谷津田に東西方向で、長さ100×2m幅のトレンチを設定した。遺構は未確認、出土遺物はⅡ層直上より江戸時代前半期の染付け陶磁器出土。

19Tr　根鹿北遺跡の南西埋没谷の南東側にあたり、標高17.85mの谷津田に南北方向で、長さ40×幅2mのトレンチを設定した。遺構はトレンチの北端、Ⅳ層上面に鋤込みの跡を確認。出土遺物はⅡ層直上より江戸時代後半期の灯明皿、Ⅲ層中より奈良・平安時代の須恵器、土師器出土。

20Tr　根鹿北遺跡の南西埋没谷の南東側にあたり、標高17.85mの谷津田に南北方向で、長さ18×幅2mのトレンチを設定した。遺構は未確認、出土遺物はなし。なおトレンチの最下層より縄文時代後半期と想定される木本起源の泥炭層を確認した。層中には、多量の木の枝やドングリ（コナラ？）が含まれる。



第145図　低湿地　第19Tr土層断面図

また、泥炭層の上層、Ⅵ層上面に直径30㎝ほどの木杭と思われるものを確認した。

21Tr　根鹿北遺跡の南西埋没谷の南東側にあたり、標高17.85mの谷津田に東西方向で、長さ38×幅２ｍトレンチを設定した。遺構は、トレンチのほぼ真中付近のⅣ層上面に鋤込みの跡を確認した。出土遺物は、Ⅲ層中より奈良・平安時代の須恵器・土師器が出土した。出土遺物より鋤込みの跡が残された時代は、奈良時代から古墳時代頃と考えられた。なお、第20トレンチと同様にトレンチ最下層より縄文時代後半期と想定される木本起源の泥炭層が確認された。層中には、多量の木の枝やドングリ（コナラ？）のほか、直径１ｍを越える巨木なども発見された。

4．試掘調査地点の放射性炭素年代測定結果

放射性炭素年代測定は、今泉霊園試掘調査地点から採取された３資料について行なった。分析用資料は、木材化石と泥炭を用いた。以下の表に測定結果を示す。なお、測定は学習院大学放射性炭素年代測定室の木越邦彦氏にお願いした。

年代は^{14}Ｃの半減期5570年（LIBBY の半減期）にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数（yrs BP）として示している。付記された年代誤差は、β線の計数値の標準偏差σにもとづいて算出した年数で、標準偏差（ONE SIGMA）に相当する年代である。また、β線計数率と自然計数率の差が２σ以下のときは３σに相当する年代を下限の年代値として表示してある。

表－1　今泉霊園資料の放射性炭素年代測定結果

資料番号	測定資料	コード番号	測定値（yre BP）
Ⅳ	黒褐色草本泥炭	Gak-18820	2,110±90　yrs BP
Ⅵ	黒褐色木本泥炭	Gak-18821	2,500±100 yrs BP
Ⅶ	木材（コナラ属）	Gak-18822	3,310±90　yrs BP

5．調査のまとめ

今回の低湿地の調査では縄文時代の泥炭層や第19・21トレンチの土層断面のⅣ層とⅢ層の層界に奈良時代から古墳時代頃の鋤込みの跡が確認された。

そしてⅢ・Ⅳ・Ⅵ層の試料をもとにプラント・オパールの検出分析を行なったところⅢ層準試料のみからイネのプラント・オパールが試料１ｇ当たり9,200個確認された。よって同Ⅲ層中において稲作が行われた可能性は高く、Ⅲ・Ⅳ層の層界に見られた鋤込みの跡は水田耕作によって形成されたものと考えられる。

このことは同所に水田遺構が存在することを想起させる。またこの鋤込みの跡の年代については、Ⅲ層中の出土遺物により、奈良時代から古墳時代頃と考えられた。ただ、台地上の調査では弥生時代終末の集落跡が発見されており、低湿地の試掘もその時期の水田遺構を確認することを最大の目的としていた。ここでは、あえてⅣ層中位の ^{14}C 分析の年代を積極的に解釈した上で、鋤込みの跡が弥生時代終末までさかのぼる可能性も残されていることを指摘しておきたい。

いずれにしても、古代のある時期から台地上の根鹿北遺跡に居住した人々の眼下には、谷津田を利用した水田耕作の風景が存在したものと考えられる

参考文献

「土浦市今泉霊園試掘調査に係る自然科学分析」報告書　株式会社パレオ・ラボ 1995

（内容）

Ⅰ．土浦市今泉霊園周辺の縄文時代以降の植生変遷史　吉川昌伸（パレオ・ラボ）

Ⅱ．今泉霊園試掘調査地点より産出した大型植物化石　吉川純子（パレオ・ラボ）

Ⅲ．今泉霊園のプラント・オパール　鈴木　茂（パレオ・ラボ）

Ⅳ．今泉霊園試掘調査地点の放射性炭素年代測定結果　木越邦彦（学習院大学放射性炭素年代測定教室）

第５節　調査のまとめ

今回の土浦市営今泉霊園拡張工事事業地内では根鹿北遺跡が発掘調査され、様々な成果があげられた。その中でも主要な柱となるものは、**弥生時代の集落の調査**と**平安時代の仏教関連施設の調査**と考えられる。以下これらについて述べまとめとする。

１弥生時代の集落の調査

根鹿北遺跡の台地上には２８軒の竪穴住居跡が確認された。調査区外に展開する状況は見られず、今回の調査で集落の広がりが明らかとなった。住居跡の時期は、弥生時代の中でも後期後半の時期に限られたのものである。住居跡の配置は、台地中央部分の標高２８m付近にまとまって確認され、２軒のみ南側に張り出した尾根上に存在する。この内の１軒は大型のものである。これらはいずれも重複関係は見られなかった。住居跡の主軸方向は、大きく分けて北西方向と北東方向の２方向のものが見られる。住居跡の形状は長方形を基本として、正方形に近いものもある。住居跡の構造は、平坦な床面に主柱穴が方形に４ヶ所穿たれ、入り口ピットと炉が１か所ずつ存在する。床面の硬化面は入り口ピット方向から主柱穴で囲まれた範囲内外に見られた。主柱穴は非常に規則的に配置されている（表３竪穴住居跡内柱穴・入り口ピット一覧参照）。

多く住居跡内から炭化物・材や焼土が出土した。これらの炭化物・材はすべて床面上から出土するのではなく、中央部では床面直上近くに見られ、壁際では覆土中から出土するなどの傾向が見られた。このことから住居跡は廃絶後に、その凹地を利用して廃材などの「焼却[註1]」を行い、燃焼途中で埋め戻しを行なっていると考えられる。その結果として部材が蒸し焼き状態になり、炭化材が並行・放射状の状況で出土したと考えられる。特に壁際に炭化材が見られることは、壁際を中心に埋め戻しが行われていることの表れと思われる。　弥生土器は甕・壺・鉢・高坏・片口土器などが出土している。ほとんどの土器には付加条１種（付加２条）の縄文が施文されている。甕や壺形土器の口縁部には縦長の貼りコブがなされ、上下２条の刺突列が巡る。頚部には無文帯が存在する。これらの土器は、本地域を中心に広がりを見せる「上稲吉式土器」の範疇に位置付けられるものと思われる。

今回の調査では弥生時代の生産に関わって、低地部分の試掘調査を実施した。その結果、は水田耕作に関わると考えられる痕跡が確認された。この痕跡が残された年代については、包含されていた遺物から古墳時代頃から奈良時代頃が想定された。

２平安時代の仏教関連施設の調査

根鹿北遺跡の調査区内の南側に張り出した尾根上には、掘立柱建物跡群が４棟確認された。これらは主軸方向をほぼ同じくしており、同様な時期にそれぞれが存在したものと思われる。この内の第２号掘立柱建物跡は方形の桁行３間×梁行３間の建物で、北側に浅い溝を持つ。この建物跡は柱間の間隔や柱穴堀方のレベルなどから南側に建物正面を設けた建物だろうと推定される。この建物跡の柱痕には、焼けて赤化したスサ入りの壁土塊や炭化物が落ち込むように出土した。また溝からも同様な壁土が面的に出土し、溝底面側は還元状態の様になり黒色を呈していた。そして出土遺物の中に瓦などは出土していないことから、本建物跡は壁が土壁で屋根は茅葺きなどの屋根が想定される。そしてこの建物跡は最終的に焼失したものと考えられる。

第２号掘立柱建物跡の溝内からは瓦塔・瓦堂の小破片がまとまって出土した。また建物跡群の南西の埋没谷や第３９号竪穴住居跡内からも少量出土している。瓦塔・瓦堂の胎土はいずれも土師器と同質の胎土であり、

被熱を受けた痕跡はなく、出土場所によりその部位が異なる状況が確認された。この瓦塔・瓦堂は、第2号掘立柱建物跡内に信仰の対象として安置されたものとが考えられる。

現在茨城県内で出土した瓦塔は10例[註2]であり、瓦塔・瓦堂が出土した例は初めてである。瓦塔・瓦堂の他、これらの建物跡に関わる遺物として鉄鉢形土器や土師器小皿などが出土している。鉄鉢形土器は瓦塔と同様に3地点から出土した。皆須恵器であり、その一部は被熱を受けたらしく赤化している。また胴部に「佛」と墨書されたものも出土している。土師器小皿と呼んでいるものは、形態的に類例を見ないもので、油煙やタールの付着状況やその付着割合から、燈明専用の器として作られたようである。土師器小皿のほとんどは南西埋没谷から出土している。瓦塔・瓦堂と土師器小皿などは、仏教を信仰する上で必要な道具[註3]と言えよう。また第39号住居跡からは転用硯が出土し、「丈部真麿[註4]」の人名が墨書された土師器甕が出土している。この名を名乗る人物が存在したか否かは不明であるが、この墨書を甕に書いた人物は掘立柱建物跡群と関連を持つ人物と考えられる。これらの遺物は平安時代9世紀前葉から中葉頃のものと考えられ、掘立柱建物跡群や第39号住居跡などの年代も同様なものといえる。

ここで平安時代9世紀前葉から中葉頃の台地上に目を向けると、集落らしき痕跡は見られず、掘立柱建物跡群のみが隔絶して存在した景観が読み取れる。このような景観以前にも古墳時代中期以降は居住の場として利用されず、古墳時代末期には墓域であり、その後一部は土器生産に関わる場所として利用されたようである。このような中、「氷室[註5]」としてその使用が想定される土坑も存在した。以後台地上が居住の場として利用されるのは、9世紀末葉から10世紀代のことである。

このような土地利用の片隅に仏教関連施設が造られ、その中で在地の粘土で作られた瓦塔・瓦堂をまつり、燈明専用土器が用いられたことは、各々の事象が全くの偶然のできごととは考え難く、それぞれが密接に関連しているように思える。

註1　山梨県考古学協会『すまいの考古学－住居の廃絶をめぐって』資料集1996掲載の石守　晃「住居の廃絶の一形態『焼却処分』について」を参考。

註2　市毛美津子「遠台遺跡採集の瓦塔」『内原町史研究』第五号1996で県内の瓦塔が集成されている。

註3　松田政基　「4 庄作、谷窪、上楽遺跡検出の灯明用の坏について」『千葉県芝山町 小原子遺跡群』芝山町教育委員会1990

註4　財団法人千葉県文化財センタ-調査報告書188集「八千代市白幡前遺跡」1991
同遺跡では溝で区画された中に四面庇付の掘立柱建物などが確認され「村落内寺院」とされ、遺跡内の竪穴住居にはロクロピットを持つ住居跡も確認されている。同区画内外の竪穴住居跡などから瓦塔・「丈部人足召代」と墨書された人面墨書土器・「佛」と墨書された鉢や燈明皿が出土している。本遺跡の出土遺物構成と類似した様相が伺える。

註5　中山 晋『古代日本の「氷室」の実態－栃木県下の例を中心にして』『立正史学』第七十九号 1996と類似した珪藻分析結果がえられた。

第４章　栗山窯跡

第１節　遺跡の概要

栗山窯は、根鹿北遺跡の南西側の谷をへだてた既存霊園東斜面に存在した。発見の経緯は、ヒューム管埋設工事に伴って斜面部を削平したところ、平成８年４月14日に窯体部分の断面が鮮やかに露出して発見された。周辺には削平した土砂が盛られており、その中から須恵器坏が採集された。その後、土浦市及び土浦市土地開発公社と土浦市教育委員会の協議の結果、発掘調査を実施することになった。

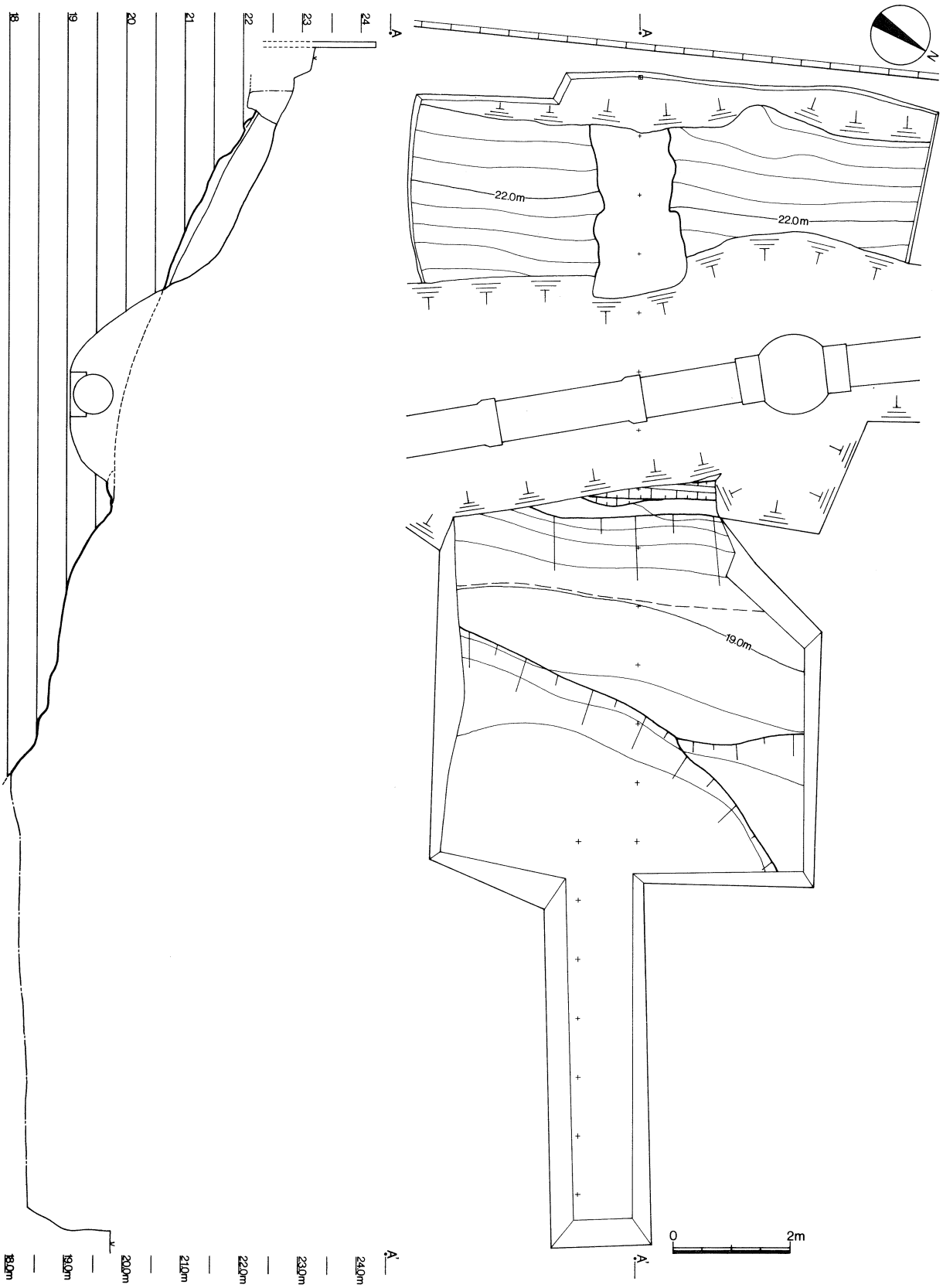
調査は平成８年４月24日から開始され、初めに窯跡の範囲の確認を行なった。窯体については削平された断面観察から方向・規模などが想定できたが、灰原については盛り土されているため不明であった。同台地斜面は一様に削平を受けていたが、他の窯跡は確認されていない。重機を使用して灰原の確認を行なった。現状の地表面から約50cm程度のところから土師器・須恵器の小破片が出土した。その後同層の一部を掘り下げると須恵器破片が多く混じる土層が見られた。土師器・須恵器の小片が混入する土層を灰原形成以後の流れ込みによるものと考え、重機により排除した。灰原調査区の窯体主軸ライン延長線上には、土層観察のための幅50cmのベルトを設けた。

調査の進行は、造成工事との兼ね合いのため、灰原部分の調査を窯体部分に先行して実施した。灰原からは須恵器破片が多く出土した。須恵器の出土した範囲は窯跡の主軸線の延長線上にある。遺物の出土状況は垂直分布で大きく２枚集中する部分が確認された。平面的には北東方向に約３ｍの範囲で遺物の密集する状況が見られた。そして窯体より遠くなるほど遺物の密度は散漫なものになった。出土した須恵器は焼きの良い青灰色で硬質感のある物が目立った。主軸ラインには土層観察用ベルトを残し、出土した遺物は標高・位置を測量して取り上げた。灰原部分の調査は平成８年５月７日に終了し、すぐさま埋め戻した。

窯体の調査は、地表面の草の生える表土を排除して、平面形の確認を行なった。その結果、窯体の天井部は崩落していると考えられ、煙道部は既存霊園の擁壁工事により過去に壊されていることが判明した。また焚口部分は今回のヒューム管埋設工事などによりそのほとんどが削平を受けていた。明確に残存する部分は窯体の燃焼部分のみであった。窯体の覆土は、主軸ラインに沿って一定間隔で縦横の土層断面図を作成しながら徐々に排除していった。窯体の奥側で崩落した天井部分が面的に確認された。窯体覆土で遺物が含まれるのは、床面近くの褐色土からであった。褐色土の下層から灰オリーブ色の粘砂土層が確認された。須恵器は焼成により歪んだものが目立ち、破損したものばかりである。焼き台として転用されたものも見られた。窯体の壁面はほぼ垂直に立ち上り、そこには窯構築時の工具痕らしい痕跡が見られた。

遺物の出土量は、灰原と窯体合わせてテン箱３箱分であり、そのほとんどは須恵器である。出土した須恵器の器種は坏・高台坏・高坏・蓋・甕・甑・長頸壺・円面硯などが出土している。いずれの器種も破片である。個体数で一番多いものが坏で、次が蓋であった。

調査は平成８年５月10日に終了した。窯跡はその後埋め戻され、現在も盛土下に遺存している。



第１図　窯体及び灰原実測図

第2節　遺構

1）地形と立地（第1章第1図）

本窯は南北にのびる舌状台地の東側斜面に構築されており、南方約400mほど隔てて天の川が流れている。ヒューム管の配管工事によって東側斜面の縁辺部が掘削されていたが、その断面観察からは本窯以外に窯が構築されていた形跡は確認されなかった。

本窯が構築されている斜面を構成する土壌（地山）は堆積層であり、焼成部の上半が青灰色の粘土層、下半が黄褐色の砂層、燃焼部より灰原部にかけては赤褐色の砂層および砂礫層である。

2）窯体（第2・3図　PL1）

1．窯の構造（第2図）

本窯は燃焼部・焚口部周辺がヒューム管の配管工事により掘削されており、煙道部周辺が墓地の擁壁工事により掘削されていた。よって、明確な全長や細部の構造などは不明とせざるを得ないが、後に述べるように焼土塊と横行する小溝を焚口部の一部分と捉え、現存する焼成部上端までを計測すると約6.5mである。

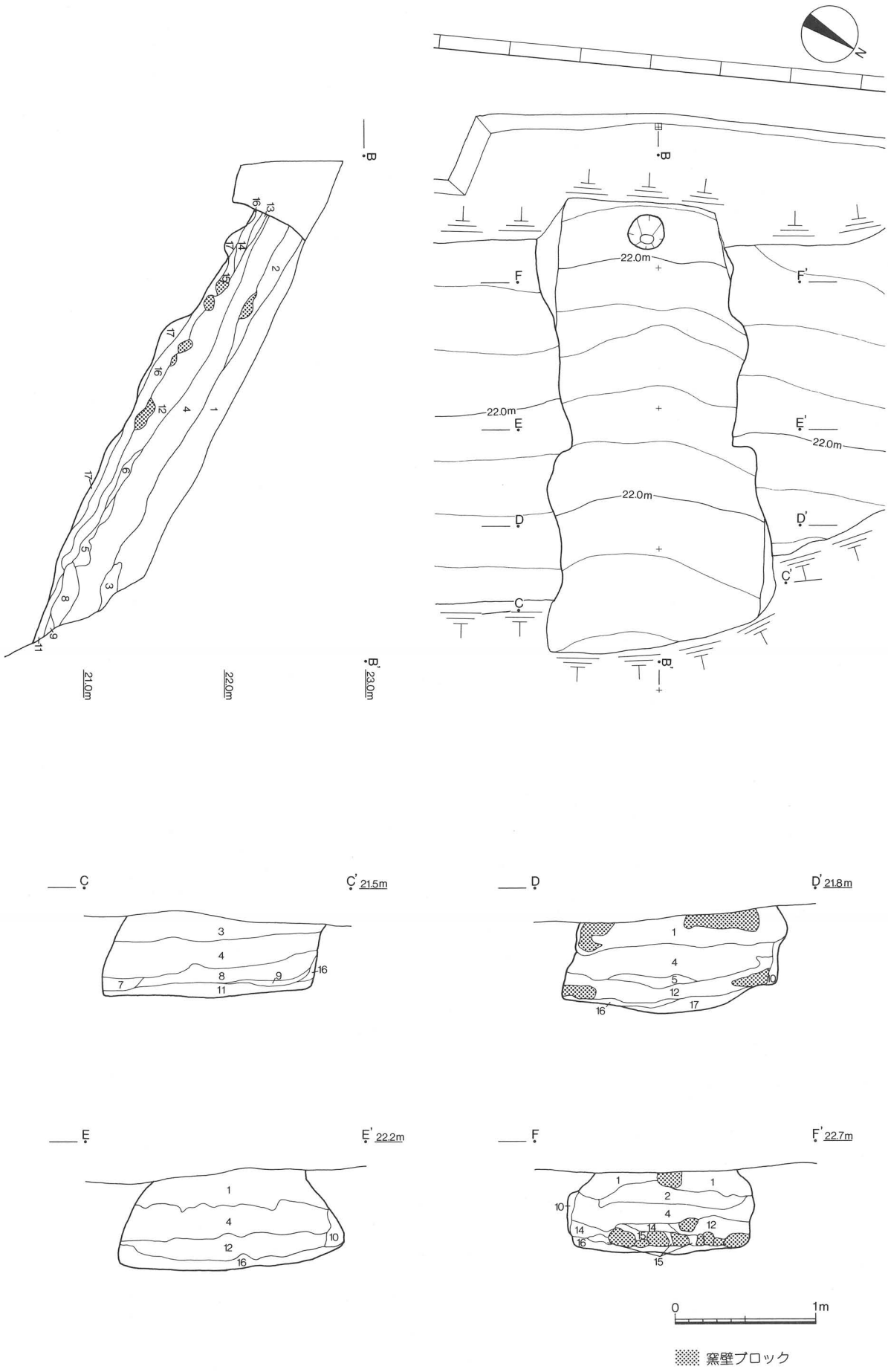
窯体の断面形は床面がほぼ平らで、天井へ向かってドーム状を呈する。天井はすべての部分で崩落しており、床面と側面部分を残すのみである。残存する床面と側面部分、および天井部が崩落しそのままの場所にとどまっていたと考えられる土層断面F－F'部分を参考にすると、斜面をトンネル状に刳り貫いた地下式の窖窯であった可能性が高い。

窯体の幅は、残存部の床面で下端から中位まで1.5mと一定であるが、中位より上方へ向かって先細りとなり、上端では1.1mを測る。床面の傾斜度は、おおむね25°であるが、上端部付近では34°を測り、せり上がっていく兆候が看取される。また、床面は階段状の施設や側溝などはなく、平坦な面をなす。高さは天井部が全て崩落しており、側壁も中位以下では崩落が著しくまったく残存していないが、燃焼部中位より上方の側壁傾斜度からは0.8～0.9m、上端では0.7～0.8mという数値が導き出せる。前述の床面幅や傾斜度の変化などを参考にすると、燃焼部中位以下では少なくとも1.0m以上の高さがあったと思われる。

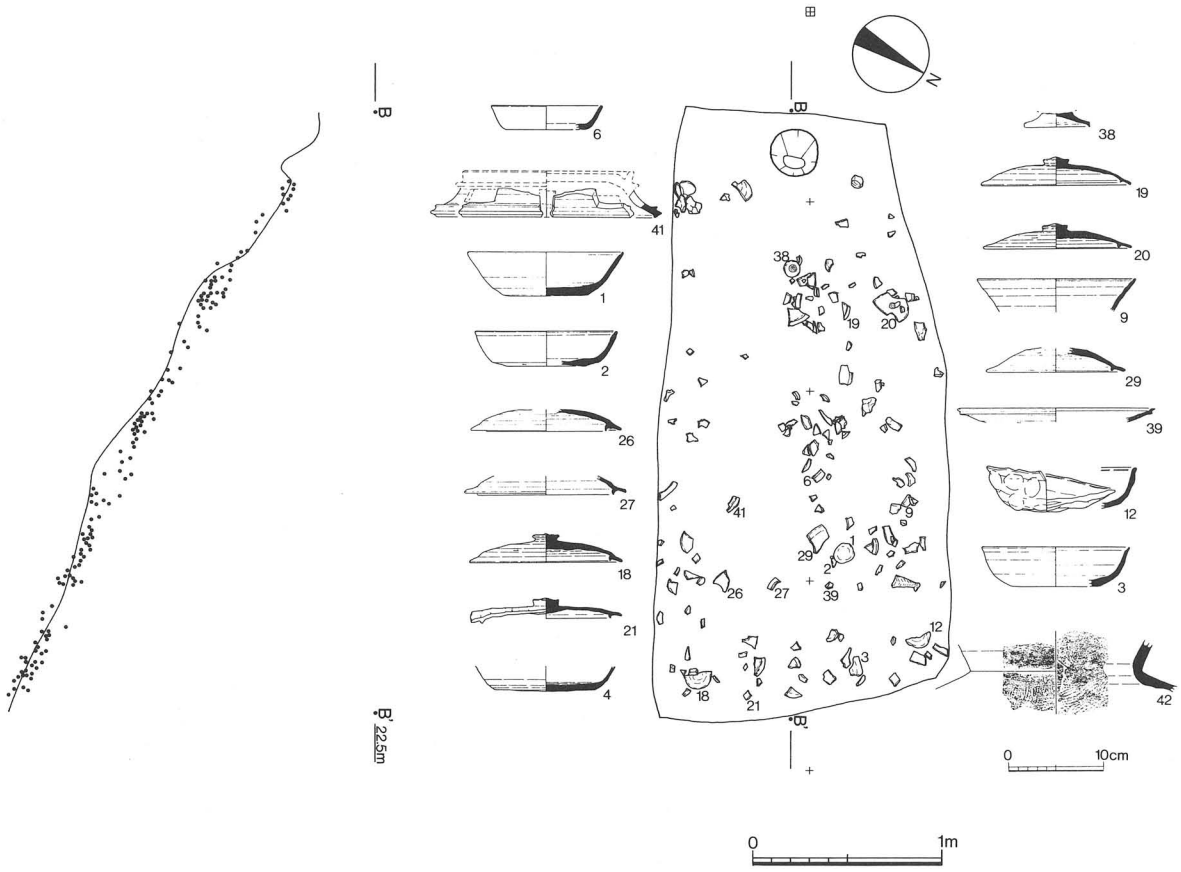
残存していた焼成部の上端から約20cm下がったほぼ中央に、径25cm、深さ10cmの土坑が確認された。土坑の埋土は床面直上の堆積土と同じであり、前述の窯体幅や傾斜度などから煙道にほど近い位置であると推察されることから、煙道に関わる何らかの施設と考えておきたい。

焚口部周辺はヒューム管の配管工事により幅約3.2mにわたって掘削されていたが、その東端に辛うじて平坦面の一部が検出された。平坦面には約40cm四方の焼土塊が確認され、その場所が窯焼成部の主軸の延長線上にあたることから、焚口部に伴うものである可能性が高い。また、焼土の下には南北方向に延びる幅約30cm、深さ約10cmの溝が存在する。残存部分における溝の長さは約2.0mである。溝の埋土中に焼土は確認できなかったが、溝の方向が窯の主軸に直交することから、窯の焚口付近に伴う何らかの施設と考えられよう。

以上の検出状況から、窯の主軸方向はN－53°－Eとなる。



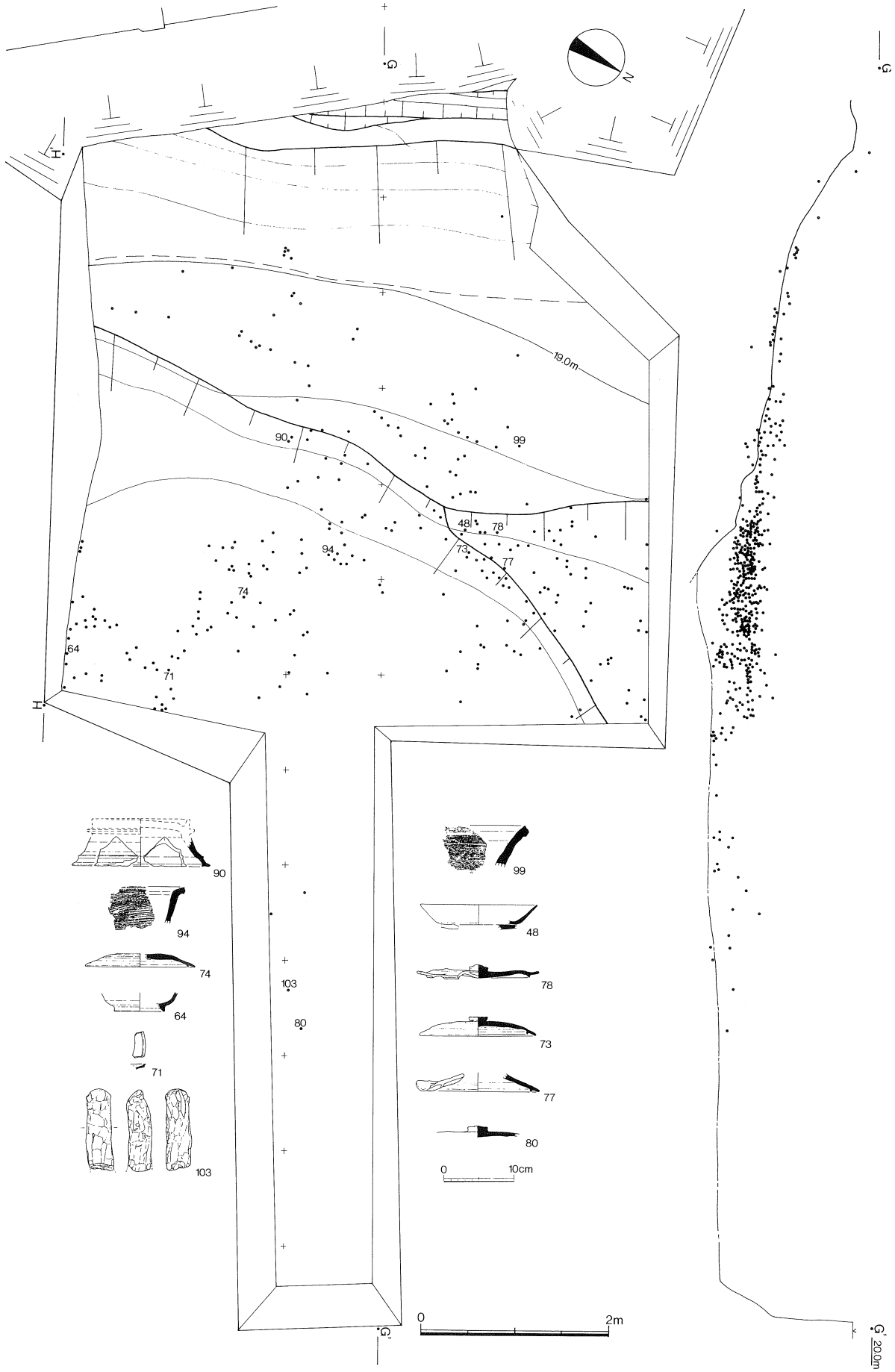
第2図　窯体平面図・断面図



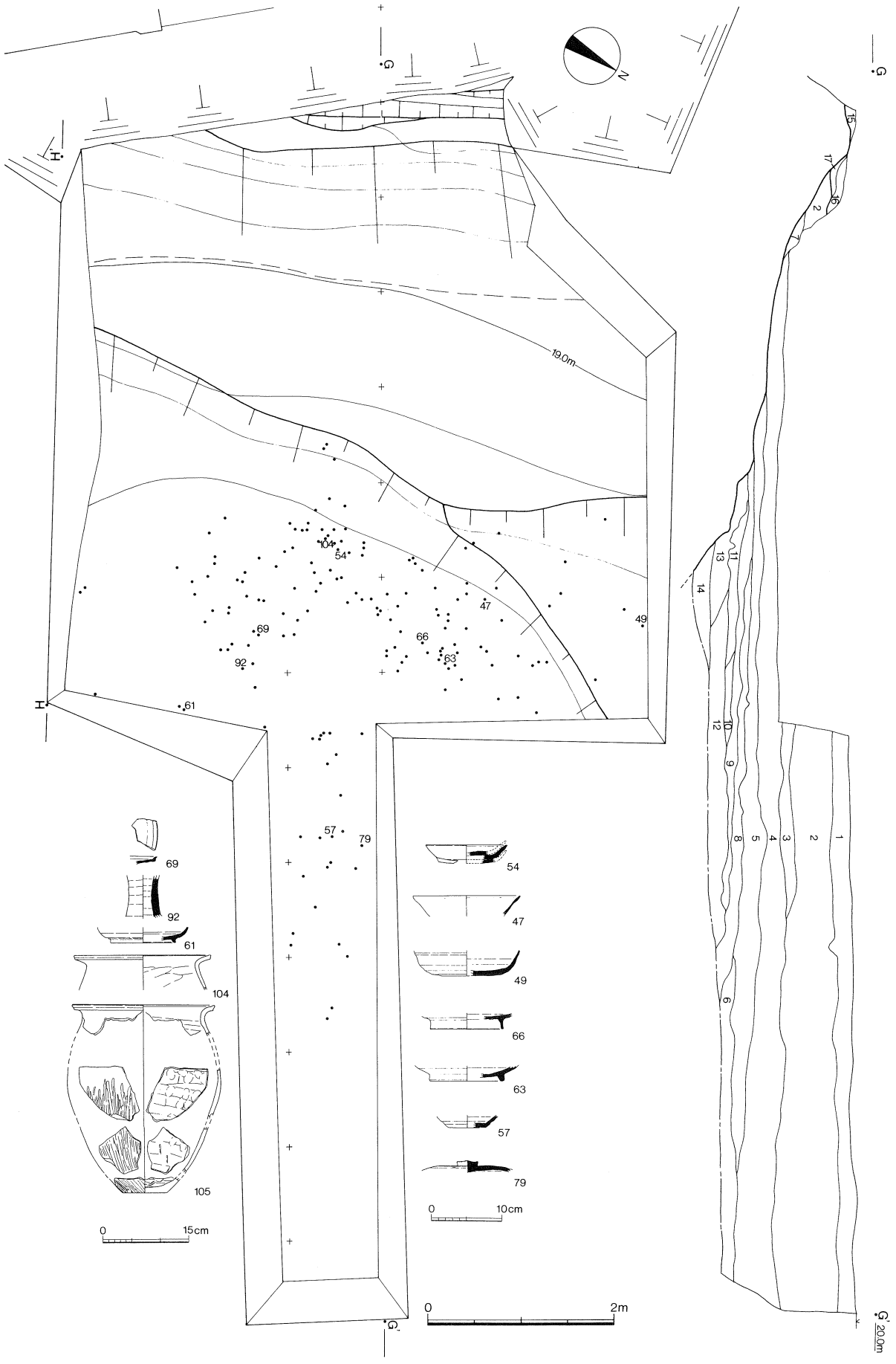
窯体内土層説明

1層　灰オリーブ色粘土［5Y6/2］（窯壁ブロックを少量含む）
2層　明褐色土　［7.5YR5/6］（粘性中，しまり弱，粘土ブロックを多量に含む）
3層　オリーブ色土［5Y6/4］（粘性中，しまり中，粘土•砂層•焼土大ブロックを多量に含む）
4層　褐色土［7.5YR4/3］（粘性中，しまり無，粘土，砂層ブロックを少量含む，黒褐色土小ブロックを中量含む）
5層　灰オリーブ色粘土　［5Y6/2］（粘土ブロックの塊）
6層　黄褐色粘土［10YR5/6］（粘性中，しまり中，灰色粘土と褐色砂質土との混合土）
7層　にぶい黄色土［2.5Y6/4］（粘性中，しまり弱，粘土ブロックを中量含む，焼土少量含む）
8層　黄褐色砂質土　［10YR5/8］（粘性無，しまり無，粘土•焼土ブロックを少量含む）
9層　赤褐色砂質土［5YR4/8］（粘性無，しまり無，窯壁崩落ブロック）
10層　褐色粘砂土　［10YR4/6］（粘性弱，しまり弱，窯体面と崩落土との間層）
11層　オリーブ色土　［5Y5/4］（粘性中，しまり強，粘土ブロックを多量に含む，焼土ブロックを少量含む）
12層　オリーブ黄色粘土［5Y6/3］（窯壁・焼土ブロックを中量含む）
13層　褐色土［7.5YR4/4］（粘性中，しまり中，粘土・焼土粒を少量含む）
14層　褐色土［7.5YR4/4］（粘性中，しまり無，粘土・焼土・窯壁崩落ブロックを少量含む）
15層　灰オリーブ色粘砂土［7.5Y6/2］（粘性中，しまり無，窯体天井崩落後の間層）
16層　褐色砂土［7.5YR4/3］（粘性弱，しまり強，焼土・灰・窯壁ブロックを中量含む）
17層　灰オリーブ色粘砂土［7.5Y6/2］（粘性強，しまり無，開始時の操業面か？）

第3図　窯体内遺物出土状況図



第4図　灰原平面図・上層出土状況図



第5図　灰原平面図・下層出土状況図

2．土層の状況（第２図）

窯体内は基本的に床面の傾斜に沿った堆積状況であり、人為的に埋められた形跡は認められない。

本窯の構築された床面は１面のみである。それは、貼り床などの措置が施されておらず、地山掘削面の状態で操業をおこなっていたことが、土層の観察から判明しているからである。ただし、須恵器が出土した褐色土層の直下に灰オリーブ色の粘砂土層が存在する。特に焼き締まった様子も認められないが、直上の褐色土層に焼土や灰、須恵器片などが混じっていることから、開始段階の操業面である可能性が高い。また、焼き台として使用された逆位に埋め込まれた坏や、堅く焼き締まった粘土塊などが上述の褐色土層上面で出土していることから、ここを最終段階の操業面と捉えることができよう。つまり、少なくとも２段階の操業過程を復元できると考えられよう。

崩落した天井部破片は土層断面図Ｆ－Ｆ’付近においては最終操業面直上で面として検出されたが、その他の部分では崩落した場所に留まっている状況ではない。土層断面図Ｄ－Ｄ’付近では、崩落した天井破片が最終段階の操業面直上の側面に接する部分だけに認められる。これは、天井最上部が削平された後に崩落したか、中央部分の天井破片が崩落後に流出したかのいずれかであろうが、操業終了後、流入土が入り込む前に天井が崩落している状況（土層断面図Ｆ－Ｆ’）からすれば、後者であった可能性が高い。これより上層は粘土粒を多く含んだ褐色土、その上に元来斜面上半に存在している土壌（地山）の粘土層が流入しているが、いずれも自然堆積と考えられる。

なお、焚口付近の窯主軸と直交する溝の埋土は暗褐色土であり、焼土塊は溝の埋土上に被る状況で確認された。

3．遺物の出土状況（第３図）

上述の通り、遺物は褐色土層中およびその上面、平面分布は残存床面部分のほぼ全体から、まんべんなく出土している。また、焼き台として逆位に埋め込まれた坏が存在していたが、他のすべての資料が大きさの大小こそあれ破片となっていたことや床斜面の上方と下方で接合した資料があること、さらに上述の天井破片の残存状況などから、操業終了後若干の遺物が流出したと予想される。しかし、窯体内の遺物量はそれほど多いものではなく、床面が１面のみで２段階分の操業過程しか復元できないことや、後述の灰原部分における遺物の出土状況などから、操業開始から終了まではごく短期間であったと考えてよかろう。

３）灰原（第４～６図　ＰＬ２）

1．灰原の構造

本窯において、灰原に伴う溝や土坑などの特別な遺構は本来から存在していなかった。しかし、上述の焚口付近と考えられる平坦面から約0.7m急激に落ち込んだ後、約2.5m幅の緩やかな平坦面が存在し、さらに斜面に続いていく状況が確認された。この平坦面は調査区内の焚口正面部分が最も幅広であり、南北方向に幅狭となる三角形の張り出し状を呈すると思われる。また、遺物の出土平面分布では、斜面部より下方において多く認められることから、平坦面は操業時に埋没していなかったと推察される。

灰原に相当する急激な落ち込みから三角形の張り出し状平坦面が、人為的に整形されたかどうかは不明である。しかし、上述の諸特徴から、製品の窯入れ～失敗品・燃焼後の灰などの廃棄までの一連の作業場として利用されていたと想定できよう。

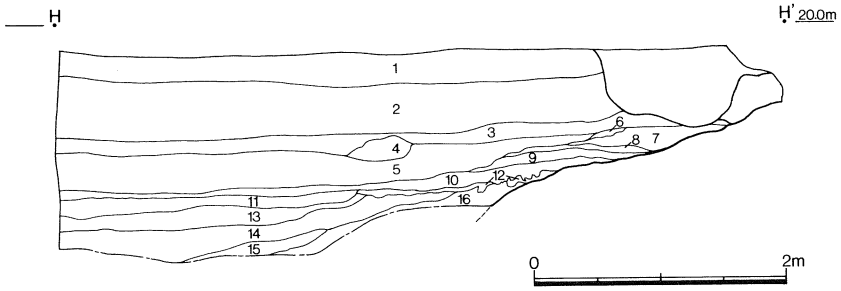
2．土層の状況（第６図）

灰原部の土層は、基本的に斜面に沿った堆積状況を示しており、人為的に埋められた形跡は認められない。なお、ヒューム管の配管工事以前にも小規模な用水路が設置されており、焚口部が存在する平坦面の東側を若干掘削している。

土層断面図Ｇ－Ｇ’およびＨ－Ｈ’の堆積状況は基本的に同じであり、窖窯が構築された斜面を構成する砂層・粘土層の崩落土および須恵器片・炭・灰の混合層である。発掘区における最下層は、水性堆積であるきめの細かい粘土層であり、若干の須恵器片を含む。直上の層は腐食した葦科植物や木片を多く含む堆積層であり、泥炭化の度合いで２層に分けることができる。この泥炭層の直上は黒色・黒褐色の砂質粘土層であり、ほとんどの遺物は以上の土層中から出土している。これより上の層から出土する遺物は極少量である。これらのことから、操業時においては水性堆積の粘土層が形成される沼地に葦科植物が生育していた状況が復原される。また、土層断面図Ｇ－Ｇ’とＨ－Ｈ’を比較すると、前者の堆積の方がやや厚いことが分かる。これは、張り出し状平坦面の最も幅広の部分から廃棄行為がおこなわれたことを示していると考えられよう。

3．遺物の出土状況（第４・５図）

上述の通り、ほとんどの遺物は黒色・黒褐色砂質粘土層から泥炭層までの間で出土する。平面分布では、窯の主軸延長上に近い地区からの出土量が最も多く、調査区内の南側では出土量が減る傾向を指摘することができる。また、調査時の認識として、遺物出土量の比較的多い層が大きく分けて２枚分確認された。すなわち、土層断面図Ｇ－Ｇ’における８・９層（上層）と10・11・12層（下層）である。特に下層では、直下の粘土層の上面からの出土が顕著に認められた。いずれも三角形の張り出し状平坦面より下方、すなわち北東部分において遺物の出土が顕著に認められた。遺物垂直分布図においては、上層で面的に密集している状況と、下層で



灰原Ｇ－Ｇ’土層説明

1層　にぶい黄褐色土［10YR4/3］（粘性弱，しまり中，表土層）
2層　褐色土［7.5YR4/3］（粘性弱，しまり中，ローム粒を少量含む）
3層　暗褐色土［7.5YR3/4］（粘性中，しまり中，砂粒を中量含む，ローム粒を少量含む）
4層　灰褐色土［7.5YR4/2］（粘性中，しまり中，粘土と褐色砂質土との混合土，炭化粒・パミス粒を少量含む）
5層　黒褐色土［10YR3/1］（粘性強，しまり強，粘土と黒色砂質土との混合土，粘土粒・炭化粒を少量含む）
6層　オリーブ黒色粘土［7.5Y2/2］（粘性強，しまり強，比較的均質な粘土層）
7層　にぶい黄褐色粘質土［10YR5/3］（粘性強，しまり強，粘土と砂質土との混合土，粘土塊を多量に含む）
8層　黒色粘砂土［10YR2/1］（粘性強，しまり強，泥炭化した砂質土と粘土の混合土，遺物を多量に含む）
9層　黒褐色砂質粘土［2.5Y3/1］（粘性強，しまり弱，砂粒は比較的均質）
10層　黒褐色粘質砂土［2.5Y3/1］（粘性中，しまり弱，砂粒は比較的均質，植物遺存体を含む，鉄分を少量含む）
11層　黒色砂質粘土［10YR2/1］（粘性強，しまり強，砂粒を多量に含む，植物遺存体を含む）
12層　灰色粘質土［5Y4/1］（粘性強，しまり弱，砂粒を含む，植物遺存体を多量に含む）
13層　黒色粘土［5YR2/1］（粘性極強，しまり強，泥炭化が進んでいる）
14層　オリーブ黒色粘砂土［7.5Y3/2］（粘性強，しまり中，植物遺存体を多量に含む）
15層　暗褐色土［10YR3/4］（粘性弱，しまり中，黄・赤色の砂をブロック状に含む，溝の覆土）
16層　黒褐色土［7.5YR3/2］（粘性弱，しまり強，赤色の砂をブロック状に含む，ローム粒を含む，用水路の覆土）
17層　橙色砂土［7.5YR6/6］（粘性弱，しまり強，黄色の砂をブロック状に含む，用水路の覆土）

1層　にぶい黄褐色土［10YR4/3］（粘性弱，しまり中，表土層）
2層　褐色土［7.5YR4/3］（粘性弱，しまり中，ローム粒を少量含む）
3層　暗褐色土［7.5YR3/4］（粘性中，しまり中，砂粒を中量含む，ローム粒を少量含む）
4層　褐色土［7.5YR4/4］（粘性弱，しまり弱，木の根攪乱土）
5層　灰褐色土［7.5YR4/2］（粘性中，しまり中，粘土と褐色砂質土との混合土，炭化粒・パミス粒を少量含む）
6層　にぶい黄褐色砂質土［10YR5/4］（粘性中，しまり中，粘土粒を少量含む）
7層　にぶい黄褐色粘質土［10YR5/3］（粘性強，しまり強，粘土と砂質土との混合土，粘土塊を多量に含む）
8層　黄褐色砂質土［10YR5/6］（粘性弱，しまり弱，砂粒は比較的均質）
9層　黒褐色土［10YR3/2］（粘性強，しまり強，粘土と黒色砂質土との混合土，炭化粒を少量含む）
10層　黒褐色土［10YR3/1］（粘性強，しまり強，粘土と黒色砂質土との混合土，粘土粒・炭化粒を少量含む）
11層　黒色粘砂土［10YR2/1］（粘性強，しまり強，泥炭化した砂質土と粘土の混合土，遺物を多量に含む）
12層　黄灰色粘質土［2.5YR6/1］（粘性弱，しまり中，砂粒は比較的均質，パミス粒を少量含む）
13層　黒色砂質粘土［10YR2/1］（粘性強，しまり強，砂粒を多量に含む，植物遺存体を含む）
14層　黒色粘土［5YR2/1］（粘性極強，しまり強，泥炭化が進んでいる）
15層　灰色粘土［5Y5/1］（粘性強，しまり強，植物遺存体を含む）
16層　にぶい黄褐色粘土［10YR5/3］（粘性極強，しまり強，砂粒を少量含む）

第６図　灰原断面図

傾斜しつつ密集している状況にそれぞれ対応する。さらに、以上の遺物出土状況は、土層堆積状況の部分で述べた廃棄行為を雄弁に物語るものと考えられよう。

窯体内での明確な床面が1面であり、操業面としては2段階が想定されることは前述した。灰原における遺物の出土状況が、上・下層という2段階を示しているということは、両者間の相関関係を指摘できる可能性がある。

第3節　遺物（PL2・3）

出土した遺物は、ごく微細な破片や形態判別の不可能な破片を除くと、窯体内、灰原を併せても 540点程度、テン箱3箱分の非常に僅かな数である。表土出土遺物や窯体内の焼き台、灰原の土師器甕などを除くと、遺物はすべて須恵器であり、若干の例外を除き当窯の操業に関わるものがほとんどである。出土した器種は表1に示した通り、バラエティーの少ない構成となっている。

以下、各器種ごとに概要を記すが、全体的に数が少ないため、窯体内と灰原から出土した須恵器を一括して説明することにする。

1．坏（第7図1～17・第9図47～60）

坏は最も出土量が多く、図示し得たもの以外の小破片を含めて200点が数えられる。完形品はなく、口縁部から底部まで完全に復元できたのは1点のみであった（1）。口径は、すべて回転復元によるものであるが、20cm近くあるもの、15.5～17.5cmのもの、14cm以下のもの、の概ね3法量を確認できる。ただし、15.5～17.5cmに属すものが圧倒的に多く、その平均値は16.5cmである。形態的には、平底の底部、丸みを帯びた体部下位、直線的に開く体部上位、が典型であり、口縁部内面に一条の沈線を付けるものが全体の6割を占める。また体部中位が僅かに外反ぎみになるもの（9）や、丸みを帯びるもの（3・11）も若干認められる。口径14cm以下の小型のものは、体部が直線的に開くもの（6・54）と厚手で丸みを帯びるもの（17・53・60）の2種が存在する。底部調整は、回転ヘラ削り調整と手持ちヘラ削り調整の2種があり、確認された94点の底部片から

表1　栗山窯出土須恵器の器種構成と総破片数

	坏	高台坏	高坏	蓋	甕	甑	土師器甕	円面硯	他	合計
窯体内（%）	73（46.2）	0（0）	6（3.8）	71（44.9）	6（3.8）	0（0）	0（0）	1（0.6）	1（0.6）	158（100.0）
灰原中（%）	127（33.4）	10（2.6）	6（1.6）	106（27.9）	62（16.3）	2（0.5）	64（16.9）	2（0.5）	1（0.2）	380（99.9）
合　計（%）	200（37.2）	10（1.9）	12（2.2）	177（32.9）	68（12.6）	2（0.4）	64（11.9）	3（0.6）	2（0.4）	538（100.1）

※微細片、形態判別不能片は除く

は７対３の割合で、回転ヘラ削りの方が卓越している状態であった。なお、回転ヘラ削り調整が施されているものの中には、その直後にナデないし軽い手持ちヘラ削りを行っているものも少なからず認められる。胎土は１mm前後の長石と石英粒を含む他、焼成不良のものに雲母片が目立って含まれている。焼成は、灰原出土の須恵器に良好なものが目立ち、窯体内では良好なものと不良で軟質なものが半々の割合で認められた。

２．高台坏（第９図61～66）

小破片も含めて出土点数は僅か10点である。窯体内からの出土はなく、すべて灰原から見つかっている。ほとんどが細片であり、残存度の高いものでも高台部から体部下位までしか把握できず、口縁部の形態は不明である。おそらく上記の無高台の坏と見做した中に、この口縁部片も含まれているものと思われる。形態的には、高台および体部下位の様相から、およそ次の３つに分類できる。

Ａ類；高台は低く断面が台形を呈し、体部は丸みを帯びて強めに立ち上がるもの。（61・62・64）

Ｂ類；高台は低く厚手で、体部の立ち上がりが緩やかなもの。（63・65）

Ｃ類；高台は高く薄手で、体部が屈曲をもって立ち上がるもの。（66～68）

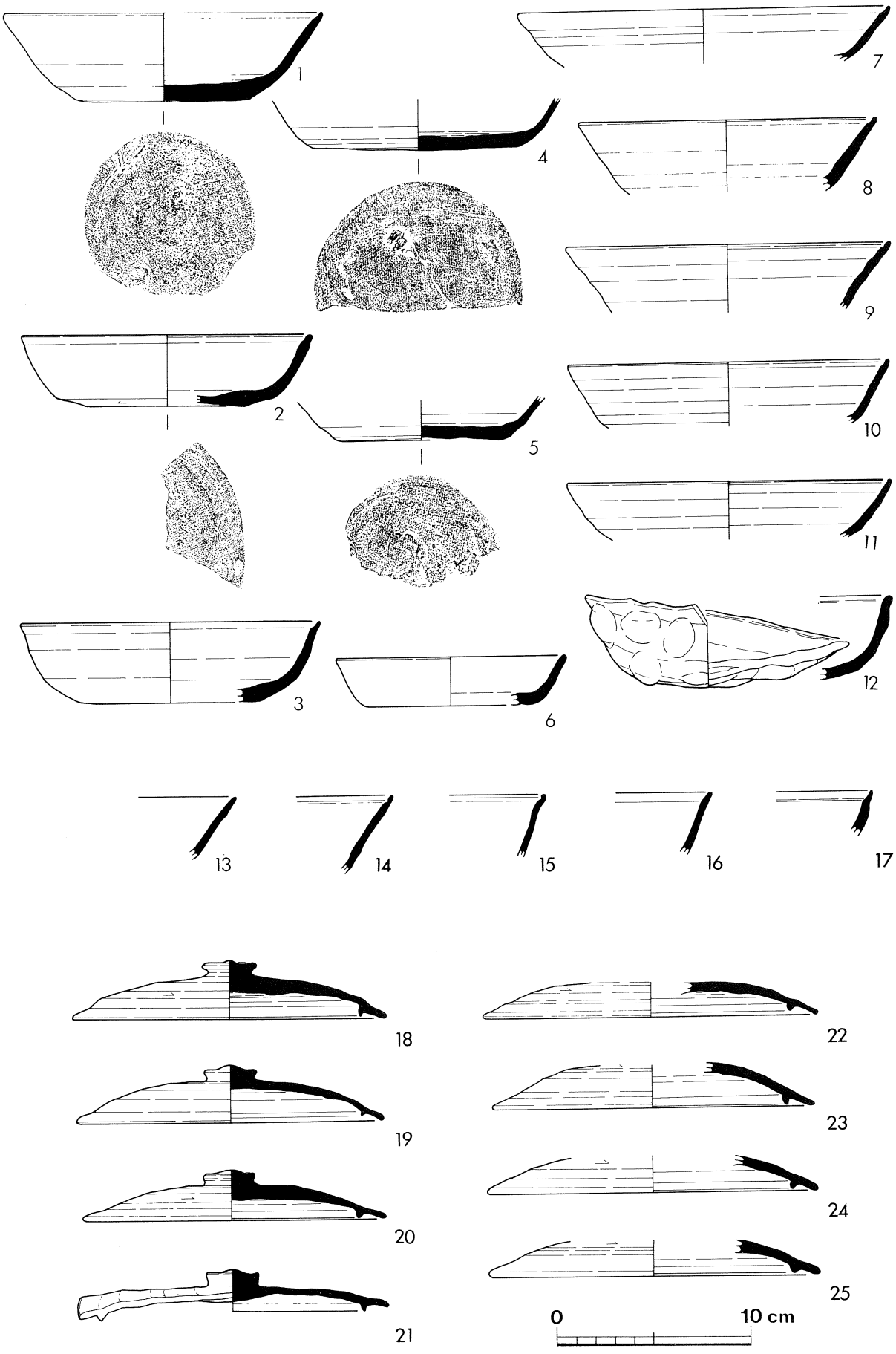
なお、Ｂ類としたものは、高台付盤になる可能性もあるが、体部の残存率が悪いため、ここでは高台坏として取り扱っている。また、Ｃ類の高めの高台は、後世の段階に多く確認されるものであり、本窯の生産である可能性を否定し得ないものの、混入の疑いが強い。破片数では僅かな差ながらＡ類が最も多く、これが当窯の高台坏の典型と考えて差し支えないであろう。底部の調整技法は、切り離し後に回転ヘラ削りを行い、高台取り付けに伴う回転ナデを周囲に施す方法で共通している。焼成は概して良好である。

３．高坏（第８図39・40・第９図69～72）

高坏ないし盤の口縁部片である。いずれも細片であり、回転復元し得たのは１点のみである（39）。形態は、口唇部を摘み上げさらに外反させており、断面形では「Ｓ字」ないし「Ｚ字」状を呈している。ヘラ等で端正に整えられており、シャープな作りの印象を受ける。器壁は薄く、体部外面に回転ヘラ削りを施している。焼成は良好なものと不良で軟質なものの両方があり、窯体内のものに軟質なものが多く認められた。なお、この口縁部形態の類例は、関東では千葉県市原市の永田不入窯、東海方面では愛知県の猿投窯や静岡県の湖西窯など諸窯で認められ、主として高坏や高台付盤、蓋などに採用されている形態である。本調査では、破片数にして12点しか確認されていないため、形態の断定は非常に困難となっている。

４．蓋（第７図18～37・第10図73～89　ＰＬ３）

総破片数は177点、坏に次ぐ出土量である。口径は、ほとんどが16～18cmに収まり、15cm代のものが１点のみ確認される。上記した坏の、口径が15.5～17.5cmのものと14cm以下のものにほぼ対応するものと考えられる。体部形態は、僅かに丸みを帯びて大きく開いており、器高は概して低くなっている。すべてにかえりが付けられており、つまみは偏平な宝珠形もしくは中央部が突出するボタン状を呈するものが主体的である。特に、体部縁辺部とかえりの形態は多様であり、体部が口縁部まで直線的に延びるものと、かえりの取り付けられる部分が屈曲するものに、大きく２分類することができ、かえりの形態によってさらに細分することが可能である（後述）。調整技法は、体部上位に回転ヘラ削りを施している他、かえりの取り付けに伴う回転ナデにより体部内面が滑らかに調整されているものが多く見られる。焼成は坏と同様に、窯体内出土の半数が不良、軟質であり、灰原出土のものはほぼ良好な傾向にある。



第7図　窯体内出土遺物(1)

5．甕（第８図42～44・第10図93・95～102）

すべて細片であり、全体の器形を窺わせるものはない。総破片数は68点と比較的多いが、個体が大きいため実際には数個体程度の存在であったと考えられる。また、窯体内出土のものには焼き台に利用したと考えられる破片もあり、そのすべてが本窯の生産品とは断定できないものである。破片の部位や器厚から判断するならば、以下のような４種類以上の形態があったと推測される。

ａ．中型の甕で、頸部は直角に近い角度で屈曲するもの。体部の器壁は薄めで、内面に同心円、外面に平行線の叩き目が付けられる。また、体部外面の叩き目をヘラナデによって一部擦り消している部分も存在する。焼成は、焼き台に利用されたものは堅緻であるが、概して良好である。（42～44・95～97）

ｂ．中型の甕で、器壁は薄く、体部外面に平行線の叩き目が付くもの。焼成はやや軟質である。（93）

ｃ．中型の甕ないし壷で、器壁は厚く、体部内外面に回転ナデが施されるもの。胎土に微細な黒色粒子を含み、堅緻な焼成なもの。（101）

ｄ．大型の甕で、器壁が厚く、内面に同心円、外面に細かな平行線の叩き目がつくもの。胎土に長石や石英粒を大量に含むもの。（100・102）

なお、破片数ではａ．の割合が非常に高く、他は僅かでしかなかった。特にｃ．のような胎土は他の器種に比べても異質であり、混入の可能性が高いと思われる。また、ｄ．はごく微量の検出でしかない。これらを考え併せると、ａ．の甕が当窯の操業に関わる可能性が高いということになる。

6．甑（第10図94）

外反する短い口縁部の形態から、甑ないし鉢であると考えられる。灰原より口縁部片が僅か２点出土しただけであり、混入の可能性も高い。体部外面に横方向の平行線の叩き目が付けられている。

7．長頸壷（第10図92）

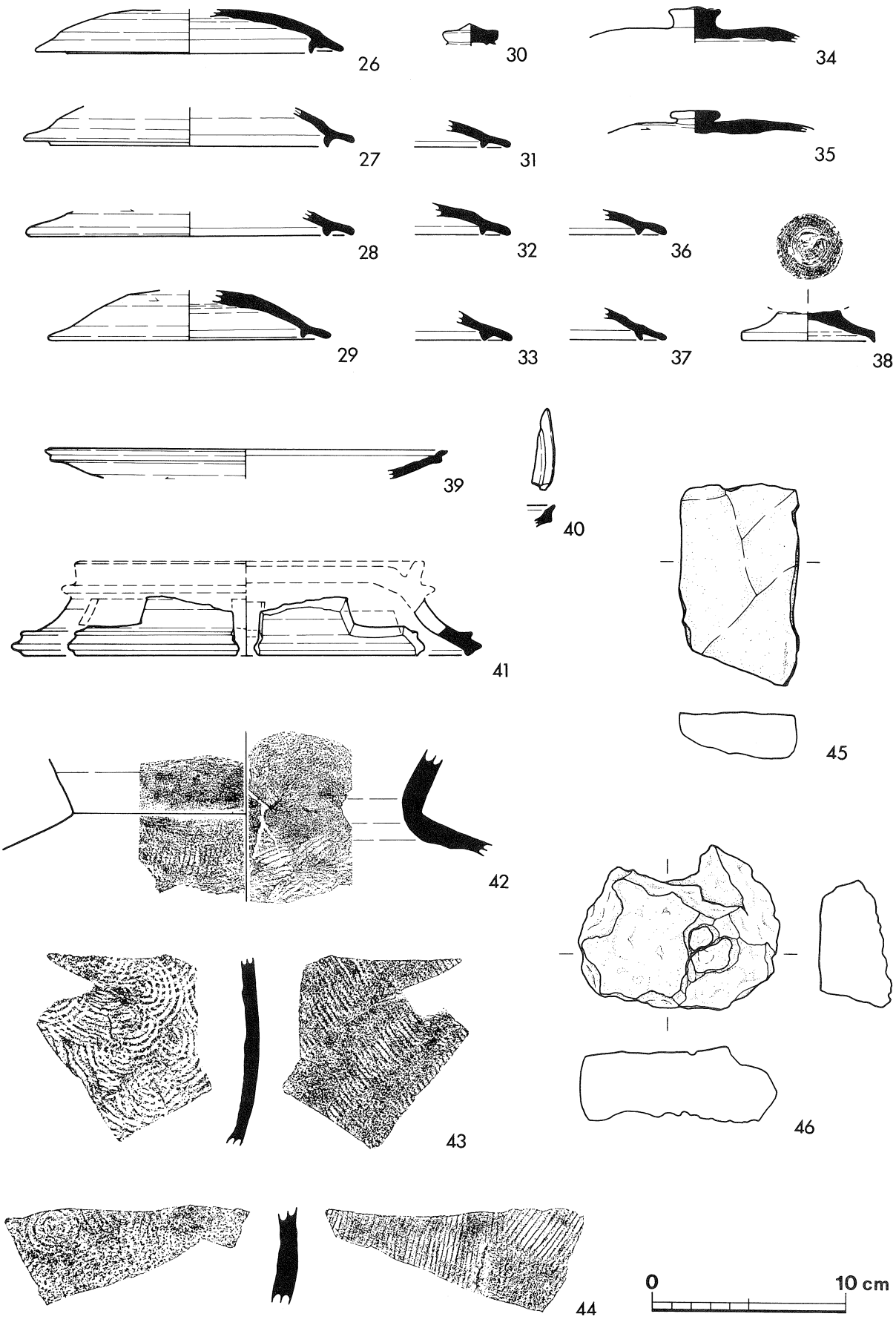
灰原より頚部が１点のみ出土している。胎土に微細な黒色粒子を含むため、本窯の製品ではないものと考えられる。焼成は良好である。

8．円面硯（第８図41　第10図90・91）

窯体内および灰原より合計３点出土した。いずれも脚端部の内外面を突出させ、そのやや上に１条の突帯を巡らせる形態である。比較的残存率の高い窯体内出土のものは（41）、長方形の透かしが２ヶ所に認められ、その上にも突帯を付けていた様子が確認された。ヘラ書きなどによる透かしの表現は見られない。焼成は３点とも良好である。

9．小型蓋（第８図38）

窯体内の床面最奥部で１点出土した。口径7.1cmの小型の蓋で、頂部に剥離の痕跡がある。ここには頂部径よりも大きなものが取り付けられていたと考えられ、見方によっては、何らかの器材の脚部であるようにも見える。ただし、焼成時の器面変色の様相を観察すると、あたかも当器を逆さまにして円筒状の容器に乗せて焼成したような、暗灰色の環状の変色が口縁部に見られるのである。これは、高台坏の口縁部に蓋を逆さまにして重ねて行く窯詰めの方法と共通している。このことから、頂部に付けられていたものは、当器の口径を越える大きなものではなく、飾り程度のものであったと推測されるのである。従って、当器は何かの脚部ではなく、



第8図　窯体内出土遺物(2)

長頸壺や水滴のような細い円筒状の口縁部をもつ容器の蓋であったと考えられる。色調は明赤灰色を呈するが、焼成は良好である。

10. 土師器甕（第11図104・105）

灰原のみから出土しており、総破片数は64点、口縁部形態から推測して3個体以上は存在するものと思われる。口縁部は「く」の字に強く外反し、体部中位に最大径をもつと思われる。体部外面は縦方向に細かい磨きが施され、内面はヘラナデと押さえの跡、底部には木葉痕が確認される。胎土は他の器種に比較して多くの砂粒を含んでいる。このような器形および調整技法、胎土などは典型的な土師器甕の特徴であるが、色調だけは皆、灰色を呈している。これが還元焔焼成によって灰色化したものか、あるいは灰原の泥炭土中に埋没したために変色したものか、判断には苦しむ。一つの可能性として、土師器工人によって製作された甕が、須恵器と共に窯で焼成されたことが考えられよう。

11. 焼き台（第8図45・46）

窯体内より数点出土している。45は、砂質土の窯壁が剥離したものを焼き台に利用したもので、融解した砂質土中の成分や自然釉などによって硬化している。片面は、当初の窯壁面か、あるいは削りによって平坦に成形されている。46は、砂粒を大量に含む粘土塊であり、上面を平坦にならし、下面は床面に合わせた傾斜をつけている。また、下面には板片や藁の付着していた痕跡が認められる。

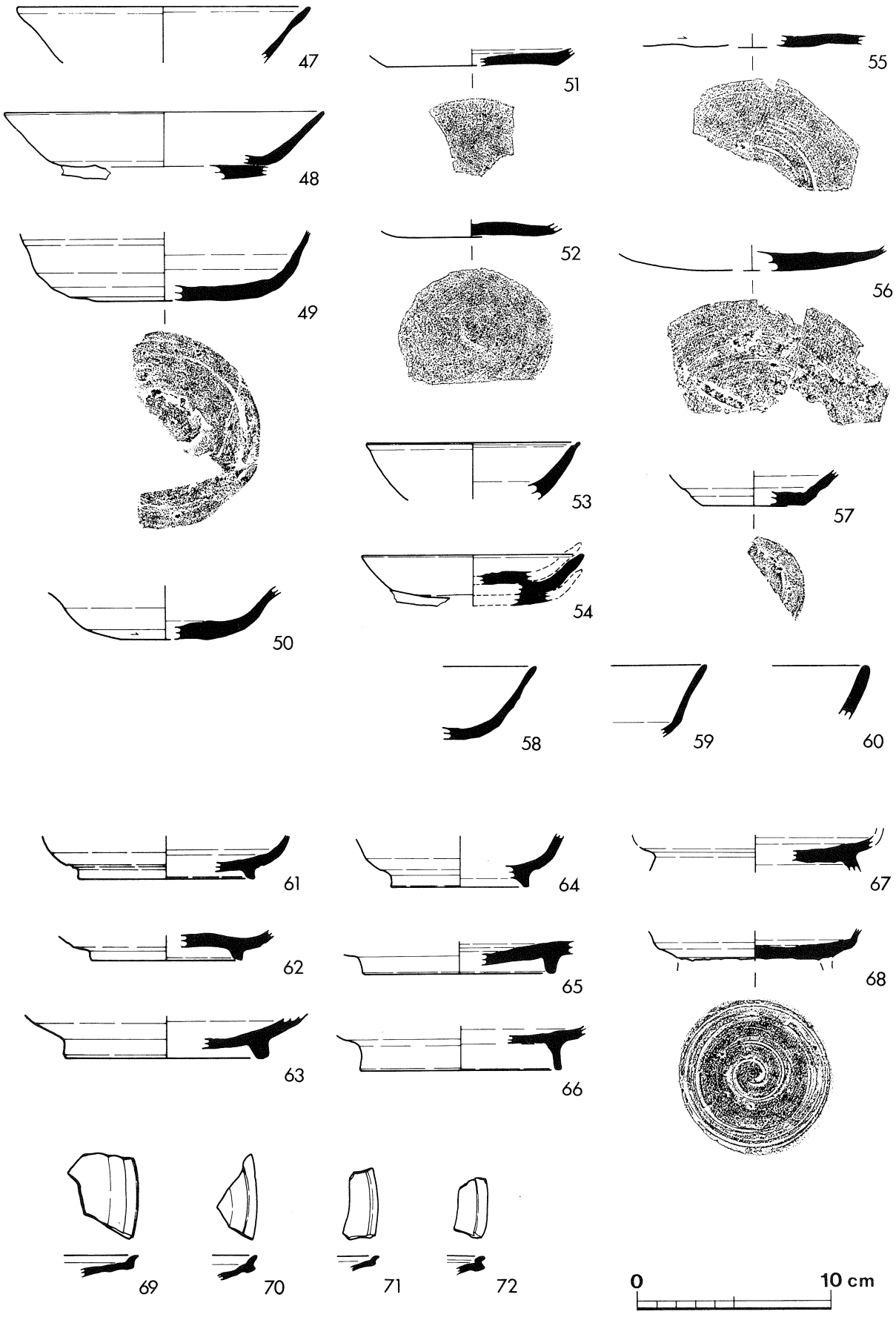
12. 陽物（第11図103）

灰原より出土している。陽物形あるいは三足鍋等の脚部と思われる。ただし、脚部の場合、接地面から推測される取り付け角度はかなり緩いものになり、役目を果たさないものと考えられる。成形は手捏ねによるもので、一部ヘラナデによって調整を行っている。砂粒を多量に含み、軟質な焼成であるが、部分的に還元焔焼成による灰褐色を呈している。

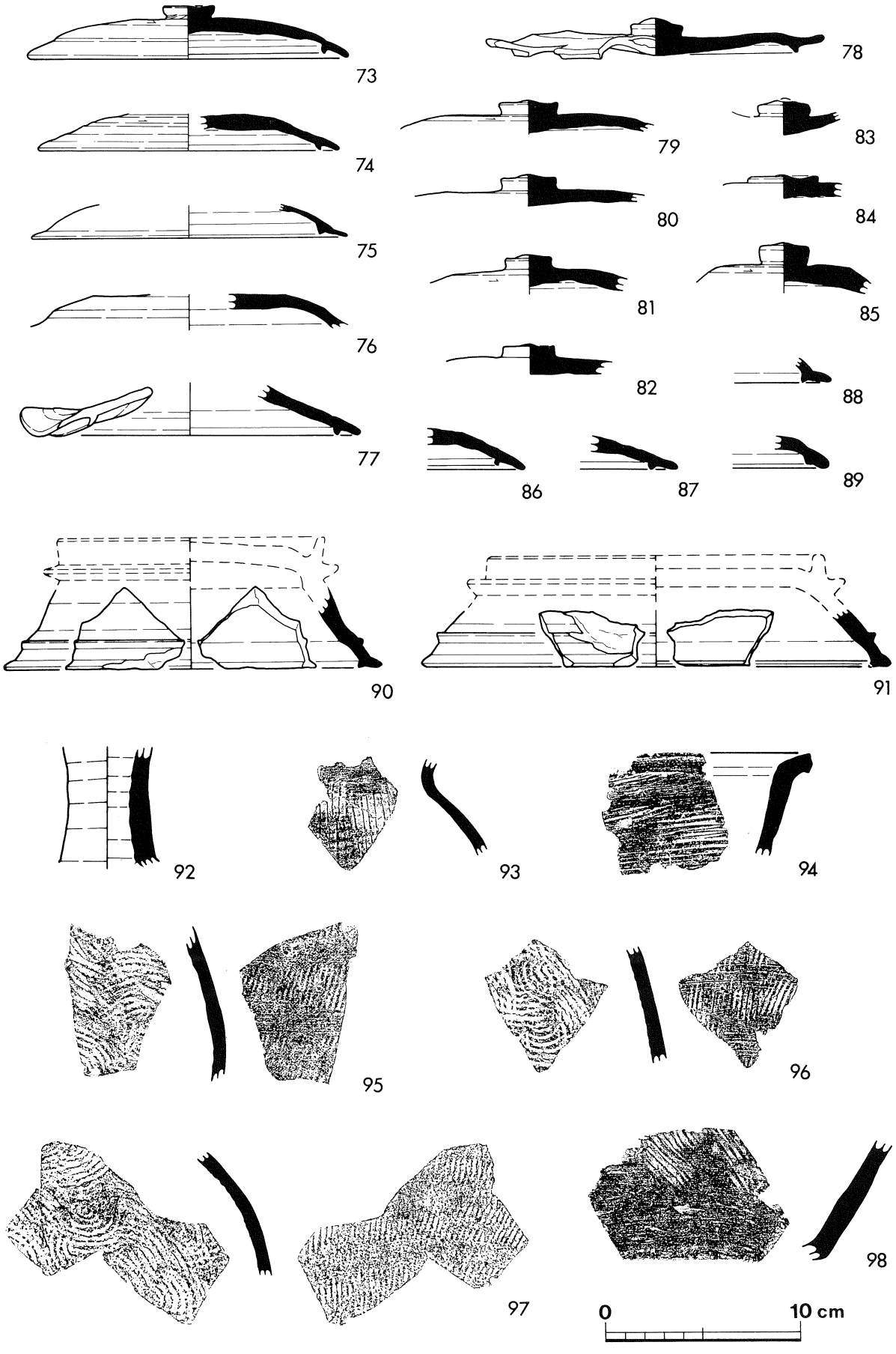
13. 表土出土遺物（第11図106～108）

表土から出土している遺物は、以下の3点のみである。106は天目碗で、体部上位に弱い張りがあり、口縁部は小さく外反している。全面に黒色の釉がかかり、口縁部のみ茶褐色を呈する。胎土は磁器を思わせる緻密な白色粘土である。107は、カワラケである。手捏ねによる成形で、底部は丸底を呈し、体部下位から底部にかけて指頭圧痕が付く。緻密な粘土を用い、軟質な焼成である。108は、こね鉢ないしすり鉢の細片である。直線的な体部に、端部を突出させる口縁部がつく。焼成は良好で、釉の付着はみられず、器面は暗赤褐色を呈する。

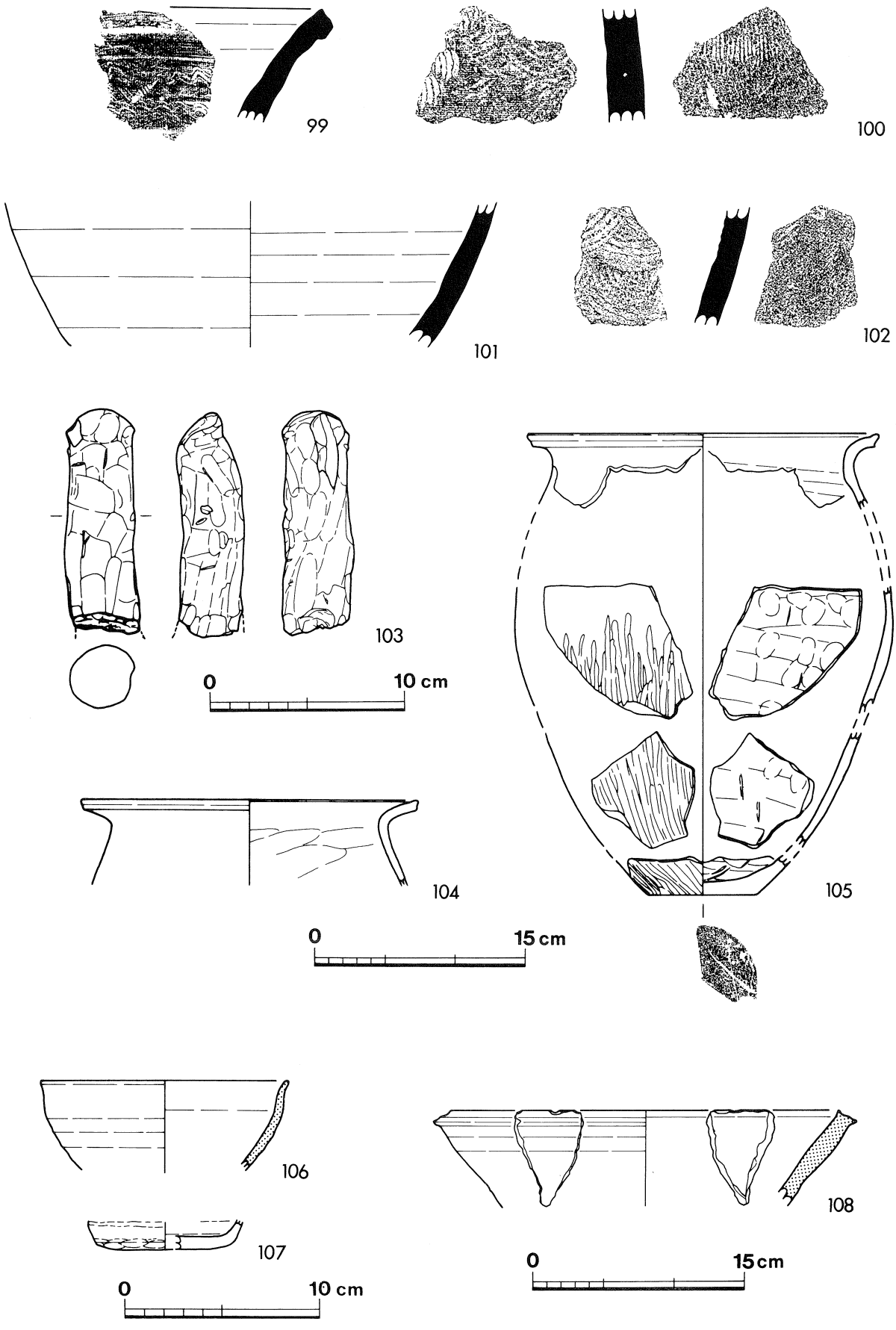
以上が器種別にみた遺物の概要である。図示できるものは可能なかぎり掲載する方針で整理作業にあたったが、再三表記した通り、細片が多く器形全体の把握が不可能なものや、明確な器種分類を行えないものも存在する。従って、坏の口径・底径比率などの数値操作によって他窯の製品と比較検討を行うことは非常に困難である。帰属年代の判定や新治窯跡群の中への位置付けは、各器種の形態的特徴を視覚的に比較して行くより方法がないと思われる。


47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
0
10 cm

第9図　灰原出土遺物(1)



第10図　灰原出土遺物(2)



第11図　灰原出土遺物(3)

表２．栗山窯出土遺物観察表（窯体内出土）

図版番号	器形	法量	残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	坏	A．[16.4] B．　4.6 C．　8.8	1／3	堅緻	径１～２㎜の長石・石英を多量	暗灰色	直線的な体部をもち、口縁部内面にごく浅い沈線がつく。底部は切り離し後、回転ヘラ削りを行い、さらにナデに近い手持ちヘラ削りを多方向から施している。	底部付近に僅かに自然釉
2	坏	A．[15.6] B．　3.8 C．[8.4]	1／4	堅緻	径１㎜の長石・石英を中量	暗紫灰色	体部は丸みを帯び、口縁部内面に沈線をもつ。底部はヘラ切り後、体部下端及び底面に回転ヘラ削りを施す。	焼き歪み有り
3	坏	A．[16.2] B．　4.3 C．[9.8]	1／3	不良 軟質	径１～２㎜の長石・石英を中量、雲母を多量	明褐色	体部は丸みを帯び、口縁部は内面の沈線により僅かに外反ぎみになる。底部はナデに近い一方向の手持ちヘラ削りを施す。	
4	坏	B．(3.0) C．　11.0	2／3	普通	径１～２㎜の長石・石英を中量、雲母を多量	明茶褐色 明灰色	体部下位は丸みを帯びる。底部は切り離し後、一方向の手持ちヘラ削りを施す。体部は下位まで全面的に回転ナデを行っている。	
5	坏	B．(2.2) C．[8.8]	底部周辺 1／2	良好	径１㎜の長石・石英を中量、雲母を少量	暗褐色	丸みを帯びた体部をもつ。底部は回転ヘラ切り後、軽い手持ちヘラ削りを多方向から施す。	焼成時のひび割れ有り
6	坏	A．[12.4] B．　2.6 C．[9.0]	1／4	良好	径１～２㎜の長石・石英を非常に多量	暗灰色	小型の坏。底部残存部は僅かであるが、回転ヘラ切りないし回転ヘラ削りの後に軽い手持ちヘラ削りを施した跡がみられる。	
7	坏	A．[20.0] B．(2.9)	細片	普通	径１㎜の長石・石英を少量、雲母を微量	暗褐色	直線的な体部をもつ。口縁部内面に浅い段状の沈線がつく。	
8	坏	A．[16.1] B．(3.8)	1／4	良好	径１㎜の長石・石英を多量	灰色	直線的な体部をもち、口縁部内面に浅い沈線がつく。	
9	坏	A．[17.4] B．(3.6)	体部片 1／5	普通	径１㎜の長石・石英を少量、雲母を微量	灰褐色 一部褐色	直線的な体部をもち、口縁部内面に沈線がつく。	
10	坏	A．[17.2] B．(3.3)	体部片 1／5	普通	径１㎜の長石・石英を少量	茶褐色	直線的な体部をもち、口縁部内面に浅い沈線がつく。	
11	坏	A．[17.5] B．(3.0)	体部上位 1／3	良好	径１～２㎜の長石・石英を多量	紫灰色	体部は浅めで、僅かに丸みを帯びる。口縁部内面に沈線がつく。器壁が薄く、端整な作りである。	
12	坏	A．[14.1] B．　4.7 C．　?	1／2	堅緻	径１～２㎜の長石・石英を多量	黒灰色 暗赤灰色	口縁内部面に浅い沈線が認められる。底部を切り離し後、２方向から手持ちヘラ削りを行っている。火膨れ、焼き歪みが著しい。	
13	坏	B．(3.2)	体部細片	普通	径１㎜の長石・石英を少量	明灰色	直線的な体部をもち、口縁部内面には沈線がつかない。	
14	坏	B．(4.1)	体部細片	良好	径１㎜の長石・石英を少量	暗灰褐色	直線的な体部をもち、口縁部内面に沈線がつく。	
15	坏	B．(3.2)	体部細片	良好	径１㎜の長石・石英を中量	暗灰褐色	体部上位に僅かな屈曲があり、口縁部内面に沈線がつく。作りは薄く端整である。	
16	坏	B．(3.3)	体部細片	不良 軟質	径１㎜の長石・石英を中量、雲母を多量	明褐色	体部は直線的で、口縁部内面には浅い段がつく。	
17	坏	B．(2.4)	口縁細片 1／6	不良 軟質	径１㎜の長石・石英を少量、雲母を中量	明褐色	体部は丸みを帯びて浅い。口縁部は僅かに外傾し、内面に強い段がつく。	
18	蓋	A．[16.8] B．　3.1 F．[14.0] G．　0.2 H．　2.9 I．　0.9	2／3	普通	径１㎜の長石・石英を多量、雲母を微量	灰色 部分的に黒灰色、明褐色	体部は僅かに丸みを帯びて開き、かえり付近で強く屈曲する。かえりは体部の屈曲に合わせて直角的に垂下する。つまみは偏平宝珠形を呈する。体部上位に回転ヘラ削りを行い、その上から全面的に回転ナデを施している。	
19	蓋	A．[16.4] B．　3.1 F．[14.0] G．　0.2 H．　2.8 I．　0.9	2／3	不良 軟質	径１～２㎜の長石・石英・雲母を多量、赤色スコリアを微量	暗茶褐色	体部は丸みを帯びて大きく開き、かえり付近に僅かな屈曲をもつ。断面三角形の端整なかえりがつく。体部上位に回転ヘラ削りを施す。	
20	蓋	A．[16.3] B．　2.8 F．　13.4 G．　0.2 H．　2.8 I．　0.9	2／3	不良 軟質	径１～２㎜の長石・石英を多量、雲母を多量	明灰褐色 明茶褐色	体部は僅かに丸みを帯びる。かえりは、粘土紐を張り付けて軽く三角形に整えた程度。つまみは基部の太い偏平宝珠形を呈する。体部上位に回転ヘラ削りを行い、その上から全面的に回転ナデを施している。	

21	蓋	A. [16.6] B. 2.8 F. [14.2] G. 0.3 H. 2.8 I. 0.9	1／3	堅緻	径1～2㎜の長石・石英を中量	暗灰色	断面三角形の端整なかえりをもつ。つまみは基部が太い偏平宝珠状を呈する。体部上位に幅広く回転ヘラ削りを施す。	焼き歪みが著しい
22	蓋	A. [18.0] B. (1.9) F. [15.0] G. 2.5	1／2	良好	径1㎜の長石・石英を中量	暗赤灰色 茶褐色	体部は僅かに丸みを帯びる。かえりは断面三角形を呈する。体部上位に幅広く回転ヘラ削りを施す。	
23	蓋	A. [17.4] B. (2.3) F. [14.6] G. 0.3	体部片 1／4	不良 軟質	径1㎜の長石・石英を少量、雲母を多量	明褐色	体部は直線的に開き、外反ぎみのかえりをもつ。体部上位に軽い回転ヘラ削りを施す。	焼成時のひび割れ有り
24	蓋	A. [17.6] B. (1.9) F. [15.0] G. 0.3	体部片 1／5	普通	径1㎜の長石・石英・雲母を少量	赤褐色・ 明茶褐色	体部は僅かに丸みを帯び、断面尖台形のつまみをもつ。体部上位に軽い回転ヘラ削りを施す。	
25	蓋	A. [17.7] B. (1.9) F. [15.0] G. 0.2	体部片 1／5	良好	径1㎜の長石・石英を少量	灰色	体部は直線的に開き、かえり付近で僅かに屈曲する。断面三角形の厚めのかえりをもつ。体部上位に回転ヘラ削りを施す。	
26	蓋	A. [16.6] B. (2.3) F. [13.2] G. 3.5	体部片 1／4	普通	径1㎜の長石・石英を中量	暗茶褐色	体部は丸みを帯び、かえり付近で屈曲する。かえりは高く、基部の外側を肥厚させることで補強している。体部外面のほぼ全面に回転ヘラ削りを施す。	
27	蓋	A. [17.8] B. (2.1) F. [14.8] G. 0.5	口縁付近 1／3	良好	径1㎜の長石・石英を中量	暗赤褐色	体部はかえり付近で強く屈曲する。かえりは高く端整に作られる。	
28	蓋	A. [17.6] B. (1.3) F. [14.8] G. 0.3	口縁部片 1／5	良好	径1㎜の長石・石英を中量	紫灰色	体部はかえり付近に屈曲をもつ。かえりは断面三角形で厚めの基部をもつ。	
29	蓋	A. [15.2] B. (2.6) F. [12.2] G. 0.2	1／4	普通	径1～2㎜の長石・石英を中量、雲母を少量	紫灰色・ 灰色	小型の蓋。体部は丸みを帯び、かえり付近に強い屈曲をもつ。かえりは断面三角形で端整に作られる。	焼成時のひび割れ有り
30	蓋	H. 3.0 I. 1.2	つまみ部のみ	不良	径1㎜の長石・石英を微量、雲母を少量	明褐色	偏平宝珠形のつまみ。	焼成時のひび有り
31	蓋	B. (1.9) G. 0.2	細片	良好	径1㎜の長石・石英を中量	暗灰褐色	体部はかえり付近に弱い屈曲をもつ。かえりの断面は丸みを帯びた三角形を呈する。	
32	蓋	B. (1.7) G. 0.2	細片	普通	径1㎜の長石・石英を中量、雲母を中量	明灰褐色	体部はかえり付近に屈曲をもつ。断面三角形のかえりをもつ。	
33	蓋	B. (1.5) G. 0.3	細片	良好	径1㎜の長石・石英を微量	灰色	直線的な体部をもつ。かえりは低く、基部の広い三角形を呈する。	
34	蓋	B. (1.9) H. 2.8 I. 1.1	1／8	不良 軟質	径1㎜の長石・石英を少量、雲母を多量	明褐色	つまみは高く、断面逆台形を呈する。体部上位に回転ヘラ削りを施す。	
35	蓋	B. (1.3) H. 2.7 I. 0.6	1／3	堅緻	径1㎜の長石・石英を多量	暗紫灰色	つまみは偏平ボタン状を呈する。体部上位に回転ヘラ削りを施す。歪みが著しい。	内側の器面が剥離焼台か
36	蓋	B. (1.4) G. 0.3	細片	普通	径1㎜の長石・石英を少量	暗灰褐色	かえりは断面三角形を呈し、かえりの外側の「受け」にあたる部分が薄手に作られる。	
37	蓋	B. (1.6) G. 0.2	細片	普通	径1㎜の長石・石英を少量、雲母を微量	灰色	かえりは口縁部に向かって外傾する。薄手で端整に作られる。	
38	小型蓋	A. 7.1 B. (1.6)	蓋部完形	良好	径1㎜の長石・石英を少量	明赤灰色	体部はやや反りながら浅めに開き、端部を小さく屈曲させる。頂部の付属部分を欠失している。全面に回転ナデ調整を施す。	
39	高坏	A. [21.6] B. (1.6)	口縁部片 1／5	不良	径1㎜の長石・石英を中量、雲母を微量	明灰褐色 黒褐色	盤ないし高坏の口縁部片。口縁部を断面S字状に屈曲させる。薄手で端整な作りである。体部外面に回転ヘラ削りを施す。	焼成時のひび割れ有り
40	高坏	B. (1.2)	口縁細片	不良	径1㎜の長石・石英を中量、雲母を少量	明灰褐色	盤ないし高坏の口縁部片。口縁部を断面S字状に屈曲させる。	
41	円面硯	B. (3.0) D. [23.6]	脚部片 1／6	普通	径1～2㎜の長石・石英を微量	明赤灰色	脚部下位に突帯を巡らせる。脚端部は内外面に突出部をもつが、僅かに爪先の上がる状態で接地する。長方形の透かしが2か所確認でき、その上に突帯が巡ると思われる。	
42	甕	B. (4.6)	頸部細片	堅緻	径1㎜の長石・石英を多量	暗赤灰色 灰色	頸部はくの字に強く屈曲する。体部外面に平行線の叩き、内面に同心円の押さえ跡がつく。割れ口に自然釉の付着があり、破片を焼台として利用したものと思われる。	灰原出土の破片と接合

43	甕	B．(10.0)	体部細片	堅緻	径1㎜の長石・石英を中量	黒灰色	体部外面に斜方向の平行線叩き、内面に同心円の押さえ跡がつく。高温により器表面の一部がガラス化している。	
44	甕	B．(5.1)	体部細片	堅緻	径1㎜の長石・石英を多量	黒灰色 暗赤色	体部外面に縦・斜方向の平行線叩き、内面に同心円の押さえ跡がつく。内面に自然釉が付着。	焼台として利用か
45	焼台	長．10.5 幅．6.3 厚．2.4	－	－	砂質土が固まったもの。	黒灰色	砂質土の窯壁の一部が釉着・凝固したものを焼台に利用している。表面に窯体穿築時の工具跡が残る。	
46	焼台	長．10.4 幅．6.8 厚．3.8	－	－	径1～2㎜の長石・石英を非常に多量	黒灰色	土器の混和材に使う砂粒を多量に含む粘土が焼け固まったもの。断面形態は窯床の傾斜に合わせた台形状を呈する。底面に板片や藁の付着していた痕跡がみられる。	

（灰原出土）

図版番号	器形	法量	残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	出土層位	備考
47	坏	A．[15.8] B．(3.0)	口縁部 1／6	良好	径1㎜の長石・石英を微量	灰色	体部は直線的に開き、口縁部に向かい僅かに外反ぎみになる。口縁部内面に浅い沈線がつく。	灰原下層	
48	坏	A．[17.2] B．2.8 C．[10.6]	1／6	良好	径1㎜の長石・石英を中量	明灰色	体部は直線的に開く。底部に別器の底部が融着している。	灰原上層	
49	坏	B．(3.6) C．10.0	1／2	不良 軟質	径1㎜の長石・石英を微量、雲母を多量	明灰白色	体部は丸みを帯びる。底部は回転ヘラ切り後、ナデに近い軽いヘラ削りを多方向から施す。体部は全面的に回転ナデ調整。	灰原下層	
50	坏？	B．(2.5) C．[4.6]	細片	良好	径1㎜の長石・石英を微量	暗灰色	蓋ないし他の器種の可能性がある。体部は丸みを帯びて開き、中位で強く外反する。体部下位、底部に回転ヘラ削りを施す。	灰原下層	
51	坏	B．(0.6) C．[9.2]	底部片 1／6	良好	径1㎜の長石・石英を少量	明灰色	体部と底部の境に稜がつく。底部は切り離し後、回転ヘラ削りを施す。	灰原上層	
52	坏	B．(0.4) C．8.8	底部片 2／3	良好	径1～2㎜の長石・石英を中量	灰色	底部は回転ヘラ切り後、回転ヘラ削りを行い、その上に多方向からナデを施している。	灰原上層	
53	坏	A．[11.5] B．(3.0)	細片	良好	径1㎜の長石・石英をごく微量	明灰色	小型の坏。丸みを帯びた体部をもち、口縁部内面に沈線がつく。体部外面に指によるナデ跡が見られる。	灰原一括	
54	坏	A．[12.0] B．2.1 C．[9.2]	1／3	堅緻	径1㎜の長石・石英を中量	灰色	口縁部に沈線状の窪みが微かに認められる。底部は軽い手持ちヘラ削りの痕跡が見られる。焼き歪みが著しく別器底部が融着している。	灰原下層	
55	坏	－	底部片	良好	径1～2㎜の長石・石英を中量	灰色	底部は切り離し後、回転ヘラ削りを施す。	灰原上層	
56	坏	C．[14.0]	底部片	良好	径1～2㎜の長石・石英を多量	灰色	底部は切り離し後、回転ヘラ削りを施す。	灰原下層	
57	坏	B．(1.6) C．[5.4]	1／4	普通	径1～2㎜の長石・石英を中量	灰色	小型の坏。径の小さい底部から直線的に体部が開く。体部下端にごく軽い手持ちヘラ削りを施す。底部は回転ヘラ切り後、手持ちヘラ削りを施す。	灰原下層	
58	坏	B．3.8	細片	不良 軟質	径1㎜の長石・石英を多量	灰黄色	底部から体部下位にかけて丸みをもつ。調整等は摩滅しており不明。	灰原上層	
59	坏	B．(3.8)	細片	普通	径1㎜の長石・石英を中量	明灰褐色	体部下端に僅かなためをもち、外反ぎみに開く。	灰原下層	
60	坏	B．(2.9)	細片	良好	径1㎜の長石・石英を中量	灰色	器壁が厚く、体部は僅かに丸みを帯びて立ち上がる。器面は回転ナデにより滑らかに調整される。	灰原上層	
61	高台坏	B．(2.3) D．[9.5] E．0.6	1／4	普通	径1㎜の長石・石英を微量、雲母を中量	灰白色	底部から体部下位にかけて丸みを帯び、高台は底部寄りの位置に付く。高台は低く、断面台形を呈する。底部は切り離し後、回転ヘラ削りを施す。	灰原下層	
62	高台坏	B．(1.3) D．8.1 E．0.6	高台部 2／3	良好	径1㎜の長石・石英を中量	灰色	高台は低く断面台形で、外端部で接地する。底部寄りの位置に付く。底部は回転ヘラ削り後高台取付けに伴う回転ナデを全面的に施す。	灰原下層	
63	高台坏	B．(2.3) D．[11.0] E．1.0	高台部 1／5	良好	径1㎜の長石・石英を中量	灰色	高台は厚く断面台形を呈し、体部下端よりもかなり底部寄りの位置に付く。底部は高台取付けに伴う回転ナデにより調整される。高台坏以外の器種の可能性もあるが、焼き歪みもあるため不明である。	灰原下層	

64	高台坏	B.（2.7） D.［7.5］ E. 0.6	細片	良好	径1㎜の長石・石英を中量	灰色	底部から体部下位にかけて丸みを帯び、高台は底部寄りの位置に付く。高台は低く、断面は細台形を呈する。	灰原上層	
65	高台坏	B.（1.1） D.［10.4］ E. 0.9	細片	良好	径1～2㎜の長石・石英を中量	灰色	高台は厚く、断面台形を呈する。底部は切り離し後、高台取り付けに伴う回転ナデを全面的に施す。	灰原下層	焼き歪み有り
66	高台坏	B.（1.9） D.［10.9］ E. 1.5	細片	普通	径1㎜の長石・石英をごく微量、雲母を中量	灰色	他器に比べて、高台が非常に高く薄い。底部は切り離し後、回転ヘラ削りを施し、高台周辺に回転ナデを施す。	灰原下層	
67	高台坏	B.（1.3）	細片	良好	径1㎜の長石・石英を少量	灰色	高台は端部を破損しているが、比較的高く、ハの字に開くものと思われる。底部は高台取り付けに伴い粘土を貼り付けて回転ナデ調整を施している。	灰原上層	
68	高台坏	B.（1.6）	底部片	良好	径1～2㎜の長石・石英を少量	灰色	高台部を欠失する。底部から体部にかけては直角ぎみに屈曲する。底部は切り離し後、回転ヘラ削りを行い、高台取付けに伴う回転ナデを周囲に施す。	灰原下層	
69	高坏	B.（1.1）	細片	堅緻	径1㎜の長石・石英を少量	明灰色	体部は直線的に開き、口縁部はS字状に屈曲する。外面に回転ヘラ削りの痕跡がみられる。器壁が薄く端整な作りである。	灰原下層	自然釉付着
70	高坏	B.（1.3）	細片	不良軟質	径1㎜の長石・石英を少量、雲母を少量	明黄褐色	S字状に屈曲する端整な口縁部をもつ。	灰原下層	
71	高坏	B.（0.7）	細片	普通	径1㎜の長石・石英を少量	灰色	S字状に屈曲する端整な口縁部をもつ。器壁が非常に薄い。	灰原下層	
72	高坏	B.（1.0）	細片	良好	径1㎜の長石・石英を少量	灰色	S字状に屈曲する端整な口縁部をもつ。器壁が非常に薄い。	灰原上層	
73	蓋	A.［17.2］ B. 2.8 F.［14.6］ G. 0.2 H. 2.8 I. 0.7	1／4	良好	径1～2㎜の長石・石英を少量	灰色	体部は丸みを帯び、かえり付近で僅かな段が付く。かえりは体部の段に合せて粘土を貼り付け、断面三角形に整えたもの。つまみはボタン状で中央が僅かに窪む。体部上位に回転ヘラ削りを行い、その上から軽いナデを施している。	灰原上層	
74	蓋	A.［16.0］ B.（2.0） F.［14.0］ G. 0.2	1／4	良好	径1㎜の長石・石英を多量	灰色	体部は直線的に開き、低いかえりをもつ。体部上位に回転ヘラ削りを行い、その上から軽いナデを施している。	灰原上層	
75	蓋	A.［16.8］ B.（1.7） F.［13.8］ G. 0.2	口縁片 1／4	不良軟質	径1～2㎜の長石・石英を中量、雲母を多量	灰黄褐色 明灰色	体部は丸みを帯び、口縁部付近で強く屈曲する。かえりは体部の屈曲に合せて粘土を貼り付け三角形に整えたもので、内側からの高さが目立つ。	灰原一括	
76	蓋	B.（1.6）	1／6	不良軟質	径1～2㎜の長石・石英を多量、雲母を多量	明灰色	体部は丸みを帯び、かえり付近で屈曲する。かえりは欠損するが、体部の屈曲に合せた小さなものと思われる。体部上位に回転ヘラ削りを施す。	灰原上層	
77	蓋	B.（2.6） G. 0.2	1／5	良好	径1㎜の長石・石英を中量	灰色	体部は直線的で、かえりは断面が丸みを帯びた三角形を呈する。歪みにより、体部が反りかえっている。	灰原上層	
78	蓋	B. 2.0 H. 2.8 I. 1.0	1／3	堅緻	径1㎜の長石・石英を中量、黒色粒子を少量	灰色	焼き歪みが著しいが、体部は直線的に開き、かえり付近で屈曲する。かえりは断面三角形、つまみは基部の太い偏平宝珠形を呈する。	灰原上層	高温により器面に融解部がみられる
79	蓋	B.（1.7） H. 3.2 I. 0.8	1／3	普通	径1㎜の長石・石英を多量、雲母を多量	明灰褐色	つまみは偏平宝珠形を呈する。体部上位に回転ヘラ削りを施す。	灰原下層	
80	蓋	B.（1.6） H. 2.9 I. 0.9	1／4	普通	径1㎜の長石・石英を中量、雲母を多量	灰色	つまみは基部の太い偏平宝珠形を呈する。体部上位に回転ヘラ削りを行い、つまみ取付けに伴う軽いナデをその上から施している。	灰原上層	
81	蓋	B.（1.5） H. 2.5 I. 0.8	細片	良好	径1㎜の長石・石英を多量	暗灰色	つまみは基部の太い偏平宝珠形を呈する。体部上位に回転ヘラ削りを行い、軽いナデをその上から施している。	灰原下層	
82	蓋	H. 2.7 I. 0.7	1／4	不良軟質	径1㎜の長石・石英を多量、雲母を多量	明灰褐色	つまみはボタン状を呈する。体部上位に回転ヘラ削りを施す。	灰原下層	
83	蓋	H. 2.8 I.（0.9）	細片	良好	径1～2㎜の長石・石英を多量	暗灰色	つまみは偏平宝珠形を呈する。	灰原一括	
84	蓋	H. 3.8 I. 0.4	細片	普通	径1～2㎜の長石・石英を多量	灰色	つまみは径が大きく、非常に偏平な宝珠ないしボタン状を呈する。	灰原上層	

85	蓋	B.（2.7） H. 2.7 I. 1.2	細片	不良 軟質	径1㎜の長石・石英を微量、雲母を少量	明灰色	体部は上位の平坦面から稜をもって開く。つまみは高く、基部の太い宝珠形を呈する。体部上位に回転ヘラ削りを行い、その上に回転ナデを施す。	灰原 一括	
86	蓋	B.（2.2） E. 0.2	細片	不良 軟質	径1㎜の長石・石英を中量、雲母を多量	灰黄褐色	体部は直線的に開き、小さく端整なかえりをもつ。体部上位に回転ヘラ削りを施す。	灰原 上層	
87	蓋	B.（1.7） E. 0.2	細片	良好	径1㎜の長石・石英を中量	灰色	体部は直線的に開く。かえりは断面が丸みを帯びた粘土紐状を呈する。	灰原 下層	
88	蓋	B.（1.2） E. 0.1	細片	不良 軟質	径1㎜の長石・石英を中量、雲母を多量	黄褐色	体部は丸みを帯び、かえり付近で強く屈曲し鍔状を呈する。かえりは体部の屈曲に合せて僅かに粘土を貼り付けて成形したもの。	灰原 上層	
89	蓋	B.（1.7） E. 0.2	細片	良好	径1㎜の長石・石英を多量	灰色	口縁端部を折り返すようにして肥厚させ、一部を成形して低いかえりを作り出している。	灰原 上層	
90	円面硯	B.（4.3） D.［20.2］	細片	堅緻	径1㎜の長石・石英を少量	黒灰色	脚部に一条の突帯をもち、脚端部は内外両方向に強く張り出す。全面的に回転ナデ成形を行っている。	灰原 上層	内面に僅かに自然釉が付着
91	円面硯	B.（3.0） D.［25.0］	細片	堅緻	径1㎜の長石・石英を少量	灰色	脚部に一条の突帯をもち、脚端部は内外両方向に強く張り出す。	灰原 下層	
92	長頸壺	B.（6.0）	細片	良好	径1～3㎜の長石を微量、黒色粒子を少量	灰色	円筒状の頸部のみ残存。内面下端に体部との接合のための指頭圧痕が僅かに残る。回転ナデ調整を全面的に行っている。	灰原 下層	一部に自然釉付着
93	甕	B.（4.7）	細片	普通	径1㎜の長石・石英を少量、雲母を多量	灰色	甕の体部上位の細片で器壁が薄い。外面に平行線の叩き目が付き、内面はヘラナデによる調整を施している。	灰原 一括	
94	甑	B.（5.4）	細片	良好	径1㎜の長石・石英を少量、雲母を少量	灰色	甑ないし鉢の口縁部片。外面に横方向の平行線の叩き目が付く。内面はヘラナデによる調整を施している。	灰原 上層	
95	甕	B.（7.7）	細片	良好	径1㎜の長石・石英を少量	明灰色	外面は平行線の叩き目を付け横方向のヘラナデを施す。内面は同心円の押さえ跡が付く。	灰原 一括	
96	甕	B.（6.0）	細片	良好	径1㎜の長石・石英を少量	明灰色	外面は平行線の叩き目を付け横方向のヘラナデを施す。内面は同心円の押さえ跡が付く。	灰原 上層	95と同一個体か
97	甕	B.（6.5）	細片	良好	径1㎜の長石・石英を少量	明灰色	外面は平行線の叩き目を付け横方向のヘラナデを施す。内面は同心円の押さえ跡が付く。	灰原 上層	95と同一個体か
98	甕	B.（6.0）	細片	不良 軟質	径1㎜の長石・石英を微量、雲母を多量	灰白色	甕の体部下端片。外面に平行線の叩き目とヘラ削り、内面に指頭圧痕と指ナデがみられる。	灰原 上層	
99	甕	B.（6.0）	細片	不良 軟質	径1㎜の長石・石英を多量	灰色	大型の甕の口縁部片。外面に回転ヘラ調整を行い、櫛書波状文を施す。	灰原 上層	
100	甕	B.（5.8）	細片	良好	径1～2㎜の長石・石英を非常に多量	灰色	大型の甕の体部片で、器壁が非常に厚い。外面に平行線の叩き跡、内面に同心円の押さえ跡が付く。	灰原 上層	
101	甕	B.（7.6）	細片	良好	径1～3㎜の長石を微量、黒色粒子を少量	灰色	外面は回転ヘラ削り後にナデ調整を行い滑らかにしている。内面はヘラないし指による回転ナデの痕跡がみられる。	灰原 上層	
102	甕	B.（6.2）	細片	良好	径1～2㎜の長石を非常に多量	暗灰色	大型の甕の体部片で、器壁が非常に厚い。外面に平行線の叩き跡が微かにみられ、内面には同心円の押さえ跡が付く。	灰原 下層	
103	陽物？	長.（11.9） 太.（3.7）	－	不良 軟質	径1～2㎜の長石を非常に多量、雲母を多量	明灰褐色 赤褐色	三足鍋の脚部の可能性もあるが実態は不明。手づくねによる成形で、一部ヘラナデがみられる。	灰原 下層	
104	甕	A.［23.8］ B.（5.9）	口径の 1／4	普通	径1～2㎜の長石を非常に多量、雲母を中量	暗灰褐色	口縁部はくの字に外反し、口唇部が僅かに突出する。体部内面にヘラナデを施す。形態的には土師器甕であるが、還元焔焼成の色調を呈する。	灰原 下層	
105	甕	A.［25.0］ C.［7.4］	細片	普通	径1～2㎜の長石を非常に多量、雲母を中量	暗灰褐色	口縁部はくの字に強く外反し、口唇部は大きく外傾する。体部中位以下にヘラ磨き、内面にヘラナデと指頭圧痕、底部に木葉痕がみられる。形態的には土師器甕であるが、還元焔焼成の色調を呈する。	灰原 上層	小破片4点は同一個体と思われる
106	天目碗	A.［13.4］ B.（4.7）	細片	堅緻	白色緻密で磁器に近い	黒色 茶褐色	体部上位に弱い張りをもち、口縁部は僅かに外反する。	表土	
107	カワラケ	B.（1.5） C.［7.0］	細片	不良 軟質	ごく微細な長石を微量	明橙褐色	体部下位から底部にかけて軽い指頭圧痕がつく。	表土	
108	すり鉢	A.［30.0］ B.（6.8）	細片	良好	径1㎜の長石・石英を微量	暗赤褐色	体部は直線的に開き、口縁部は両端を突出させる。回転ナデ調整を施す。釉の付着はみられない。	表土	

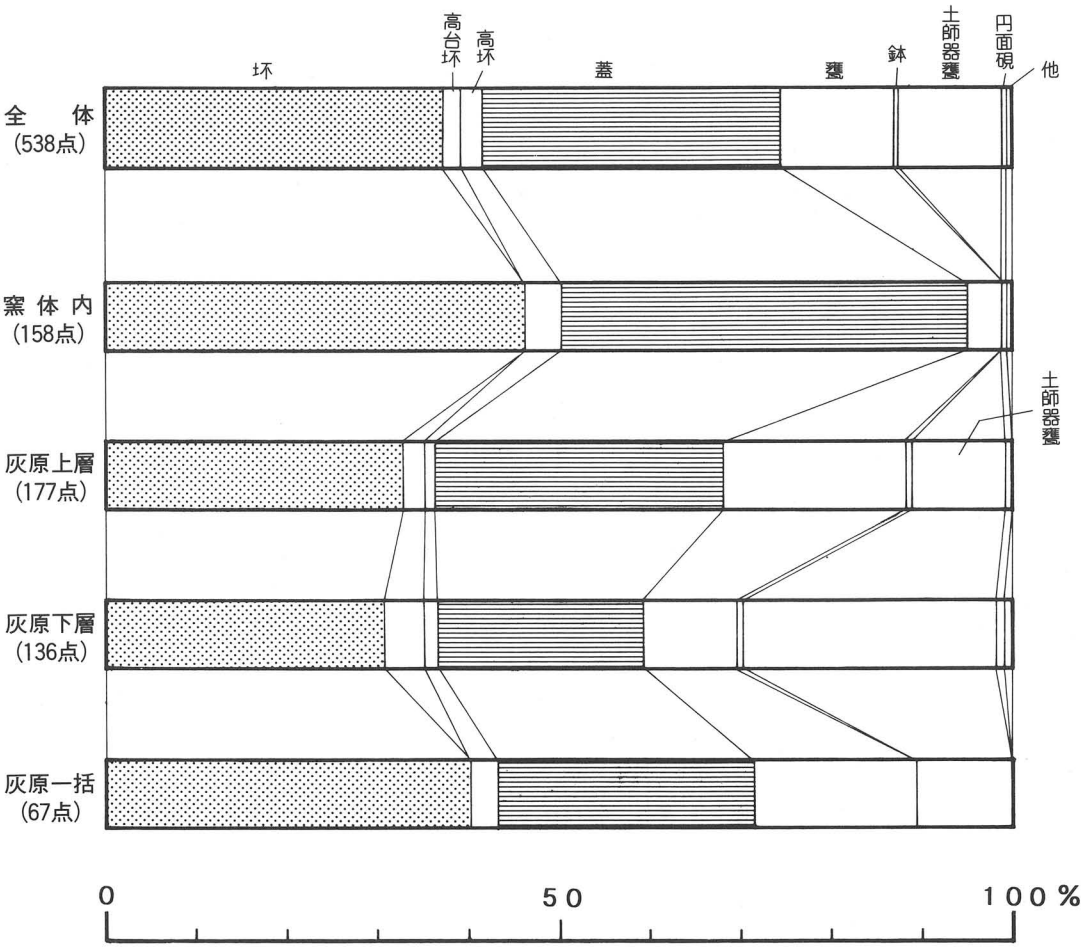
第4節　考察

1）栗山窯における須恵器の製作傾向

今回の調査では、灰原に散らばる遺物を取り上げて行く中で、比較的上層に含まれる遺物とそれよりも下層に属すると見られる遺物があり、概ね2回にわたる廃棄の状況が把握されている。これに窯体内出土の遺物を加え、出土地点別に3つの遺物群を設定することが可能となっている。窯体内、灰原上層、灰原下層、のそれぞれに属する遺物は、必ずしも厳密なものではないが、廃棄された順序を反映しているものと思われ、灰原下層のものほど早い段階に製作・廃棄されたものと考えることができる。そこで、この3者の様相を比較することから、栗山窯の須恵器製作に何らかの時間的あるいは段階的な傾向が見い出せるかどうか、検討を試みることにした。検討方針は、各地点の遺物の破片数を、器種ごとに、あるいは細分化した特定器種ごとに数えて、地点間の違いを比較するものである。これは、あくまで個体数ではなく破片数であるため、数量的な多寡はおよその目安でしかない。また、3地点の時間差についても、遺物総量からして大きな差はないと思われ、窯体内に前段階の遺物が焼き台として残される場合や、灰原に後世の遺物が混入する場合などを考えれば、一層、厳密性を欠くものとなるであろう。しかし、このような方法によって、一面しか床面をもたない本窯でも、複数次にわたる操業の可能性と大まかな傾向は掴めるものと考える。限界を認めた上での検討であることをあらかじめ承知されたい。

1．器種構成

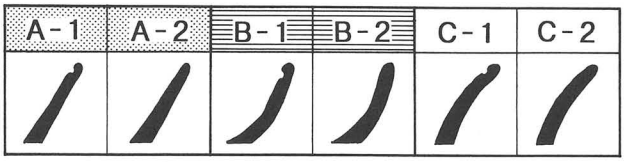
第12図は、栗山窯出土の遺物を器種構成別に割合で表したものである。最上段に示した窯全体のグラフでは、坏の占める割合が37.2%、蓋は33.0%で、両者が圧倒的に多い。窯体内から灰原下層にかけてのいずれの地点でも、両者はほぼ近い割合で多くを占めており、本窯の主体的な製品であったことが分かる。一方、甕類は一個体あたりの破片数が多いため、灰原では大きな割合を占めているが、個体数としてはかなり少ないものとみてよいであろう。ここで興味深いのは、土師器甕が灰原の下層で最も多く検出されていることである。この傾向は、最初の段階には土師器甕も窯での焼成を試みていたと考える立場と、ごく普通に作られた土師器甕が早い段階に投棄されていたと考える立場の、2通りの解釈が可能である。この甕が還元焔焼成に近い色調を呈していたことを重視して、前者の解釈に依るならば、土師器工人が須恵器生産に動員され順化して行く過程を示す資料となるであろう。ただし、土師器の坏類は検出されていないので、あくまで可能性に留まるものである。またこれらとは別に、割合的に小さな存在である高台坏や高坏などは、明確な傾向が把握できない。強いて言うならば、高台坏は灰原下層に多く窯体内に存在しないので早い段階の製作、高坏は逆に窯体内に比較的多いので遅い段階に多く作られた、という傾向が読み取れなくもない。しかし、高台坏には、高台が薄くて高い後世の製品らしきものが混入している可能性もあり、深読みは危険である。ここでは、円面硯などと共にごく僅かな生産量でしかなかったことを把握しておけば十分であろう。

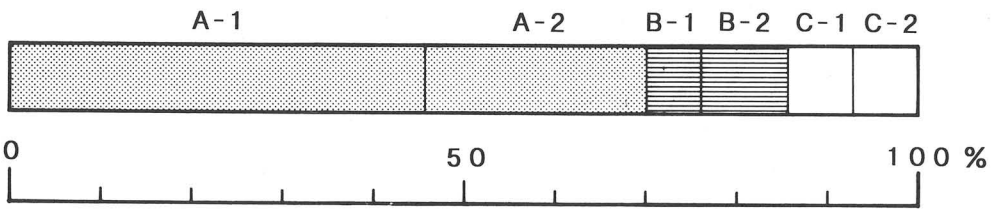


第12図　各器種の破片総数割合　（ ）内数値は破片数

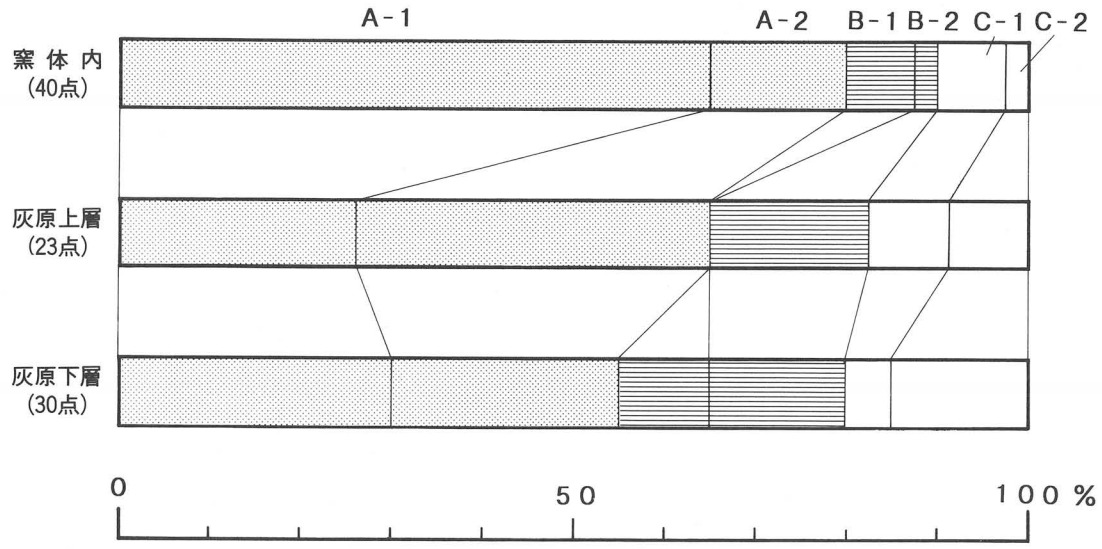
2．坏

坏は完形品が存在しないため、底部から口縁部に至る器形全体をもとにした分類が不可能となっている。便宜上、ここでは底部形態を問わず、坏の体部形態と口縁部のつくりから第13図のような分類を行った。先述したように、坏は体部が直線的なものと丸みを帯びるもの、外反ぎみのものの３つが存在する。それぞれをＡからＣに分け、さらに口縁部に沈線ないし段状の窪みを付けるものと付けないもので１と２に細分した。それぞ





第13図　坏の形態分類及び分類別出土破片数の割合



第14図　出土地点別坏の諸形態の破片数割合

れに中間的なものもあるが、都合、この6種類の中に入れて検討している。

これらの破片数を出土地点別に割合で表したものが第14図である。いずれの地点もA類の占める割合が高く、BとC類はほぼ同じ割合を保っている。A類に対するB・C類の割合は、窯体内よりも灰原の方で大きくなっている傾向が看取される。また、A類の中でも、口縁部に沈線が付くA－1と沈線の付かないA－2では、窯体内出土、すなわち新しい段階と思われる方に沈線の付くものが多い。これらは検討破片数が少ないこともあり、厳密な比較とはなっていないが、灰原下層の段階から既に6類が揃って現われていること、そしてその中で若干の量的な変化があり、最終的にはA－1類が卓越ないし画一化されていったこと、などの傾向がおよそ把握されるであろう。なお、破片数全体での割合は、A類：B類：C類＝7：1.5：1.5となっている。

3．蓋

蓋の分類基準は、体部の形態が直線的であるか、口縁部付近に屈曲をもつものか、ということに加えて、かえりの基部の厚さやその取り付け方に着目している。第15図は、体部が直線的に延びて口縁部に至るものをa類、口縁部付近で屈曲をもつものをb類に大別して表したものである。さらにかえりの作りによって以下のような細分を行っている。

a－1；体部は直線的で、基部の薄い鋭いかえりが付くもの。

a－2；体部は直線的で、基部の厚いかえりが付くもの。

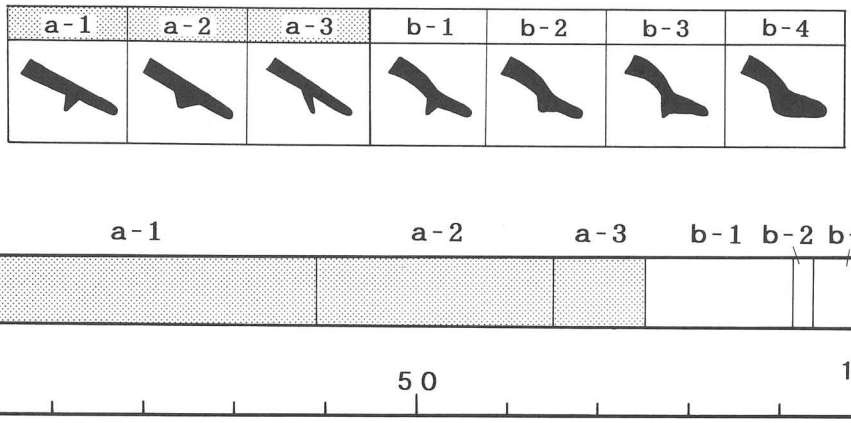
a－3；体部は直線的で、基部の薄い鋭いかえりが外傾して取り付くもの。

b－1；体部は屈曲し、基部の薄い鋭いかえりが付くもの。

b－2；体部は屈曲し、基部の厚いかえりがつくもの。

b－3；体部は屈曲し、かえりは口縁部側から粘土を厚く貼り付けて垂下させたもの・体部内側から見てかえりの比高差が大きいもの。

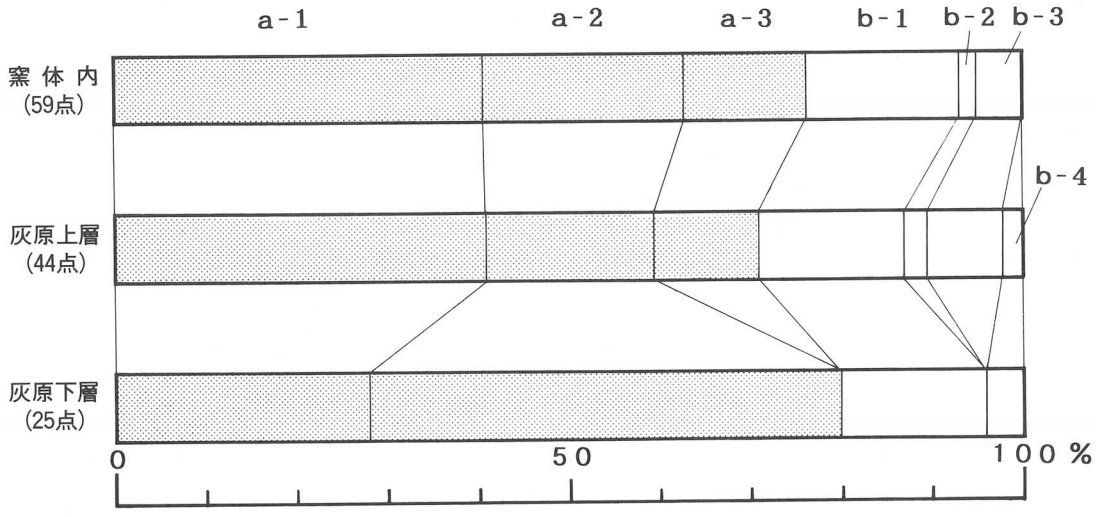
b－4；体部は屈曲し、口縁部内側を肥厚させてかえりの代りにしたもの・b－3よりもかえりを作る意識が消極的なもの。



第15図　蓋の形態分類及び分類別出土破片数の割合　（ ）内数値は破片数

ところで、かえりの取り付けは、回転台に体部が逆さまに乗せられた状態で行われるものと考えられ、ａ－１のような体部に直行する角度で薄いかえりを取り付ける作業は、角度に留意して工具を駆使するため、やや熟練を要するものと思われる。一方、逆さになっている体部の口縁部付近を外反させ、山折りになった部分に粘土紐を巡らせてかえりを成形するｂ類の方法は、より容易な作業であったと思われるのである。本窯の資料には、このような製作上の難度や省力・容易性を反映した２つの形態が併存するので、製作傾向の把握にはこの点に着眼することにした。

第16図に表された出土地点別の割合は、灰原下層の資料数が少ないものの、ａ類が70～80％の一定の割合を占めており、主体的に生産されていた様子が把握できる。同時に、ｂ類が灰原下層の段階から存在し一定の割合を保持しているため、ａ類の製作が省力化されてｂ類に移行していったという動きは想定され得ないところである。少なくとも本窯の操業段階では、両者が同時に、しかも一定の割合で生産されていたことになるであろう。また、ａ・ｂ類の中の細かな変移について見るならば、かえりが外傾する端正な作りのａ－３類は比較的新しい段階、かえりの意識が消極的なｂ－４類はごく僅かながら古い段階に認められること、などが指摘できるであろう。ここにおいても、端正な作りのものから簡略化されたものへ移行するといった軌跡は看取され



第16図　出土地点別蓋の諸形態の破片数割合　（ ）内数値は破片数

得ず、むしろその逆を示している。従って、本窯での生産は、当初の典型品生産を維持し続け、技術的な退行とは無関係にａ－３類やｂ－２、ｂ－３類などを「変種」として作り出していったという傾向にまとめることができるであろう。

４．まとめ

さて、以上より知られる本窯の須恵器の製作傾向は、決して大きな変転を辿るものではなかった。灰原出土の遺物が２群に分けられ、窯体内にも焼き台として再利用された遺物があることなどを考え合わせると、最低でも２段階の操業は行われたものと考えられる。灰原下層および灰原上層の一部の遺物が前段階の操業を、窯体内と灰原上層の一部の遺物が後段階の操業をそれぞれ反映しているものと想定した場合、両段階の差異は僅かであり、典型品の継続的な生産を行い、技術的な後退を来す余地は認められなかった。Ａ－１類の坏が最終的に卓越することや、ａ－１類の蓋が主体を占める中からａ－３類のような端正な作りの蓋が現れることなどは、工人の抱く典型品のイメージが強く保持されていたことを示しており、製作の熟練度も向上したかのような印象を受ける。また、窯体の床面が１面しか確認されなかったことから両段階の火入れの回数はごく少なく、時間差も小さいものであった可能性が高い。従って上記に表された須恵器の製作傾向は、時間差によって生じる変移というよりも、工人のもつ癖や嗜好の違い、あるいは試作といった微細なレベルで生じる多様性を反映したものと考えるべきなのであろう。

２）栗山窯と他窯の比較および帰属年代の検討

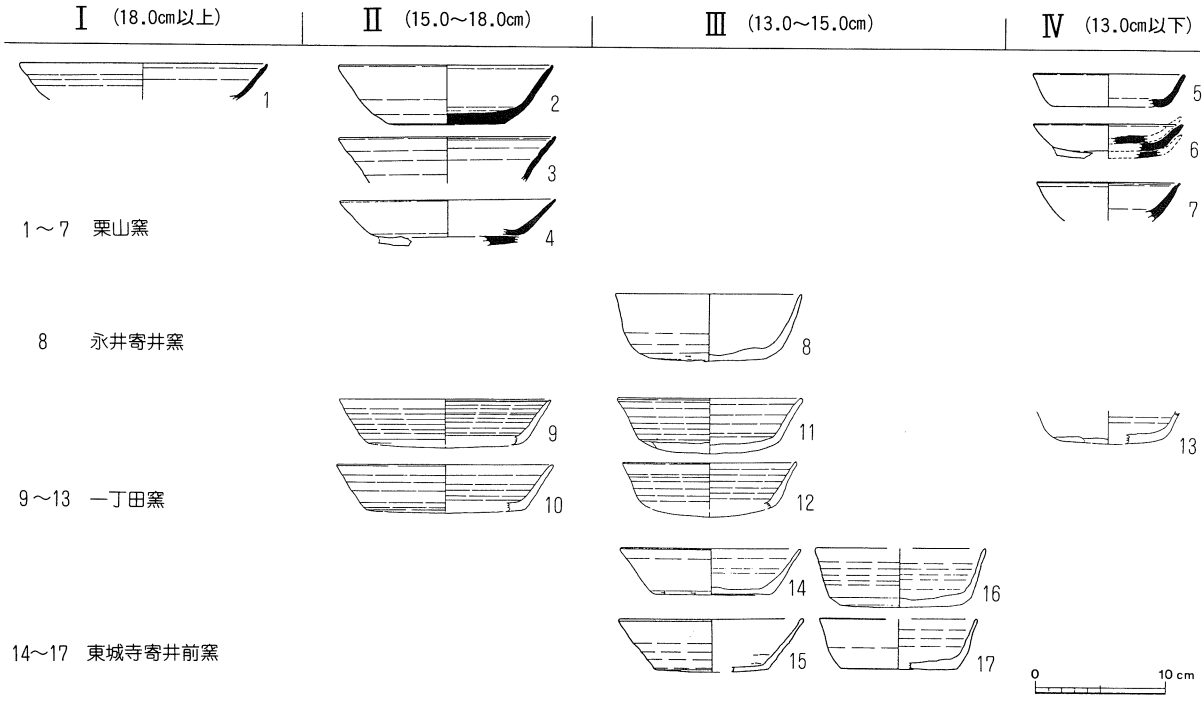
栗山窯は、従来より知られている新治窯跡群の分布域に対して、大きく東に離れた地点に立地している。従って、栗山窯は新治窯跡群とは別に単独で築かれた窯である可能性がある。しかし、各地の集落遺跡から「新治産」と考えられる須恵器が、通時代的かつ大量に出土している事実は、筑波山東南麓にまだ未知の窯跡が多数存在していることを予想されるものである。周知の新治窯跡群と栗山窯との間の空間に、今後多数の窯跡が発見される可能性があり、栗山窯を新治窯跡群との連続性の中に位置付けておくことは必ずしも無謀なことではないと思われる。また、近在する新治村永井寄居窯および千代田町一丁田窯は、栗山窯に比較的近い様相の須恵器（かえりの付いた蓋など）を製品しており、およそ９世紀代を中心とした周知の新治窯跡群よりも明らかに古い段階の窯跡と考えられる。これらの窯が新治窯跡群の先駆けとして東方に点在し、その後、系統性をもって西方へと展開していった様を想定するならば、栗山窯の孤立性に拘泥する必要はないであろう。よって、ここでは栗山窯を新治窯跡群の一窯と考え、その中における前後関係を明らかにすることから、帰属年代の検討を進めることにしたい。

具体的な検討作業は、栗山窯で主体的に生産されている坏と蓋を対象とする。比較する窯跡としては、新治窯跡群でも比較的古い段階と考えられる一丁田窯、永井寄居窯、東城寺寄居前窯を挙げておく。ただし、一丁田窯以外は表採資料でしかなく、また一丁田窯自体も、調査は窯体内のみであったため須恵器の出土量は僅かなものでしかない。従って、やや不確定な要素を含みつつの検討であることをお断りしておきたい。

なお、一丁田窯の須恵器に関しては、本報告に先立ち再実測と検討を行っている。一部の重複を含めてその成果を活用していることを、予め明記しておく（赤井博之・吉澤悟「茨城県千代田町一丁田窯跡出土の須恵器の検討」『婆良岐考古』第19号 1997年５月発行予定）。

1．坏

栗山窯の坏の特徴は、大まかに以下のような諸点が挙げられる。1．口径は平均16.5cmと比較的大きい。2．直線的な体部のものが主体的である。3．口縁部に沈線ないし段状の窪みが付く。4．底部は丸底ぎみのものも見られるが、多くが平底化したものである。5．底部調整は回転ヘラ削りによるものが多く、手持ちヘラ削りとの比率は、3：1の割合で回転ヘラ削りの方が卓越する。 このような特徴の中から、まず法量の点を中心に比較をしてみたい。第17図は、栗山窯以下の諸窯の坏を、口径に基いてⅠからⅣに分けて示したものである。栗山窯では口径が20cm近くある坏が1点あり（Ⅰ）、次いで15.5cmから17.5cmに収まる坏（Ⅱ）、そして11cmから13cm程度の小型の坏（Ⅳ）の3つの法量が確認される。栗山窯に最も多いのはⅡの坏である。これに対して、永井寄居窯、一丁田窯、東城寺寄居前窯では、口径が13cmから15cmに収まる、栗山窯には無いやや小型の坏（Ⅲ）が存在しており、主体を占めているのである。特に一丁田窯に注目するならば、ⅡとⅢに対応するものがある中で、比較的大きめのⅡは体部が直線的に開き平底の坏である一方（第17図の9・10）、小さめのⅢは体部がやや外反し、丸底ないし丸底ぎみの坏が多いという（第17図の11・12）、口径に対応した形態差が存在するのである。前者の坏は、栗山窯で主体的に生産されている坏と法量、形態の点で近似しており、1点だけであるが、口縁部に沈線状の窪みの付いたものも確認できる。一方、後者に特徴的な外反ぎみの体部は、丸底の底部形態と併せて、栗山窯ではごく僅かな属性でしかなく、法量的に対応するものは存在しない。なお、丸底の底部形態は、一丁田窯に高台付の器種が欠落していることから、手持ち食器の意識の強い残存とみることも可能である。この点から、一丁田窯は、栗山窯のⅡの坏の流れを汲みつつ、Ⅲの法量の坏を新たに加えて生産していることが読み取れる。また、やや口径が小さくなったことでⅢの坏には深みのある形態が生れており、永井寄居窯や東城寺寄居前窯の坏には箱形坏との類縁性を感じさせるものまで現れている。大口径から小口径へと推移する一般的な傾向に加えて、Ⅲの坏はⅡに比べて形態的にも後出性を窺わせるものが



第17図　新治窯跡群における坏の変遷

（川井1995、吉澤1997より引用）

あると認められるであろう。よって、栗山窯の坏には、一丁田窯や永井寄居窯のそれに対する先行性が指摘されるのである。

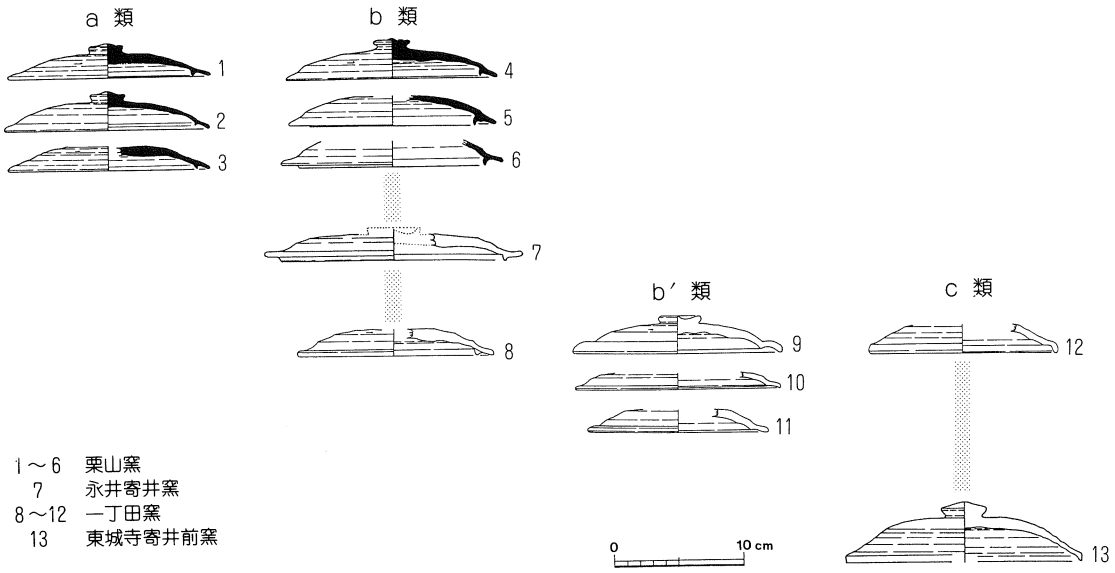
底部調整の点では、一丁田窯、東城寺寄居前窯は手持ちヘラ削りの割合が高く、栗山窯とは逆である。後の段階の新治窯跡群の製品には手持ちヘラ削りが卓越しており、回転ヘラ削りから手持ちヘラ削りへと主体が移行したという推測が許されるならば、やはり栗山窯に先行性を認めることができるであろう。

2．蓋

蓋に関しては、形態的な特徴を中心に比較しておくことにしたい。栗山窯の蓋は、体部が直線的なものと口縁部付近に屈曲をもつものの2種類があり、かえりの形態によってさらに細分が可能である。ここでは微妙なかえりの形態差を捨象して、体部形態で大きく分類し、一丁田窯や永井寄居窯、東城寄居前窯と比較してみたものが第18図である。かえりの付く蓋で体部が直線的に延びるものをａ類としたが、この例は栗山窯以外になく、強弱の違いはあれ、いずれも体部に屈曲がみられる。直線的な体部が7割以上を占めていた栗山窯とは大きな違いがある。永井寄居窯の蓋は1点のみ知られており、20cm近い口径がある。体部の屈曲する部分の内側に小さなかえりを垂下させておりｂ類に当てはめられる。一丁田窯の蓋は、基部の厚い小さなかえりを付けるものと、体部の屈曲と粘土の摘み上げによってかえり状の突出部を作るもの、そして端部を折り曲げるだけのもの、の3種類がある。前2者はｂ類、後者はかえりをもたない点でｃ類とした。ただし、前2者のうち、体部の屈曲を利用して擬似的なかえりを作り出すものは、独立したかえりを作る意識に乏しいという点でｂ'類として区別した。一丁田窯の蓋は、このような擬似的なかえりをもつものがほとんどであり、簡略化の傾向性からみれば、かえりの最終段階にあると言えよう。東城寺寄居前窯の蓋は、かえりが完全に消滅しており、すべて端部を折り曲げるｃ類に属するものである。

さて、このように分類したとき、口縁部付近の体部屈曲化とかえりの省略化にはある程度の相関関係が認められ、ここから辿れる窯の前後関係は、以下のように考えることができる。

1．体部が直線的に延びるａ類から屈曲するｂ類へと主流が移る［栗山→永井寄居・一丁田］。



第18図　新治窯跡群における蓋の変遷

（川井1993、吉澤1997より引用）

2．独立したかえりをもつｂ類から擬似的なｂ’類へと簡略化され［栗山→一丁田］、

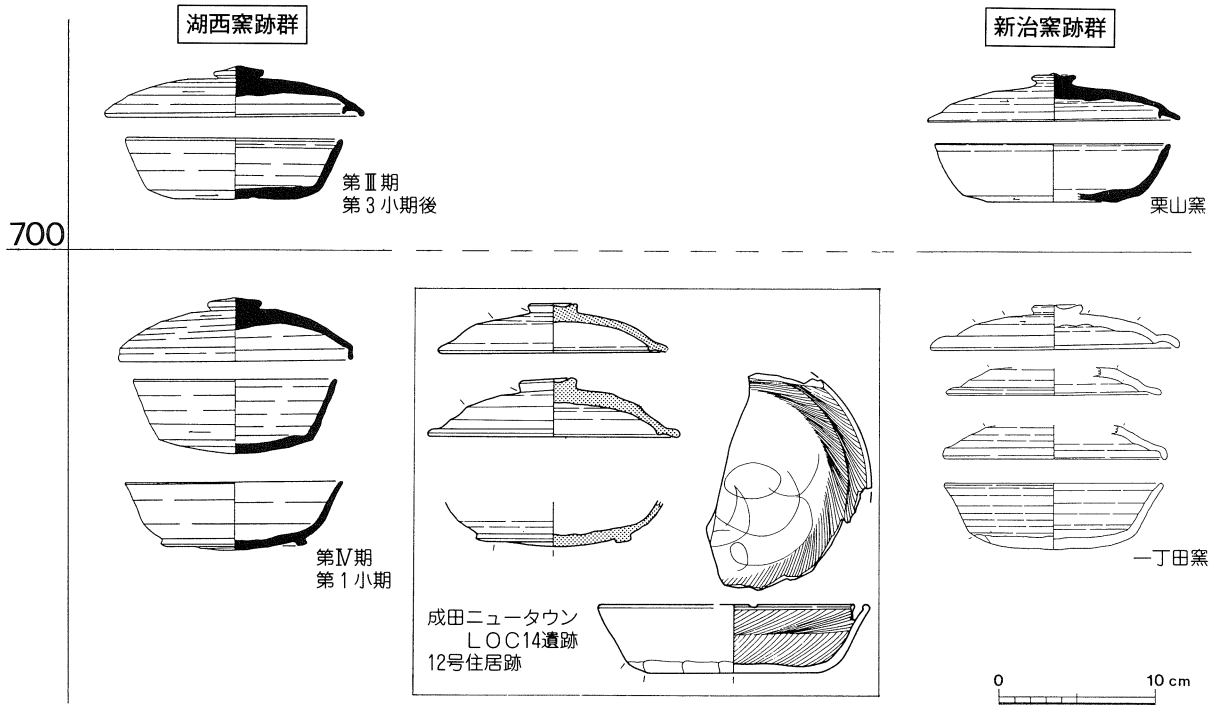
最終的にかえりは消滅し、端部を折り曲げるｃ類に統一される［一丁田→東城寺寄居前］。

なお、永井寄居窯跡と一丁田窯跡の前後関係は、資料の制約上決し難い。永井寄居窯跡の蓋が20cm近い大口径であることを重視するならば、小口径化している一丁田窯よりも先行する可能性がある、という程度である。坏を含め僅か３点しか資料のない現段階では、永井寄居窯と一丁田窯を、ほぼ同じ段階に属するものと考えておくのが無難であろう。

以上、坏と蓋の検討において、新治窯跡群の比較的古い段階の窯は、栗山窯が最も先行するものであり、次いで永井寄居窯・一丁田窯、そして東城寺寄居前窯が続くという関係が明らかとなったものと思われる。

３．帰属年代

栗山窯の帰属年代の判定は、先の前後関係をもとにして、他地域の須恵器編年との併行関係を確認することから行うことにしたい。まず、参考となる資料に成田ニュータウンLoc14（中台）遺跡12号住居跡出土の土器群が挙げられる（第19図）。胎土に雲母を含む新治産かと思われる須恵器の蓋が、内面に暗文のつく畿内産土師器坏を伴って出土しているのである。この蓋は、体部の屈曲と粘土の摘み上げによって擬似的なかえりを作り出しているものであり、円環状のつまみの形態とも併せて一丁田窯の蓋に近似している。伴出した畿内産の土師器坏は、平城Ⅰに該当するもので、実年代は710年前後とされている。また、同じく伴出した須恵器の高台坏は、底部の突出した形態から湖西窯跡群のⅣ期第１小期から第２小期に相当するものと考えられる。その年代は８世紀第１四半期頃とされており、先の畿内産土師器坏の年代ともほぼ合致するものである。これらから、擬似的なかえりが付く蓋は８世紀第１四半期に該当するものと考えられ、一丁田窯の帰属年代もほぼこれに相当する時期と見做される。なお、かえりの付いた蓋の消滅、あるいは端部を折り曲げた蓋との混在時期を、



第19図　栗山窯の年代的位置付け（参考図）

（天野1981、後藤1989より引用）

7世紀末から8世紀初頭に充てる全国的な趨勢からすれば、一丁田窯は8世紀第1四半期でも比較的早い段階に位置付けられる可能性がある。仮に一丁田窯を8世紀第1四半期の古い段階に固定するならば、これに先行する栗山窯は、これを下限年代として7世紀代に帰属させることができるであろう。

問題となるのは、栗山窯と一丁田窯の間の時間差をどの程度見込めばよいかということである。栗山窯で主体的な坏は、一丁田窯に対して一回り大きく、底部調整は回転ヘラ削りを主体としたものであった。蓋の様相も直線的な体部にしっかりとしたかえりが付いたものであり、これらの点に関しては両者に大きな懸隔を感じざるを得ない。しかし、一丁田窯の坏には栗山窯に近似した法量と形態をもった坏（第17図のⅡ）があり、1点だけではあるが、栗山窯の坏に特徴的な口縁部に沈線ないし段状の窪みが付く坏も確認されている（第17図の9）。数の上では僅かではあるがこの坏の存在から、四半世紀を挿む程の時間差は考え難いものと思われる。従って、栗山窯を一丁田窯の直前の段階に充て、7世紀第4四半期に見立てておくことにしたい。
ただし、先に触れた法量差やかえりの作りなどの点において、一丁田窯との間の懸隔性を考慮するならば、7世紀第4四半期でもやや古い段階に属する可能性があるといえよう。

なお、栗山窯の坏の口縁部に付けられた沈線は、畿内の土師器坏に特徴的にみられるものであるが、須恵器では湖西窯跡群の他、東海地方に類例が求められる。湖西編年において、栗山窯のような平底化した坏は、第Ⅲ期第3小期後半に認められ、実年代は681から701年に充てられている。この段階は、かえりの付いた蓋の最後の段階とされているが、偏平な宝珠形のつまみやシャープなかえりの様相は栗山窯の蓋の雰囲気とも類似するものであり、概ねこの段階に対応させることが可能である。同じく飛鳥・平城の編年では飛鳥Ⅲ期新から飛鳥Ⅳ期にかけて、陶邑編年ではⅢ形式第2から第3段階にかけての頃に、比較的類似したかえり付きの蓋の例をみることができる。蓋の形態のみをもって微妙な新古の判断は困難であるが、およそ7世紀第4四半期を栗山窯の帰属する年代として提示しておきたい。

4．付言

ところで、新治窯跡群において栗山窯に先行する窯の存在は、現在のところ確認されていない。しかし、土浦市寺家ノ後A遺跡で胎土に白雲母を含んだ7世紀中葉頃の長頸瓶が出土しており（小松崎 1990）、新治窯跡群の開窯時期はこの頃まで溯る可能性が指摘される。この時期の資料は消費地においても決して数多くみられるものではないが、栗山窯の系譜を考える上でも興味深く、窯跡の発見に期待がもたれるところである。また、こうした消費地における資料は、現段階において、数少ない窯跡の資料を補完するものであり、両者の資料を視野に入れての検討が必要とされている。近年、消費地からの資料で肉付けした新治窯跡群の編年的研究が進められつつあり（赤井 1997）、より広い視野から、再度この栗山窯の位置が確認されることと思われる。

参考文献

赤井博之 1997 「茨城県の須恵器編年」『東国の須恵器－関東地方における歴史時代須恵器の系譜－』 古代生産史研究会

赤井博之 1997 「常陸国新治窯跡群の基礎的研究－奈良・平安時代の須恵器編年を中心として－」（法政大学史学会大会発表要旨）『法政史学』第49号 法政大学史学会

天野 努 1981 「Loc.14遺跡」『公津原Ⅱ』 千葉県教育委員会

伊藤重敏 1990 『一町田窯跡調査報告書（附・高倉阿弥陀堂遺跡）』千代田村教育委員会

小笠原好彦・西　弘海　1976　『平城京発掘調査報告Ⅶ』　奈良国立文化財研究所
川井正一　1993　「常陸国における古代窯業遺跡－新治窯跡群を中心として－」『茨城県立歴史館報』20号　茨城県立歴史館
黒澤彰哉　1988　「常陸における古代寺院の造瓦活動について－茨城廃寺と上佐谷瓦窯跡群の屋瓦を中心として－」『考古学叢考』中巻
後藤健一　1989　「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」『静岡県の窯業遺跡』　静岡県教育委員会
小松崎猛彦1990　『茨城県教育財団調査報告第60集 永国地区住宅団地建設予定地内埋蔵文化財調査報告書』　茨城県教育財団
林部　均　1986　「東日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」『考古学雑誌』第72巻第１号 日本考古学会
吉澤　悟　1997　「律令制成立期の須恵器の系譜」『東国の須恵器－関東地方における歴史時代須恵器の系譜－』古代生産史研究会

－付編－

栗山窯出土の須恵器の胎土について

はじめに

栗山窯出土の須恵器の胎土には、半透明ないし銀白色の雲母片が特徴的に含まれている。これは栗山窯のみならず、新治産の須恵器の特徴として既に広く認知されているものである。新治窯跡群の位置する筑波山周辺には白雲母（Muscovite）を特徴的に含む変成岩類が分布しており、当地の粘土を用いて作られる土器には、ほぼ必然的にこの白雲母が胎土中に混入することになるのである。白雲母は光沢があり肉眼でも容易に観察され得るため、須恵器・土師器を問わず、この有無が新治産あるいは常陸南部産の土器の識別指標として使用されてきている。特に、この胎土観察によって新治産と判定された須恵器は、各地の集落遺跡から検出されており、茨城県南部はもとより、県北部から栃木県南東部、千葉県北部など非常に広域な分布が知られている。霞ケ浦や旧鬼怒川などを利用した水運の便宜を視野におき、この分布域から古代の流通網の復元作業も不可能ではないものと期待されるのである。

ところで、栗山窯出土の須恵器の整理作業を進める中、胎土中に認められる白雲母の量は均一的ではないことに気付いた。同じ窯体内出土の須恵器の中に、雲母の多く認められるものとそうでないものが混在しており、中には肉眼では全く雲母の含有が確認できない個体も存在している。器種間において胎土の微妙な違いはあるものと思われるが、多数出土した坏、蓋など同一器種の中にも白雲母の含有率に大きな差が認められ、また、同一個体の中でも部分的な不均一さが認められるものさえもある。このことは、白雲母の存在イコール新治産と見做してきた従来の見解に反省を迫るものであり、新治産であっても白雲母が確認されない個体があることの認知を示唆している。

そこで今回は、胎土中の白雲母の様相に焦点を絞り、肉眼観察と顕微鏡観察を行って、こうした差異の要因を検討することにした。顕微鏡観察にあたっては、筑波大学地球科学系の久田公一氏に基礎資料の作成を依頼し、雲母の同定と諸般の教示を頂いている。なお、ここでの報告内容や図表類は、久田氏のデーターをもとにして、報告者が独自に作成したものである。この旨を明記し、あらかじめ責任の所在を明らかにしておく。

1．資料

分析を行った資料は、表１の観察表にまとめた６点である。いずれも図化し得ない小破片であるが、器種と相当部位の判明するものである。資料の選定にあたっては、比較的白雲母の見られるものとそうでないものの両方を含めるように配慮したのみで、特定の器種や部位には固執していない。ただし、中に１点、還元焔焼成の色調を呈する土師器甕の資料を加え（資料６）、須恵器との対照とすることにした。

２．方法

まず、資料の色調や焼成具合、白雲母の量を含めた胎土の様子などの観察を、肉眼によって行う。これは、発掘調査報告書に一般的にみられる土器観察表と同じ形式で記録を行うものである。次に、各資料から0.03mm程度の厚さの薄片を採取し、偏光顕微鏡によって胎土中の鉱物同定を行う。今回は白雲母の確認に焦点を絞り、２×２cmの面積中で光学的に確認できる白雲母のすべての大きさを測定し、数量を記録する。これらの結果を踏まえ、資料の色調や焼成と確認され得た白雲母の量との間に、何らかの相関関係が認められるかどう

か考察することにする。

3．観察結果

a．肉眼観察

肉眼による観察結果は、表1に示しておいた。「雲母」と表記したものは、半透明ないし銀白色の光沢のあるもので、紙のように薄く剥離する鉱物を指している。これは針のような尖ったもので押さえると、へき開面で容易に剥離する性質があり、他の光沢をもった鉱物とは簡単に分別ができる。表1の胎土の項目に表記したとおり、資料1・2・6では雲母を多量に確認できるのに対して、資料3～5はそれが全く認められないか、あるいは微量に認められる程度であった。雲母の量において両資料群の間には、明らかな差異が存在しているのである。一方、資料の色調や焼成状態についての観察からは、第20図に示したような相対差を導くことができる。第20図は、肉眼的に観察した各資料の色調と焼成の状態を、相対的な距離として表したものである。厳密な数量比に基づいて作成したものではないが、軟質で酸化焔焼成に近い褐色の須恵器と、その対極にある堅く焼き締まった青灰色の須恵器をそれぞれ両極にとることで、各資料の相対的な位置関係をその中に示すことができる。これによって、雲母が多量に確認された資料1・2・6は、酸化焔焼成に近い色調と軟質な焼き上がりを呈する一群であり、逆に雲母のみられなかった資料3～5は、還元焔で堅く焼き締まった一群であることが明瞭となる。このことから、雲母の量の多寡は焼成の状態と相関関係にあり、焼き上がりの良いものほど雲母の量が減少するという傾向が指摘されるのである。

b．顕微鏡観察

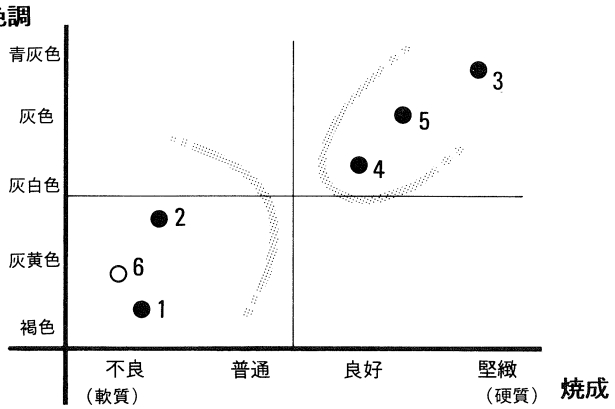
各資料には、石英、斜長石、カリ長石、電気石、角閃石、ジルコンなど、光学的に同定できる鉱物が含まれていたが、白雲母に限定してその数量と大きさを測定した。結果は、第21図に示したとおりである。なお、白

表1　分析資料観察表（肉眼観察による）

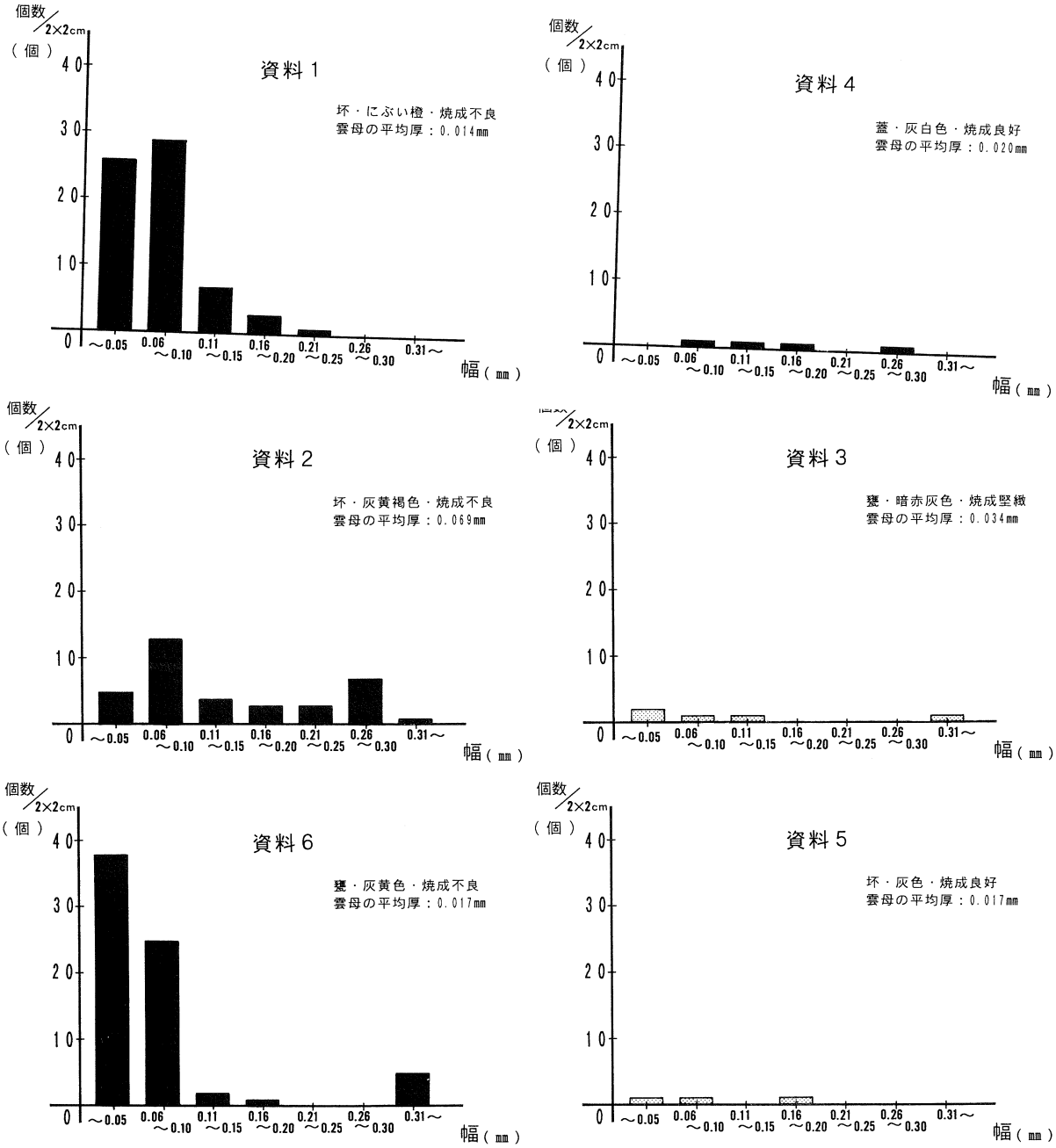
No.	出土地点	器種・部位	焼成	色調（外・内面）	胎土（肉眼観察）	備考
1	窯体内	坏・底部	不良 軟質	Hue7.5YR 7／4にぶい橙 Hue7.5YR 8／4浅黄橙	1㎜の長石・石英粒を中量、雲母多量	底部に回転ヘラ削り
2	窯体内	坏・口縁部	不良 軟質	Hue10YR 6／2 灰黄褐 Hue2.5Y 7／2 灰黄	1㎜の長石・石英粒を微量、雲母多量	口縁内面に浅い沈線
3	窯体内	甕・体部	堅緻	Hue N 5／0 灰 Hue10YR 4／1 暗赤灰	1㎜の長石・石英粒を多量、雲母なし	内面同心円叩き 外面に自然釉
4	灰原下層	蓋・体部中位	良好	Hue N 6／0 灰白 Hue N 6／0 灰白	1㎜以下の長石・石英粒を微量、雲母微量	体部上位に回転ヘラ削り
5	灰原上層	坏・体部下位	良好	Hue N 5／0 灰 Hue N 5／0 灰	1㎜の長石・石英粒を多量、雲母なし	全面に回転ナデ調整
6	灰原下層	甕・口縁部 （土師器型）	不良	Hue7.5YR 6／2灰黄 Hue2.5Y 7／2 灰黄	1㎜の長石・石英粒を非常に多量、雲母多量	小さくつまみ上げる端部をもつ

雲母は板状ないし薄片状であるため、採取した薄片中では鉱物の方向によって観察される形が異なっている。肉眼観察で確認できた大きさよりも、かなり小さな粒子となっていることを理解されたい。

第21図は、横軸に白雲母の最大幅、縦軸に個数を表現したグラフである。白雲母の厚さについてはその平均値を余白に示して参考とした。グラフを一見して分かるように、白雲母の数量は右側に並べたグラフと左側のそれでは大きな違いが認められる。左側に並べたものは、資料1・2・6で、肉眼観察でも多量の白雲母を確認し得た資料である。一方、右側の



第20図　各資料の色調と焼成の相対距離



第21図　雲母の最大幅と含有個数の比較

資料３～５は、僅か数個の白雲母が確認されたのみで、肉眼ではその存在がほとんど確認できなかったものである。資料４は僅かながら白雲母が確認されているものの、資料３と５については、おそらく白雲母であったと思われるような形態的特徴を残している鉱物が確認されたのみであり、完全な白雲母は認められていない。当初は白雲母であったものが分解し、別の特性をもった鉱物に変化したものか、あるいはその途上にあるものと考えられる。こうした数量比較の点について言うならば、肉眼観察も顕微鏡観察もほぼ同じ結果を得たことになるのである。

白雲母の大きさについては、資料１と２によってその範囲をおよそ知ることができる。資料１は0.10mm以下の微細な白雲母が突出して多く確認されているが、資料２では0.30mm程度までまんべんなく認められている。資料２は、白雲母の平均厚でも資料１より大きな傾向にあり、微細なレベルでの違いがある。この差異の要因は、現段階では明らかでなく、薄片中に含み込んだ雲母の方向など偶然による可能性も否定はできない。資料１と２では色調が異なっているため、焼成時の酸素結合の度合いが関係しているのかもしれないが、今回は比較資料が少ないこともあり、あえて結論を下す必要はないと思われる。ここでは肉眼では確認し得ない微細な白雲母が比較的多く認められることと、逆に資料３、４、５のような数量自体が僅かなものでは、小さな白雲母さえもほとんど認められないことを確認しておけばよいであろう。

４．結論

今回分析した資料は、第20図に示したように、焼成の良いものと悪いものに２分され、白雲母は焼成の悪いものに多く確認された。これは肉眼観察も顕微鏡下の観察でもほぼ同じ結果が得られている。特に白雲母の僅かなものは、肉眼で見えないだけではなく、微細な粒子自体も僅かにしか存在していないことが明らかとなった。従って、白雲母の含有量と須恵器の焼成状態との間には、ある程度相関関係が認められるものと判断される。

また、堅く焼き締まった資料３・５などでは、当初白雲母であったものが分解している可能性が指摘され、もともと白雲母が含有されていなかったとは言い切れない状態であった。高温の焼成によって失われてしまった可能性が考えられる。逆に、低温で軟質に焼成された資料１・２・６に白雲母が多く認められたことは、これを積極的に裏付けるものとも受け取れよう。よって、胎土中の白雲母は、焼成温度の低いものほど多く残存し、高いものほど分解してしまうという傾向が想定され、その蓋然性は高いものと判断される。

そもそも白雲母は比較的水分を多く含んだ鉱物であり、平衡状態ではカリ長石（K-felsper）とコランダム（Corundum）、水（H_2O）などにに分解する。ドミトリーエフらの実験によれば、白雲母は450～650℃で構造水の放出を起こし、850～900℃で格子崩壊を起こすという（Дмитриев 1983）。また、デルター（Doelter）の行った実験では1230～1270℃の融点が測定されている（原田 1957）。ただし、須恵器焼成における窯体内の圧力や個々の須恵器が受ける熱などは、窯体内の各部分で一定でないことと思われ、また胎土中に包含される他の鉱物との接触によってもこのような分解の進む度合いが異なるものと推測される。平衡状態の保たれない不安定な窯体内の環境に、この温度を単純に当てはめて考えることは必ずしも適切ではない。あくまで一つの目安に留めるべきであろう。ここで強いて推測するならば、白雲母の僅かな資料は、一般に1000℃以上と言われる須恵器の焼成温度に近い高温度の被熱環境に置かれた須恵器であり、白雲母が多量にみられる資料は、同じ窯体内でもより熱効率の悪い環境に置かれた須恵器であったと言えるであろう。 ともかく、今回は顕微鏡下で白雲母の状態を調べたことに留まるものであり、須恵器焼成における白雲母の分解温度を確定する為には、今後焼成実験等を行ってゆく必要があるであろう。新治産と言われる須恵器の白雲母含有量には個体差があり、

これを焼成温度との関係で考えようとする一視点を提示したことに、今回の試みの意義が認められるものと考えている。いずれにせよ、これまで白雲母の存在が新治産須恵器の指標とされてきたが、たとえその含有が認められなくとも新治産の可能性を否定できるものではないということを、あらためて認識しなければならない。須恵器の産地推定をするにあたっては、胎土の特徴に注目するばかりでなく、形態的特徴や製作技法などを踏まえて、慎重に検討されることが望まれるのである。

参考文献

柴　正敏　1979　「茨城県，筑波変成岩類層序と変成分帯」『日本岩石鉱物鉱床学会誌』第74巻　第9号
日本岩石鉱物鉱床学会

原田準平　1957　『鉱物概論』　岩波書店

W.G.アーンスト著・牛来正夫訳　1970　『鉱物・岩石学入門』　共立出版

C.klein ・ C.S.Hurlbut,Jr.　1985　MANUAL OF MINERALOGY (after JAMES D.DANA)
JOHN WILEY&SONS,INC. NewYork

А.Л.Дмитриев 他著・島田荘平訳　1983　『高温下の岩石物性』　内田老鶴圃

第5節　調査のまとめ

今回の土浦市営今泉霊園拡張工事事業地内では栗山窯が発掘調査され、土浦市内では初めての古代の須恵器窯跡の調査となった。新治須恵器窯跡群の中でも実際発掘調査が実施されたものは少なく、現在のところ高井悌三郎が中心となって進められた小野窯と一丁田窯のみである。新治須恵器窯跡群は、従来から関東東部地域における須恵器生産の一大産地と考えられているわりには、その実態がつかめていないのが実情である。

栗山窯の調査結果は、窯体1基と灰原1ヶ所が確認された。窯跡は台地斜面をトンネル状に刳り貫いた地下式の窖窯と考えられ、煙道部と焚口部分が壊されていた。灰原は現状の水田面下に遺物の濃密な散布状況として存在した。

遺物は窯体と灰原の両方から出土している。窯体内火床部には褐色土層とその下に灰オリーブ色粘砂土層が存在し、焼台として再利用された遺物も存在することから、最低限2段階の操業過程が想定される。これらの操業過程の可能性を補完するものとして、灰原の遺物出土状況があげられる。窯体の延長線上の低地部分に遺物が上層と下層の大きく2層に密集して出土した。上層出土の遺物と下層出土の遺物の比較において、明瞭な差異は確認されず、時期差を示すものではないと考えられる。

本窯体及び灰原から出土した遺物は須恵器坏が最も多く、次いで蓋が出土している。坏は概ね3法量の大きさに分けら、大多数は15.5～17.5cmのものである。特徴としては口縁部の内側に一条の沈線が巡るものが6割近く存在し、この特徴が他地域との関連を推測しするための手段となるかも知れない。底部調整については7割が回転篦削りであった。

蓋は口径は15.5～18cmのものが多くを占め、坏の法量と付合した状況が見られた。出土した蓋の口縁部すべてにかえりが付き、つまみの形状は宝珠形もしくは、中央部分が突出するボタン状を呈する。

この他、高台坏・高坏・甕・円面硯などが出土している。遺物はその特徴から7世紀末葉のものと考えられる。本窯跡は現在のところ、新治窯跡群の中でも最も古い時期の須恵器窯跡といえる。

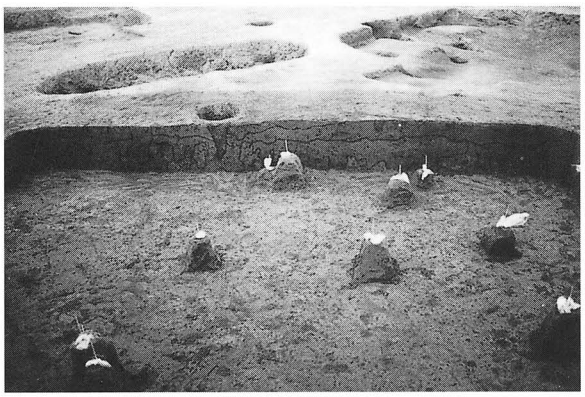
一般的に新治産須恵器の特徴として、胎土中にに銀雲母が多く含まれることが特徴として取りざたされてきた。しかしながら栗山窯跡出土須恵器の観察結果では、雲母が目立たないものも含まれていることが判明した。先の特徴は一面的なものであり新治産須恵器のすべてに当てはまらないことが明らかとなった。この雲母が目立つか目立たないかは、焼成時の温度などが関連しているようである。

また注目すべきは、市内の永国町に所在する寺家ノ後遺跡では、栗山窯跡出土遺物の年代よりさかのぼる在地産須恵器が終末期古墳から出土している。これは長頸壺で胎土の状況から新治窯跡群内で生産されたものと考えられている。このような資料の存在は、栗山窯跡よりも古い創業年代の窯跡が存在することを想起さ、生産地ではなく消費地出土の遺物についても関連付けて検討する余地があろう。

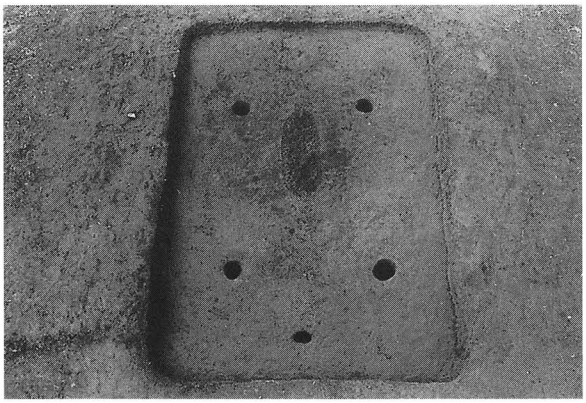
根鹿北遺跡・根鹿北遺跡低湿地部分・栗山窯跡航空写真

PL 2

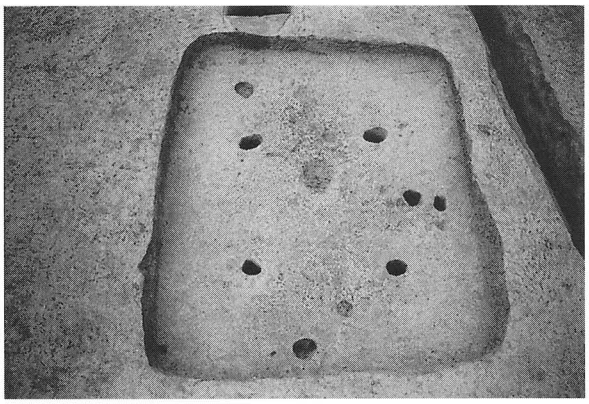
基本層序



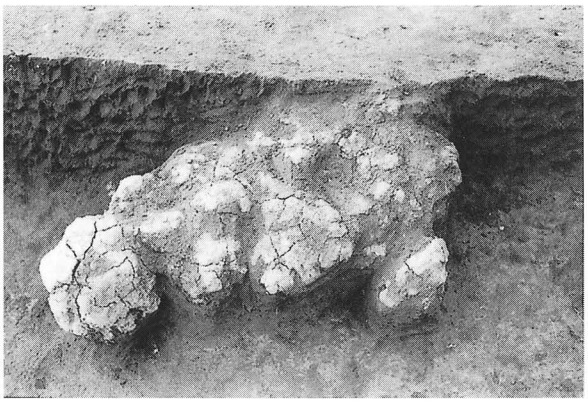
旧石器時代遺物出土状況



第 1 号住居跡

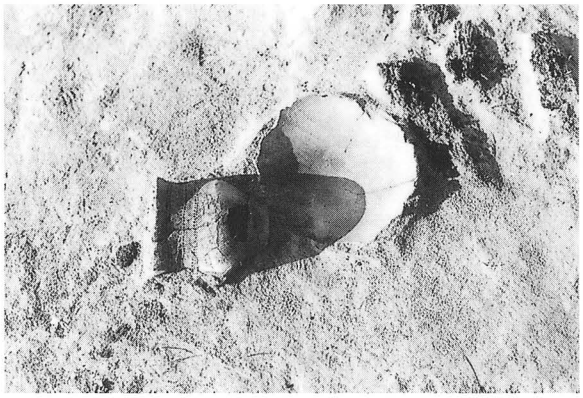


第 2 号住居跡

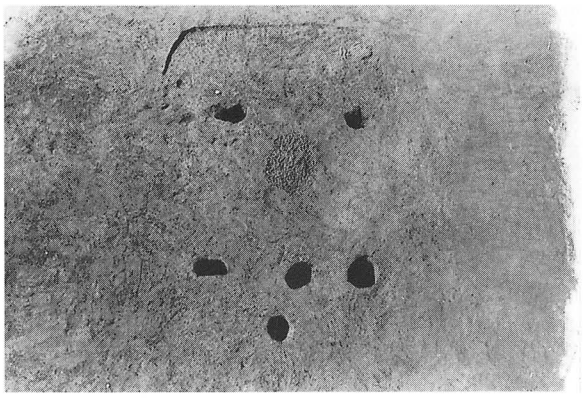


同粘土出土状況

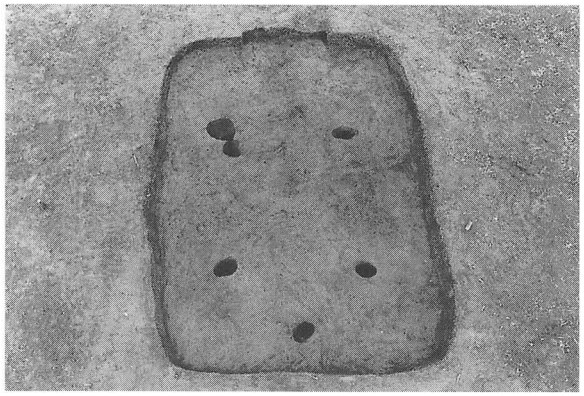
第 3 号住居跡



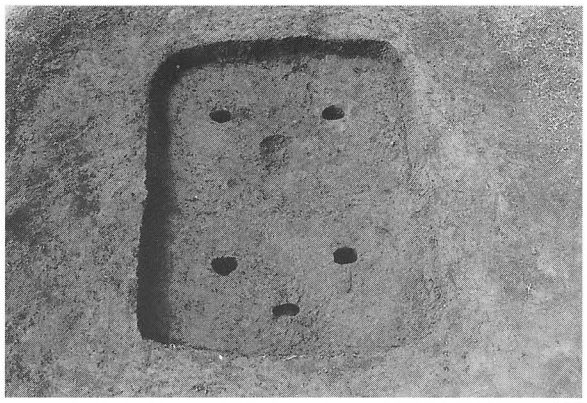
同遺物出土状況



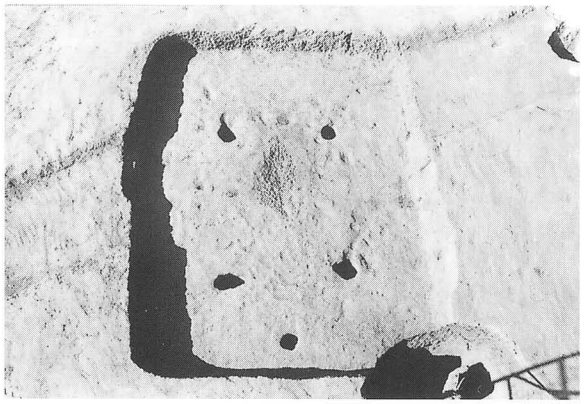
第 4 号住居跡



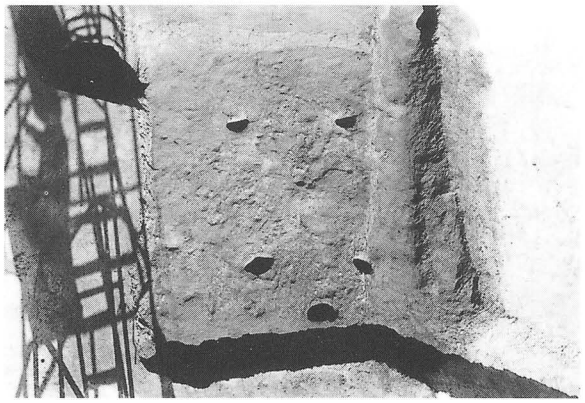
第５号住居跡



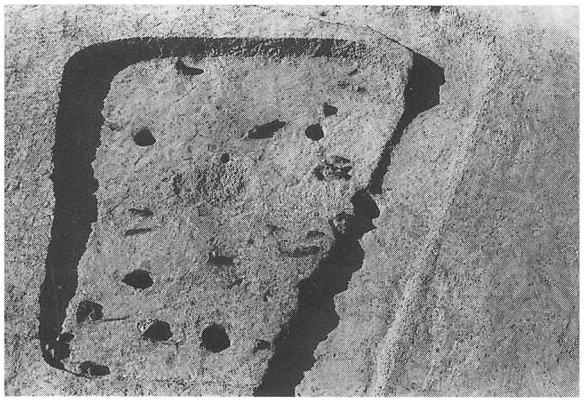
第６号住居跡



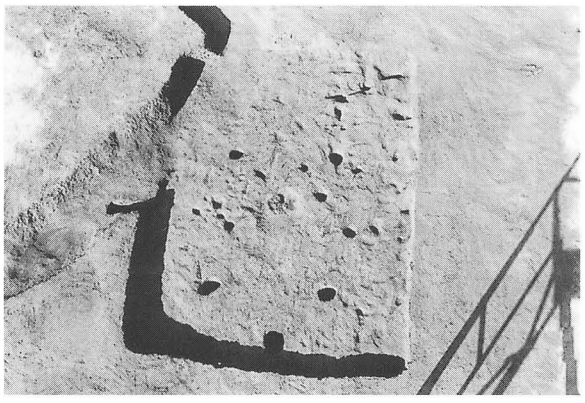
第７号住居跡



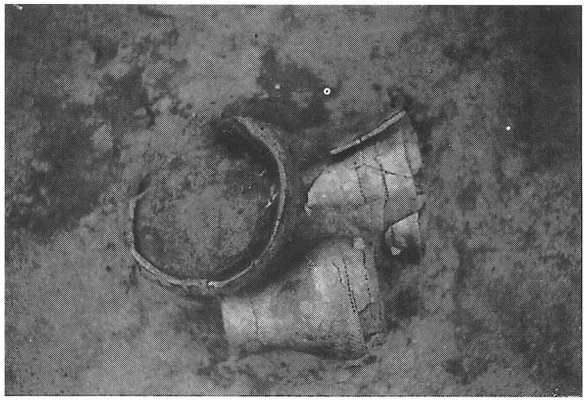
第８号住居跡



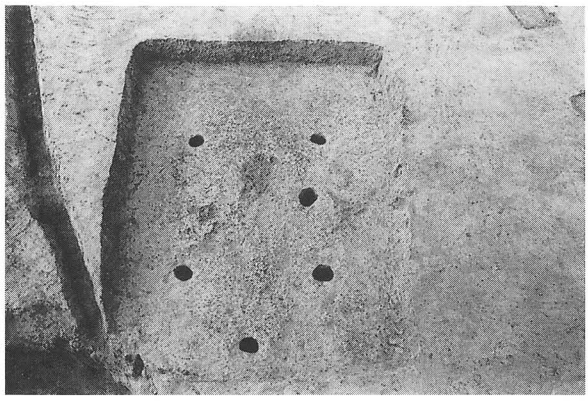
第９号住居跡



第10号住居跡

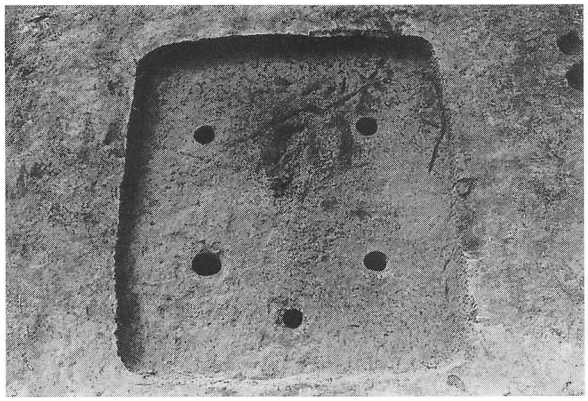


同遺物出土状況

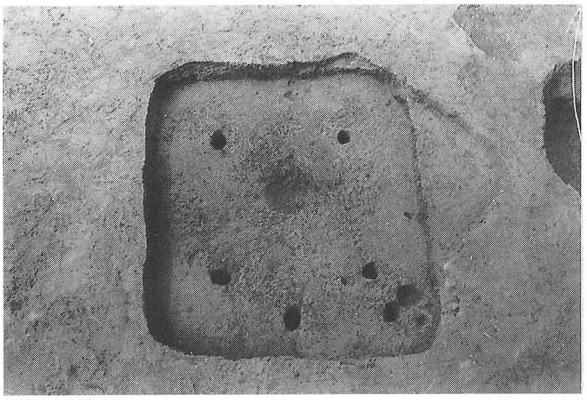


第11号住居跡

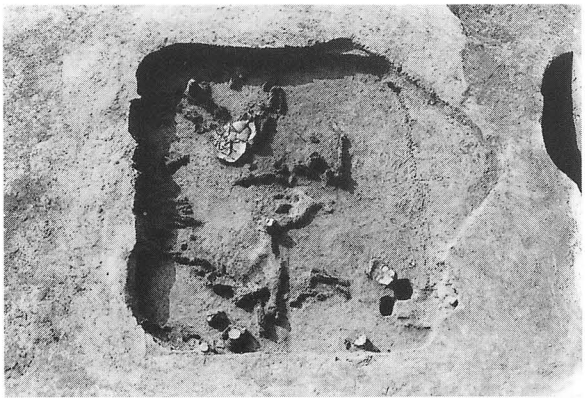
PL 4



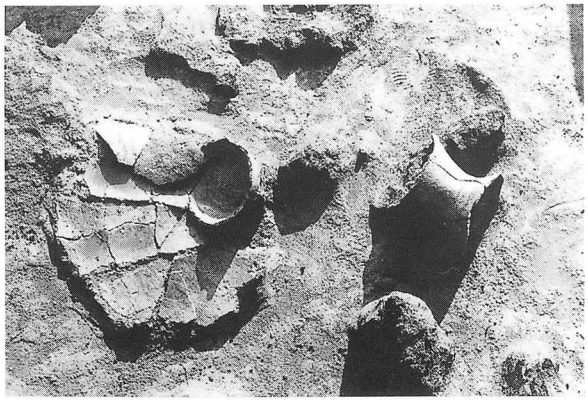
第12号住居跡



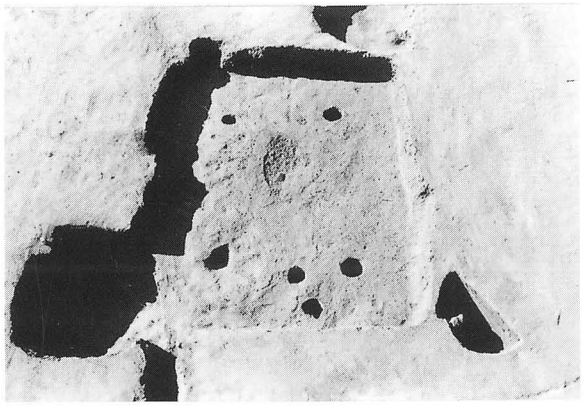
第13号住居跡



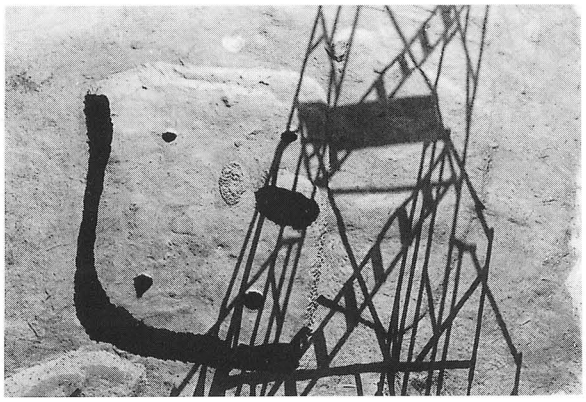
同炭化物出土状況



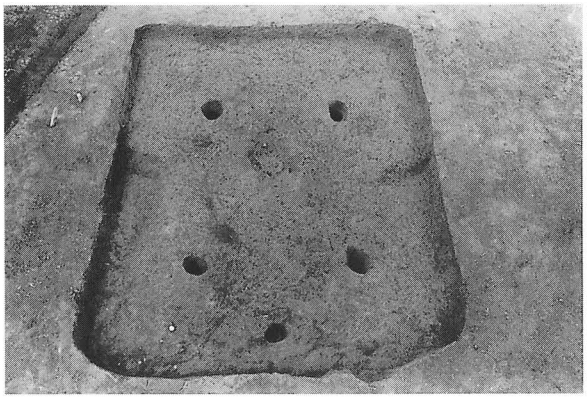
第14号住居跡出土遺物



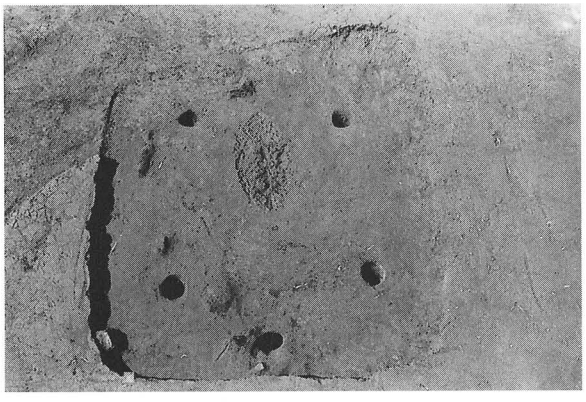
第14号住居跡



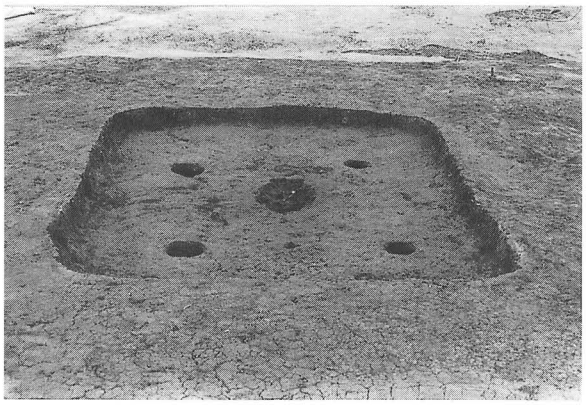
第15号住居跡



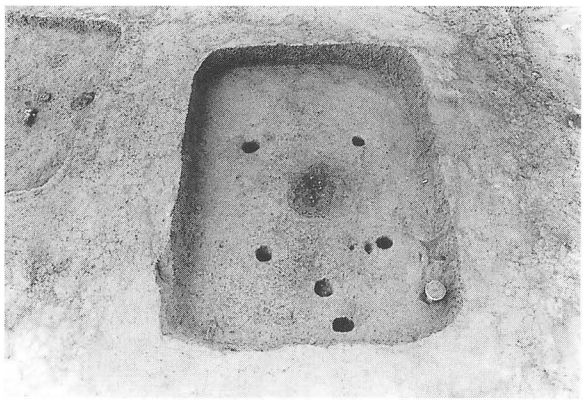
第16号住居跡



第17号住居跡

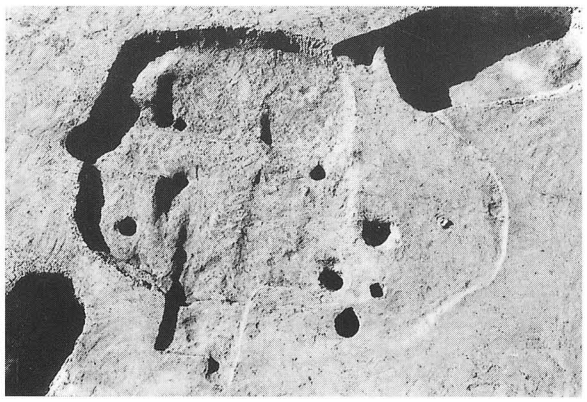


第18号住居跡

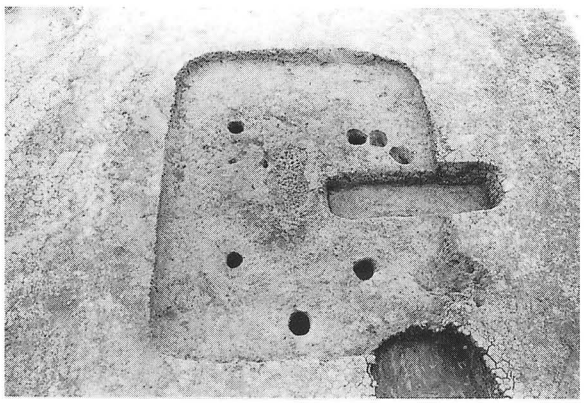


第19号住居跡

同遺物出土状況

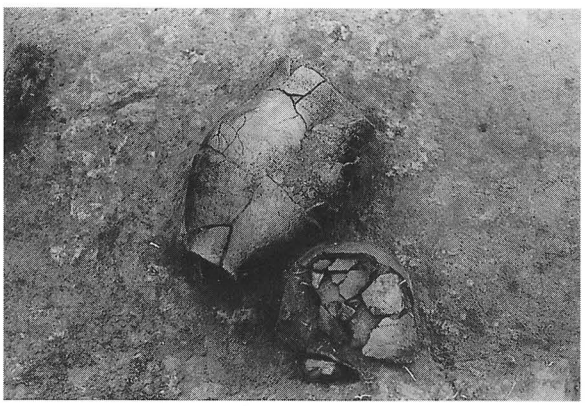


第20号住居跡

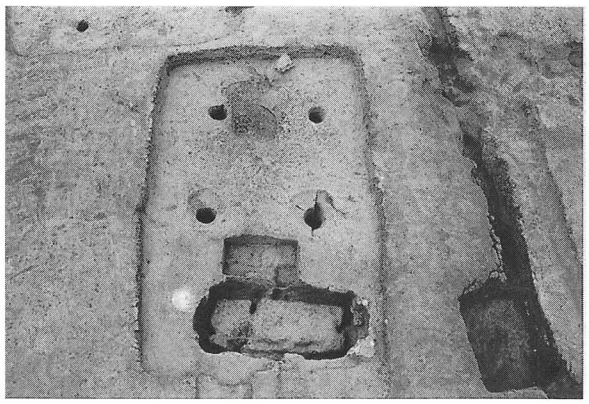


第21号住居跡

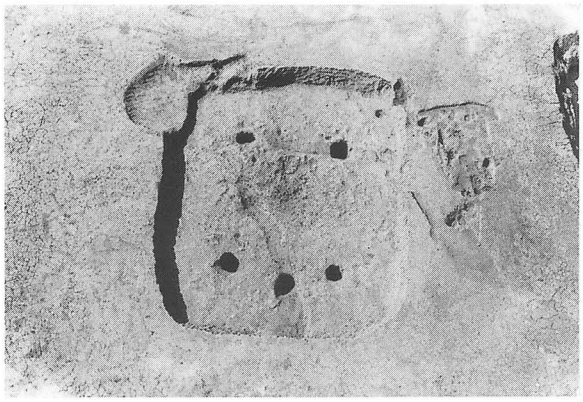
第22.33.34号住居跡



第22号住居跡、遺物出土状況

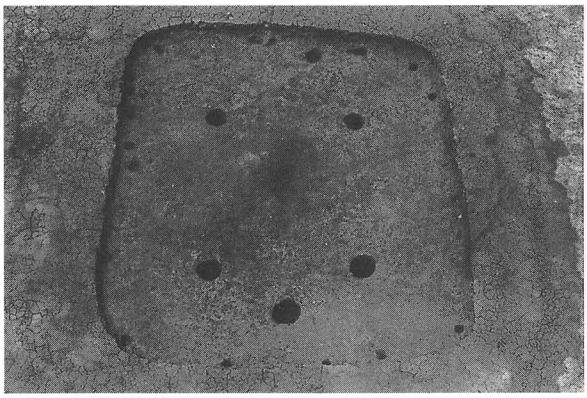


第23号住居跡

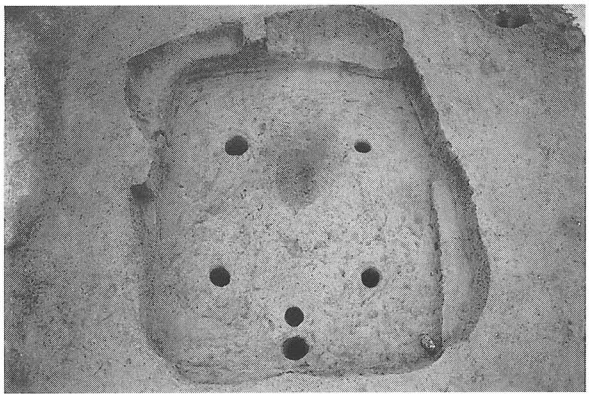


第24号住居跡

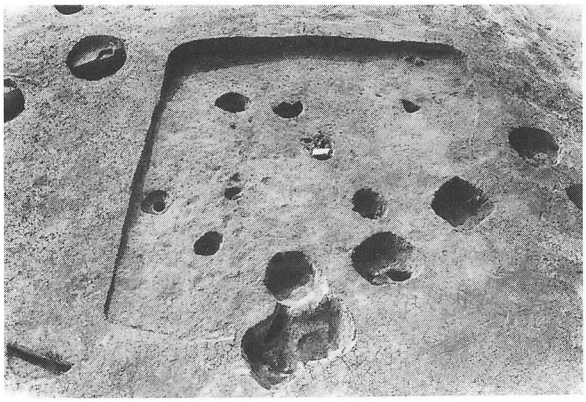
同遺物出土状況



第25号住居跡

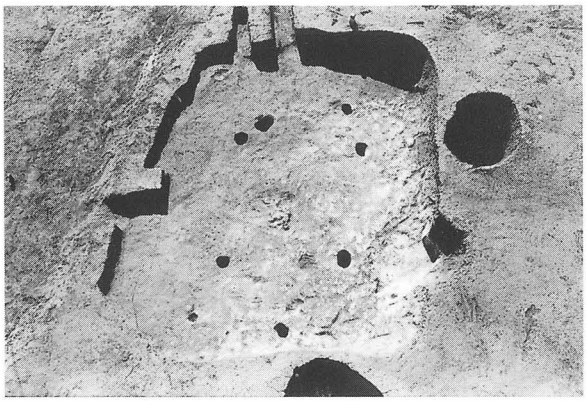


第26号住居跡

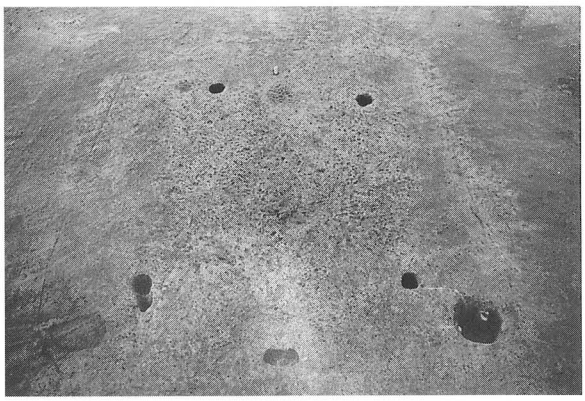


第27号住居跡

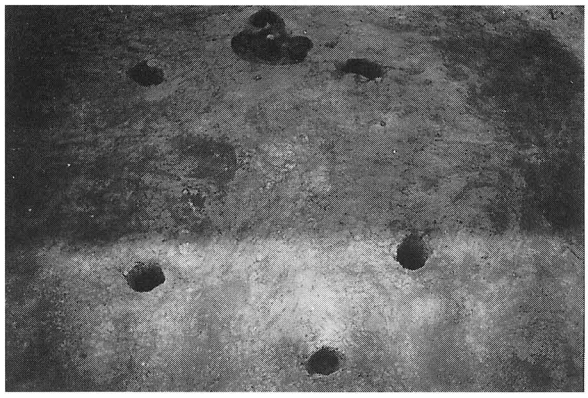
同炉石出土状況



第28号住居跡

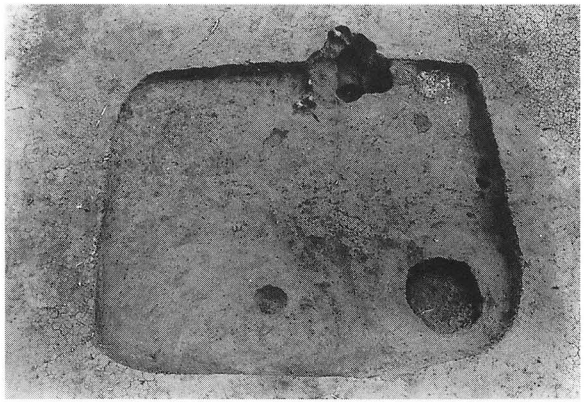


第29号住居跡

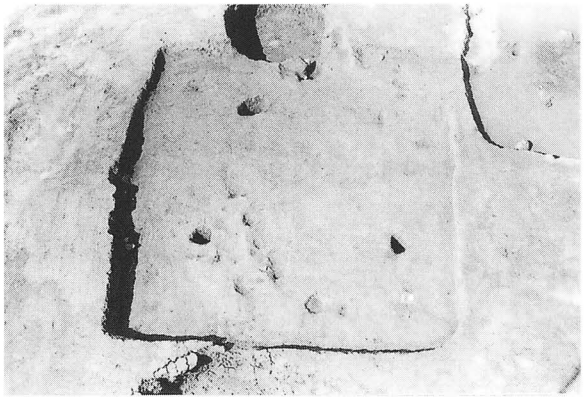


第30号住居跡

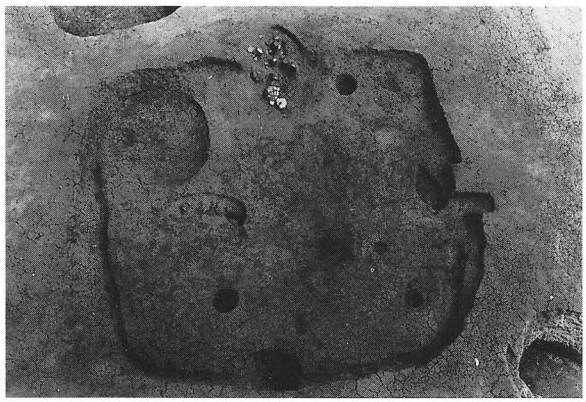
同カマド遺物出土状況



第31号住居跡

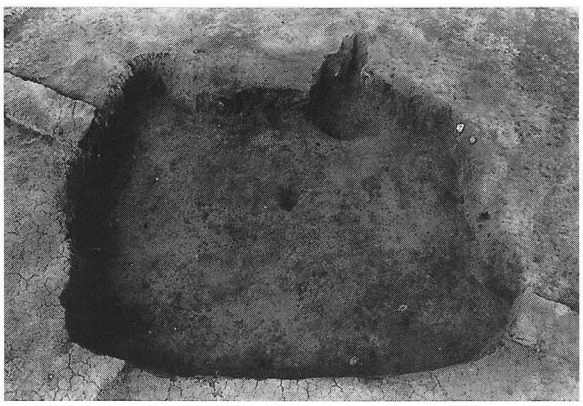


第33号住居跡



第35号住居跡

同カマド遺物出土状況



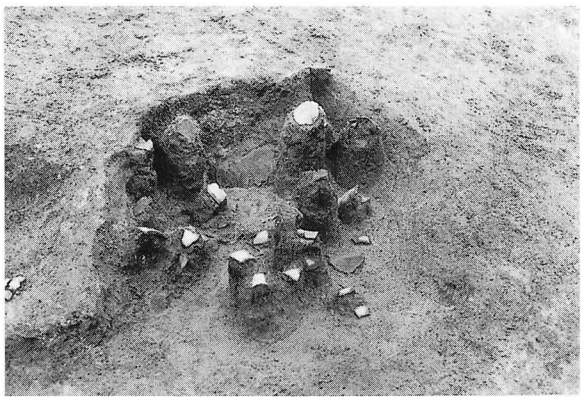
第36号住居跡

同カマド遺物出土状況

PL 8

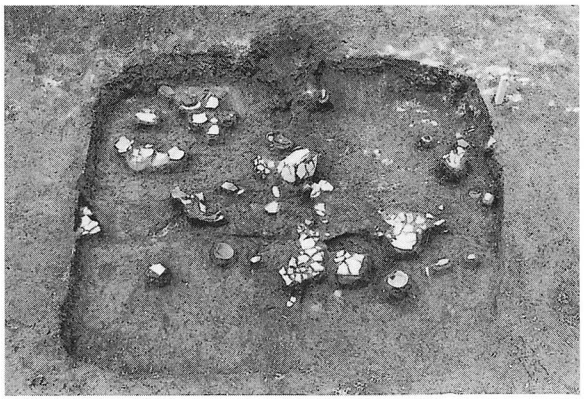
第37号住居跡

第38号住居跡

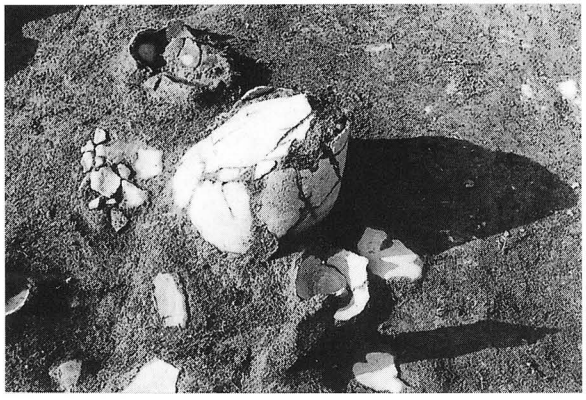


同カマド遺物出土状況

第39号住居跡



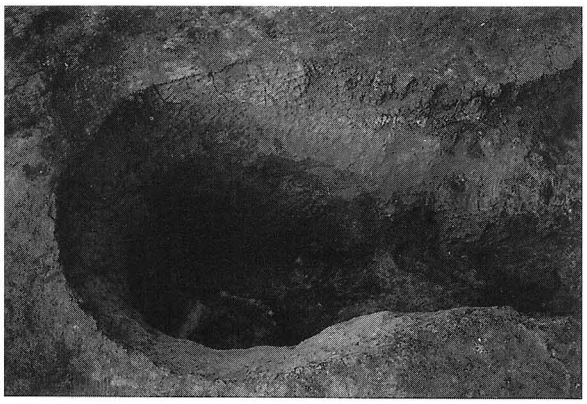
同遺物出土状況



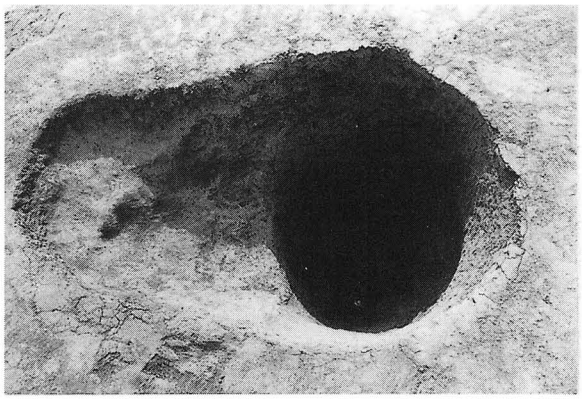
同遺物出土状況

第２号土坑遺物出土状況

第３号土坑土層堆積状況



第５号土坑

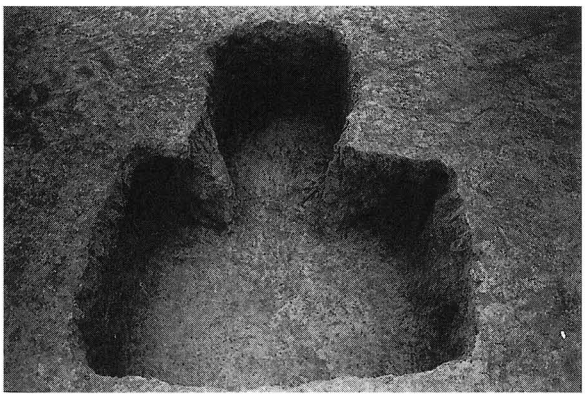


第７号土坑

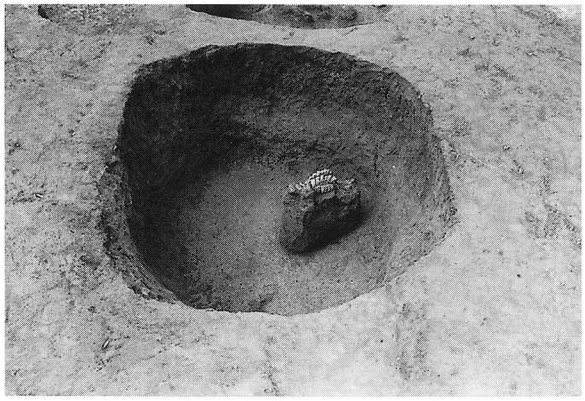
第９号土坑

第11号土坑

同土層堆積状況



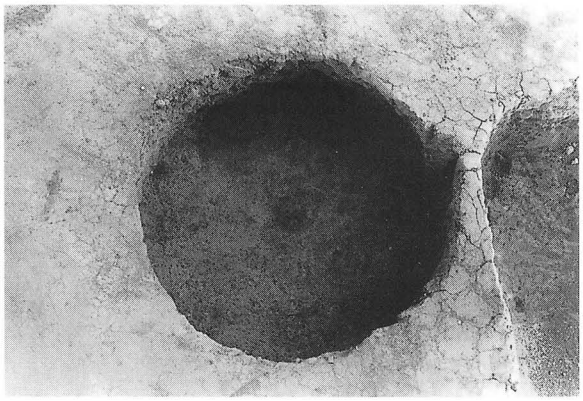
第17号土坑



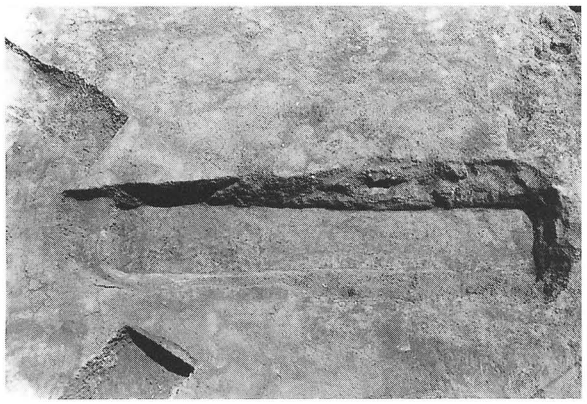
第21号土坑

同遺物出土状況

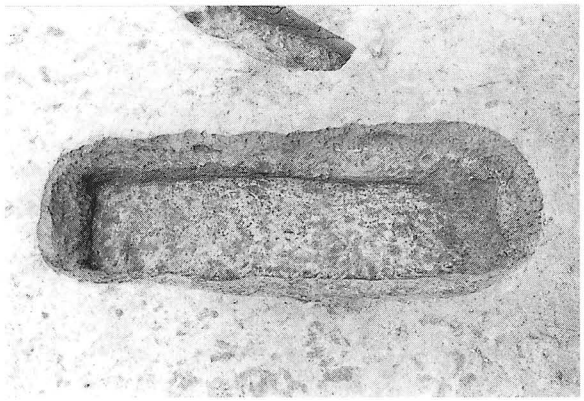
PL 10



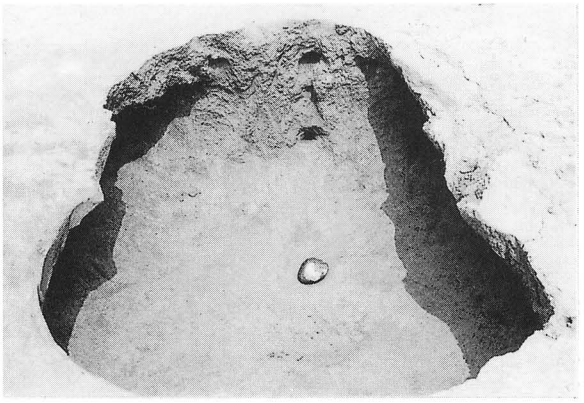
第27号土坑



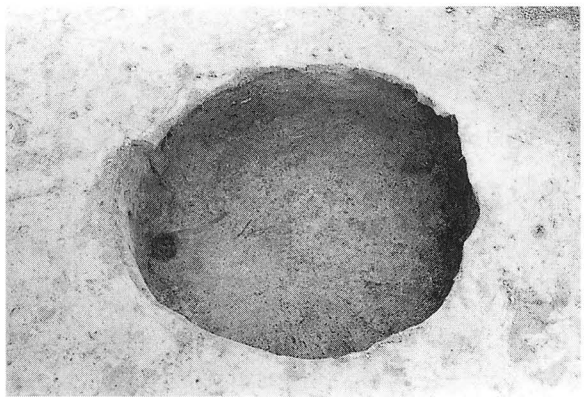
第31号土坑



第35号土坑

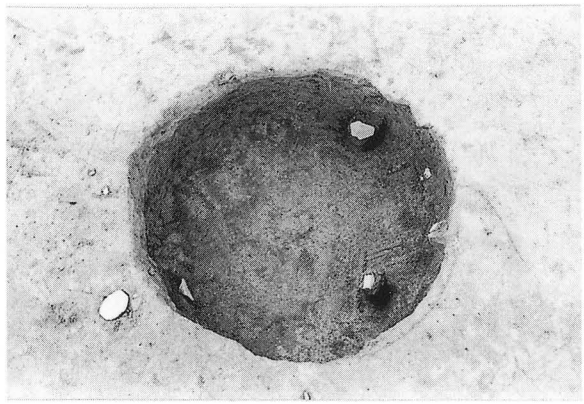


第37.38号土坑

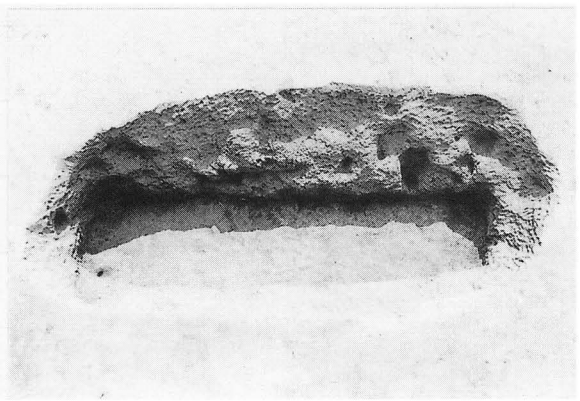


第44号土坑

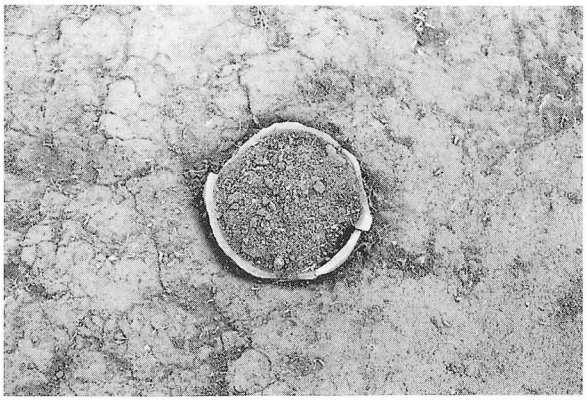
第45号土坑



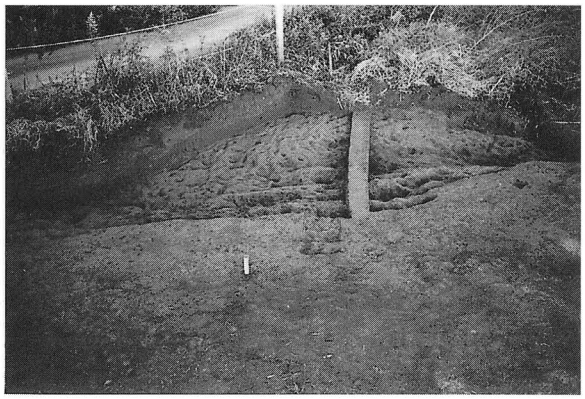
第47号土坑



第50号土坑



第62号土坑（火葬墓）

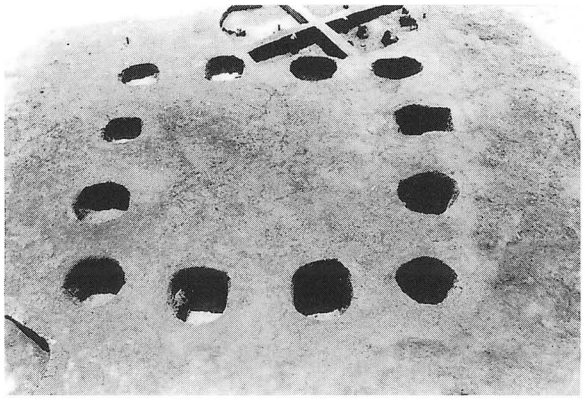


第１号溝

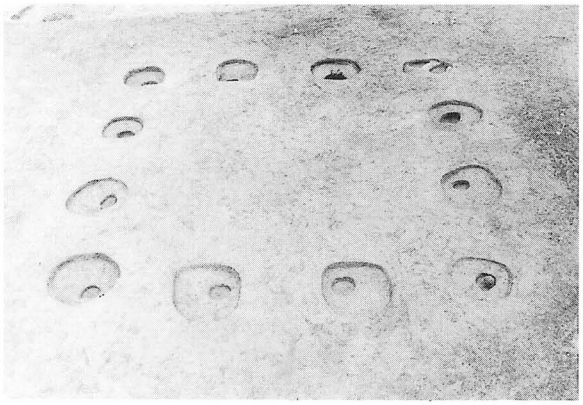
第３号溝

第５号溝

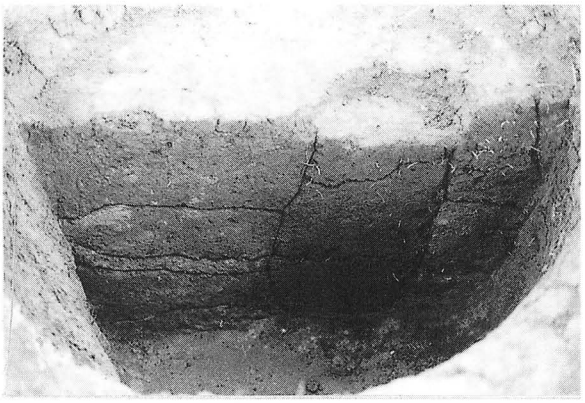
第１号掘立柱建物跡



第２号掘立柱建物跡



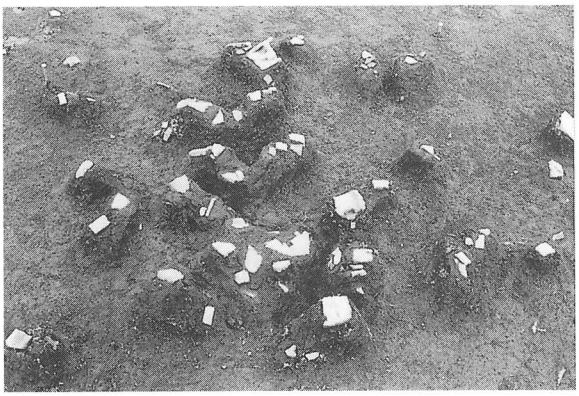
同柱痕検出状況



同柱痕

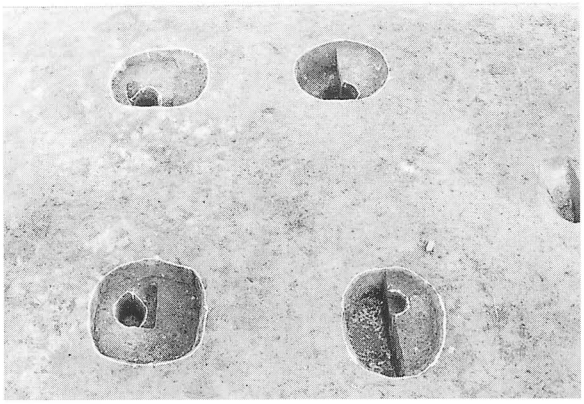
PL 12

第２号掘立柱建物跡根石検出状況



同瓦塔・瓦堂出土状況

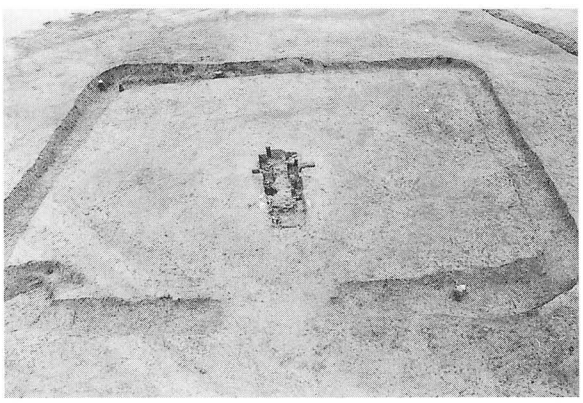
第３、４号掘立柱建物跡



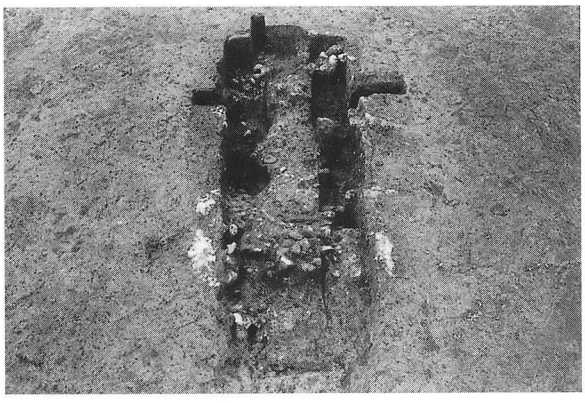
第４号掘立柱建物跡

粘土採掘坑土層堆積状況

同遺物出土状況



第１号古墳

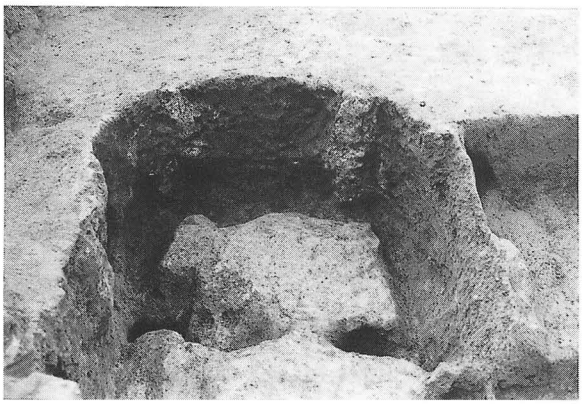


同主体部

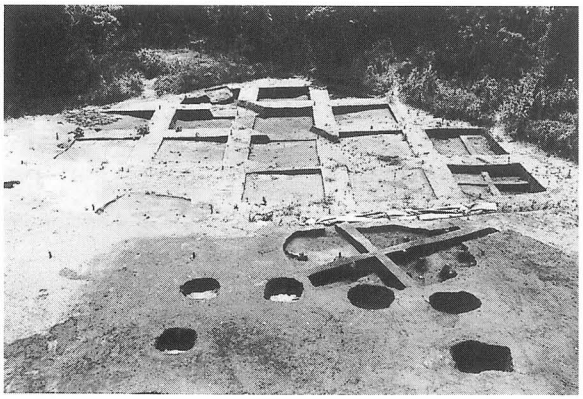
第２号古墳

同　主体部

第３号古墳



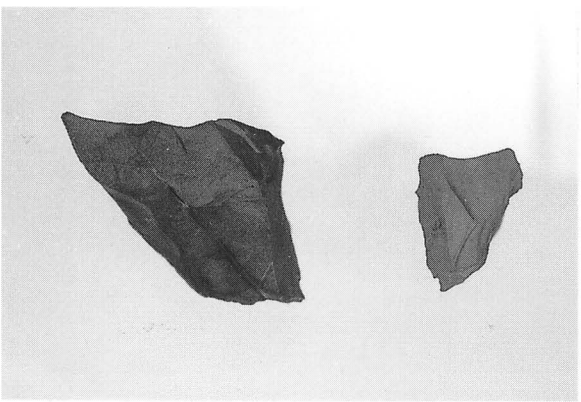
同　粘土出土状況



南西埋没谷調査状況

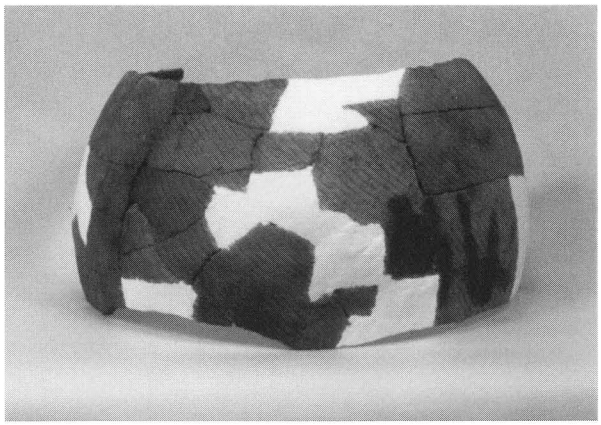
北西埋没谷調査状況

根鹿北遺跡低湿地部分土層堆積状況

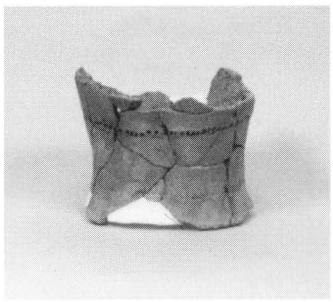


旧石器時代出土遺物

PL 14

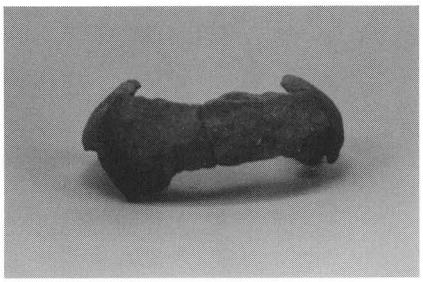


1－1



2－2

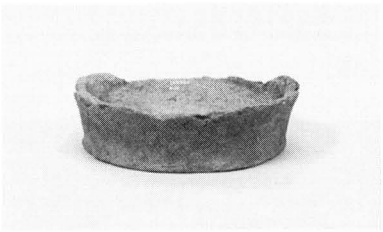
2－9



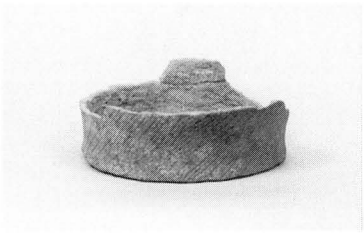
2－13

3－2

3－1



5－3



5－4

5－1

6－1

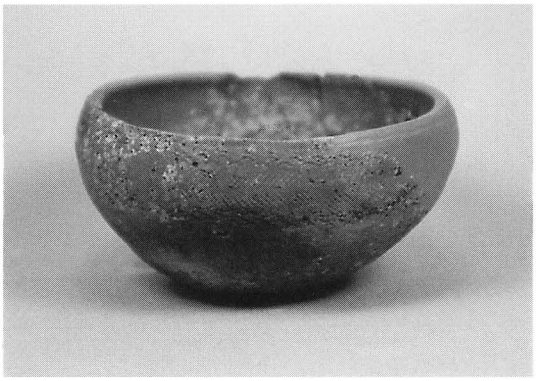
6－2

第１、２、３、４、５、６号住居跡出土遺物

6－5

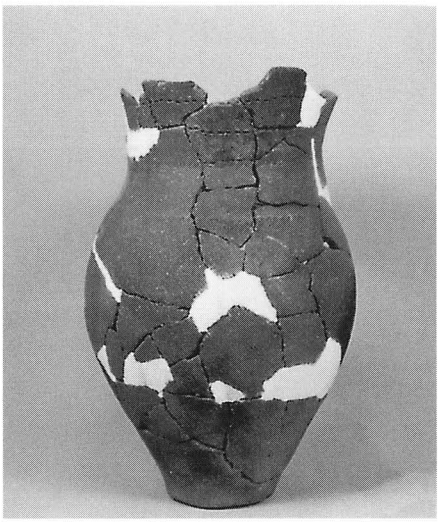
7－1

6－10



8－2

8－1



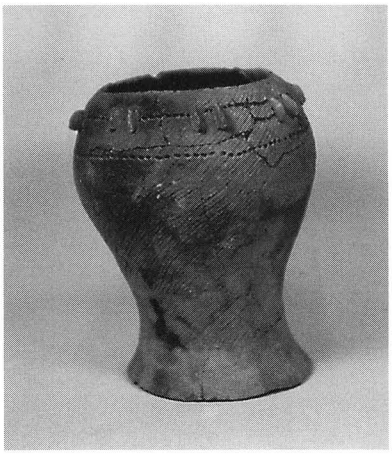
10－1

9－4

9－5

第6、7、8、9、10号住居跡出土遺物

P L 16



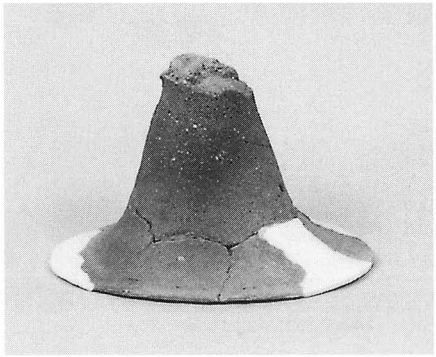
10－2

10－3

11－2

10－5

13－1



11－8

13－3

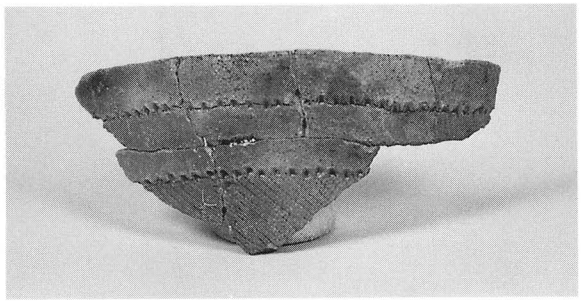
11－7

第10、11、13号住居跡出土遺物

13－4

13－7

14－2



16－1

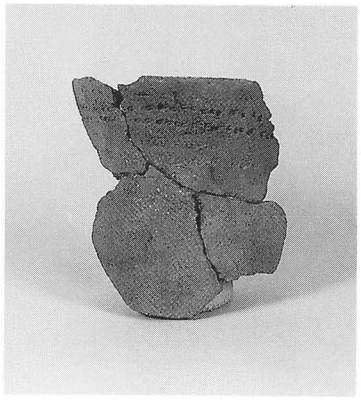
18－12

18－2

19－1

第13、14、16、18、19号住居跡出土遺物

PL 18



19－2

21－4

21－1

19－6

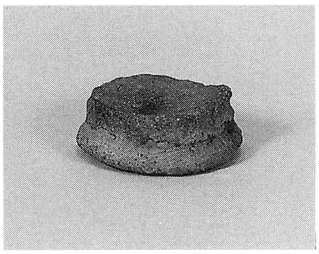
22－3

22－2

22－1

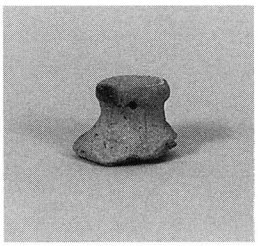
22－4

第19、21、22号住居跡出土遺物

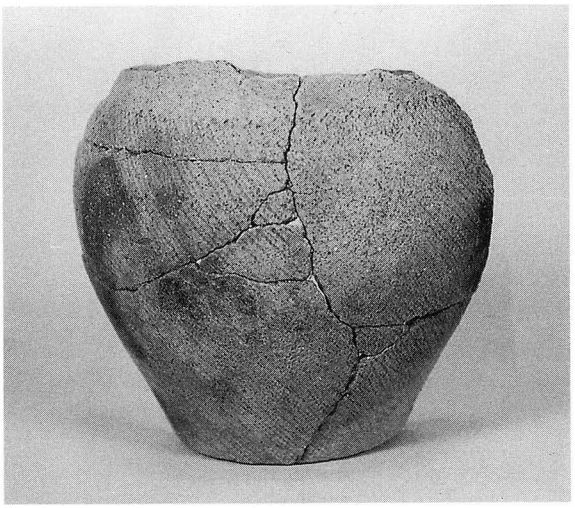


23－2

24－1



24－3



25－2

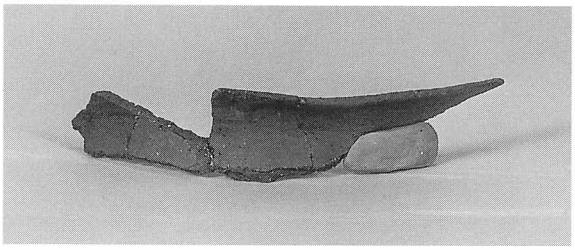
25－1

27－1

28－1

第23、24、25、27、28号住居跡出土遺物

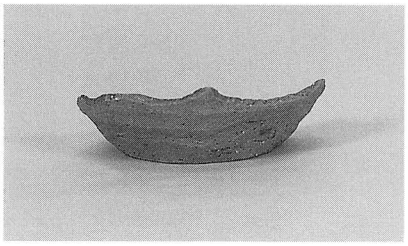
P L 20



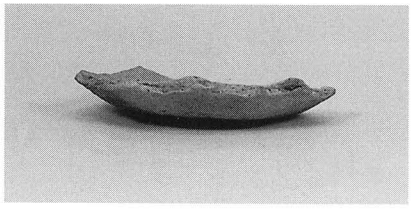
29－1

29－3

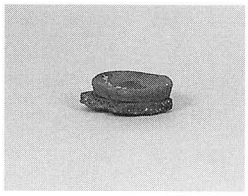
30－3



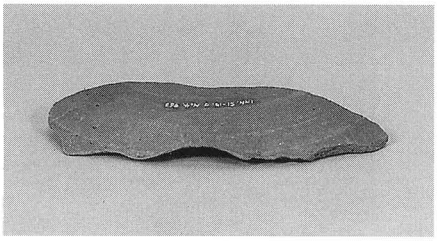
30－1



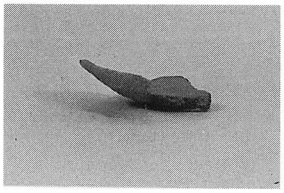
31－2



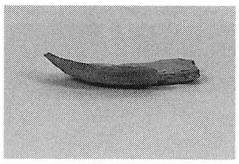
31－4



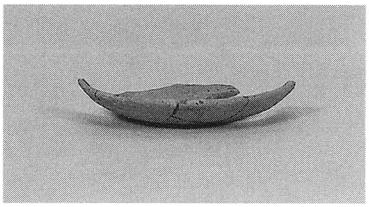
30－2



31－10

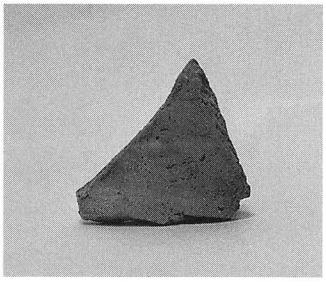


31－12



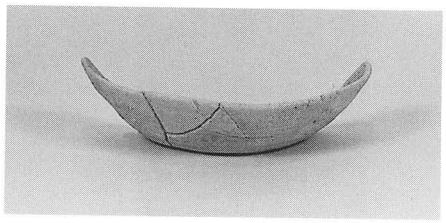
31－9

31－1

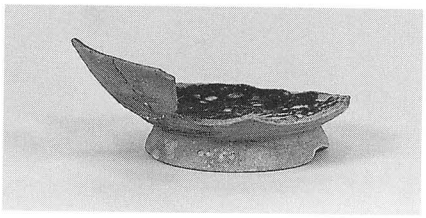


31－6

第29、30、31号住居跡出土遺物

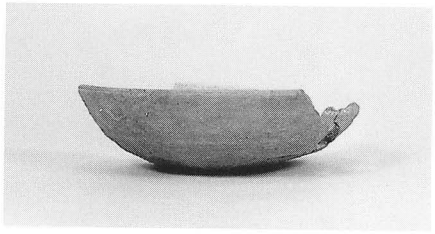


32－1

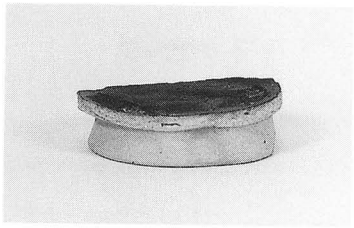


32－2

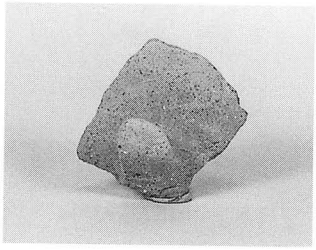
33－1



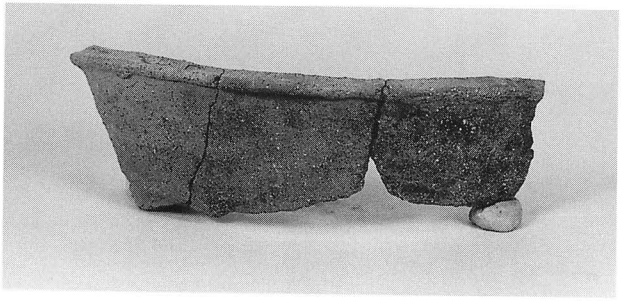
33－2



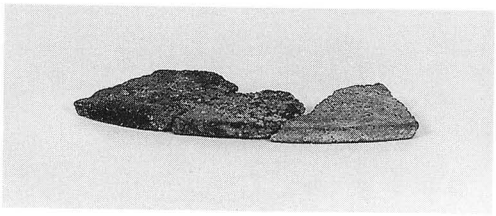
33－4



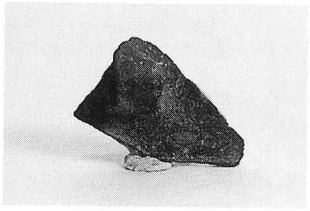
33－7



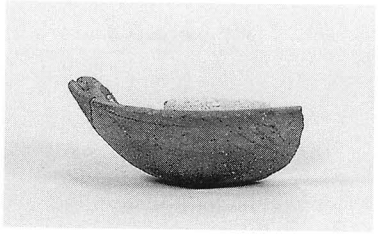
33－12



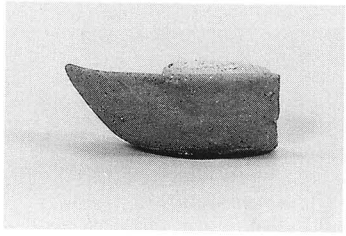
33－10



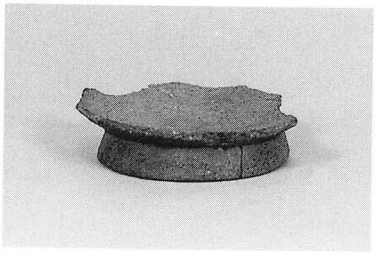
34－2



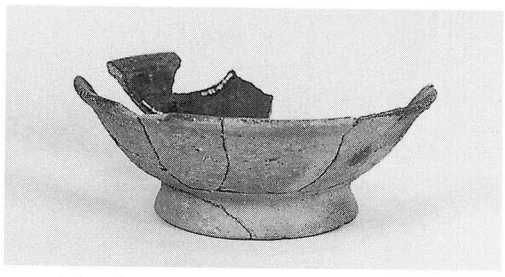
35－1



35－2



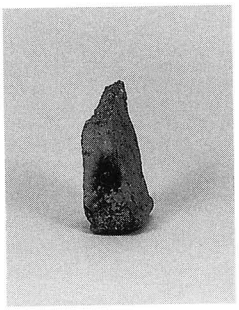
35－6



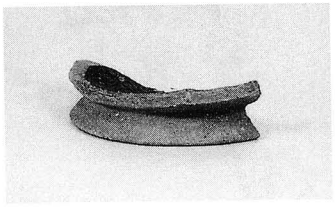
35－4

第32、33、34、35号住居跡出土遺物

35－7



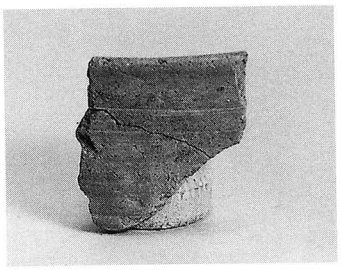
35－11



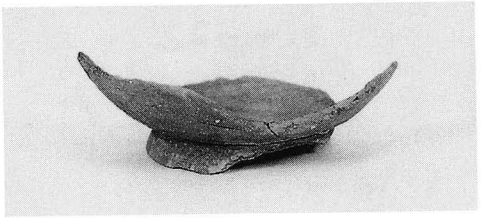
35－5

35－15

35－12



35－10



36－8

36－7

36－1

36－2

第35、36号住居跡出土遺物

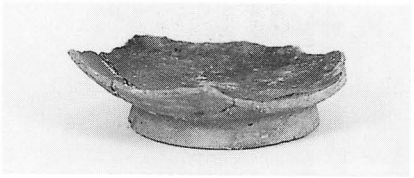
36－3

36－5

36－6

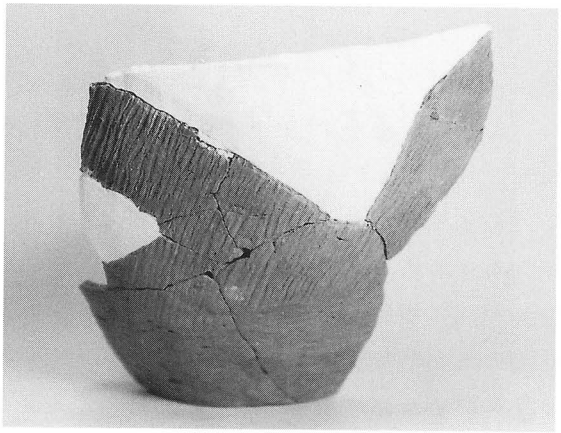
36－11

36－10



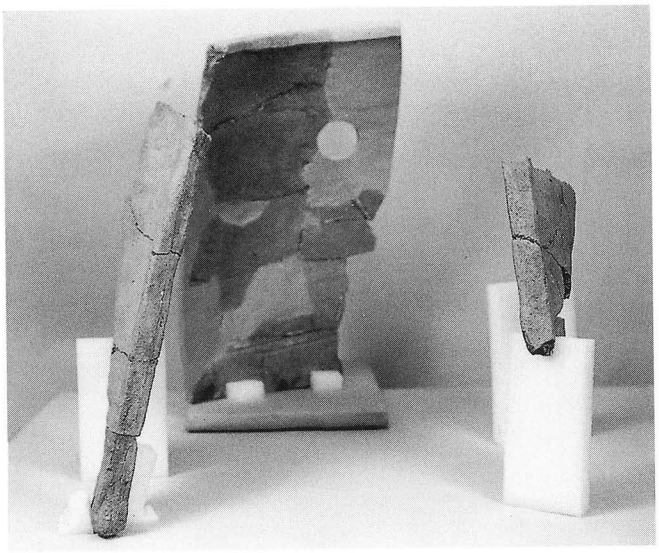
37－1

37－2

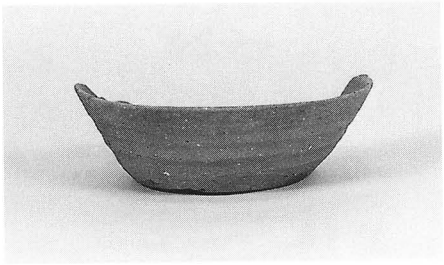


37－6

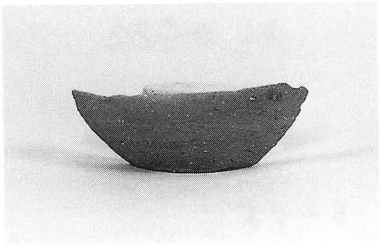
第36、37号住居跡出土遺物



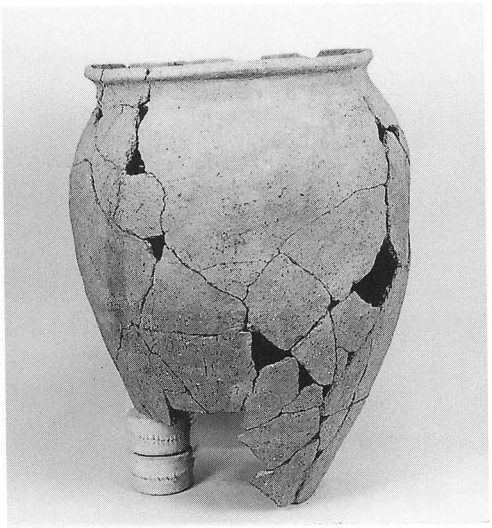
37—8



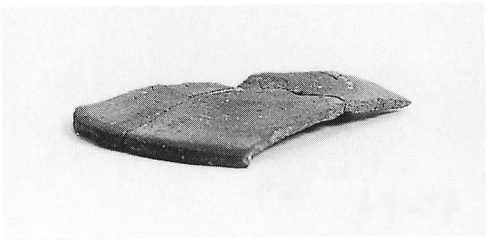
39— 1



39— 2



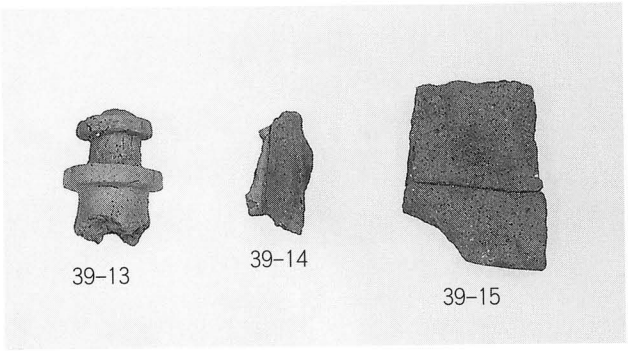
39—12



39— 7

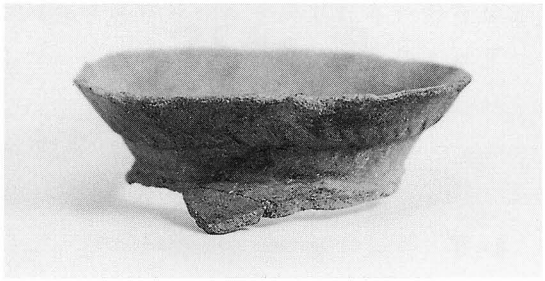
39— 5

39— 8

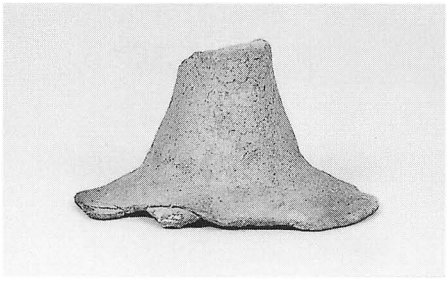


第37、39号住居跡出土遺物

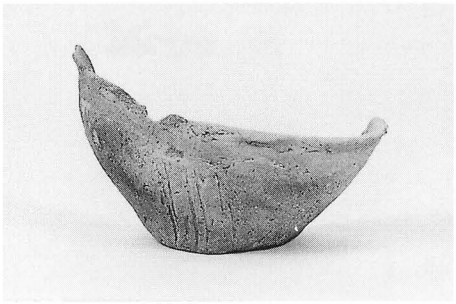
2－1



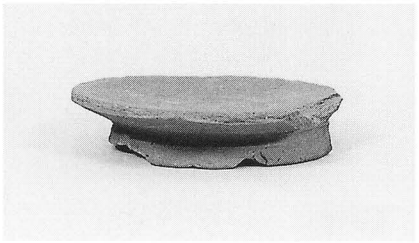
3－1



3－6

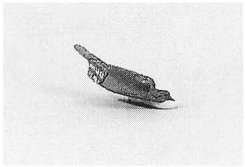


3－4



3－12

3－8



4－2

4－3

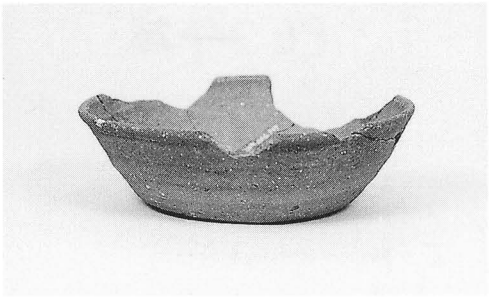
5－2

第2、3、4、5土坑出土遺物

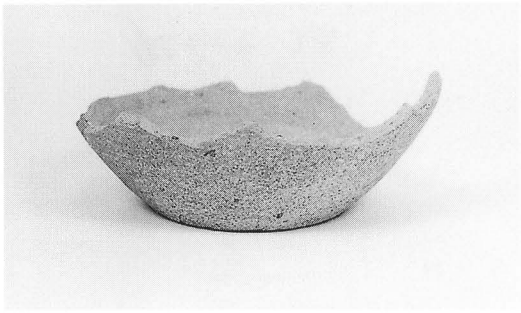
PL 26

11－1

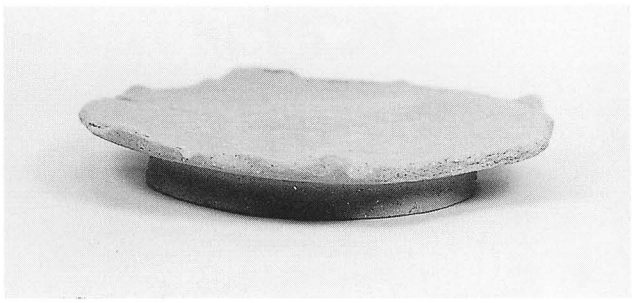
11－4



11－2

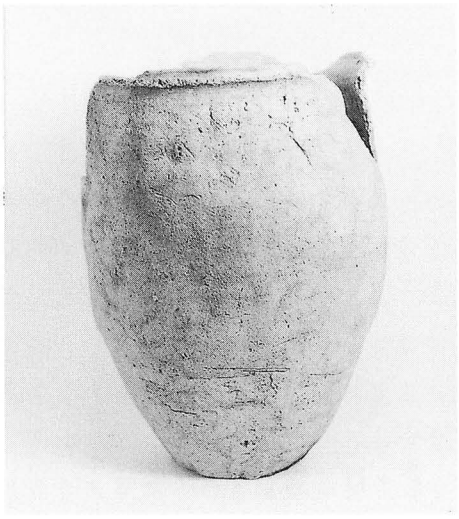


11－7



11－6

11－8

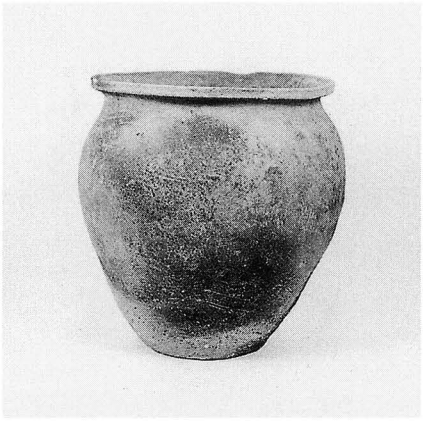


11－9

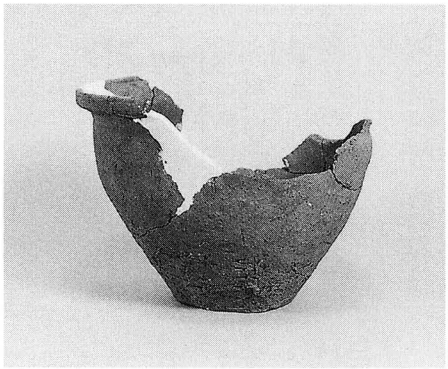
11－18

第11号土坑出土遺物

11－17

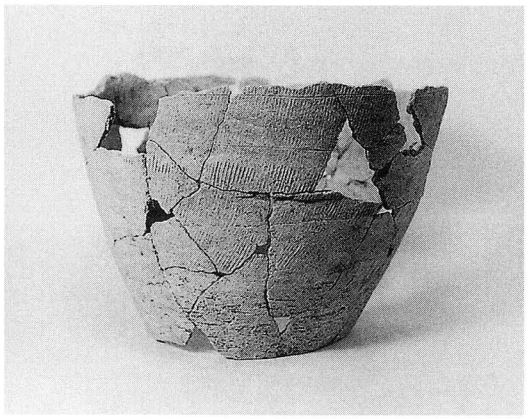


11－10



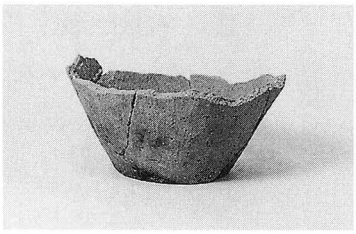
11－15

11－16



11－19

24



62

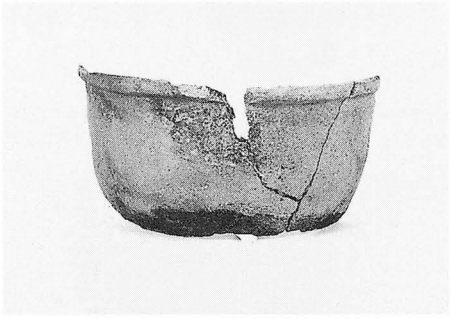
55

第11、24、55、62号土坑出土遺物

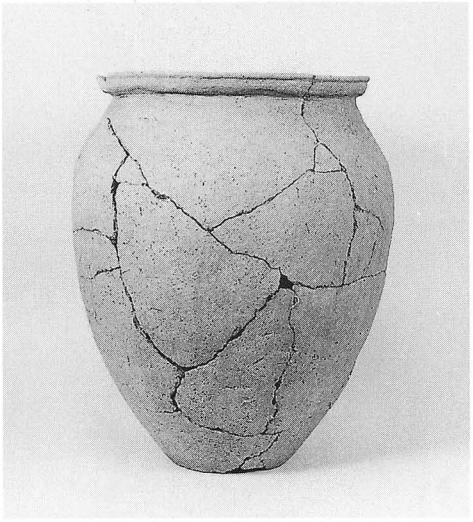
PL 28

5

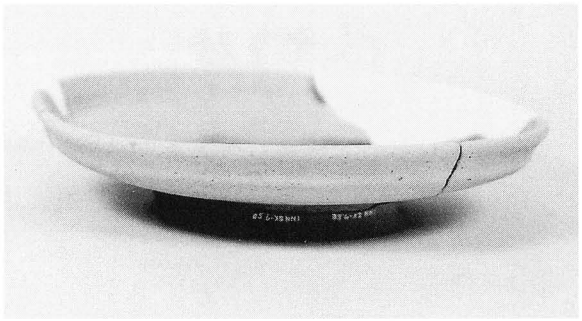
4



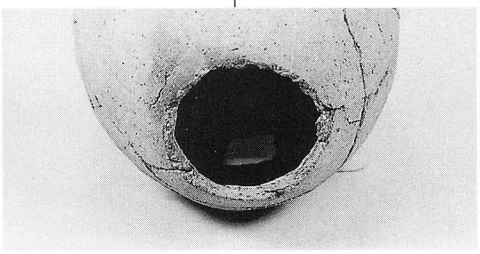
15



19



6



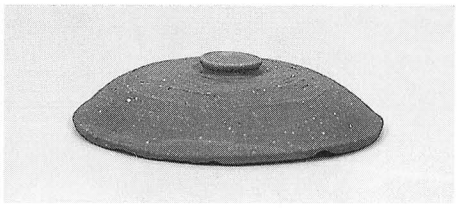
19　底部

17

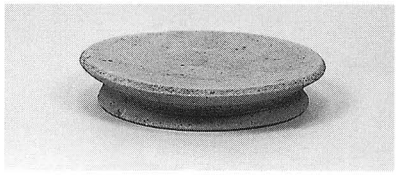
17　ヘラ書き「本」

粘土採掘坑出土遺物

北西埋没谷５

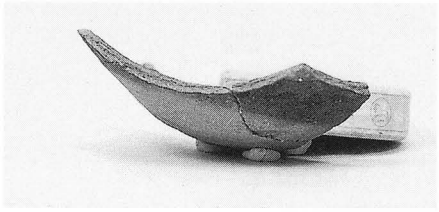


北西埋没谷７

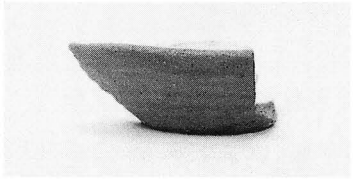


北西埋没谷５

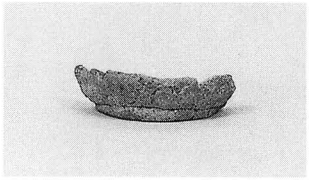
北西埋没谷17



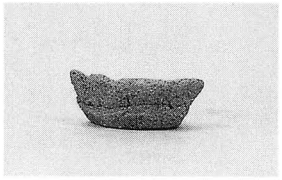
南西埋没谷４



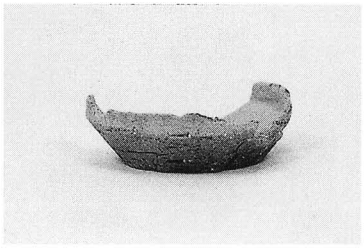
南西埋没谷３



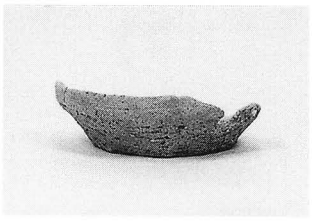
南西埋没谷13



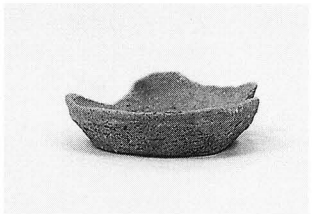
南西埋没谷12



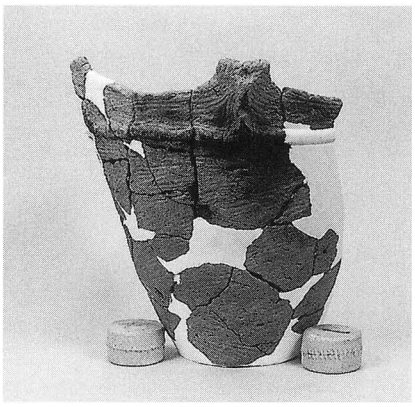
南西埋没谷６



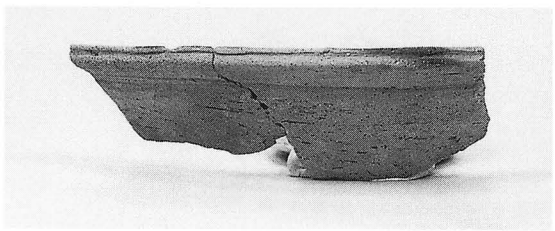
南西埋没谷10



南西埋没谷９

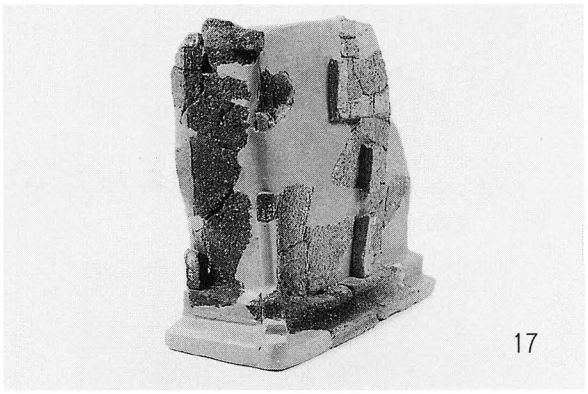


遺構外縄文土器１

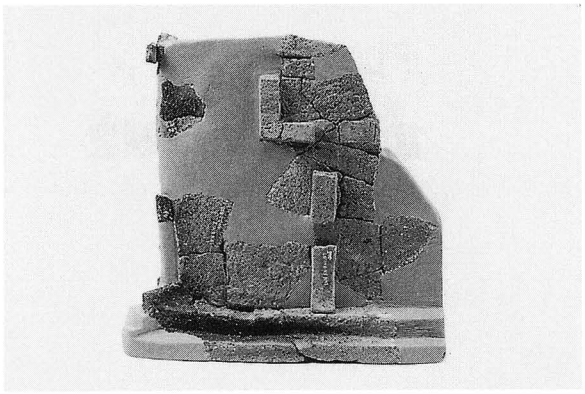


南西埋没谷20

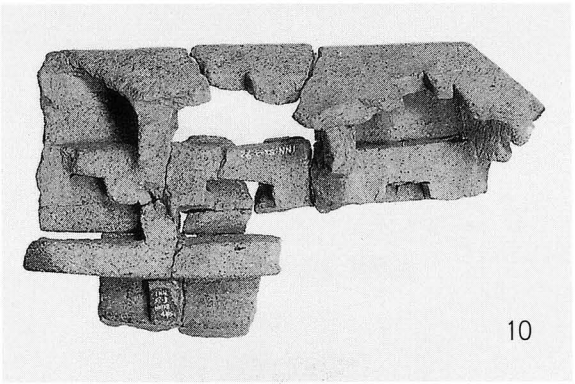
北西埋没谷、南西埋没谷、遺構外出土遺物



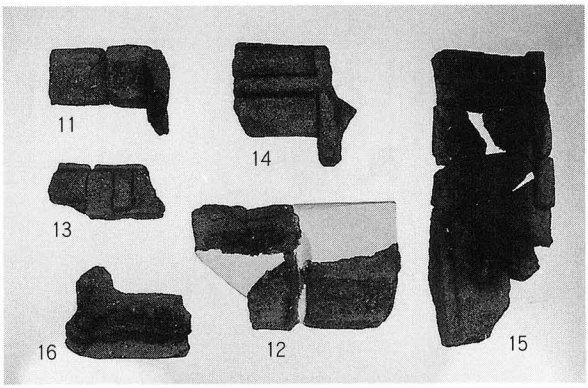
第２号掘立柱建物跡出土瓦堂



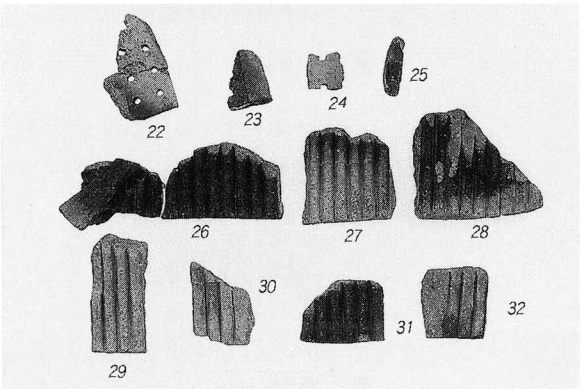
同側面



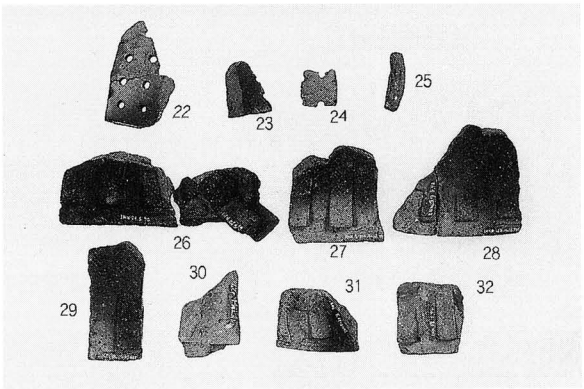
第２号掘立柱建物跡出土瓦塔



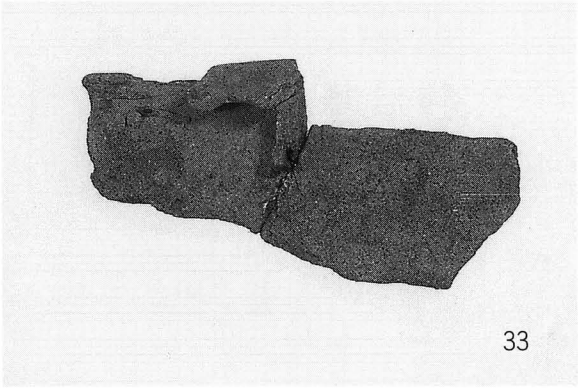
第２号掘立柱建物跡



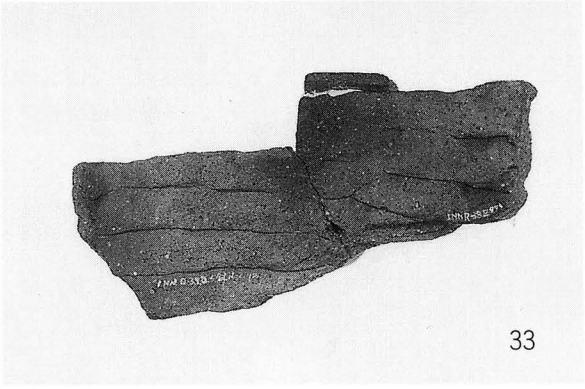
南西埋没谷（表）



同（裏）

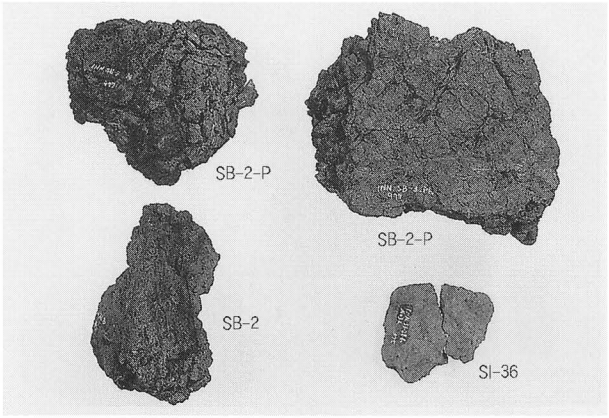


南西埋没谷（表）

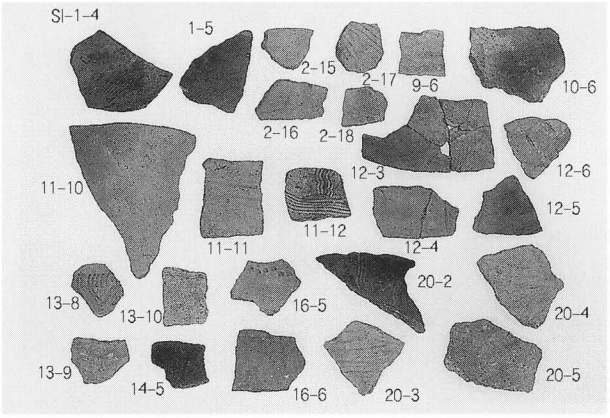


同（裏）

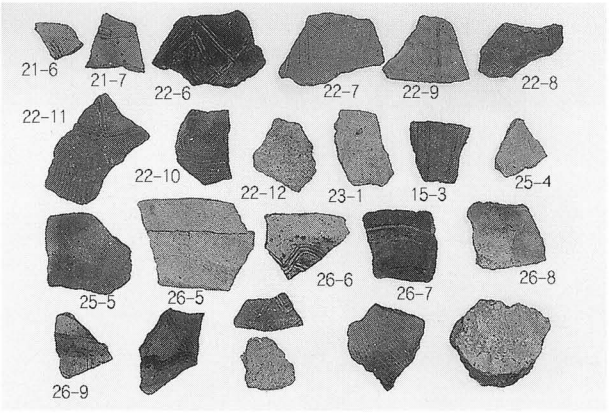
第２号掘立柱建物跡・南西埋没谷出土瓦塔、瓦堂



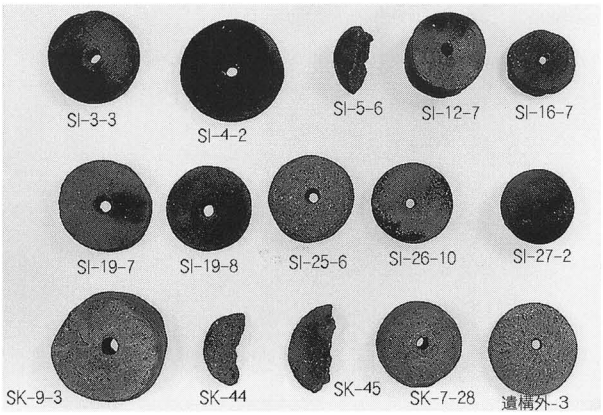
第２号掘立柱建物跡等出土壁土



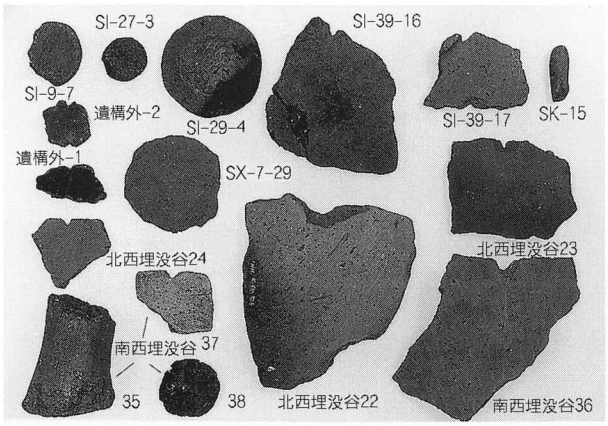
第１～20号住居跡出土弥生土器



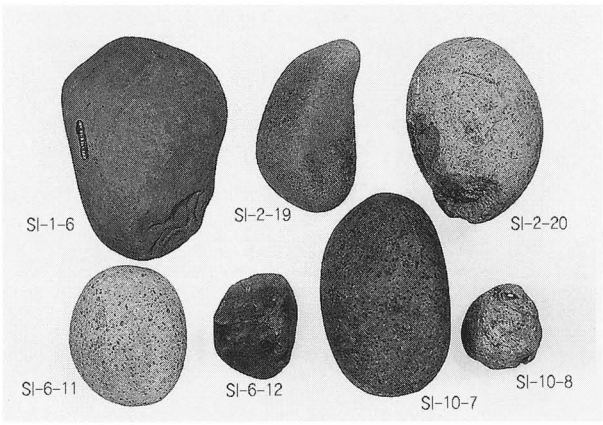
第21～26号住居跡出土弥生土器



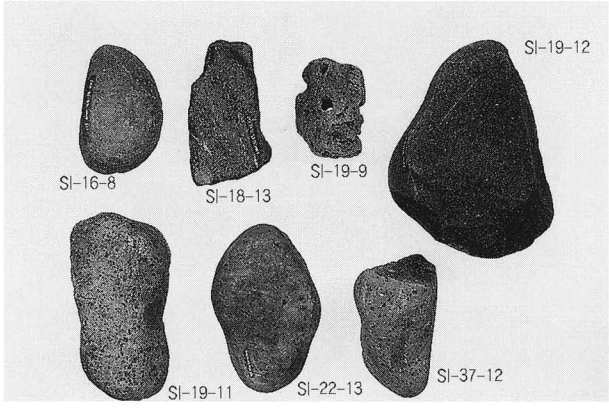
土製品(1)　紡錘車



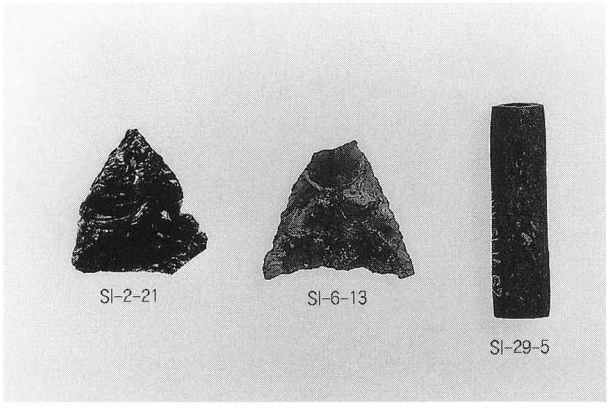
土製品(2)　その他



第１～10号住居跡出土石器

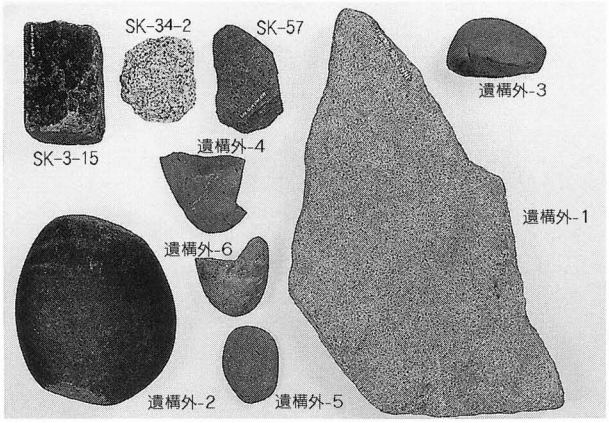


第16～37号住居跡出土石器

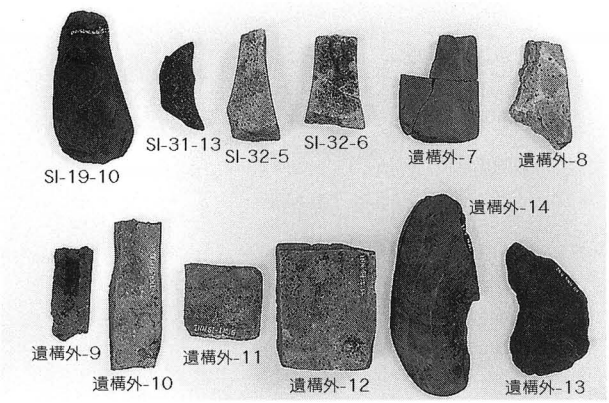


第２・６・29号住居跡出土石器・石製品

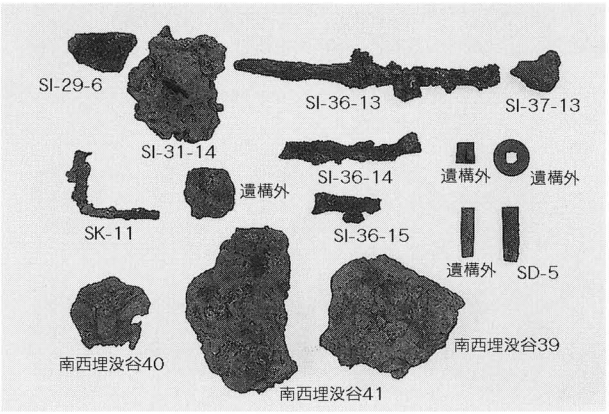
PL 32



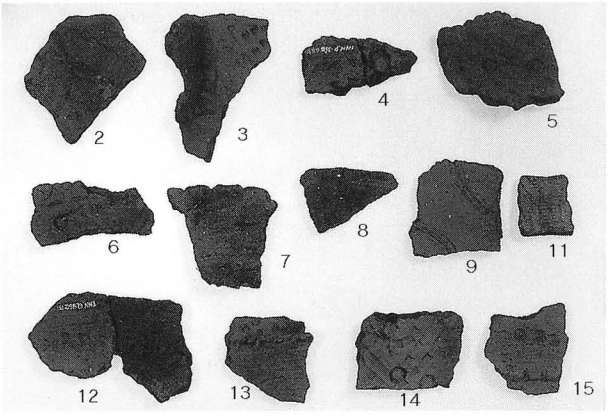
土坑・遺構外出土石器



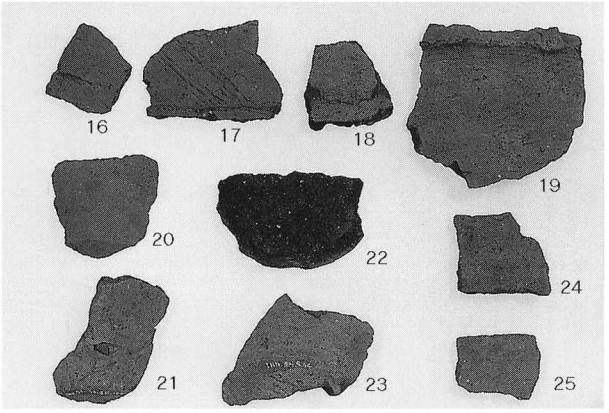
住居跡・遺構外出土石器



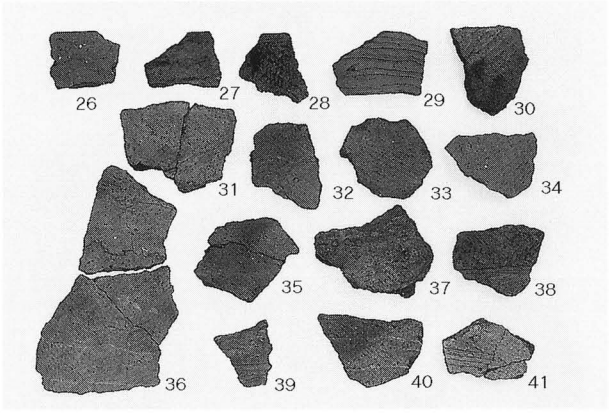
鉄製品、その他



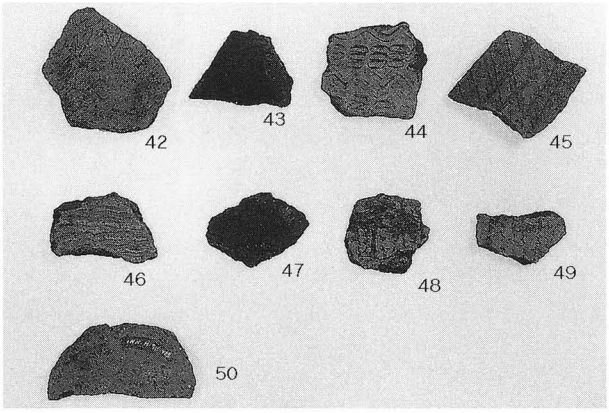
遺構外出土縄文土器(1)



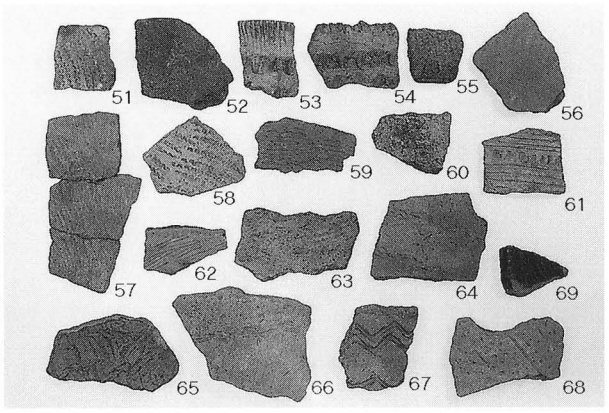
遺構外出土縄文土器(2)



遺構外出土縄文土器(3)

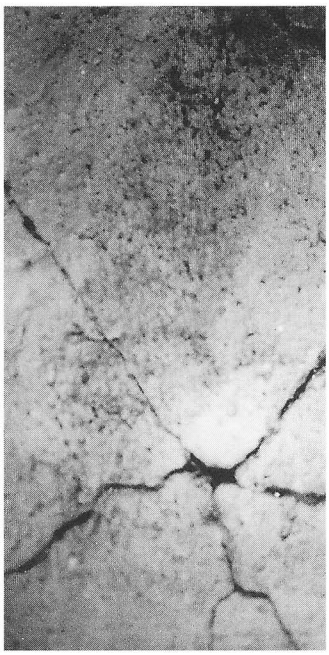


遺構外出土縄文土器(4)

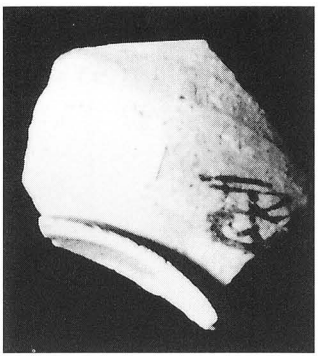


遺構外出土縄文土器(5)

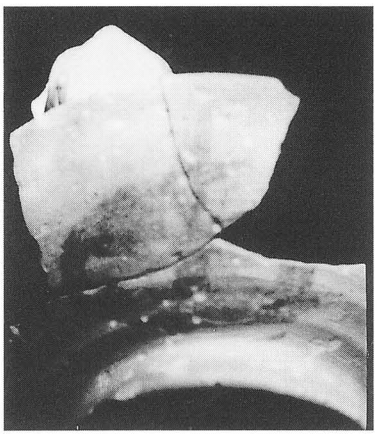
第39号住居跡12



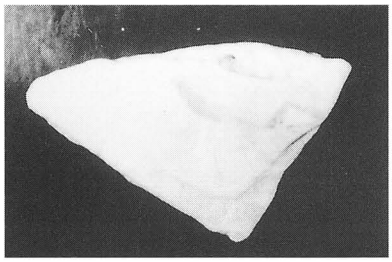
第39号住跡12墨痕



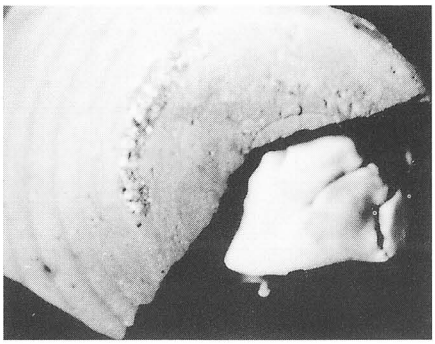
第29号坑



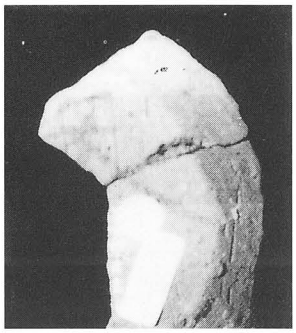
第32号住居跡 2



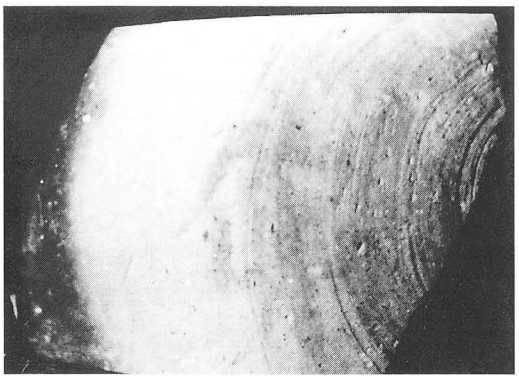
粘土採掘坑10



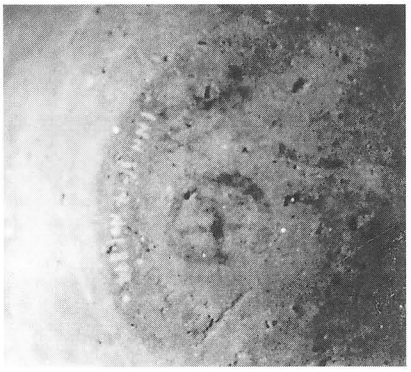
南西埋没谷 3



第38号住居跡 2

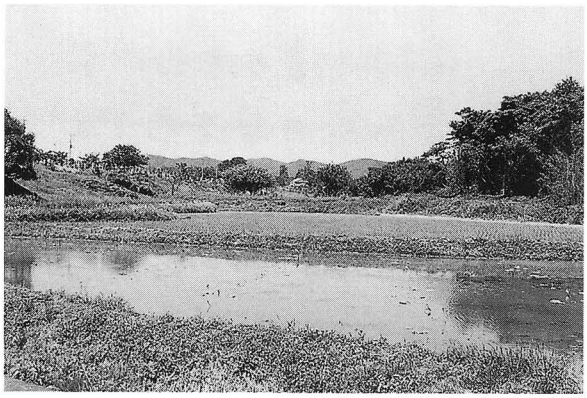


南西埋没谷 4

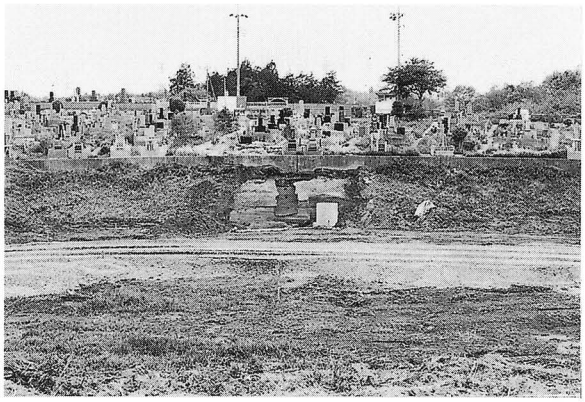


第37号住居跡 2

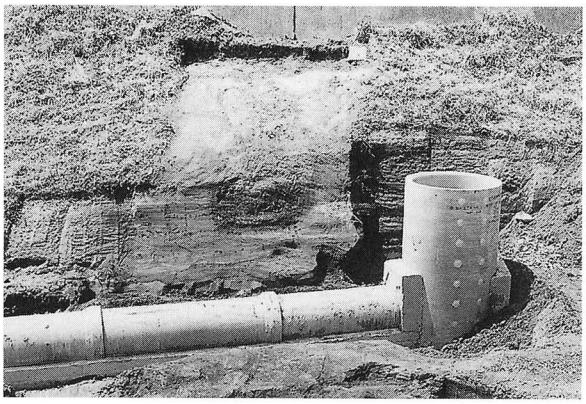
根鹿北遺跡出土墨書土器



栗山窯が所在する谷

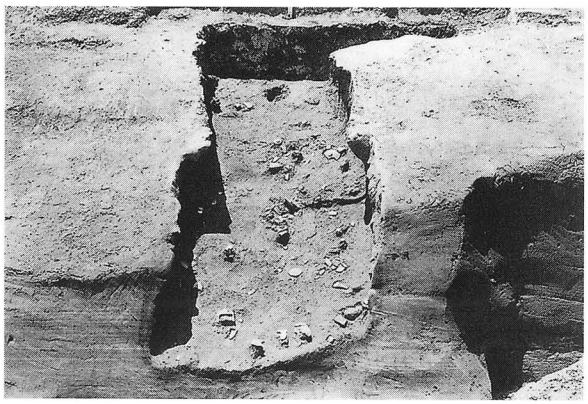


根鹿北遺跡から栗山窯をのぞむ



発掘調査前

窯体完掘状況



窯体内遺物出土状況

窯体内土層堆積状況

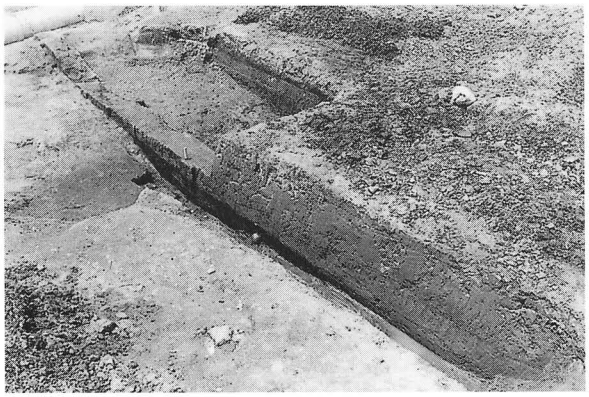
同土層堆積状況

同土層堆積状況

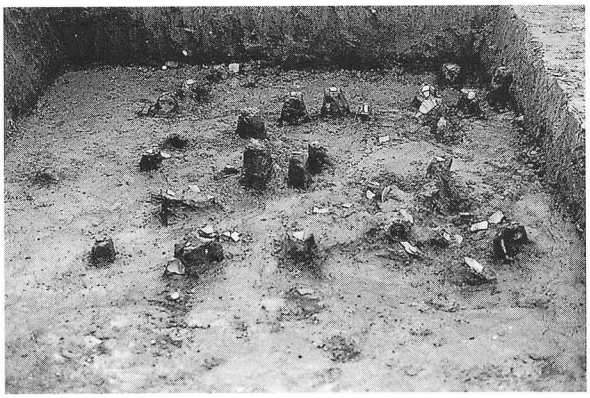
ＰＬ２

灰原完掘状況

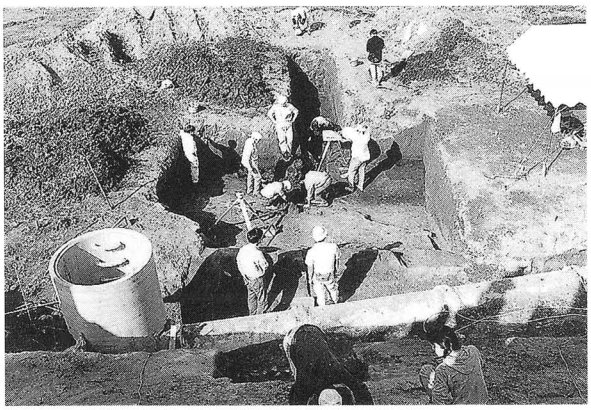
灰原完掘状況



灰原土層堆積状況



灰原遺物出土状況

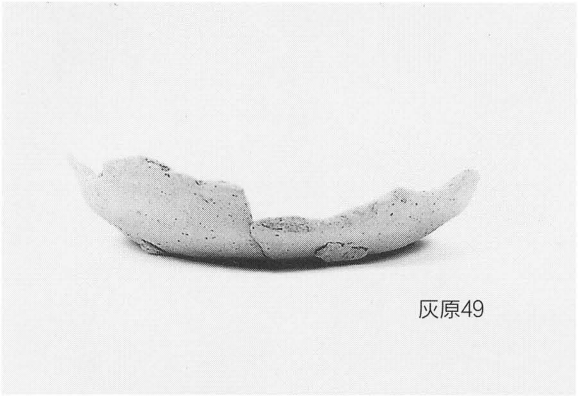


調査風景

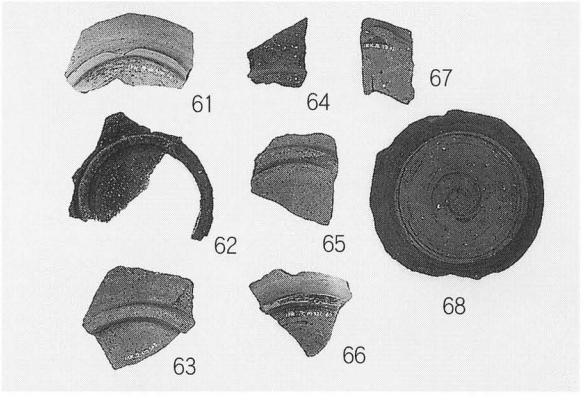
調査風景

坏

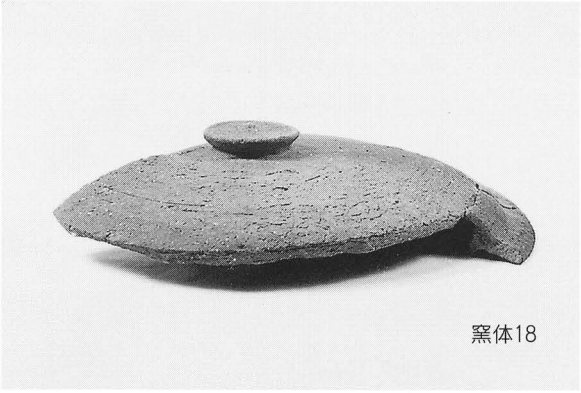
坏



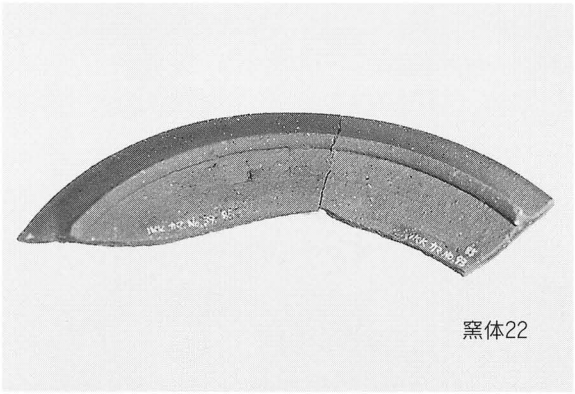
坏



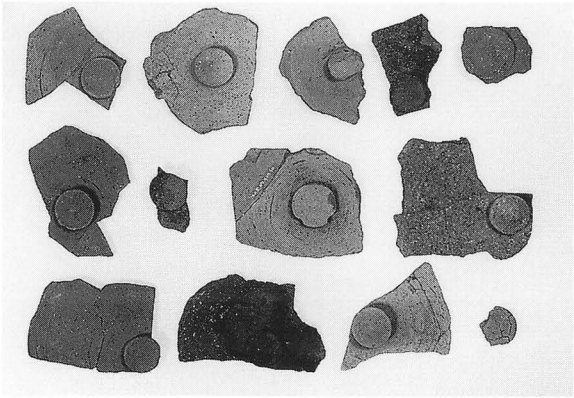
灰原出土高台坏



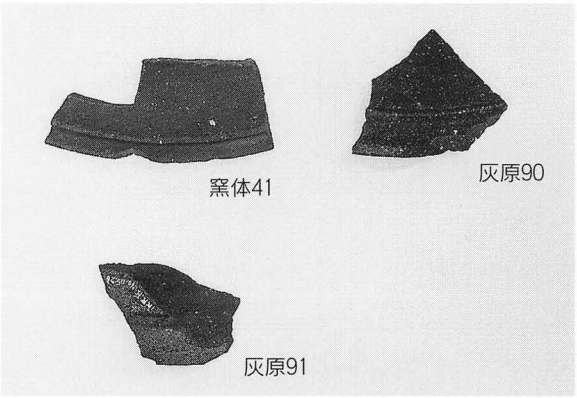
蓋



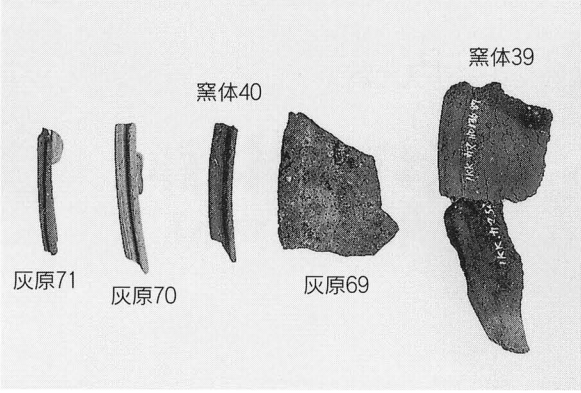
蓋（裏側）



蓋



円面硯



高坏

土製品

報　告　書　抄　録

ふりがな	ねじかきた いせき　くりやまかまあとはっくつちょうさほうこくしょ		
書名	根鹿北遺跡・栗山窯跡発掘調査報告書		
副書名			
巻次			
シリーズ名	土浦市今泉霊園拡張工事事業地内埋蔵文化財調査報告書		
シリーズ番号			
編者名	関口　満	著者名	関口　満　福田礼子　吉沢　悟　日高　慎
編集機関	土浦市遺跡調査会		
所在地	〒300－0812　茨城県土浦市下高津2－7－36 土浦市教育委員会内　TEL0298(26)3484		
発行年月日	西暦1997年3月31日		

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ねじかきたいせき 根鹿北遺跡	つちうらしおお 土浦市大 あざいまいずみ 字今泉	08-208	C-48	36度 8分 39秒	140度 10分 50秒	19950510 ～ 19951107	約9,000㎡	市営霊園拡張造成工事事業による
くりやまかまあと 栗山窯跡	つちうらしおお 土浦市大 あざいまいずみ 字今泉	08-208	C-79	36度 8分 39秒	140度 10分 47秒	19960428 ～ 19960510	約90㎡	市営霊園拡張造成工事事業による

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
根鹿北遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代 平安時代	竪穴住居跡　28軒 竪穴住居跡　1軒 古墳　3基 竪穴住居跡　10軒 掘立柱建物跡　4棟 粘土採掘坑　1ヶ所 土坑22基	弥生時代後期後半の土器 土製紡錘車・石器 土師器・鉄製品 土師器 土師器・須恵器・瓦塔・瓦堂 墨書土器・鉄鉢形土器・鉄製品 土製カマド	台地上に28軒の竪穴住居跡が確認された。 住居内からは炭化物・焼土が出土。 終末期の方墳2基・主体部のみ1基 台地上に平安時代の竪穴住居跡は11軒確認された。尾根上に4棟からなる掘立柱建物跡群が存在し、北側の溝から瓦塔・瓦堂が出土した。近辺の埋没谷から燈明専用の土師器小皿や「佛」と墨書された鉄鉢形土器が出土している。
栗山窯跡	窯跡	奈良時代	窯跡と灰原	須恵器 （蓋・坏・高台坏・高坏・円面硯など）	須恵器窯跡が台地斜面に1基確認された。7世紀末の遺物が出土している。蓋は返りが明瞭に存する。